完全管理社会を目指す生徒会長と泥酔魔法少女と隙間ターミネーターの夕焼けにゃんにゃん戦争

やんじゅいがな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
完全管理社会を目指す生徒会長と泥酔魔法少女と隙間ターミネーターの夕焼けにゃんにゃん戦争

【Ｎコード】
Ｎ２７９７Ｙ

【作者名】
やんじゅいがな

【あらすじ】
己の中の理想のユートピア『完全管理社会を』目指す伊統会長は、夕焼けの学校内で、デフォルメされたネコのお面を被った黒ずくめの暗殺者に命を狙われる。
暗殺者の正体は隙間系タイムマシン『夕焼けにゃんにゃん』を使って未来から来た隙間ターミネーターだった！
そこに、自称魔法少女の金髪ばいんばいん酔っ払い少女が現われて！？

第一部　完全管理社会を目指す生徒会長と隙間ターミネーターと泥酔魔法少女

人の本質は悪だ。だからこそ、統制せねばならない。
それを実現する仕組みこそが、『完全管理社会』構想である。
管理社会。それは完全なる統制による美しき社会。荘厳なるユートピア。
人々は誰もがそこで平等に、幸福に暮らす。まさに地上の楽園である。
そして私は――管理社会の王となる男だ。
その具体的な根拠は様々あるが、最も強い因子としては、私にはこの国を影で牛耳る『あの男』の血が半分流れている。いわゆる親の七光りと言う奴であり、この国の社会で最も強い力、既得権益である。
私にとっては忌まわしいことだが、客観的に観るに血筋としては充分に利用可能。私は自分の目的のためなら何でも利用する。『あの男』がぽっくり逝けば、奴の地盤は我がものとなり、この国に変革をもたらす際には必ずや力となるだろう。
故に私は、管理社会の王――未来の王を約束された男である。
しかし……。未来の王は今、かつてない窮地に立たされていた。
まさか、私がこのような失態を犯すとは……。

第一話　完全管理社会を目指す生徒会長の失態

事の始まりは、残暑厳しい季節の、空がオレンジ色に染まる時刻。
私は一人、校内の廊下を急いでいた。
そう、一人だ。他に人が居てはならない。誰かに出会ってはならない。
本来、私はここに存在しないはずなのだから。
最新の注意をはらい、気配を押し殺しながら私は廊下を進む。
歩く動作は私の寵愛する『超・執事』長谷川直伝の『超・忍び足』。何でも古来の忍者より伝わるこの秘伝の歩き方。足音を一切立てずに歩行を可能にするこの歩行方法は、隠密行動には最適である。
もどかしくなるくらいの速度と、間抜けな歩行動作を除けば、の話だが。
いや、この屈辱、甘んじて受けよう。こうなったのも、私自身の失態のせいだからだ。
まさか……まさか、この私が……。
……忘れ物をするとは！
忘れ物と侮るなかれ。あれは、ただの忘れ物ではない。前代未聞な忘れ物である。
私が極秘で進めている次世代学校防犯システム『リガン』。
私の計画において、完全管理社会実現への布石となる重要なシステムだ。
校内にいる全校生徒の行動を逐一監視し、非行を未然に防ぐのがシステムの概要。つまりは、生徒一人一人の全行動が、私の目の前において赤裸々に筒抜けとなる。
このようなシステムの存在が知れれば、生徒達が暴動を起こす事は目に見えている。だからこそ、計画は極秘に進めなくてはならない。
なのに、よりにもよってその仕様書を教室に忘れてしまうとは…

…。

あれが誰かに見つかれば、生徒会長という今の地位が脅かされることは必至。それどころか非難囂々暴動の嵐。私の人品骨柄さえ疑われかねない。

だが、私の忘れ物が前代未聞のは、なにも『非人道的なシステムだから』と言うだけではない。それ以上に、あれが『ただの忘れ物』ではない理由がある。

その理由は、この『私』が忘れ物をしたという事実だ。

私は生徒会長である。生徒会長の忘れ物である。全生徒の規範たる生徒会長が、忘れ物など決してあってはならない。信じがたいことだ。前代未聞。空前絶後だ！

もし私が忘れ物をしたという事実が明らかになった場合、

「もうっ、会長のおっちょこちょいさんっ」

「てへっ☆」では済まぬのがこの役職のつらいところ。

「えー、あの会長が忘れ物ー？　忘れ物をしていいのは小学生までだよねーぷーくすくす」と嘲笑される光景が目に浮かぶ。

私がバカにされる？　そんなこと、あってはならない！　例え刹那の間、ゼロコンマレベルの間でもだ。何としても阻止せねばならない！

故に、夕焼けの校舎。私は誰にも見つからぬように細心の注意をはらい、進む。

己の保身のために。全力を持って。

ようやく、私の教室へと辿り着いた。

緊張感を反映してか、ここまでの道のりがやけに長く感じられた。

だが、この妙な緊張感とも、あと少しでおさらばである。

教室のドアを静かに開け、一直線に、スムーズに自分の机へと向かう。

その時、

《――にゃおーん！》

突然の声に、一瞬、体がビクリと痙攣してしまう。
誰か、居るのか？　猫の声？　にしては、人間の子供のような透き通った声である。
辺りを見渡すが、人影は無い。気配もない。額に吹き出た汗を拭う。
私の精神状態が、幻聴を引き起こしたのか。
いや、今はそんなことどうでもいい。教室の中へと進み、机の中を覗く。
――あった。机の中に仕様書はあった。
胸の内で、――イエスッ！　とガッツポーズひとつ。
緊張が緩和される。ふと冷静になって、柄にもないことを……。と恥じる。
後は、このまま誰にも見つからなければスニーキングミッションコンプリートだ。忌まわしき『ぷーくすくす』も消え去るだろう。ほっと安堵したその瞬間、
「――お前、伊統会長だな？」背後からくぐもった声が聞こえた。
驚き振り向く。そして声の主の姿を見て、目を見張った。
デフォルメされた黒ネコのお面を被り、身に纏うは黒ずくめのバイクスーツのような衣装。その衣装のデザインが筋繊維をかたどったような形をしているのはまだしも、その首に巻かれた赤く長いマフラーがアクセントを通り越し、異彩を放っている。
さらにシンプルに例えるならば、夕焼けに伸びる黒い影をそのまま立体化し、赤くなびくマフラーをとってつけたような人影。そう、まさに人影であった。
フィクションならば格好いいと言えなくもない。
だが、現実においては、どう見ても変態である。
私は人影に向かって、細心の注意を払いながら言い放つ。
「違う。私は路傍に転がっている何の変哲もない平民。――いたいけな羊だ！」
完璧な偽装だった。威厳たっぷりに言ってやった。これで私を会

長だとは思うまい。
黒ずくめは腕を伸ばし、私を指さす。かわいらしい黒ネコのお面から、声が漏れる。
「いや、その顔は間違いない。お前、伊統会長だな」
変態のくせに――私の顔を知っている？
私の見事なカモフラージュが無駄になってしまったではないか。
面倒なことになった。抹殺するか、と私は思案する。しかし、
「死ね」
黒ずくめの放った端的で冷徹な一言が、私の防衛本能を呼び覚ました。
私が身構えるのと同時に、黒ずくめが跳び上がった。右手に持った何かが、夕日を反射してきらりと光る。あの一瞬光ったものは――そして『死ね』という言葉。
こいつ――私を狙う暗殺者に違いない。心当たりは幾らでもある。
「――加速装置！」暗殺者は叫んだ。
すると突然、黒い突風のように暗殺者の体が『加速』した。文字通りの『加速』だ。一瞬にして、距離を詰められる。
一ミリも動けなかった。驚きのあまり体が硬直したからではない。認識を超えた速度に、私の体はピクリとも動けなかったのだ。
人は死の直前、全てがスローモーションに見えるという。信じてはいなかったのだが、今まさに、私はその現象が事実であることを体感していた。
スローモーションどころか、止まって見える。
眼前数センチの所で黒光りするのは、紛う事なく刃であった。己の体は動かない。それなのに、鋭い刃先が自分の眼前数ミリのところに位置する様を延々と見続けなければならないのは、拷問か何かか。
このままでは……私は――死ぬ。
そう思った刹那――突如として暗殺者の頭上に光が落ちた。
目が眩む程の閃光が辺りを包む。雷鳴が教室に鳴り響くのを聞い

た。

明らかに雷が落ちた時の現象に似ていたが、そもそも、ここは室内だ。落雷が天井を突き抜けて室内に落ちるなど、あり得ないことだ。

あり得ないはずなのに……。私の見た光景は、常識を逸していた。

一体何が起こったというのか？　確認しようにも、それは不可能である。

なぜなら、落雷のような現象の直後、教室中に黒い煙が発生し、我が視界をふさいでいるのだ。煙に咳き込みながら、私は必死で目を凝らす。

最初に目の前に飛び込んできたのは、黒い煤のようなもので全身を汚したような人影だった。またもや人影だ。しかし、先ほどの暗殺者とは違い、洗練された黒さではない。灰や煤で汚されたような黒だ。

私の視界からは、背中を覆う黒い外套と腰まで伸ばした黒髪が見えている。

「こほっ、こほっ」咳をするたびに黒い煙が舞い上がる。

……何だ？　暗殺者以外の誰かが、目の前にいるらしい。

「――あははは、失敗しちゃいました」甲高い笑い声だった。少女の声だ。

ますますわからなくなる。落雷と少女？　何の関連性があるというのか。

「あははは、まっくろですね」少女は愉快そうに笑いながら、はぱたぱたと頭や体から煤のような黒い粒子を払う。煤が落ち、黒色だと思っていたマントは灰色へと変わる。

煙が、うっすらと晴れていく。夕焼けの光が、隙間から差し込む。

そして少女らしき人物の髪が――赤い陽光を受けて煌めく金髪へと変わった。

まるで、夕日になびく黄金色の稲穂のようであった。

その美しさに心を奪われ、しばらくの間見とれていると、

「うぅ……うー……」という、か細く、くぐもった声が何処からか聞こえてきた。どうやら金髪少女の下の方からである。

見ると、女の子座りをする少女の下で、黒ずくめの暗殺者が潰され呻いていた。

少女も気づいたようだ。慌てて飛び退き、片手でがしがし揺する。

「わあっ、だいじょーぶですか？　お怪我はありませんかっ！」

しかし、黒い粉まみれとなった暗殺者はうつぶせに倒れたまま、

「あー……うー……」と呻くばかりだ。脳震盪でも起こしたのだろうか。

「どーしましょう……？」少女は数秒考えるそぶりを見せる。

その後に出した結論は、実に単純なものだった。

「ま、いっか、あははは」

放置である。あまりにも無責任な選択である。

私がこの光景を見て思うことは、一言で済む。

「なんだ、これは……？」当然、『疑問』だ。

声が聞こえたのか、煤まみれ金髪の少女がこちらを振り向く。

幼さを残した顔立ち。私よりも頭一つ分小さい。子供のようだ。

黒い煤で薄汚れた顔から、二つの大きな眼がじーっとこちらを見上げる。

青い、空色の瞳だった……かと思えば、今度は翡翠色。いや、オレンジ色が混じった。違う、紫色がよぎった。万華鏡のように、色が留まることなく変化してゆく。刻一刻と変化してゆく空の景色、海の波、川の流れのように、常に変化する。いつまで見ていても飽きない、そんな印象さえ覚える不思議な瞳であった。

瞳が織り成す万華鏡の色彩に心奪われ、取り込まれそうになる。

すると、

「――あはははははははははははははは！」

突然、少女は破顔した。果実のような匂いが香った。

少女に何が起こったのか？　狂ったように笑う少女に、私は唖然とした。

少女は顔の煤を腕で拭う。煤汚れの間から見る少女の頬は、夕日に染まっているのかほんのりと赤い。

その右手に抱えているのは――『相馬』と毛筆で書かれたラベルの一升瓶であった。

「そう……ま？」思わず呟いた途端、少女が眉をひそめて一升瓶をぎゅっと抱く。

「……あげませんよっ」少女は上目遣いで警戒している。

子供が酒？　しかも一升瓶？　金髪ということは外国人か？　しかし、あの不思議な色の瞳はいったい……？　そもそも、なぜ煤にまみれている？　何よりも、どうしてここにいる？　突っ込みどころが多すぎてどこから切り出したものか躊躇していると――少女の後ろで、ゆらりと黒い人影が立ち上がった。

暗殺者が、意識を取り戻したのだ。

しまった、目の前の少女に捕らわれている場合では無かった。

そう思ったときには時すでに遅く、暗殺者はすぐさま後ろに跳躍し、私達と距離を取った。

「いてて……よくも……伊統会長……」暗殺者はお面の上から額を押さえ、ふらふらしている。まだ、捕獲のチャンスはあるか……。

「いとーかいちょー？」少女が一升瓶を抱いたまま、小首をかしげた。

「ええい、その名を呼ぶな！」私がここにいることが何処かから洩れたらどうする。それに……私は暗殺者に向かって、真っ直ぐ指さす。「お前、なぜ私を狙う！」

「未来の自分を呪え」暗殺者の手のひらで、ナイフだと思っていたものがガチャガチャと音を立てながら――開いた。

あれは、ただのナイフではない。ハサミ、栓抜き、コルク抜き、スプーン、缶切り等々――十徳ナイフである。なぜ暗殺者があんなものを。

すると十徳ナイフが回転をはじめた。まるで高速回転する黒く薄い回転刃が、手のひらで浮いているように見える。嵐が巻き起こり、

暗殺者の赤いマフラーがなびく。
「今度こそ――死ね！」暗殺者が跳躍。私に向かって跳びかかってきた。
暗殺者の体が弾丸のように私に迫る。
くっ、速すぎる、これでは先程と同じではないか――。
――視界に広がりつつある暗殺者の黒が、金色に遮られた。
「――ばかっ、お前危ないっ！」暗殺者のくぐもった声が裏返った。
「何をしている！　危ないぞ！」私も思わず叫んでいた。
私と暗殺者との間に、先程の少女が入り込んでいた。まるで私を庇うかのように背を向け、暗殺者と対峙する。黒い突風のように襲いかかる暗殺者の勢いは止まらない。いや、止められないのだ。このままではこの少女が私を庇い、傷ついてしまう！
「駄目です。ソウくんを守るのが、わたしのお役目です」少女が、呟いた。
『ソウくん』。初めは聞き慣れない単語だと思った。しかし、その言葉が示す意味に気づいた瞬間、体に衝撃が奔る。
その呼び名は、私が幼い頃に死んだ母親だけが呼んでいた、特別な呼び名だ。なんで、どこの馬の骨かもわからぬ少女が、私をその名で呼んだのか。
「お前は誰だ！」
思わず叫んだその問いに、少女は背を向けながら、こう答えた。
「――『魔法少女』ですっ！」
「まほう……しょうじょ？」
予想外の返答に驚き、思考停止してしまう。
私の動揺に気づくことなく、少女はどこから出したのか、白い杖のようなものを真っ直ぐ向けた。
その先には、黒い嵐のように回転しながら突き進んでくる暗殺者。
「――すとらいく！」少女が叫ぶと、杖の先端から銀色の何かが高速で飛びだした。
『銀色の何か』は跳びかかる暗殺者に激突――暗殺者は「がひっ

！」という悲鳴を上げ、そのまま教室後方の掃除用具入れの方へと、ぶっとんでゆく。

がんっ！　とけたたましい金属音が鳴り響いた。銀色の何かは掃除用具入れにぶつかった後、床に落ち、再び金属音を響かせた。

奇妙なことに影のような暗殺者は、影も形も無くなっていた。

そして――床に転がった銀色の物体は、どう見ても……大きなタライであった。

少女は小首をかしげ、不思議そうに床に転がったタライを見つめていた。

「あれ、なんか違う……？」少女がタライと白い杖を交互に見比べること数秒。「ま、いっか。あはははははは」勝手に自己完結し、少女は腰に手を当て豪傑笑いをした。

映像部の映画の撮影か？　いや、うちの高校に映像はない。演劇部はあるが、演劇にしては、観客といえるのは私一人だ。それに、あの暗殺者はどこへ消えた？　私はたちの悪いイリュージョンでも見せられたのか？

わからない。わからないなら聞けばよい。私は少女に語りかける。

「おい。お前、何者だ？　――身分を証明しろ」

これこそ、穏便で、最も効率の良い声のかけ方である。

「ほえ？」ふざけたような声で、少女は振り向く。夕焼けの赤色を纏った金髪がふわりと揺れる。少女は不思議な色の大きな瞳を細くし、へにょりと笑った。

「『すいまほうつかい』のマナです。ソウくん、あなたをお守りしに来ました」

「すい……まほうつかい……魔法使い？」

『すい』とはどう書くのだ？　まさか、酔っているから『酔』だというのか？　それに、魔法使いだと？　よく見れば、少女の顔が赤いのは夕日のせいだけではない。

「ふざけるな。魔法使いなど夢物語だ。第一この世に魔法など存在

しない。……お前、酔っているな。未成年の飲酒は発育に悪いから禁止されている。どう言うつもりだ！」

「わっわっ、おこった！　ごめんなさいっ！　はっ、反射的に謝ってしまいました。ソウくん、ひどいです。魔法はありますよう」

頭のおかしな少女――マナは顔をぷくーと風船のように膨らませ、口をとがらせた。

『ソウくん』だと？　なんでこんな奴が、私の名前の断片を知っているのだ……。

「ええい、私をその名で呼ぶな。今の私は『伊統会長』で通っている。お前もそう呼べ」

「いとーかいちょー？」

「そうだ。親しみを込めて呼びたければ『会長さん』とか『会長さま』でも良いぞ」

「かいちょーさん？」

「そうだ」少し発音がなっていないが、この際気にしてはいられない。

「かいちょーさん！」なぜか、少女は妙にうれしそうである。

さて、それでは何故、私の本名を知っているのか、小一時間問いただして――。

「かいちょーさん、魔法はありますよ！」

まったく……また、その話か。どうやら、先に決着をつける必要があるらしいな。

「ありえない。魔法など無い」

「ありますっ！」

「ない」

「――あるっ！」

「――ないっ！」

そんなやりとりを何度か繰り返す。自称魔法使いのマナはたちの悪い酔っ払いのようだ。自分の思い込みに頑なに固執し、明らかに間違った意見を曲げようとしない。

むきになったマナは眉をつり上げ、今度は青く染まった瞳で私を見上げながら、顔を近づけてくる。ここは、私も引くわけにはいかない。

この勝負、体を引くか、視線を外した方が負ける。

「魔法などあるものか。あるというのなら証拠を見せてみろ」

「しょーこならあります。いま『すとらいく』の魔法を使ったじゃないですか！」

「杖からタライが出たあれか？　あんなもの三流の手品か何かだろう。……そうか、お前は手品師か！」それなら、合点がいく。

「違いますっ！　まほーです！　まほー！　なんかちがうけど、まほー！」

マナは目をつむってぴょんぴょん飛び跳ねた。ぶんぶん大きく腕を振るので、左手に持った一升瓶の中身がしゃばしゃばと音を立てる。既に目をそらすどころの問題ではない。自分を失ったものに勝利はない。この勝負、私の勝ちだ。

――まほーまほーまほーまほーまほー！

私の勝ちにもかかわらず、マナは「まほーまほー」うるさい。まさか、私のルールが通じていないとでも？　何という常識知らずか。

「まほーまほーまほーま……」マナの動きがぴたりと止まった。煤に汚れた赤い顔の中で、鼻だけが青白くなっている。「……うっぷ……」

まさか――。私の体が自然と動く。

「――うぼげー」マナの口から七色の虹が出現した。もちろん比喩である。

私はそれを反射的に受け止めてしまった――素手で！　なんということだ！

急におとなしくなったマナが、口を拭いながら不思議そうに私を見たその時、

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》

下手な猫の鳴き真似のような声が、辺りに響いた。

……はて、私は今まで、何をしていたのか？

気がつけば、手の中に何やら形容しがたい物体がある。それは、甘い果実のような匂いと酸っぱい臭いが混ざり合った、むせかえるような悪臭を放っている。

固体と流体の境目のようなそれは、もちろんどこからどうみても『あれ』である。

とりあえずは『七色のあれ』とでも呼称しよう。問題は、なぜ、私の手の中にそれが存在しているかだ。

どうも、何かがおかしい。私は今日、あろうことが忘れ物をし、それを取りに来たはずだ。教室を入ったところまでは覚えている。

教室に入った時、空は夕焼けに赤く染まっていたはずだ。それを思い出し、窓を見ると日は既に沈んでいる。そして私の両手は胸の前、供物を差し出すようにお椀型を形成し、中には『虹色のあれ』が入っている。なぜこのような状態に？

目の前には『七色のあれ』と私の顔を、黙って交互に見つめる青い瞳の少女。

少女は何故か煤けている。

「お前……誰だ？」

私の言葉に少女はショックを受けたかのようにぎょっと目を見開き、口をぽかんと開けた。一瞬、少女の瞳が灰色に染まった気がしたが、もう一度覗くと青色のままだった。気のせいだろう。

「ひどいっ！　もう忘れたんですかっ！　マナですっ！　すいまほうつかいのマナ！　あなたを守りに来ましたっ！　あっ、わかった！　嫌がらせですね！　嫌がらせですねっ！　まほーもろとも、わたしの存在を消し去る気ですね！　ひどいですっ！」

魔法？　守る？　わけがわからない。私が返答に窮していると、少女――マナだったか？　マナの青い瞳が潤み出した。

「ちょ、ちょっと待て。お前は一体――」

「かいちょーさんのばかっ！」マナは涙を堪えて駆け出し、教室のドアに向かう。
「おい、待て！」そのまま行くと――。
――盛大にドアにぶつかった。目をつむったまま走るからだ。ばかもの。
マナはそのまま床に倒れ込む。倒れた瞬間、後頭部を強打した。やはりばかだ。
「おい、しっかりしろ」私はマナに駆け寄る。両手は『七色のあれ』でふさがっているため、触れることはできない。しかし、それは杞憂だった。
マナは安らかな表情で、すやすやと眠っていた。やはり、わけがわからない。
「……なんだ、こいつは」
その時――がらりと教室の扉が勢いよく開いた。背中から氷柱を突き刺されたように、体がひやりとする。
まずい。この時間、こんな場所で、こんな格好を見られれば、私の天下が失墜することは必至！　私は……恐る恐る、顔を上げる。
「会長さま、ご無事ですか」落ち着いた女性のような声には、聞き覚えがあった。
見ると、現われたのは黒い執事服に身を包んだ、銀髪ショートカットの麗人。
「……長谷川か、驚かすな」私はほっと胸をなで下ろす。無論、両腕がふさがっているので比喩である。
「申し訳ありません。驚かせてしまいましたか」
長谷川は眼を細め、微笑を浮かべていた。その微笑がいつもよりほんの少し硬い。付き合いの長い私にはわかる。これは、焦っている時の表情だ。
「いや、私は驚いていない。驚く寸前だっただけだ」
「左様でございますか」長谷川は微笑を浮かべている。
「驚いていないと言っている」

「左様で」にこにこと微笑を浮かべている。
「いいか、絶対に驚いていないからな」私は念を押した。
「はい」長谷川は微笑を崩さない。流石である。
「どうした？　焦っているようだが。学校へ執事服のまま来るとは、珍しいではないか」
　私が訊ねると、長谷川は眉をきりりと真面目な微笑を浮かべ、語り出した。
「それが、会長さまの気配が十分程前にお消えになりまして、七分待ちましたが気配が回復する兆しはなく、もしや御身に何かあったのではないかと思い、執事服のまま急ぎ参上した次第でございます」
「十分ほど前……教室に入った頃……」
　つまりは夕日が沈むまでの時刻ということか。その間に何があったのか……。
　思い出そうとするが、その部分だけ欠落したように、何も思い出せない。
「ところで長谷川、ここへはどうやって来た」
「はい、恐縮ながら、全力疾走にございます」長谷川は控えめに言った。
　私の屋敷からこの天照高校までは、歩いて三十分はかかる。その距離をわずか三分で駆け抜けるとは！　おまけに、長谷川は汗一つかいていない。
「さすがは私の『超・執事』だ。頼もしいぞ。だが、全力疾走は頂けないな。目立ってしまえば普通の生活は送れなくなる。能ある鷹は爪を隠すのだ」
「申し訳ありませんでした」長谷川は神妙な微笑を浮かべて一礼した。「会長さまの御身が心配で、そこまでの配慮に至りませんでした」
「長谷川……」私のことを思ってとは、なんという忠臣。私は長谷川から目をそらし、言う。「……此度のことは、不問とする」
「ありがとうございます」長谷川は照れたような微笑を浮かべた。

国籍、年齢、性別、不明。
麗人と判断するのは長谷川のたぐいまれなる美貌と透き通った女性のような声による。いつも両手に真っ黒な手袋をはめ、その顔には不動の微笑を浮かべている。あらゆる場面で型破りな有能さを遺憾なく発揮する頼もしき存在。
それがこの『超・執事』長谷川である。
「あの……」長谷川は足下に目をやり、
眉をほんの少しひそめて、困ったような微笑で私にたずねる。
「そちらの可愛らしいお嬢さまは……どちらさまでございましょうか」
「ああ、これか」私はマナに目をやる。
マナは黒猫のように丸まりながら気持ちよさそうに眠っていた。
「わからん……だが、私が今ここにいるのを見られた。野放しにしておいては危険だ」
「いかがいたしましょう」疑問を浮かべた微笑。
私は、即答する。
「囲う。手籠めにするぞ」
聞いた途端、長谷川が氷の微笑になった。どうやら少し怒っている、もしくは引いているらしい。何か気に障ることでも言っただろうか？
「囲って、手籠めでございますか？」
「ああ。そうだが？」魔法使いなどと口走るやからを放って置くわけにはいかない。
私に出会ったが最後。手籠め——取り押さえ、囲う——保護し、その後、しかるべき教育を与え、真人間に矯正しなければならない。それが未来の王、伊統会長の義務だ。
「会長さま、失礼ですがそのお言葉、意味をご理解してお使いになっておられますか？」
「もちろんだ」
「わかりました。会長さまがおっしゃるのなら、そのようにいたし

ます」
珍しく、長谷川の眉がほんの少しつり上がっての微笑。怒っている。何故だ?

校内のトイレで手を洗った後、長谷川と夜の闇に紛れた。誰にも見つからぬように細心の注意をはらいながら、昏倒したマナを屋敷まで運び込んだ。
長谷川は何やら準備をするとのことで、マナを抱えて何処かへ行ってしまった。
その間、私は自室で部屋着の甚平に着替える。その際、机の本棚にある国語辞典が眼に入った。念のため、私は机から辞書を取り出し、調べる。
『囲う』
(1)外の力が及ばないように、中に取りこめて周囲をふさぐ。(2)見逃す。守る。(3)暮しの面倒を見る。養う。
なるほど。私は2と3の意味で使った。間違ってはいない。
『手籠めにする』
(1)力ずくで身体の自由を奪うこと、取りおさえること。
これも良い。私は長谷川とともに、マナを取り押さえた。しかし、次の行を見た瞬間、私の頭は沸騰した。
(2)暴力で女性を犯すこと。
私は自室で一人、頭を抱えた。

私は完全管理社会を作り上げ、王として君臨する男である。
王とは——有言実行でなければならない。私はそう考えている。故に私は常日頃心掛け、実行している。
「会長さま、支度が整いましてございます」氷の微笑。
「わ、わかった」背中を冷たい汗がつうと流れる。
昭和初期に我が曾祖父によって作られたというこの屋敷、その和と洋が奇妙に融合した建物の一角に、場は整えられた。

長谷川が銀色のノブを回し、ぎいという音と共に栗色の重い扉が開かれる。
私は気づいた。そうだ。何も誤解したままでいることはない。
「長谷川、誤解を解こう」
「それではごゆっくりお楽しみください」氷のような声だった。
私は部屋に押し込まれた。強い拒絶の力を感じた。
「待て、長谷川ごか――」
扉の隙間から見える、長谷川の氷のような微笑がやけに恐ろしかった。
私は閉口した。ばたんとドアが閉まり、鍵のかかる音がした。
ドアノブを回す。当然開かない。退路が断たれた。なんという徹底。流石は私の超・執事。有能である。有能すぎる。
「そのような気遣い必要ない！　有能すぎるのも考えものだな！」
扉に向かってひとしきり悪態をついた後、冷静になって考える。
とにかく、今宵はこの密室で過ごさなければならなくなった。
そして、私は言ってしまった。『囲って、手籠めにする』と。
言語とは時に複数の意味を持ち、人の間でいとも簡単に変容してしまう。長谷川はこう捕らえたに違いない。
マナを『囲い』――中に取り込めて周囲をふさぎ、逃げられないようにし、
『手籠めにする』――暴力で、その、女性を……犯すと。
最初に目に飛び込んできたのは豪勢なダブルベッド。その上をシルクの肌掛けが覆い、中心には少女一人分の膨らみがある。
あれは……私は恐る恐る忍び足で近寄る。
いや、待て……。何をそんなに恐れているのか！　私は有言実行の男だ。あの時の私の意思通り、彼女を取り押さえ、保護し、しかるべき教育を――。
「うん……」マナが呟いた。やけに艶めかしい声に聞こえた。
そして、私の体が硬直する。
マナが寝返りを打った。長谷川によって手入れされた金髪が純白

のベッドに広がり、その美しさに思わず目を奪われる。
よく見れば、煤が綺麗に拭われたその顔は幼さを残していながらも整っている。金髪ではあるが、顔立ちは日本人そのものだ。ハーフだろうか。
極めつけは、今までマントで隠れていて気づかなかった『あれ』だ。
暑いのか、はたまた寝相が悪いのか、マナはシルクの肌かけを放り出す。現われたのは、シルクの寝間着から、こぼれんばかりの、いや、はち切れんばかりの『あれ』、
――ばいんばいんである。けしからん。ばいんばいんである。
幼女のようなあどけなさを醸し出していながら、このばいんばいんは反則なのではないか。この子は一体いくつなのだ。とても小学生のばいんばいんではない。
最近の子供は発育がよいと聞くが、このばいんばいんはけしからん。由々しき事態である。
そもそも、私は先程から何度脳裏にばいんばいんという単語を浮かべたのだ。けしからんぞ伊統会長。これでは私がマナのばいんばいんに釘付けになっているようではないか。まったくもってけしからん。けしからんばいんばいんである。
私はマナのばいんばいんから、意志と理性の力で視線を外し、下方へと――白い生足が飛び込んできた。生まれて間もない幼児のように白く、ふっくら艶やかである。シルクの寝間着はマナの股ぎりぎりで途絶えている。
慌てて視線を天井へと向ける。
おそらく長谷川のことだ、寝間着の下は――はいていない可能性があるっ！
ばかもの。長谷川のばかもの。私は天を仰ぎ、心の中で有能すぎる執事を罵った。
さて、私は有言実行の男だ。
――だからどうしろと言うのだ！

理性と男子高校生の欲望が我が内で戦争を始めた。男子高校生の欲望は、手強い。

そもそも『英雄、色を好む』と言う。私も齢一七。大昔の偉人ならば嫁を貰い、一皮むけていてもおかしくはない。……ってちょっと待て。

それがどうした！　彼女を見ろ！　こんなやり方で一皮むけてどうする！

しかるべき手続きの後、正式に一皮むけるべきではないか。

私は思いきってマナの表情を覗う。すやすやと、気持ちよさそうに寝ているではないか。ほら、彼女の表情を見ていると、何処かやさしい気持ちになる。何故か、懐かしさすら感じる。初めて会った気がしない。子供のような寝顔にいとおしさすら感じる。

そうだ。私は完全管理社会を作り上げる男だ。マナを保護こそすれ、襲うなど――マナが寝返りを打ち、ばいんばいんが溢れんばかりに揺れた。

――なんという３Ｄ！

男子高校生の欲望は手強い。あの手この手で攻め、戦線を拡大してくる。奴らは３Ｄ作戦で多角的に攻めあげ、頼りない理性軍を次々と打ち砕いてゆく。

時に石のように精神を制止し、時にのたうち回り、時に未来を思い描き、時にマナの穏やかな寝顔を眺めながら、私は長い時をかけて理性で欲望を抑えつけた。

気がつけば深夜をとうに過ぎ、私の頭はもうろうとしてきた。

その時、霞がかった私の脳裏に雷光が奔った。

――そうだ、女だ。女だと思えばよいのだ。

この時、今だけは私は女だ。女であれば女を襲うこともない。すばらしい閃きだ。どうかしている。どうした私の思考回路！

そういえば、女が女を襲う花の名前が付く行為があった気が……。

戦況は何も変わらず、むしろ悪化していることに気づく。

もう、限界だ。

私はベッドの上、マナが寝ている側に座る。腕が勝手に伸びる。膨らみに向かって。

――止せ！　理性はどこへ逃げた！

しかし、彼女の体には魔術的な誘惑がある。これが……魔法の……力……。

――いやいや、まてまて、それはおかしいだろう伊統会長よ！　お前はいつから魔法を肯定するようになったのだ！　例え比喩でも、魔法などという非現実的な言葉を使ってはならないっ！　――現実を見ろ！

あれは、ただの、ふわふわむっちり夢と希望が詰まった膨らみにすぎないっ！　おいちょっと待て、それはあれを肯定しているぞ伊統会長！　ああ！　私はもう駄目かもしれない！

「……おかあさん……どこ……？」突然、声が聞こえた。

マナの寝言であった。マナの顔は青ざめ、涙を流している。体は寂しげに震えている。

私は……いったい何をやっているのだ。

目先のばいんばいんに捕らわれ、目の前の少女が泣いていることにも気づかないとは。そんなことでは完全管理社会など夢のまた夢だ。

この子が何者かは判らない。だが、この子を守らねばならない。私の目の届く範囲で、子供に涙を流させるわけにはいかないのだ。

先程の寝言、両親と離ればなれになったのか？

ならば、私の力で見つけ出すべきだ。

そうだ！　それこそが未来の王としての義務に違いないっ！

その時、一筋の光明が差し込んだ。比喩ではない。窓から差し込む夜明けの光りだ。

勝った。私の理性は籠城戦に勝ったのだ。

「かっ……た……」全身から、力が抜けてゆく。

光……あれ……。

――何かが叫んでいる。

何も無い灰色の大地。灰色の空。まるでこの世から全ての色彩が消え去ってしまったような光景が目の前に広がっている。

その中心で、白とオレンジ色に光り輝く何かがある。

よく見れば、四肢のある獣のようだ。四肢は白銀に光り輝き、頭から全身を包むように伸びた毛が、オレンジ色に光り輝いている。

その額には、角だろうか。白く大きな角が天に向かって伸びている。

獣の顔は、頭から伸びたオレンジ色の毛に隠れ、見ることができない。しかし大きく開いた口から、天に向かって何かを吠えているのがわかる。

灰色の世界の中心で、白とオレンジ色に輝く一角獣が、天に向かって慟哭する。

これは、なんだ？

気がつくと、私はまどろみの中にいた。どうやら寝てしまったようだ。

先程のは夢か。夢とは真に不可思議なものだ。

一角獣。天へといきり立つ角。そう言えば、夢は深層心理を反映しているというが……いや、これ以上はやめておこう。私に限ってそのような卑猥なことはない、はずだ。

それよりも気になるのは、やけに上質の枕だ。

ふわふわとやわらかく適度な弾力。ほんのりとあたたかい。肌の吸い付きが良く、何時までも顔を埋めていたくなる。しかも、甘い、良い匂いがする。

このような枕が屋敷にあっただろうか。

おそらくは長谷川が新たに調達してきたものだろう。後で褒めてやらねば。

私は枕により深く顔を埋める。何故かほんのりと濡れている。寝汗でもかいたか。

さらなる寝心地を追求するため、枕のポジションを変えると、
「あ……」マナの声が、近くで聞こえた。すぐ側だ。
むしろ、体を通して伝わっているような……まさか！
意識が一気に覚醒し、私は、恐る恐る枕だと思っていたものから顔を離す。
なんということだ。眼前に広がるのは絹一枚に包まれた男子高校生の夢……ではなかった、マナのばいんばいんである。
あの時だ。勝利を確信した瞬間、私は安堵のあまりそのまま倒れ込んでしまったのだ。
勝利を確信した時が最も危ないという教訓を、私は期せずして体験してしまった。
「……うん？」マナが白くちいさい手の甲で目を擦り、青い大きな眼が、開いた。
私と、目が合った。マナの顔は、ばいんばいんと同じくらいすぐ側にある。
時が止まる。背筋が凍る。なのに汗は噴き出る。体が石化したように動かなくなる。
「かいちょー……さん？」
石化が解除されたように、私はベッドから飛び退いた。
マナはむくりと上体を起こし、不思議そうに辺りをきょろきょろと見回す。
「ふかふか……」マナはベッドをぽんぽんと押す。「つるつる、気持ちいい……」シルクの肌掛けや寝間着をさわさわと撫でる。「……すーすーします」
私はマナから視線をそらした。
「かいちょーさん」
突然呼ばれ、体がビクリと痙攣する。
「おはようございます」
「は？」マナを見ると、目がとろんとしていた。「あ、ああ、おはよう」

「あの、わたし、どうしてしまったんでしょうか？」無垢な瞳が、私を捉える。

そして気づく。どうやらマナは、まだ状況が良くのみこめていないようだ。

でっち上げるなら、いや、弁解するなら？　とにかく、説明するなら今しかない！

記憶を総動員して、私に有利なシナリオを語る。

「君は教室のドアにぶつかって倒れ、後頭部を強打して気を失ったのだ。だから私と執事の長谷川で、一旦屋敷に保護したというわけだ」嘘はついていない。事実だ。

ただ、自分に不利になることを喋っていないだけだ。

「そういえば、頭ががんがんします」マナは目を細めて両手で頭を挟み、ゆさゆさと頭を揺らした。「……痛い」

それは酒のせいだと思うが、今は触れないでおこう。

「……この服は――」

「君の服は煤けて真っ黒に汚れていたのでな、長谷川に言って洗濯して貰っている。その間はすまないがそれで我慢してくれ。大丈夫、長谷川は女だ。たぶんな」確証は無い。

「そうだったんですか！」マナは突然はっと顔を上げる。眉をつり上げ、目には力がこもっている。まさか、怒って――

「かいちょーさんっ！」マナは、眉をつり上げている。

「な、なんだ」まずい、まずいぞ伊統会長最大の危機だ！

「我慢なんてとんでもありませんっ！」

「へ？」なんですと？

「ふかふかですっ！」マナはベッドをぽんぽん叩く。「つるつるですっ！」真顔でシルクの肌掛けや寝間着をするすると触る。

「だ、だから……？」心臓がどくどくと打つ。私は内心動揺しっぱなしである。

「わたし、この世界に来てから、こんなに良くして貰ったの初めてです」

マナは、ぽわんと微笑んだ。
「は？」何を言っているのかわからない。
「あ、もしかして」表情を一転、真剣な眼差しを私に向ける。「わたしが眠っている間、ずっと側に付いててくれたんですか？」
「ま、まあ、そうだ」結果的にだが。
マナは肌かけをギュッと握り、口元に持って行く。瞳が潤み、表情がふにゃりと歪む。
「かいちょーさんは優しい人ですね。わたし……なんてお礼を言ったらいいのか……」
うっ……うっ……と、マナは泣き出してしまった。わけがわからない。
目の前で突然少女が泣き出したため、私の心には強い罪悪感が生じていた。
がちゃりと、鍵が開く音がした。――長谷川！　いいところに来た！
ドアを開け、私達を見るなり長谷川は一言。
「……泣かせてしまいましたか」長谷川は批難の微笑であった。
「――何を誤解している！　何もやってない！」
「かいちょーさん、ありがとうございます。わたし、こんなに気持ちいいの久しぶりです」マナはベッドをふかふかし、寝間着をつるつるする。
「初めてではなかったのですね」長谷川は驚いたように眉を動かし、微笑した。
「だから誤解だ！」
……ん？　久しぶり？
少し気になったが、まあいい。今は誤解を解くのが先決だ。
長谷川の誤解を解くのには、二言三言では済まなかった。言語による意思疎通の難しさを実感した。一方、マナはひたすら泣きじゃくりながらお礼を繰り返した。

非常に混沌とした時間を過ごし、気がつけば遅刻ぎりぎりの時間帯である。

「ま、まあ、とにかく、気にするな。私はこれから学校に行かねばならん。ゆっくり休むといい。何かあれば長谷川に言え。大抵のことは何とかしてくれるからな」

比喩ではない。本当に、大抵のことは何とかしてくれる。それが長谷川である。

畳み掛けるように話し、私は部屋を出た。自分の部屋に戻り、寝不足でもうろうとする頭で着替え、学校へと向かった。

昼休みまで、私は睡魔と格闘し続けた。

シャーペンの芯で手の甲を突き刺すこと数百。左手の甲は赤と黒のコントラストに染まっている。これぞ戦いの傷跡。男の勲章である。しかしこの戦いも、もうじき終わる。

ついに四限目。催眠音波を飛ばす歴史の授業。それでも私は眠るわけにはいかない。

私は生徒会長である。ただの生徒会長ではない。裏で学園を牛耳る生徒会長である。

加えて私はバイオ系企業を経営しており、最近はとある事情から繁忙を極めている。休憩時間はノートＰＣとスマートフォンを駆使してメールを捌き、電話を繰り返し、適宜指示を与えなければならない。平日の午前、私に休息の時は無いのだ。

それに私がここで眠れば、今の地位が脅かされることは必至。我が校には私の地位を虎視眈々と狙う虎たちがごまんといる。まさに群雄割拠である。なによりも、

「ぷーくすくす。授業中に眠るなんて、生徒会長失格だよねー」と、こきおろされるのが目に見えている。

――ところで貴様、時々私の脳内に登場する『ぷーくすくす』お前は誰だ！

いや、自分の妄想に突っ込みを入れるなど、どうかしている。や

はり寝不足なのだろう。そう考えている間に、授業の終わりと昼休みの開始を告げるチャイムが鳴った。

「ようやく……休める……」私が机に突っ伏そうと思ったその時、「あの……いーくん？」遠慮がちに声をかけられた。

私を『いーくん』と呼称する人物は一人しか居ない。

見ると、黒髪ショートカット。細身の長身。スレンダーな体格から活発な印象を受ける女子、藤堂春香が私を心配そうに見つめていた。

「どうした、心配そうな顔して、それと公の場で『いーくん』と呼ぶのは止して貰えないか。生徒会長の威厳に関わる」

「あ、ごめん。だって、いーくん、なんだか今日、すごく体調悪そうだから。保健室行く？　私、保健室まで付き添おうか？」

藤堂春香とは、家が隣の幼なじみで腐れ縁である。少々人を信じ過ぎるきらいはあるが、至って普通の健全な女子だ。何かと気にかけてくれるのはありがたいが、今はそっとしておいて欲しい。

「いや、いい。寝不足なだけだ。少し寝れば、なお……る……」

これも全ては私の失態のせいだ。自分の失態は、自分で処理せねばならない。他人に迷惑をかけるなど、もってのほかだ。

私は机に突っ伏し、意識は微睡みに包まれた。

――かいちょーさん！

気のせいか、マナの声が聞こえる。あの子の今後をどうするか、それが問題だ。

一応、身元調査と外国人の入国記録を調査するように、長谷川に指示は出したが、問題はその言動にある。

――すい魔法使いのマナです！

そう。確かにそう、マナは言った。

魔法使い、か。口が裂けても言えないが、子供の頃、母にとあるアニメを見せられた記憶がある。ある日普通の少女が魔法使いに変身することとなり、悪を倒すという話だったと思う。今思えば、母

はあの手の物語が好きだった。
その母も、もういない。社会に殺されたのだ。
だからこそ私は、母の無念のためにも完全管理社会を作らなければならない。
――かいちょーさん！
マナに初めて会った気がしなかったのは、そんな記憶が呼び起こされてのことかもしれない。だが魔法使いなど、私の秩序の前には不要な存在だ。
――かいちょーさんっ！　どこー！
……は？　意識が覚醒し、私はがばっと上体をあげる。
「かいちょーさーん！　どこですかー！」確かに、それはマナの声だった。
なぜだ！　ここは学校だぞ！　なぜ聞こえるのだ！
「いーくん……？」
教室を見回すと、藤堂を筆頭に教室中のクラスメイトが私に注目している。
おかしい、起きたはずなのに悪夢だ。
私は一呼吸置いて、言う。
「問題ない。――ちょっと出かけてくるっ！」開口一番、私は教室を飛びだした。
廊下を駆け回る金髪ばいんばいんは、すぐに見つかった。
「あ、かいちょーさーん！」マナは笑顔で元気いっぱいに手を振る。私に向かって。
廊下にいる人間が、全員私に注目する。
私に手を振るマナの顔は赤らんでいる。右手には『相馬』――一升瓶。
なぜ酒瓶を持っている！　さらに最悪なことに、マナの着ているものはシルクの寝間着一枚きりだ。その姿に、局部的にはあのはち切れんばかりのばいんばいんに、周囲の男子生徒どころか女子生徒までもが頬を染めている。

このままではまずい。我が校の風紀が乱れに乱れ、荒れに荒れまくっている。

嵐の中心はもちろん――あのばいんばいんだ！

「まあああああ――なあああああああっ！」

私が呼ぶと、マナは表情をぎょっと凍り付かせ、きびすを返して逃げ出した。

全力で追う。これ以上被害を拡大するわけにはいかない。

「なあぜえここにいるううううっ！　なああぜええにげるううううっ！」

「鬼です！　鬼がいますっ！　そんな怖い顔をしてたら誰でもにげますよう！」

「大丈夫だあああああっ！　怒ったりしないからあああ！」

「もう怒ってます。いやです！　助けてえええええっ！」

マナは一升瓶を振り回しながら全力で逃げる。私は全力で追いかける。まるで昔ちらりと見た、猫がネズミを追いかけるトゥーンアニメ、もしくは怪盗と刑事の追いかけっこの様相だ。

廊下は曲がり角に差し掛かる。この速度では曲がりきれまい。壁に激突したところを捕獲だ。体当たりだ！　――この際、あばらの二、三本しょうがあるまいっ！

――とっ、とっ、とあっ！

驚いたことにマナは壁を蹴り、三角跳びの要領で壁を強引に曲がりきった。あの身体能力、ただ者ではない。いや、感心している場合では無い。

マナにかなり遅れて廊下を曲がると「わあっ！」「きゃあっ！」という男女の甲高い悲鳴が上がった。一人はもちろんマナの声だ。

見ると、マナが生徒の一人とぶつかっていた。――チャーンスだ。生徒の顔はマナの体に隠れて見えないが、男子生徒の服を着ているのはわかる。後で褒めてやらねば。

「あ、ごめんなさい。……え、うん、へえ、バンコちゃんって言うんですね」

マナは男子生徒を気にもとめず、ひたすら手に持ったものと会話している。

「まあああなあああああ！　観念しろおおおおおっ！」

マナが振り返ると、手に持っているのは消しゴムであった。消しゴムと会話するとは、やはりあいつは酔っ払っている。

その時、マナの瞳がきらりと光った気がした。にやりと笑い、

「――きらきら、きゅるるんっ！」恥ずかしい台詞と共に、消しゴムを一閃した。

私は全力で走るが、一向にマナとの距離が縮まらない。……何故だ？

「ありがとうバンコちゃん。物部くんも、ぶつかってごめんなさい」

マナは消しゴムを返してぺこりとお辞儀し、生徒の上を飛び越えた。それを見上げるの生徒顔がみるみる赤面し、口をぱくぱくさせる。

私は気づく。走っているはずなのに、前に進まない。まるで、前に進む力を消されたような……いや、そんなことあり得ない。

念のため、私は一度足を止め、再び走り出す。――今度は前に進んだ。

奇妙ではあるが、今は考えるよりもマナを追いかける方が先だ。

「待て！　マナ！　何故逃げる！」

「かいちょーさんが追いかけるからです！　あはははは！」

まずい、マナは楽しんでいる。事の重大さがわかっていない！

「――あのっ！」先程の生徒が私を呼び止める。

見ると、男子生徒の学生服の上に、予想外にかわいらしい顔立ちが乗っていた。ぱっと見、男装している可憐な女の子に見える。

しかしその子は、私の知っている顔であった。

「誰かと思えば、物部くんか！」

亜麻色のやわらかな髪に幼さを残した顔立ち。一言で言ってかわいらしいタイプの少年が、この物部渡くんだ。何故一年生に『くん』付けかと言えば、あえて『くん』とつけなければ、男子であること

を忘れてしまうからである。
この子については、実は色々と不審な点がある。その最たるものが、先ほどマナが会話していたあの消しゴムなのだが、今はそれどころではない。
早く、マナを追わなくては。
「あの人誰ですか！　バンコって言いました！　僕の名前を何で知ってるんですか！」
物部くんの顔が、驚愕と動揺で緋色に染まっている。
「ええい、私にもわからん。頼むから今はあいつを追わせてくれ！　質問なら後で受け付けるから邪魔をするな！　すぐにあいつを引っ捕らえて洗いざらい吐かせてやる！」
「あ……、ごめんなさい」我に返ったのか、それとも私の剣幕に押されたのか、物部くんは俯き、おとなしくなった。
「それと、今見たことは、胸の奥深くに閉まっておきなさい」
物部くんの顔がぼっと煮立ち、再び赤く染まって口をぱくぱくさせた。彼にとってトラウマにならないことを祈る。頑張れ男の子。強くなれ！

私はひたすら金色のひらひらしたものを追いかける。
すれ違う全生徒が私たちに注目している。こんなの私の柄ではない。そもそも私は常に冷静沈着で、思慮深いはずの男だ。全力で叫んだり、ばいんばいんで寝間着いっちょうの少女を追い回すような破廉恥男では断じて無かったはずだ。
なぜこうなった。――あいつのせいだ！
マナがドアを開け、何処かの部屋に入るのが見えた。私も続いて中に入る。
中には大勢の生徒がいた。生徒の波をかき分け、マナを追う。
私を守るとか言っておきながら、マナが今やっていることは何だ。私の愛するこの学園の秩序をかき回し、混沌の渦へと引きずり込もうとするかのようだ。いや、彼女こそが、混沌そのものだ。私が何

をしたというのだ。マナは私を陥れるために放たれた刺客なのか？
不満を抑えきれず、声として放出する。
「――お前の目的は何なんだあああああっ！」
マナが、突然ピタリと止まった。こちらへ振り返る。
「なっ、ばか――」全力疾走で勢いづいた私の体は、急には止まらない。
マナにぶつかり、ごろごろと勢いよく床を転がった。
……息ができない。マナのやわらかなものが、私を包み込んでいる。
――この展開、くどいぞっ！　私は懸命にもがく。
声なき悲鳴に気づいたのか、ばいんばいんから解放された。私は上体を起こす。
マナはそのまま私の目の前にへたり込む。俯き、視線は床に注がれている。
「……ケガはないか？」私はマナの頭をさすり、たんこぶになっていないか確かめる。
マナはぎゅっと目をつむり、されるがままだ。
「どうやら、頭は打っていないようだな」
マナが、がっと顔をあげた。青い瞳は泣き出しそうであった。
「わたしは、あなたを守りたいっ！　――ソウくんっ！」マナは苦しげに叫んだ。
あまりの驚愕に一瞬、頭が真っ白になった。
ソウ、だと？　それは世界で数人しか知らない、私の本名の断片である。
まさかコイツ、私の本名を知っている？
「お前……誰だ？」
私が言うと、マナは傷ついたような、泣き出しそうな表情になった。
「わたしはっ、わたしはあなたを守――うぼげー！」
私は反射的に彼女の口から出た『れいんぼう』を受け止めた。

またもや素手だ。なんということだ。

「……こんな状態で、どうやって私を守るというのだ」

「わたしは、かいちょーさんを……」マナはぜいぜいと肩を上下し、苦しそうであった。

「まったく」わけのわからん奴だ。

何故か呼び名も『かいちょーさん』に戻っている。

その時、私は違和感に気づいた。ひそひそ、ざわざわと、投げかけられる声。周りを見る。大勢の生徒から向けられる、好奇と不信感の入り交じった視線。

すぐさま状況を把握した。マナを捕まえたこの場所は、ちょうど食堂の真ん中だ。

つまり私達二人は今、大勢の生徒に囲まれている。端的に言ってピンチである！

「ばいんばいんだ」「外人だ」「ようじょようじょ！」「女の子だぞ」「かわいいわね、どこのこかしら」「ようじょようじょ！」「あの子、酔っ払ってない？」「確かに顔が赤いな」「ようじょようじょ！」「それより、あの格好みろ」「ああ、熱くなるな」「ようじょようじょ！　ふぁおおおふぁおおう！」しかも、一部変態共が混じっている。

具体的に言えば、マナの容姿に興奮する『養生研究部』がうるさい。

養生研究部は表向きは植物の研究を行なう部活だ。大学の研究室も驚く程の研究成果を上げ、論文もいくつか投稿している。私の経営するバイオ系企業も養生研究部の研究成果を基盤としており、切っても切れない関係となっている。

しかし現在、その実体は、正体不明の部長『ヨウ・ジョー』なるふざけた名前の人物に乗っ取られ、幼女を全力で研究することに心血を注ぐという、いかがわしさ全開の外道どもが集う部活に変わり果てている。

私は幾度となく陥落を試みたが、そのたびに驚く程の有用性と『

ようじょ大好き力』なる、理解に苦しむ大外道パワーを見せつけられ、排除できないでいた。

つまり、養生研究部は『必要悪』として一定のポジションを築き上げた非常にやっかいな存在なのだ。……なぜ、よりにもよってこんなときに！

どうする、どう弁解する？　いかん、寝不足と急激な運動が重なり、意識がもうろうとし始めた。この状況は、私の現時点での脳力キャパシティを超えている。

「ようじょ、ようじょ」どうする。「ようじょ、ようじょ」どうすればいい。「ようじょ、ようじょ」これは、伊統会長の人生で四番目の危機だ。「ようじょ、ようじょ」このままでは「ようじょ、ようじょ」完全管理社会が「ようじょ、ようじょ」瓦解……「ようじょ、ようじょ」

――ええい、人の苦労も知らずに騒ぎおって！

「ようじょ、ようじょ」

――なにが、ようじょだ。

「ようじょ、ようじょ」

ああ、うるさい。意識がもうろうとする。うるさい、とにかくうるさい。何が何だかわからないっ！　――ようじょ！

「――ええい、うるさいっ！　この子は『私の』ようじょだあああああああっ！」

この日、この瞬間。未来の王は、かつてない窮地に立たされた。

そして、一人の少女の存在が、私の人生を大きく変え始めた瞬間でもあった。

第二話　幼女と養女

私は、大失態を犯した。

「会長の幼女だって！」「何てことだ！」「じょじーざす！」「ようじょはみんなのようじょだろう？」「そうだ、みんなようじょだ！」「みんなようじょになあれ！」

語っているのは、残念なことに一般の生徒だ。

たちの悪く、そして恐ろしいことに、養生研究部のようじょ好きは『伝染』する。

あたかも流行のウイルスが一瞬にして蔓延するように、養生研究部の理念は本人の意思とは関係なく周囲に伝搬し、局地的カオスを作り出してしまう。養生部が私に隠している研究成果の結果なのか、はたまた他の要因から来るものなのか。

信じられないことだが、現に現象が起きている以上は信じるしかない。

そしてこの時の私もまた、ウイルスに感染していたのかもしれない。

「――はい。ごめんね。ちょっと通してね」

その時、幼女を求めるようじょゾンビ共をかき分け、こちらに向かってくる声が。

その声には聞き覚えがあった。金茶色の髪をなびかせ現われたのは、涼風のようなさわやかさを纏う少年。その名も――。

「――友人」彼こそが、私の人生で唯一の友人の『友人』である。

トモヒトではなく、ユウジンである。

「やあ会長。元気？」友人は涼しげな顔でにこりと笑った。

「これが元気に見えるか？」私はお椀状にした両手をみせ、友人を睨んだ。

「あはは、冗談」流石は友人。よどみない笑顔である。

友人は群衆へと向き直り、声を張り上げる。

「さあみんな、これから、とある女の子の話を始めようか」
そして友人は、物語を紡ぎ始めた。
「ある女の子が居た。彼女の国は崩壊してしまった。崩壊した国の末路は悲惨だ。
強奪、強姦、殺人、考えられる限りのあらゆる悪が氾濫した。
彼女はこの年で、両親、親戚一同を亡くし、天涯孤独になってしまった。
頼るものは誰一人居ない。日々の暮らしにも困窮していた。
何とか生きようとするけど、小さな子供にできる事なんて、何も無かった。
結局彼女は悪人に捕まり、人身売買にあって、この地に連れてこられた。
そして……体を使う仕事を、強要されようとしていたんだ」
「何てことだ！」「そんなの、ようじょスキーの風上にも置けないぜ！」
友人は、ゆっくりと頷く。
「彼女は無理矢理酒を飲まされ、アルコールが無ければ生きていけない体にされた。
理性を無くし、そして口で言うのもおぞましいことを、させられようとしていたんだ。
ね、会長？」
「あ、うん？　そ、そうだな」私も友人の物語に合わせる。
「Ｏｈ！　じょじーざす！」群衆から声が上がった。
嘆かわしいことに、あれでも本気で悲しんでいるようだ。
「そこを、会長が助けて保護したんだよ。アルコール依存症を治療するために、かくまっていたんだけど……」
友人は、マナを見やる。観客の視線がマナへと集中する。
「会長に会いたくなってしまったんだろうね。抜け出して、会いに来ちゃったんだよ」
「何という健気さ！」「会長の屋敷って、あのばかでかいやつ？」

「ここから三〇分はかかるぞ」「良く迷わずにこれたな」「彼女の会長を思う気持ちが奇跡を起こしたのか！」

友人の話に生徒達は感動し、マナにエールを送る者まで現われた。嘘みたいだが、これが『強制ストーリーテラー』たる友人の力だ。ちなみに、私には効かない。

「会長、あんたじょじすきーの鏡だぜ！」養生研究部からは、後日『表彰じょじー』なる人形を贈呈されることとなった。そんなものいらない。

だが、窮地を脱することは出来た。

養生研究部のようじょウイルスに対する現状唯一の特効薬。それこそ友人の語る物語に他ならない。目には目を歯には歯を。形無きものには、形無きもので対抗するのだ。

釈然としないが、事態の収拾には成功した。私はまたもやトイレにて手を洗い、ぐったりとしたマナを保健室へ運び込んだ。

保健室で酔いが覚めたマナに事情を聞く。先ずは一番気になる質問からだ。

「何故、私の本名を知っている？」

「え、何のことですか？」マナはきょとんとした。

なるほど、あくまでしらを切るつもりらしい。ならば一つ一つ、ゆっくりといこうか。

「どうやって、ここに来た」屋敷から学園までは、かなりの距離がある。

「魔法です。魔法使いですから」マナは真顔で言った。

「……は？」

「うー……頭ががんがんします」マナは頭をぽんぽん叩く。

「もう一度聞く。どうやってここに来た」

「喉がからからです。かいちょーさん、お水ください」マナは苦しそうに喉を抑えた。

私はコップに水をくみ、マナに渡す。マナはごくごくとおいしそ

うに飲んだ。
「何故ここに来た」
「ぷはーっ、もう一杯！」真っ赤な顔に満面の笑み。
話が通じない。私は実力行使に出ることにした。
具体的には、マナの頭をやさしくぐりぐりする。
「な、ん、で、ここに、来た！」
「いだいいだいいだいだい！　話しますから頭はやめて！」
私がぐりぐりを解くと、半べそになったマナは話し始めた。
「……かいちょーさんを守るのが、魔法使いであるわたしのお役目です……ぐすん」
「守るって、何から守るのだ」魔法使いという単語は意図的に無視する。
私はへんてこな自称魔法使いに守って貰う程、弱くはない。いざというときには最終兵器執事もいる。長谷川ならばきっと戦車の二、三体ぐらいは軽く蹴散らすだろう。
「えっと、えっと……たーぼもーたー？」マナは小首を傾げた。
「ぐるぐる回転して遠心力で臓物引きずり出されるとでも言うのかこの酔っ払いがっ！」
二日酔いマナのこめかみを両の拳でやさーしく、やさーしく、ぐりぐりした。万力をイメージしながらやるのがコツである。
「いたいいたいたいです！　あたま割れるっ！　違います違いますなんだかわからないけど違いますっ！　ごめんなさいごめんなさいっ、お願いだから止めてくださいっ！」
「ええい、黙れ。その曲がった思想、強制してやるっ！」
「こらこら、やめてあげなよ」爽やかな声が、割り込んできた。
誰だ、私の邪魔をする者はっ！　私が声の方を振り向くと、ふわふわとした笑顔を浮かべた友人が立っていた。
仕方がない……。友人の頼みというなら、止めるしかない。
私は友人に恩がある。一生掛かっても返しきれないほどの大恩が。
故に渋々ではあるが、私は二日酔いマナから拳を離した。

「ありがとうございます……ぐすん」マナは涙目の上目使いで、友人にお礼を言った。

その仕草が私のサディスティックソウルをたまらなく刺激し、思わず拳を握り固めてしまうが、ここは我慢だ。いやまて、何かがおかしい。私はこのような外道的な人間であったろうか。この自称魔法使いといると、私の性格まで混沌としてくるのか……？

「いやいやここは学校だし、誰かに見られたらまずいでしょ？　そういう遊びはこっそり家とかでやった方が良いよ」友人はにこりと笑った。純粋無垢な天使のようだ。

「そうですね――って！　あなたも外道ですかっ！」

「外道とはひどいな。ボクは君たちが乳繰り合っているのを傍観していただけさ」

「それを外道と言わずして、なんと言いますかっ！　ってか――わたし達は乳繰り合ってません！　いぢめられてました！　助けてっ！」

「あはは」涼やかな笑みであった。

「笑って返しましたね……」

『絶望にうちひしがれるのポーズ』のマナの横で、私は友人に微笑みかける。

「友人、先程は助かったぞ」

「いやいや、ボクは物語を語っただけだよ。それがボクの『さが』だからね。それに、君を助けたら、『約束』を違うことになってしまうよ」

そうであった。私は『助けられていない』事にした。

それが、友人との『約束』なのだから。

『さが』と言うとおり、友人は物語るために生まれてきたような男だ。

演劇部に所属しており、脚本を手がけている。その美貌から、たまに役者（女役）もやるし、キスシーンでは黄色い悲鳴が上がる。

「友人さんって本名ですか?」マナは友人を物珍しそうに見る。

「ん？　違うよ」友人はさらりと答えた。
「友人は友人だ、ばかもの。それより……」私はマナを睨んで指をバキバキ鳴らす。
「な、何ですか……？　体罰はんたい！　体罰はんたい！」マナは明らかに震え、頭を抑えて怯えている。先程のぐりぐりに堪えたらしい。
「従順な限り何もせん。お前には聞きたいことが山程ある。答えろ」
「はっ、はいっ！」マナはベッドの上で正座した。
「お前、何者だ？　生まれは、国は、家族は、歳は、何故ここに来た、どうやってここへ来た、目的とは何だ、誰の指示でここに来た、何故酒を飲んで酔っ払っている、何故あの時学校にいたのだ、何故私はお前の吐瀉物をキャッチしていた、何故私の名前を知っている？　きっちり納得のいく説明をせよ！　――履歴書を提出せよ！」
　私が一気に捲し立てると、マナは頭頂部から湯気を吹き出した。人としてあり得ない。
「駄目だよ会長。もっとゆっくり聞いてあげなきゃ」
「……友人さん」マナの表情がぱあっと明るくなる。
「マナちゃん、おうちはどこ？　パパとママはどうしたの？」
「……わたし、そこまで子供じゃありませんっ！」マナはぷんすかむくれた。
「あはは、それは子供の台詞なんだよ？」友人は明らかに遊んでいる。
「で、そろそろ真面目に答えて貰おうか」私はやさしく微笑みかける。
「は、はい……」マナは何故か、急にがたがたと震えだした。
　名前は？　――マナです。
　フルネームで答えろ　――マナです。
「日本語通じているか？　名字は？　ラストネーム、オア、ファミリーネームプリーズ」
「マナはマナですよう」マナは困ったように眉を顰めて上目遣いで

見る。
　どうやらマナの祖国は名字が無い国のようだ。もしくは、名乗りたくないから嘘をついているのか。
　どこから来た？　――昔々、あるところです。
「いきなりふざけた解答をするとは良い度胸だな！」やさしく、ぐりぐり。
「いだいいだい――あ、あるかでぃあですっ！」
「は？　アルカディア……？　理想郷の事か？」
「はい。そういう意味だと覗っていました」
「なら帰れ」
「ええっ！　なんでですかっ！」マナはぎょっと、大きな目をさらに大きく見開いた。
「理想郷なのだろうが。いるだけで幸せだろう？　この国は楽園ではない。だから帰れ」
「そ、そういうわけにはいきませんっ！」マナは慌てて語り出した。
　わたし、『すい』魔法使いのマナちゃん。
　フェーリックの都市アルカディア出身、元気いっぱいの17さい。
　謎の敵『たーぼもーたー』からかいちょーさんを守るためにやって来たの。
「おい、十七歳というのは事実か？」この容姿で？
　とりあえず、他の荒唐無稽な事柄は無視だ。
「はい。永遠の十七歳です」マナは屈託のない笑顔だ。
「それはあれかっ！　アイドルはリンゴしか食べないとか言うのと同義かっ！」
「いだいいだい――それは良い設定ですねぜひ使わせて――いだいいだいっ！」
　魔法使いと言っても、お酒を飲まなきゃ魔法が使えないの。てへっ。
「何が『てへっ』だ何が！」ぐりぐりぐり！
「いだいいだい！　――いいじゃないですか、ちょっとぐらいっ」

マナは涙目で訴えた。
「しかも酒を飲まないと魔法が使えない？　そんな馬鹿なことあるかっ！」
「しょーがないじゃないですか。そういう設定なんですから！」
「……今お前、設定って言わなかったか」
「確かに設定としてはおもしろいかもねー」『設定』と聞いて、友人が割り込んできた。
「あっ、違います。そういう意味の設定じゃありませんっ！　アルコールデヒドロゲナーゼ魔型というのを投与されて――ってそんな胡散臭い顔しないでとにかく聞いて！」――夢は、魔法少女！
「貴様、自分の事を魔法使いと言っておきながら何が魔法少女だ！　矛盾してるぞ！」
「矛盾なんかしてません！　今は魔法使いで、魔法少女になりたいんです！」
「何が違うのかさっぱりわからんなあ！　それに自分から正体を名乗る魔法少女などいない！　正体がばれた時点で元の世界に帰らなければならないと聞く。だから帰れ！　とにかく帰れ！」私はパラノイア（妄想症患者）に付き合っている暇はない！
「そうはいきません。その考えは古いです。今の魔法少女は正体がばれたって、そんなにペナルティーはありませんし、むしろ友達に正体がばれた時の熱い展開が私は大好きです。それに、わたしは魔法少女に『なりたい』んです。まだなってません！　だからセーフなんです！」マナは我が意を得たりとでも言うように、ばいんばいんを張った。
　私はマナの肩に手を置き、しっかり眼を見て諭すように言う。
「魔法など夢物語だ。魔法少女などになれるわけがない。……現実を見ろ、な」
「なれますっ！　絶対になるんですっ！　……あれ、それにしても、『正体がばれたら元いた世界にかえらなきゃいけない』って設定、よく知ってましたね。もしかして、かいちょーさん、実は魔法少女

がお好き――」マナははっとして口に手を当てた。
それ見て、私はこの上なく冷静に、すかさず言う。
「――とにかく帰れ！　さっさと帰れ！」
「まあまあ会長、落ち着いて。いつもとキャラが変わってるよ」友人はこんな素っ頓狂な話を聞いても飄々としている。その姿勢、見習わなければならない。
「魔法使いは魔法さえ使えれば誰でもなれますけど、魔法少女は魔法でみんなを元気に幸せにするんです！　魔法少女の方が素敵なんです！」
「素敵なのはわかったが、魔法など無い」
「ありますっ！　魔法はありますっ！　またこの話ですかっ！」
「また？　この話は初めてだが？」
「あっ、あの時の私との会話を丸ごとなかったことにするんですねっ！　嫌がらせですね、そうですねっ！」マナは何故か涙ぐむ。
「だから、知らんと言っているだろう」私はほんの少しだけ気まずくなった。
「……ううっ」マナは眉をつり上げ、今にも泣き出しそうな表情で怒っている。
これでは、私が一方的に虐めているようではないか。
「じゃあ、なんかやってみろ」できるわけがない。
「いいですよっ。この酔い具合なら、一発できそうです！」
マナはばいんばいんの谷間から白い何かを取り出した。それは一気に大きくなり、白くつるつるした棒に変わった。
驚いた。最近のおもちゃは良くできているな！
「魔法のステッキもあるんですよっ♪」マナはラッパのように開いた側を上に、剣のようにとがった方を下にステッキを持った。マナは自慢げに言うが、私にはやはり、子供がおもちゃを振り回しているだけに見える。
「それでは行きます――すとらいく！」マナは私に向けてステッキを振った。

私の頭に衝撃が奔った。物理的な意味で。――がんっ！　と音がした方を見ると、それは床に転がった銀色のタライであった。
「あれっ、おかしいですね。また変なのが出てきました」マナは小首をかしげ、ステッキとタライを見比べた。
私の内に怒りの炎が灯り、勢よく拡大してゆく。頭をさすりながら、私は口を開く。
「貴様……これはどういうことだ？」
「あっ、えっと……」マナは頭を左右にふりふり、おろおろする。
「こーりの書き換えがうまくいってないというか――あ、きっとこの世界の魔法はひねくれ者なんです！」
「ああ良く判った、お前が宴会芸を得意としているのはよくわかったぞばかものがっ！」
「本当です！　魔法はあるんです！　まほー！」マナは涙目で悲鳴を上げた。

「……ぐすん」マナは涙ぐみ、膝を抱えている。
「……友人、わかるか」
「なんとなくね」友人はさわやかな笑顔を見せた。嘘だろう？
「私には、こいつが酔っ払って痛々しい自分設定を語っているようにしか見えないぞ」
「それもまた真なりってね」
なるほど。全て酔っ払いの戯言だと考えればつじつまは合う。酔っている間は複雑な話は聞けそうにない。込み入った話は酔いが覚めてからじっくりと搾り取ってやろう。
「じゃあ、簡単な質問だ」
両親は？　――いません。
家族は？　――いません。
知り合いは？　――いません。
誰か頼れる人は？　――いません。
質問を積み重ねるごとに、マナの表情は暗く、室内の空気は重く

なってゆく。まるで、私がマナの傷口を抉ってしまったかのようだ。またもや私の内に妙な罪悪感が広がる。

そう言えば、両親を捜しているような寝言を呟いていたが、あの涙は……。

「あ、でも大丈夫です。全然、寂しくなんかありませんから！」マナは笑った。

私にはそれが空元気であることが一目でわかった。

もちろん、マナが嘘をついている可能性もあった。だが、彼女の様子を見るに、とても嘘をついているようには見えない。これでも私は日々、私の地位や富を狙う者共と水面下で謀略戦を繰り広げている。だから人の嘘に対しては敏感なつもりだ。

それに……私はあの笑顔を知っている。

あれは、寂しいものが強がる時にする表情だ。

私には経験があるから、わかる。わかってしまう。

「じゃあ、今までどうやって暮らしてきた」

「……がまん、しました」それだけ言って、マナは口をつぐんだ。

本当に、天涯孤独だとしたら……私と同じ……いや、そうではない。

私は完全管理社会を作り上げ、人々を幸福に導かねばならない。かつての過ちから、そう誓ったからだ。今の私にはその力が無くとも、自分のまわりにいる人々の不幸くらいは取り除かねばならない。そうでなければ、完全管理社会など絵空事だ。

重い沈黙が部屋を包んでいる。目の前で懸命に笑顔を作るマナに、なにか、声をかけなければならない。だが、なぜか言葉が出てこない。

「マナちゃん、その杖は本物？」私の隣で、友人が口を開いた。

「友人、何を――」

友人は片目を閉じた。

「そうですよ」マナは杖について訊ねられたのがうれしかったのか、笑顔で答える。

先程の寂しそうな笑みとは異なる、心の底からの笑顔のようだった。

「魔法の杖は、魔法の方向性を決めるんです。杖があってはじめて魔法をコントロールできるんですよ」眼を閉じ、人差し指を立て、マナは得意げに語る。

重い空気を打開するために、興味のありそうな話題を振って気をそらすか。

流石は友人だ。それがばかばかしい杖の話だとしても、今は仕方がないだろう。私は興味がないが。

「ヨーロッパでは、杖は『王権』に付随するアイテムとも言われているよね」

「――『王権』だと！」私は俄然、杖の話に興味がわいた。

「会長、君は王権とか、権力とかが話に絡むと必ず前のめりになるよね」

「当然だ。さあ、話を続けるんだ」王権！　権力！　力への意志！

「でも、『王権』に関する杖は『ワンド』です。私の杖は『ステッキ』ですよ」

「ああ、なるほど」友人は頷いた。

「何を二人で納得している？」

友人とマナは互いを見やると、私に向かって揃って「あはは」と笑った。

二人だけの秘密とでもいうことか？　気に入らないが、二人が楽しそうに笑っているのを見るのは悪くない。幸福とは、心から笑える事でもあるのだから。

それにしても――王権か。

「私としては、ユニコーンの方が良いのだがな」

「へ、なんでユニコーンなんですか？」

「勇気・威厳・高貴などさまざまな性質を併せ持つ『絶対専制君主制』の象徴だからな」

そう言うと、二人は共にぽかんとして私を見た。

「……どうした？」
「会長、精一杯おどけて見せたつもりだろうけど、論理的すぎるよ」
友人は苦笑した。
「……悪かったな」どうやら、人間慣れないことをすると、恥をかく羽目になるらしい。
「あはっ」マナが笑い声を上げた。そのままお腹を抱えてケタケタと笑い転げた。
その姿を見て、まあ……いいか、と私は思った。
「で、会長、この子をどうするの？」
「どうって……」マナを見ると、不安そうな瞳でこちらを見つめていた。
論理的に考えて、一番有力な可能性は酔っ払いの戯れ言だ。
先ずは彼女の酔いが完全に覚めてから身元の確認。その後は彼女との交渉次第。だが、どちらにせよ、身寄りが判明するまでは、保護が必要だ。
そんなことを延々と考えていると、
「――ようじょだよね」友人が、唐突に言った。
「は？」確かにマナは幼女っぽいが、１７歳だと言い張るし、ばいんばいんであるし、幼女と言うのはどうかと……。
……そうか！　私は、重大なことを見落としていた。
「何ということだ」私は愕然としてマナを見る。
マナはベッドの上に座って、頭を傾げた。
「何ということだ」繰り返した。驚愕のあまり、この言葉しか出てこなかった。
再び友人を見る。友人は軽く微笑んだ。
私は、有言実行の男だ。
覚悟は決まった。決断が早いものは、強い。
「友人、私は午後から所用で休む。先生方によろしく伝えておいてくれ」
「うん。わかった。理由は勝手に語っておくよ」友人は軽く返事し

て、保健室を出た。
　行き違いに女子生徒が入ってくる。銀髪、すらりとした体躯、そして印象的な微笑。
「お呼びかと思いまして」天照高校女子制服姿の長谷川が、目の前に立っていた。
　凹凸のない体つきではあるが、スカートから伸びるしなやかな脚線美や、整った顔立ち、天性の美貌と若々しい白肌の長谷川が制服を着ていても、まったく違和感がない。
　むしろ、似合いすぎている。おそらく長谷川が校内を歩けば、男子生徒のほとんどが彼女に見とれ、振り返るだろう。
　さすがは私の『超・執事』変装にも抜かりない。
「長谷川、これから言うことを――」
「既に把握しております」長谷川は動じることなく、いつも通りの微笑で答えた。
「そうか、では頼んだ」何という有能。感動すら覚える。顔には出さないが。
「かしこまりました。それと会長さま、こちらを」長谷川はどこから出したのか、大きな紙袋を私に差し出す。私は中身を確認して、頷いた。
「そうだな、これが一番目立たないだろう」
「それでは失礼いたします」長谷川は不動の微笑のまま、揺らいで消えた。
「さて……」私はマナに向き直り、名を呼んだ。
　マナはビクリと肩を上下した。よく見れば、体は小刻みに震えている。今まで気づかなかったが、こんなにも怯えていたのか……。
「とりあえず、これに着替えろ。その後はここで待機だ。私が戻ってくるまで待て」
　私はマナに紙袋を差し出した。扉を開け、廊下に出て行こうとした時、
「かいちょーさんっ……！」消え入るような小さな声で、マナが私

の名を呼んだ。
振り返ると、寂しげに潤んだ瞳があった。その姿に一瞬、幼い頃の私が重なった。
私はその瞳の意味を知っている。そして、こういう時に、何と行って欲しいのかも。
「安心しろ、このまま消えはしない。必ず帰ってくる」
私が真っ直ぐ見返しそう言うと、マナは、小さく頷いた。

放課後。私は校庭の一角にあるベンチに座って休息を取っていた。
あれから寝不足で働かない頭を総動員して、怒涛の根回しの連続に明け暮れた。学園の全職員を直に説得して回ったのだ。むろん、説得の方法は様々だ。
そして先程、長谷川から任務完了の報告を受け、書類を作成し学園へ提出。全ての仕事を終えると、疲れがどっと押し寄せてきた。
そこで、校庭の隅に見つけたベンチに座り込んだ訳だ。
やるべき事はやった。あとは、本人への報告だけである。
青い空、肌を撫でる穏やかな風。眼を閉じれば木々のざわめきが耳に心地よい。

――離せ、退けよっ。お母さんは悪くないっ！
幼い頃の私が叫んでいる。汚い人間達が、好奇と憎悪の入り交じった眼差しで私たちを取り囲む。
――何でみんなそんな目で見るんだ！
黒い大砲のようなカメラが向けられ、所々からフラッシュが放たれる。
母は私を痛いほど強く抱きしめながら、凛とした表情で、取り囲む人々をかき分ける。その先から波のように人が群がる。幾本ものマイクが、ナイフのように突き出される。
――かまうな、僕らにかまうなよ！
マイクを持った人間からは、毛虫のようにうねうねとした汚い言

葉が放たれる。
――なんで、そっとしておいてくれないんだ！
汚い人間達から必死で逃げ、ようやく二人。マンションに辿り着いた。エレベーターを上がり、やっと家の前まで……。
……なんだよ。何だよこれ！
目の前の扉に塗りたくられているのは、人間の純然たる悪意だった。
母が、咳をした。母を見る。初めて見る、母の、傷ついたような瞳。
……なんで、家の扉に、こんな――。
マンションのエントランスホールはオートロック。あの汚い人間達はここへは入ってこれない。ということは、内部の住人による犯行……誰を……誰を信じれば……、
突然、母が地面に手をついた。片手を口に当て、激しく咽せる。
――お母さんっ！
私は母に駆け寄り、背中をさすった。
苦しげに咽せる母の指の隙間から――赤黒いものが流れた。
そんな、そんなっ……僕は……私は――頭が真っ白になった。

気がつき、眼を開けると、オレンジ色に染まった太陽の光が飛び込んできた。
夢、か……。ああ、嫌な夢を観てしまった。……夢？　なぜ夢を？　どうも何かがおかしいと思いきや、自分の体が横向きになっている。ベンチで眠ってしまったのか。それにしては、頭にやわらかいものが……。ぎこちなくゆっくりと頭の向きを変え、空の方を見ると、大きな山が二つ、こんもりと空を覆い隠している。
ある結論に達し、私は跳び起きた。
見れば思った通り、制服姿に着替えたマナが目をつむってベンチに座っている。
「な、な、何だ……これは」状況から考えて、ベンチでマナに

……。

なぜマナがここにいて、わ、私が――

「……ふぉあ」マナの瞳がゆっくり開かれた。とろんと眠そうな眼を小さな手で擦る。

眼が合った。マナは小首をかしげて、

「……あれ？」

「『あれ？』じゃない！　何でここにいるっ！　保健室で待っていろと言ったはずだ！」

「わっ、あっ、ごめんなさいっ。なんだか心配になっちゃって、つい……」

マナは眉を下げ、申し訳なさそうに上目遣い。

「かいちょーさんを探してたら、ここで見つけて、何だかうなされていたので……」

所在なげに、マナは制服のスカートを弄る。

「それで、どうして、その、ひ、ひ」

「ひ？」マナは首をかしげた。

膝枕という単語が口からでない。あり得ない。仕方がないので別の表現で訊ねる。

「どのくらいの間、ああしていた」

「えっと、途中でなんだか気持ちよくなっちゃって……よくわかりません」

何と言うことだ。真っ昼間の公共の面前で、私がベンチで膝枕されているところなど目撃されたら品行方正な私のイメージが……。

私の地位を虎視眈々と狙う虎たちに知られたら、どうなるか……考えただけでも恐ろしい。

「かいちょーさん？」マナはベンチに座ったまま、大きな瞳で私を覗き込む。

「ええい、立て！」私はなぜだか、非常に腹立たしくなった。

「あっ、はいっ！」マナは慌てて立ち上がろうとするが「――痛っ！」よろよろとバランスを崩し、地面に尻餅をついてしまった。

「どうした！」急いで駆け寄ると、
「足、痺れちゃったみたいです。『ひざまくら』のせいでしょうか」
マナは少し照れたように、はにかんだ。
『ひざまくら』という言葉を聞いた瞬間、私の全身が熱くなった。やはり恥だ。マナを怒鳴りたくなったが、立ち上がろうと悪戦苦闘している姿を見ると、できなかった。
「何を言っている、行くぞ」ベンチの隅に置いておいた手提げ鞄を持つ。思えばこの鞄が取られる危険性もあったのだ。なんたる失態か。私は自分の浅はかさを恥じた。
「あれ……ちょっと待ってくださいね……ほあっ！　……痛たた」
早くここを離れたい。マナの鈍くさい行動を見ていると焦れったい思いが強くなり、
「ほら、これ持って捕まれ」半ば強引にマナに鞄を預けると、背中を向けてかがんだ。
「あっ、すみません」マナの腕が私の首に絡む。体重を私に預ける。やわらかいものが背中に触れた瞬間、私は跳び上がりそうになったが、気づかれぬように平静を保った。マナをおぶって歩く。
「あの……重くないですか？」
「問題ない」
「そう……ですか……」
「ああ」
歩きながら、背中越しに会話をする。当たり前だが、マナの表情は見えない。
「どこに行くんですか？」
「家に帰る」
「家……ですか？」
「そうだ」
そういえば、まだ言っていなかった。私は、ゆっくりと彼女の名前を呼ぶ。
「……なんですか？」

「お前は、私の養女として生活して貰う」
私は、有言実行の男だ。一度口に出したことは、何としてでも実現させねばならない。
あの後、長谷川は日本政府に根回しを行ない、マナの国籍を取得し、私の戸籍に彼女を養女として加えた。
むろん、普通のやり方では、未成年が養女を持つことは不可能だ。しかし、私自身も信じられないが、長谷川にはそれができるらしい。
さすがは長谷川。私の保有する最大『権力』。
私は私で、私立天照高校に編入させる手続きに奔走した。日頃の行ないが功を奏し、編入の手続きは比較的スムーズに行なわれた。表面上はな。
「ようじょ？」意味がわからないのだろう。私は説明する。
「つまり、私とお前は家族になると言うことだ。不本意だろうが、嫌だろうが、決定したことだ。突然のことで気持ちの整理がつかないだろうが――」
「それって、かいちょーさんと一緒ってことですか？」
「……まあ、そうなる」
マナがどういう反応をするか気になったが、マナは何も答えなかった。
きっと動揺しているに違いない。しない訳がない。いくら睡眠不足と急激な運動で頭が働かず、混乱していたとはいえ、その結果、一人の人間の人生を変えてしまったのかもしれない。伊統会長、一生の不覚だ。失態だ。恥だ。
突然、マナの腕に力が入り、私の体をぎゅっと締め付けた。
「……えへへ」
「マナ……？」私からは彼女の様子を覗うことは出来ない。
「かぞく」マナがそう呟くのが聞こえた。
どんな気持ちでその言葉を発したのか、私にはわからない。彼女と出会って、数時間しか経っていないのだ。どうやら彼女の方は、

私に関する何かを知っているらしいが。
まったく、わけがわからない。普通は悲鳴を上げ、「この変態！」と罵られる。それを屈服させることで、王としての征服感を味わう。そうすることで、自分の精神を納得させようと覚悟していたのだが。無駄になってしまった。
そういえば、落ち着いて考えると、私は今、彼女をおぶっているわけで、事情を知らない輩がその光景を見た場合、どう思うだろうか……まずい——品行方正が！
「マナ」
呼んでみるが、返事は無い。
「マナ、マナ！」背中で揺すってみても、返事は無い。やわらかい感触が返ってくるだけである。代わりに聞こえるのは——すうすうという寝息だけ。眠ってしまったか。
無理矢理起こすか、とも考えたが、結局やめた。
マナは足を挫いた事にすればいいし、言い掛かりを付ける輩が居れば、彼女の戸籍を見せながら正座させて、半日程説教すればいい。何らやましいことは無い。
背中から伝わる人の温かさと重みを感じながら、私は夕焼け色に染まる河原を歩いた。
ふと、考えがよぎる。かつては、私もこうしておぶって貰ったんだろうか？
いや、『あの男』がそんなことするはずがない。私たちを見捨てた、『あの男』が。
《——にゃおーん！》ネコの鳴き真似のような声が、あたりに響いた。
その声に、なぜか私は、不吉なものを感じた。
再び前を向くと、全身黒ずくめ、筋繊維をかたどったようなデザインの、バイクスーツのような衣装を着た人影が立っていた。
まるで、夕焼けを切り取って伸びる黒い影をそのまま立体化したような、そんな印象を受ける。首に巻かれた赤いマフラーのような

長い布が風にひらめき、ひときわ異彩を放っている。
だが、最も奇妙なのは、その人物が、デフォルメされた黒ネコのようなかわいらしいお面を付けていることだ。
一見間抜けな風貌とは裏腹に、黒ずくめの人物からは不穏な空気を感じる。この感じ、人生で何度か向けられたことがある。これは――殺気！
「伊統会長……覚悟」お面を付けているためか、声はくぐもっている。
手には黒いナイフ。いや、黒いナイフだと思っていたものが、ガチャガチャと音を立てて広がった。
あれは……ハサミや栓抜き、コルク抜きに、スプーン等――十徳ナイフと言ったところか。色は全て徹底して漆黒。黒ずくめが手首を回転するようにひねると、十徳ナイフのような物体が、ギャリギャリと凄まじい音を立てて回転しはじめた。
黒ずくめが私に向かって駆け出す。私は咄嗟にマナを下ろし、鞄をもぎ取る。
「痛っ……かいちょーさん……？」地面に落ちたマナが声を上げた。乱暴に落として起こしてしまったが、今は仕方がない。
「マナ、逃げろ！」
「……えっ？」マナが疑問を浮かべたのと同時、
黒ずくめが私に向かって跳び上がった。間違いない、私を狙っている。
「――加速装置！」黒ずくめが叫んだ。
瞬間、黒ずくめの体が、黒い閃光のように加速し、私との距離を一気に詰める。
私は反射的に鞄を前に出す。するとギャリギャリと言う耳障りな音と振動。車に衝突されたような衝撃が私の体を襲い、私は遥か後方に吹き飛ばされた。
「かいちょーさんっ！」マナが駆けつけ、倒れた私を抱き起こす。
「大丈夫ですか！」

鞄を見る。中心が斜めに大きく抉れていた。５０口径の弾丸をも防ぐように作られた、この特注の鞄が……。背筋に、悪寒が生じた。マナに向かって叫ぶ。

「何をやっている、逃げろ！」ここは危険だ！

「いやですっ！　かいちょーさんを守るのがわたしのお役目ですっ！」

マナは私の盾になるように暗殺者との間に立ちはだかり、両手を広げた。

「ばかものっ！」私は急いで立ち上がり、マナを背後に隠す。

「ちょっと、かいちょーさん、邪魔しないでくださいっ！」

「邪魔はお前だ！　そんな細腕で何ができる！」

「私には魔法があります、ほら、ステッキ！」

「知るかそんなもの！」私は白い光沢を放つ杖のようなものを取り上げた。

「あっ、返して、返して！」マナは杖を取ろうとぴょんぴょん飛び跳ねる。

暗殺者は再び駆け出す。私は河原へ杖を放り投げた。

「あっ、待って！」マナは白い骨を投げられた犬のように、杖に向かって駆け出す。

これでマナを巻き込むことはない。

「加速装置！」暗殺者の体が一気に加速し、私に激突する。

私はボロボロになった鞄で再び衝撃を受け止めた。今度は前傾姿勢で地面にしっかりと足を踏ん張る。黒い衝撃がぶつかり、体が後方に押し出される。踏ん張った足裏の軌跡が地面に抉れた線を描く。鞄からはギャリギャリという不気味な音が立ち、火花が散る。みるみるうちに削れてゆく。私は叫ぶ。

「暗殺者とは久しいな！　私を伊統会長と知っての狼藉か！　何者だ！　名を名乗れ！」

もちろん、こう聞かれて名乗るわけはない。だが、こう言っておかねばならない。私は暗殺者などに屈しないという姿勢の体現。単

に私のポーズとプライドの問題だ。
黒刃の回転が弱まり、暗殺者は鞄を蹴り飛ばす。
「――しまった！」
暗殺者は反動で後方へと跳びくるりと後宙。距離を取って着地した。
「……火野坂、エルレインだ」暗殺者は、十徳ナイフを構えた。
驚いたことに、名乗った。よほどのバカか、または己の腕に自信があるかだ。
おそらくは後者。あの身のこなし、特殊な訓練を受けているに違いない。特に一瞬で接近したかと思えば、次の瞬間には距離を取られるあの速度――まるで人間弾丸だ。
『加速装置』と叫ぶのが気になると言えば気になるが、だからと言ってどうしろと言うのか。とにかくこれでは防戦一方だ。打開策をひねり出さねばならない。
「誰に雇われた！　自分がなぜ狙われるかもわからぬうちは死ぬ気は無いぞ！　もし金が目的ならば、望む額を出そう！」
「ふん、誰がこの時代の金なんか。――恨むなら未来の自分を恨め！」
「何？」どういう意味だ？
「かいちょーさんっ！」ステッキを回収したマナが、私の傍らに戻ってきた。
「そこの子供、退け！　危ないぞ！」暗殺者は腕を横に振り、吠える。
子供というのはマナのことか？
「子供じゃありませんしそういうわけにはいきませんっ！　かいちょーさんを守るんです！　こう見えても強いんですよ！　わたしの魔法、見せてあげます！　……お酒お酒」
マナはあらゆるところをまさぐる。
「……ありませんっ！」すがるような涙目で私を見るが、知ったこっちゃない。

「へえ、魔法だって？　見せて貰おうか」暗殺者が、お面の裏で嘲笑った気がした。
「え、い、いいですよっ！　わたし、こう見えても、素手でもつよいんですからっ！」
　マナは腕を前に突き出して、はあっ、とか、ほおっ、とか奇声を上げるが、へっぴり腰なのでまるで強そうに見えない。むしろ間抜けだ。
「いいからお前はあっちに行ってろ！」私は再び白い杖を取り上げ、放り投げるが、
「あっ、杖！　……そ、そ、そ、そうはいきませんっ！　お、お酒がなければどっちみち同じ！　わ、わ、わ、わたしがかいちょーさんを、お、おままもりしますっ！」
　マナは混乱しているのか、やけになっているのか、この場を離れようとしない。
「――加速装置！」暗殺者が――加速した。
「か、かいちょーさん逃げて！」マナが抱きつき、ばいんばいんを押しつける。
「ならその腕を放せ！」マナが強く抱きついているせいで身動きが取れん！
　瞬時に暗殺者が迫る。嵐のような刃の回転がギャリギャリと荒々しい音を立てる。
「いやあああああっ！」「マナ！　退け！　くそっ！」
　暗殺者が目と鼻の先まで迫り、黒い嵐を、私目掛けて、振り下ろす！
　――ガガガッ！　と、金属と金属が削り合う音が響いた。
「――ご無事ですか」そう言ったのは、銀髪微笑の麗人にして、私の最大『権力』。
「長谷川！」「はせがわさんっ！」
　長谷川は、黒い手袋をはめた手のひらで暗殺者の黒い十徳ナイフを押しとどめていた。要は素手だ。信じられないが、長谷川ならあ

り得ないことも無い……のかも知れない。
「な、何だお前！」暗殺者のお面の下から驚愕の声が発せられる。
「申し遅れました。わたくし伊統会長さまの執事を仰せつかっております、長谷川と申します。以後お見知りおきを」長谷川はいつもの不動の微笑。
「なに？　こんな奴、聞いてない――」
長谷川はノーモーションで、十徳ナイフを暗殺者の後方へと弾いた。
「なにいっ！　ちっ、加速装置！」暗殺者は黒い線となり、瞬く間に後方へと距離を取る。弾かれた十徳ナイフを手にして構え直す。
「会長さまとマナさまを諦めていただけるのであれば、これ以上の戦闘行為はいたしません。どうか、お引き取りを」
一瞬間があって、暗殺者は十徳ナイフの全ての刃を閉まった。あきらめたかと思ったその時、
「……そんなわけにはいかない」
暗殺者は呟くと、背中からもう一つの十徳ナイフを取り出し、
「――伊統会長を殺さないといけないんだよおおおおおおおおおおおおっ！」
全ての刃を全開にして高速回転させる。竜巻のような回転が暗殺者の両手に生じる。
ぴくりと、マナの耳が動いた。
「――加速装置いっ！」弾丸のように――飛びだした。
「長谷川！」いくら何でもあれは！
「――お任せください」
再びガチィッ！　という金属同士がぶつかる音が鳴り響いた。見ると、暗殺者の突撃を、長谷川は右手一つで押しとどめていた。黒い手と刃がぎちぎちと軋めく。
「なんだ、こいつっ！」暗殺者の声色からは焦りが読み取れる。
「もうおやめください。――無駄です」やさしげな微笑とは裏腹に言葉は辛辣。

「うるさいだまれえええっ！　加速加速装置っ！」暗殺者の両腕が視認しきれない速さで動き、次々と長谷川を襲う。長谷川はにこにこと微笑を浮かべながら応酬する。
「――だりゃだりゃだりゃだりゃだりゃあっ！」
「――おやめくださいおやめくださいおやめくださいお

先端から3分の1程を青い布で覆った長い棒のようなものを、背中に担いでいる。

体型は女性特有の曲線美を描いており、マナ程ではないがふくよかな胸は、明らかに女性であることを示していた。

……それにしても、何時の間に、いた？

「――マコト！」暗殺者の少女――エルレインとか言ったか？　が叫んだ。

「……名前、呼んじゃうし」マコトと呼ばれた人物は、お面の上から頭を抱える。

お面はデフォルメされた……らいおん？　のような形をしていた。丸みを帯びたたてがみのようなものがあるので間違いないだろう。無論先例と同じく、お面と体のミスマッチさが際立っている。

「あ、ごめん」エルレインは慌てて口を押さえた。

……この行動、プロの暗殺者ではない？

「ま、いいよ。どうせ全て忘れるんだし――このお面だって、何のためにあるのやらって感じだし」マコトは淡々と答え、らいおんのお面を取る。素顔が顕わになる。

栗色のやわらかそうな髪は左右に軽く跳ねており、ふわりとしたアシンメトリーなウェーブを描いている。大きな瞳はこちらも黒く、小さめの鼻に少し丸みのある頬といった顔立ちは、日本人のものだ。端的に言って美人である。

「貴女ら、何者か」私は訊ねる。

「何者だっていいじゃん。そんなに女の暗殺者が珍しい？」マコトの大きな瞳がこちらを覗く。

「ああ、一人ならともかく、二人は珍しいな。特に美人が二人というのは極めて珍しい」

「美人て言ってくれてありがと。うれしくないけど」マコトは無表情に答えた。

「――び、びじんっ！　な、そんなっ！　そ、その手には乗らないぞ！」

もうひとりの方は明らかに動揺している。言われ慣れているか、慣れていないかが歴然としてわかる。

「か、かいちょーさん、そんなこと言ってる場合じゃありませんよっ！　……ちなみにわたしはどうですか？」

「そんなこと言っている場合では無いので、ノーコメントだ」

マナはうぐっ、と奇声を発した。頬を膨らましてそっぽを向いた。

「それに二人もいるのに一人しか攻撃してこないのも気になる。私だったら背後を取って気づかれぬ内に殺すからな」

「ごもっともな意見だね。でも、ウチにはウチの役割があんの」マコトは背中にかけていた棒のような物を取り、赤いひものようなものを解く。すると、棒を覆っていた布が風にひらめいた。

棒だと思っていたのは、大きな青い旗であった。

旗にはネコが空を見上げているようなシルエットと、『ＳＮＳ』という装飾文字が描かれている。

――にゃーん、にゃーん。子供の下手なネコの鳴き真似が、何処かから聞こえる。

「時間」マコトは手首にはめた腕時計のようなものを、もう一人の少女に見せた。

「ちっ、もう時間か……」エルレインが後退る。

逃げる気か。そうはいかない。私は長谷川にひっそりと囁く。

（長谷川、あの『ぺったんこ』の方に突撃。私は側面から『旗持ち』を狙う）

長谷川はぺったんこという言葉に一瞬眉を動かす。意外と気にしているのか？

（了解しました）微笑を動かさずに囁いた。

「ねえ、今日は何年何月何日かな」マコトが唐突に訊ねた。

「は？」いきなりの世間話とはどういう了見だ？

「マコト！　何を――むぐっ」

マコトはエルレインの口をふさいで続ける。

「教えてくれたっていいじゃん？　こっちも名乗ったんだし」

何かの撹乱か？　ならば、こちらにとっても好都合だろう。長谷川に目で合図する。長谷川が少しずつ距離をとる間、私は今日の日付を答えた。「――だが、何か？」

「ううん、ありがと」

（それでは作戦……）「――開始っ！」

私が口火を切ったのを合図に、長谷川が弾かれたように突撃する。

「わっ、化け物が来た！」エルレインがぎょっとする。確実に注意を惹けているようだ。

「相手にしたらだめ。確実に負けるし。やり過ごして」マコトは冷静に指示する。

「こうなったら……」エルレインは右手の十徳ナイフを背中にしまい、左手の十徳ナイフを回転させはじめる。「加速加速加速装置っ！」

瞬く間に回転数が上がってゆく。ギャリギャリどころではない。耳をつんざくような激しい騒音があたりに轟き、風で草が舞い上がる。片手では回転を支えきれなくなったのか、両手で回転を押しとどめる。

「行くぞ、必殺技」エルレインは呟いた。

走りながら私は、この言葉に微妙な違和感を感じた。

『必殺技』と言うのは、現実の死闘においてはあまりにも陳腐な言葉ではないか？

長谷川がエルレインに向かって突撃。腕を伸ばしたその時、

「巻き起これ――嵐っ！」エルレインは叫ぶと共に、黒い回転を振り上げた。

突然、黒い竜巻が巻き上がり、長谷川は遥か上空へ吹き飛ばされてしまった。

「長谷川さんっ！」マナが悲鳴を上げた。あの高さでは、長谷川でも耐えられない！

「……撤退するよ」マコトのかかとが、地面を後ろに蹴った。

いや、今まで気づかなかったが、畳まれて地面に敷いてあった段

ボール紙を地面からほんの少し蹴り上げたのだ。するとエルレインは、
「まだだ！　――加速装置！」何と、私に向かって加速した。気づかれていたのか！
「深追いは駄目！」
「千載一遇のチャンスだ！　――死ねえええええっ！」エルレインの黒い刃が、私に向かって高速で突き出される。この感じ、前に何処かで――いや、それどころではない。このままでは――長谷川が――いや、その前にこの私が――死ぬ！
「――すとらいくっ！」突如として銀色の物体がエルレインにぶつかり、鋭い金属音を響かせた。銀色の物体は弾かれ、エルレインは後方に大きく後退りながら着地した。
「またお前かっ！」エルレインが忌々しげな視線を向けた先――マナが、白い杖を構えていた。その頬は、赤らんでいる。夕焼けのせいではない。酔っているのだ。しかしその視線は揺らいでおらず、真っ直ぐエルレインに注がれている。
「当たり前です！　わたしはかいちょーさんを守るんです！　そして――ほっぷ！」
　マナは天高く跳び上がり、落下する長谷川を抱き留めた。
「誰も、死なせたりはしませんっ！」マナの金髪がオレンジ色に染まり、輝き出した。
「なんだ……あの跳躍。お前、一体何なんだ！」エルレインが驚愕の声をあげる。
「――ようじょですっ！」マナは怒鳴るように叫ぶ。
「よう……じょ？」エルレインが、唖然とした。
「かいちょーさんのかぞくです！」
「な、かぞく……だって……？」
　マナは怒ったように眉をつり上げている。マナはさらに叫ぶ。
「あなた、さっき『殺す』って言いましたね。今は、『死ね』って言いました！」

「当たり前だ！　アタシはあいつを殺さなきゃいけないっ！　殺さなきゃ――」

「人殺しは絶対にいけないことです！　誰かが死んじゃったら、誰かが悲しんじゃうんですよ！　そんなことも判らないんですかっ！　――このばかっ！」

マナが一喝すると、エルレインは閉口した。

「だから、そんなバカなことをするターボもーたーさんには――お仕置きですっ！」

宙に、タライが生じた。だが、ただのタライではない。オレンジ色の空を覆う、白銀の超絶巨大な大ダライである。あれは手品という次元ではない。まさか、彼女は妄想に囚われた酔っ払いなどではなく……本当の――。

「――ぐらんど・すとらいくっ！」マナは杖を振り下ろした。

黒ずくめの暗殺者達に向かって巨大なタライが、隕石のように落下する。

「エルレインっ！」マコトが段ボール紙を少し持ち上げながら、叫んだ。

「……はっ、わかった！　加速装置！」エルレインがその隙間に向かって加速する。

暗殺者達が影に包まれ、巨大なタライが地面へ落下――激突した。

この世の終わりかと思う程の大轟音と振動、そして風圧が、辺りを襲った。

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》子供の下手な猫の鳴き真似が、あたりに響いた。

夕焼けの河原に、ぺしゃんこになった段ボール紙が風で舞い上がった。

第三話　自称魔法少女のいる休日。変身ヒーローと魔法少女。

「……私は、何をしていた？」確かマナをおぶって家に帰る途中で……。

しかし私は今、風で遠くに流されてゆく段ボールを目で追っている。

わけがわからない。だが、何かがおかしいのは感じていた。

考えていると、空から何か黒い物体が落下し、音を立てずに地面に着地した。

「――長谷川、なぜここに！」まさか空も飛べるのか！

長谷川は困惑した微笑を浮かべ、言う。

「恥ずかしながら……わかりかねます。気がついたら空に舞い上がっておりました」

そして、マナはと言えば、何故か長谷川にお姫様抱っこされている。私の視線に気づくと「あれ？」と小首を傾げた。

「何が、どうなっている……？」私が言うと、マナは怪訝な顔をして口を開く。

「どうって、美少女暗殺者さん達に襲われてたじゃないですか！」

「美少女？　……暗殺者？」何を言っている？

「あれがきっと『たーぼもーたー』ですっ！」マナは真剣な表情だ。ますます、わからない。まるで、記憶が丸ごと欠落したような……。

だが、私と長谷川、二人の記憶が同時に無くなるなど、あり得ない。

「……わからんが、試してみるか」私は制服の内ポケットから、とある男子生徒の写真を取りだし、地面に放った。「あっ、こんなところに物部渡くんの生写真がっ！」

わざとらしく言うと、次の瞬間には、隣に白く長いリムジンが止まっていた。

ドアが開き、黒いフリルの付いた日傘をさしながら降りてきたのは、天照高校女子生徒の制服。

「――あら会長くん、こんなところで会うなんて奇遇ね」

ぞっとする程白い肌。形の良い口元が上がった。日本人形のように切りそろえられた前髪、膝まであろうかという長く艶やかな黒髪が風になびく。

「本当に奇遇だな、霧島京香女史」

そう言うと、霧島女史の瞳が、射貫くように私を捉えた。この瞳に捉えられた者は全てを見透かされたような気持ちになり、全てを洗いざらい白状したあげくに跪いて踏みつけられながら懺悔すると言うが、私には効かない。

効果がないことを理解したらしい女史は、

「あら、こんなところに写真が……」とわざとらしく言い、拾い上げた。「別になんと言うことはないのだけれど、ここで拾ってしまったのも何かの縁だから、私が責任を持って処分するわ」

「ああ、そうしてくれ」私もわざとらしく答えた。

マナが私の袖をちょいちょいと引く。

「か、かいちょーさん。このお姫様みたいな綺麗な人、誰ですか」

「霧島京香女史だ。我が生徒会で書記をやっている」

「書記『長』よ。書記『ちょう』」霧島は腰に手を当て、眉を顰めた。

「書記長だそうだ。霧島財閥の跡取りで、我が校でもそれなりに力は持っている。私の次にな。今の内に取り入っておくと将来重要なコネクションになるぞ。完璧超人とか呼ばれているらしいが、まあ、どうでもいい」

「ああそう。どうでもいいの」口調にはやや力がこもっていた。睨むような視線である。

「そう熱い視線を送るな。私に惚れたか？」

「冗談」霧島は唇だけで笑った。蠱惑てきな笑みではあるが、油断してはならない。

「そうだな冗談はこれくらいにして、女史よ、ここで会ったのも何かの縁だ。私の行動で何か変わったことはなかったか？　特に、この１時間ほど前から」
「そうね――織神？」
いつの間にか、霧島女史の隣に黒い執事服を着た、サングラスの男が立っていた。
「はっ、監視に付けていた者の報告によると、１０分程前から今まで、伊統会長の消息が途絶えていたそうです」
１０分前、か。やはり、何かあったな。
「だからー、たーぼもーたーですって」マナはぴょんと跳びはねた。
「あら、たーぼもーたーって何？」女史の瞳が、獲物を目の前にした肉食獣のように爛々と輝く。興味を示してしまったようだ。私はマナの口をふさいで自分の口を開く。
「織神、相変わらずの有能ぶりだな。我が下で働かないか？　悪いようにはしないぞ」
織神は私の声など聞こえていないかのように、目すら合わせない。
「無駄よ、私の織神を奪おうなんて。他を当たりなさい」
そう、彼は女史の織神である。シキガミと言っても陰陽師が使役するそれではない。
だが、陰陽師の使役する式神が、実は人以下に扱われていた人間だったという説もあるため、織神と式神を混同するのは、あながち的外れはいないのかもしれない。
「ふっ、まあいい情報は貰った」
「情報をあげたつもりは無いわ。たまたま監視してただけ。あなたがぼろを出すのをね」
霧島女史はこう見えても、私の地位を虎視眈々と狙うウサギの皮を被った虎の一人である。肌が白くて髪が黒いので白虎だろうか。
入学当初、マキャベリの君主論の話題を振って、唯一アグレッシブに持論を語ってきたのがこの少女だ。議論は白熱し、２４時間朝まで生君主論状態。激論の後に残ったのは数々の理念の屍達だけで

あった。
　その後、我々は休戦状態となり、互いに一目置く存在となった。ついこないだ生徒会長選で激突し、かろうじて私が勝った。そういう仲だ。
　普通の感覚では、たまたま監視されたのではたまったものでは無いだろう。だが、私は未来の王だから気にしない。見たければ、幾らでも見るが良い。
「ところで、その子誰かしら？」さりげなく霧島は聞く。
「気にするな。どちらにせよ週明けに紹介してやる」
「あら、焦らすのね。まあいいわ、楽しみに取っておきましょう」
「しらじらしいな。調べはついているのだろう？」
「私が聞きたいのはあなたとの関係じゃなくて、その子の素性よ」
　素性か。……もしやと思ったが、霧島女史でもわからないか。
　マナを見ると、マナは灰色に染まった瞳に疑問を浮かべて小首をかしげた。まあ、この分だとそれほど大した正体も無いだろう。
　ん？　灰色？　確か、瞳は青だったような。光の加減で見間違えたか……？
「それでは、月曜にまた学校で。最近、この一帯で爆弾騒ぎが起きているようだから、気をつけなさい」
「私の心配か？　珍しいではないか。明日は吹雪だな」
「私があなたに勝つ前に、あなたに死んで欲しくないだけよ。私に負けたらさっさと死んで良いわ。むしろ、死になさい」
　霧島女史の言い方は冗談めいておらず、本気であった。
「それでは親子水入らずの良い週末を。ごきげんよう」霧島女史がリムジンに乗ると、音を立てずに走り去った。……きっと電気自動車なのだろう。
「いきなり現われて、いきなり去っていきました……何だったんでしょう？」
　マナは呆然としていた。どちらかと言えば『何だ』と聞きたいのは私の方だ。

「そうだな」私はしばらく思案する。「まあ、召喚魔法みたいなものだ」

「おー」マナは感心したように頷いた。

ぐーっ、と奇妙な音が鳴った。

「……お腹すきました」マナは悲しそうな表情で自分のお腹を押さえた。

「『たーぼもーたー』に狙われたのでは無かったのか？　よく食欲がわくものだ」

「いくら狙われてもおなかはすくんですっ！　人間の真理ですよ！」マナはふくれた。

「確かに真理だな。では、帰るか。今日は……」

「金曜日ですから、カレーです」長谷川が補足した。確かに金曜と言えばカレーだ。

「はいっ！」マナは瞳をきらきらと輝かせながら、両手を広げた。

「……なんだ？」

「おんぶ！」マナはぴょんと飛び跳ねた。

「さて、行くぞ」私は家に向かって歩き出した。長谷川も斜め後ろからついてくる。

「あっ、まってください！　娘を置いていく親がいますか！」

既に娘であることを利用している。驚異的な適応力というべきか、それとも私が利用されているのか……。私は立ち止まり、振り返る。

「早く来い」

「はいっ！」

マナはきらきらと輝く笑顔であった。

利用されているという考えを、私は消した。

「まーだー？」うつぶせになったマナが、足をぱたぱたと動かす。

「調理場の床でうつぶせになるな」それに居候の身で何故そんなにくつろげる。

「だって、待ち遠しいんですもの」マナが鼻をくんくんしながら私

を見上げる。
「だからあと少し待ってろ」私は寸胴鍋をかき回しながら言う。
今日は私の食事当番の日である。昨今の社会情勢を見るに、未来の王といえど料理ができる男というのは大きなアドバンテージを持つことになる。
人は食から。胃袋を掌握すれば、大抵のことはうまくいく。すなわち、並みの料理人を超える料理の腕を持つことこそ、王への第一歩となるのだ。
「あ、これ何ですか？」
「触るな。気にするな」ただの食物移送用のエレベータだ。地下へのな。
「へー……わーっ！　わーっ！」マナは顔をツッコミ、大声を出した。「かいちょーさんの耳はロバの耳ー！」
「――あと少しだから部屋に戻っていろ！」もしくはそのまま突き落としてやろうか。
「あと少しっていつまでですか。正確な時間をのべよー」マナが床をばんばん叩いた。
「何だ、その不快な口調は」
「かいちょーさんの真似です」マナは、にぱっと笑った。
私は鍋の火を止め、マナの頭をやさしくぐりぐりした。

「……ぐすん」一転、涙目である。
「いいからあっちにいってろ。あとちょっとだ」私はしっしっと、手を振った。
「あとちょっとが、どれくらいかかるか教えてくれたら行きます」
混沌とした食材共が調和と統制を保つようになるまで、後2時間は煮込まねばならない。その後冷凍庫で1時間寝かせて、再度加熱で完成だから、
「あと3時間ちょっとだな」
「――むきー！」突然マナが鍋に向かって跳び上がった。

「ま、マナ！　どうした！　落ち着け！」私はマナを羽交い締めにするが、マナは手足をじたばたさせてふりほどこうと必死で暴れる。
「どうかなさいましたか？」微笑である。
「長谷川、いいところに来た！　マナを止めろ！」
長谷川が止めに入ると、マナはしばらく暴れた後、死んだ魚のようにぐったりとした。
「なぜ暴れた」
「ごめんなさい。だって、久しぶりのまともなごはんが目の前にあったものだから……」
「食卓に行ってもう少しだけ待て。そう長くはかからない」
「……はい」マナは肩を落とし、長谷川に連行される。あまりにも不憫な姿である。
「……おい、待て」私はマナに向かって、隠し味に使ったリンゴの欠片を放り投げた。
マナは慌てつつも、しっかりとキャッチ。疑問を含んだ視線を投げかける。
「それでも喰ってろ」
マナの表情が、ぱあっと明るくなった。そのまま長谷川に連行された。
「『久しぶりのまともなごはん』か……」今の私には、無縁の言葉だな。
一体彼女は今までどういう人生を送ってきたのか……。鍋をかき回しながら考える。
一般的に、飢餓の子供は発育が悪いと聞く。確かに17歳にしては小さいが、それにしては、マナの発育は一部が極端に良い。とても飢えているとは思えないが……。
だが、先程の取り乱しよう。あれは演技だとは思えない。純粋なる欲望だ。そうなればこそ、最上級の味を食べさせてやりたいところだが……。
私は、妥協することにした。

「おいひい。おいひいへふ」
マナは泣き笑いの表情で私の作った究極にほど遠いカレーをかき込む。
「口にものを入れながら喋るな」
「ふぁひっ！　おかわりー！」
私自身、味には満足していないものの、自分の作った料理をおいしそうに食べる人を見るのは……ほんの少しだが、悪くない。
「長谷川、すまんな」私はカレーを盛りながら言う。
「いえ、空腹は最高のスパイスと申しますし、一定のクオリティは越えております。ただ、この分ですと此度の戦争でのわたくしの勝利は確実ですが」相変わらずの微笑。綺麗な動作と、機械のような一定のペースでカレーを食してゆく。
「ううむ……」それはまずい……。
「おかわりー！　はせがわさん、せんそーって何のことですか？」
「和洋折衷戦争にございます」
「わよーせっちゅう？　わっ、いただきまーす！」
「和洋とは、和風と洋風のことだ。折衷とは、あれこれと取捨して適当なところをとることだ。マナよ、この屋敷を見て、気づくことはないか？」
「もぐもぐ」マナは咀嚼しながら首をかしげた。「広いですっ！」
「貴重な意見をどうも」
「どういたしまして。おかわりー！」
どうやら皮肉が通じないらしい。私はカレーを盛る。
「この屋敷には和室と洋室が混在している。この甚平が示す通り、私は和風を支持し」
「わたくしは洋風を支持しております」長谷川が続いた。
「へーそうなんですかもぐもぐ」マナは口いっぱいにカレーを頬張っている。
「私達は『戦争』と称し、毎月様々な勝負を行なう。勝った方が自

分の陣地に隣接する一部屋を占領し、好きにリフォームできる。ついでにリフォーム会社は毎月安定した収入を得られる。すると顔が利くようになる。色々あって、様々な利益が生まれる。これが和洋折衷戦争の概要だ」

「なるほどおかわりー！　でも、なんでそんなことをするんですか？」

「決まっている。人生は戦いの連続だ。強いものが戦争に勝利し、勝ったものが歴史を作るのだ。いわば、戦争の予行練習と言ったところだな」カレーを盛る。

「へー。でもわたし、戦いは嫌いでもぐもぐ」マナは眉を顰めてカレーをかき込む。

「社会に出れば、そんなことは言っていられなくなるさ。とにかく今月の勝負は料理対決だ。我が娘となったからには、今後お前にもこの戦争に参加して貰うぞ。さあ、和と洋、どちらの陣営につくか選べ。どちらについてもいいぞ。恨みっこ無しだ」

マナは明後日の方向に視線をやり、口をもぐもぐしながら思案顔だ。

やがてごっくんと飲み込み、口を開いた。

「わたしはどっちでもいいです。おかわりー！」

第三勢力『中立国』誕生の瞬間であった。

時を同じくして土鍋から米が無くなった。私はまだ、食べていない。

米が無くなった事を告げると、マナは悲しそうに目を潤ませた。何杯食ったと思っているのだこの穀潰しめ。

私は食糧不足から来る飢餓と暴動を未然に防ぐために調理場へと赴き、研いだ米を土鍋にセットしてコンロの火を付けた。できあがった炊きたての白米は瞬く間に消えていった。私の殺意にも軽く火が灯った。

「かいちょーさん」差し出された皿の中身は、綺麗に平らげられていた。

「なんだ！　またおかわりかっ！　この食いしん坊め！」既に16杯！

「うーん、まだ食べれますけど、流石にこれ以上は悪いです」

いや、これ以上はというより、もう手遅れの領域だと思うが。

「ごはん、とってもおいしかったです。こんなにおいしいごはん、久しぶりに食べました。ごちそうさまでした」マナはぺこりと頭を下げた。

「……ああ。お粗末様」灯った火は、すぐに鎮火した。

「明日はわたくしが、よりおいしいお料理をごちそうしますね」長谷川が微笑む。

「はいっ！　わたし、楽しみにしてますっ！」マナの笑顔がぱっと咲いた。

「会長さま、今月の勝負方式は、マナさまをより喜ばせた方が勝ちにしませんか？」

「うーむ……」長谷川は己に有利な展開に事を運ぼうとしている。それは見え透いているが……。「しばし、時間をくれ」

風呂に入りながら考える。

長谷川がこれほど積極的に提案することなど、これまでになかった。それに、機械のような長谷川の微笑が、あの時はやわらかなものになっていた。長年共に過ごしてきた私だからこそ、ささいな変化にも気づいてしまう。

案外、利害抜きでの言葉なのか？　あの長谷川が？　マナとの関係が長谷川を変えている？　確かに人は人との関係で別人にすらなる。だから人間という。

だが、あの長谷川が……。

色々あった気はするが、思えばマナと出会ってから2日も経っていないのだ。それなのに、この一体感のようなものは何だ？　マナの人なつっこさが原因なのか？　わからない。だが、もし、そうだとしたら……それは……才――。

――ガラッという音がして、私の思考は中断された。
続いて目にした光景に、私の頭は沸騰した。
「おじゃましまーす」
「お！　おじゃましますっておまえっ！」水面が波立った。私は反射的に下を隠した。
「ん？　どうかしましたか？」
入ってきた。マナが。
バスタオルを体に巻いているものの、白く健康的な腕と生足はもちろん存分に見えており、なんと言ってもはち切れんばかりのばいんばいんがばいんばいんであり、すなわちばいんばいんである。って、私は何を思考しているっ！　静まれ伊統会長！
「マナ、待て！　早まるな！　いいか、そのまま、くるりとターンして服を着ろ！」
「え？　体を洗う時は裸になるものですよ？」マナはバスタオルに手をかける。「これだって、長谷川さんが『身につけて入ってください』って言ったから、身につけてるだけで、今すぐ脱ぎ――」
「――待て！　お前、自分の体が健全な男子にどういう影響を与えるのか知っているのかと小一時間問いたいっ！」私の心臓の鼓動が速まるっ！
「わたしの、からだ？」マナはまたもや首をかしげる。長い金髪がはらりと流れる。
マナは自分の体にどれだけの魔力――ではなく、破壊力があるか気づいていない。健全で品行方正な人生のためにも、私は全力で戦わなければならない。
心技体は連動していると聞く。この（一部以外の）容姿から精神年齢までお子様め！
「いいか、マナ。私は、一人で、ゆっくり風呂に入りたい。お前は、後で入れ」諭すようにゆっくりと言った。
「でも、いつあの人達に狙われるかわからないんですよ！　裸のときが一番危険です。そんな時に一人にはしておけません！」マナは

勢いに任せてずかずかと入ってきた。
「あの人達とはなんだ！　とにかく戻れ！」お前の存在が一番危険だ！
「かいちょーさん忘れちゃったんですか！　黒ずくめの美少女さん達ですよ」
　黒ずくめの美少女達に風呂場で襲われる。ばいんばいんと混浴する。実に男子高校生の欲望全開である。これは以前に友人が言っていた、物語用語で言う『王道展開』という奴なのか？　ん？　王道？　私は王道を突き進むべきではないか？　ならばいっそのこと開き直ってわしづかみに――いや待て！　いくら王道とは言え、それは犯罪だ。この世には法の隙間を縫って避けられるルールとそうでないルールがある。ルールが複雑になればなるほど抜け道は多くなる。しかし、これはあきらかに後者の『避けられないルール』だ。私は自分が王になるまで、先王――今の政府が決めたルールを遵守する。
　私は聖人君子ではない。むしろ聖人君子など存在しないと最近常々実感している。あの体の魔力とも言える魅力に抗える男は、少ないであろう。それが男というものだ。
「マナよ、私は大丈夫だ。この上腕二頭筋を見よ。それなりに鍛えているし、組み伏せれば必殺のドリルも使える」あえて比喩を使ってみた。清純な女子ならば、下ネタを嫌って逃げ出すだろう。これぞ必殺『お父さんの下ネタ作戦』である。さあ逃げろ。
「え、ドリルですか？　見せて見せて！」マナは興味津々で近づいてくる。
　逆効果であった！　言わなければ良かった！　こいつは特殊な人種だ。マナが近づいてくる。ばいんばいんが揺れる。このままでは私は自分を抑えられない。どうする。近づいてくる、はち切れんばかりの躍動が。どうする。考えろ。考えれない！　頭がいかがわしい色に浸食される。どうする、どうする！　視界の６８％にあれが迫っている。

追い詰められた私は――。

跳び上がり、逃げ出した。戦略的撤退と考えよう。お互いの今後のためだ！　私は全裸全速力で自分の部屋まで駆け戻った。

落ち着きを取り戻し、しばらくすると、扉を叩く音。

扉を開くと、大きな枕を抱えた、パジャマ姿のマナがいた。

「かいちょーさん」マナは心細そうな眼で私を見上げる。「一緒に寝てください」

「断わる」即答した。

「一緒に寝ましょうよう」マナは甘えるような声で近づいてくる。

二日目、というか、実質初日でこれか？

どう考えてもおかしいだろう。ここまで甘えられる理由もない。

私はマナをどちらかといえば突き放しているので、どう考えても甘えられるのはおかしい。

長年親睦を深めた仲なら別だが、出会ったばかりの者同士ここまで懐くわけがない。人間として行動原理を疑う。私はドアをロックした。

どんどんという音が鳴り響く。

「かいちょーさん、かいちょーさん！」

「私は男だぞ。万が一間違いが起こったらどうする！」

「間違いって何ですか？　親子は一緒に寝るものです！」

親子にしたのが悪かったのか？　姪か、はとこぐらいにしておくべきだったのか？

「長谷川に添い寝して貰え。あいつはおそらく女性だ……たぶん」

遙か昔に提出された長谷川の履歴書の年齢、性別欄に『不明』と書かれていたのを思いだした。

そもそも、長谷川の名前欄は実のところ『ハセガワ』とカタカナであり、長谷川ですらないのかもしれない。つまりは何もわかっていないということである。

「長谷川さんは『親子なのですから会長さんに添い寝して貰いなさ

い』って」
しまった、先を越されていたか。意外と策士な黒微笑め。
私は冷静に切り返す。
「マナ、お前は子供か？」
「いえ、子供じゃありません」
「子供じゃないなら、一人で寝なくてはいけない」
「でも、人肌が恋しいです」マナの言葉が私の胸をくすぐった。
「恥ずかしいことをストレートに言うな！　そうだ、お前は羞恥心というものが足りないのだ！　まず羞恥心を学べ！」
「しゅうちしんって何ですか？」
何かと言われると意外と難しい。真っ先に思い浮かんだのは、廊下を全裸で走る先程の私の姿だが、あれが羞恥心の産物だとは口が裂けても言えない。
「あーうーそのうち教えてやる。とにかく今日は一人で寝なさい。子供じゃないだろ」
「でも、一人で暗いのは怖いです」
「それは暗闇を理解していないからだ。マナよ、暗闇には一見何かが潜んでいるように思うが実は何もいない。暗闇を怖がるのは、自分自身が怖いと思うからだ」
「自分自身……ですか？」
「そうだ。自分自身の恐怖心に打ち勝つのだ。さすればきっと強い大人に一歩近づける」
「強い、大人に……」
「そうだ。我が娘よ。強い子になれ」
しばらく、無言が続いた。
「……強くなれば、かいちょーさんを守れますか？」
「ああ、守れる」私は嘘をついた。
「かいちょーさん、わたし、がんばります」
とたとたと廊下を走る足音が遠ざかっていった。一応、強くなろうとする姿勢はあるようだ。

私はベッドに倒れ込んだ。気質は和風でも寝具だけはベッドを好む。

天井を見ながら考える。これからの社会、強くなければ生きてはいけない。成り行きで養女にしたとはいえ、我が娘となったからには、社会で生き残れる人間に育て上げる義務が生じる。

私は、絶対にそれを放棄したりはしない。マナの行動を反芻するに、問題は山積みだが、一人前のレディとして一歩一歩改善してみせる。

それができないようであれば、社会の変革など実現できないのだから。

む……。いつの間にか、眠ってしまったか。色々あったから気疲れしてしまったのだろう。それにしても、やわらかくふわふわなものが……震えている。

私は瞬時に起き上がる。このパターンはもう学習している。同じ手は喰わぬ。

見ればやはり眼前に飛び込んでくるばいんばいん。眠るマナであった。ドアに鍵はかけてあったというのに、どうやって入ったのか。

しかし、どうも様子がおかしい。うなされているのか。四肢を赤子のようにぎゅっと縮め、自分で自分を抱くようにして震えている。

「……マナ」小さく、声をかける。反応は無い。

「……なさい」マナは何かをしきりに呟いている。

少し近づき、耳を澄ます。

「ごめんなさい」がたがたと震え「ごめんなさいごめんなさい」と繰り返していた。

初めは私に対して謝っているのだと思ったが、違った。マナは眠っていた。

悪夢を見ているのか、それとも私と同じように、過去の罪の記憶に苛まれているのか。出会ってからほんのわずかな時しか経っていない私には、推測もできない。だが、もしも後者ならば……私には、

どうすれば良いかがわかっていた。

「マナ……」私はマナの頭を撫でる。「お前は強い子だ」

根拠はない。だが、言わなくてはならない。子供の頃の体験が、私にそうさせる。

マナの震えは止まらない。マナの背中に伸ばそうとした手が、止まる。私は躊躇していた。もし、間違いが起こってしまったら？

いや、起こりようがない。私はベッドに横になり、震えるマナを抱きしめた。暖かい体温が伝わってくる。私のも伝わっているのだろうか。

「大丈夫だ。お前は強い」根拠のない言葉を、私は繰り返した。

マナは無意識なのか、強い力で縋り付いてきた。少し戸惑ったが抱きしめ返した。

「お前は強い。私は信じている」

記憶がある。昔……と言っても十年程前のことだ。私は何かに怯えていた。

そんな時……たぶん母だ。母がこうやって抱きしめてくれた。

母は言った。「あなたは強い子」だと。母は繰り返した。

たったそれだけで、私の恐怖は消えてしまった。

その母も今はもういない。私のせいだ。

だからこそ、完全管理社会を実現しなくてはならないのだ。

いつの間にかマナの震えは止まり、すやすやとした寝息を立てて気持ちよさそうに眠っていた。その顔が、ほんのりと赤い。……まさか、酒を飲んだのか？

赤かった顔の、鼻が白み、青ざめてゆき……これは、まさか、あの予兆！

「うぼげー」「――長谷川！」

叫びながら、私はカレーのなれの果てを受け止めた。

駆けつけた長谷川の協力を得て、深夜、私はベッドのシーツ替えをすることとなった。

「マナさまはどういたしますか？」深夜に起こされたにもかかわらず、長谷川は嫌な顔一つしない。というより、いつも通りの微笑を浮かべている。

「その辺の床に放り投げておけ！」

トイレに『あれ』を流しにいった時に、ふと気づいた。消毒用のアルコールがある。……まさかな。いくら何でも手から吐く程のアルコールが摂取されるとは思えない。

部屋に戻るとベッドがダブルベッドに替わっており、その上でマナが寝ていた。

さすがは長谷川。この短時間に行き届きすぎた配慮だ。このような配慮をするくらいなら――マナを別室に連れて行ってくれ！

連日の寝不足で限界だった私は、そのまま部屋の床に倒れ込んで意識を失った。

朝日と共に、目が覚めた。結局それほど眠れなかったか。

老人のようだと自分でも思うが、体内時計が正確に機能している証拠だ。

起き上がりベッドを見ると、マナが既に起き上がっていた。

私と目が合うと、ぎこちなく笑った。

「……おはよう、ございます」

「どうしてお前がここにいるのか、聞かないのかな？」皮肉を込めていった。

「うーん、勇気を出してお手洗いに行ったとこまでは……はっ、まさかお化け！」

「ばかものお前のせいだっ！」

「ひっ、やっぱり？　ごめんなさいっ！」マナは反射的に目をつむって頭を庇った。

「……もういい」私はドアノブに手をかける。

「どこに行くんですか？」

「早朝トレーニングだ。健全な精神は健全な肉体に宿るのだ。お前

もやるか？」
「へー。いってらっしゃい」まるで興味がないとでも言うように、小さく手を振った。
「言われなくても！」私は再びドアノブに手をかける。
「――あっ！」突然マナが声をあげた。
「今度はなんだ」
「……魔法少女」マナはベッドの横にある机の方向に指を伸ばし、言った。
　指し示す先には写真立てがあった。写真には、奇抜でフリフリな服を着た黒髪ロングの女性が勝ち気な笑顔で決めポーズを取って、こちらを見つめている。
　マナは無言で私を見る。目が語っている。『これ、何？』と。
　私が答えないでいると、マナは嬉々として、
「会長さん、やっぱり魔法少女が好きだったんですね！」
「違う、母だ！」誤解されるよりはましだと思い、本当のことを告げた。
「――ええっ、会長さんのお母さんって、魔法少女だったんですかっ！」
「どうしたらそういう結論になるのだ！　ああもう、めんどくさいっ！」
「一字一句、ぐたいてきにせつめいせよー！」マナは勢いよく私を指さした。
　私は我慢の限界を感じ、マナの頭をぐりぐりした。親の真似をして子供は育つと言うが、いざクオリティの著しく低い自分の物まねをされると、無性に腹が立つ。
「一度しか言わないから良く聞け、その人は私の母で、写真はアイドル時代のものだ！」
「いだいいだいいだい！　『あいどる』ってなんですかっ！」
「貴様、魔法少女は知っていて、アイドルを知らんとは言わせないぞ！」

「知らないものは知りませんっ！　助けて！」
「……本当に、知らんのか？」私はぐりぐりを止めた。
「ぐすん」マナは頷いた。
何故かは知らないが、マナの知識には偏りがあった。

私は母とのエピソードを思い出す。
「――ねえねえ、お母さん、これ何？」
母はアルバムを覗き込むと、頭を抱えた。
「あちゃー、見つかっちゃったか。魔法少女は正体を知られたらこの世界にはいられない。ソウくん、私、元いた世界に帰らないと」
母は寂しそうな顔を作って目を伏せた。
「……お母さん、なんか変」この時の私は、とても訝かしげな顔をしていたと思う。
それを見るや、母は気まずそうに頬をかきながら目をそらした。
「いや、ね。こういう仕事は極力断わってたんだけど、ってか絶対に拒否ってたんだけど、この魔法少女だけはすごいファンでさ、つい勢いでＯＫ出しちゃったのよー」
今思えば、母は子供相手にものすごい弁解をしていたものだ。
「へー」私は写真を覗き込んで言った。「かわいいね！」私も純粋な子供だった。
「そう！　そうでしょ！」今まで恥ずかしがっていた母が、この時手のひらを返したように食いついてきた。「いや、実は私もそう思ってたのよー」
母は、写真をうっとりと眺めて言う。
「……やっぱり、やってよかった」
母は年甲斐もなく（と言っても当時２７才だったが）、魔法少女に憧れていたのだ。
中学卒業を期に、シンガーソングライターを目指して単身上京し、齢１５にして路上ライブ、売り込みを行なった母ならではの、大胆な夢だったのかもしれない。

「ねえソウくん、さっきの、もう一度」母は私に顔を近づけ、子供のようにねだった。
「さっきのって？」
「ほら、この写真を見て」
私は察しのいい子供だった。私は笑顔で、
「お母さん、かわいいねっ！」と言った。
「く～～っ、このこの、かわいいやつめ！」
母は私を抱きしめ、頭をやさしくぐりぐりしてくれた。
「お母さん、いたいよう」
「このこのおっ」
あの時、私は幸せだった。
こんな日々が何時までも続くのだと信じていた。
しかし、その幻想はすぐに打ち砕かれた。
この年、母は死んだ。
――かいちょーさん！

気がつくと目の前には、不思議そうに私の顔を覗き込むマナの顔があった。
「かいちょーさん、どうしたんですか？　ぼーっとして」
「……なんでもない」私はマナの頭をやさしくぐりぐりして、部屋を出た。
あの写真は、私の手元にある唯一の母の写真である。
他は全て、燃えて消えた。

あれからマナの言う『たーぼもーたー』や『美少女暗殺者さん』が襲撃してくることはなく、平和で平凡な休日の時間が流れていった。
変わったことと言えば、一〇月も下旬だというのに地面を焦がす真夏のような太陽と、熱風。居座り続ける残暑の気候だけ。
「……何をやっている」

「……あづいです」マナは私を守るどころか暑さでダウンし、床に突っ伏している。

これで私を守ると言い張るのだからお笑い草だ。

「暑さには勝てませんよう」マナはうつぶせになったまま体ごと左右に揺れ、ごろごろと転がった。「あ、ここ冷たい」フローリング上で止まり、幸せそうな笑みを浮かべた。

「――立て！」暑さのせいだろうか、私はいらいらしてきた。

「えー、かいちょーさんは暑くないんですか？」不平不満に満ちたふくれ面である。

「暑いと思うから暑いのだ！　涼しいと思い込めば何とかなる」

「それは気のせいですよ。かいちょーさん現実を見てください」

「お前が言うな！」私は軽い目眩を覚えた。

マナは渋々起き上がる。暑さのせいで汗だくになっており、頬が赤い。

「それにしても、暑すぎます。なんというか……蒸し蒸しします」

マナはシャツの胸元を大きくはだけさせ、汗の流れ込むばいいんばいんの谷間に手で風を送る。「あー、あせもになっちゃってます。汗をかくと大変です」

マナの白い肌の中で、谷間の部分が赤くなっていた。その光景に目を奪われそうになったが、私は意志の力で何とか視線を外した。

マナは今、長谷川の用意した学校のワイシャツを窮屈そうに着ている。長谷川の趣味である服飾コレクションはスレンダーな体格向けのものばかりで、マナのばいんばいんに合うものが無かったからだ。

「会長さま、クーラーもおつけにならないで、何をなさっているのですか？」

「長谷川、私は今、大自然の理不尽さと我慢の大切さをだな」

「文明の機器のすばらしさをお教えするのも重要かと」

「うむ、確かにその通りだが、便利を知るには不便を知らねばならない」

だが、そろそろ頃合いか。リモコンのスイッチを押す。冷たい風が吹き込んでくる。

「おおっ！」マナは跳び起きた。「かいちょーさん、涼しくなりました！　涼しいと思い込んだからですか！」

「ばかもの。エアコンのクーラーに決まっているだろうが」頭、大丈夫か？

「えあこん？　くーらー？」マナはいつものように首をかしげた。

まさか、知らないとは言わせない。空港、駅、スーパー、デパート、建物という建物ほとんどにエアコンが入っている時代、その有用性を享受していないわけがない。

私は冷ややかな目でマナを見る。白々しい奴め。

「え、何ですか？」マナは私の視線をものともせずに真っ直ぐ見返した。

まさか、本当に知らないとでも？　私はエアコンの電源を切った。

「あ、また蒸し蒸ししてきました」マナはあたりをきょろきょろし、私の手元にあるリモコンを見た。私は再びスイッチを押す。エアコンが動作し、涼しい風が供給される。

マナはエアコンとリモコンを見比べ、はっと何かに気づいたように口を開いた。

「わかりました。魔法ですね！」マナはぱあっと瞳を輝かせた。

「どこをどう見たら魔法になるのだこの魔法脳が！」エアコンの白い機体を指さす。「あのエアコンが大気の熱を吸い取り、冷たい風を供給しているのだ。常識だろう」

「魔法じゃないですか。わたしのとよく似てます」マナは真剣な表情で言う。「あの白い箱が冷たい風を出しているのくらいわかりますよう。でも、それを操っているのは会長さんが持っているその魔法の杖です！　そうでしょう！」マナは鼻息荒く力説した。

「文明の機器に初めて遭遇して驚く猿か……」重症だ。ここまでとは思わなかった。

「猿じゃありませんっ！　すい魔法使いです！」

進歩した文明は魔法と区別がつかないと言うが……。
私は試しに、側にあった扇風機の電源を付けた。
「おお、風です。会長さんは気候だけじゃなくて、風も操れるんですねっ！　すごいですっ！」マナはじっと扇風機を見る。顔を近づける。風に金髪がさらさらとなびく。
マナにかかれば機械は何でも魔法の道具か。私はテレビをつけた。きっとこう言うに違いない。『おおっ、箱の中に人がいますっ！かいちょーさん酷いです！　待っててください。今わたしが出してあげます！』などと。
「あ、テレビですね」マナは当たり前の反応をした。
「なんでテレビだけ知っている！」こいつ、人をおちょくっているのか！
「テレビくらい知ってますよう。魔法少女もこれで観たんですよ」
マナは心外だとでも言うように頬を膨らませ、テレビをぽんぽんたたいた。
「どこで！　誰に！」
「えっと……あれ？　……思い出せません……うーん」マナは辛そうに頭を抱えた。
「まさか……お前、記憶喪失なのか？」
「きおくそーしつ？」
「生まれてからの記憶はちゃんとあるかと聞いている」
「何言ってるんですか、当たり前じゃないですか。わたしはここは違う世界、アルカディアにある深い森の中で生まれて――」話がいきなり飛躍した。しかも酷い。
妄想に付き合ってはいられない。私はマナの話を制止する。マナの両肩に手を置き、真っ直ぐに見つめ、聞く。
「いいか、どこで初めてテレビを観たか、よーく思い出せ」
「えっと……うーん……」マナは目をつむり、眉根を寄せて考える。
「……いたい」
「ん？」

「いたい……頭が……割れる……」マナが頭を抱えて倒れ込む。
「マナ……？　おい、マナ！　どうした！」
マナは、意識を失ってしまった。

「マナが記憶喪失という可能性はあるのか？」
市立病院。ベッドで眠るマナの傍ら、私は訊ねた。
「ＣＴを取ってみましたが、脳に異常はありませんね」長谷川が言った。白衣を着ている。なぜ長谷川が医者なのか、何故こうなったのか、正直、私にもよくわからない。
病院にマナを運び込んだ時のことである。
看護師が長谷川を見るなり「長谷川先生」と叫び、羨望の眼差しで長谷川を見た。
長谷川はてきぱきと指示を飛ばし、皆それに従った。どれだけ万能なのだと突っ込みたくなるところだが、正直、私はもう慣れてしまっていた。
「体には異常はありません。多少栄養不足の気はありますが、健康そのものです。心因性のストレスから来ている可能性もあります。過去にトラウマを負ってしまったとか」
ベッドの上のマナを見る。成り行きで拾ってしまったようなものだが、案外、手強いのかもしれない。
私は、彼女を幸せにできるのだろうか……。
頭を振って考えを振り払う。こんな事で、弱気になっていられるか。私は完全管理社会を作り上げるのだ。
「……ん」「――マナ！」
マナの眼が開き、私を見た。瞳は、青色をしていた。
「かいちょーさん……？　あれ、ここは？」
「病院だ。お前は倒れたのだ。驚いたぞ」
「……ごめんなさい」マナは表情を曇らせた。
「なぜ謝る？」
「心配させちゃったみたいだから」マナは目を伏せた。

「何を言っている。私は何時も冷静だ。そのような――」
「そういう顔してました」マナは私を見る。瞳が一瞬灰色に揺らいだ気がした。たぶん、光の加減か、気のせいだ。「だから、ごめんなさい」
「……ばかもの」私は目をそらした。「簡単に謝るな。世の中にはこっちが非を認めた瞬間、それにつけ込む悪人も多い。心底悪いと思っても、簡単に謝るな」
マナは、そんな私をじっと見つめる。
「……なんだ」気まずさを感じ、私は訊ねる。
「かいちょーさんは、変わった人ですね」マナはふわりと笑った。
「はあ？」
私は吹き出しそうになった。
「お前に言われたく無い！」

私はこのまま入院すべきだと思ったが、マナは家に帰りたいと言ってきかなかった。
長谷川大先生のお墨付きもあり、マナは即日退院である。
「会長さま、わたくし、少し残ってもよろしいですか？」
「ああ。久しぶりに親睦を深めると良い。よくわからんが」過去は詮索せん。
「ありがとうございます。夕食までには戻ってまいりますので」
こっそり看護師に聞いた話によると、長谷川はその昔名医と呼ばれるほどの、凄腕の外科医であったらしい。しかし、
「『死神先生』とも、呼ばれていたとか」看護師はそう語った。
どういう意味かと問いただしてみると、
「何でも、一目見ただけで、その人が助かるか、助からないかがわかってしまうらしいんです。それが百発百中するもので……だから、『死神』と」
「ふん、そんなもの、心ない人々の中傷ではないか」
「はい。その通りなんですが、手術を拒否された遺族からすると、

死神にしか見えないのでは無いでしょうか」
言い得て妙だと、私は思ってしまった。
私が会計を済ませてマナの元へ戻ると、マナは廊下で小さな男の子と歓談していた。
「あ、かいちょーさん」マナは笑顔で手を振る。恥ずかしいのでやめていただきたい。「じゃあヒロくん、今度はしゅじゅちゅが終わったらお会いしましょう」
「おう、悪い病気なんか、この俺がやっつけてやるぜ」
マナは私のもとへ駆け寄り、男の子に手を振った。
「じゃーなーデカ乳ねーちゃん！」
「ヒロくんっ！　もうっ！　デカ乳ねーちゃんじゃありません！　マナですっ！」マナは子供にむきになって大声で答えた。男の子は悪戯っぽく笑って走っていった。
「なんなんだ一体？」私は聞くが、
「えへへ、秘密です」マナはにっこり笑った。
病院を出ると、空が夕日に赤く染まっていた。家に帰った頃には夕日は沈みきり、あたりは夜の闇と街灯のコントラストに包まれた。
その後は、長谷川の作った姑息なフルコースを堪能し、風呂は危ないと言ってきかないマナの目を盗んで入浴。あっという間に一日が終わった。
マナの言う暗殺者なる者は現われなかった。やはり、彼女の妄想なのだろうか。彼女は何らかの要因で記憶喪失に陥り、それと合わせて自分の妄想の世界に入り込んでしまったパラノイア。今日の行動を振り返るに、そう推測することもできる。
ならば、一つの疑問が生じる。
なぜ、私なのだ？　暗殺者に狙われる人間に、何故、私を選んだ？　私が天照高校の会長だからか？　金と局地的な権力を持つ、利用するには丁度いい人間だからか？
それとも……。
考える内に、いつの間にか眠りに落ちていた。

いつも通り、日の出と共に目が覚めた。休日二日目でも私に隙はない。早朝トレーニングから戻ってくると、マナがテレビの前で正座していた。
「何をやっている」
後ろから声をかけると、マナはびくっと体を震わせ振り向いた。
「かいちょーさん、脅かさないでくださいよう」
「お前が勝手に驚いたのだ。常に気を張ってないと、いつ暗殺者に狙われるかわからんぞ」
「それはかいちょーさんだけですっ！」マナはテレビに向き直った。
「心外だな。この常識人たる私が特別などと……まあ特別であることには変わりないが」
「静かにしてください」
冷静に返されて、私は少し傷ついた。これが……世のお父さんの気持ち？
「何か観たい番組でもあるのか？」私はマナの隣に座る。
「はいっ！　にちよーびのこの時間帯にはとっても面白い番組がやるともっぱらの評判です」マナは瞳をきらきらさせて説明する。
「異世界から来た魔法使いのお前がどうやって『もっぱらの評判』を聞きつけたのか、問い詰めたいところだな。毒電波でも受信したか？」
「違いますっ！　信用できる情報筋からですっ！」マナはぷいっとそっぽを向いた。
毒電波という言葉は通じたらしい。少なくとも電波の存在は知っているようだ。
「始まりました！」
どうやら、ドラマのようだった。と思った瞬間、突然爆発が起きる。
グロテスクな人型の怪物が、街を襲っていた。バイクの音が鳴り響き、フルフェイスのヘルメットを被った人物とごつごつしたフォ

ルムの大型バイクが映し出される。バイクは跳び上がり、怪物へと突っ込む。怪物は後方へと吹っ飛んだ。

「おおっ！」マナが歓声を上げた。子供かお前は。

「怪物相手とは言え、容赦がないな」

バイクを降り、ヘルメットを取る。眉目秀麗な男性俳優の顔が顕わになった。青年はバックルの大きなベルトを腰に取り付けると『変身！』と叫び、ベルトに手をかけた。すると、ベルトが輝き出し

――

「――おおっ！」マナがまたもや叫んだ。

――文字通り、『変身』した。黒い光沢を放つ、筋肉をかたどったバイクスーツのような装甲。ひときわ目立つ、赤いマフラーが風になびいている。そして、その顔は赤く大きな二つの丸い目が光る不思議な意匠のマスクに覆われている。何処か昆虫の複眼を思わせるフォルムだ。あの黒色のバイクスーツのような装甲に赤色のマフラーの組み合わせ……既視感があるような気がするのは、何故だろうか？

考えている内にも、変身した男はばったばったと怪人に攻撃し、最後は空高く跳び上がってからの跳び蹴りを決めた。怪物は衝撃で爆発した。

ああ、これなら子供の頃に見たことがあるな。既視感はそのためか？

マナを見ると、真剣な眼差しでテレビに釘付けだった。はまっているな。

そこでオープニングになった。どうやら、これから始まるらしい。アップテンポな曲に合わせて先程の男が変身した姿で敵を倒していく。なるほど、変身ヒーローものというわけか。子供の頃に見た記憶がある。まだやっていたのだな。

ドラマ部分は明るい展開の中に、変身すること、力を行使することの苦悩が織り交ぜられた、なかなか観れる作品だった。私が子供の頃はもっと単純な話だったような気がしたが。

物語後半、主人公らしき青年が冒頭の姿に変身し、同じく人間が変身した怪物と戦う。どうやら両者は同じ仕組みで変身しているらしい。つまりは力を扱う側の人間によって、善悪が決まると言うことか。私はドラマが示すテーマに共感する。やはり、力は正しく管理されなければならない。そのためにはやはり、完全管理社会が必要だ。

ヒーローと怪物が打ち合うごとに、テレビの前のマナも「たあっ！」とか「とおっ！」とかうるさく騒ぐ。お前は一体何歳だ。本当に17歳なのか？

怪物は、やはり跳び蹴りで倒された。おきまりのパターン、すなわち友人が言うところの『王道』という奴だろう。王と名のつくものは全て、私の好みだ。

「おー、すごいです。さすがヒロくんが憧れるだけありますね」マナは何やらうんうんと感心していた。先程言っていた『信頼できる情報筋』とは、昨日病院で見かけたあの男の子か。まったく、大した情報筋だ。

ドラマが終わると、アニメの女の子が画面一杯に映し出され、『このあとすぐ！』と甲高い声がテレビから聞こえた。

「あ、次は魔法少女ですよ！　かいちょーさん！　この時間帯はすごいですねっ！」マナはテンション高くテレビをびしっと指さす。

「あーはいはい。私は朝食を作るとしよう」立ち上がろうとすると、「えー一緒に見ましょうよう。きっとかいちょーさんも魔法少女の虜になりますっ！」

「ええい、離せ！　虜になどなりたくない！」マナが私の服をぎゅーっと掴む。

マナはものすごい力で私を引き留める。そうこうしている間に始まってしまった。

主人公らしき女の子はランドセルを背負っている。小学生か。友達とのたわいない日常が続くが、ある時クラスメイトの一人が、いかにも悪そうな怪物？　にしては何処か人間が仮装したような姿を

しているが、にたぶらかされ、悪事を働いてしまう。
女の子は仲の良い友達、そして人語を話す奇妙な小動物と協力して、怪物の悪事を見破り、なんと――変身した。背景がきらきらと輝き服が取れ、髪の毛が普通じゃ無い色に染まり、ふりふりで色とりどりのコスチュームに着替えたのだ。しかも友達まで。
その後が凄かった。女の子達は少年漫画ばりの空中戦で怪物と戦っている。素手で。
そのまま必殺技らしき言葉を叫びながら、光り輝く拳で怪物をやっつけてしまった。
『やったね』と可憐な笑顔。いいのか、それで？　敵を殺すことによる心的外傷は無いのか？　力を行使する事への苦悩は？　現実にいたら何とも末恐ろしい娘達である。
その後、操られているらしかったクラスメイトは元に戻り、何やら思春期特有の悩みまで解決してしまったらしい。不思議な話だ。
友人が見たら、どう評価するのだろうか？　少し気になった。
「どうですすごいでしょう！」マナはまるで自分の事のように、ばいんばいんを張った。
「……すごいというか、何が違うんだ？」
「へ、何がですか」
「さっきのヒーロー物とだ。アニメと実写。女の子と青年。描かれているテーマ以外は全て同じに見えたぞ。要は、変身して悪を倒すのだろう？」
「全然違いますよう。魔法少女は魔法の力を使ってお友達を助けたじゃないですか」
「あの青年だって力を使って人を守ったが？　しかも力を使うことに対して自覚的だ」
「魔法少女にだって魔法のことで悩む話だってありますよう。あの子達も今は気づいてないだけです。きっと」マナは断言した。
その根拠のない自信は、どこから来るのだろうか？
「わたしの特に好きな魔法少女は、みーんな守っちゃうんです。友

達も、敵さんも、みーんな幸せ。すごいんですよ！」
「ほう、それは何という作品だ？」みんな幸せ。まさに完全管理社会である。
「それはですねー……えっと……」マナはまた頭を抱えはじめた。
――まずい。
「いい、思い出そうとするな！　自分で見つける！」また倒れられては困る！
「え、でも……」
「断片的な情報だけで私には充分だ。見つけ出してお前を驚かせてやる」
「おお、それは楽しみです」マナはぱっと笑顔を咲かせた。
『みーんな幸せ』という言葉を聞いて、興味を持ってしまったのが悪かった。
完全管理社会は全ての人々を幸福にすることを目標としている。もしかしたら、アニメとはいえ、何かのヒントにはなるかもしれないと思ってしまったのだ。
だが、所詮は架空の作り話に過ぎない。結局のところ、どうでもいいのだ。
マナと一緒に作り話、つまりは幻想について会話するなど、どうかしている。私がマナの趣味に歩み寄るのではなく、彼女の幻想を取り払い、現実を見せつけるのでは無かったのか。そうだ、先程のアニメに打開策があるではないか。
「マナよ、残念な話をしなくてはならない。お前は――魔法少女にはなれない」
マナは、むっと不快感を表わした。
「突然なんですか？　そんな話、聞き飽きましたよ！」
「なれないのだ。なぜなら――ランドセルを背負っていたではないか」
「背負ってました。だからどうしたんですか？」
「マナよ、彼女らは小学生だ。十七歳よりも年下なのだよ」

マナは雷に打たれたかのようにショックを受け、固まった。
「そ、そんな……」へたり込み、下を向く。
勝った。これでマナの幻想は打ち砕かれ、現実的な目標を探すことに――
「――かいちょーさん」地獄の底から響くような、マナにしては低めの声。
「ど、どうした……？」マナの表情は前髪に隠れて見えない。私は怨霊のようになったマナの雰囲気に気圧されていた。
「ランドセルは、どこで手に入りますか？」
私はマナの考えが手に取るようにわかった。
「――17歳が小学生になれるかばかものがあああっ！」

第四話　道具屋店主と隙間ターミネーター

「いいですっ！　１７さい以上で魔法少女になった前例をさがしますもんっ！」半泣きになったマナは捨て台詞を吐いて、部屋から逃げていった。

「……まったく、あいつの思考はどうなっているのだ」

「朝から親子ゲンカ？」そう言ったのは、変身ヒーロー俳優以上のさわやかさをもつ少年――友人であった。

その手には、撲殺可能なサイズの単行本を広げている。

「友人、屋敷に入る時はチャイムくらい鳴らしてくれても――」

「まあまあ、ボクと君との仲じゃないか」友人は涼やかに笑みを浮かべた。

「それもそうだな。今日はどうした？　遊びに来たわけではあるまい」

「何言ってるのさ、この前、言外に頼んでおいた例のモノ、見つけたって連絡くれたじゃない」

友人は反対の手に持った矢文を見せた。確かに私のものだ。

「ああ、すまん。まだ取りに行っていないのだ。色々立て込んでてな」

私と友人は、友人関係である。友達ではない。もっと大人な付き合いだ。

だからお互い、不用意に助け合ったりはしない。直接の頼み事もしない。『言外に頼んでおいた』とはそういう意味だ。奇妙な関係ではあるが、私は気に入っている。

「だいじょうぶ？　誰かに取られたりしたら……ボクは……」手に持った単行本ががたがたと震えている。いつも飄々としている友人にしては、珍しい反応である。

「ちゃんと確保してあるから安心しろ。今日取りに行く予定だ。明日には君の机の中に入っていることだろう」

「そう……でもやっぱりボクが取りに行った方が……」
「それでは私が例のモノの場所を教えなくてはならない。それでは直接助け合うことになってしまうだろう？」私と友人との関係は複雑で、デリケートなのだ。
「確かにその通りだね。我慢するよ」
「それでこそ、私の友人だ」
私達二人は笑い合った。これこそ、美しき友人関係である。
――視線を感じる。見れば涙に頬を濡らしたマナが、壁から半分顔を覗かせ、じーっとこちらを寂しそうに見ていた。
「やあ、マナちゃん。元気ー？」友人は矢文をしまって、ほほえみながら手を振った。
さすがは友人。どう見ても元気ではない様子の人物に、さわやかに『元気ー』と声をかける。その精神、私も見習わなくてはならない。
「どうした、魔法少女かっこ一七さい以上を探しに行ったのでは無かったのか？」
「……くださいよう」
「は？」声が小さくて、良く聞こえない。
「怒って出て行ったら、追いかけてきてくださいよう」震えた声でマナは言った。
「あはは、マナちゃんは甘えんぼさんだねえ。ひどいお父さんだねえ」
「友人よ、甘やかすな。そして密かに楽しむな」さりげない外道が友人の魅力である。
「だって、なかなか見られないシチュエーションだよ。創作意欲をかきたてられるなあ」
「友人さん、魔法少女は小学生しかなれないんですか？」不安な表情でマナは訊ねた。
「え？　別にそんな事無いよ。年齢で言ったら１００歳をとうに過ぎている例もあるし。まあ、彼女は人間じゃないんだけどね。そり

ゃあ年齢にこだわる人もいるけど、どちらかというと年齢より容姿のほうが重要かな。それでいったら、マナちゃんなんか、一部以外は小学生にしか見えないから、問題ないと思うよ」友人は涼やかに微笑んだ。

「本当ですか！」マナの灰色に濁った瞳に緑色の輝きが戻った、気がした。

「……友人、何てことを」私は頭を抱えた。これでは常識人計画が台無しだ。

「ボクは質問に応じて客観的な事実を述べただけさ。マナちゃんに協力したわけでも、君の思惑を妨害したわけでもないよ」

「しかし……これでは」反論しようとする私の耳元に、友人が口を近づけた。

（君もマナちゃんが泣いているより、笑っている方が良いだろう）

「魔法少女になれるー！」マナはうれしそうにぴょんぴょん跳びはねていた。

絶対に認めたくない光景のはずなのに、からだの内側になにか暖かいものを感じ……いや、そんなはずはない。私は否定する。何かの間違いだ。

「夢を見ることは悪い事じゃないよ。時には、それが救いになることだってある『パンズ・ラビリンス』の少女のようにね」

「なんだ、それは」

「気になるなら、調べて見なよ」友人はいたずらっぽく片目を閉じた。一見キザなこのしぐさをここまで自然にできる人物は、そうはいない。さすがは友人だ。

だが、気に入らない。

「例のモノを取りに行くのをやめるかな、そんな気がしてきた」

「かいちょおー、ボクが泣く顔を見るのもいやだろー」笑顔を一転、友人は泣き出しそうな表情と眼差しで私を見てくる。

「時と場合によるさ。たまには人生の良いスパイスになる」

「かいちょーさん、友人さんを泣かせたらいけませんよ、めっ！」

「マナちゃん」友人の顔がぱあっと明るくなる。やはり演技だったか。
「弱い者いじめはいけませんっ！」
「マナちゃん……それは……複雑な気持ちになるなあ」友人はがくっと肩を落とした。
持ち上げて落とすとはマナもなかなかやる。人間、これが一番こたえるからな。
もちろん、狙ってやったのでは無いのだろうが。
「まあいい、マナに免じて許してやろう」
「わーい！」マナは子供のように両手を挙げて喜んだ。
「マナ、お前はもう少し十七才の女としての品格を身に着けろ」
「ひんかく？」初めてきいたとでも言うように、またもや首をかしげた。
これは……先が思いやられる。
私は頭痛を感じ、再び頭を抱えた。

友人は長谷川にも用事があったらしいが、長谷川は留守だった。食材の買い出しにでも出かけたのだろう。
友人は「ボクって、そんなにひ弱に見えるのかなあ」と女のように白い細腕をさすりながら帰っていった。
「さて、出かけるか」
「どこ行くんですか？」間髪入れずにマナが聞いてくる。きらきらした瞳が「わたしもつれてってください」とねだっている。
「お前は留守番だ」
「そんなっ！」ショックを受け悲しそうな顔のマナ。私は冷静に説得する。
「長谷川が帰ってきたら、服を買いに連れて行って貰え」
「え？」マナが顔を上げる。
「いつまでもその制服と、あのマントみたいな変な服を着回すわけにはいかんだろう」

「変な服じゃありません。魔法使いの正装ですよう」マナは頬を膨らませた。「でも……」表情を一変、微笑んだ。「うれしいです。わたしのこと、気にかけてくれて」

「……ま、一応、娘だからな、戸籍上は。それなりに、責任がある」私はなんとなく、天井を眺めた。「じゃあ、出かけてくる。いいか、今度こそちゃんと留守番してろよ。こないだみたいに勝手に抜け出してくるな。あんな騒ぎはもうごめんだからな」

私が部屋からそそくさと出ようとすると、背後から呼ばれた。

「かいちょーさん」

「なんだ？　まだ何か用が――」

「いってらっしゃい」マナはにっこりわらって小さく手を振った。

「……ああ……行ってくる」

得体の知れない感覚が、私の胸の内に生じた。

天照高校への通学路の途中。

（次世代防犯システムが欲しい。次世代防犯システムが欲しい）と欲望の権化のように念じながら歩いていると、細い路地を見つけることができる。

入って行き、しばらくすると突然道が広がる。ふと見ると、そこだけ別世界のように、おしゃれな店が見つかる。

透明なガラスの向こうに覗くのは、色とりどりのかわいらしい小物類。雑多に置かれているように見えて、何処か秩序を感じさせる絶妙な配置。まるで、店全体がおもちゃ箱のような、そんな印象を受ける店だった。銀と黒に彩られ、品が良く、それでいて慎ましやかな看板には『Ｉｔｅｍ　Ｓｅｌｅｃｔｉｏｎ』と洒落た字体で書かれている。

数ヶ月前、私が次世代学校防犯システムについて悩んでいる時も、気がついたらこの店の前にいた。まるで、この店自体が悩める人々を引き寄せているような……。

まさかな。私は自分の思考に生じた幻想を振り払い、扉を開けた。

「あら、イトーくん、どうしたの？　例の防犯システムの話？　それとも――女の子の悩みかな？」

カウンターの向こう、頬杖をついた女性が薄い笑みを浮かべて頭を傾げる。赤茶けた髪のポニーテールが尻尾のように揺れた。大きな瞳をうっすらと開き、何処か挑戦的な眼差しをこちらに向けている。この店の店主、残念美人の石上アカネ嬢だ。

「前者だ、それ以外にあるか」

「んもーそっけないなあ、ちょっとからかってみただけじゃない」

アカネ嬢はさらに眼を細めて悪戯な笑みを浮かべた。

「ま、いっか。今お客さんいないから、お姉さんと、奥で、お話しましょう？」

髪をかき上げ、声には甘美な響きを匂わせる。絶対にわざとだ。

「今はと言わず、私が来た時は何時も客など居ないではないか」

「人払いしてるの。イトーくんは、特別な人だもの。二人っきりでゆっくりしっぽりとお話ししたいじゃない？」アカネ嬢は片目を閉じた。

「どこまでが本当なのやら。あの細い路地、この店は立地条件が悪いのではないか？」

「これでも結構繁盛してるのよ。『妖精戦争』の時なんか、特にすごかったわー」

頬杖をついたままで、にっと白い歯を見せた。

「あまりに人が来なくて、ついに人外相手に商売をはじめたか」

「あら、比喩に決まってるじゃない。言葉を鵜呑みにするなんて、イトーくんも可愛いところあるわね。――あははっ！」

「皮肉だ、気にするな」

「あんまりいぢわるすると、お姉さん、システム売ってあげないよ」

両手の人差し指を突っつきあい、いじけたような上目遣いでこちらを見る。

「金は払う。貴女は潤う。私はシステムを手に入れる。ＷｉｎＷｉｎだ」

アカネ嬢は目を閉じ、眉を顰めて溜息をついた。
「そうじゃないんだなー。べっつに今更お金なんかに興味ないし？　ま、いいけど。さ、世間話はこれくらいにして、入って。今日は暑いから、氷たっぷり入れた水出しアイスティーにしましょう。いやーそれにしても今年は残暑がきびしいよねー」
アカネ嬢は赤いポニーテールを揺らしながら店の奥へと消えていった。
石上アカネ嬢は『道具屋』なる組織の一員らしく、『道具屋の卵』で、自称『天才美人道具探求者』の少し痛い大学生だ。すらりとした体躯やしなやかなしぐさは、確かに高校生にはない年上の女性を感じさせる。
しかし、その性格は破天荒でつかみ所が無く、会話には虚実が混じり合い、時々全てを見透かしたように物事を言い当てる。悪魔みたいな人だと私は思っている。
そんなアカネ嬢の経営するこの店『Ｉｔｅｍ　Ｓｅｌｅｃｔｉｏｎ』は、この町一帯の学校の備品全てを牛耳っており、我が天照高校にも様々な備品を提供している。
そしてこの度、私が極秘で進めている次世代学校防犯システム『リガン』の設計と開発を担当することになったのだ。
「というより、設計も開発も全部終わってるんだけどねー。後は『鍵』だけ」
「……私はまだ何も言ってないが」
「え？　そんな顔してたよ？」
と、こんな感じである。この人は私の心を読めるのではないかと時々思う。
が、そんな超常現象を私は信じていないので、気のせいだと思っている。
「そうそう。気のせい気のせい」アカネ嬢は自分でついだ水出しアイスティーをぐっぐっと豪快に喉を鳴らしてうまそうに飲んだ。「ぷはーっ、会議の後の一杯って最高よね」

「まだ何も話し合っていないが……。それにそのセリフは未成年の言うことではない」
「あははっ、冷静なツッコミどうも。冷静すぎて面白味に欠けるけど」
「私は面白さなど追求していない。私が今追求するのは学園の幸福だ」
アカネ嬢はうんうんと大げさに頷く。わざとらしい。
「そうだね。そのための『リガン』だもんね。でも、女の子を楽しませるスキルも重要だと思うけどなー」
「どこに女の子がいる」
「――天照川に沈む？」満面の笑みでアカネ嬢は言った。
「遠慮しておく」私は丁重にお断わりした。アカネ嬢ならやりかねん。
「まったく、イトーくんはつれないなあ。どっかの誰かさんみたいにもう少し反応がいいと楽しいんだけどなー。ほら、やっぱりマグロより、激しくあえいだ方が――」
「処女が何を言っている」
アカネ嬢の眉がぴくりと動いた。
「うっさい童貞」
「歴史上の英雄でも童貞は沢山居る。なあに、恥じることではないさ」
「あなたを跪かせて土下座させてみたーい」にっこり笑ってアカネ嬢は言った。
「それもお断わりだ」
「うーいいじゃないちょっとぐらい。減るもんでもないしー」アカネ嬢は不満そうな表情でテーブルをばんばん叩いた。
「減りはしないが取り返しがつかなくなる。色々なことがな」
「そうね。お父さんみたいにはなりたくないものね」私を見つめるアカネ嬢の瞳が、一瞬金色に輝いた気がした。
頭に、血が昇った。

「言っていいことと悪いことがあるぞ……アカネ嬢」私はアカネ嬢を睨んだ。
「その言葉、そっくりそのまま、あなたに返すわ」アカネ嬢は動じない。
何故か、背筋に悪寒を感じる。アカネ嬢の大きな瞳が、私をとらえて放さない。黒いはずのアカネ嬢の瞳が、黄金に輝いている。蛇に睨まれた蛙とはこのことか。私は動くことができない。動悸が、激しくなっていく。息が、苦しい。
「あら、どうしたの？　息づかい、激しいよ。お姉さんの美貌に恋しちゃった？」
「……問題、ない」だれが……恋など……するものか……。
「そう？　ほら、お茶飲んで。気分が良くなる効果もあるから」
私は操られるように、グラスに手を伸ばし、きんきんの冷たさを手のひらに感じながら、琥珀色の液体を飲み干した。
「やんややんや」アカネ嬢はパチパチと拍手した。宴会か何かと勘違いしているのではないか。
アイスティーを飲むと、確かに気分が良くなった。というより、
「わはははははははは」
「あははっ、あははっ」
「わはは、これは、わはは、どういうこ、わはは、とだ！」
「こんなこともあろうかと、イトーくんの飲み物に、新しく開発した『笑い薬』を入れてみましたー。人体実験でーす。アカネさんのおちゃめさんっ♪」アカネ嬢はぺろっと舌を出して、頭をこんと叩いた。古い。
「おちゃめで、わはは、許される、わはは、問題ではな、わはは」
腹が痛い。苦しい。死ぬ！　アカネ嬢は青いカプセルを私に見せる。
「そしてこちらが『笑い薬』の解毒剤です。アカネさん、用意周到、良妻賢ぼっ！」

「使い方が、わはは、ちがっ、わはは」
「あはは、そんなに面白かった？　そこまで笑うことは無いと思うけどなー」アカネ嬢はカプセルを目の前でひらひらさせた。
「わはは――このっ！」カプセルを奪い取ろうとしたが、すんでの所でかわされた。
「続いて、ぱんぱかぱーん！　これが次世代防犯システム『リガン』の契約書」
一枚の紙を、ひらひらと振った。
「このシステムを使って肉体的、精神的に障害を負っても、当店は一切関係ありません。あと――この私が処女であると今後一切口走らないことっ！」
紙にはしっかりと明記されていた。まるで、こうなることがあらかじめ決まっていたかのように。微笑むアカネ嬢の内側に、黒いものを感じた。

笑いすぎで衰弱した私は、強制的にサインさせられ、さんざん焦らされたあげく、エロティックな体勢で解毒剤を飲まされた。一生の恥だ。こんな醜態、墓場まで持って行かねばなるまい。そして、目の前の女には、いつか復讐しよう。そう思ったが、
「――それは無理よ」にっこり笑われ即時否定されてしまった。
私は、この人には一生かなわないのではないかと思ってしまった。
人間は、悪魔には勝てない。
しかし、まさか『リガン』が完成しているとは。工期は決めてしまったし、その数日は放課後の学園内を立ち入り禁止にしてある。取り消しを伝えねばならないだろう。
「その必要は無いわ」
「いい加減、私の考えを読むのをやめてはいただけないか」
「え？　何のこと？」アカネ嬢は徹底して、しらを切るつもりだ。
「……もう、いい」
「そ。まあ、とにかく工期はそのままにしておきなさい。きっと役

に立つから」
「何故だ。その根拠は？」
「風が吹けば桶屋が儲かるってね」アカネ嬢は片目を閉じた。
わけがわからない。疲れた。もう帰りたい。この人には二度と会いたくない。
しかしながら、まだ友人の――
「――はいこれ」アカネ嬢は折りたたまれた紙の束のようなモノを私に渡した。
「なんだこれは」
「頼まれてた本よ」
「本？」とてもそうは見えない。紙の束だと思っていたモノは、どうやら一枚の長い紙を山折り谷折りと繰り返していき、最後に環状につなげたものらしかった。折り目の間に縦書きの文字が並んでいる。どうやら、形は変わっているが本当に本のようだ。
「イトーくんの友人くんによろしくね」
ついでにと、アカネ嬢は私を本名で呼んだ。
「――貴女は本当に知らなくて良いことまでよく知っているな！」
「これに懲りずに、またいつでも遊びに来てねー！」やはり、アカネ嬢は動じなかった。傍若無人とはこのことか。心臓に悪い。嫌な動悸がする。
息も絶え絶え、私は店の扉に手をかける。その時、背後からアカネ嬢の声。
「あ、そうそう、イトーくん、朴念仁ってしってる？」
「芋の名前か何かか？」振り返らずにこたえる。もううんざりだ。
「それは自然薯。あら、イトーくんがボケ？　天然かな？」
少し、気まずく感じた。家に戻ったら辞書で調べることにしよう。
「当然、確信的だ」
「ふうん、ま、いいや、イトーくん――その時が来たら、覚悟を決めなさい。頷くだけで良いのよ」
「は？」意味不明なアカネ嬢の言葉に、私は思わず振り返る。

「単なる老婆心だから気にしないで。あっ、老婆心と言っても、お節介って意味で、あたしはまだまだ若いわよ！」アカネ嬢は勝手に言って、勝手に動揺して、勝手に怒った。
わけのわからぬまま、私は店を後にようと――
「あ、そうそう、明後日学校に行くわ」
不吉な言葉を聞いた気がしたが、私は聞こえなかったふりをして店を出た。

無為な休日はあっという間に過ぎ去り、週明けである。
「ふわぁ～～っ……かいちょーさん、おはよーございます」
寝ぼけ眼をこするマナは、昨日長谷川に買って貰ったというピンクのパジャマを着ている。それにしても、
「……お前、なぜ毎回私のベッドで寝ているのだ？」
「いやあ、えへへへー」寝癖で髪が跳ねた後頭部を撫でた。
「えへへじゃない。自分の部屋があるだろう」
「顔洗ってきますね」マナはふらふらと洗面所に向かった。
会話が、成立していない。思えば万事こんな感じである。
食事中、私はあることに気づく。
「そういえば、『たーぼもーたー』だったか？　暗殺者など、一向に来ないが」
「きっと、休日は暗殺者さん達もお休みだったんですよ」
マナは今朝5枚目のパンを一口に頬張った。
「マナさま、おかわりはいかがですか？」長谷川がにこにこと訊ねる。
「あ、貰います」マナは当然のように答えた。
「ああ、なるほど……って、んなわけあるかばかものがっ、て、お前食い過ぎだあっ！」
私はマナをぐりぐりした。その時、
――ジリリリリリリリリリリリリ！
「な、何ですかこの騒音！　ついにこの世界が終わってしまうんで

すか！」

「ばかもの、それはラッパだ。この音はどう考えても違うだろうが」

「あ、この世界ではそうなんですか。だったら、この音はなんなんですか？」

この世界もなにも、世界はここ一つしかないではないか。とはいえ、

「……久しぶりだな」私は窓の外を見た。

「かいちょーさん？」

「さて、出かけるぞ。あの音を止めなければ、ご近所の皆さんに迷惑が掛かるからな」

「はあ」マナは6枚目のパンを名残惜しそうに見つめながら、席を立った。

耳を切り裂くような騒音が、会長の屋敷の隣にある一軒家から響いてくる。その家は決して小さいわけではないのだが、私の屋敷と比べるとまるで大人と子供のようだ。

私はその家に寄り、困った表情で2階の窓を見ている女性に挨拶する。

「あら、いーくん、お久しぶりね」女性は耳を手でふさぎながら微笑んだ。

「ご無沙汰しております」いーくんはやめて頂きたい。

「お願い……できるかしら？　あの子、自分の部屋の扉に鍵を掛けてて……」

「わかりました」

制服の袖が、くいくいっと引かれた。

「かいちょーさん、この音は何ですか？」マナは耳を押さえ、苦しそうにしていた。

「――あら、どなた？」

「マナです。一七さいです！」

「あらー元気ねー大きいわねー」女性は、マナの頭を撫で撫でした。

一七歳に対する反応ではないことは明らかだった。マナはこそばゆそうな表情になって撫でられていた。

私は致命的な質問が飛ぶ前に、先手を打つ。

「いろいろあって、我が娘です」

「あらー大変ねー」この人は、細かいことは気にしないのだ。

「今は世間話をしている場合ではありません。早速、止めてまいりましょう」

「梯子が居るかしら？」

彼女の部屋、つまり騒ぎの元凶はこの家の2階にある。

「いえ、大丈夫です。――長谷川」私は走る。目の前には、いつの間にか長谷川が両手を組んで、構えている。私は組まれた手に足をかけ、長谷川は腕を引き上げる。同時に私は踏み込む。

2階の窓へと、私は跳び上がった。いつも通りに窓から侵入する。目に飛び込んできたのは、実に少女らしい趣味の部屋だ。ぬいぐるみやファンシーな小物が所々に飾ってある。隅にはアコースティックギター。

異質なのは、至る所に、足の踏み場もない程に――目覚まし時計が敷き詰められていることだ。部屋の中には無数の時計が奏でるオーケストラが響き渡る。私は無駄のない動作で、次々と目覚ましを止めてゆく。

全てを止めた後、ベットへと歩み寄る。

「かいちょーさんっ！」マナが窓から侵入してきた。

「ほう、なかなかの行動力だな」

ずり落ちそうになり慌てるマナに、私は手を貸し引き上げた。

「わっ、なんですかこれ！」マナは眼前の光景に驚いていた。まあ、当然と言える。

「少し待て、眠り姫を起こさないといかんのでな」私はベッドの上ですやすやと眠る少女へと近寄る。かわいらしいピンクのパジャマを着ている。高校2年生にしては、少々少女趣味が過ぎるが。幸せそうな寝顔。あの騒音でも目覚めないとは。黒髪のショートカット

には寝癖が付き、所々跳ねている。私は彼女の前髪をかき上げ、顔を近づける。
「――駄目えっ！」マナははらはらしている様子。
「……何が？」
「きっすは駄目ですっ！　きっすは！」
「は？　なんのことだ？」
「なんのことって、お姫様の目を覚ますのは、王子様のキスでしょ！」
あまりの荒唐無稽さに、私は笑ってしまう。
「ばか。見ていろ」
私は眠る少女に向き直り、額に――頭突きを加えた。
「……ふぁ？」少女は目覚める。
「私の尊い脳細胞の犠牲をもって、ようやく目覚めたようだな――藤堂副会長？」
少女――藤堂春香の瞳がゆっくりと開き、そして、開ききった。
「性格に似合わず、可愛いパジャマを着ているではないか」
顔がみるみる煮立ち、震え始め、
「――いやあああああああああああああああああっ！」
鋭いアッパーカットが、私の顎から脳天までを貫いた。

「何も殴ることは無いのではないか？」私は顎をさすりながら登校する。
「うるさいなあ。元はと言えばいーくんが悪いんだよ」
「何がだ？　私はお前を起こしてやっただけだ。感謝こそすれ、殴られる覚えはない」
「私の部屋に入ったじゃないっ！」
「何を言っている、小学校の頃などほぼ毎日――」
「あーあー！　子供の頃とは訳が違うの！」藤堂は恥ずかしそうに耳をふさぎ、頭をぶんぶん振った。
「何を言っている、今でも子供ではないか」

私の視線に気づいた藤堂は、わなわなと震え、
「どうした？　具合でも悪いのか、ああ、もしかして月の――」
「どこ見て言ってるの！」
藤堂の平手が私の顔面にめり込むがごとく激突し、私は回転しながら宙を舞った。
「……はっ、ごめんなさいっ！」
自分のしでかしたことに気づいた藤堂は、おろおろと慌てる。
「だ、大丈夫ですか！　かいちょーさん！」
「大丈夫だ。受け身はしっかり取っている」
「そ、そういう問題ですか……」マナは明らかに戸惑っていた。
「――その子……誰？」藤堂は恐る恐るといった様子でたずねた。
「これか？」私は金髪ばいんばいんを指さした。
「ついに『これ』呼ばわりですか！」
「これは――私の娘だ。正確に言えば、私の養女だ」
藤堂の蹴りが飛んでくる。私は体を反らして手のひらで受け止めた。
「蹴られるいわれは無いと思うが？」
見れば藤堂は顔を真っ赤にして眉をつり上げている。
「見損なったよ！　噂には聞いていたけど……まさか本当に娘がいたなんてっ！　しかも……『私の……ようじょ』！」藤堂は間髪入れずに私に向かって拳を放つ。
私が避けると、そのまま壁に向かい――コンクリートの壁が、歪んだ。いや、気のせいだ。錯覚だ。そうに違いない。人間業では無い。背筋にひやりとするものを感じる。
「待て」死ぬ。藤堂は理性のリミッターを外している。「何か誤解している！」
友人の即興物語により、私は国を失った可哀想な孤児を養女に迎えたことになっているはずだ。
「誤解も何も無いよ」私は藤堂の後ろに不動明王がいるような錯覚を覚えた。「聞いたの。私利私欲のために傍らに『ようじょ』を侍

らせて、ふ、ふ、不埒なことをっ！」
「『ようじょ』違いだっ！　誰に聞いたっ！」まさかの展開。反逆のようじょ！
「京香に決まってるでしょっ！」
――霧島京香！　あの魔女め、まさか親友を使ってまで私を貶めるつもりか！
「いーくんがまさか、そんなことするなんて、私……責任取らなきゃ……」藤堂は思い詰めたように拳を握りしめる。
「待て！　お前は誤解をしている。話せば分かるっ！」
藤堂は跳び上がり、大きく拳を振り上げる。
なんだ、何か既視感があるような気がするのは何故だ？
避けようと思えば避けれた。だが、藤堂の瞳が潤んでいることに気づいてしまった。
私の体は一瞬硬直してしまった。まずい、避けられない――。
骨と骨がぶつかるような、鈍い音が鳴った。
「かいちょーさんはそんな人じゃありませんっ！」
藤堂の拳を、マナが杖で防いでいた。あの一撃をとどめるとは、何という耐久力か。
「なによっ！　あなたこの破廉恥男を庇うのっ！」
破廉恥男とは心外な。これでも立派な生徒会長だ。
「かいちょーさんは、わたしが守りますっ！」
「何が守るよっ！　あなたそんな男に囲われて、辛くないの！」
「かいちょーさんはやさしいです！　暖かい寝床とおいしいご飯をくれました！」
「ね、寝床！」話がまるで噛み合っていない。むしろ、捻れて悪化しているようにも思われる。このままではまずい。止めなければ！
「おい、貴君ら、これは誤解――」
「いーくんは黙ってて！」「かいちょーさんは黙っててください！」
あろうことが気圧されてしまった。にらみ合う二人。私は血潮が

舞うのを覚悟した。
「――なにやってるの？」涼やかな笑顔。
「友人！」助けてくれ、とは言えない。
「二人とも、ちょっと聞いて」友人は、私の視線だけで、事態に気づいたようだ。
友人は、昨日ギャラリーの面前で語ったことを、さらに脚色して語った。
それは、えげつない程に悲劇的な物語だった。

「ううっ……ひどいねっ……辛かったんだねっ」
「ううっ……わたしって……辛い人生を送ってきたんですねっ」
二人の涙腺は崩壊し、いつの間にやら抱き合っている。片や反応が少しおかしいアホの子がいるが、うまく収まったので気にしない。
「マナちゃん、私のことお姉さんだと思って良いからね」
涙でぐしょぐしょのまま微笑み会う二人を見て、私は少しだけ暖かいものを感じた。
「さすがは友人だ」
「よかったね。でも、早くしないと遅刻しちゃうよ」友人は時計を見せた。
「うむ。そうだな、ほらそこ！　マナの鼻をかんでないで、行くぞ！」
私達は学校へと急いだ。遅刻の危機。未来の王たる私にあるまじき事態！　どうしてこうなったのか、私は忘れていなかった。マナを職員室に向かわせ、そして、
「霧島書記長！」教室のドアを開けての第一声。私は魔女の名を怒鳴り上げた。
「あら会長くん。今日は遅かったのね。てっきりその辺でのたれ死んでいるかと思ったわ」聴くものに甘美な誘惑と、ぞっとするような冷徹さを感じさせる声。
「白々しい真似をっ！」私はこれしきのことで動じる男ではない。

「何のことかしら？　もしかして、私の肌のことをいっているの？　嫌らしい男ね」

霧島京香はこう見えて、私の地位を虎視眈々と狙う、ウサギの皮を被った虎である。

彼女の祖父は、一代で財閥を築き上げた霧島グループの会長だ。霧島家の令嬢としてその影響を存分に受け、帝王学を学んで育ったらしい。入学初日から、彼女とはこの学園の覇権を賭けて、表に裏にと竜虎相打ってきた。かろうじて私が勝ち、現在の地位――生徒会長の地位を獲得した。しかし彼女はあきらめておらず、今でも私の失脚を狙って暗躍している。今回もおそらく、その作戦の一環というわけだ。

「京香どういうこと？　話が違うじゃない」藤堂が私の前に立ち、霧島に詰め寄る。

「ごめんなさい。どうやら誤解があったみたいね」

「あ、そうなの？　誤解だったんだ」

藤堂は理由を聞くこともなく、納得してしまった。ふざけるな。

藤堂春香は根が単純だ。理由は明らか。あの親にして、この子あり。人の良い親に育てられたせいか、気の置けない友達に対して疑うことを知らない。

「貴様ら、本当に親友なのか？」

「当たり前よ」「当たり前じゃない」

「親友だからこそ、こうしてすぐに誤解を解くことができるのよ」

「そうだよ。京香と私の仲にかかれば、こんな誤解、すぐに解消できるんだよ」

「春香……うれしい」そう言って、霧島は藤堂の背中に手を回し、

「きょ、京香？」恥ずかしがる藤堂と密着する。藤堂は霧島よりも頭1個分背が高い。そのため、霧島が抱きつくと、その頭はちょうど、藤堂の胸の辺りに来る。

「あ、あの……きょ、京香……さん……は、恥ずかしいんですけど」

藤堂春香は昔から赤面症である。そのためがちがちに硬直し、ゆで

だこのように茹だっている。
「いいじゃない、親友なんだし。春香……良い匂いがする」霧島は藤堂の胸に頬を当て、目をつぶって深呼吸する。
「仲が良いのはわかったから、それ以上くっつかないで貰えないか」
霧島京香があえて抱きついていることに、私は気づいていた。教室を見回す。教室中の生徒が二人を眺め、赤面している。だが、最も激しく湯気を出しているのは、抱きつかれている藤堂だった。
「妬いてるの？」霧島は私を挑発する。
「なぜ私が？　校内の風紀を乱す行為は、謹んで貰いたい」
「きょ、京香、そうだよ。みんな見てるから……」恥ずかしさでくらくらしている。
「いいじゃない、みんな私達の仲がどれ程のものか、よく分かったでしょ？」
「そ、それはそうだけど……」藤堂は赤面したまま戸惑っている。
霧島京香は、こういうことを平気でやる女だ。
「その傍若無人な自信がどこから来るのか、教えて貰いたいものだな」
「あら、あなたには負けるわ。ね、春香？」
「えっ、う、うん……そうかも」
藤堂春香は疑うことを知らない人種なので、無条件に霧島の行動を受け入れてしまう。外見も性格も正反対の二人が、これほど仲が良いのは意外に思う。
もし霧島が藤堂を利用しているのなら、私が全力を賭けて霧島を潰すところだ。だが、今のところそのような気配はない。
霧島は藤堂の胸に頬をピタリと寄せながら、私を指さす。
「あなたに私達のことを言う資格はないわ。あなたとあなたの娘の仲だって怪しいと思うけど」予想通り、霧島京香の中の虎が、牙を剥いた。
「きょ、京香、怪しいだなんてそんな……」
「そこらの平凡な人間にはわからんさ」

「平凡？　誰のことを言ってるわけ？」霧島の眼が、鋭く光る。
「さて、誰のことやら。心当たりがあるのではないか？」
「あなた、本当に潰すわよ」
「できるものなら」
私と霧島の間に、見えない火花が散る。その間で、藤堂があたふたしていた。
「――きょ、京香！　いーくんも何言ってるの！　京香、女の子がそんな物騒な言葉使っちゃ駄目だよ。いーくんも京香の挑発に乗らない！」
「……ごめんなさい。どうかしてたわ」
霧島は藤堂の忠告を素直に聞くが、私はそれほど従順ではない。
「……挑発になど乗っていない」
「あなた、春香の忠告を無視する気？」霧島はむきになったように私に突っかかる。
「いい加減にして！　ケンカはやめて！　二人とも私の大切な友達なんだからっ！」
藤堂の悲鳴のような声が、教室中に響き渡った。霧島と私は思わず藤堂を見つめる。教室中に静寂が流れた。今や、教室中の生徒が藤堂一人に注目している。
藤堂は、みるみる顔を真っ赤にして、
「あ、あの……私、その」口をぱくぱくしている。
まあ、いつも通りだ。その時、朝のホームルームの時間を告げるチャイムが鳴った。担任が教室へと入ってきて、席に着くように促す。その後に続いて入ってきた人物に気づくと、教室中からざわめきが聞こえ出した。
そうだ。こんな茶番を演じている場合では無かった。流れるような金髪。不思議な色の瞳。小柄な体格。その体格に似合わず、豊満なばいんばいん。
まるで油の切れたブリキの機械人形のようなぎこちない動作で、マナが教壇の横へと歩いてくる。その表情は真剣そのもので、見て

いる方がハラハラする。と、
マナのつま先が床に引っかかり、マナはばたんと顔から転倒してしまった。大丈夫かと心配する担任に対して、無言涙目で立ち上がる。転んだ時に打ったらしい額は赤くなっていた。動揺する生徒達を後目に、マナは意地でも泣くまいとしているのか、涙を堪えるような表情で、教壇の横まで辿り着く。
さあ、後は私が教えたとおりに挨拶を――
「いと――がちっ」あろうことか、マナは二文字目で舌を噛んでしまった。口を抱えてうずくまり、ぷるぷる震えている。
これはまずい。一度仕切り直すべく、私が席から立ち上がろうとした瞬間、
「マナちゃん、がんばって」藤堂がマナに励ましの声を掛けた。
それを機に「なんかよくわからんが、がんばれー」などと、教室から励ましの声が次々とかかる。ありえない。皆、見守るような暖かい視線で彼女を受け入れている。
なぜだ？　友人の物語が影響しているのだろうか？
ともかく、計らずとも最高のシチュエーションとなった。
マナは相変わらずの涙目のまま、痛みを堪えるかのようにゆっくりと立ち上がる。腕で眼をごしごしと擦り、目頭に光る涙を拭く。
そして歓声に応えるかのように、にこりと満面の笑みを浮かべた。
瞬間、教室中が明るくなったように、錯覚した。
「伊統マナですっ！　みなさん、なかよくしてください。よろしくおねがいします！」
マナは元気いっぱいに、ぺこりとおじぎした。教室中から拍手が鳴り響く。これが計算ではないとしたら、大したもの。我が娘としては上出来だ。
どう見ても小学生の自己紹介にしか見えない点に目をつむれば、だが。
マナが私を見て小首をかしげ、輝くように微笑んだ。

私は伊統マナ自立計画を始動させた。
休み時間。マナはクラスの生徒から質問攻めに遭っている。皆が興味を示している証拠だ。
輪の中心には霧島と藤堂がいる。霧島は美貌と才覚で学年の羨望の的だ。藤堂は率直な性格とスラリとしたモデルのような長身で、意外と男女問わずに人気が高い。
さらに藤堂は友人の話の影響で、過保護すぎるくらいマナに友好的だ。
二人の友人となることで、マナの価値も相対的に上がる。普通は二人の影に埋もれてしまう結果となるが、マナには二人に引けを取らないポテンシャルがある。
金髪、不思議な瞳、小柄なくせにばいんばいん。ビジュアル的にも申し分ない。
そしておそらく――生来の人なつっこさ。
クラスメイトの質問に対し、マナは嫌がることなく笑顔で答える。
「マナちゃんは、どうして日本に来たの？」
「お母さんを探しに来ました」マナは髪飾りを触りながら答える。
「日本語上手ね。どこで習ったの？」
「ありがとうございます。小さい頃にお母さんが教えてくれて、あとは独学です」
「独学で！　すごいねー！」
マナの受け答えは完璧だ。
なぜなら、私が指示しているからだ。
マナの制服のボタンには、マイクが仕込んである。こめかみ近くにつけたウサギ型の髪飾りには、骨伝導で私の声を届ける仕組みがある。
返答に困った時、マナは髪飾りを指で押さえる。そのとき、友人監修『伊統マナの生い立ち』を全て暗記した私が、マナに指示するだけでよい。
本当は全てマナに暗記させる予定だったが、あろうことか頭から

湯気を出して倒れた。
私は携帯で忙しそうに電話する振りをして、マナに指示を送っているのだ。
友人は私の隣で、にこにことマナを見ている。次の物語の参考にするために、マナを観察しているのかも知れない。
「――何してるの？」突然声を掛けられ、私は振り向く。
さっきまであの輪の中心にいたはずの霧島京香が、後ろに立っていた。
不敵な笑みを浮かべた霧島は、髪をかき上げる。黒髪ストレートが、さらりと流れた。
「なんでもない」私はそっけなく言った。その言葉を受けたマナが、
「なんでもありません」
おいっ、ばかもの。今の私の言葉を指示と勘違いするとは。
一瞬、教室の空気が固まる。
「……やっぱりすごいなー」藤堂春香が微笑んだ。
どっと場が和んだ。正直、危なかった。私は通話を切る。
「なるほどね」霧島が勝ち誇ったかのような笑みをこちらに向けた。
「何がなるほどだ」
「ロボット」霧島は、冷笑を浮かべた。
まずいことになった。これがばれたら私はともかく、マナが……。
マナを見る。藤堂と楽しく談笑している。まさか霧島は、藤堂をマナに取られるまえに、私ごとマナを追い詰めるつもりなのか。もし、そうだとしたら――。
霧島はサディスティックな微笑を浮かべ、口を、開く。
「あなたが何のためにそんなことをするのか、私にはわからないけど……あの子は良い子ね。たぶん、純粋なんだと思う」意外なことに、霧島は攻めてこなかった。
霧島は、形の良い眉をつり上げ、鋭い視線で射貫くように私を見つめた。
「だからこそ、あなたのやり方がよく分からない。あの子をもっと

信じてあげなさい。こんなやり方、間違ってるわ」
「……お前に何がわかる」
「わかるわ。私はこれでも人を見る眼はあるもの」
霧島は知らないのだ。マナを放っておくと、どんな災いが引き起こされるか。シルクの寝間着で校内暴走事件。あんな破廉恥をもう二度と引き起こしてはならない。
それにマナは自分の事を「魔法使い」などと口走る奴だ。こういう勘違い娘こそ監視し、迫害されぬように対処し、立派に現実を受け入れるまで見守らなくてはならない。
「私には私の考えがある。お前には関係ない」
「そう。でも、あの子を『平気で嘘をつく人間』にさせないように、気をつけた方が良いわよ」
「どういう意味だ」
「平気で嘘をつく人間は、やがて『本当』がわからなくなる……あとは自分で考えなさい。あなたの『娘』なのでしょう？」
「ふん」私は霧島から視線をそらし、何気なくマナの方を見る。
「ねえ、マナちゃんは将来何になりたいの？」
「――魔法少女です！」マナはニコニコしながら言った。
ギャラリーが、しんとなった。しまった。最悪のパターンだ。今は通話を切っている。ここからどのように挽回しろというのか、「友人、何か案は――」
「か、か、か、かわいいっっ！」悲鳴のような藤堂の嬌声が教室中に響き渡った。
「は？」思いがけない展開に、私の思考は停止する。
「かわいいなあ、かわいいにゃあ」藤堂は突然マナを抱きしめ、頭を撫で始めた。
「わ、わあっ！　春香ちゃん、何するんですか」
「かわいいにゃあ、かわいいにゃあ」藤堂はデレデレの笑みと猫なで声で、ひたすらなでなでしている。……あれは、何だ？
「まあ、春香ったら。可愛いものには目が無いんだから。あら？」

霧島は私を見て微笑む。
「流石のあなたも、今回は動揺しているようね」
私は否定できなかった。ようやくひねり出した言葉が、
「……単純、だな」であった。
「単純ね。そこが春香の良い所よ」
「いちいち藤堂を褒めるな。そんなにあいつが好きか？」
「ええ、褒めると照れる所なんか特に。ねえ、人と長く気持ちよく付き合う秘訣って知ってる？」
「……褒めることか？」
「あら意外。わかってるじゃない」
「話の流れから推測したまでだ。私自身はそうは思わない。やはり、必要なのは適切なアメとムチだ」
霧島は私の話を聞いてか聞かずか、マナの方を見て驚いたように目を見開く。見ると、藤堂が力一杯マナを抱きしめすぎたため、マナの顔が青ざめ、泡を吹いていた。
「あら、大変」
「――マナ！」私は急いで駆け出し、藤堂の腕を外そうとするが、藤堂は眼をきらきらと輝かせ、トランス状態で話を聞こうとしない上に、びくともしない。
「霧島書記長、冷静に見ていないで助けろ！　こいつの馬鹿力は元はと言えばお前のせいだろう！」
藤堂は元々普通すぎる子だったが、霧島書記長が『なにげなく』護衛術として『霧島流暗殺術』を教えてから、馬鹿力の暴力少女に変わってしまった経緯をもつ。
「あら、あなたがこんなに動揺するなんて」霧島は含み笑いをした。
「動揺などしていない！」
「やっぱり、可愛いものは正義よね」
霧島は自慢の黒髪をさらりとかき上げ、悠然とこちらに向かって歩き出した。

「学校はどうだ？」放課後。教室に残り、私はマナのヒアリングを行う。
「はいっ！　楽しいです！　みんなとってもいい人ばかりです。でも……」マナの表情が暗く沈んだようになる。「……嘘をつくのは、つらいです」
彼女の表情は、本当に辛そうで、私は、
「自分で魔法使いとか言っている奴が何を言うかっ」マナの頭をぐりぐりした。
「いたたたっ、いたい、いたいですっ。魔法使いは本当なんですっ！」
「まだ言うか、ほらを吹くのはこの口かっ」私はマナのほっぺをつまんでのばす。
「ほんほーへふほっ（本当ですよっ）！」
おっと、こんなことをしている場合では無い。夕日が沈みかけている。
「マナ、今日はお前に、軽い学力テストを――」
《――にゃおーーん》子供がネコの鳴き真似をするような声が、教室に響き渡った。
それを合図に、マナが勢いよく椅子から立ち上がった。
「来ますっ！」マナの手にはいつの間にか、白いステッキのような棒が握られていた。
「何がだ？」
「『暗殺者さん』ですっ！」マナはきょろきょろと辺りを見回す。しかし異常は無い。
しばらくして、教室の扉がゆっくりと、少しだけ開かれた。隙間から、よく分からないものが覗いている。あれは……お面だろうか。デフォルメされた白ネコのお面を被った頭がこちらをじっと見ている。
「あ、あの……」扉ががらりと音を立てて開かれた。
夕焼けに染まるオレンジ色の廊下を背景に、人影が、姿を現わし

た。まるで夕焼けに伸びた影が、そのまま立体化したような黒ずくめ。バイクスーツのような意匠の服を纏い、その首元には、白く長いマフラーが巻かれている。

あれはまるで、昨日の朝見た変身ヒーローの衣装だ。

「かいちょーさんは、ころさせませんよっ！」

とあああっ！　とたとたとマナが白ネコに向かって走っていく。ばいんばいんがばいんばいん揺れる。白ネコが黒い両腕を伸ばし、手のひらをこちらに向ける。

とりゃあああっ！　マナが白いステッキを振り上げ、威勢良く白ネコに猛進してゆく。白ネコは両腕をわたわたと振る。来るな来るなというジェスチャーに見えるが……。

「――あっ！」マナが躓いた。倒れ込むように、白ネコにタックルし、覆い被さる。「ああっ、ごめんなさいっ……じゃなかった。かくごおおおっ！」

マナは白ネコの上に跨がり、もみくちゃにする。ステッキは既に意味をなしていない。マナ本人は真剣なのだが、端から見るとじゃれているように見える。まるで戦っているようには見えない。

ばいんばいんが白ネコを押しつぶす。いろんな意味ですごい光景である。

「や、やりましたっ！」ぐっしょりと汗をかいたマナが、こちらに向けてガッツポーズ。その下で、白ネコのお面を被った黒ずくめが、ぐったりとしていた。

「どうしますかっ」マナがきらきらと瞳を輝かせて聞くので、

「とりあえず――拷問だろうな」と私は答えた。

白ネコがじたばたと抵抗するが、マナ（ばいんばいん）に抑えられ身動きが取れない。不幸なのか幸福なのか、私には判断できない。とりあえず私はロープを使い、縛り上げ、逆さに吊るし上げた。あらゆる刺客に狙われる身として、ロープは鞄に常備してある。

「これが暗殺者？」私は逆さになった白ネコお面を指さす。

「はいっ！　かいちょーさんを狙う、悪い人です」

「……そうなのか？　おい、なぜ私を狙う」
逆さにつるされている白ネコは観念したのか、先程から一言も発しない。
「黙秘というわけか、まあいい。とりあえず……剥くか」
「むく？」マナが小首をかしげる。
白ネコがじたばたと暴れる。ロープがゆさゆさと揺れる。
「長谷川、もしかして、いるか？」
「はい」長谷川は、当然のように私の隣に出現した。女子の制服を着ている。
「剥いてくれ」
「かしこまりました」
にこにこ笑顔の長谷川が片手を振り上げると、一瞬にして白ネコのバイクスーツがひん剥かれた。これぞ、超・執事長谷川の『瞬間お着替え術』を利用した、超速ひん剥き（八つ裂きバージョン）である。
子供の頃は、着替えの時によく世話になったものだ、と私は思い出に浸る。
バイクスーツがバラバラになり、カラスの羽根ように舞った瞬間――私はとんでもない光景を目の当たりにした。
逆さに吊るされたシルエットは、やわらかそうでしなやかな曲線を描いている。夕日に照らされてオレンジ色に輝く体に二つの眩しい光。
一つは上方、どう見ても女性もののパンツ。色は眩しい純白。
もう一つは下方、どう見ても女性ものの――純白の――ブラ。
その柄に、私は目を見張る。額に角を付けた馬が描かれている。
これは――ユニコーン！　こんな事があるのかっ！　天啓を感じずにはいられない！
白ネコお面の裏からはらりと地面に垂らされたのは、黒真珠のようになめらかな光沢を放つ長髪ストレート。
「か、かいちょーさん、これって……」

「ああ……これは」私は恐る恐る白ネコに近づき、そのお面に手を掛け――取った。

お面を取った瞬間、私はさらに驚嘆した。

逆さまになっていても一目でわかる美しい顔立ち。形の良い目鼻。大きな黒い瞳からはらりと一筋、涙が地面に向かってこぼれ落ちる。頬は恥ずかしそうに桃色に染まり、怯えているのかぷるぷると小刻みに震えている。何という美しき少女であろうか。逆さに吊るされていてもなお、美しかった。

私はすぐさまロープを外し、少女を解放した。

地面に付いた途端、少女は足を体育座りのようにして半裸の体を隠し、片手で口を押さえて潤んだ瞳で上目遣い。体は小刻みに震える。まるで怯える小動物そのものである。

これぞ日本の女性が持つ、美しい恥じらい方である。そのしぐさ一つ一つに、私は感動すら覚えていた。

「まずは非礼を詫びよう。あなたのように美しく恥じらいのある貴女が、暗殺者であるはずがない。何かの誤解だろう。申し訳ない」

私が彼女に近づこうとした瞬間、

「――っ！」少女の体が強張り、瞳から涙がこぼれた。

私は後ずさる。まさか、これほどまでに彼女を傷つけてしまうことになるとは。

こうなった原因である金髪ばいんばいんを見る。

マナはぎょっとして、困った表情でおろおろし始めた。そして、何かを思いついたのか、ぱっと表情を明るくし、

「こんなこともあろうかと！」マナは、ばいんばいんの間から何かを取り出した。

それは、ガラスの小瓶のようだった。

「なんだそれは、まさか、酒か！」

「違います。化粧品です。長谷川さんに買って貰いました。――しかしっ！」

私が制止する前に、マナはその口に小瓶の中身を放り込んだ。とたんに、マナの顔が赤くなり、へにょりとなる。あはははと笑う。これは、どういうことだ！

「聞いて驚いてください！　化粧品にはアルコールが含まれているものもあるのです！」

「おい待て、ということは――」

「これで魔法使い放題ですあははは。半裸のしょーじょさんに、服を差し上げます！　――こーていねーと！」

マナが杖を振ると、どこからかカーテンの付いた試着室のような物体が現われた。と言うより、マナが引っ張ってきた。

マナは笑いながら、そこに少女を強引に連れ込んでゆく。中から声が聞こえる。

どれがいーですかねー？　あ、これなんかどうです？　かわいいですよっ！　あ、これもいいなあ。　しょーじょさん、からだがきゃしゃですから、何でも入りそうです！　わあ、おはだすべすべですよ。どーしたらこーなるんですか？　いいなあー……。

それから数分。カーテンが開かれた。

「……なぜ、その服なんだ？」

「かわいいからですっ！」酔っ払いはVサインをこちらに向けた。

少女はピンクを基調とした、フリフリで、ピッタリしていて、なぜかへそやわきが露出しているような、見ているだけで恥ずかしい服を着させられていた。

「これぞ、正統派魔法少女の服ですよ！」鼻息荒く、酔っ払ったマナは断言した。

その横で、少女は恥ずかしそうにフリフリの付いたミニスカートを一生懸命伸ばしている。あれぞ、日本の恥じらい。すばらしいが、こうしてはいられない。

「――却下だ」

「ほえ？」酔っ払いマナは薄く染まった頬に手を添え、首をかしげる。

「恥ずかしがっているだろうがっ！　――着物にしろ！」
私は正式な文書（絶滅危惧種保護団体、その他人権団体などへの配慮など）を瞬時に書き上げ抗議した。普段からテンプレートを用意しておいたかいがあった。何事にも、備えあれば憂いなしだ。
「かいちょーさんは、いちいちやることが回りくどいですね」
「なんだと？」
「よくぼーまるだしじゃないですかー」頬を膨らまし、ぶーぶー言った。
「何か？」私はマナを、それはもう、やさしく見つめる。手にはロープ。
「――ひっ！　わかりました、やりますっ！　つるさないでっ！」
酔っ払いマナはもじもじしていた少女を試着室に連れ込み、数分。
「着物の着付け、わかりませんっ！」マナが涙目で訴えた。なら初めからやるな。
「長谷川、できるか」
「かしこまりましてございます」さすがは長谷川。着付けまでこなすとは、どこまで万能なのか。そして、お前は本当に人間なのか。

白を基調とした色鮮やかな着物に身を包んだ、絶世の日本美少女が目の前にいる。
しなやかな物腰が、着物と実に合っている。頬はほんのりと朱に染まっているが、恥ずかしいというよりは、うれしいといった表情である。
「わふーもにあいますねー。美人はおとくです」
「良くやったぞ、酔っ払い」とりあえず、軽蔑を込めてこう呼ぶことにした。
「あのう、わたしはマナってなまえが……うっ……」
マナの表情が、みるみる青白くなって行く。これは……まさか――
「うぼぇー」マナは口から『れいんぼう』を出した。実に二日ぶりである。

地面に付く前に、私は反射的に受け取ってしまう。もちろん素手で。

「貴様そこで待っていろ！　今日という今日は説教だ！　おまえに飲酒の恐ろしさというものをたたき込んでやるからそこで待っていろ良いから待っていろ絶対に安静にしていろよ！　――長谷川、マナを看病してやれ！」

「かしこまりました」長谷川は微笑を返した。

「ういー」青白い顔で、マナは答えた。

私は『れいんぼう』を持ったまま急いでトイレに行き、流し、急いで戻ってきた。

「貴様、今日という今日は許さん！」私は力を込めてマナの頭をぐりぐりした。

「いたいいたいですっ、あたまわれるあたまわれるっ！　たいばつー！　たいばつー！」

「そんな言葉どこで覚えたこれは体罰ではないっ！　愛の鞭だっ！」

「愛ならやさしくしてくださいだだだっ！」

「優しさだけが愛ではないっ！」

「……くすっ」

私はつい、手を止めてしまった。

少女が、笑ったからだ。どこか儚げで、美しい笑顔だ。私は見とれてしまった。

少女は私の視線に気づいたのか、慌てて目をそらす。また、私を控えめに見る。

「あ、あの……」喋った。このまま消え去ってしまいそうな、か細い声だった。

「こちらの美人さんはマリナちゃんですっ！」マナが横から入り込み、紹介した。

「何故お前が知っている」

「説明しましょう！」

マリナちゃんはとある変身ヒーロー（未来でリバイバル放映）が

好き。
　わたしも昨日観て大好きになりました。
　そして、かいちょーさんがトイレで手を洗っている間に、意気投合したのですっ！
「というわけで、ささ、どうぞ」マナは、マリナと呼ばれた少女を促す。
「うむ。見事な三言説明であった」
　だが、うら若き女子トークの内容が、変身ヒーローだというのはいかがなものか。第一、守るべき対象そっちのけで、排除すべき暗殺者と仲良くなるとはどういう了見だ。
　私がマナを睨んでいると、その横から鈴のような声が発せられる。
「あ、その……わ、わたくし……ターミネーターの――」
　たーみねーたー？　未来からやってくる、むきむきマッチョのあれだろうか。
「ほら！　たーぼもーたー！　たーぼもーたー！」酔っ払いマナは、マリナを指さした。無礼な奴だ。これだから酔っ払いはいかん。
　しかし、『たーぼもーたー』とはそういう意味だったのか。とりあえず、私はうるさいマナの口をふさぐ。
「むー……むーっ！」
　少女は、ひざまずき、正座をした。何かを覚悟したように、下から真っ直ぐに私を見据える。両手を揃えて三つ指を床につき、言う。
「――リーダーの、『水鏡マリナ』と申します」
「なっ……！」「ええーーーーっ！」
　あまりの衝撃に、私は返す言葉を無くした。

第五話　隙間ターミネーターの指導者

自称ターミネーターのリーダー『水鏡マリナ』と名乗る少女は、話を続ける。

「先程は失礼いたしました。あまりの恐怖に声が出なくなってしまったもので……」

「いや、その……」謝るのはこちらのほうなのだが……。

私は『生涯、謝らない』と誓いを立てている。昔、『ある男』が誠心誠意の謝罪をした。社会は非情だ。容赦なく男を糾弾し、その存在を葬り去った。

私は『あの男』のようにはなりたくない。

故に、謝らない。己の不作法をごまかすように咳払いをし、訊ねる。

「それで、その、ターミネーターとやらが、何用か」

「先ずは、こちらをどうぞ」マリナは廊下から包みを持ってきて、開いた。

現われたのは、漆塗りのような光沢を放つ、黒い重箱である。

マリナが蓋を開けると、現われたのはおせち料理でも、黄金色のお菓子でもない。

それは、どう見てもチョコチップクッキーであった。しかも一般的なものより大きい。大判の草加せんべいくらいの大きさはある。

私はじっくりと見て、訊ねる。

「……これは？」

「お近づきのしるしに。丹精込めて焼き上げました。どうぞご賞味ください」

マリナはふわりと笑った。えくぼが素敵であった。

とはいえ困った。いきなり敵だと思っていた相手から食べ物を渡されて、はいそうですかと食べるバカはいない。第一――

「あ、いただきます」マナはクッキーらしき物体を口に放り込んで、

もしゃもしゃ咀嚼する。あの大きさを一口だ。頬いっぱいに膨らんでいる。ハムスターかお前は。

——毒が入っている可能性も大いにある。ってこの大バカ！

「なに、ほいほい喰っているのだ！　今すぐはき出せ！　毒が入っていたらどうするっ！」私はマナの両ほっぺをむにゅりとおさえた。

「ふぁひふぉふはふ、ひほひへふ！　ふぁふぃふぁふぁふぁひっふぉふへふへひふふっへふへはふへほ！」

何を言っているのかわからなかったが、マリナを指さしたり、眉をつり上げたりといった様子を見るに「せっかく作ってくれたのに、疑うとは何事か」と言いたいらしい。

マリナを観ると、瞳を潤ませ、傷ついたように顔を伏せてしまった。

「む、いや、そういうつもりでは……」

「ごっくん。きずつけたー傷つけたー」

「仕方が無かろう！　私とて、乙女の手作りクッキーをご相伴あずかるのはやぶさかではないが、まだ出会って間もないし、それにお前が暗殺者だという組織のリーダーだと言うではないかっ！　って、お前食べたのかっ！　くそう、何てことだ！　吐け！　今すぐ吐き出せ！」私はマナの首根っこを掴み、体をぶんぶん揺すった。

「いやですっ！　お友達が作ってくれたものを、吐き出すなんてできませんっ！」

「こいつっ！　いつも簡単に吐き出すくせにっ！」

「ふふん、もう、一回吐いてスッキリした後です。残念でしたー！」

「——会長さま」

声のほうを見やると、長谷川であった。大判クッキーが、ほんの少し欠けている。

「毒味をいたしましたが、そのようなものは入っていないようです」

「……そうか」私はマナを放した。

マナはクッキーを「んっ！」と突き出した。私は観念し、クッキーを噛った。

「……これは」サクサクと歯触りの良い食感に、香ばしさとチョコの香りが見事に融合している。「美味い」

さすがは自称未来からの使者。というよりは、単に彼女自身、お菓子作りが上手なだけだろう。

「そう言っていただけて、うれしいです」マリナは涙を拭って微笑んだ。

「いや……」顔が、熱くなった。

「あ、かいちょーさん照れたーむしゃむしゃ」

マナが無邪気に指摘した。私は聞かなかったことにする。

「それで？　まさか手作りクッキーを振る舞いに来ただけではあるまい」

「はい、実は――」

マリナは、一度ためらうように眼を伏せ、決意したように、真っ直ぐ私を見た。

「――完全管理社会を、あきらめては頂けませんか？」

私の体の内側に、電流が奔ったような衝撃が起こった。

何故、完全管理社会の事を知っている。完全管理社会の構想を知っているのは私だけで、完全管理社会の名を知っているのは友人だけである。

しかも、完全管理社会を……あきらめろだと……？

「――ふざけるなっ！」私は怒鳴った。マナが驚いて、クッキーをぽとりと落とした。

マリナは先程の怯えがどこへ行ったのか、びくともせずに、私を見据えていた。

「第一、なぜ完全管理社会の名を貴女が知っている！」

「それは、わたくしが未来からやって来たからです」平然と、マリナは答えた。

「未来からだと？　どうやって？　タイムマシンでも開発したか？　そんなお伽噺、信じられるか」

「すぐに信じていただけるとは思っていません。ですが、信じてい

ただけるよう、こちらも誠意を尽くすつもりです。先ずは、こちらの話をお聞きいただけませんか」

じっと、試すような視線をマリナは送る。

「聞くだけ無駄だ。そんな夢物語、私は信じない。信じるのはこの眼で見たものだけだ」

「そうなんです。このかいちょーさんは、見たものも信じません。わたしの魔法も全然です。手強いですよ！」マナはふふんと、ばいんばいんを張った。

「なぜ、お前が得意げに話すのだ」

「……えへへ」マナは照れたように笑った。わからない。

「――会長さま」長谷川だった。相変わらず突然現われる。「少し、お話をお聞きになってみるのも、よろしいかと」相変わらずにっこりとしている。

「長谷川、何を――」

（場合によっては、穏便に解決する糸口が見つかるかもしれません）

長谷川はこっそりと耳打ちした。

長谷川が進言するとは、よほどのことである。

「……いいだろう。話だけなら聞こう」ただし、信じる信じないは別だ。

「ありがとうございます」

マリナは真剣な表情を、ほっと崩した。

「わたくし達、ＳＮＳ――空色ノラ猫シンフォニー――は、隙間系タイムマシン『夕焼けにゃんにゃん』によって、３０年後の未来からやって来ました」

「待て、なんだそのふざけた名前のタイムマシンは」

初っぱなから突っ込みどころ満載である。

「え、かわいいと思いますけど……」

マリナはきょとんとし、当然のように返した。

「発明者の『まゆまゆちゃん』の話だと、意味があって名付けられたそうですが……『夕焼け』は、朝と夜の間……つまりは大きな隙

間を象徴していて、『にゃんにゃん』は……えっと……ごめんなさい、今度聞いておきますね」マリナは笑って頭を傾げた。

最も聞きたいところをはぐらかされた訳だが、とにかく、その胡散臭いタイムマシンとやらが、この騒動の元凶らしい。そんなものがあるとは到底信じられないが。

私の内心とは関係なく、マリナは真摯に語った。

『夕焼けにゃんにゃん』は、隙間系タイムマシンと呼ばれており、過去の任意の時間を指定してタイムトラベルするというよりは、過去の偶然繋がった時間を起点に、過去と未来の時間の流れが一時的に同調する様なイメージであるという。

「『夕焼けにゃんにゃん』による時間跳躍を私たちは『タイムバインド』と呼んでいます」

例えるなら、未来で一時間過ぎれば、過去でも一時間過ぎる。過去と未来の時間が平行して流れ、両者を繋ぐゲートが出現するのが朝と夜の間――夕焼けが出来る時間帯だけ。という、何とも奇妙なタイムマシンであるらしい。

「まゆまゆちゃんの話だと、過去と未来が繋がった時点で、ある程度の事象が確定してしまうとか何とか」マリナはわからないなりに、精一杯伝えようとしているらしい。

伝わっていないのが判るとなんとも申し訳なさそうなしぐさをするので、ふざけたタイムマシンについては、これ以上聞くに聞けなかった。

「で、どうしてここへ来たのだ？」その他のことも、聞くだけは聞く。最後まで聞いた後、フィクションとして理論が弱い部分を徹底的に攻めれば幻想も解けるだろう。

「はい、それは――」完全管理社会にあるとマリナは言う。

私は未来で完全管理社会を作り上げ、王として君臨するらしい。

当たり前だ。

完全管理社会において、人々は生まれた時から平等に管理される。その要となる技術が、私が未来で開発する有機的情報網『レインラ

イン』であると言う。
「人々は『レインライン』によって管理され、幸福に暮らしています――表面的には」
「表面的？」私は返す。
「このクッキー、表面がぱりぱりでおいしいですねっ」マナはもぐもぐとクッキーを食べている。４枚目である。
マリナは話を続ける。レインラインによる運営を行なっていくうちに、その管理に異を唱える者達が現われたという。
「つまり、何でもかんでも管理されるのを、窮屈に感じる人間が現われたと言うことか？」しかし、それによる対策ならば、既に考えている。
案の定、マリナは首を横に振った。
「どちらかと言えば、完全管理社会による統治は、良心的なものです」
完全管理社会政府の運営は、以前の腐敗しきった政治に比べれば、格段に安定と反映をもたらしたとマリナは語った。それを実現した仕組みが、
「『レインライン』による統制、『願望実現機関』、そして、『完全匿名性議会』の三本柱です」
「『願望実現』……魔法少女ですねっ！　もぐもぐ」
私は無視する。マリナは苦笑い。
『願望実現機関』なるものは初耳だが、『完全匿名性議会』の響きには、心当たりがある。マリナによれば、というより、私の構想によれば、
完全匿名性議会は国民の中からランダムで選ばれる議員制度だ。議員となった国民は、法に関する知識を付与され、自身の良心と人生と、法にのっとって、徹底的に議論を行なう。ただし、議論の相手の素性はわからず、徒党を組むことも、裏で暗躍することも不可能。完全なる個として、発言を行なう。
さらに発言者の精神状態や思想傾向をモニターし、偏った結論が

出ないように管理する仕組みも考案中だが、その話はマリナの口からは出なかった。

どういった仕組みで実現するか、については未だ『絵に描いた餅』状態であったが、マリナの話を鵜呑みにするのであれば、レインラインが重要な役割を担っているらしい。

マリナの話は、驚く程に、私の思想と一致していた。

私は内心動揺していたが、それを隠し、言う。

「完全なる統制、市民からの不満や、意見もくまなく徴集し、適切なる管理を行なう。非があるとは思えんが？」

「それを、これから――」

「――マリナあああああっ！　どこおおおおおっ！」

マリナの言葉を遮るように、甲高く叫ぶ少女のような声が廊下を通り過ぎていった。

「――あっ、お姉ちゃん」と、まるで幼い子供のように、マリナは言った。

『お姉ちゃん』と言う言葉が、彼女の美しい言葉遣いにおいて、やけに浮いていた。

「マリナ！　そこかあああああっ！」大声が、近づいてくる。

教室の扉が蹴破られ、現われたのは、またもや黒いバイクスーツのような衣装に、今度は赤いマフラー。そして、黒ネコのお面を頭に斜めに掛けた少女だった。

とはいえ、体格は華奢であり、もしかしたら女声の男なのかもしれない。

「マリナ、見つけた！　――って何その格好きゃわいいいっ！」と眼をきらきら。

頬を高揚させてマリナに向かって突進してきた。少女はマリナに跳びかかり、抱きつくと、頬をすりすり匂いをかいでいる。

「ああ……マリナ……お姉ちゃん心配したよう。大丈夫？　ケガはない？」

少女はマリナのおでこと自分のおでこをくっつけ、猫撫で声のよ

うな声色で訊ねる。瞳はうるうるしている。
　黒い嵐のようだと、私は思った。
「お、お姉ちゃん、みんな見てる、恥ずかしいよう」マリナは恥ずかしげに目をそらす。
「姉妹だもん、恥ずかしい事なんてない……みんな？」
　エルレインの視界が、私を捉えた。
「伊統会長！　貴様、良くも『アタシの』マリナにいいっ！」
「待て！　私は何も……」ちょっと逆さに吊るして、半裸にしただけ……いや、言うまい。「……してない」
「なんだその不自然な間はっ！」
「お、お姉ちゃん、大丈夫だよ。わたし、何もされて……」マリナは頬を赤くして顔を背けた。「……ないから」
「何なのその間、その顔は！　何かあった！　絶対に何かあったよねっ！」
「何も無い、何も無いぞ。それよりマリナ、『お姉ちゃん』と言うことは、まさか……」
　私は、エルレインを見た。
「――言っておくがアタシは女だっ！」何も言っていないにもかかわらず、エルレインは私をビシイッと指さし、眉をつり上げ言った。
「そーですよ。エルレインちゃんは女の子です。この前言ってました。もぐもぐ」
　エルレインとマリナは、はっとしてマナを見る。
「なんで……記憶が……」エルレインが呆けたような顔で、呟いた。
「そうではない。姉妹というのはいったい――」
　私の疑問を察したマリナが答える。
「あ、ご紹介します。こちらは火野坂エルレイン。わたくしのお姉ちゃんです」
「こ、こらっマリナ、敵になに紹介してるの」エルレインは見るからに動揺していた。
「火野坂？　マリナ、君は『水鏡』姓だったと思うが……」

「だから呼び捨てにするなって――」
「わたくし達は両親が、その、亡くなってしまったので、児童保護プログラムで、それぞれ違う里親に出されたのです」
「――それもこれも貴様のせいだっ！」エルレインは私を突き刺すように指さした。
「……お姉ちゃん？」
マリナに見つめられ、エルレインが一歩引いた。そして、
「ぜ、全部こいつのせい！　アタシが昨日水たまりに顔から転けたのもこいつのせい！」
と、わけのわからない理屈で私を批難した。
「お姉ちゃん……」マリナは苦笑した。そうするしかなかったのだろう。
「ということは、マリナちゃんとエルレインさんは『かぞく』なんですねもぐもぐ」
「そうだ！　どうだ！　こんな天使のような子が妹でうらやましいだろう！」
エルレインは、したり顔である。
「お、お姉ちゃん、天使だなんて……」マリナは頬を染めておろおろしている。そのしぐさがかわいらしい。先程までの真っ直ぐな落ち着きは影をひそめている。
これが、彼女の素なのだろうか。
「なんだか、急に雰囲気がかわったな」という私の呟きに、
「わたしと喋ってた時はこんな感じでしたよもぐもぐ」とマナが応じた。
すると、それに気づいたマリナは表情を曇らせる。
「あ、わたしったら……ごめんなさい。精一杯リーダーらしく振る舞おうと思って……わたしがこんな性格だってしったら、ＳＮＳのみんなが……」
落ち込むマリナの肩に、エルレインがそっと手を掛ける。
「マリナはそのままでいいよ。そのままで充分可愛いよ。ううん、

世界一かわいいよ！　……ってお前、マリナを呼び捨てとはどういう用件だこらあっ！」

　これが美しい姉妹愛と言うものなのか、それとも、いきすぎたシスターコンプレックスという奴なのか。考えてみるが、兄妹のいない私にはわかるはずもなかった。

「いいなーもぐもぐ」マナが口をもぐもぐしながら、物欲しげな目で二人を見ていた。

「ところで……そこの酔っ払い」私はマナの頬を見る。

「もぐもぐ？」マナはハムスターのように頬を膨らませている。中身は全てクッキーだ。

「お前はさっきから食べすぎだ！　食べるのを止めろ！」

「えーだって、今度いつ食料にありつけるかわからないじゃないですか。食べ溜めしておかないともぐもぐ！」

「食事の保証は私がしてやる。それに今全部食べなくても、取っておいて後で食べればいいだろう。ほら、袋とか、タッパーとかに入れて保存しておけ」

「……なるほど」クッキーを詰め込んで膨らんだ頬のまま、マナはこくこくと、興味深げに何度も深く頷いた。

「頼むから、『今、思いついた』とかいう反応はやめてもらえまいか」

「ごっくん。おお、かいちょーさんに頼まれごとをされたのは2度目ですねっ！」

「……もういい」相手にしている場合では無い。

「これで、必死になって詰め込まなくてもすみます。かいちょーさんありがとう！」

　何度も繰り返してきた疑問だが、こいつは、一体、どんな人生を送ってきたのだ？　何かが根本的におかしい。人間として、何かが欠けているように思えてならない。

　そんなマナを見て、マリナはくすりと笑った。

「二人とも、仲が良いんですね」

「私はそんな――」
「かいちょーさんとわたしも『かぞく』ですから！」
「え、そうなんですか？」マリナはきょとんとした。
「いや、これには事情が――」「――はいっ！」マナは笑顔で答えた。
「いや、だから――」「――かいちょーさんは、わたしを『ようじょ』にしてくれたんです。おいしいごはんも作ってくれるんですよ」
「……素敵ですね」マリナはふわりと微笑んだ。
その横ではエルレインが、
「こいつが……会長の『養女』……？　そんなはずは……」と、何やら深刻な表情でぶつぶつ呟いている。
「家族って良いですよね」
マリナは私とマナに近づいて、口に手を添えて、小声で言う。
「わたしのお姉ちゃんも、普段はおっちょこちょいだけど、肝心な時には絶対に助けてくれるんです」
マリナはエルレインを一瞬ちらりと見て、
「だから、わたしはお姉ちゃんが大好きなんです」告白するように、言った。
「……マリナ？　何を話してるの？」
「ふふ、内緒だよ」マリナはくすぐったそうに微笑んだ。
「そんなぁ……」エルレインは傷ついたように肩を落とした。
「そういうわけで――」マリナはにっこり笑って、姉に言う。「お姉ちゃん、そこに座りなさい。正座です」
「……え？」戸惑いつつも、エルレインはその場で正座した。
マリナは笑顔を一変。眉をつり上げ、正座したエルレインの顔を上から覗き込む。
「学校で人を殺しちゃいけないって習ったでしょ！　ターミネーター計画ってどういうこと？　わたしに内緒でそんなこと――」
「な、なんでターミネーター計画のことを――」
「お姉ちゃんの様子がおかしかったから！　隠し事なんてすぐわか

っちゃうんだから！」
「ま、まって！　これには訳があるの！」
慌てて立ち上がろうとするエルレインを、マリナはぐいっと押し戻した。
「聞きたくありませんっ！　どんなわけがあっても人殺しはいけないことです！」
エルレインはおろおろ落ち着かない様子で辺りをきょろきょろと見回す。
私と目があった。途端に苦虫を噛みつぶしたような表情になる。
「ま、マリナ、わかったから、こんなところで怒らなくても、帰ってから――」
「――あ、え、て、ここで、会長さんの前で怒ってるの！」
「でも、あいつを殺さないとマリナやみんなが！」
「お姉ちゃん、わたしが死んじゃったら、どう思う？」
エルレインの表情が歪み、半泣きの相貌になる。
「嫌だ！　そんなの絶対に嫌だ！　そんなこと、考えたくもない！」
「会長さんが死んじゃったら、マナちゃんが同じ気持ちになっちゃうんだよ」
「……で、でも――」エルレインは縋り付くようにマリナを見上げる。
「会長さんに謝りなさい」
「そ、それは……」エルレインの頬を、汗が流れ落ちる。
「謝りなさい」
すがるような視線のまま、エルレインは口籠もった。
「あ、あの……マリナちゃん」マナがおどおどしながらマリナに話しかける。
「マナちゃん、もう少しで終わるからちょっと待っててね」マリナはにこりと微笑んだ。
マリナは「ふう」と溜息をつき、エルレインに冷たい視線を向ける。

両者の視線が交錯する。そして、
「――人殺しをするお姉ちゃんなんて、大っ嫌い」
最終通告ともとれる、エルレインにとっては最凶であろう言葉を放った。
それを聞いたエルレインは、驚愕の表情のまま固まり――放心した。
私も命を狙われたとはいえ、あそこまで傷ついた反応をされるとほんの少しだけ申し訳なくなる。もちろん、謝るつもりはさらさら無いが。
（エルレインさん、なんだかかわいそうです）マナが小声で囁く。
（自業自得だ）
「――まあまあ、そう責めないで」くぐもった声が聞こえた。
聞こえた方を見ると、またもや黒いバイクスーツのような衣装を纏った人物が立っていた。今度は青色ネコのお面だ。マフラーはしていないが、胸の辺りに白い星形の模様がある。いわゆる、五芒星という奴か。
「ネコくん！」マリナの表情が驚きに変わった。
驚きのあまり、心を取り戻したらしいエルレインが叫ぶ。
「お、お前、どうしてここに！　夕焼けにゃんにゃんは、まだ二つしか――」
ネコと呼ばれた人物は、人差し指でエルレインの口を遮り、言う。
「それは、帰ってから追々。ここに来た理由は君と同じさ。やんちゃなお姫様を連れ戻しに来たんだよ」ネコのお面は、マリナの方に向けられた。
（かいちょーさん、何でみなさん、猫さんのお面を被ってるんでしょうか？）マナが私に耳打ちする。
（知らん。趣味ではないか？）私は適当に答えた。
「ネコくん、あなたにもお話があります」マリナは真っ直ぐ、射貫くような視線。
「おや、綺麗な着物だ」ネコと呼ばれた人物は、あっさり返した。

「そうだろーそうだよなー」エルレインの表情がとろけた。
「お世辞を言っても、無駄です」マリナは動じず、ぴしゃりと答える。
「きびしいなあ。全ては君のためだよ。ボクらＳＮＳは『聖女』のために動く」
「その呼び方、やめてください！」マリナは本気で嫌がっているようだった。
「おい――」お前は誰だと聞こうとした瞬間、
「ちょっと黙ってて――伊統会長」ネコは私の言葉を遮り「まゆまゆから聞いたよ。記憶を定着させるナノマシンを持ち出したらしいね。……返して貰おうか」
「無駄です。既に」
マリナは私に視線を向けた。
「――会長さんには投与済みですから」
「マリナ！　何てことを！」エルレインが呻く。
「どういう……ことだ」ナノマシン……投与……？
「ごめんなさい、会長さん。結果的に騙すことになってしまいました」
「いつ、私が……？」あり得ない。私が、摂取したものと言えば……。
私は、黒い重箱を見た。
「……クッキー、なのか」
マリナは頷いた。
信じられない。あのクッキーは、長谷川が毒味をし、問題ないと言ったはずだ。
「確かに、毒はなかったはずなのですが……」長谷川は困ったような微笑を浮かべた。
「安心してください。体に害はありません。……わたしも、食べて１週間になりますが、副作用はありませんでしたから」
「ま、マリナ！」エルレインが悲鳴を上げた。

害がないから、長谷川の毒味センサーに反応しなかったと言うことか？

だが、それにしても……。

「……なぜ、こんなことを？」

「はい。わたし達のタイムマシン『夕焼けにゃんにゃん』は、夕焼けの時間帯限定で過去と対話できる隙間系タイムマシンです。わたし達は夕焼けと共に過去を訪れ、夕日が沈むまでに帰らなくてはなりません。夕日が沈みきった瞬間、過去において、わたし達の行動に関する全てが抹消されるのです。それには記憶も含まれています。そして、その記憶を抹消せずに定着させるのが、わたしがクッキーに仕込んだナノマシンです」

体内に取り込まれたナノマシンは一定期間、脳に定着し、夕焼けにゃんにゃんの記憶を保持し続ける。そしてナノマシンが脳内のシナプスと結合し通信を行なうことで、『思い出す』ことができるようになる、とマリナは言った。

「ふっ、記憶が消える？　そんなバカな。なかなかよくできた話だが――」

「――あっ、それでかいちょーさん、覚えて無かったんですね！」

マナが突然叫んだ。

「は？」何を、言っているのだ？

「ほら、エルレインさんが襲ってきて、わたしがかいちょーさんを助けたこと！」

「そんなこと知らん。第一、あの女とは、今日初めて……」

エルレインを見ると、気まずそうに目をそらした。

……初めてじゃ、無い？

そういえば。私は霧島書記長から聞いた、『空白の十分間』に思い至った。

「直近の記憶であれば、ナノマシンの作用でそのうち思い出せるようになるはずです」「……そうなのか」

いや、待て、伊統会長よ。お前はいつからタイムマシンなどと言

う戯れ言を信じるようになったのだ。超現実主義である私が、そう簡単に信じるわけにはいかない。

「たぶん、それでも信じがたいと思いますから」と、マリナは私の前までやって来て、「ちょっと、失礼しますね」不意に、制服のネクタイをしゅるしゅると解いてしまった。

「マリナ、何を――」

マリナは制服のワイシャツに手を掛け、

「えいっ！」かけ声と共に勢いよく両腕を開いた。

ワイシャツのボタンははじけ飛び、私の黒いアンダーシャツが顕わになった、

そして、首から吊るした、赤い指輪も。

「あ……」マナは赤い指輪に見入っていた。

母の形見の指輪だが、そこまで説明する義理はない。

「これは……どういうことかな」私はマリナの目をじっと見て、できるだけ穏便に聞く。

「大丈夫、すぐに元通りになりますから。それに――」

マリナはにっこり笑って、

「先程のお返しです」天使の微笑みであった。

水鏡マリナ、この少女、ただ者ではない。

「ねえ、お返しって何？　――まさか、お返しって、そういうこと！　ねえマリナ、やっぱりこいつに何かされたよね！　ね！」エルレインは必死の形相でマリナに詰問していたが、マリナはにこにこ笑ってやり過ごした。大したものだ。

先程、ネコなるふざけた名前と格好の人物が、マリナのことを『聖女』と呼んだ。

そして、姉とは言え、自分のために私を暗殺までさせようとする、あの魅力。

――宗教団体のトップと言ったところか。

「あーあ、しゃべっちゃったか」抑揚のない棒読みのような声が水を差した。まるで、私をおちょくっているかのような。

見ると、ネコと呼ばれた人物であった。
マリナが説明している間、こいつはまったく止めるそぶりを見せなかった。知られたくない情報ならば、すぐさま止めに入るはずだ。ならば、全ては計画のうちということになるが、果たして……。
ネコは、腕にはめた時計のようなものを見る。
「それにしても、やけに時間の進みが遅いな」
ネコが言うと、マリナが腕時計のような物を見せて答えた。
「それは、わたしがまゆまゆちゃんに貰った『にゃんにゃん時間延長キット』のおかげです。『会長さんと、ゆっくりお話ししてみたい』と言ったら、作ってくれました」
マリナの腕時計は、他の二人の物とは違う形をしていた。
「なるほど。ボクは聞いてないなー」声色が、明らかに不機嫌そうだ。
「まゆまゆちゃんを叱らないであげてください。頼んだのは、わたしです」
「うん。別に叱ろうなんて思ってないさ。『お話』をするのは、良いことかもしれないし。……でも」
ネコはお面に覆われた顔を、私の方へと向ける。
「それだったら、自己紹介をしないとね」
ネコは言う。私には白々しく聞こえた。
「ボクは『ネコ』。もちろん本名じゃない。ＳＮＳ隙間ターミネーター作戦の参謀。そして――君に勝つ男だ」
「私に勝つだと？　世迷いごとを。そういう戯れ言は、その珍妙なお面を外してから言ったらどうだ？」
「そうはいかない。これには意味がある」ネコはお面をかつかつと叩いた。
――にゃあ、にゃあ。という下手なネコの鳴き真似が、繰り返し響く。
「そろそろ、時間だね」ネコは腕についた時計のようなものを見せた。

「シンデレラは時間が来たら帰らなければならない、か？」私は訊ねる。
「さすが伊統会長。くさいセリフを言わせたら右に出るものがいないね」
「ふっ、褒めるな」
「別に褒めてないさ」ネコはきびすを返し、教室の扉の方へと向かう。
「どこへ行く」ネコの背に向かって、私は声をかける。
「どこって、帰るんだよ。会長、君も来るかい？」驚いたことに、ネコは私を誘った。
「ネコ？　何を考えて――」エルレインは困惑している。
「会長さん、さあこちらへ」マリナが私の手を取った。ひやりとした、冷たい手だった。
「――会長、貴様！　マリナから離れろおおっ！」
いちいちうるさい奴だ。私はマリナの手を丁重に離した。
「しかし、なぜ私も？　敵なのだろう」
「タイムバインドの瞬間を見ていただいた方が、より信じてもらえるかと」
マリナはにこりとしたが……目の前を歩いて行くあのお面の男、ネコがマリナと同じ考えを持っているとは思えない。
「さ、マナちゃんもどうぞ」マリナはマナの手に触れた。
見ると、酔いが回ったのか、マナは眠そうに眼を擦っていた。あの酔っ払い。私を守るどころか、敵の眼前で眠ってどうするのか……。
マリナはそんなマナを見て、微笑んだ。そのやさしげな表情。母性と慈愛に満ちた笑みに、なぜか、死んだ母が重なった。
正直、私には彼女らが何を考えているのかわからない。罠である可能性の方が高い。
だが、見て貰いたいというのであれば、見てやろうではないか。
伊統会長は、どんな挑戦でも逃げはしない。それが、未来の王とし

ての姿勢なのだから。

私達が移動したのは、私のクラスの、すぐ隣の教室だった。

「さて、本日の隙間はここだ」ネコは掃除用具入れの扉を少し開いた。

「それが、タイムマシンだと？」

わたしの質問に、マリナが答える。

「はい。正確に言えば、『ゲート』みたいなものです。このゲートは先程説明したように、夕刻だけに出現し、日が沈むと同時に消えてしまいます」

「その『ゲート』を使えば、私も未来に行けるのか？」

マリナは首を横に振った。

「このゲートの始点は未来にあります。過去への一方通行。未来へ行けるのは、未来から来た人間が帰る時だけです」

その話を聞いて私は、ふと思った。

「では、夕日が沈むまでに、そのゲートには入れなかった場合、どうなる？」

「正確なことはわかりません。今まで帰ってこれなかった人はいませんから。でも……」

「でも？」

「……まゆまゆちゃん……いえ――夕焼けにゃんにゃんの開発者は、『返ってこれなかった場合、過去と未来の隙間に取り残されるのではないか』と言っていました」

「過去と未来の……隙間？」

「はい。まゆまゆちゃ……開発者は、便宜的にその状態を『隙間漂流者』と定義していました」

「『隙間漂流者』……それはどういう――」

「さ、マリナ、こちらへ」ネコがマリナに向けて手を伸ばした。

「マリナ、まだ話が――」

私が引き留めようとすると、マリナは頭を傾げて微笑んだ。

「大丈夫です。また来ますから。会長さん、あなたの記憶が残る間、いっぱいお話ししましょう」
「マナちゃん、またね」マリナはマナの両手をぎゅっと包み込んだ。
マナはとろんとした眼で、ゆっくりと頷いた。既に意識の半分は夢の中のようだ。
部屋の中心まで進んで、マリナが立ち止まった。私の方へと振り向く。
「会長さん、もう一度お聞きします。完全管理社会を、あきらめては頂けませんか」
「断わる」即答した。
「そうですか。……今は、それでいいと思います」
「なに？」どういうことだ？
「あなたはきっと、そう言うだろうと思っていました。いえ、そうでないと困ります。わたしがここに来た理由、それは『あなたがどんな思いで完全管理社会を作ったのか』を、聞くためですから」
「私が？　そんなことを聞いてどうする？」
マリナはにこりと微笑んだ。しかし、次の瞬間、彼女の口から出てきた言葉は、衝撃的なものであった。
「なぜ、わたしを殺そうとするのか、その理由が知りたいのです」
物騒な言葉とは裏腹に、マリナの表情はやさしかった。
「私が、君を……殺す？」バカな、私が、この少女を……殺すだと？
私は動揺していた。当たり前だ。今の私には彼女を殺す理由などないし、このようなできた女性を、私が殺そうと思うはずがないからだ。
「そうだ！　お前がマリナを殺そうとするから！」エルレインが割り込む。吠える彼女の表情には、私への憎悪がにじみ出ていた。
「――おねえちゃんっ！」マリナはエルレインを窘めるように叫んだ。
「でもマリナ――」
「自分の命を守るために誰かを殺すのなんて、わたしは望んでない

よっ！」

マリナの一喝を聞いて、エルレインはしゅんとなった。

――この胆力。

「マリナちゃん……」マナは呟いた。どこか寂しそうな響きを含んでいた。

「マナちゃん、大丈夫だよ。わたしも、会長さんも、誰も殺させないから」

マリナが微笑むと、マナのとろんと寂しげな表情は、一瞬にしてほわんとした笑みに変わった。そのまま、マナは小さく頷いた。

――人を瞬時に癒してしまう、この天性の魅力。

「マリナ、そろそろ時間が無いよ」掃除用具入れの横で、ネコが叫ぶ。

「あ、うん」マリナは駆け出す。

清楚、黒髪、白い肌、日本の恥じらい、純白の下着、そして、ユニコーン。

これぞ、天啓。私は、決めた。

「マリナ」

マリナが振り向いた。振り袖が可憐に舞う。

「――私と、婚約しては頂けないか」

「え？」マリナが小首を傾げた。

「こんにゃく！」素っ頓狂な声が響いた。誰かと思えば、マナであった。

私は現実主義だが、人と人との出会いだけは『運』であると思う。だからこそ、こういった予兆めいたものを見逃さないようにしている。

「マリナ、初めて会った時から、私は君に惹かれていた」

マリナの顔が、ぼっと赤く湯立った。はて、この反応、何処かで見たような……。

――にゃあ、にゃあ。という下手なネコの鳴き真似の感覚が、短くなってゆく。

「お前は何を言ってるんだあっ！」悲鳴のような声をエルレインが上げた。「マリナは男に免疫がないんだぞ！」

「そ、そうですよっ、かいちょーさん！　いきなりそんなことを言っても、マリナちゃん、困っちゃいますよっ！」

何時の間にか、マナが夢から目覚めていた。私の言動に驚いたためであろうか。マナは私に批難の視線を向けている。

「わ、わた、わた、わたしっ、わたしはっ」マリナは真っ赤になったまま、壊れたように痙攣している。

「何を言っている。『結婚は神速を尊ぶ』のだ。いくら良い人を見つけたところで、相手が婚約していてはあきらめるしかあるまい」

マリナの美貌と人間性のすばらしさは、少し会話しただけでわかった。人生の伴侶として見るに、マリナは極上の存在である。今も引く手あまたに違いない。

私は、チャンスを逃さない男だ。

「で、でもっ、かいちょーさん、それはマリナちゃんの気持ちを――」

「マリナが私と婚約すれば、マリナはお前の『お母さん』だ」

「おかあさん……」

マナの視線が左上へと泳ぐ。何かを計算している。

「ありです。かいちょーさん、がんばって！」

マナはばいんばいんの前に両手を持って行き、小さくガッツポーズした。

「よし。娘の承諾も得た。マリナ、今すぐにとは言わない」

それに、私がマリナを選んだのは、『運』だけではない。

私が見たところ、彼女が率いるＳＮＳとは宗教団体か何かだ。彼女のカリスマ性を得られれば、宗教団体の票が手に入る。それだけでなく、指導者のために暗殺すら厭わないその洗脳技術。――すばらしい。利用しない手はない。

外道だと言われようともかまわん。私は常々、人間とは無意識のうちに利害関係を計算しながら生きている、と考えている。それを

自覚しているか、していないかの違いでしかない。
私なら、制御できる。カルト宗教のように無意味な破壊などしない。宗教だろうと、人々の心の支えとなるように利用してみせる。私なら、彼女とうまく付き合っていける。だから、
「未来のファーストレディになってほしい」
マリナの横にいたエルレインが、感情を爆発させた。
「――良くもぬけぬけしゃあしゃあとっ！　マリナ、こんな奴の言うこと本気にしてないよな！」
「わたし……えっと……その……そんなこと言われたの……初めてだから……」マリナは頬を染めたまま、俯いた。
「くそう。マリナに降りかかる火の粉は、今まで全部アタシが振り払ってきたのに……よりによってこんなやつにっ！」
それで、この反応か。引く手あまただと思っていたが、側に頑固親父よりも厳しい騎士がいるとは。少し決断を早まったか。
「まあまあ、お姉さん」私は気さくに話しかける。先ずは外堀からだ。
「――誰がお姉さんだっ！　お前とマリナは今日初めて会ったんだぞ！　本気でマリナのことを好きなわけがない！　お前にマリナは愛せないっ！」
ふん、愛せないだと？　良いだろう、教えてやる。
「愛とは、覚悟だ」
「はあっ……？」エルレインの頬も朱に染まった。なるほど。マリナと反応が似ている。彼女ら二人は確かに姉妹だ。
そう、『覚悟』なのだ。これは、私が死んだ母から教えられた事である。所詮、恋とは幻想。百年の恋も、いつか一瞬で覚める。我が国で毎年どれだけの夫婦が離婚しているか。一時の感情の高ぶりに身をまかせ、あとさき考えずに結婚するからそうなる。
私は違う。どのような始まりであろうと、一度愛すると決めれば私は努力を惜しまない。必ず、幸せにしてみせる。マナを引き取ったのも、それが理由の一つだ。

「で、でも……結婚したら、その……」何を考えているかはわからないが、エルレインの顔がみるみる真っ赤に茹だってゆく。「そんなのだめだあああああっ！」

くいくいっと、袖が引かれた。マナが訊ねる。

「かいちょーさん、結婚したら、どうするんですか？」

「それは決まっている。やることをやるのだ」人生とは、バトンリレーである。

マナは首をかしげた。子供にはまだ早い。

――にゃあ、にゃあ。下手なネコの鳴き真似の感覚が、短く、大きくなってゆく。

「マリナ、エルレイン、お取り込み中のところ、悪いんだけど」ネコが言う。

「――はっ、こんな事してる場合じゃないっ！　マリナ――」

エルレインがマリナの手を取ろうとした瞬間、

「ごふっ」マリナが、両手で口を押さえた。

指の隙間から――赤いものが、流れてゆく。

マリナは膝をつく。苦しそうに咳を繰り返す。床にぽとぽとと、赤い滴か落ちてゆく。マリナの顔色は真っ青になっていた。

何が、起こったのだ？　突然のことに、私の頭は真っ白になってしまう。

頭が、真っ白になる……？　指の隙間から、赤い物が流れる？

これは、まるで……。

マリナと、記憶の中の母が、重なった。体が、凍り付いたような寒気がした。

気がつくと、私はただ、呆然と立ち尽くしてしまっていた。

エルレインがマリナの体を支え、背中をさする。

「マリナ！　なんで……こんな時に発作が……」

発作と言った。彼女は、病気なのか……？

「ま、マリナちゃん！」マナが駆け寄ろうとする。

「――来るなあっ！」

エルレインが猛獣のように吠えた。マナはびくんと驚き竦んだ。
「エルレイン、マリナをこちらへ」掃除用入れの隙間に入り込んだネコが、腕を伸ばす。
エルレインはマリナを抱えてネコの元へ歩く。そして、そっとネコに引き渡した。
「……マリナを、頼む」硬い、声色だった。
何か、違和感を感じた。
「じゃあ、先に行くよ」
二人は、掃除用具入れの隙間に吸い込まれるようにして消えていった。
「……どうなっている、エルレイン、マリナは病気なのか？　マリナは一体――」
――にゃあ、にゃあ。
「……お前のせいだ」背を向けたまま、エルレインが呟いた。
――にゃあ、にゃあ、にゃあ。
振り向く。鋭い瞳で私を睨む。頬を、涙が伝っていた。
「お前がマリナの心をかき乱すから……お前が、マリナを追い詰めるから……お前が……あんなシステムを作るから……お前が……お前がっ――」
ガチャガチャと金属音のような音が鳴った。見ると、エルレインの右手に黒い十徳ナイフのようなモノが握られていた。それは――回転しはじめる。
「――マリナを殺そうとするからっ！」
――にゃあ、にゃあ、にゃあ、にゃあ。
「死ね！　伊統かいちょおおおおおおおおお――」
エルレインが私に向かって駆け出した。黒い刃が、私に突き出される。
――にゃあ、にゃあ、にゃあ、にゃあ、にゃ――
突然、凄まじい轟音が響き渡り、唸るような振動が部屋全体を襲った。

衝撃でエルレインがバランスを崩し、机に激突して床に突っ伏す。
「何だ、地震か？」
「いてて……伊統かいちょ――」
再び、衝撃が起きた。エルレインの背後の壁が爆発し、エルレインがこちらに向かって吹き飛ばされた。同時に激しい熱を感じた。教室中の机や椅子が衝撃で吹き飛んでくる。何が起こったのか理解出来ぬまま、私は反射的にマナを庇った。そのまま私達も吹き飛ばされた。
エルレインが爆発に吹き飛ばされ、黒板に叩きつけられるのを見た。
私も体を叩きつけられた。何か硬い物が次々と体にぶつかり、鈍器で思いっきり殴られたような激しい痛みが体を次々と襲った。衝撃に視線が定まらず、意識がもうろうとしている。眼前を覆う煙と、焦げ臭い匂い。まるで……これは……。
霧島書記長の言葉を思い出す。『最近、この一帯で爆弾騒ぎが――』
がらがらと何かが崩れ落ちるような騒音が響いた。
前方――教室後ろの壁の方を見ると、そこには、既に壁と呼べる物はなかった。
大きく空洞が開いており、その向こうに見えるのは、衝撃で何もかもがぐちゃぐちゃになったような、私の教室――
《――にゃんにゃん、にゃおーん》
奇怪な声と共に視界が歪み、ブラックアウトした。

第六話　隙間に囚われた少女

「……ここは？」見渡せば、先程まで私達がいた教室ではないか。やわらかいものが体に当たっていると思いきや、マナが私の腕の中で眠っていた。
「マナ、おい、マナ」私はマナの肩を揺する。
「……ううん」マナはうっすらと眼を開けた。「あ、かいちょーさん、おはようございます」とろんとした眼で、幸せそうに微笑んだ。
それにしても、先程の轟音は何だ？
「まるで、爆発したような……」
先程、前方の壁が吹き飛び空洞となり、滅茶苦茶になった私の教室を確かに見た。しかし、前方の壁は何事もなく存在しており……そして、気づく。
「シャツのボタンが、元に戻っている……」先程マリナに引きちぎられたはずのボタンが、全て元通りになっていた。あれは……夢だったのか？
「――会長お前、何を仕組んだ！」甲高い声には聞き覚えがあった。エルレインの声だ。
声の方を向くと、ほっそりとした白い肢体に、桃色の点が二つ。
「私は何も仕組んでいない」それから目をそらし、私は答える。
「嘘つけ！」
「嘘ではない」
私はエルレインの顔をじっと見上げた。それ以外は、極力見ないようにする。
「じゃあ一体、何で……くそっ、なんか視界がぼやける……」エルレインは頭を抱えた。
「ところで、お前、その姿は……」
「……『まっぱ』です」マナは興味深そうにじろじろと見ている。
視線に気づきエルレインは下を向いた。みるみるうちに全身が…

…顔が赤くなって行く。そして、
「いやあああああああっ！」絶叫した。
エルレインは、生まれたままの姿であった。
「で、どういうことだ？」
「な、何が！　この格好は、アタシもよくわからな――」エルレインは背を向け、両腕で大事なところを隠して座り込んでいる。その姿があまりにも不憫に見えたので、
「とりあえず、これでも着てろ」私はブレザーを脱ぎ、エルレインの背中に掛けた。
エルレインのからだがビクリと震えた。
「こ、こんなもの……」そう言いつつも、脱ぎ捨てることはなかった。
すると突然、エルレインが立ち上がった。
「――そうだ、時間！　帰らなきゃ！」
「ああ、さっさと帰れ。風邪を引く」
「うっさい黙れっ！　って……あれ？　壁が、元に戻ってる」エルレインは辺りをきょろきょろする。「いやまて……何かがおかしい。――えっ、まって！」
何やら騒がしい奴だ。エルレインは窓へと近づく。
「なんで……夕日が……沈んでる」エルレインは、愕然としていた。
「当たり前だ。夕日は沈む。それが世界の法則だ」私は傍らに立つ。
「そうじゃない。そうじゃなくて……って事は、なんで、アタシは、ここにいるんだ？」
どうやら、この暗殺者は頭を打って混乱しているようだ。
「夕日が沈んでる……爆発が、もとに……やばい――やばいっ！」
真っ赤だったエルレインの顔色が、みるみるうちに青ざめていった。
「何がどうした？　お前、頭打って狂ったか？」
「――ちがうっ！　さっきの爆発が起きたろ！　『夕焼け空間』内で起こった出来事は夕日が落ちた瞬間に全て無かったことになるか

ら、たぶん爆弾も元通りだ。だから――あと十数分で爆弾が爆発する！」

「ばくだんっ！」マナが跳び上がらんばかりに驚いた。「かかか、かいちょーさんっ！」

「なるほど。ばかばかしいな」

だが、考えてみると、今の私には夕焼け時の記憶がある。確かに爆発は起こったし、変な暗殺者に襲われた記憶もある。しかも、夢ではない。その証拠に、暗殺者は目の前にいる。マリナのクッキーが記憶を保持したと言うことなのか。信じ難いが。

私は衝撃が起こった瞬間、その方向をはっきりと記憶していた。あの壁の向こう――すなわち、私の教室からである。

試しに探してみると、机や掃除用具入れの中、教卓の裏から爆弾らしき小箱が見つかった。

「これは……？」

「わからない。アタシに聞くな！　アタシ達のじゃないっ！」エルレインは焦っていた。

「長谷川」

「――お呼びですか」にこにこ微笑の執事が、傍らに現われた。

驚いたのか、エルレインは一歩後退った。気にせず私は訊ねる。

「爆弾の位置を特定できる特技はないか？」

「残念ながら、わたくしにもそこまでは……」長谷川は微笑のまま眉尻を落とした。

「そうか。お前にも普通の人間らしい所があって少し安心したが、この状況はまずいな」

先程の爆発、おそらくこちら側の問題だ。

霧島書記長が言っていた、最近この一帯を騒がせている爆発騒ぎだろう。

しかし、よりにもよってこの学園を狙うとは、良い度胸ではないか。我が学園での爆発騒ぎなどもってのほか。これを機に、私の管理責任を糾弾する者が現われる可能性もある。もし最悪私が狙われ

たとなれば、他の者を巻き込まないためにも私は学園を追われることになるだろう。そうなれば、計画の遅延は必至。このまま爆弾を爆発させるわけにはいかない。

「爆弾検知スキルはありませんが、爆弾解体スキルは持ち合わせております。この爆弾は全て、わたくしが処理いたしましょう」

長谷川の特技欄に、また一つ追加項目が増えた。

この執事、有能すぎる。

長谷川が爆弾を解体する光景を、エルレインは唖然として見つめていた。

その間、私は教室の隅々を探してみたが、爆弾らしき物は見当たらなかった。

にこにこ執事の長谷川が立ち上がり、こちらに微笑みを向ける。

「解除完了です。三つとも非常に単純な仕掛けでした。爆薬と爆発させるための回路、そしてアナログ式のタイマーから構成されたシンプルな物です」

「これで、本当に全部だろうか……」

私の取り越し苦労ならばそれでよい。しかし、何か違和感を感じる。その違和感が何から来るのかは判らなかったが、不安をぬぐい去ることが出来なかった。

せめて、何か爆弾を探知する物でもあれば……。

「わたし、探しますっ！」マナが叫んだ。

視線をマナに向ける。酔っ払いの戯れ言に付き合っている暇はないのだが……。

「酔っ払い、まさかとは思うが、お前の『自称』酔っ払い魔法で爆弾を探索できたりするのか？　ほら、犬みたいに」

「くんくんでは無理です。あ、でも、かいちょーさんの匂いならわかりますよ」

「そうか……ん？　今しれっと変態発言をしなかったか、酔っ払い」

「さ、この酔い具合なら行けます。――サーチ！　ばくだんさんどこー？」

マナは両腕を上げ、ピタリと静止した。そのまま数秒。
「……上ですっ！　天井裏に、あやしい雰囲気ですっ！」マナはびしっと天井を指した。
まさかと思いつつ天井裏を覗くと、薄闇の中、確かに不審な四角い箱らしき形が複数見える。
「会長さま」
「――わっ……長谷川驚かすな」
長谷川は下から自分の顔に懐中電灯を当てていた。
「お約束。王道でございます。お好きでしょう？　さて――」
何やら、長谷川は箱の外装をてきぱきと解体している。
「……どの爆弾にも運動検知のセンサーなどは組み込まれていないようですが……」
何やら含みを持たせた言い方である。私は訊ねる。
「どうした？」
「一見単純な仕掛けに見えますが、こちらは先程とは違い、少々手が込んでいるようです。会長さま、下へお戻りください。この場で解体するのも良いですが、万全を期して少しでも明るいところで作業する方が確実でしょう。ただ、問題は時間です。どれもご丁寧に時間表示がありますが、残り、2分を切っております。お急ぎください」
急ぎつつも、慎重に教室の床へ箱を下ろす。鉄色のシンプルな外装であった。数は3つ。それぞれが教室天井裏の三隅に三角形状に配置されていた。大きさはケーキを持ち帰る際の、小さな箱サイズと言ったところか。
「お、おい、あと二分って、大丈夫なのか！」慌てふためくエルレインがうるさい。
「ああもう黙ってろ自称未来人！」
「……思った以上に仕組みが複雑です。液体窒素でもあれば良いのですが、正直時間がありません。皆様、至急避難してください」長谷川が作業を行ないながら、真面目な微笑で言う。

長谷川を見捨てるわけにはいかない。かといって、このまま爆発を許せば、この学園に恐怖が訪れてしまう。それは絶対に避けなければならない。

どうすればいい？　打開策は見当たらない。考える時間もない。いや、もう既に答えは決まっている。

「長谷川、中断だ！　逃げ――」

「――かいちょーさん、赤と青、どちらが好きですか？」マナが質問した。

「は？」こんな時にこいつは何を――。

「だから、赤と青、どちらか決めてください」

「青だ」素早い決断ができてこそ、世界を制することができる。「ところで、何を――」

マナはペンチを持って、爆弾と対峙していた。

「正解は、赤青と見せかけて、何の変哲もないこちらの配線です！」

「待て！　素人に扱えるようなものでは――」

「てや！」マナは、地味な灰色の配線をパチンと切った。

――爆発するっ！

……なにも、起こらない？

「かいちょーさん、はずれでーす。残念でしたー！」マナはけらけらと笑った。

「……う、嘘だ」エルレインの視線は、笑うマナに釘付けになっている。

２つあった爆弾は、既に解体されていた。マナは長谷川の元に長谷川の側に駆け寄り、てきぱきと配線を操作して、あっという間に爆弾のタイマーを止めてしまった。

「やった……のか？」エルレインの視線は完全にマナに注がれている。

「はい。みんなもう大丈夫です」マナは赤らんだ顔で、にこりと笑った。

エルレインの体がわなわなと震え。

「やった！　やったぞ！　みんな助かった！　よかったー！」と笑い叫んだ。
やったやった！　と、エルレインはマナや長谷川と抱き合い、笑い合う。
ブレザーはずり落ち、全裸である。
「やったー！　助かったぞ！　――って、アタシは何をやってるんだあああっ！　かいちょーを殺す絶好のチャンスだったじゃないかー！　アタシのばかばかあっ！」
エルレインは突然怒り出し、壁に額をがんがん打ち付けはじめた。
私はエルレインを無視して、マナの元へ歩み寄る。マナは何かを期待しているような眼で、私を見上げた。よかろう。期待以上のことをしてやろうではないか。
「まだ酔いが残っているようだなこの酔っ払いがっ！」
私はマナの頭をやさーしくぐりぐりした。
「ぎにゃあっ！」いつもの通り、悲鳴が上がった。

爆弾騒ぎの話は聞いていたが、まさかこの学園に爆弾が設置されるとは。
未来の王、伊統会長の庇護下にあるまじき事態である。
学校防犯システム『リガン』が運開していれば、すぐに犯人を特定できたのだろうが……。私は遺憾に思った。
爆弾は全部で六つ。全てが私達のクラスの教室に設置されていた。
掃除用具入れ、教卓の裏、教室の机、そして天井裏に三つ。前者の三つは誰でも判るように隠され、後者の三つは巧妙に隠されていた。どうやら前者三つは囮である。
その証拠に、前者は単純な構造で、後者は長谷川が戸惑う程の複雑な構造であったと言う。へらへら笑いながらペンチ一つでタイマーを止めてしまったマナが異常なのだ。
マナを見る。顔を赤らめてふらふらしている。やはり、酔っている。

しかし、妙に腹が立つが、マナは爆弾を探しだし、見事に解除してみせた。

こいつ、もしかしたら、何処かの特殊部隊にでも所属していたのではないか？

おそらく直接聞けばまた病院送りになるであろうが、この際気にしない。

「どうして爆弾を止めることができたのか、説明して貰おうか」

「は、はい」意外にも、マナは素直に応じた。「魔法陣です」

「は？」私は耳を疑い、聞き返す。

「だから、あれ、魔法陣と同じなんです」マナが指さすのは、爆弾の配線だ。「魔法の訓練の時に、形状の瞬時把握の訓練を受けましたから」

爆弾の回路が、魔方陣と同じ？　何をふざけたことをぬかすのか。説明になっているようで、なっていない。妄想狂に何を聞いても無駄と言うことか。

気分が萎え、詮索は後回しにした。

それにしても、だ。

囮の爆弾三つ、その内の一つの場所が問題であった。机の中に隠されていた爆弾、その爆弾が入っていた机こそ――私の机である。

つまり、狙われたのはやはり、私である可能性が高い。

現在校内が立ち入り禁止であることを考えると、人を狙ったのではなく、この学園を狙った。つまりは――この私の地位失墜を狙ってのものか、もしくは私への挑戦状であると推察できる。

地位の失墜を狙った物であれば、警察へ公表するわけにはいかない。幸いなことに、爆弾魔は学園の外でも爆発騒ぎを起こしているらしい。既に警察が捜査に乗り出しているはずだ。

故に、私は『伊統会長が狙われた』という事実を隠蔽し、この爆弾を公表しないことに決めた。何か犯人が特定できそうな手がかりが見つかった場合には、私のコネクションを使って、知り合いの刑事にでも情報提供すれば良いだろう。無論、内密にだ。

爆弾は私の管轄外だが、解析できそうな人物に心当たりがある。
精神に少々難ありだが、そちらに回し、解析させよう。
今はそれよりも、目の前の問題だ。
「ごめんマリナぁ！　アタシバカだぁ！　くそー！　ゲートが閉じてる帰れないーっ！」
あれからエルレインは隣の部屋に戻り、掃除用具入れの扉を必死にバコバコやっている。本人は至って真剣な様子なのだが、行動が行動なだけに、端から見たら滑稽にしか見えない。
「マリナぁ……」涙目になったエルレインは、全裸のままへたり込んだ。先程壁に何度も打ち付けていた額は赤く腫れており、見るからに痛々しい。
窓を見ると、完全に夕日は沈みきっていた。
掃除用具入れを開けて中を見る。掃除用具が納められているだけで、特にゲートが存在しているなどと言うことはない。
エルレインは、依然ここに、彼女にとっての過去にいる。
未来と過去の隙間に取り残されるのではなかったのか。これは、どういうことだ？　やはり、マリナ達の言っていることは嘘なのか？
しかし、マリナとネコはあの中へと消えていった。爆発の際に逃げたとしても、人間二人分が隠れるような隙間はあの中にはない。
そもそも、あの爆発の規模を、どのようにして修復する？
イリュージョンだとしても、どんなトリックを使ったのか？
マリナが引き裂いたはずのシャツは、元に戻っている。どうやってやった？
全ての事実が、隙間ターミネーターの存在を肯定していた。
過去と未来の隙間というのは、『現代』という意味なのか？
「かいちょーさん、エルレインさんのこと、どうするんですか？」
マナが心配そうに訊ねる。
どうすると言われても……。
「助けてあげましょうよう」マナはすがるような目で私を見る。
その言葉を聞いたエルレインは、

「断わるっ！　アタシは刺し違えてでもあんたを殺すんだ。マリナの為に！　そのためにアタシは――」全否定である。
「殺せるのか？　ならば殺して見せろ」
「き、貴様！」エルレインの表情に、焦りのようなものが浮かぶ。
「お前、本当に自分の言っていることを理解しているか？」
「当たり前だ！　アタシはマリナの為なら命を捨てられる！」
「お前が死ねば、おそらくマリナは悲しむぞ」
「えっ……」エルレインの笑みが、消えた。
カチッ、カチッ、カチッ、時計が時刻を刻む音が大きく聞こえる程の静寂。
エルレインは、凍り付いたように固まってしまった。
「寒くないですか？」マナはエルレインを覗き込む。
「べ、別に、寒くなんて無いっ！」エルレインはぎょっとして、身を引いた。「……くしゅんっ！」くしゃみをしてしまったことを恥じたのか、頬を染めた。
「ほら、風邪引いちゃいますよ」
マナはばいんばいんの間から白いアクセサリのような者を取り出す。それは、みるみる大きくなり、白い杖になった。
「着るものが無いと悲しいです。ですから、服をプレゼントします」
実に、マナらしい考えであった。マナはエルレインに杖を向ける。
「こーでぃねーと」
エルレインに、変化はなかった。マナは首をかしげる。
「あれ、やっぱり……おかしいですね」
そして、気づく。隣に、なぜか試着室が設営されていた。常識的に考えて、あり得ないことである。やはり、マナは酔うと手品が扱えるのか？
「うーん、やっぱり捻くれてます」マナは不満そうであった。「でも、これで服が着られますよ！　さあ！」
「お、おい、ちょっとまって――」
マナはエルレインを強引に試着室に連れ込んだ。マリナの時と言

い、いったい、コイツは何をやっているのだ……。そう思っていると、マナが試着室のカーテンから、顔だけ出した。
「のぞいちゃ駄目ですヨ」マナの表情は真剣であった。
「誰が覗くか」既に全裸が公開された後だ。
私が努めて冷静に返すと、マナは引っ込んだ。
うーん、エルレインさんも細いですねー。姉妹揃ってうらやましいです。……それは、嫌味か？　え、そんな事無いですよ。あ、これなんかどうですか？　……そんなふりふりしたもの着られるかっ！　マリナちゃんは着てくれたのに……。え、マリナが着たの、ちょっとかして！　あ、エルレインさん、何を……なんで匂いをかいでるんですか？
カーテンの向こうから、声だけが聞こえてくる。
突然、隣から何やら気配を感じた。みると、いつも通りのにっこり微笑を浮かべた長谷川が立っていた。長谷川の体が、何やらうずうずしているようだ。
「お前も……参加してきたらどうだ？」
「よろしいのですか？」長谷川は、やけに前のめりであった。
「いいんじゃないか？」私は適当に答えた。
長谷川が加わり、カーテンの向こうではエルレインの着せ替えショーが開催されたらしい。
わあっ、アンタは化け物！　化け物なんて失礼ですよ、長谷川さんです……えっ、これですか？
シュッ、という音がした。
……わあっ、きゃわいいっ！　お次はこちらなど、いかがでしょうか？　えっ、アタシ、いつの間に着替えたの？　わあっ、やっぱり、細くてスレンダーな人は何でも似合いますねー。
このような会話が延々と続き、私はカーテンの外側で延々と待たされた。
「で、延々待った結果が、それか」
エルレインは、純白のウエディングドレスを着させられていた。

「な、なんだこれは！」本人は気づいていなかったようである。
流石は長谷川の着替え術と言ったところか。
「エルレインさん、素敵ですよっ！」マナの目はきらきらと輝いていた。
「はい、お綺麗です」長谷川も満足そうな微笑を浮かべていた。
「ちょ、ちょっとまって、いくら何でもこれは――」エルレインは狼狽えている。
「嫌ならいいんだぞ。――全裸でも」これ以上待たされるのは困る。
「ぜ、全裸！　……でも、敵に貰った服を着るぐらいなら――」
「エルレインさん……」マナの瞳がうるうると潤んだ。
それを見るなりエルレインは動揺し、ついに耐えきれなくなったのか、叫んだ。
「――だあっ！　もう、わかった。わかったから普通の服にしてえっ！」
結局、ここは学校ということもあり、天照高校の制服になった。
「おそろいですねっ！」マナはうれしそうだ。
「制服も素敵です。お似合いですよ」長谷川もニコニコ微笑で褒める。
「べ、べつに……あたしは……」
エルレインは、二人に褒められて、まんざらでもない様子であった。
「これぞ、魔法の力です！」マナは杖を掲げて誇らしげに言った。
そう言えば、杖は魔法の方向性を示すとマナは高説していたな。
「どーですかっ！　これでかいちょーさんも、わたしの魔法を信じる――」
私は、マナの杖を取り上げた。マナが『魔法』なる不可思議な手品を行なった時、決まって杖を振っていた。危険因子の芽は早めに摘んでおかねばならない。もっと早くこうするべきであったのだ。
マナはあんぐりと口を開け、かえしてー！　かえしてー！　と駄々をこねる。

そういうわけにはいかない。何故かは判らないが、私の中の何かが、この杖を取り上げろと脅迫する。

何だろうか、非常に恐怖を覚えるイメージがある。夕焼け、オレンジ色の空に浮かぶ、銀色の巨大な何か。まさかＵＦＯかとも思ったが、現実的にあり得ない。思い出そうとすると、頭が痛くなる。まるで、マナの記憶喪失が移ってしまったかのようだ。

とにかく、杖を取り上げることでその恐怖は和らいだ。

「ちょっと貸してもらうだけだ。二十歳までな」

「そんなぁ」マナはがくっと肩を落とした。

「ところで酔っ払い、エルレインの処遇だが」

「そーです。エルレインさん……」マナは不安げな表情である。

「とりあえず『囲う』ぞ。今度は『保護する』的な意味でな」

マナの表情がぱあっと明るくなった。

「それでこそ、みんなの平和を守るかいちょーさんです」マナはうんうんと頷いた。

「さてと、自称暗殺者をうちの地下牢に運んで鎖に繋いだわけだが」

「なんで、こうなっちゃうんですかっ！」マナが噴火したように怒った。

「……こんなことして、ただで済むと思うなよ」

エルレインが呪詛の念を込めたように、私を睨んでくる。

「何がだ？　自称隙間ターミネーターのエルレインさんを、丁重に地下牢にお運びして。鎖にお繋ぎしたわけだが何か？」

「せっかく仲良くなれると思ったのに……あれ、かいちょーさん、なんでやけに説明口調なんですか？」

マナは意外と目敏い。本来は褒めるべきなのだろうが、今自覚されてしまっては計画が進まない。

「いろいろあるのだよ、酔っ払いくん」

私があえて言うと、マナは頬を膨らませた。

「もう酔っ払いじゃありません！　いい加減、名前で呼んでくださ

いよう」
「だめだ。これは罰なのだ、酔っ払いくん」
「せ、せめて『ちゃん』に……」マナはにへらと愛想笑いを作った。
「酔っ払い『くん』」語尾を強調した。
「……ううっ、かわいくありません」マナは見るからに落ち込んだ。
「罰だからな」
「ううっ、いいですっ！　それはそうと、女の子を牢屋なんかに繋いだら駄目です！　女の子は優しくしてあげないといけないんですよ」マナは眼を閉じ、ばいんばいんの前で手を組んだ。祈るような、夢見る乙女のポーズであった。
「どうした、内なる乙女が風邪をこじらせ、熱暴走したあげくに外側に出てきてしまったのか？」
「かいちょーさんの言うことって、たまにわかりません」マナはきょとんとしていた。
　私は、少し傷ついた。そんなことはつゆ知らず、マナはぱっと表情を明るくする。
「かいちょーさん、良い考えがあります」
「良い考えじゃなかったら『ぺんぺん』な」
「うっ……いいですよ、受けて立ちましょう！」
　マナは人差し指を立てて、マナは得意げに言う。
「ごめんなさいって、あやまればいいんですよ」
「さて、自白剤の投与だ」後に『ぺんぺんの刑』が確定した。
「――ドラッグだめえっ！」マナは牢屋の前に立ちはだかる。
「安心しろ、人畜無害だ」根拠はない。
「ダメ、絶対！」マナは腕を交差して、ばってんを作った。
「何処かのキャンペーンみたいな台詞はやめていただけないか。かえって信憑性が増すぞ――長谷川」
「御意にございます」長谷川は白衣を羽織ってにこにこしていた。
「長谷川さんっ？」マナは狐につままれたような顔をしている。
「安心しろ、長谷川は医者でもあるらしい。処方箋は書いて貰った

から合法だ」
「そ、そういう問題では――」
長谷川の持った注射針が、きらりと光った。私がライトで照らしたのだ。
「――ひいっ！」マナは尻餅をついた。
よほど注射が怖いのか。お前、本当に歳いくつなのだ。
「エルレインさんがかわいそうですよう！」
「……哀れむな」
「えっ？」
声の方を見る。すると、鉄格子の向こうから、エルレインがマナを睨んでいた。
「で、でも、こんなことされたら――」
「――敵に哀れまれるほうが、よっぽど屈辱だ！」
エルレインが顔を真っ赤にして吠えた。マナは寂しげな表情になった。
「エルレインさん……」
「――投与」
「かしこまりました」
長谷川は牢屋の中に入り、にこにこと注射針をエルレインに近づける。
「ふんっ、そんなもので、アタシの心をどうこうできると思うな――」
「さて、根掘り葉掘り、お前の交際歴から性癖、人に言えない恥ずかしい秘密に至るまで、洗いざらい白状して貰おうか」
「ちょ、ちょっとまて……未来のことについてじゃ――」エルレインの頬を汗が流れる。
「せっかくだ。気にするな」
「いやいやいや！　ちょっと待て！　待て！　待って！」エルレインは暴れ、鎖がガチャガチャと音を立てる。長谷川は注射針を近づけてゆく。

「安心しろ。私は哀れんだりしない。全力で楽しんでやる」
「この外道！　やっぱりあんたは思った通りの最低の男だ！」
エルレインは吠えた。瞳は激しい憎悪で血走っていた。
「――だめえっ！」マナがエルレインを庇うように立ちはだかった。
「お前……」エルレインが目を見張る。
「どけ、酔っ払い」私はマナに言った。
「酔っ払いじゃありません」マナは私を真っ直ぐに見据えた。
「貴様、どちらの味方なのだ。私を守るのではなかったのか？」
「だからって、こんなやり方いけません。話がもっとこじれるだけです！　どうしてかいちょーさんを嫌いになっちゃったのか、ちゃんとお話を聞くべきです！　それでも、どうしてもエルレインさんにちゅーしゃするって言うなら、先ずはわたしからにしてください！」マナは、挑戦的な視線だった。
「マナ……」私はマナをじっと見つめた。
「かいちょーさん……」マナも見つめ返した。
なるほど……覚悟はあるらしいな。
「いいだろう。長谷川――やれ」私は腕を振り、ゴーサインを出した。
「えっ！　ちょっと待って！　こういう時は『いや、お前の覚悟はわかった』とかいって、取り下げるものでは！」マナは悲鳴のような声をあげた。
「物語に影響されすぎだ」
長谷川は、にこにこしながらマナに近づく。注射針の先端が光った。
「ちょ、ちょっと待ってください。――ねっ」マナは長谷川に向けて、ぎこちない作り笑いをする。
「丁度いい機会だ。お前にも白状して貰わなければならないことが山程あるからな」
私は微笑んだ。マナはビクリと肩を震わせ、半泣きになった。
「――ちゅーしゃいやあああっ！」

マナが本能を顕わにしてさけんだ。その時、甲高い声が怒号した。
「――ちょっと待て！」エルレインだった。
「……なんだ」私は訊ねる。
「その子は関係ないだろ……アタシだけにしろ」
「エルレインさん……」マナが潤んだ目でエルレインを見る。
――ほう、そう来るか。
「そ、そんな目で見るな。別に、あんたのためじゃない」
エルレインはマナのうるうるした視線に戸惑っている。私はそれを見て、言う。
「茶番だな」
「何とでも言え」エルレインはぷいと顔を背けた。
「お前、自分が今どういう立場にあるかわかっているのか？」
きっと、エルレインは私を睨んだ。
「心までは売らないぞ」
「なるほど。いいだろう……」
ここまでわかれば充分か。
「要望にお応えして、二人共だ」
「え」「――いやあああああっ！」

マナは注射されたところをさすっている。
「ふっふっふっ……のど元過ぎればなんとやら。こうなったら……洗いざらい全部しゃべってやります。ね、エルレインさん」荒んだ灰色の瞳でやさぐれていた。
エルレインは訝かしげな表情で、マナを見る。
「……お前、いったい何なんだ」
「お前じゃありません。マナです。養女です。娘ですよ。かいちょーさんの」
「なんで、その歳で娘なんか」
また説明せねばならないのか……。いい加減、私も疲れてきた。
「いろいろあって、養女になった」

「夢は魔法少女です」マナは笑顔で言った。
エルレインはそんなマナをまじまじと見て、次に私を見た。
「……なんでこんなふざけた奴を娘に選んだんだ？」
「ひどいっ！　こんなふざけた奴呼ばわりはないんじゃないですか。かいちょーさんはやさしいから、こんなわたしを娘にしてくれたんですよ」
「そのとおりだ」
「かいちょーさんっ！」マナがうれしそうな表情でこちらを見る。
「ふざけてない奴だったら、娘にはせん。施設に送っても勝手に構成するだろう。だが、こいつは別だ。私が直々に相手をせんと、まともな人間にはなり得ない！」
「……なるほど」エルレインは頷いた。
「なにそこ敵同士で納得してるんですか！」
そうであった。エルレインはばつの悪そうな顔をした。
「エルレインさん、なんでかいちょーさんを狙うんですか？」
「おい、何を――」
「こういうのって、本人から直接聞かないとわからないじゃないですか」
確かに理にかなっている。マナにしては実のある意見だ。
「ケンカの原因がわからないと、仲直りもできませんよ」
やはり、こいつはバカだ。
「何がケンカだ、ケンカと言える程やさしいものではあるまい。私は殺されかけたのだぞ！」
マナは首をかしげる。
「うーん、同じ事だとおもうんですけど」
「……同じ事なもんか」エルレインが、呟くように言った。
「エルレインさん？」
エルレインが、私を睨んだ。
「こいつが悪いんだ。こいつが、マリナを殺そうとするから……」
やはり、未来で私がマリナを殺そうとしたのが、この騒動のそも

そもの発端らしい。
「かいちょーさん、そうなんですか？」マナが訊ねる。
「まさか。私があのような日本古来の奥ゆかしさを持つ絶滅危惧種の、清楚な、うら若き乙女を殺すとでも？　それこそ、全人類の損失ではないか。仮にコイツの言っていることが本当だったとしても、マリナを殺そうとしているのは未来の私だろう？　過去の私にわかるわけがあるまい」
「うーん。確かにそうです。じゃあ、なんで未来のかいちょーさんは、マリナちゃんを殺そうなんて考えてるんでしょうか？　――エルちゃん、教えて」
「え、エルちゃん……？」エルレインは動揺している。
「エルレインちゃんだから、エルちゃんです」
「ひ、人の名前を勝手に略すな！　アタシの両親から貰った大切な名前だぞ！」
「ご……ごめんなさいっ！」マナは慌ててぺこりとあやまった。
それを見て、エルレインは気まずそうな表情をした。
「あ、いや、べつに、ちょっと驚いただけで、わかって貰えれば……」
エルレインのぎこちない対応に、マナの反応もぎこちなくなる。
「あ、でも、とっても、綺麗で、いい名前だと、思います」
エルレインは少し頬を染めて、そっぽを向いた。
「……ほ、ほら、仲の良い友達同士では、渾名とかで呼び合ったりするじゃないですか。わたし、それに憧れてて――」
「――アタシはお前と仲良くする気なんかない！」
「あっ、わっ、ごめんなさいっ！　エルレインさん……わたしのこと、嫌いなんですもんね……」マナはまたもや瞳をうるうるさせ、落ち込む。
「あ、いや、嫌いとか、そういうことじゃなくて、アタシはアンタ達の敵で……ああもうっ！　うるうるするなっ！　アタシはそれが苦手なんだ！　……って、アタシは何で敵とおしゃべりしてるんだ

っ！」

エルレインは混乱していた。順調である。

「順調に薬の効果が出ているようで、何よりだよ。まさか、本名だったとはな」

「か、かいちょーさんっ！」

「素朴な疑問だが、未来の人間は、皆そのような個性的な名前なのか？」

エルレインは、沈黙した。

「無駄だ。直に薬の効果が出てくる」

そう言うと、エルレインは口をもごもごさせ、吐き出すようにしゃべり出した。

「アタシだけだ。他の連中はみんな普通の名前だ！　何でか知らないけど、両親が付けた本名だよ！　これでいいかっ！」エルレインの顔は真っ赤であった。

それを機に、私はエルレインの素性を聞き出していった。

わかったことは、マリナ達の団体ＳＮＳは、完全管理社会側から敵視されており、解散するように再三忠告を受けていたこと。それを断わり続けてきたこと。

いつの間にか、マリナの命が狙われるようになり、マリナを守るために戦ったこと。

天才科学者のマユマユなる人物がＳＮＳに加入し、『夕焼けにゃんにゃん』なるタイムマシンを開発したこと。

マリナに内緒でターミネーター作戦が立案されたこと。

そして、その実行犯にエルレインが志願したことが語られた。

ほとんどはエルレインが来る前のマリナの証言と一致している。

しかし、より深い話を聞こうとすると、どうも口籠もる。その反応に、私は少し違和感を感じたが、これが、限界か。私は早々に見切りを付けた。

「さて、夕食の時間だ。牢屋から出ろ」

「は？　何を言って――」エルレインは、きょとんとした。

「私に監禁プレイの趣味は無い」
「既に監禁してるじゃないかっ！」手錠がガチャガチャと音を立てた。
「何を言っている、これはささやかな脅しだ。シチュエーションによって精神状態をコントロールするための定石だよ。それに、自白剤は単なる栄養剤だ。今の法律では、警察でさえ自白剤の使用は禁止されているのだから。一般市民である私が使うわけあるまい。それはただのブドウ糖だ。人体にまったく害はない。むしろ元気になるぞ。まあ、風邪を引いた時の点滴と同じ成分だと思ってくれ。未来や魔法使いの世界に点滴があるかは知らないがな」
エルレインがぽかんとした表情に変わる。
「で、でも、あ、アタシは、自白して……」
「ああ、プラシーボ効果というのを知っているか？　自白はお前の思い込みだ。その証拠に、マナはかかっていない」
「う、嘘だ……」
エルレインの手錠は、長谷川によって瞬時に外された。
「まあ、軽いジョークだと思ってくれ。ほら、歓迎会の時に良くやるだろう？　サプラーイズ。あれと一緒だ」
「過去の歓迎会はトラウマものだな！　この野蛮人！」
「おや、これしきのことで傷つくような繊細な精神の持ち主だとは。マリナなどは吊るされても……ゲフンゲフン」
「お前、今なんて言った！」
「おっと、私は食卓のセッティングをしなくては」
「おい！　待て！　吊るしたって何だ！　吊るしたって言ったよな！　おい！」
エルレインは私につられて牢屋を出た。どうせあのまま正攻法で攻めても、エルレインは頑固に牢屋にとどまっただろう。作戦通りだ。
「まあまあエルレインさん落ち着いて」マナはエルレインをなだめる。

「お前！　……マナとか言ったな。お前はあんなことされて腹が立たないのか」
「慣れです。エルレインさんもすぐに慣れますよ！」マナは力強く断言した。
「ううっ……そんなの嫌だ……」エルレインは半泣きになった。
それにしても、歩いている最中、エルレインは頻繁に眼を顰めている。
「なんだ、いつも以上に目つきが悪くなっていないか？　憎悪の炎に目を焦がされ、ついには悪人の目つきになったか」
「うるさいな！　なんか視界がぼやけるんだよ！　気にするな！」
なるほど。そういうことか。私は緊迫した表情をつくって言う。
「まさか……爆発の時に頭を打って……」
「――ええっ！」
「お前の余命はあと3時間だ」もちろん嘘だ。
「――えええっ！」
わかった。こいつは単純馬鹿だ。

和洋折衷戦争、長谷川のターン。洋室での食事である。
広いテーブルにも関わらず、マナはいそいそと椅子を移動し、私の席の近くへと置いて座る。そして私に、にこりと微笑む。私は無視する。
今宵のメインはハンバーグ。マナのお子様嗜好を反映してのものだろう。
さすがは私の超・執事。有能すぎるぞ容赦がないふざけるな！
エルレインは、長谷川によって強制的にかわいらしいフリフリのパジャマに着替えさせられている。半分は彼女の羞恥心を利用して外に出られないように、もう半分は、どうやら長谷川の趣味らしい。着せ替えが趣味とは、初めて知った事実である。
エルレインは俯き、食事を食べない。今度こそ毒や自白剤が入っていると警戒しているのだ。まあ、私の感覚からすれば当然と言っ

たところだが。
私はエルレインの目の前で容赦なく食べ、彼女の食事を奪った。
「あ、かいちょーさん、それはエルレインさんのごはんですよ！」
「こいつには喰う気がない。食事を残す方が失礼というものだ」私はマリナのクッキーを警戒したことを棚に上げ、言う。「だから私が貰ったのだ」
「でも……」マナは心配そうにエルレインを覗う。
エルレインは何かを堪えるように、下を向いている。
いや、実際に堪えているのだろう。その内に秘めたプライドを。最後の、精神の柱を折らないように。必死で耐えているのだろう。
その時、ぎゅーと、エルレインのお腹から音が鳴った。
エルレインは両腕で腹部をぎゅっと押さえた。歯を食いしばり、恥に耐えていた。
ことりと、エルレインの前に、食べかけのハンバーグが乗った皿が差し出された。
「ど、どうぞ……」マナが震える声で言った。
瞳は潤んでいた。明らかに、ハンバーグとの今生の別れを未練たっぷりに惜しんでいた。断腸の思いでエルレインに差し出しているのが、手に取るようにわかる。
まったく……泣くぐらいならやるな。
エルレインの目がはっと見開き、俯き、わなわなと震えだした。
そして、
目の前に置かれた料理を――勢いよくなぎ払った。
「――あっ」マナの表情が陰る。
「……どう言うつもりだ」私は立ち上がり、エルレインを見下す。
「あ、かいちょーさん、いいんです。わたしが余計なことをしたから――」
「――関係ないっ！　食べ物を粗末にするとはどういうことかと聞いているっ！」
エルレインは顔を上げ、きっと私を睨んだ。黒い感情を感じた。

「茶番はお前らの方だ」吐き出すように言った。
「なに？」私は頭に血が上っていた。エルレインを睨み返す。
「仲の良いのを見せつけて、アタシの暗殺が間違いだったって思わせたいんだろ！」
エルレインは叫んで、部屋から飛び出していった。
「あっ、エルレインさん！」
「追わなくていい」
「でもっ！」
「屋敷からは出られん。問題ない」
「そういう問題じゃ無いでしょう！」
マナはエルレインを追いかけ、飛び出した。
「まったく……」
「――会長さま」長谷川が困惑した微笑みで、私に声をかける。
視線の先を追うと――なるほど、足りない。
「問題ない。対応する」そう言って、床に飛散した食事を回収した。

深夜。ベッドの上で眠る私の体に、何かが覆い被さった。
眼を開けると、エルレインだった。その手に、光るものがある。
窓から射す月光を、その手に持った何かが反射している。
銀色に光り輝くそれは、明らかにナイフであった。ハンバーグを食べる時に使うはずだった銀色のナイフだ。刺されれば、死ぬこともあるだろう。
「待っていたぞ。エルレイン、我が寝屋にようこそ」
「……っ！」急に眼を開けた私を見て、エルレインが動揺する。
「どうした？　殺すのではないのか」
「バカにしやがってえええ！」銀色のそれを、エルレインは振り下ろした。
私は頭の位置をずらすだけでかわし、一瞬の隙を突いて、体勢を入れ替えた。
私に組み伏せられたエルレインが、ベッドの上でもがく。

「くそっ、こんな、離せっ」細い、女の腕。夕日の時のような力は無かった。
私はエルレインのパジャマのボタンを外してゆく。
「な、何を……」
「女が寝屋に来たのだ。どういうことかはわかるだろう」
パジャマの胸元をはだけさせ――。
「や、やめろ……」エルレインの体が小刻みに震える。怯えている。
顔を近づけ――。
「――いやあああああああっ！」エルレインは耐えきれなくなり、悲鳴を上げた。
彼女は、清廉な女であった。そこで私は顔を離した。
「どうだ、何もできまい。こんな細腕で私を殺せるとでも？」
「うるさいっ！　くそっ、力が出ないっ！　こんなの、こんなはずじゃ……」
エルレインは私の下でじたばたもがくが、夕焼けの時のような力は微塵も感じられない。
「『こんなはずじゃ無かった』。負け犬の遠吠えだな」
「黙れ黙れえっ！　『通信教育』で取得した『十徳ナイフ暗殺術』さえ使えれば、お前なんか！」
「無理だ」一言で、私は一蹴した。
エルレインの表情に、戸惑いが浮かんだ。
「何が！　お前もマリナが言ったように、人を殺して社会を変えるのがいけないことだって言うのかよっ！」目に涙を溜めて、エルレインは反論する。
「違う」
「何が違うっ！」
「正当な理由があれば、私は人を殺すことを批難しない」
「なっ……！」
正当防衛、命の危険、他人の命を奪わなければ生きられないシチュエーションなど、いくらでもある。ハンバーグをみろ、見えにく

くなっただけで、我々人間は他の生き物の命を奪って生きながらえているのだから。

私は顔を近づけ、エルレインの瞳を覗き込む。

「人を殺すことではなく――」

彼女の瞳が揺れた。微かに怯えが生じたのがわかった。

「――タイムマシンなどという幻想、非現実に頼ったのが間違いだったのだ」

エルレインは目を見開き、何も言い返さなかった。いや、言い返せなかったのだ。

「お前はタイムマシンなどという幻想に頼らず、お前の力で戦うべきだった。お前の時代で、私を殺すべきだったのだ！」

「……あんたに、何がわかる……アタシ達にはもう、他に方法が無いんだ」

エルレインの瞳から、涙が溢れ、こぼれ落ちた。

「未来のアンタは話し合いにも応じない！　一方的にマリナを殺そうとするっ！　アタシだって戦ったさ！　でも、戦っても勝てなかった！　他にどうしようもなかった！　だから、この方法を選んだ！　アタシは――」

「――だからお前は私に勝てない」

エルレインの体が、ビクリと動いた。

「戦う前から、お前は負けていたのだ」

「アタシが……負け……そんなはずはないっ！」

「いいや、負けだ」

私は顔を、エルレインの顔に近づける。エルレインは耐えきれず、顔を背ける。その耳元に、私は囁く。

「幻想に頼るものに、私は殺せない。私は現実に生きているのだから」

エルレインは、はっとし、目を見開いた。

エルレインの体から、徐々に力が抜け落ちていった。

瞳は、濁った。エルレインは、あきらめたのだ。

「その感情、それこそが、お前の真の敵だ」私はさらに畳み掛ける。
「敵……？」濁った瞳が、少しだけ、ゆれた。
「貴様は、いま諦めた。戦う前から、私の舌先三寸に負けたのだ」
エルレインの表情に、困惑が浮かぶ。
「違うっ……アタシは……タイムマシンに……」エルレインの瞳が揺らぐ。混乱しているのだ。
私は、丁寧に説明してやる。
「わからないのか？　お前は私の考えを受け入れてしまった。――その時点まで、お前は敗北していなかった。『タイムマシンという幻想に頼った、故に、私に勝てない』という理屈を、お前は無意識のうちに受け入れてしまったのだ」
エルレインは、はっとなった。そして、瞳が揺らぐ。
「そんな……そんなっ……！」涙が、じわりと瞳を覆った。
エルレインは、目を腫らしてしゃくり上げる。
「そんなの、屁理屈だっ！」
「そうだ、屁理屈だ。その屁理屈に、お前の覚悟はいとも簡単に崩れ去った。一度負けたからどうした？　お前は生きている。もう一度、未来で私を殺しに行けば良かった。だが、お前は幻想に頼った。お前は未来で戦う事を放棄した。何故だ？　お前が弱かったからだ。――結局、お前の覚悟はその程度だったのだ！」
――うわあああああああああああああああああああっ！
エルレインは、絶叫した。理性が、耐えきれなくなったのだ。
彼女のプライドは、今、ズタズタに引き裂かれた。
今、エルレインの内では、後悔と、失敗の念が渦巻いているだろう。
そして人は、失敗を自覚した時、大きく変革するチャンスを得る。
「だから私が教えてやる」
エルレインは、私を見上げた。
「お前に必要なのは、より強い覚悟だ」
「かく、ご？」

「覚悟をしたものは、覚悟をしていないものより強い」
エルレインは戸惑っている。考えている。葛藤している。
「あんた、何を言ってるんだ……？　何で、なんであんたはアタシにそんなことを……アタシはあんたの敵だぞ」
それでいい。
「お前は、私の審美眼に合格した。理由はそれだけだ」
先程私がエルレインを牢屋に繋いだ理由。そうすれば、マナがエルレインを庇うであろう事は、容易に想像できた。あとは、エルレインがどうでるか、だったのだが、
――エルレインは、マナを庇った。
人は、極限状態の時にこそ、本性が出るという。人を、他人を、敵を、庇う気高き精神、極限の状況での自己犠牲。それこそが、彼女の本質ならば……。
エルレインは暗殺者などに向いていない。やさしすぎるのだ。
そして、その本質に、彼女は気づいていない。
だが、これ以上は語らない。語れば、陳腐なものになってしまうのだから。
ぎゅー、という音が鳴った。エルレインの腹の虫であった。恥ずかしそうにお腹を押さえ、目をそらす。私は彼女の上から退いた。
「……今日は飯抜きだが、明日の朝食は必ず食べろ」
エルレインは無言で起き上がった。はだけた胸元を押さえながら。
「元気のない顔を、マリナに見せるつもりか？」
「……卑怯者」エルレインは私の顔をちらりと見て、すぐにそらした。
「褒め言葉だな」
「……嫌な奴」
「自覚はしている」
「――なら、直せよ」
「必要があれば、な」
私の視線と、エルレインの視線が合わさった。

エルレインはたじろぎ、
「……何も知らないくせに」
そう言い捨て、エルレインは逃げ去るように部屋を出た。
私はベッドに戻った。
その後、エルレインは襲ってこなかった。

洋室での朝食。
エルレインは食卓の前で俯いている。しかし、朝食として目の前に出されたホットケーキを食べようとしない。まだ迷っているのだろう。
……まったく、頑固な奴だ。私は自分のことを棚に上げて思った。
彼女がホットケーキを口に入れるのを、辛抱強く見守る。
エルレインが食事を口にした時点で、『契約』が結ばれるのだ。
『現実を見て進む』という、『契約』が。
すると突然、焦げた臭いが部屋に充満してきた。
「何事だ、火事か！」声を張り上げると、半泣きになったマナがエプロンの裾をいじりながら部屋に入ってきた。
「か、かいちょーさん……あ、あの……」
マナの着用しているエプロンや顔には、何かの粉や焦げが付いている。
その様子から大体想像は付く。
「持ってこい」
「え……？」
「作ったものを持ってこいと言っている」
「は、はいっ！」マナは火蓋を切ったように駆けだした。
戻ってきたマナが差し出したのは、黒い塊だった。
正直……想像以上であった。
おそらくはホットケーキなのだろうが、ほぼ、炭化している。
「なぜ、作った」
マナはもじもじしながら、言う。

「わたしがつくったものなら、食べてくれるんじゃないかなって……その、うぬぼれている訳じゃないんですけど……でも、このままエルレインさんが何も食べれないと、お腹がすいて死んじゃうじゃないですか……そんなの悲しいから……その……」

一生懸命手料理を作ろうとして、失敗。何という王道か。王道過ぎるぞマナ！

「でもごめんなさい……失敗しちゃいました。長谷川さんにも手伝って貰ったのに……」

マナの瞳に涙が溜まってゆく。

「よこせ」私は黒い塊を奪い取る。

「――あっ、ダメですっ！　お腹壊しちゃいますよ！」

口に入れ、咀嚼する――これはっ！　なんという……。

奇跡的なまずさであった。涙がにじみ出てくる。拷問に近い苦しみを感じる。

まずいのを我慢して黙々と食べる。嫌な汗が、全身から噴き出る。

しかし、これぞ王道である。

「か、かいちょーさん……？」マナは目を見開いて、様子を覗っている。

「残したら、もったいないだろう」私は、噛み締めるように言った。

食べ物を粗末にしてはいけないというのが、母の遺言の一つだ。

私は死ぬまで徹底的に遵守する。それが私の王道だからだ。

黙々と食べているのを見て、マナが物欲しそうな眼で見つめてくる。

「……もしかしたら、すごくおいしいんじゃないですか？」

「ほれ」私は黒い物体を切り取り、フォークで刺した。

そのままマナの口元へと持って行く。

「あーん……あむっ。もぐ――」マナは一噛みした途端、硬直した。

「ほれ」マナにオレンジジュースを渡す。

マナはごくごく喉を鳴らして、勢いよく飲み干した。

「ぷはーっ、死ぬかと思った――かいちょーさん、それは危険です

！　そんなの食べたらお腹壊しちゃいますよ！」
「この『危険物X』の創造主が何を言うか！　私は有言実行の男だ。私が食べると言ったのだ。最後まで食べる」
「だめですよう！」マナは黒い危険物を奪おうとしてくる。
「こ、こら、邪魔をするな！」
マナは奪い取ろうと体を近づけてくる。ばいんばいんがあたる。
「だめです！　いくら何でも昨日の『3秒ルール』とは違うんですよ！」
「――3秒ルールって……お前……まさか」エルレインが私を見た。
……マナめ、余計なことを。
マナの言葉を聞いて、エルレインは気づいてしまったらしい。
彼女が床に薙いだ昨日の食事を私が平らげたことに。まったく、意外に聡い奴だ。
未来の王が床に落ちたものを食すなど、知られてはならぬというのに。
「勘違いするな。純然な、もったいない精神からの行動だ」
エルレインはじっと私を見つめてくる。私は気まずくなり、言う。
「それだって、別に喰わなくてもかまわん。私だったら絶対に喰わない。どうせお前とも今日限りだ。夕方になれば捕虜として引き渡すだけだ！　喰わなくていい。むしろ喰うな！」
「大丈夫ですよ。かいちょーさんは確かに毒を盛りそうですけど、こういう時は絶対にフェアなんですよ。ひんこーほーせーです」マナはにっこり笑った。
「使い方が微妙に違うぞ」こいつは余計なことをべらべらと！
私はマナの頭をぐりぐりした。
「いだいいだい！　わたし何か悪いことしましたか！　今のは理不尽ですよっ！」
「うるさい！　口は災いの元だと知れ！　良い機会だ！」
「ひどいっ！　ねえ、酷いですよね、エルレインさ――」
エルレインはホットケーキをナイフで切り取り、口に運んだ。

「エルレインさん……」マナが安心したように、眼を細くした。
エルレインの目が、はっと開いた。
「う、うそだ……」様子がおかしい。何やら、戸惑っているようだ。
「ど、どうしたんですか？　それは長谷川さんの作ったものだから大丈夫――」
「――なんで、何でだよ……」
エルレインの頬を、一筋の涙がこぼれ落ちた。
「どうした、そんなに美味かったか？」
「……同じだ……なんで……なんで……」
彼女が何を感じ、何を思っていたのか、私はわからなかった。
エルレインは泣きながら、ホットケーキに八つ当たりするようにがつがつと食べた。
「マリナ……ごめん……ごめんな……お姉ちゃん……ぇない……」
エルレインは両手で顔を覆い、泣き出してしまった。
わからなかった。彼女がなぜ泣くのか、何も、わからなかった。
長谷川は微笑を浮かべたまま傍らに立ち、
マナはエルレインの頭を「よしよし、大丈夫ですよ」と撫でていた。

第七話　スパイラル・ダメージ

「ほれ」私は、あるものを放り投げた。
「わわっ、わっ！」マナは危なっかしくもキャッチ。「……ん？　これ、何ですか？」
「携帯電話だ」
先日、マナの初登校日のこと。
「アドレス交換しよっ！」というクラスメイトの提案で気づいた。
マナに携帯電話を持たせていなかったのだ。今日ではコミュニケーションを円滑に取るための情報ツールとしては必須。私としたことが、失念していた。
あの時点でアドレスの交換を行なえなかったことは、大いなる機会損失である。
故に、昨日の時点で長谷川に依頼し、マナの携帯を契約してもらったのだ。
「で……これ、何ですか？」どうやら、マナは本当にわかっていない様子である。
携帯の無い発展途上国から来たのだろうか。いちいち説明するのも面倒なので、マナにわかりやすい言葉で教えてやる。
「テレパシーを実現するための道具だ」
「て、てれぱしーっ！　かいちょーさん、いったい、何者っ！」
「私は、お前が何者なのかを知りたいよ」
私のぼやきを聞かずに、マナは目を輝かせてはしゃぎだした。
「よし、では具体的な使い方を教えてやろう。先ずは、私がお前の携帯にかける」
マナの携帯が振動した。
「ほわっ！」驚きのあまり、マナは携帯を取り落とした。「う、動いてます！　魔法ですっ！」マナは本気で怯えていた。
「馬鹿者。ただの振動だ。このようにして」私は通話ボタンを押す。

「ほれ、振動が止まったら、これを耳に当てろ」
「は、はひっ！」マナは言われるがままに、耳元に当てる。
私は少し、距離を取る。
「聞こえるか」
――おわあっ！　しゅ、しゅごいっ！　頭の中でっ、かいちょーさんがっ！
マナはカルチャーショックとでも言うがごとくの驚きようだった。
「どうだ。文明の機器はすごいだろう」
――はい。かいちょーさんはテレパシーも使えるんですね。
「いいか、テレパシーでは無く、これは携帯電話というもので、口元にあるスピーカーから――」
――すごいですっ！　テレパシーが使えちゃいました。
ん？　携帯電話の音にしては、あまりにクリアすぎるような……。
――かいちょーさーん！
マナは、こちらに向かって手を振る。
よくよく目をこらしてみると……マナは、携帯を上下反対に持っている。
そして……私は、恐る恐る近づく。
――これ、すっごくおもしくって、便利ですね。
マナは、口を動かさずにそう言った。私は、驚きのあまり、自分のスマートフォンを落とした。
……これは、一体どういうことなのか。まさか、本当にテレパシーが――
――何を言ってるんですかかいちょーさんっ！　さっきからテレパシーで話してるでしょう？
……私の内なる声が、ダイレクトに伝わっている？
――はい。しっかりと聞こえてますよー。
マナは、ぶんぶん手を振った。
私の恐怖が、臨界点に達した。
「――頼むからそれを止めろおおおっ！」

私はマナに心を読むことを止めさせ、携帯電話というものの、正しい知識を教えた。
「むー……なんでですか。テレパシーの方が便利なのに」
「他の人間にも、絶対にやるなよ」
「やりたくたってできませんよう。かいちょーさんとだけです」
背筋が、ぞっとした。
「止めろ、まさか、今も私の内なる声を……」
「残念ながら、さっきの『魔法の杖』を持ってないと、できないみたいです」
「魔法の杖ではない。携帯電話だ」だからと言って、携帯電話を持てばテレパシーができるなどと、あまりにも常軌を逸している。
何故、私の周りはこんな奴ばかりなのか。
――えっ？　こんな奴ばかりって、どういうことです？
私は、自分の『縁』を呪った。

私とマナはいつも通り、学校にて学業をこなした。
放課後になると、長谷川にエルレインを連れてこさせた。
現在校舎内には生徒、先生共に一人も居ない。密会にはもってこいだ。なるほど、アカネ嬢はこのことを言っていたのか。
いやまて、そうなると、アカネ嬢はこうなることを全て見通していたことになり……『風が吹けば桶屋が儲かる』……いや、まさかな。
私は背筋に寒気を感じ、考えるのを止めた。
と、その時、

《――にゃおーん！》下手な猫の鳴き真似が響いた。

「これは……」昨日と同じ、声？
「――マリナっ？」エルレインが辺りを見回す。
「にゃんにゃんですっ！」マナがステッキを取りだし叫んだ。

窓を見ると、太陽が赤く染まっている。
がらりと教室の扉が開き、黒い人影が飛び込んできた。
それは、明らかに水鏡マリナだったが、
「マリナあっ！　良かった、体大丈夫――」エルレインが歓喜のあまりマリナに飛びつこうとする。
だが、捕虜の引き渡しにはまだ早い。私はエルレインの首根っこをつかみ、全力でくい止める。
確かに、マリナなのだが、
「マリナ！　サイドポニテにしたのっ！　きゃわいいっ！」エルレインが頬を上気させて興奮した。
マリナは長い黒髪をサイドポニーテールに縛っていた。
しかし、変化はそれだけではない。
以前にあった時の儚さは影をひそめ、腰に手を当て背筋をぴんと張ったその姿は、堂々とした雰囲気を醸し出している。
目があった瞬間、マリナはキッと私を睨んだ。強気を感じさせる鋭い視線が、私を貫かんばかりに注がれる。サイドポニーテールのマリナは私に向かって指さす。
「こんにちは伊統会長――今日こそあなたを殺すわ！」
「は？」言った瞬間、マリナの手から何かが放たれ――
――私の頭の横すれすれを、黒い何かが凄まじい速度で通り過ぎた。
背後で轟音が響いた。振り返ると、黒板の中心がぽっかりと空いており、そこから至る所にひびが広がっている。何かが、後ろの壁を貫いたのだ。
「ちっ、外したか」マリナは悔しそうに舌打ちして、奥歯を噛んだ。
彼女は、私の知っている水鏡マリナではない……？
「マリナ！　舌打ちっ？」エルレインが驚愕している。
「お前……誰だ？」私は訊ねる。
マリナは露骨に眉をひそめ、不快感を露わにする。
「はあ？　あたしの顔を忘れたっての？　人を逆さにつり上げて…

…あんな仕打ち……覚えて無いって言うの？」マリナの顔が、怒りで引きつった。

「はて、何のことかな？」私がいろいろやってしまったのは、もっと清楚で可憐な水鏡マリナだ。「お前など、私は知らない」

すると、マリナらしき少女は目を見開いて、

「このっ、ホントに覚えていないっての！　あんたがあたしの服を……服を――引き裂いてっ！」マリナは瞳を滲ませて、自分の体を抱きしめた。

「どーいうことだ会長！　アンタやっぱりマリナに何かしたのかおらおらこの野郎っ！」エルレインが私に詰め寄り、首絞め揺さぶる。

――くっ、息ができんっ、苦しいっ！

マリナは再び私を指さした。

「――ぜえったい、殺してやるっ！」

その前に、今のままでは、エルレインに絞殺されるのだが……。

「ま、マリナちゃん、殺すってどういうことですか！　落ち着いてください。どうしちゃったんですか！」

「そ、そうだ……」エルレインが私の首を放した。

マナの言葉に、マリナはたじろいだ。

「うっ……マナちゃん、友達として忠告するわ。そこを退きなさい！　危ないわ！」

マナのことも知っているようだ。

「……ということは、本当に、貴女はあの水鏡マリナだというのか？」

マリナは訝かしげな表情になった。そして、自分の胸に手を当て、こう言う。

「『あの』も何も、水鏡マリナはあたし一人しか居ないわ！」

なんということだ……。彼女が……あの水鏡マリナだというのか……。

「清楚が……可憐が……純白が……」あまりのショックに、私は目眩を感じた。

「かいちょーさん、清楚で可憐で真っ白な女の子なんて、幻想ですよ？」マナは悟りきったような穏やかな表情で言った。
「お前が言うな！　お前がっ！」
「マリナちゃんはきっと、機嫌が悪いんです。誰にだって、そんなときはありますよ」
　マナにしては、やけに大人びた解釈である。確かに、言い分はわからなくもないが、あの変容ぶりは……そんなことで説明がつくのだろうか。
「――マリナっ！」
　エルレインの声に反応して、マリナは視線をエルレインにやった。
「何よ、さっきからぎゃあぎゃあうっさい――」
「マリナあああっ！　アタシだあああっ！」マリナに見られて興奮したのか、エルレインはうれしそうに叫んだ。
「――あんた、誰？」
　マリナは、冷たく言い放った。
「……へ？」エルレインは、固まった。
「……だから、あんた誰よ」マリナは面倒臭そうに訊ねた。
「誰って……お姉ちゃんだよ？」エルレインはぎこちなく笑った。
　マリナは心底嫌そうな表情になって、
「うわあ……初対面の相手に『お姉ちゃん』って……」
　ウジ虫を見るような眼で、
「気持ち悪い」
　そう、吐き捨てた。
　エルレインの顔色が、みるみる白んでいった。見開かれた瞳は揺れ、焦点が定まっていない。膝が小刻みに震えている。
「マリナ……？」ゆらりと、マリナに近づこうとする。
「な、何よ」マリナは頬を引きつらせて、エルレインから離れる。
「じょ、冗談だよね……。あっ、そっか、昨日のこと……怒ってるんだ」
「はあっ？　何言ってんの？」マリナはみるみる不愉快な顔になっ

た。
「マリナ、ごめん。勝手に暴走しちゃったのはあやまる。でも、アタシはマリナの為を思って――」
「うわぁ、何、今度はいきなり『ごめん』ですって？　あんた、いったい何なの？　頭大丈夫？」
思いがけぬ冷たい言葉に、エルレインは狼狽する。
「お姉ちゃんだよ……忘れちゃったの？」
マリナは怒ったような表情になり、叫ぶ。
「――あたしに姉などいないっ！」
マリナの気迫に、エルレインの足が止まった。
「……冗談……だよね……マリナ――」エルレインは力なく笑う。
「――その名を呼ぶな！」
「マリ――」
「――近寄るな！」
「マ――」
「――会長の下僕の分際で汚らわしいっ！」
「……う、そ」エルレインの表情は消え失せ、崩れ落ちた。
その反応を見て、マリナは少なからず動揺しているようだった。
「な、何よ……あたしは、ずっと一人だ」
握った拳を胸に当て、何かに耐えるように、自分に言い聞かせるように呟いた。
「生まれた時から、ずっと……！」
マリナは腕を背中に回すと――カシャンという音と共に、黒い何かを引き抜いた。
――こちらに向かって駆けてくる。跳び上がる。
「マリナ、待って！」エルレインが悲痛な声をあげるが、マリナは止まらない。
身の危険を感じ、私は側にあった椅子を咄嗟に取り、盾にする。
マリナは私に向かって思いっきり『黒い何か』を振り下ろした。
『黒い何か』は意図も容易く椅子の木の部分を粉々にし、金属で

出来たパイプの部分がひしゃげた。これでは――盾にならない。
マリナはまたもや『黒い何か』を振り上げる。私は飛び退き回避する。『黒い何かは』机に当たり、机もまた粉々に砕けた。
ちっ、速い。まるで戦闘訓練を受けたプロのような無駄のない動きだ。このままでは追い詰められるのも時間の問題か。
私はマナから取り上げていた白いステッキを思い出した。アクセサリーの様に小さくなったそれを掴み――握る。すると、それが巨大化し、ステッキとなった。
私はステッキを構える。
ガチイッ！　と硬い物同士がぶつかり合う音が鳴った。強い衝撃が腕に伝わった。
ガチガチと、白いステッキと『黒い何か』が噛み合う。この杖――使える！
『黒い何か』を見る。それはどう見ても――フライパンであった。
「伊統会長……ぎっ……覚悟しなさいっ……」マリナの声から力みを感じる。
「なんだそれは……ぐっ……おままごとのつもりかっ……」
何という馬鹿力か。藤堂春香以上だ。この細腕のどこに、こんな力が秘められているのか。あの筋肉のようなバイクスーツに秘密があるのか。
「れっきとした武器よっ！　これでぶたれたら痛いし死ぬでしょ！」
マリナは勝ち気な笑みを浮かべた。
エルレインがマリナの側に駆け寄る。
「マリナ！　駄目だよ！　そんなに暴れたら体が――」
「うるさいっ！　あんたにあたしの何がわかるっての！　――他人のくせに！」
「マリナ……？」
マリナはフライパンを薙ぐ。フライパンはエルレインの頭を撲ち、エルレインは後方に倒れた。
「エルレインっ！」「エルちゃんっ！」

マリナは後方に跳び上がり、距離をとった。
「今だ、『加速装置』――暴走超特急フライパンビーム！」
突如として、マリナの腕から黒いビームが放たれた。反射的にマナのステッキで受け止めようとしたが、衝突の際に弾かれた。黒いビームの軌道が逸れ、私の頬をかすり、後ろの壁に激突した。背後をちらりと見ると、壁の穴がもう一つ増えていた。
もし当たれば、確実に死ぬ。背中にじっとりとした汗が吹き出す嫌な感触を感じた。
「マリナが……あたしを……撲った……？」エルレインは顔面を蒼白にして、頭を抑えていた。瞳は焦点が合っていない。
「な、何よ、邪魔したあんたが悪いんだからねっ！」
マリナの声に、エルレインの瞳が動いた。潤んだ瞳がマリナを真っ直ぐ捉える。
「マリナ……酷いよ……アタシが悪かったかも知れないけど、アタシのこと知らない振りするなんて、アタシ達、たった二人の家族じゃない！」
「いい加減にして！　あたしに家族なんかいないっ！」マリナはフライパンを横に振った。
「マリナ！」エルレインが立ち上がり、マリナに詰め寄る。
「な、なによ……なんなのよ……」マリナは怯えたように後退る。
「マリナ、ごめん。お姉ちゃんあやまるから！　何でもするから、お願いだから機嫌直して！　知らない振りなんかしないで！　お願い！　マリナに嫌われたら、アタシどうして良いかわからなくなっちゃう！」エルレインは切実に訴えた。
「うるさいうるさいっ！　あんたなんか知らないっ！　来ないで！　来ないでよっ！」
「あっ、待って！　マリナっ！」
マリナは怖気立ったように逃げ出した。その背中を、エルレインが必死で追う。
何が、どうなっているのだ？　私はわけがわからず、二人のやり

とりをぽかんと見ているしかない。
「かいちょーさん、追いかけないと！」
マナに急かされ、私も二人の後を追った。二階と三階を繋ぐ階段の処に、二人はいた。いや、三人いる。
「マコト！　お前からもマリナに言ってくれ！」
マコトは青い旗をなびかせて、階段の上側に立っていた。その後ろには、怯えたように、マリナが隠れている。さらに後ろには隙間が少し空いた窓がある。きっと、誰かが閉め忘れたものだろう。
「……うるさい。あなた、誰？」
返ってきたマコトの言葉は冷たいものだった。マコトは青い旗を振り、はためかせる。
「マリナをこんなに怯えさせるなんて、許さない」
「マコト……？　マコトまで何言ってるの？　アタシ達、友達だろ？」
エルレインは階段の下方からぎこちなく笑いかける。その構図も相俟って、すがっているように見えた。
「友達？　ウチの友達はマリナだけじゃん。あなたなんか知らない」
「そ、そんな……嘘……嘘だ……」
――にゃあーん、にゃあーん！　帰還の警告を告げる鳴き真似が、当たりに響く。
「マリナ、一旦撤退。ウチがコイツをくい止めるから」
「マリナ、待って！」
エルレインは上方へと腕を伸ばすが、マコトの旗の先端に弾かれてしまう。
「……痛っ」エルレインは腕を押さえた。
「待って、マリナちゃんっ！」マナが声を振り絞る。
マリナがマナに気づき、そして、その隣にいる私に気づく。苦虫を噛みつぶした表情になった。
「……き、今日は変な邪魔が入ったけど、い、伊統会長、次は殺すわ。その首洗って待ってなさいっ！」捨て台詞を吐いて、マリナは

窓の隙間に飛び込んだ。その体は吸い込まれるようにして隙間に消えた。

――にゃあーん、にゃあーん、にゃあーん！

「マリナ！」エルレインは悲痛な叫びを上げながら階段を駆け上ろうとするが、反対にマコトに押し倒されてしまう。エルレインはごろごろと階段を転げ落ちた。

マコトは私に非難するような視線を向ける。

「最低」

マコトはくるりと青い旗を回し自分の姿を隠す。そして、青い旗と共に窓の隙間に消えていった。

「待って！　お願い！　一人にしないで！」エルレインは這うように階段を駆け上り、窓の隙間に手を伸ばす。

――バチイッ、と緑色の閃光と火花のような光りが散り、エルレインは吹き飛ばされてしまった。そのまま下階の床へ背中を強打する。

「エルちゃんっ！」マナが駆け寄り、抱き起こす。「大丈夫ですかっ！」

――にゃあーん、にゃあーん、にゃあーん！　警告は未だ、鳴り響いている。

「そんな、未来に、帰れない……？」エルレインは、弾かれた手をじっと見ていた。

マリナ達、隙間ターミネーターは去った。

残されたのは、崩れ落ち、放心するエルレインだけ。

「嘘……嘘だ……こんなの……聞いてない……アタシは……」

エルレインは壊れた機械のように、ぶつぶつと繰り返し呟いている。

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》下手な猫の鳴き真似と共に、夕日が沈んだ。

教室に戻る。二つの巨大な穴が空いていたはずの壁は、何事もなかったかのように元に戻っていた。机も椅子も同様だった。一見、何も変わっていない様に見える。

「かいちょーさん……いったい、マリナちゃんに何が起こったんですか？」

マナが、助けを求めるような視線を私に向けた。

「わからん……。わからんが……」

何かが、変わってしまった。崩れ落ちるエルレインを見て、それだけは判った。

私達は半ば強引に、エルレインを屋敷へ連れ帰った。

エルレインは屋敷に戻っても、夕食の場でも、人形のように無表情だった。自分の殻に閉じこもり、誰の話も聞こうとしない。

マナの数々の励ましの試みも失敗し、長谷川もほとほと困ったような微笑を浮かべていた。慰めようと思ったのか、マナがマリナの名前を挙げた途端、エルレインは突然大声を上げ、気を失ったように倒れ込んでしまった。

「かいちょーさん……わたし、何もできません。何かしてあげたいのに、助けてあげたいのに……」マナはショックで頬を濡らしていた。

「……お前が泣いてどうする」

「でも……」

「泣いている暇があったら考えろ」

マナは俯き、はっと顔を上げた。

「かいちょーさん」濡れた瞳で上目遣い。

「なんだ」

「お酒ください」

「――お前は酒で現実逃避するきかっ！」私はマナをぐりぐりした。

「いだいいだい違いますよう。魔法を使って――」

「はっ、また魔法か！　いい加減その幻想から離れろ」

「だって――」マナは泣きはらした目でじっと訴えてくる。
「だってじゃない！　いいからもう、ごはん食べて寝ろ！」
まったく、今夜は毒の盛りようが無いように、鍋にしたというのに……。
「でも、エルちゃんが……」
「いいか、人間はその時々によって、求められる役割があるのだ。エルレインがどんよりしている時に、お前までどんよりしたらどうなる？」
マナは視線を右上にやった。必死で考えているのだ。
「えっと……もっと、どんよりしちゃいます？」
「そうだ。そして、お前の利点の一つは持ち前の明るさだ。お前の太陽のような明るさでエルレインの雲を晴らしてやらなくてどうする？　こんな時こそ、お前は元気に振る舞わなければならない。それがコミュニケーションであり、家族というものだ」
「かぞく……」
マナは唇に手を当て、考えた。そして、
「かいちょーさん、わたしがんばります」両拳をぎゅっと、ばいんばいんの前で固めた。
「その意気だ。ごはんを食べて元気を補充しろ。そして笑え。お前の笑顔で元気をエルレインに分けてやれ」
「はいっ！」マナは涙を拭き、元気いっぱいに笑った。駆けるように部屋を出て行った。
マナはそれで良い。だが、私はそう単純には行動できない。私には、私なりの役割を担わねばならん。私はマリナ達にいったい何があったのかを分析せねばならない。
今日のマリナは、まるで別人のようであった。いや、『別人のよう』ではなく、全くの別人と言ってもよいぐらいだ。
それにマリナは、エルレインのことを完全に忘れている。あれは、演技などではなかった。マリナだけではなく、マコトもエルレインのことを忘れていた。

まるで、エルレインの存在が未来から消えてしまったかのように……。

まさか、そういうことなのか？　過去と未来の隙間に囚われるとは。

最悪の結論が、私の脳裏に浮かび上がる。

くそっ、そんなことがあって良いのか。

これでは……私の計画も全て水の泡ではないか。

深夜、エルレインは眼を覚ました。

「よく眠れたか？」

エルレインは、私をぼんやりと眺めた。

「……かい、ちょう？」眼鏡が無くて見えないのか、眉をしかめた。

あれから私は、一睡もせずに、彼女の傍らで見守った。側には眠ってしまったが、マナもいる。

「あれ、アタシ、いつの間に寝ちゃったんだろう……」

私は、何も答えない。エルレインは力なく笑う。

「……アタシ、悪い夢を見たんだな。ああよかった。ばかばかしい」

「エルレイン」私は彼女の名を呼ぶ。エルレインはびくっと体を震わせ、それが気のせいであったかのように、畳み掛けるように話す。

「安心した。夢だったんだ。……おかしいよなアタシ、敵の前で眠りこけるなんて。いつ殺されてもおかしくないのに。アタシって、やっぱり暗殺者に向いてないのかな？　アタシさ、実際わかってんだ、自分がドジだって……でも、あの子……ううん、違う、アタシは――」沈黙を埋めるように話す。

きっと、自分が何を喋っているのかすら、わかっていない。

瞳には、うっすら涙がにじんでいた。

エルレインは、全てを夢のせいにしようとしている。そうでなければ、精神が耐えられないのだ。彼女は今まさに、幻想に溺れようとしていた。

一つの非現実的事象を肯定してしまったが為に、全てが狂い始め

ている。
　このままではいけない。何か、現実的な解答が必要だ。
　そうだろう、伊統会長。
　自分に何度も言い聞かせ、打開策をひねり出そうとする。
　だが、その解答は、容易に見つかりそうにはなかった。
　なぜなら、私の推測が正しければ、それは世界を相手にするのと同じ事なのだから。

　翌日、私はエルレインを屋敷に残し、マナと共に登校する。
　マナはエルレインのことを心配していたが、学校を休ませるわけにはいかなかった。
　非現実的な事象に心を奪われ、日常まで狂わすわけにはいかないのだ。
　いつも通り、何事もなかったかのように学園生活を送るしかない。
　マナにもそれを徹底するように言い含めたが、今日のマナは上の空だった。藤堂や霧島書記長も不審に思っているようだったが、私はしらを切った。
　やがて放課後。私とマナは言い合いをしていた。
「エルちゃんとマリナちゃんを仲直りさせるべきですっ！」
「だからどうやってと聞いている！　マリナ達はエルレインのことを忘れている。仲直りするも何も無いではないか！　何とかしたいなら具体的なプランを提出せよ！」
「わかりません！　わかりませんけど、エルちゃんが苦しんでるのに、わたし達だけこんな、のほほんとしてて良いわけありませんっ！」
「のほほんとしているわけではないっ！　私達は懸命に日常を生きているのだ。わけのわからん隙間ターミネーターとやらにばかり、かまってはいられないのだ！」
「かいちょーさんはエルちゃんの苦しみを感じないんですか！」
「感じる感じないではない。感じたからと言って、何かが変わるの

か！」

「かいちょーさんの分からず屋！」

マナは怒って走り去ってしまった。おそらくは先に屋敷に帰るつもりなのだろう。

私とて、エルレインの苦しみがわからないわけではない。孤独の苦しみは、人一倍経験している。だが、簡単に同情するわけにはいかないのだ。同情したところで何も変わらない。

彼女を救う、具体的で現実的なプランが必要なのだ。エルレインを取り巻く問題は既に私のキャパシティを越えている。忘れられてしまった人物の記憶を、どうやって取り戻せと言うのか。私にも出来ることの限界がある。

くそっ、こんな事では、完全管理社会など夢のまた夢ではないか。全ての問題を解決するのが、私の目指す完全管理社会ではないのか！

「――いーとーくんっ！」

突然、後ろから声がかけられた。振り向くと、

「わあっ、あ、アカネ嬢っ！」どうしてここにっ！

赤毛ポニーテールのアカネ嬢は、あははっ！　と笑い、

「あら、『わあっ』て、イトーくんもかわいい驚き方をするのね。おねえさんきゅんきゅんしちゃいそう。でもなーに？　そのいやーな奴が現われてびっくりしたぞ的な顔はっ！　アカネさんに会えたことを光栄に思いなさいっ！」

アカネ嬢はずかずかと私に詰め寄る。私は後退る。詰め寄られる。後退る。

すぐに壁に行き着いた。もう、逃げ場はない。

「……な、何しに来たのだ……アカネ嬢」

全身から嫌な汗が吹き出る。体が、この女性と関わることを拒否している！

「いやー何だか修羅場だったわねー」アカネ嬢の目が、邪ににやけている。

「何が」

「感じる感じないの、やいのやいの」
「貴女は大きな誤解をしているっ！」
「いいのいいの。今時の高校生はずっこんばっこんやってるんでしょ？」
アカネ嬢は左手で輪っかを作って右手の人差し指を出し入れした。
「私の学園でそれはないっ！」品行方正がモットーです。
「まーそれを盗撮するための『次世代防犯システムリガン』ということで」
アカネ嬢はにっと白い歯を見せた。
「盗撮ではない！　監視だ！」
「やられる方からすれば同じ事じゃない？」
アカネ嬢は無垢な笑顔を作って頭を傾げた。私は言い返せなかった。
「ま、そんなわけで『リガン』は用法用量を守って正しく使いましょーほーれ」
アカネ嬢は、赤い小箱を私に放り投げた。
「これは？」
「『リガン』のマスターキー」
箱を開けた。中には、二対の透明な、
「コンタクトレンズ？」
「そのとおりっ！」ビシイッとアカネ嬢は私に指を突きつけた。「いやーそれ作らせるのにそうとう苦労したわー。何人か廃人になったけど、気にしないでね。治療費は金額に上乗せしておくから」アカネ嬢は無垢で悪魔のような笑みを浮かべた。
「嘘だろう」すぐさま私は言う。
「ええ嘘よ」間髪入れずアカネ嬢は返した。
「本当に貴女という人は毎度まいど！」
「あははっ！　愛嬌あいきょー」
「この処――」
――何かが鋭い勢いで私の頬すれすれに飛び交い、背後の壁に突

き刺さった。
「それ、『チェス』って言うの。あははっ！」アカネ嬢は投擲し終え、私に向かって腕を伸ばしていた。
全身に鳥肌が立った。
――殺そうと思えば、殺せていたんだぞこの野郎。
アカネ嬢の瞳はそう語っていた。
「ほらー、何か武器が欲しいってこの前言ってたじゃない？」
「それが……これだと？」私は壁に突き刺さったものを見る。
どう見ても……、
「ロケットペンシルにしか見えないでしょー。あ、今の子、ロケットペンシル知らないかな？　シャーペン全盛期だもんね」
「ぎりぎり知っている」
「それは話が早い。それよ」アカネ嬢は、人差し指を立てた。
「だが、私の知っているロケットペンシルはロケットのように飛んだり、壁に突き刺さったりはしないっ！」
「当たり前じゃない」
何言ってるんだコイツ的な冷ややかな視線で、アカネ嬢は私を見下す。
「ロケットペンシルは使い終わった先端をおしりに刺すと、『あんっ……』って具合に新しい先っちょが飛び出すのよ。まるで――」
「これ！　見ろ！」私はロケットペンシルが真っ直ぐに突き刺さった壁を指差す。
怒りは噴火寸前だった。
いや、もう噴火していたのかも知れない。わからない。助けてくれ。
「あれ、そんなに興奮してどうしたの？　まさカ、アカネさんのおねえさん的美貌に惹かれて欲情して――」
「安心しろ。それはない」私は努めて冷静に返した。
「それはそれでさみしいっ！」アカネ嬢は手のひらでおでこをぺちんとやった。

反応がたまに古いのは、狙ってやっているのか。
「アカネ嬢よ、頼むからこれ以上の脱線はやめて――」
「――あら、お願いするときって、どうするか知ってる？」
「土下座はせん」
「えー。――して？」アカネ嬢は、おねだりするように上目遣いで媚びた。
「やだ」
「いとーくんのケチ」
「ケチで結構」
「あははっ！」
「わはは」
「あははっ！」
「わはは――って笑っている場合では無いっ！　わかったぞ。きっとこの『チェス』とやらは、投擲するとロケットのように飛び出し標的へと一直線に突き刺さるのだろう！」
アカネ嬢の目が細い下弦の月のようになった。
「ぶぶーはずれー。投擲はアカネさんの技術です。特許取得中」
「それはそれで恐いなっ！　貴女は本当に人間かっ！」
「メイビー（たぶんねっ♪）」アカネ嬢はぺろっと舌を出した。
本当に人間か疑わしいところが、この女性の恐ろしいところだ。
「……それで、これは」
「いとーくん」アカネ嬢は、急に真剣な顔つきに変わった。
「な、何だ」
アカネ嬢は、私の顔に自分の顔を近づけた。甘い果実のような、良い、香りがした。
よく見れば、きめ細やかな、なめらかな肌であり……。
「いい？　今から言うことはすごく重要だから、心して聞いてね」
アカネ嬢の薄い唇が、何処か官能的に動いた。
「あ、ああ……」私は喉をゴクリと鳴らした。
「お客さんには、お茶を振る舞うものよ」

お客さんには……お茶……それは、何と重要な……、
「……はあ？」
「のどかわいた」どこか恥ずかしそうに、アカネ嬢は言った。
「……だから？」
「もう、決まってるじゃない？」アカネ嬢は私の背中を思いっきりひっぱたいた。
「うぐっ……貴女は私の客か？　私が貴女の客ではないのか！」
「こまかいことにしない」
「――貴女は顧客を何だと思っているっ！」
「金ずる。もしくはモルモット」澱みがなかった。
結局、私は自販機までお茶を買いに行かされた。こんな醜態、他の奴らに知られるわけにはいかない。絶対だ。
戻ってくるなり、アカネ嬢はペットボトルのお茶をぐっぐっと一気に飲み干した。
口から一筋、喉を伝って滴がこぼれ落ちた。絶対に狙っているに違いない！
「んぐっ……ぷはあっ！　仕事の後の一杯は格別ね！」
「貴女はそればっかりだな」
「天丼って知ってる？」
「それはギャグの時に使うものだと認識しているが？」
「おいしいよね。あれ」
「――貴女は何がしたいのだ！　私に何の恨みがあるっ！」
「あははっ！　まあまあ、落ち着いて。いとーくんが『パシってる』間に、あたしはある準備をしておきました。それは何でしょう？」
「私が、『走ってる』間に？」
「『パシってる』よ。『パシリ』の事ね」
――殺す！　いつか殺す！　絶対殺すっ！
「ダメよ。あなたにあたしは殺せない」アカネ嬢の瞳が、私を捉えた。
心臓に氷柱が突き刺さったような、おぞましい感触を感じた。

「なんちゃってー。一度言ってみたかったんだよね。この台詞」
冗談でこの威力か、しゃれにならんな！
「はい、正解は――」
「――まだ答えていないが」
「え、答えたいの？」アカネ嬢はきょとんとした。
「いいやまったくそのようなことはないたのむからはなしをさきにすすめてくれ」
「だよねー。じゃ、正解。さあ、『リガン』のマスターキーを装着して」
「装着？」このコンタクトレンズを？
「そ。はい、装着液」
私は受け取り、コンタクトレンズをはめた。
「ま、眼鏡でも良かったんだけどね、眼鏡萌えー。でもほら、やっぱり目に直に付けた方が、臨場感桁違いじゃない？」
「何の事やらわからんぞ」
「あ、ごめんね。ま、とりあえず、あれを見て」アカネ嬢は窓を指した。
窓の向こうを見ると、グラウンドが見える。その中心、小さくぽつんと何かが立っている。よく見ると、グラウンドに太い杭のようなものが突き刺さり、それに人が縛られていた。
流れるような金髪、次々と色が変わる万華鏡のような瞳。そしてばいんばいん……。
どう見ても、先に帰ったはずのマナであった。半泣きである。様子を見るに、
「かいちょーさんたすけてー！」と叫んでいるように見える。
「――貴様あれはどう言うつもりだっ！」
「おおっ、『貴様』でたー！」
「当たり前だ！　あれは我が……げふんげふん」
「『我が』何かなー？」アカネ嬢は無垢な表情を作って小首を傾げた。

「我が学園の生徒ではないか！」
「ご名答。さっきたまたま通りかかったのを拉致……もとい、ちょっと協力して貰ったの。えへっ」アカネ嬢はぺろっと舌を出した。
「この悪魔！　人でなし！」
「あなたに言われたくないなー」
「黙れ！　彼女を解放しろ！」
「あれー、よくあの子が女の子だってわかるわねー」アカネ嬢は白々しく言った。
「何を言っている、あのばいんばいん――」
いや、待て。確かになぜこの距離であれが見えるのだ。最初に見た時は、豆粒以下の大きさで、人であることも視認できなかったはず。ということは……。
「ぴんぽーん！　これがリガンの性能の一部でーす。どう、すごいすごい？　あははっ！」アカネ嬢はぐいっと強気の笑顔を近づける。
……顔が近い。アカネ嬢の甘い匂いと吐息がもろにかかっている。
「確かにすごいが――やっていいことと悪いことがあるぞっ！」
「あら、すごい怒りようね。……あの子に、何か関係があるのかな？」
「……ない」
「そう。なら、安心ね」アカネ嬢は、挑戦的な目つきになった。「ほぅれ」
アカネ嬢は『チェス』なるロケットペンシルを私に放った。
「その『ロケットペンシル弾・チェス』はリガンに連動して、あなたの意志だけで、先端の芯を狙った対象に放つことができるわ。まるで銃弾のようにね。一本につき、最大十六連弾可能よ」アカネ嬢は片目を閉じた。
そして、ずばっとマナの方へ向かって指さした。
見ると、マナの頭の上に、赤いリンゴがのっている。
「――ウィリアム・テルかっ！」
「察しが良くて助かるわ。――やれ」アカネ嬢はにこっと笑った。

「断わるっ！　なぜこんな事をしなければならない！　この距離からあの豆粒以下のリンゴを撃ち抜くなど、よほど訓練された狙撃手でも難しい！」
「理由はあるわ」
「なんだ！」
「大いなる力を得るには、大いなる試練を乗り越えなければならないのよ」
「は？　い、意味がわから――」
突如としてアカネ嬢の瞳に射貫かれた。
全身が硬直した。体の内側が、凍ってしまったかのように冷たい。またただ。あの時と同じだ。アカネ嬢の瞳が黄金色に光っている。
「――たかが大金を積んだくらいで、本物の力が手に入ると思うな」
ぞっとする程の冷たさを含んだ言葉であった。
「『力』が欲しければ『力』を示せ！」アカネ嬢は叫んだ。凄まじい覇気であった。
アカネ嬢は、パチンと指を鳴らした。
「さあ、人払いは済んだわ。後は、あなた次第」
私は、マナを見た。必死で私の名を呼び、助けを求めている。
「あなたが資格を得なければ、『リガン』は渡せない」
次世代防犯システム『リガン』あれが実現すれば、我が計画は数年早まるだろう。
だが……そのためには……限りなく低い可能性を、実現せねばならない。
もし『チェス』の軌道が逸れれば……もし、マナの体を撃ち抜いてしまったら……。
だが、リガンが手に入らなければ、計画は数年遅れることになる。
マナは泣いている。グラウンドの中心を残暑厳しい直射日光がじりじりと焦がす。
だらだらと汗をかいている。苦しそうだ。私の決断が送れれば送れる程、彼女は苦しむ。だが、だが、だが……。

「――ええいっ！」私は『チェス』を構えた。
もし、彼女にあたったら……。そう考えると、照準が定まらない。
「どうしたの？　いとーくん」
「うるさい黙ってろ！」
頬を、背中を、冷たい汗が流れ落ちる。
「彼女、苦しんでるわよ」
呼吸が乱れる。
「そういえばあの子、あなたの名前を呼んでるわね」
手が震える。
――完全管理社会のために！
私は……『チェス』を後ろに放り投げた。
カタンと音を立て、『チェス』は廊下の床に転がった。
「はあっ、はあっ……はあっ――できるかっ！」
「なぜ？　『力』は目の前にあるのよ」
「娘を天秤に掛けてまで手に入れる力など無いっ！」
アカネ嬢はじっと私を見た。
「あはっ」
吹き出した。
「あははははっ」
笑い声をあげた。
「あはははははははっ！」
狂ったように高笑いした。
「『力』としては不合格だけど、その選択、あたしは嫌いじゃない。だから――」
――どーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーんっ！
間抜けな声をあげながら、アカネ嬢は『チェス』の芯を放った。
放たれた芯はものすごい勢いでマナの頭の上のリンゴを貫き、背後で爆発した。
凄まじい爆風と共に、マナの背後一面が灼熱の炎の海と化した。

「あたしが合格にしてあげるっ。あたしってやーさしーっ」
「な、なんだあれは！　あの被害どうするつもりだっ！」
爆発の中心となった箇所は、クレーターのように丸く抉れていた。
「あははっ！　『チェス』は用法用量を守って正しくお使いください」
「またそれかっ！」
「ねえ、天丼って――」
「だからっ！」
「――おいしいよねー。でもあたしはカツ丼の方が好き」
「もう話と何の関連性もないな！」
「だいじょぶだいじょぶ。あの被害はこちらで修正しておくから」
「どうせその料金は――」
「――いとーくんのポケットからでまーす」
「帰れ！　さっさと帰れ！」
「なによう、内心ではおねえさんと、もっといちゃいちゃしたいくせに」
「あなたのマインドリーディングにも陰りが見えたな！」
「え、何のこと？」アカネ嬢は、やはりとぼけた。
抉れた校庭。爆風で吹き飛ばされた草木。損害は計り知れない。
だが、それよりも、何よりも……。
「かいちょーさん……助けて」
マナが泣いている。
それを見ただけで、身の内から殺意にも似た黒い感情がわき上がってくる。
「私はあなたを、絶対に許さない」
「なら、あたしはあなたに許してもらえるように努力するわ」
「ふざけてるのか」
アカネ嬢は、私の瞳を覗き込む。
「その気持ち、覚えておきなさい」
「なに？」

「人は経験した気持ち以外、わからないの」
冷たい視線も、狂ったような笑いも消え失せ、残ったのは慈愛に満ちた微笑みだった。
……わからない。
「私は、あなたがわからない」
「わからなくてもいいわ。今はね。でも――」
アカネ嬢はくの字にかがみ、下から私を覗き込んだ。
「――今回はあたしが敵だったから良かったけど、本当の戦いで、あなたは同じ選択ができたかしら」アカネ嬢は片目を閉じた。
「……知るか。その時が来ないとわからん」
「さーて、『まきなん』のところで、お茶でもごちそうになろうかしら」
アカネ嬢は私の返答など聞いてもいない！
「貴女は今、ペットボトルのお茶をまるまる一本飲み干したよな」
「知ってる？　人生の半分はティータイムでできてるのよ」
「それは、何かの格言か？」
「ｂｙアカネ」
赤毛ポニテ女の戯れ言であった。年中夏休みの大学生め。
「ねえ、イトーくん、なんか悩みある？」
本当にこの女性の会話には脈絡がない。
――一瞬、落ち込むエルレインの姿が頭をよぎった。
「……いや、無い」自分の問題は、自分で解決する。
「……そう。ならいいわ」
アカネ嬢の視線は、私の心を見透かすようであった。
「ずっこんばっこんあったらいっしょに見よーねー」アカネ嬢は手をひらひらと振った。
「――断じて断わるっ！」
「あ、娘さんが呼んでるよ」
私はグラウンドの中心に向かって駆けた駆けた駆けた！

「まなあああああああっ！」
マナは砂と煤まみれになったまま、先程の爆発によって倒れた杭の下敷きになって、ぐるぐる縄を巻かれていた。散々である。
すぐさま解いてやると、抱きついてきた。
「かいちょーさん……うわあああん！」
そうとう恐い思いをしたのだろう。
「もう大丈夫だ。大丈夫だぞ。悪魔は去った！」
「――まだいるけどねー」赤毛の悪魔が背後に君臨していた。
マナは泡を吹いて失神した。
「帰れ！　お願いだからさっさと帰れ！」
「いやー『チェス』渡し忘れてたから、はい。――じゃね！」
ロケットペンシル弾『チェス』なる凶器を強引に押しつけると、アカネ嬢はポニーテールを弾ませて、それはもう嫌味のようにさわやかに去っていった。
私は泡を吹いて失神しているマナを揺すり起こす。
「……かいちょーさん」
「もう、大丈夫だ」今度こそ悪魔は去った。
「かいちょーさん、わたし、なんだかとってもこわい夢を見た気がします」
マナは、悪魔を夢として処理したようだ。
ほっと一息ついたその時、

《――にゃおーん！》ネコの鳴き真似が、当たりに響いた。

気づくと空は茜色に染まり、夕日は赤く染まっていた。
爆発で生じた大きなクレーターを挟んで、目の前にはいつの間にか、黒いバイクスーツに白いマフラーの人影が立っていた。
「ごきげんよう伊統会長。今日こそ死んで貰うわ」
マリナは仁王立ちで、白いマフラーとサイドポニーテールが風になびいている。

「あいつは……いないようね」マリナはきょろきょろと辺りを見回し、ほっとした。
「あ、マリナちゃん！」マナが起き上がり笑顔を向ける。
しかし、マリナは怒ったような表情のままであった。
「マナちゃん、いい加減その男から離れて！」
その言葉に、マナはむっとして答える。
「嫌ですっ！　わたしはかいちょーさんを守るんですっ！」マナはひしっと、私の体にしがみついた。……ばいんばいんが当たる。
「この分からず屋！」マリナが怒った。
「分からず屋はマリナちゃんの方です！　エルレインちゃんと仲直りしてください！　たった二人っきりの家族、あなたのお姉ちゃんなんですよ！」
「マナちゃんまでそんなこと言うの！　お姉ちゃんなんかいないっ！　あたしは……あたしはずっと一人だった！」
「マリナちゃんっ！」
「でも、今は違う！　あたしには仲間がいる！　あたしは仲間達のためにも、そいつを殺さなくちゃ行けないのよ！　例えマナちゃんが守ろうと！」
マリナは背中から黒い棒を射出。それはガチャガチャと音を立ててフライパンの形へと変形した。
「『加速装置』――暴走超特急フライパンビーム！」
質量を持った黒いビームが私たちに襲いかかる。これは――まずい！
私は咄嗟にロケットペンシルを構え――撃て！　と心の中でイメージした。その瞬間、ペンの切っ先が反動を伴って射出され、真っ直ぐに黒い質量へと飛び出した。
黒いビームと切っ先が、丁度私とマリナから等距離の地点でぶつかり、大爆発を引き起こした。
「ま、マリナ、ちゃん……？」マナは顔を青ざめ惑っていた。
何がまずいのか……そんなもの、決まっている。

マナは今、友達だと思っていた人物に攻撃されたのだ。
そのショック、計り知れない。
私はすかさず第二撃を放つ。放たれたロケットペンシルの切っ先はマリナの頬を掠め、後ろで爆発炎上した。
「なに、この爆発……」マリナは目を大きく見開いて、呆然としていた。
今、はっきりとわかった。
「お前はもう、私の知っているマリナではないのだな」
私の知っているマリナは、マナを決して危険にさらしたりはしなかった。
こいつは同じ『水鏡マリナ』という名前でも、容姿でも……別人だ。
「な、何よ！　マリナはあたし、一人だけよ！　あたしはあなたを殺す。それ以外のあたしなんて――存在しないっ！」
「そうか……」
私はロケットペンシルの切っ先をマリナの顔に向けた。
「お前が私を殺そうというのなら、私も容赦はしない」
――次は、外さない。
「か、かいちょーさんっ！」マナが抗議するが、
「――お前は離れていろ！」私はは怒号し、マナを無理矢理遠ざけた。
動揺するマリナの表情を、青い布が隠した。マコトが、マリナを庇うように旗を構えていた。
「マコト、あなたはゲートを守るという大切な役目が！」
「……今回だけだから」
マコトは旗の先端を私に向ける。
「マリナ、先に未来に戻って。今日は分が悪い」
「でもっ！」
「ウチらはマリナを失うわけにはいかない」
「あたしはそんな――」

「リーダーなら、もっと冷静になって」静かだが、辛辣な物言いだった。
「……わかった」マリナは頷いた。
青い布がマリナの姿を隠し、布が開けた時には、マリナの姿は無かった。
「マコト、一つ訊ねる。エルレインのことを、本当に知らないのか？」
「知るわけ無いじゃん。どうせあなたの策略でしょ」マコトは、淡々と言う。
「お前の前に、マリナを守る騎士だった少女の名だ！」
「マリナを守るのはウチだけ」
「お前は何故マリナを守る！」
「そんなの、あなたには関係ない」マコトは機械的に、淡々と答える。
どうも、様子がおかしい。マリナと同じように、マコトにも変化があるような……なんというか、冷たくなったような気がする。
マコトが旗を構えた。その先端から、静かな殺気を感じる。
「問う。お前は私を殺すつもりか」
「さあ、知らない」あくまでも、無表情で答える。
「それだけの殺気を放っておきながら、しらを切るか！」
私はマナの白い杖を展開し構える。マコトが走り、旗を私に向かって突き出す。
私は横に避け、杖の剣状になっている箇所を振り下ろす。マコトは旗をスライドし、体を斜めにして受け止める。そのまま旗をひらめかせ、私を旗の布部分で包もうとする。
私は後ろに避ける。視界が布の青で覆われる。
急に頬に痛みと衝撃が奔った。私は後ろに吹き飛ばされた。片手バク転の要領で体勢を立て直し、ロケットペンシル弾『チェス』を構える。マコトは旗を目くらましにして、旗ごと私を殴ったのだ。
この私に、一撃喰らわすとは……。

「それだけ強いのに、何故今まで私を殺そうとしなかった！」
「ウチにはウチの役割がある。一番重要な役割だってマリナが言った。今あなたを殴ったのは、ウチの我が儘」
マコトは次々に旗を突き出し、棒撃を繰り出す。
「ウチは、あなたを許さない」シンプルで、重い言葉だった。
マコトは、ひたすら私に敵意を乗せた棒撃を突き出してくる。
――絶対に許さない。その気持ち忘れないで。人は経験した気持ちしかわからないの。
アカネ嬢の言った言葉が次々に浮かんでくる。こいつは、あの時の私と同じ気持ちで今、戦っているのか？
今まで私が相手をしてきた暗殺者達とは根本が違う。こいつは、マリナを守るために私と戦っている。マリナの幸せのために、そう、他人の幸せのために私と戦っている。
その点で、私と彼女は――同じ。
だが、私は殺されるわけにはいかないのだ。私の肩にはより大きな未来が掛かっている。私は未来で、完全管理社会を実現させなければならない！
私は棒撃を回避し、マコトの顔面にチェスを突き出す。今撃てば、こいつの頭を粉々に吹き飛ばせるっ！
「――二人とも止めてえええええっ！」
突然の大声に、私の体は止まった。それは、マコトも同様であった。
――にゃあーん、にゃあーん！　帰還の警告を告げる声が辺りに響く。
マナが、悲痛な面持ちでこちらを見ていた。
「何でみんな喧嘩するんですか！　何で仲良く出来ないんですか！」
「……あなたに、何がわかるの」マコトがマナを見つめる。
「そんなに人殺しがしたいんですかっ！」
「人殺しなんかしたくない」
思いがけぬ言葉に、マナは閉口した。マコトは、寂しそうにぽつ

りと呟く。
「……誰だって、人殺しなんか、したくない」
——にゃーん、にゃあーん、にゃあーん！　警告音だけが、辺りに響く。
「でも、友達を、人殺しなんかにさせるのは……もっと嫌だ」
一瞬だけ、マコトの瞳が、揺らいだ気がした。
まさか……彼女は、この戦いで私を殺そうと……。
これは……まるでエルレインと同じだ。エルレインがいなくなれば、誰かがその代わりを、その役割を担わなければならないのだとしたら……。
——にゃあーん、にゃあーん、にゃあーん！
「マコトさん急いで帰ってくださいっ！」マリナはマコトのもとに駆け寄り、腕を掴む。
「離せ」マコトは機械的に、マナの手を振りほどこうとする。マナは必死でしがみつく。
「あなたもマリナちゃんに忘れられちゃう気ですかっ！」
マコトの動きが止まり、マナをまじまじと見つめた。
「戻って！　マリナちゃんを一人にしないでくださいっ！　お願いします！」
私は『チェス』をマコトに突き出した。
「チェックメイトだ」「かいちょーさん駄目ですっ！　マコトさん、早くっ！」
——にゃーん、にゃーん、にゃーん！　声の感覚が狭まっていく。
「……許さないから」マコトは青い旗を振って自分の体を隠した。
マコトは消えた。何処かの隙間から未来に帰ったらしい。
《——にゃんにゃん、にゃおーん！》タイムマシンの消滅を告げる声が、響いた。

間一髪であった。
「……ふいーっ」マナはその場にへたり込んでしまった。
「マナ」
「かいちょーさん」
マナは、私を見上げる。今にも泣き出しそうな顔で。
「何で、なんでみんな『殺す』なんて簡単に言っちゃうんですか……誰かが死んだら、いなくなっちゃったら、誰かが悲しむのに」
――キュイイインという突き刺すような耳鳴りがする。鈍い頭痛を感じる。
これは……何事か……？
《お願い死なないで！》《そんな、なんであなたが……》《何で、みんないなくなっちゃうんですか……》《誰か、だれかいませんか！》《お願いひとりにしないで……》《ごめんなさい、ごめんなさいっ》《かみさま、みんなをかえして……》《わたしのせいだ》
《……わたし、ひとりだ》

「かいちょーさん、かいちょーさんっ！」気がつくと、マナが私を揺すっていた。
「私は……何を……」今のは、何だ？　いったい何が起こった？
「ぼーっとしちゃってどうしたんですか？　大丈夫ですか？　頭打ったりしてませんか？」マナは私の頭をわしゃわしゃと触る。
「も、問題ない」くすぐったいから、触るな。
「マリナあっ！　はあっ、はあっ、ようやく、辿り着いたっ……」
エルレインであった。エルレインは息を切らして必死に呼吸している。
聞くと、夕日が沈みかけたので学園に向かっていたのだが、いつまで経っても辿り着かなかったらしい。『にゃんにゃん空間』に入り損ねたせいだとエルレインは説明した。
「あ、エルちゃん、眼鏡美人ですっ！」

エルレインは赤いフレームの眼鏡をかけていた。
「あ、ああ、これは――」
何やら視界が歪んで見えると長谷川に言ったところ、くれたのだという。
「あーあ、マリナと会えなかったか」言葉とは裏腹に、エルレインは何処かほっとしている様子だった。「……マリナ、アタシのこと、何か言ってた？」
探るように、エルレインは聞く。
「あ、えっと……」マナは助けを求めるように私を見る。
エルレインはマリナに忘れられた事実を夢だと思い込み、幻想に浸っている。
エルレインの代わりに、今度はマコトが自らの命を捨てようとした。マコトが消えれば、また誰かが命を捨てようとすることは容易に想像がつく。
未来においてエルレインの存在が消えた事による負の連鎖が、非現実的な歪みが、私の周りを取り巻いている。ならば、
やるべき事は決まった。全てを――立ち切るのだ。
「なあ、何にも……言ってなかったのか……？」エルレインの表情は、次第に暗くなる。
「エルレイン」
「な、何だよ」エルレインの肩が、びくりと跳ねた。
「私は――マリナを殺すよ」
エルレインは呆気にとられたように私を見た。あまりの驚きに言葉が出てこないようであった。
私はそのままエルレインとすれ違い、屋敷への帰路についた。

第八話　システム『リガン』と会長魔法

「会長っ！　かいちょおおおおっ！　どこだあああっ！」
エルレインの甲高い叫び声が、屋敷中に響いている。
「うるさい。何事か！」
部屋のドアが勢いよく開かれると、エルレインが飛び込んできた。
「あの子を……殺すってのは、どういうことだ！」
エルレインは私の胸ぐらを掴む。
「言葉通り、そのままの意味だが？」
「ふざけるなっ！」
エルレインは激情にまかせて私を殴った。まったく、痛みを感じなかった。
「……弱いな」
「あの子を殺すなんて、そんなこと、絶対にさせないっ！　あの子は、やさしくて、強がりで、でも、ホントは弱くて……たまに甘えてきて、アタシは、そんなあの子が大好きで……」
――そんなお姉ちゃんが、大好きなんです。
最初のマリナの言葉を思い出した。
「エルレイン」私は、彼女に再び語りかける。
「アタシは――」
「夢じゃない」
エルレインは目をそらした。
「現実だ」
「……何の事だよ……夢だったんだよ。ドジなアタシは、あんた達の前で眠りこけて」
声が、震えていた。
「マリナは」私が口に出した瞬間、
「あああああああああああああああああああああああああああああああああっ！」

突然、狂ったように叫びだした。これから聞く言葉を、拒否するように。

「お前のことを！」

エルレインは、赤子のように叫び続ける。それでも私は言う。

「知らないっ！」

叫びが、ピタリと止まった。エルレインは放心し、無表情のまま虚空を見つめている。

「エルレインっ！」呼びかけても、返事は無い。

考えることを否定してしまったのか。それでも私は彼女に語りかける。

「マリナは私を殺そうとしている。私がマリナを殺しても、正当防衛だ。だから――」

私は息を吸い、一息に言う。

「私はマリナを殺すぞ」

ギロリと――眼球だけが急激に動き、エルレインの瞳が私を捉えた。

「殺すぞ」私は繰り返す。

「……せない」エルレインの唇が、微かに振動した。

私はもう一度繰り返す！

「――マリナを殺すぞ！」

「――絶対殺させない！」

エルレインは跳ね上がるように腕を伸ばし、私の喉を締め付ける。弱い。か細い女の力だ。この程度の力では私を殺すことなど不可能。

故に、私は畳み掛ける。

「マリナはお前のことを知らない」

エルレインの手から伝わる震えが、大きくなった。必死の形相で、口を開いた。

「……お前のせいだ。お前が完全管理社会なんて作ったから……お前が、マリナを殺そうとしたから！」

「だから、過去の私を殺そうというのか。――それは逃げだ」
エルレインは血走った眼を私に向けた。
「うるさいっ！　お前さえいなければ、みんなもっと幸せに暮らせたんだ！」
「『私さえいなければ』か。残念ながらそれはできない。現に私はここに存在している」
「だからアタシが殺して――」
「気づいていないのなら教えてやろう。――過去を変えること自体が間違っているのだ」
「なに？」エルレインは顔をしかめた。
「私を殺せば完全管理社会が無くなる。完全管理社会が無くなれば、隙間ターミネーターとして私を暗殺しに来る貴様らも消えて無くなる。だが、貴様はここにいる。つまり、貴様らがここにいる限り未来は変わらない。貴様らがタイムスリップを成功させた時点で、過去現在未来、全ての道筋は内包されている」
「騙されないぞ！　誰が、そんな理屈――」エルレインは手に力を込めた。
「だから、幻想だと言ったのだ。過去は変えられん。変えられるのは、未来だけだ」
私の気迫に押されたのか、エルレインの瞳におびえが生じる。
「お前が未来から取り残され、苦しみを感じているとすれば、それはお前のせいだ」
「何だと！」おびえよりも怒りが勝ったのか、エルレインは噛みつく様に反応した。
「人のせいにするな。誰かのせいにするな」
私は、彼女に決定的な現実を突きつける。
「最初のマリナは言っていた。未来に帰還するのに失敗すれば、過去と未来の隙間に囚われると。お前だって知っているはずだ」
「そうだ。そうだ……けど……」
「まさか、マリナまで自分を忘れるとは思わなかったか？」

「え……どういう、事だよ……？」
まさか、本当に何もわかっていないとは。
「少し考えればわかることだ」
私は、あれから考えた。
隙間ターミネーターの存在の肯定。
夕焼けにゃんにゃん使用の注意事項。
マリナはエルレインのことを知らない。
隙間漂流者という存在の意味。
論理的に考えてゆけば、自ずと一つの現実的解答に帰結する。
「過去は変えられないが、未来は帰られる。――未来は変わったのだ。お前が隙間漂流者となったことで。――お前が隙間漂流者となり、存在が消えたことでな！」
「アタシの存在が、消えた……？」
「そうだ。未来に貴様の居場所はもう、無い」
「嘘だ……そんなはずはない。だって……アタシはっ！　アタシには未来の記憶が……」
「それが過去と未来の隙間に囚われると言うことだ。お前は既に『存在しない未来の記憶』を保持したままここに取り残された。過去と、新たな未来が出来るまでのお前の未来――隙間の記憶に、お前は囚われている！」
エルレインは、はっとして、口を開けたまま固まった。
「お前は気づいているはずだ。お前の知っているマリナは、もう――いない」
エルレインは眼を見開いた、その拍子に、溜まっていた涙が流れた。瞳孔は収縮し、唇は青くなり――
「アタシの……マリナは……」
――エルレインは私の喉から、手を離した。
「――お前のせいで、変わった」
私は、言い切った。
「そして、過去は変えられない」

この言葉が、何を意味するのか。それは――もう元には戻れないということだ。

火野坂エルレインはもう、変化する前の未来に生きていた水鏡マリナに、二度と会えない。最初の水鏡マリナは、消えてしまったのだから。

「お前に残されたのは、変化する前の未来の記憶だけだ。『お前がマリナの姉であった』という記憶だけだ！」

ううっ……、とエルレインの口からうめき声が漏れる。

「……ううううう……あああああああ……！」

エルレインは大粒の涙を流し、うつぶせになって、ベットの肌掛けに顔を埋めた。

ばたんと扉が開いた。マナが驚いた顔をして入ってきた。

「エルちゃん……？　かいちょーさん、エルちゃんに何をしたんですか！」

私は無視してエルレインに向き直る。

「あきらめたか。お前が諦めるというのなら、私は遠慮無く、マリナを殺そう」

今度は、何の反応もなかった。

「かいちょーさん、何したんですか！」マナは眉をつり上げ怒っている。

「現実を教えてやっただけだ」

私はそのまま、マナとすれ違う。

「えっ……ちょ、ちょっとかいちょーさんっ！」

マナは困惑した表情で私を見たが、私は無視して扉に手をかけた。

マナがエルレインに駆け寄り頭を撫でると、エルレインはマナに縋り付き、彼女の体に顔を埋めて泣きじゃくっている。既に理性のたがは外れ、感情が外に溢れている。

「返して……返してよ……アタシのマリナを……返してよ……」

現実を否定し、怒り、泣いた。現実を受け入れるまでのステップは進んだ。

「エルレイン！」私は彼女の気を引くため、あえて大声を出した。
エルレインの鳴き声が、小さくなる。
「『お前が彼女の姉である』という事実に囚われ、一生後悔し続けろ！」
私は言い捨て、部屋を出た。
「――かいちょーさんっ！」
マナの声が、背後から聞こえた。私は無視した。そのまま廊下を歩く。
「会長さま」長谷川であった。薄闇で、表情は見えない。
「今回のことは私の個人的な問題だ。お前に迷惑をかけるつもりはない。下がっていろ」
「迷惑などとは……」
「下がっていろ！」
長谷川は、黙って一礼した。

放課後になった。私とエルレインはあれから一言も口をきいていない。
私は娘二人を保健室に待機させている。エルレインは俯き、何かを考えているようでもあり、何も考えずにぼおっとしているようにも見える。傍らには、マナがさりげなく寄り添っている。心配なのだろう。
私はエルレインをマナにまかせて、一人校舎である訓練を行なう。過酷な訓練であった。意識を保つのがこれほど難しいとは……。全身に嫌な汗が滲み、あまりの情報量に吐き気すら催す。
「だが、すばらしいシステムだ」私は独りごちた。
校舎内には、私たち以外誰一人残っていない。相変わらず防犯システムの工事だと偽り、人払いをしているのだ。
やがて、太陽が赤く染まった。

《――にゃおーん！》開戦を告げる声が、鳴り響いた。

「――伊統会長！　覚悟しなさいっ！」マリナの声が響いた。
マリナの背中からバシュッと音を立て、ペンぐらいの大きさの黒い棒のような物が飛び出す。マリナがそれを握ると、ジャキジャキと音を立て――漆黒のフライパンに変形した。流石は未来から来たと自称するだけはある。相変わらず面白い技術だ。是非にも欲しい！
その後ろには、青い旗を持ったマコトが、ゲートを守るように立っている。
そういえば、彼女が、『それぞれ役割がある』と言っていたことを思い出した。
なるほど。彼女はああやって毎回、あの旗でゲートを守っているというわけか。
そして今回のゲートは、私が意図的に隙間を空けておいた、私の教室の掃除用具入れだ。
仕組みはよく分からんが、私の近くで最も最適な隙間がゲートに選ばれるらしい。
マリナは辺りをきょろきょろと見回す。
「伊統会長、出てきなさいっ！　隠れたって無駄よ！　今日からこの夕焼け空間は2倍の時間を維持できるの！　どう、驚いた！　技術は日々進歩してるのよ！　……って、出てきなさいよっ！」マリナは地団駄を踏んだ。
まだ、私を見つけていないのだ。
それもそのはず。私は彼女らを一方的に監視できる位置にいるのだから。
「ようこそマリナ！　隙間ターミネータの指導者！」校舎全体に私の声が響き渡った。
マリナが見上げ、私を捉えた。いや、私が映し出されたモニターを捉えた。
一方、マナもエルレインも、私を――保健室に設置されたモニターを見上げた。

「かいちょーさん！　一体どうしたんですか！」
私を見上げる全員が、驚愕の表情を浮かべている。
そう、私には全てが見える。彼女らが離れたところにいようと、どこにいようと、校舎内なら、全てを同時に見る事ができる――これぞ、システム『リガン』の真骨頂。
「伊統会長！　どこにいるの！　隠れてないで出てきなさいっ！」
マリナがフライパンを掲げて吠えた。
この校舎には、至る所に防犯カメラが設置してある。全てのカメラの映像は、無線を通じて私が眼にはめているコンタクトレンズ――『リガンのマスターキー』へと集約される。私はどこにいても、校内全体を把握できる。これすなわち――
――まさしく、神の視点である！
「マリナよ！」私はシステムを通して語りかける。
システムを思念で操作し、マリナの姿を映し出す。それを見て、エルレインが一瞬、眼を見開いた。私はそれを確認して叫ぶ。
「――貴女の下着は今でも純白かっ！」
「……ばっ」マリナの頬がぼっと赤くなった。「――何言ってんのよっ！」
マリナは怒って叫んだが、否定しなかった。
「そうか。安心したぞ」
「――何も言ってないっ！」
「では、否定するか？」
「それはっ……」マリナは唇を噛んだ。
「すばらしい趣味だ。誇るが良い」
「うるさいっ！　ほっとけ！」マリナはフライパンを床にたたきつけた。
「マリナ、あいつのペースに乗せられちゃだめ」マコトが冷静な表情で、指摘した。
「あ、うん……わかってる」マリナはフライパンを構え直した。
以前に、どこかで見たやりとりだ。――保健室のエルレインは、

俯いている。
「マリナよ、約束を覚えているか？」
「約束？　そんなもの、した覚えはないわ！」
「私との結婚の約束だが」
マリナは眼をまんまるにして、再び頬を染めた。
「あ、あ、あれは、あんたが一方的に、あたっ、あたしはあんたなんかとっ――迷惑っ、大っ嫌い！」少々挙動不審だが、どうやら、以前のことは覚えているらしい。
「それは残念だ」私は白々しく言った。
「あんた！　あたしをバカにしてんの！」マリナは恥ずかしさではなく、おそらく怒りから顔を真っ赤にして吠えた。
やはり、反応がエルレインとそっくりだ。彼女がエルレインの実の妹であるということも関係しているだろうが、エルレインの存在が消えてしまったことが、マリナにも何らかの影響を与えていることは、間違いない。
「マリナよ、私を殺すのか？」
「そうよ。当たり前でしょ！」マリナはびしっとフライパンを私に向ける。
正当防衛、成立だ。私はマリナを殺す権利を得た。
「――マリナちゃん！　ダメですっ！」マナは叫ぶが、私は彼女の言葉をシステムに通さない。マナの思いは虚空へと消えた。
「エルちゃん、エルちゃんも何とか言ってください！」
マナはエルレインの肩を揺さぶるが、
「アタシには……もう……関係ないんだ」と呟いて俯き、瞳を眼鏡の奥に隠している。
私はマリナに問う。
「――何故だ？　なぜ私を殺そうとする」
「何故って……」フライパンの鋒が揺れた。
「私は、なぜ自分が殺されるのかを知らないまま殺されるのは、納得がいかない」

「そんなの……そんなの簡単よ！」
マリナは、フライパンを横に一閃した。もう片方の拳を胸の前で固く閉じ、
「あなたが、あたしを殺そうとするから！　そして、あたしの大切なものを奪おうとするから！」切実な表情で、訴えるように言った。
以前の理由と、変わってはいない。だが、付け加えられている。
「大切なものとは何だ？」
「仲間よっ！」
仲間、それが、大切なもの……。他が為に、マリナは私を殺そうというのか。
「だからと言って、私は殺されるわけにはいかない」
「――それでも、あたしは殺さなきゃいけないっ！」
……そうか。ならば、仕方がない。
「なら、戦争で決着をつけよう」
「なんですって……？」
「戦争、それは国同士が争うという意味だけの言葉ではない。互いの守るべきもの、奪いたいもの、それらを掛けて、戦う事を意味する！」
戸惑いを見せるマリナ。私は視線をずらし、マナを見た。
「マナよ、お前に――魔法を見せてやろう」
「かいちょーさん……いったい……」マナは、不安そうな表情をしていた。
神の視点――私の気分は完全に高揚していた。
「さあ」私は腕を真っ直ぐ伸ばす。「――戦争を始めようか！」
「――望む所よっ！」マリナが応じた。
夕焼けにゃんにゃん戦争が――開幕した。

「マコト、ここを頼むわよ！」
マリナは教室を出て駆けだした。
「会長！　出てきなさい！」

「――私は逃げも隠れもせんさ」廊下のモニターに、私の姿を映す。
マリナは走りながら廊下のモニターを見上げる。
体育館を映し出し、私のまわりを映し出す。
「さあ、来るがいい」私は挑発する。
マコトの静かな声が、システムを通して聞こえる。
「マリナ、罠に引っかかっちゃだめ」
良く気づく奴だ。最も警戒しなければならないのはコイツだ。
しかし――私はマコトのいる教室のモニターを切った。これで、マコトは外の状況を知ることはできない。マコトの声も伝えない。
彼女のサポートは封じられる。
全ての場所を確認するが、あの青ネコのお面を被った参謀――ネコと呼ばれていた男の姿は見えない。リガンには意図的に死角を作っているものの、あいつが知るはずがない。となると、ネコは前回と今回、来ていないことになる。
たった二人で暗殺、しかも一人はゲートの守備要員とは、なめられたものだな！
まあいい。これでマリナは一人孤立。こちらに圧倒的有利な状況だ。なぜなら――
私は、マナの言う『魔法』を開始するための、言葉を唱える。
「――システム『リガン』防衛モード発動！」
マリナが体育館の扉をぶち上げ「――見つけたっ！」突撃してくる。
彼女の初撃はわかっている。
「『加速装置』――暴走超特急フライパンビーム！」
マリナの手から、超加速した漆黒のフライパンが放たれた。
私に向かって跳んでくる。軌跡がまるで、ビームのように見える。
そして、私の――目の前で轟音が生じ、反対側に跳ねた。くるくると回り、フライパンは床に落ちた。
私の目の前には、衝突で無数のひびが入り、白くなったガラスがある。

「……流石は戦車の砲弾をも貫通させない強化ガラスだ」
「――バリア……です」マナが呟くのが聞こえた。
「そして、このガラスのすごいところが――」
私はガラスを突き破った。このガラスは一方からの衝撃だけに強い。流石は赤毛の悪魔――アカネ嬢の技術だ。
驚き眼を見開いているマリナに向かって、私は駆ける。マナから没収した白い杖を振り上げ、彼女に振り下ろす。それを見たマリナは我に返り、背中から黒い棒を取りだし、フライパンへと変形させながら――私の一撃を防いだ。
何度か攻撃をかわし合った後、白い光沢を持つマナの杖と、黒色のフライパンでつばぜり合いの様相になった。
「あなた、今のは――」
「――あっ！」私はマリナの後ろを見て声をあげた。
マリナの注意が一瞬そがれる。その隙に私はフライパンを押し返し、もう一度マリナに向かって白い杖を――
――マリナは背中から二本目の黒棒を射出し、フライパンに変えて盾にした。片方の手でフライパンの柄を掴む。フライパン二刀流となったマリナは、反撃とばかりに次々とフライパンを振り下ろす。
私はすぐさま杖で防御する。が、圧倒的に手数が足りない。じりじりと後退する。
「卑怯な手を！」マリナが吠える。
「引っかかったのはお前だ！　安心しろ、今日は私一人が相手だ！」
「――信じられるかっ！」
マリナはフライパンを上に薙ぎ――杖が私の手から離れた。フライパンが、私ののど元に突きつけられた。背後は壁。逃げ場はない。
そして、誰も助けには来ない。長谷川は学校の外へ待機させている。
時が止まったように、私とマリナ、両者共に動かない。静寂が辺りを包む。
「……なに？　会長、あんたホントに今日は一人なの？」

勝ち誇ったような笑みで、マリナは訊ねる。
「だとしたら何か？　まさか貴様、エルレインに会いたいのか？」
「エルレイン？　ああ、あの気持ち悪い奴。誰があんなの！　いなくて助かってるわ！」
ざんざんな言いようである。エルレインを見ると、自信を喪失したかのように益々肩を落とし、猫背になっていた。カメラの映像からでは、彼女の表情を窺い知れない。
「そうか、ところで――今、何故とどめを刺さなかったのか！」
「なっ――？」マリナの笑みが消えた。
「――上を見ろ」
「誰が二度と同じ手を――」
上から何かが落ち、マリナが私に突きつけていたフライパンにぶつかった。
フライパンは衝撃でマリナの手を離れ、床にたたきつけられた。
「……へ？」何が起こっているのかわからないであろうマリナの口元が、ゆがんだ。
「今の忠告は、純粋なる親切心からだ」
マリナは上を見上げる。天井から無数の灰色の丸い物体――鉄球の雨が降ってくる。
「えっ、なに、うそっ！」マリナは挙動不振に慌てふためき、フライパンを頭に乗せて、半泣きの表情で逃げ惑う。鉄球が落ちる箇所には一定の法則があるのだが、もちろん彼女が知るはずもない。
手球は次々と床に穴を開ける。これも夕焼けが終われば元通りだろう。問題ない。
「……メテオストライク」保健室、マナは呟く。
エルレインが、モニターを凝視している。やはり、気になるのだ。
その隙に私は鉄球を悠然とかわしながら白い杖を拾い、体育館を抜け出す。
「あっ……待ちなさいっ！　わっ！　いやっ！　ちょっと！」
マリナは降りしきる鉄球を防ぎながら、私を追いかけてくる。

廊下を曲がる。私は用意していたものを取り上げ、構える。
マリナが廊下を曲がった。そのタイミングで、私は――消火器を放った。
煙が充満し、何も見えなくなる。私はリガンのシステムを使い、仮想的に廊下のイメージを構築。煙の中を駆け抜け、難なく脱出した。移動しながら防犯カメラの映像を見る。煙が晴れると、尻餅をついたマリナの姿が現われた。
「けほっ……けほっ……あたしがっ、こんなっ……」
真っ黒だったバイクスーツを真っ白に染めている。真っ白なのはそれだけではなく。顔も髪も、白い粉まみれである。
「……スモーク」マナはまた呟いた。魔法名だろうか。
「――絶対に殺すっ！」マリナは立ち上がり、走り出す。
「汚れてしまったな。美人が台無しだ」校内放送に私の声が流れた。
「なっ、なにをっ！」マリナは動揺した。
まったく、似たもの姉妹だ。それともエルレインの役割が分散したか？
「綺麗にしなくてはな」独りごち、指示をリガンに送る。
廊下のスプリンクラー作動し、マリナはずぶ濡れになった。
「わっ、何これ、あ、でもこれでキレイに――」
これぞ、私のやさしさ――な訳がない。
「あれ、なんか熱く……」
残念ながら中身は消火液ではなく、激辛成分を含んだ液体である。
「痛っ……ああっ……いやあっ……あああっ……」
眼の痛覚を刺激されたのか、眼を押さえ、のたうち回る。刺激物で犯人の視界をふさぐのは、防犯の定石だ。
「……アシッド……レイン……」マナが呟いた。
マナの手は、強く握られ、白くなっていた。何でも英語にしているのではないかと思ってしまうが……果たして。
気がつけば、エルレインは立ち上がっていた。モニターに釘付けになっている。

私はゆっくりと気づかれぬように近づき、マリナのフライパンを奪った。

持ってみると、なかなか軽く、それでいてしっかりしている。未来から来たと言うのも、あながち嘘ではないのかもしれん。

私は思いっきりフライパンを振り下ろし、床にたたきつけた。がんっ！　と、鋭い音が廊下に響いた。眼をやられたマリナは、ビクッと怯え、再び背中から棒を取りフライパンに変えた。

「どこ……ごほっ……くそっ……喉がっ……」おそらくは、焼けるように熱いのだろう。声が少し枯れている。

マリナはフライパンを振り回し、苦痛の中、私の気配を懸命に探している。

私はかんかんと、フライパンであちこち叩きながら、遠ざかってゆく。マリナは音に引かれるように、こちらにゆっくりと進んでくる。怯えるように、フライパンをがむしゃらに薙ぎながら。

「マリナ……罠だ……」エルレインが、呟いた。

無意識の言葉だったのだろう。エルレインは我に返ると、自己嫌悪するように顔をしかめた。

――その通り！　だが、今のマリナは眼を潰されたも同然。苦しみから解放されるため、暗闇の中、音を頼りにすがるしかないのだ。じっとしているくらいなら、死んだ方がましだと思っているはずだ。

その精神、既に正常ではない。そこにつけいる隙がある。

マリナは私の思うがままに誘導された。

「乾かさなくてはな」私はロケットペンシル弾『チェス』を連続で放った。

あちこちで爆炎が起こり、マリナの入った教室が、あっという間に灼熱の炎に包まれた。どうせ夕焼けの時間が終われば、元に戻る。問題はない。

保健室、マナがモニターを見て、悲痛な声をあげる。

「マリナちゃんっ！　ファイアーウォール……酷い……」マナの声は震えていた。

「わかるか？　隙間ターミネーターよ、貴様らは初めから不利なのだ。なぜなら戦いの場を選ぶ権利は――私の側にあるのだから」
「黙れ黙れ！　お前の言葉なんて聞きたくもないっ！　――ごほっ、ごほっ！」
マリナは煙を吸い込み、咳き込んだ。
「そうか……ならば」
私はリガンに指示。スピーカーから超音波を発し、マリナにさらに苦痛を与える。
「がああああああっ！」
眼は痛みで開かず、舌は辛さで痺れ、皮膚と喉はじりじりと焼け、煙で嗅覚は麻痺し、耳を切り裂かれる程の音が彼女を襲う。
彼女は今、五感全てに苦痛を与えられている。
「マリナちゃんっ！」
モニターを見て、マナが叫んだ。
「かいちょーさん、やめて！　お願い！」マナは涙ぐんでいる。
――誰が止めるか！　私を狙った報いだ！
「わはははははははははははははははははははは！」私は笑う。高笑いする。
耐えられなくなったのか、マナは保健室を飛び出した。
「フィナーレだ！」
教室の真上から、水が滝のようにあふれ出す。大量に流れ出る水は、屋上プールから供給されている。室内の炎に反応して、鎮火装置が作動したのだ。本来ならば、もう少し低出力なのだが、今日はリミッターを外して最大出力にしてある。
マリナは激流に飲み込まれ、溺れた。そのまま排水穴へと落ち、下の教室――私の目の前――ガラスでできた筒に、水ごと閉じ込められる。マリナは苦しさのあまり、もがき苦しむ。必死で口を押さえ、空気を逃さないようにしているが、
「何だ、元気がないぞ、どうした？　そうだ、エネルギーをやろう」
マリナの閉じ込められた筒に、電流が流れる。苦痛に歪むマリナ

の口から泡が漏れ出る。酸素を得られない苦しみ、肺に満たされる水、全身を走る電流の痛み。

私を狙うから、こうなる。自業自得だ。

「マリナちゃんっ！」

――マナが室内へと入ってきた。良くここがわかったものだ。

マナは筒をばんばん叩いて恐そうとするが、びくともしない。

「お願い！　かいちょーさんやめて！　お願い！　マリナちゃん死んじゃう！　お願いやめてえええええええっ！」

マナは泣き喚き、悲痛な叫びを上げるが、私はやめない。

あの筒は特殊なガラスでできている。割ることができるとしたら、マコトの旗による棒撃が考えられるが、それは不可能だ。なぜなら、マコトのいる教室のモニターは切っている。マコトはひたすら周囲を見渡し、ただ純粋にゲートを守っている。おそらくはマリナとの約束を守っているのだろう。

美しい友情か？　いいや、ただの馬鹿だ。自分の頭で考えることの出来ぬ、でくの坊に過ぎない。何が『許さない』だ。体術や言葉だけは一人前の癖して、与えられた役割に固執し、マリナが想像を絶する苦痛を受けていることを知ることすらできない。

愚かで盲目な、妄想狂の一人だ。

「かいちょーさんっ！」

マコトはマリナを信じて待っている。だが残念ながら、マリナはもうじき――

「――死んじゃうっ！」

マナが教えるという可能性もあるが、マナは動揺のあまり、それに気づかない。目の前で友達が死にかけているのだから当然だろう。

「いやあああああっ！」

誰も、マリナを助けられない。

「助けて！　誰か……誰かマリナちゃんを助けてえええええっ！」

マナは何度も何度もガラスを叩く。手が赤く腫れても、叩くのをやめない。

――無駄だ。杖もない。酒もない。マナが言う『魔法』――三流手品は使えない。

もちろん、魔法少女も助けには来ない。

無力な夢想少女は現実に打ちのめされる。

「駄目。助けを呼んでも、来るわけありません……」マナが苦々しげに呟く。

マナは教室の椅子を掴み、思いっきりガラスに振り下ろす。

「わたしが助けないと！　わたしがあああああああっ！」

マナは泣き叫びながら、何度も何度も椅子を振り下ろす。

無駄な努力だ。その程度の力で、あの強化ガラスが割れるわけがない。

マリナは、苦しみ、そして、

……死ぬ。

全ては、立ち切られるのだ！

「マリナちゃん、マリナちゃんっ、マリナちゃんあああああっ！」

水鏡マリナの死を持って、全ての負の連鎖は完結する！

――加速装置っ！

突然、黒い突風がマリナの閉じ込められたガラスの筒へと吹き荒れた。

ガラスは粉々に砕かれ、水があふれ出す。

黒い突風は水圧をかき分け、マリナを包み込み、吹き抜けた。風は留まり渦を巻く。教室中の机や椅子が、黒い嵐に飲み込まれる。

嵐が止み、舞い上がった机や椅子は積み上げられ、山となった。

その頂点、二本の足で、しっかりと踏み立つ黒い影。その腕には、ぐったりとしたマリナを抱いている。黒ずくめの衣装。筋肉の繊維をかたどったようなバイクスーツ。夕日の影がそのまま浮き出たかのような印象を受ける。

そして、その首元に巻かれた赤いマフラーがなびき、ひときわ異

彩を放っている。
眼鏡は掛けていない。代わりに、デフォルメされた黒猫のお面を斜めに掛けている。
その人物こそ――火野坂エルレインであった。
制服や眼鏡は消え、代わりに隙間ターミネーターの黒い衣装を纏うその姿、
まさに――『変身』であった。
エルレインは、さっと床に降り立ち、マリナを寝かせる。
「マリナ……ちょっとごめんね」
エルレインがマリナの腹部を圧迫すると、マリナの口から水が吐き出された。
「ごほっ……ごほっ……」マリナは息を吹き返した。
マリナのまぶたが、弱々しく開き、うっすらと開けた瞳が、エルレインを捉える。
「もう、大丈夫だよ」慈愛に満ちた笑みを、マリナに注ぎ、頭を撫でる。
マリナは安心したように目を閉じ、そのまま眠るように意識を失った。
エルレインはマリナを床にそっと寝かせる。視線を外し、前を向く。
私は、理由を訊ねなければならない。
「関係ないのではなかったのか？　マリナは――お前の存在を忘れたのだぞ」
「……ようやく、わかったんだ。失いそうになってようやくわかった。アンタ、言ったよな『お前が彼女の姉である』という事実だけがアタシに残されたって……」
強い力を秘めた瞳が、しっかりと、真っ直ぐに私を見つめる。
「それだけで充分だ！　――アタシは、マリナの『お姉ちゃん』だ！　マリナが忘れても、アタシはマリナの『お姉ちゃん』なんだ！　その事実は消えてない。アタシはまだ消えてないっ！」

はっきりと、宣言するように、エルレインは言葉を紡ぐ。
「だから、アタシはマリナを守る。うざがられても！　嫌われても！　気持ち悪がられるのはちょっと嫌だけどそれでも！　アタシはマリナを守るっ！」
「それが、お前の『覚悟』か！」
「――そうだっ！」エルレインは即答した。
私は、じっとエルレインの瞳を見る。エルレインもまた、じっと私を見返した。
しばらく、私達は対峙した。
私は、眼を閉じた。それが覚悟ならば……いいだろう。
「……なら、そうするがいい。――システム『リガン』防犯モード解除」
「会長……お前――」エルレインは驚き、目を見張る。
私はマナの杖を展開し、構える。剣状になった切っ先をエルレインに向ける。
――マリナを殺すのを諦めたわけではないぞ。無言で、視線のみで語る。
システムなどに頼らず、私が直々に相手をしてやる。それが『覚悟』した者に対する、私の礼儀だ。
エルレインは全てを理解した様だった。十徳ナイフを展開し、構える。
「加速装置」
エルレインは、自らの体を黒い疾風のように加速させた。
「――エルちゃんっ！」マナの叫び声が聞こえた。
その頃にはもう、エルレインの切っ先は私の眼前まで迫っていた。
エルレインの黒い切っ先は――私の眼前で止まった。
そのまま、動かなかった。
エルレインは十徳ナイフを仕舞い、身を引いた。
「アタシが殺したいほど憎いのはお前じゃない。今はもう存在しない、未来のお前だ」

エルレインは背を向けた。私はその背中に向かって言う。
「私を殺さなかったこと、後悔することになるぞ」
「ここでアンタを殺せば、そのほうが後悔する」
エルレインはそう言って、マリナを大事そうに抱きかかえた。
マリナは意識を失ったままであったが、命に別状はない。『リガン』に組み込まれた医療診断システムが、そう判定している。
エルレインはマコトのもとへとマリナを運び、眠るマリナをマコトに託した。両者は終始無言だった。それぞれが、それぞれに複雑な思いを抱いているようだった。
そして、隙間ターミネーターはひとまず去った。
「伊統会長」
「何だ、火野坂エルレイン」

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》終戦を告げる鳴き真似が響いた。

エルレインは私に背を向けている。その姿が揺らぎ、彼女の衣装は天照高校の制服に戻った。
「アンタを殺そうとは思わない。でも……」
エルレインは振り向き、じっと私を見つめた。
「今回のこと、アタシは、アンタを許さない。絶対に」
エルレインの瞳は澄んでおり、以前に私に向けたことのある、増悪を含んだ視線とは違っていた。私はその瞳を真っ直ぐ見つめ、言う。
「ああ、そうすればいい」出来るだけ、無表情で言った。
そうすれば――生きる意味の、一つぐらいにはなるだろう。
無論、彼女には伝えない。言葉にすれば陳腐になる。彼女に気づかれてしまっても意味が無い。私を憎むことが、それ自体が生きる意味になるのなら、彼女の支えとなり得るのであれば、それも悪くはない。

すると、エルレインは、はっとして、
「会長……あんたは……」
目頭に涙が溜まってゆく。
「……本当に、嫌な奴だ」
エルレインは泣き笑いの表情となった。
意外な反応であった。私の計画を、心の内を見透かされたような気がした。
頬が、熱くなるのを感じた。胸の奥底に、何かが満たされるのを感じた。
この数年、私が感じることの無かった感情が、目の前の、私を狙う暗殺者だった女などに……私が……このような反応を……ふざけるな。
私は指を突き出す。目をかっと見開き、吠える！
「お前が気を抜けばそいつを殺す！　お前が落ち込んで迷っても殺す！　――二人きりの家族、せいぜい大事にすることだ！」
「言われなくても」エルレインは目を潤ませたまま、強気な笑みを浮かべた。
強気なマリナが浮かべた笑みと、瓜二つであった。
その笑みを、不覚にも、美しいと感じてしまった。
自分の創り出した操り人形同然の少女、その笑顔を、美しいと感じてしまった。
私はかつて、襲いかかってきたエルレインを組み倒して言った。
『お前に必要なのは、覚悟だ』と。
この理念すら、私の考えであるということを彼女は気づいているだろうか。
人間の営みの中では、基本的には声の大きなものが勝つ。
なぜか？　自分の理念を相手に『感染』させたものが、勝利するからだ。
だからこの国を運営するウジ虫共は声を張り上げ、ヤジを飛ばす。
自分が醜いことをわかっていてなお、声を張り上げることに利点が

あることを、奴らは確信的もしくは本能的に知っているからだ。
ならば私は、同じ理屈で人を幸福へと導こうと考えた。
私の理念で社会を染めるための基盤、それこそが私の戦い――完全管理社会だ。
だから私はあの時、賭に出た。実現できるかどうかは――私は、目の前で息をのむエルレインを見つめて誓った――この少女で証明してやろう、と。
目の前の少女は私を殺したい程、憎んでいる。もし、この少女を意のままに操る――管理することが出来れば――彼女を幸せにできれば――私はどんな人間でも管理することが出来る。
それこそが完全管理社会の王である。私はそう考えた。
その計画は一度、『未来におけるエルレインの存在の消滅』というアクシデントで頓挫したかに思われた。
しかし、私はそれを逆に利用することにした。
エルレインは『『お前が彼女の姉である』という事実のみが残った』という私の言葉に『感染』し、見事にマリナを守り抜いたのだ。
私を憎む敵であるエルレインが、私の理念に『感染』し、『覚悟』を決めた。その『覚悟』が彼女に奇跡をもたらした。いや、奇跡などではない。なるべくして、成ったのだ。
全ては、賭であった。
養生部、友人、彼らは自分の理念を他者に『感染』させることができた。
全ては、彼らの行動をヒントに私が計画した賭であったのだ。
そして私は賭に勝った。全てが私の思惑通りに動いたのだ。
もし、エルレインがマリナを助けなければ――私は彼女を殺していただろう。
助ける力が無くても同じ事だ。殺していた、確実に。
マリナは死に、エルレインは絶望し、マナは一生私を憎み続けただろう。
エルレインが憎しみに飲まれても賭には負けていた。

エルレインが黒い刃を止めなければ、私は死んでいたのだから。
私は勝った。私は証明した。
敵ですらも、私の理念に感染させられる事を。
すなわち、私こそが――完全管理社会の王にふさわしい。
そう、締めくくるつもりであった。が――
「……かいちょーさん」マナだった。近づいてくる。
マナは俯き、表情は前髪に隠れて見えない。
「マナ」私が彼女の名前を呼んだ途端、
マナの白い腕が急に薙ぎ、小さな手が、私の頬を激しく叩いた。
マナは顔を上げた。視線は、怒りに満ちていた。
いったい……何を……？
「やり過ぎですっ！」
マナは、涙を流して怒っていた。
「どれだけ心配したと思ってるんですか……」
その表情は、初めて見るものであった。
マナが――初めて私に向けた敵意であった。
「マリナをいたぶったことは――」
「――違いますっ！　それもあるけどっ！」
マナが滲んだ瞳で私を見上げた。
「かいちょーさんが、悪い人になっちゃったんじゃないかって……！」
マナは、崩れ落ちた。
「マナ……会長は……」エルレインが手を差し伸べようとする。
私は、それを制止する。マナは話す。
「わたし、ほんの少しでもそう思っちゃって……そんなこと思った自分が……嫌で……嫌で……」
マナは何度も涙を拭った。何度も、何度も。涙は止まらなかった。
「マリナちゃんも助けられなくて……弱くて……弱い自分が……自分が……」
マナの言葉はつっかえ、その先を言い出せないようだ。

その姿が、昔の自分に重なった。

僕は、一番大切な人すら守れない。

僕は、弱い……。

僕は、そんな自分が、弱い自分が……。

記憶の中の幼い私。辛い現実に打ちひしがれる光景が蘇ってくる。

今は封印したはずの忌まわしき記憶。二度と思い出したくなかった悲しい記憶。それを私は思い出してしまった。

だから私には、マナの言いたいことが、手に取るようにわかってしまう。

「……自分が……嫌いになったか？」

マナはこくりと頷いた。

ああ、彼女は……昔の私なのだ。なぜか、そう思った。

思った瞬間、私は今までの計画が全て陳腐なものに思えてならなくなった。

エルレインの泣き笑いの表情を見た時に沸き上がってきた、あの何とも恥ずかしげな感情の意味が、はっきりとわかってしまったのだ。

そう、私は変えたかったのだ。今のマナのように、弱い自分が嫌いになった。だから変えたかった、弱い自分を。弱い自分を創り出した記憶そのものを。

だからこそ、完全管理社会を目指す事を決めた。その点では、私は過去を変えたいと願うターミネーターであった。火野坂エルレインと同じであった。

そのような人間を、私は、操り人形のように管理しようと考えていたのだ。なんと、おこがましいことであろうか。

あの瞬間、私はそのことを、無意識に感じ取ってしまったのだ。

私もまた、過去を必死で変えようとしていたことを。

だが、過去は変えることが出来ない。変えられるのは、未来だけ

だ。

私は、マナの赤く腫れた手を、そっと包んだ。

変えたいと願うのならば――

「――なら、強くなれ」

マナは私を見上げた。濡らした瞳、万華鏡のように移り変わる瞳に、私の姿が映った。

強くなるしかないのだ。過去を否定せず、他人のせいにせず、されど現状に満足せず、自分の力で、自分の責任で、未来を、思い描く方向に変えていくのだ。

私は気づいた。目指す方向は、何も変わってはいない。

お前がそう望むのであれば、そう行動するのであれば、

「私が力を貸してやる」マナの手を、ぎゅっと握った。

力となろう。私と同じように、未来を変えようとする人間の手助けをしよう。

それこそが、私が体現する完全管理社会である。

マナは頷いた。もう一度、頷いた。彼女の表情は金髪に隠れ、見えなかった。

「かいちょーさん……」

「ん？」

「お酒ください」

私は、自分を恥じた。今までとは違う意味で。

「――ふざけるな！　少しは反省したかと思ったが、何も変わっておらんっ！」

「わたしわかったんです！　お酒さえあれば、魔法でみんなを助けれますっ！」

こんな奴に過去の自分を重ねたのが間違いであった。強制してやる。管理してやる。このパラノイアを絶対に真人間にしてやる。

それこそが、私の目指す完全管理社会の第一歩だ。

幕間その一　夕暮れに暗躍する者達の戯れ言

天照高校の校門の両側に、二人の男女が背を持たれて立っている。
二人はそれぞれ、夕日の沈んだ方角を眺めている。
夕暮れ時の闇が二人の表情を隠し、はっきりとは見えない。
「とりあえずは、うまくいったみたいね」
「まだまだ。１つめの難関が過ぎただけですよ」
「先は長いわね。かわいそうな、イトーくん」
「知らなければどうって事ありませんよ。先を知らないからこそ、立ち向かえるんです……それより」
少年は、顔を赤毛の女性に向けた。
「あなたは、何者ですか？　全てを『俯瞰』できるわけではないんでしょう？」
「あたしはただの『道具屋』よ」赤毛の女性の口元に、悪魔めいた笑みが浮かんだ。
「ただの道具屋が、ここに――同じ所に立っている。不思議ですね」
「そうかな。どうかな。君は自分の事、特別だと思う？」
「それなりに」さりげなく、少年は断言した。
「あたしもよ。ただ、それだけのこと」
「そうですか。でも、何故ここなんです？」
「ホントのことを言えば、ししょーに頼まれてんのよ。どこ経由の依頼かは知らないけど、結構なポストからの依頼らしいわ。断われないでしょ」
「あなたがすんなり従うとは、意外です」
「あら、あたしの全てを知ったような口ぶり。嫌いじゃないなー」
「あなたの全ては見えませんよ」
「全ては、ね。……ま、いっか。あたしは百歩譲ってししょーの依頼だから従うの。その代わり、方法はあたしの好きなやり方でやらして貰う。実験台にしても文句は言わせない」

「あなたがもし、会長に危害を加えるようなことがあれば……」
「あら、あなたもそんな顔するのね。あなたにとって、あの子は所詮――」
「――それ以上は言わないでください」
強い、口調であった。
「おっと、あたしにそれは効かない。あなたが『理論』を操るように。あたしにだって『理論』があるんだからん」赤毛の女性はおどけて言った。
「あなたの存在は、危険です。もし見つかれば――」
「危険を内包してこそ、すばらしい計画になるのよ。あなたの計画だって、そうでしょう？　あたしも、あの子も内包されるんでしょ」
赤毛の女性は両腕を広げた。
「世界は法と混沌でできている」少年は、噛み締めるように言った。
「まあ、素敵で脈絡のない会話」
赤毛の女性は、はぐらかすように言った。続けて訊ねる。
「あなたって、いわゆる中二病？」
「お嫌いですか？」
「ううん、大好き！　大好物！　良いよね、こういう夕暮れのシチュエーションで、顔の見えない会話って。とっても中二病っぽくて、うずうずしちゃう！」
女性のポニーテールがぽんぽん跳ねた。
「あなた程の個性だったら、正体バレバレですよ」
「そうかもね。でもそれがいいっ！　ねえねえ知ってる――」
「――その手にはのりません。脱線会話でキャラ立てするのは、あなたの悪い癖です。まあ、そこがあなたの魅力でもありますが……」
「そろそろ彼らが来るわ。あたし達は退場した方が良さそうね」
赤毛の女性は、わざとらしくきょろきょろしている。
「人の話を聞かないのも、ね。……あなたとは、いつか戦う日が来る気がします」
「でもでも、それは今じゃない。今は仲良くやりましょう？　そろ

そろあなたも『登場』するんでしょ？　あれもあるしっ！」
「その節はどうも」嫌々といった感じで、少年はお礼を述べた。
「いいのいいの。困った時はお互い様じゃない」ぽんぽんと、少年の肩を叩く。
「あなたの場合、十倍返しになりそうで恐いです」
「あははっ、よくわかってるじゃない」にいっと、女性の口端が上がった。
「……」少年は、口をつぐんだ。
「より良い未来に向けて、お互いがんばりましょー！　じゃね！」
赤毛の女性はふわりと消えた。
一人残った少年は、呆れたように頭を振った。
「まったく、『勝手に動く』とは、こういうことを言うのか……」
少年は、天照高校の校舎を見上げた。
「会長、ここからが肝心だよ」
そう呟くと、少年は涼風のように消えた。

第九話　隙間漂流者

「病院内では走らないでください！」すれ違う看護師が私に注意した。
私は急いでいた。目的の病室へと辿り着き、勢いそのままに扉を開けた。
「葉上っ！」
黒髪の男が背を向けて座っていた。
その向こう、ベットの上には少女が眠っている。
男は、少女の手を握っていた。
「葉上、容態は――」
「……人は、なぜ死ななければならない」沈んだ、重々しい声だった。
その言葉を聞いて、わかった。
少女は、もう目覚めないのだ。
「なぜ……なぜなんだ……？」
私は、答えることが出来なかった。
「俺の一番大事な人を、なぜ奪われなければならないっ――伊統会長っ！」
男の目は、血走っていた。全てのものを恨むような表情であった。
「答えろ――かいちょおおおおおおおおおおおおっ！」

「……夢か」いや、記憶と言うべきか……。
早朝、私は日の出と共に眼を覚ました。天井を眺めながら、呟く。
「葉上、何処へ消えた……」
「ううん……もう食べられません……」
ふと気配を感じ、横を見る。ふわふわしたものが、当然のように酒瓶を抱き、よだれを垂らして気持ちよさそうに眠っている。
もう、驚くことはない。いつものことだ。

「マナ、起きろ」私はマナの肩を揺する。
「健やかな子供はおねむの時間ですむにゃむにゃ」マナはよだれを拭いた。
「健やかな子供は飲酒などせんっ！　都合の良い時だけ子供ぶるな！」
「う～ん……」マナはごろんと背中を向けた。
「強くなるのでは無かったのか？」
マナの背中がビクリと痙攣した。
むくりと、起き上がった。
「そうでした」眠そうな眼を擦りながら、ぼーっとしている。
どうやら、口先だけでは無いようだ。
「よし偉いぞ。早起きに慣れろ。朝起きるのが辛くなくなれば、人生の苦しみの大半は克服できたことになるからな」
「ふわぁ～～っ」聞いているのかいないのか、マナは大きなあくびで答えた。
「ところで」
「ほえ？」
「――貴様は何故ここで寝ているっ！」

マナを連れて部屋を出たところで、階段を降りてきたエルレインと鉢合わせた。
「ふわぁ～～、あ」大きく開いた口に手を当てたまま、エルレインは固まった。
「おはよう、エルレイン。早いではないか」
未来に帰れなくなった隙間漂流者には、帰る場所もなければ、頼れる者もいない。
私は彼女を『囲う』ことにした。もちろん、保護する的な意味でな。
「お、おま、今、マナ、部屋」エルレインは口をぱくぱく挙動不審である。

「ふわぁ、エルちゃん、おはようございます」マナの寝間着はだらしなく乱れている。
「……おはよう」エルレインは気まずそうに目をそらした。
「どうした？　顔が赤いが」
熱でもあれば大変である。私は近寄ろうとするが、エルレインは腕をぶんぶん振って後退った。
「うるさいうるさいっ、なんでもないっ！」エルレインは慌てて立ち去ろうとする。
私はしばし、考えた。
……そうか。エルレインの奴、自分が仲間ハズレにされたと思って……。
今までの行動を観るに、あいつは意外とそういう所を気にするらしいからな。
私はエルレインの背中に向かって声をかける。
「エルレイン、お前もやるか？」
「だ――だれがやるかあっ！」
エルレインは叫び、走り去ってしまった。
「あいつは、一体どうしたのだ？」
「思春期の娘さんは、難しいお年頃です」寝ぼけ顔のマナが答えた。
「……お前は顔を洗ってこい」

庭に出ると、黒い執事服をその身に纏った長谷川が、既ににっこりと立っていた。
「おはよう長谷川――おや、それは」
隣には、体操着に着替えたエルレインが、頬を染めて俯いていた。
「エル様が、戦闘の指南を願いたいとおっしゃったもので」
「――アタっ、アタシはそのっ、普段は『通信教育』の力が使えないし……この人、化け物みたいに強いし――あっ、いや、そういう悪口的な意味じゃなくて、純粋に、憧れというか……って、アタシ何を言ってるんだ……」

エルレインは顔を真っ赤にして、支離滅裂な言動である。彼女の赤面症はそれなりに魅力的ではあるが、このままでは恥ずかしさに身悶え、いつ死んでしまうかも知れない。いつかは直してやりたいものである。

「かいちょーさん、このぱんつ履けばいいんですか？」マナはブルマをひらひらさせている。その姿は寝間着をほっぽり出し、庭先で下着いっちょうであった。

「お前はまず恥という概念を知れ！」

「うわぁ……いろんな意味ですごぃ……」エルレインは頬をひくつかせ、マナの姿に釘付けであった。それを見て、私は気づく。

「その体操着、我が校指定のものでは無いようだが？　それにブルマはいかん。色々な意味でな。自分の趣味ならそれでも良いが――」

ブルマという単語に反応したのか、エルレインはほっそりと白い太ももを恥ずかしそうに両手で押さえた。

「ち、ちがっ、これはこの人が――」

「単純にわたくしの趣味でございます」

「――騙されたっ？」エルレインは唖然たる面持ちで長谷川を見た。

「流石は長谷川。ならばしょうがない。私の超・執事は欲望に忠実なようだ」

「しょうがないって……ええっ！　ちょ、ちょっと待って着替えさせて――」

「さ、はじめるか。お手本を見せるがてら、準備運動といこうか」

「かしこまりました」

私は長谷川に向かって跳躍。宙で横に捻りを加え、しなるムチのような動作で、峻烈な蹴りを繰り出す。長谷川はすかさず片腕でガード。すかさず私の足を掴み、回す。さらに長谷川の膝が私の顎へと繰り出される。絶妙なコンビネーション。私は腕をクロスし膝を受け、そのまま挟んで上に持ち上げ強引に体勢を崩す。

その隙に私は長谷川の手を足から外し、勢いそのままに後方に逃れるが――長谷川が地面に手をつき片手バク転の要領で、宙に浮い

ている私に追い打ちとなる蹴りを繰り出した。強靱な筋肉と絶妙な体重移動がなければ繰り出せぬ、勁疾なる蹴りが私を襲う。

私は両手で長谷川のつま先を掴み、腕の伸縮をクッションとするが、防ぎきれずに後方に吹き飛ばされる。宙で一回転し、姿勢を立て直す。

地面に足をつこうとした瞬間――目の前いっぱいに長谷川の微笑が――長谷川は瞬間移動のごとき迅速さで、一気に私との距離を詰めたのだ。長谷川の両腕は、既に後ろにしなり、筋肉にエネルギーを溜めている。そして、それは爆発する。

黒く鋭い刃物のような一撃が、容赦なく私に向かって突き出される。が――私はその一瞬を見きり、伸ばされた長谷川の腕を使って跳躍。前方に回転し、空中かかと落としを長谷川の脳天目掛けて振り下ろす。長谷川は腕を横に、頭上に構え、私の一撃を受け止める。長谷川の両足が――地面にめり込んだ。

一瞬、私と長谷川の動きが制止した。私はもう片方の足で長谷川の腕を軽く蹴り、跳躍。後転した後、地面に着地した。

「お見事でございます」長谷川が腕を下ろし、にこりと微笑んだ。

汗一つかいているようには見えない。流石だ。

「うむ」私は甚平の襟元を正し、縁側に座るマナとエルレインに向き直る。

エルレインは何故か呆然としている。その横でマナはうつらうつらと船頭をこぐ。

「さあ、やってみろ」準備運動としてはまずまずだろう。

「――できるかあっ！　お前、今の戦いで地面に一度も足を付けていなかっただろう！」エルレインは真っ赤になって吠えた。恥ずかしがらなくても真っ赤とは。彼女の血管を私は心配する。が、それは表面に出さずに答える。

「これが長谷川流、空中護身術『おてだま』の型だ。さあ、お前も――」

「――だからできるかあっ！　何でびっくりサーカスみたいなやり

とりが、そんな脱力系のネーミングなんだ！」
「ならば、最も過激な名称を持つ型『虐殺黒の盆踊り』を――」
「ものすごく物騒だけどやっぱり滑稽だ！　ってかあんなのいきなり出来るかあっ！」
「できないできない言っていては、何も出来ないぞ。千里の道も一歩からだ」
「その一歩がアタシにはとても遠く見える！」
「そんな軟弱な精神で、よく私を暗殺しようなどと世迷ったものだな」
「うっ……強化装甲と『十徳ナイフ暗殺術』さえうまく使えれば……」エルレインは肩を落とした。
強化装甲とはあの筋肉の筋をかたどった様な黒いバイクスーツのことで、身に着けるだけで飛躍的に身体能力が向上するという。十徳ナイフ暗殺術は、不可思議なあの回転のことらしい。むろん、エルレインの言葉を信じるのなら、だが。
「ふん、技術だけに頼っているようでは、この私には勝てん」
「……わかってるよ」エルレインは益々落ち込んでゆく。
「エル様」長谷川がエルレインの手をそっと取った。「大丈夫です。焦らず、ゆっくりやっていきましょう。会長さまも、はじめは素人でございました」
「長谷川、さん……」エルレインが顔を上げ、長谷川を見上げた。
長谷川は女神のような微笑みで答えた。エルレインの頬が染まった。
「……惚れたな」
「ばっ――そんなことあるかっ！　あっ、いや、長谷川さん、そういうことではなくてですね……その」エルレインは吠えたりあたふた弁解したりと忙しそうだ。
時計を観ると、既に朝食の時間が迫っていた。
「おっと、時間だ」
これは先が思いやられる。しっかりとしたトレーニングプランを

練らなければ。
　縁側に倒れ込み惰眠をむさぼる体操着ブルマばいんばいんに向かって、私は叫ぶ。
「マナ起きろ！」
「ふぁ……」マナは重そうなまぶたを細く開いた。
「ごはんだ」
「――ごはんっ！」マナはぴょんと跳び上がり、眼を爛々と輝かせた。何とも現金な奴である。
　しかし、これは使えるかも知れない。毎朝これで起こそう。

　朝食を取り、着替え、長谷川の見送りを経て、学校へと出かける。
　マナとエルレインは天照高校の制服に身を包んでいる。
「なんでアタシがこんな格好……」
　エルレインはひらひらしたプリーツのスカートが気に入らないようだった。
「え、かわいいですよ」マナが言う。
　エルレインは赤面して、顔を背けた。
「だいたい……どこに連れて行こうっていうんだ」
「学校だ」私は言う。
「学校！　何でアタシが！」
「決まっている。未来から来たなどという妄言を吐くお前を、現実にコミットする為だ」
「はあ？　何をわけわからないことを」エルレインは訝かしげな表情になった。
「学校は楽しいところですよ。エルレインさんも、そのうち慣れますよ」
「お前は慣れるのが早すぎだ。まだ通い始めてからそれほど経っていないだろうが」
　えへへと、マナは舌を出した。その横で、エルレインが不機嫌な表情をしている。

「アタシに学校なんて必要ない。……あ、わかった嫌がらせだな！　アタシに恥をかかせようという魂胆だろう！　そうはいかないぞ！」

「そんな！　かいちょーさんはそんなことしませんよ」

「なんだ、学校の勉強について行く自信が無いのか？」

「はあ、まさか！　この時代の勉強にアタシがついて行けないとでも？　バカにするなよ！　アタシは『通信教育』で全ての科目をマスターしてるんだ。この時代の勉強なんて、ちょちょいのーぷーだバーカ！」

エルレインは得意げに胸を張っていたが、彼女は自分の言動が子供っぽい事に気づいているのだろうか？　いや、気づいていないのだろうな。それにしても、

「『通信教育』か。お前、不登校児だったのか？」

「どういう意味だそれ！」エルレインは瞬間沸騰した。

まあいい。どちらにせよ、測ればわかることだ。

「ならばテストを受けて貰おう。マナよ、今日こそお前にも学力テストを受けて貰うぞ」

「テスト……？　よく分からないけど、嫌な響きです」

「テスト！　ふん、望むところだ！　お前に未来を証明してやる！」

両者共に痛い子の発言である。私は遺憾の意を表したい。

「いーくーん！」後ろから声が掛かる。この呼び方をする人物は、一人しか居ない。「わあっ！」

人が、私の頭上を軽々と飛び越え、目の前に着地した。

「とっとっと……飛び過ぎちゃった」

もはや、人間業ではない。

「おはよう！　今日は起きれたよ！」

人外の技を披露しながら、それを気にせず満面の笑みをこちらに向けるのは、幼なじみの藤堂春香である。最近飛躍的に向上した身体能力は仕方がないとして、

「藤堂！　毎回言っているが、私のことは『いーくん』ではなく、

伊統会長と――」
「『いーくん』？　……まさか、伊統だからいーくん？　……ぷぷっ」
　エルレインは口を押さえてぷるぷる震えている。笑っている。堪えている。私のことを露骨に馬鹿にしている。だから嫌なのだ……。あの呼び方は。
「ん……？　その子誰？」藤堂がエルレインを見た。
「娘だ」
「「――えええええっ！」」マナ、エルレインが同時に驚いた。
「……ふーん」藤堂は、驚かなかった。どちらかといえば、冷ややかな目線だった。
「ど、どういうことか説明して貰おうかっ！」
　エルレインは私の襟を掴んでぶんぶん揺さぶった。
「あ、まさか、アタシを屋敷に監禁して、合法的にあんな事やこんなことを……」
　エルレインは顔を青くしたり赤くしたり、ぷるぷるぶんぶん忙しない。
「考えすぎだ。変態」妄想のし過ぎではないか。
「――それはアタシの台詞だあっ！」吠えた。忙しい奴だ。
「名前もエルレインだと虐められるだろうからほれ、『伊統絵瑠』と」
　戸籍を見せた。我ながら美しき配慮。何という優しさだろうか。
「にゃああっ！」エルレインは見るなり破いた。
「それはコピーだ。ほれ、本物はこっちだ」私は戸籍をひらひらさせた。
「ぐうっ！　変態！　変態っ！」エルレインの変態コールをバックに、
「かいちょーさん、どういうことですか？」マナが戸惑いを隠せない表情で聞く。
「元はと言えばお前のせいだ元凶め。娘が一人増えたところで、同

じ事だ」
「おお、かいちょーさん、太っ腹ですね」
「良くそんな言葉知っているな、外国人」
「知っていることは知っています。ところで……」
マナは何かを言いたそうに、指で遊ぶ。
「どっちが『お姉さん』ですか？」
エルレインの変態コールがピタリと止まった。
「いろいろ考えたんだがな……お前だ」私はマナを顎で指した。
「……わあい」マナは両手を挙げて喜んだ。
「まてまて！　何でこいつがアタシの『お姉ちゃん』なんだよ！　理由は！　いや、待て、そもそも娘というのが……ああっ、なんだかわからなくなってきた」
エルレインは髪をかきむしっている。そんな彼女に、理由を述べる。
「早い者勝ち」別称、既得権益である。
「――わけがわからないっ！」
「マナの方が早く娘になったからな。お前の方が後だ」
「エルちゃん、お姉ちゃんと呼んでもいいんですよー」マナは頬を上気させ、目をきらきらさせている。呼んで欲しいっ！　という気迫が伝わってくる。
「いやあああああっ！」エルレインは頭を抱えて天に叫んだ。
ふと気になって藤堂を見ると――前を向いて、無表情に歩いていた。

結局、エルレインは教室に着くまでふてくされており、一言も口をきかなかった。
さて、教室で二人目の娘の自己紹介な訳だが……。
がらりと音を立てて戸が開かれる。
不機嫌な表情のままエルレインが入ってきた。
「さあ、自己紹介を」先生が促す。

エルレインは無言。眼を顰め、目つきを悪くしたまま教室を見渡す。

その訝かしげな顔は、最悪の第一印象と言える。まずいぞ。

エルレインが、口火を切った。

「アタシは、火野坂エルレインだ。未来から来た。過去の人間であるお前らと仲良くするつもりはない。……以上」

教室は、凍りついたようにしんとしている。

最悪だ。このままではまずい。これでは円滑な学園生活など、送れるはずがない。何とかしなくては！

私が立ち上がったその時――ぱらぱらとまばらな拍手が鳴った。

みると、誰もが無表情で、前を向いている。その視線は、どこも見ていない。虚ろな目をしている。冷たいと言うよりは、淡々としている。

「はい。みんな、仲良くしてあげてください」先生も淡々としめた。

エルレインは戸惑っている。それを見て、隣の席のマナが小声で訊ねる。

（かいちょーさん、みんなどうしちゃったんですか？）

（……わからん）

「席替えを行なうぞー」何事もなかったかのように淡々とホームルームは進む。

エルレインは真ん中辺りの席になった。マナはその真ん前にいる。

「いっしょですね。たくさんお話できますね」と後ろを振り返り、うれしそうだ。

エルレインは複雑そうな表情をしていた。

「プリントを配るぞ。後ろに回してくれ」先生がプリントを配りはじめた。

マナはエルレインに渡す。エルレインは渋々後ろに回す。エルレインの後ろは藤堂だった。すると、受け取った瞬間、

「ありがとう――マナちゃん」藤堂はにこりと笑った。

その行動に、エルレインは一瞬怯む。すぐに前を向き、俯く。じ

っと何かに耐えるようなその姿は、明らかに動揺していた。
先生は替わり、授業が始まる。出席を取る。
エルレインだけが、呼ばれなかった。エルレインの番だけ飛ばされたのだ。
休憩時間。誰もエルレインに関心を示すものはいなかった。
マナはエルレインに一生懸命話しかけるが、エルレインは俯いたままだ。会話をする気がないのか、一方的にマナが喋る構図となっている。
そこに、藤堂と霧島書記長がやって来た。霧島書記長が口を開く。
「マナちゃん――一人で何してるの？」
「えっ……」マナは戸惑いの視線を二人に向けた。
そこで、休憩時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。
英語授業。出席確認の際、エルレインは当たり前のように飛ばされた。
例によって、一人ずつ順番に当てられ、英文を訳してゆく。エルレインの番は、当然のように飛ばされた。
休憩時間、クラスメイトは当たり前のようにエルレインを無視し、いない者のように扱っている。
クラスメイトだけではない。先生方も、エルレインと関わらない。
エルレインの順番が来ても当然のように飛ばすし、エルレインが堂々と爆睡しても、先生方は何一つ注意しなかった。
昼休みに至っては、
「エルちゃん、一緒にお弁当食べましょう。かいちょーさんも！」
マナは輝かんばかりの笑顔でエルレインに近づく。
「……いい、さっき食べたから」エルレインは気だるそうにそっぽを向いた。
「じゃあ、わたしの食べるところ見ててください」
「お前、馬鹿だろ」エルレインは苦笑したが、まんざらでもなさそうだった。
「――マナちゃん、一緒にお弁当食べよ！」

藤堂であった。隣には抜け目なく霧島書記長が立っている。
「いいですよ。じゃあ、かいちょーさんとエルちゃんも一緒です」
「うん。いいよ」藤堂は笑って答えた。
「私は友人と食べる。お前達はお前達でよろしくやってくれ」
私と書記長が同じ会食の場に同席し、争いごとが起こらないわけがない。無用な争いは、事前に避けるのだ。
「えー、じゃあ、友人さんも一緒に食べましょうよう。みんなで食べた方がおいしいですよ」
「そういう単純な問題ではないのだ」
「――ボクは良いよ」友人であった。
「友人……」いつの間に？
「面白そうだし」友人は涼やかに微笑んだ。流石は友人。爽やかな外道である。
昼飯を食べていると、エルレインの腹の虫が鳴った。
それを見て、マナの眼が光った――気がした。
マナは長谷川特製、至高お子様ミートボールを小さなフォークでとると、
「エルちゃん、あーん」
「や、やめろ……アタシは、そういうのは……マリナだけにしてるんだ」
それはそれで、問題だと思う。
「姉妹だからですか？」
「そ……そうだ。姉妹だからだ」一瞬、不可思議な間があった。
「なら、わたしたちも今は姉妹です。お姉ちゃんの言うことは素直に聞きましょうねー。さあ、あーん」マナはとても楽しそうである。
「あ、あのなあ……だから……その」エルレインは戸惑い、当然のように頬を朱に染めている。
「あーん……？」マナが寂しそうな表情で訴えてくる。
「……わ、わかったよ……あー――」エルレインが口を開きかけた、その時――

「――マナちゃん、さっきから、何ひとりごと言ってるの？」
藤堂が訊ねた。無垢な表情であった。
「え？」マナと、エルレインの動きが止まる。
その隙に、藤堂はマナのミートボールを口に含んだ。
「あーん。ぱくっ。もぐもぐ……おいひいね」
マナは、ぽかんとフォークの先端を見ている。
「……ごめん、アタシ、ちょっとお手洗い行ってくる」エルレインが立ち上がった。
「――エルちゃん！」
「ん？　マナちゃん、どうしたの？」藤堂が、自然と疑問を投げかける。
マナは眼に涙をためて、きっと藤堂を睨み、
「春香ちゃんの――」
「――マナっ！」突然エルレインが、大声で叫んだ。
注目したのは、私とマナだけ。教室は何事もなかったかのように、ざわめいている。
完全に、異常だ。これでは、まるで――。
「その子を責めるな。その子は悪くない」
そう言い捨て、エルレインは教室を飛び出すように出て行った。
「エルちゃ――」
私は手をあて、マナの言葉を制止した。
「かいちょーさん……？」
「所用を思い出した。少し、外す」

手洗いから出てきたエルレインと会った。前髪には水滴が残っていた。
「これはどういうことだ？」私は訊ねた。
エルレインは目を合わさず、口を開いた。
「念のために聞くけど、お前がやっているんじゃないんだよな」
「――当たり前だ！」私がこのような卑劣なマネをするとでもいう

のか！

「なら……良いんだ。アタシにとっては、悪い知らせだけどな」

エルレインは私とすれ違おうとする。私は咄嗟に彼女の腕を掴んだ。

「……もう少し、時間をくれ」エルレインは呟くように言った。

私は彼女の腕を放した。エルレインはそのまま何処かへ歩いて行ってしまった。昼休みのチャイムが鳴ると同時に、エルレインは教室へと戻ってきた。

マナが一生懸命何があったのかを訊ねていたが、エルレインは答えなかった。

次の授業でも、エルレインはまるで『いない者』として扱われた。いったい……これはどういう――。

がたりと音がした。見ると、マナが立ち上がっていた。

「何でみんな、エルちゃんをよってたかって無視するんですかっ！　酷いですっ！」

藤堂が立ち上がって、言った。

「マナちゃん――何を言っているの？」抑揚のない声だった。

マナは動揺し、非難の視線を私に向けた。

「かいちょーさんがやらせてるんですか！　いくらなんでも酷いですよっ！」

マナは今にも泣きそうであった、自分自身が傷ついたように。

がたっと音がした。エルレインが立ち上がり、教室の外へと駆けだしていった。

「あ、エルちゃん待って！」マナも教室を出て行った。

先生は、何が起こったのかわからないと言った顔で、動揺していた。

「……連れ戻してきます」私は教室を出て、彼女たちを追った。

すぐに廊下で口論する二人に追いついた。マナは私に気づくなり一言。

「かいちょーさんのばかっ！　人でなしっ！」

「そいつは関係ない」エルレインが言った。
「えっ？　……エルちゃん？」
「たぶん、これが『隙間漂流者』になるって事なんだ」
「隙間漂流者に……なる、だと？」私は聞き返した。
隙間漂流者とは、過去と未来の狭間である、『変化する前の未来の記憶』を保持したまま現代に取り残される存在であったはずだ。
「そんな甘いもんじゃ無かったんだよ……。さっきの行動を見てて、わかったろ……。
アタシは、存在しているようで、存在してない。アタシのやったことは、他の誰かがやったことになるし、アタシと話したって、その事実は失われてしまうんだ。この時代の人間には、アタシを感じることはできない。アタシは、過去と未来の隙間に入ってしまったんだ。……アタシは『何処にも存在しない』んだ。だから、会長を恨むのもお門違いだし、マナ、あんたの友達が冷たいわけでもないんだ。気にするな」
「でもでも、わたしはエルちゃんの事がわかります。エルちゃんをはっきり感じてます。かいちょーさんだって！」
「何でだろうな……アタシが隙間漂流者になった時、側にいたからかもな。でも、他の人間は感じないんだから、アンタ、アタシと喋ってると変な人間だと思われるぞ」
「そんな……そんなの……寂しすぎます」
「別に寂しくなんか……無い」
エルレインは、目にぎゅっと力を込めた。睨むような目つきになった。
「アタシには、マリナがいるんだ。あいつらなんかに無視されたって……世界の全てに無視されたって、どうって事……無い」
私には、強がりにしか見えなかった。
「だから、マナ……アンタはアタシに関わらない方がいい」
「――そんなことできませんっ！」
「マナ」エルレインはふわりと笑ってマナに近寄り、肩に手を置く。

マナはすがるような目で、エルレインを見上げた。
エルレインの笑みが、見下すような、冷たい視線に一変した。
「同情するな」
エルレインは何処かへ走って行った。マナはその場にへなへなと座り込んだ。
「マナ……」
マナが、へたり込んだまま振り向いた。
「かぃちょぉさん……」瞳はうるうると濡れていた。
「とりあえず、教室に帰れ」
「でもっ……！」
「でももへったくれもない。お前が教室に帰らなければ、みんなが心配する。それに、エルレインはさらに落ち込むぞ」
マナははっとして立ち上がる。
「そんなのダメです！」
「なら、教室に戻れ」
マナは何かをうったえるように、じっと私の眼を見る。
「……エルレインの事は、私が何とかしてやる」
マナは目をごしごしと擦り、涙を払う。
「さあ、行け」
「わたしはエルちゃんを無視したりなんて出来ません！」マナは教室へと戻っていった。
マナの後ろ姿を見送りながら、考える。
『隙間漂流者』か。馬鹿げている。
だが、馬鹿げているが、信じられないが、現に起きてしまっている以上は、信じるしかないのか。

次世代学校防犯システム『リガン』を使えば、人捜しなどすぐだ。
私はめまぐるしくリガンの映像を切り替えながら、エルレインを捜した。
そして、屋上プールで見つけた。エルレインは校舎で最も高い場

所に座り、秋風に吹かれて足をぶらぶらさせていた。まさかとは思うが、念のために向かう。
「エルレイン」
「会長、来たのか」
「娘の様子が少しおかしかったのでな。まあ、理由は想像着くが」
私はエルレインの下で壁にもたれ、腕を組む。彼女に近い景色を見る。
「まったく……いつまで家族ごっこをやってるんだよ。ばか」
「何を言っている。お前は既に、戸籍上では私の娘だ」
「紙切れ一枚」
「だが、契約だ」
「アンタが勝手に決めた」
「だが、正真正銘私の娘だ」
「だから、どうした」
「責任が伴うと言うことだ」
エルレインの諦めたような笑声と、溜息が微かに聞こえた。
「アタシは、猫と一緒か」
「手間のかかる黒猫だ。あとさき考えずに高いところにすぐ昇りたがる」
「ばーか。アンタはいちいち言うことが回りくどい」
「褒め言葉と受け取ろう」
「いい根性してるよ。まったく……。アンタがそんな奴だって知ってたら、アタシも暗殺しようなんて思わなかったかもな」
「現状否定か？」
「いいや、可能性の話だよ。ホントに先の事なんて想像つかない。アタシ、つくづく実感した。未来にいた頃は、アタシはアンタの事なんか知るよしも無かったし」
「お前は未来人なのだろう？　私のことなど、全て知っているのではないのか？」
「アタシのような一般市民、もしくは反逆者に手に入れられる情報

なんて、アンタの栄光の歴史ぐらいなもんだよ、憎たらしいぐらいのね。アタシはここに来る前、アンタの顔すら知らなかったんだ。完全管理社会の情報統制だよ」

「ふむ、私ならやりかねんな」私は深く頷いた。

「でも一番意外だったのは……」

エルレインは、声を落とした。

「……アンタとこんな風におしゃべりするなんて、夢にも思わなかった」

私は思わず、エルレインを見上げた。

「こんなアタシの話し相手になってくれてありがと」

エルレインは、下の私に微笑みかけた。

「エルレイン、お前――」

「会長、外ではアタシと関わらない方がいい。もちろん、マナもだ」

エルレインの表情は真剣であった。

私は戸惑った。確かにエルレインと関わることは、エルレインを認識できない他者から見れば不自然に思われるだろう。

だが、それでは彼女はどうなる。

エルレインはずっと、この現代で孤独に過ごすというのか……？

それで彼女は本当に良いのか？

……だが……しかし……私は……、

「……懸命な判断だ」こう言うしか、無かった。

「そう言ってくれてうれしいよ。嫌だって言われたら、正直、困った」

エルレインは遠くを眺めながら、苦笑した。

「マナは嫌だと言うだろう」

「それはアンタが何とかしてくれ」

「良いのか、それで」

「ああ」

エルレインの足が、静止した。

「アタシには、マリナがいれば充分すぎるよ」

エルレインは、やはり、遠くを眺めていた。
その先には、青空の中、黄色く輝く太陽があった。
「……はやく、会いたいな」
プレゼントを待ち侘びる子供のような表情で、エルレインは空と地上の間をじっと眺めていた。

放課後の教室。太陽は空と地上の狭間に位置し、赤く染まった。

《――にゃおーん！》

「ごきげんよう伊統会長！　今日こそ死になさいっ！」
意図的に拵えた掃除用具入れの隙間から、マリナが姿を現わした。
前回あれだけ痛めつけられたにもかかわらず、この登場。大したものである。
「――マリナっ！　大丈夫だった？」エルレインは輝かんばかりの笑顔になった。
「……うわぁ、うざっ……」マリナは心底嫌そうな顔になった。
「マリナ……」エルレインの表情に暗雲が立ちこめた。
「ああもうっ――やりにくいっ！」マリナはその場で地団駄を踏んだ。
「マリナ、女の子がそんなことしちゃ駄目だよ」エルレインはおどおどしながらマリナの行動を窘める。
「――うるさいっ！　あなたあたしの何？　何なの？」マリナは眉をつり上げ、エルレインに迫る。
「あ、アタシは……マリナの……」
がんばれ、姉よ。
「いっとくけど、お姉ちゃんってのは禁止だからねっ！」
「えっ、そんな……」エルレインは戸惑っている。
「ああ、もう、うじうじすんな！　あたしはうじうじする奴大っ嫌い！」

「ううっ……」エルレインは涙目になった。
まったく……。この姉妹の溝は深すぎる。
「あっ、時間がこんなに――！」マリナは腕にはめた時計のようなものを見て叫んだ。
「マリナ、マイペース」
青い旗がひらりと舞った。マコトがゲートを守っていた。マコトはデフォルメされたライオンのようなお面をかけ、表情を隠す。
「あ、うん。ごめん――さあ、気を取り直して伊統会長かく――」
「――マリナちゃんっ！」
教室の扉が開くと、マナが駆けつけ飛び出して来た。
確か、今日は霧島書記長達と買い物に行くとかで、藤堂春香の馬鹿力で拉致されたはずであったが……？
「ま、マナちゃん！」マリナの眼が見開き、驚きの表情になる。
思えば前々回、マナが私の側にいるにもかかわらず、躊躇なく『フライパンビーム』を放って以来の再会であった。
「はあっ、はあっ、間に合いました」マナは息も切れ切れ、玉のような汗が額に幾つも光っている。
「マナちゃん……わたしはっ……――わあっ！」
マナがマリナに抱きついた。心配そうな表情で言う。
「――会いたかったです！　大丈夫でしたか？」
「あ、えっ……うん」
「よかったぁ……」マナは心の底から安堵している様であった。
それを見て、マリナの表情も柔らかなものになる。
「大丈夫。あれくらいでへこたれる、あたしじゃないよ」
「よかった……よかったです……」
「大げさだなあ。大丈夫。あたしは元気だから」
マリナはマナを励ますように頭を撫で、微笑んだ。
「……なんで、あんなに態度が違うのかなぁ」エルレインは肩を落としている。
「そりゃあ、友達と、突然現われた自称姉のおっちょこちょい眼鏡

っ子では比べものにならないだろう」
私は親切心でメカニズムを教えてやったが、何故かエルレインは益々落ち込んだ。不思議なものである。
そんな姉の苦心を知ってか知らずか、マリナはマナと楽しそうに会話していた。
「マナちゃん、こないだはごめんね」
「ううん、いいんですっ。マリナちゃんが無事ならそれで」
「マナちゃんを傷つけないように、ちゃんと会長を殺すから――」
「――それはだめっ！」マナは眉をつり上げた。
「どうして？　何でわかってくれないの？」
「それはこっちの台詞です。マリナちゃんどうしちゃったんですか？　この間は話し合うって言ってたのに」
雲行きが、怪しくなってきた。
「まさか！　あたしは最初から会長を殺すつもりでここにいるの。話し合いの余地なんかない。あたしは未来で待ってる仲間のために、あの男を殺さなきゃいけないの！」
マリナは私を指さし、睨み付けた。
「駄目ですっ！」マナは私とマリナの間に入った。
「マナちゃん……マナちゃんを盾にするなんて、やっぱりあの男は極悪非道だわ。きっと洗脳されてるのね。マナちゃん、あたしが助けてあげる！」
マリナは黒い棒を射出。ガチャガチャと音を立て、漆黒のフライパンに変わる。
マリナはそれを掴むと、剣のように、私に向かって構えた。
「マリナちゃん、わたし、洗脳されてなんかいません！」
「――マナ、退いてろ！」私はマナをエルレインに強引に押しつけた。
「でもっ――」
瞬間、私の横を黒いビームが超高速で通り過ぎ、後ろの壁にぶつかり轟音を立てた。

「『加速装置』――暴走超特急フライパンビーム」マリナは静かに言った。

毎度の事ながらあの常識を越えた攻撃にはひやりとさせられる。

「エルレイン、あれはどういう仕組みだ」「はーなーせー」マナはじたばた。

「こらっマナ、暴れるな……えっ、何？」エルレインはじたばたするマナを羽交い締めにしている。

「加速装置とは何だ？」「はーなーしーてー」じたばた。

「加速装置はタイムマシンの技術の応用で作ったらしいけど……詳しいことはわからない。でも、あれはアタシしか使えないはずなのに、なんでマリナが使えるんだろう？」エルレインは首をかしげた。

「私に訊ねるな」「はーなーしーてーくーだーさーいー」じたばた。

「あ、うん。でも、これだけは言えるよ。――会長、気をつけて。黒い武器は唯一、夕焼け空間で過去の人物を殺せる武器だ。その素材は、この世に存在しないはずの物質で出来ている……らしい」

「らしいとは何だ、らしいとは」「えーるーちゃーんー」じたばた。

「マユまゆが言ってた。夕焼けにゃんにゃんを作った天才だ」

「そいつがこの騒動の元凶と言うわけか」「おーねーがーいー」じたばた。

そいつを引きずり出せれば、この超常現象を解明できるかもしれん。

――黒いビームが、再びよぎった。

「そこ、何こそこそ話してるわけ？」マリナが私を睨んでいる。

私はマリナに向かって、ロケットペンシル弾『チェス』――あの忌々しき悪魔の武器を構えた。それを見た途端、マナはぎょっとし、ぴたりと止まった。おそらく、あの赤毛ポニテ悪魔の恐怖が蘇り、体が無意識のうちに避けているのだろう。

「マリナ、もう一度問う。あのような散々な眼にあっても、未だ、本当に、私を殺すか？」

「当然よ！　よくもあんなめにあわせて、憎さ倍増よ！」

「ほう、私怨で戦うか」
「残念！　それだけじゃないわ！　あたしは――未来の仲間のためにあんたを殺すのよ！　仲間が待ってるの！　絶対に成功させるのよ！」
語るマリナは必死の形相であった。あれは、後がない者の眼だ。
何が彼女をあそこまで追い詰めているかは知らないが――。
「――覚悟良し！　戦争を始めようかっ！」
私は『チェス』をマリナに向けて放った。
ロケットペンシルの切っ先が弾丸の様に飛び、マリナの耳をかすって、背後で爆発した。爆炎の熱を感じる。爆風でマリナは前につんのめる。
「いたっ……！」マリナは起き上がり、振り返ると「くっ、こないだもそうだけど、何よ、これ……！」悲鳴にも似た感想を述べた。
後ろの壁は爆球によって丸く抉れ、掃除用具入れ――ゲートの手前まで浸食していた。青い旗が、ゲートを守るようにして隠していた。マコトである。
「マコト！　大丈夫？」
「だいじょぶ。ウチは良いから、自分の事だけ考えて」マコトは大きな旗を振り、抑揚のない声で言った。
「――マリナっ！　会長どうして！」エルレインが叫び、私に批難の視線を向ける。
「エルレインよ、お前は勘違いしているようだが、私はお前の味方ではない。私は私の意志で、私を殺そうとするものを排除する」
「排除って……どういう意味だ！」エルレインはマナを放りだし、私の胸ぐらを掴む。
「お前は私の心配なんぞするより、あれの心配をしたらどうだ？」
私がマリナに視線を戻すと、マリナは漆黒のフライパンを構え――
「加速装置――暴走超特急フライパンビーム！」
黒い閃光が私に迫る。私は振り向きざまにチェスを向け――放つ。
私とマリナの間で爆発とビームがぶつかり、ひしゃげたフライパ

ンが明後日の方向へ飛び、地面へ落ちた。
「くっ……」マリナは再び黒い棒を射出する。手に取ると、ガチャガチャと音を立て、フライパンへと変貌する。
黒いビームが放たれる。私はその度にチェスの爆発で打ち落とす。
マリナは何度も黒い棒を射出する。
「いつまで続くかな！」
「――そっちこそっ！」
教室は、爆発の衝撃で全てのガラスが吹き飛び、爆発の多い中心部分は焼け焦げ、フライパンが吹き飛ばされた箇所は砕けてくぼんでいた。まさに、戦場である。
「二人とも、やめて！」耐えかねたのか、エルレインが間に入った。
「邪魔するな！　危ないぞ！」
「邪魔しないで！　ほんっと目障りな奴！」
それを聞いたエルレインは、表情をくもらせる。目尻に涙が溜まってゆく。
そしてあろう事か、突然走り出し、教室の外へと出て行ってしまった。
驚いた。まさか、逃げ出すとは……。
あいつは、何を考えているのだ。あの時の覚悟はどこへ消えた？
「逃げたの……口だけね！」マリナはそううそぶいていたが、その表情は微かに寂しげであった。それを振り払うかのように、マリナはフライパンを振り、私に向ける。
突然黄金色が、私の視界を覆った。エルレインから解放されたマナであった。マナは私の盾となるように、マリナに向かって立ち塞がる。
「マナちゃん！　退いて！」
「駄目ですっ！」
「何でそんな奴庇うの！」
「かいちょーさんは悪い人じゃありません。すぐ怒るし、ちょっぴり意地悪ですけど」

「そいつ程の悪人はいないわ！　そいつのせいで、未来の仲間がどれだけ酷い扱いを受けているか！　そんな奴、いない方がいいの！」
「わたしにはそうは思えません！　かいちょーさんはやさしい人です！」
私は、マナの肩の上から、チェスをマリナへと向ける。
「かいちょーさん……？」
「動くな」
私は丁度マナの背後に隠れている。どうやっても、ビームは当たらない。
私は言った、エルレインが逃げれば、マリナを殺すと。
私は、有言実行の男だ。
チェスを――マリナ目掛けて撃った。
マリナは戸惑い、反撃できない。
チェスの切っ先は真っ直ぐマリナの顔面目掛けて飛び――爆発した。
「マリナ！」「――マリナちゃん！」マナが悲鳴を上げた。
もう一人は、微動だにしなかったはずの、マコトの上擦った声であった。

――風を、感じた。

突如として暴風が発生し、爆炎が一瞬にしてかき消される。
目の前に、黒い、竜巻が発生している。その中心、黒い人影が、浮かんでいる。
光沢を放つ黒ずくめのバイクスーツに、嵐になびく赤いマフラー、デフォルメされた黒猫のお面。
その左手には、黒い何かが回転しており、それが嵐を創り出しているのだとわかる。
一方右腕には、サイドポニーテールの少女が抱きかかえられていた。あれは――

「――マリナちゃん！」
マリナであった。マリナは驚いたように眼を見開き、黒猫のお面をみつめている。
黒ずくめの人物は、左手にある回転を止める。回転を止めたそれは、少し変わった形の十徳ナイフのようであった。
ふわりと着地し、ガラス細工を扱うようにやさしく、マリナをそっと地面に下ろす。
「純真で可憐で美しき絶世の、世界一の美少女よ、ケガはないか？」
「あ、あなたは……一体……」
「アタシ……ワタシは、えっと、そうだな……」
お面の人物は、顎に手を当て何やら思案する。
「ワタシは時間の狭間からやって来た正義の使者――ネコ仮面だっ！」
ネコ仮面は、ヒーローが良くやりそうなポーズをとった。
背後に竜巻が渦巻き、何故か爆ぜた。赤いマフラーがなびいている。
「君の熱い思いが、ワタシをここに呼び寄せたのだ！」
言い切った瞬間、教室内が、静寂に包まれた。
なんだこれは、ヒーローショーか？
「か、か、か……」マリナは、口を開けたり閉めたりしている。
思いが呼び寄せるなど、とんでもない論理である。これでは、マリナも呆れるしかないだろう。
「……かっこいい」眼をきらきらと輝かせて、吐息をはいた。
ああ、背後に薔薇が見えるようだ。ときめいているな。ふざけるな！
「さあ、ここはワタシにまかせて、下がってなさい」
「でも、あたしはあの男を殺さないと――」マリナはお面に情熱的な視線を向けながら、物騒な言葉を吐く。
「――君のような美しい女性が、人殺しなんか駄目だッ！」雷音のように、ネコ仮面は吠えた。

マリナははっとして、胸を押さえた。俗に言う、胸を打たれたというやつか？　馬鹿じゃないのか？

――にゃあーん、にゃあーん。

シンデレラの鐘の音ならぬ、帰還の時間が迫ったことを告げるにゃあにゃあ音が鳴り響く。

「さあ、君は帰りなさい。ここはワタシがくい止めるッ！」ネコ仮面はマリナに背を向け、黒い十徳ナイフを構えて私に対峙した。

「でも！」「――マリナ、時間！」マコトが言った。

――にゃーん、にゃーん。

「ワタシなら大丈夫だッ！　また会おう、戦場に花咲く清麗な戦乙女よッ！」

マリナは一度ためらったが、しっかりと頷き、掃除用具入れ――ゲートへと向かった。マリナが隙間へと吸い込まれ、マコトも続いた。

マリナ達の帰還を見届け、ネコ仮面は十徳ナイフを納めた。

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》

ネコ仮面の姿が揺らぎ、天照高校の制服を着、赤いフレームの眼鏡を掛けたエルレインに変わった。

「エルちゃん！」マナが驚いて声をあげる。先程から驚きっぱなしである。

エルレインは自分の手を見て、呟く。

「……戻っちゃった」

「すごいですっ！　変身ヒーローみたいでした！　どーなってるんですか？」マナは駆けより、エルレインの体をぺたぺたする。

「お、おい、やめろよ。くすぐったいだろ……」

エルレインはマナを引きはがす。

「『覚悟』したんだ。何があってもマリナを守らなくちゃって。そしたら……変わった。『強化装甲』も、視力も、『通信教育』で得

た知識も『黒い十徳ナイフ』も全部、アタシの中に流れ込んできたんだ。不思議だよな。まるで、マリナへの熱い思いが『力』を引き寄せたみたいだった。にゃんにゃんが終わったら、元に戻っちゃったけど」

「やけにメルヘンチックな考えだな」

「会長……」気づいたように、エルレインは私を見た。

「――かいちょーさんのばかあっ！」マナが私に跳びかかり、ぽかぽかと胸を叩く。「どういうつもりですかっ！　エルちゃんが助けなかったら、マリナちゃんが……マリナちゃんが……」マナはぽろぽろと大粒の涙を流した。

「マナ、会長を責めないでくれ」エルレインだった。

「でも！　かいちょーさんは、わたしを……わたしを……」

マナは自分の行動が、マリナを追い詰めたことを、責めているのだろう。

「マナ、安心して。どんなことがあっても、アタシがマリナを守るから。会長を殺させたり、マリナを殺させたりしないから。アンタのせいになんて、絶対にさせないから」エルレインは、マナの頭を撫でた。

「エルちゃん……」マナは泣きはらした眼で、エルレインを見上げた。

「会長は、約束を守っただけだから。『アタシがマリナを守らないと、マリナを殺す』って。ね、会長……」

エルレインは、私に向き直る。

「ありがとう。信じてくれて」エルレインは、微笑んだ。

思いがけない言葉と反応に、私は一瞬、言葉に詰まってしまった。

「……別に、お前を信じたわけではない。私は、私を殺そうとしたものを、排除しただけだ」私は視線をそらした。

元に戻った窓ガラスの外は、既に夕闇に包まれていた。

「ところで、エルレイン」

「ん？　なんだ？」

「なぜ仮面を被っていた」
「そ、それは……そりゃ、もちろん、マリナの嗜好を考えてだよ！　マリナはヒーロー物とかが大好きでよく見てるし！　そのほうが円滑に――」
「本当のことを言いなさい」
「いや、ほんとホント、ホントに――」エルレインは慌てふためく。
「本当のことを言いなさい」私は繰り返した。
エルレインは、みるみる落ち込んでいった。
「……正体がアタシだってばれたら……マリナ、幻滅するんじゃないかと思って……」
とても、先程までのエルレインと、同一人物とは思えない程の変わりようである。
まったく、世話のかかる娘だ。私はエルレインの肩に手を掛け、言う。
「自分に自信を持て！」
ふと冷静になる。なぜ私は、私を狙う暗殺者だった少女を励ましているのか。
「……うん」エルレインは自信なさげにこくんと頷いた。「……でも、決心がつくまでは、このままで」
私は呆れ、これ以上は関わらぬ事に決めた。

第十話　賢人生徒会

「はあっ……はあっ……かいちょーさん……もう……ダメ……」
「まだまだ！　もっと腰をつかえ」
「はいっ……！　はっ！　はっ！　はあっ！　――あっ……！」
マナは、果てた。
私はぐったりとしたマナを抱き起こす。
「まったく、背筋3回で果てるとは、どういう根性をしておるのだ……ん？　どうした、エルレイン」
エルレインの頬は、何故か朱色に染まっていた。
「あ、いや、何でもない」そのまま俯いてしまった。時々わけのわからんやつだ。
マナが強くなりたいというので、夕食後、トレーニングに付き合うこととなった。
「食べた後すぐだと、ぽんぽんが痛くなるぞ」と言ったが、
「大丈夫です。ぽんぽんの丈夫さには定評があります」とお腹に手を当て、自信ありげにばいんばいんを張った。
天涯孤独が誰に定評を認めさせたのか。私は思わず指摘したくなったが、それを指摘するのはあまりにも酷だと思い、止めた。
「ぽんぽん痛くなっても本当に知らんからな」
「安心してください。ぽんぽんには自信があります」
故に仕方なくはじめたのだが……このままでは先が思いやられる。
「か、かいちょーさん」私の腕の中で、マナが手を小刻みに震わせながら伸ばしてきた。私はその手を取る。
「なんだ」
「（わたしの遺体は）景色の良い丘の上で、周りにはお花を沢山植えて頂けるとうれしいですお酒ください」
「貴様背筋3回で死にかけるなっ！　しかもさりげなく言ったのだろうがバレバレだ！　お酒は駄目だ！　法律で未成年の飲酒はかた

く禁止されている。私は自分が王になるまで、現在の法律は大体遵守するのだ！」

「戸籍を捏造する男が何を言ってるんだか……」エルレインはあきれ顔であった。

痛いところを突いてくるが、出来るのだからしょうがない。

「しゅしょーな心がけだとは思いますが、このままでは魔法が使えません。由々しき事態です」マナは何事もなかったかのように、むくりと起き上がった。

「マナ、無理に難しい言葉を使わなくても良いぞ」かえってバカっぽい。

「え、かいちょーさんの真似ですよ」

私はマナの頭をぐりぐりした。

「今度まねしたらどうなるか言ったよな」

私は指をばきばきと鳴らした。

「ちょ、ちょっとまって――いや、それだけは！」

「今まで忘れていたが貴様は『ぺんぺんの刑』だ！」

「ああっ、それだけは――」

「――会長、なにやってんの？」

「見てわからんか、夜の特別トレーニング――」

目の前に、豪華なドレスに身を包んだ、見目麗しい姫君が佇んでいた。

「――お姫さま！」マナが眼をまんまるにして驚いている。

姫君は、涼やかに笑った。そう、これは友人である。

「おお、友人よ、良いところに来た」

「ええっ、友人さんっ？」マナは目をまんまるにした。

「実はな『ぺんぺん』――」

「なるほどー。それは面白そうだね」友人は私が皆まで言う前に、理解してしまったようだ。流石である。

「何が面白そうですか！　ぺんぺんですよ！　助けて！」

「あはは。子供らしくてかわいいねー」

「ううっ……友人さんに助けを求めるのが間違いでした……それもこれも、あのみせーねんとか言うのが悪いんです。そういえばかいちょーさん、みせーねんって何ですか？」
「未成年か？　２０歳未満の児童ということだ」
「２０さい？」マナは頭を傾けた。
「二十歳を超えて大人になれば、酒を飲んで良いという法律になっている」
「へー……」マナは口に手を当て、何やら真剣な表情で考え込んでいる。
「だから二十歳まで待て。そうすれば合法的に酒が飲める」
さすれば特技の一つとして強みにでもすればよいだろう。もちろん常識的な範疇でな。それなら私も納得。全国の口うるさい親御さんも納得である。
「うーん、でも、２０歳になったら、魔法少女になれなくなるし……うーん」
マナはうんうん唸っている。バカか。
そして、マナの表情がぱあっと明るくなった。
「かいちょーさん、実は……わたし……隠していたことがあるんです。わたし……」
「――お前は永遠の一七さいだ。一生酒は飲めない」
「……実は２０さい――ええっ！」
ぐりぐりぐりぐり。こめかみのくぼんだところを重点的に攻めるのがコツである。
「いだいいだいっ！　なんで、ぐりぐりするんですかっ！」
「――お前の浅知恵などお見通しだ！　この馬鹿者がっ！　どうせ『実は二十歳です』とでも言うつもりだったんだろう！」
「違います！　違いますっ！」
「ほう、何が違うのかなあっ！　違ったらぐりぐりをやめて、代わりにクリームソーダ奢ってやる！」
「言いましたね！　言いましたね！　私の勝ちです！　『くりーむ

そーだ』はいただきですっ！」クリームソーダの発音がおかしい。
マナは確実にクリームソーダの存在を知らない。だが素敵な何かであることは本能で察知しているようだ。
　マナは、すっと真剣な眼差しで私を見た。
「かいちょーさん、わたし――実は２０歳から６歳までのフレキシブルな年齢設定――いだいいだいいだいいだいっ！」
「くだらんっ！　笑えんっ！　貴様の欲望筒抜けだ！　でなおしてこいっ！　良く『フレキシブル』などという難しい単語を知っていたものだなちょっとだけ褒めてやるぞこの外国人！」
「さべつー！　さべつー！　外国人だからどうしたって言うんですかっ！　外国人ばかにしないでくださいよっ！」
「ふむ……確かにそうだな」私は顎に手を当て考える。
「かいちょーさんが、わかってくれた！」何故かマナは笑顔になった。
「外国人は悪くない。お前がバカなのがいけない」
「――個人攻撃っ！」マナは唖然とした。
「あはは、君たちは本当に仲が良いね」
「――誰が？」「――あたりまえですっ！」
「え？」「えっ？」
　私とマナは顔を見合わせた。友人はお腹を抱えて笑った。
「あはは、いや……でも、お酒は駄目だよマナちゃん」友人は涙を拭いながら窘める。
「どーしてですかっ！　かいちょーさんをお守りするためには必要ですよ！」
「駄目だよ。放送コードに引っかかるからね」友人は人差し指を立てた。
「ほーそーこーど？」マナは小首を傾げた。
「なるほど。いろいろ脱線しかけているが、言い得て妙だな」私は腕を組んだ。
「友人さん、ほーそーこーどって何ですか！」マナはくいくいっと

友人の裾を引く。豪奢にふりふりである。
「そうだね……例えば……××××や、＊＊＊とか、※※※※とか――」
友人は爽やかに語るが、出てくる言葉は毒虫のように卑猥な言葉の羅列であった。
「友人、やめろ！　健全な青少年の育成に妨げがっ！」
「※※※※？」マナは無垢な表情で、最も言ってはいけない言葉を選び取った。
「ほら！　子供が真似する！」私はマナを指さす。
「かいちょーさん、わたし子供じゃありません！」マナはぷんすか怒った。
「あはは、まあまあ、過保護すぎるのは行けないよ――おとーさん」
「誰が……」否定、できなかった。
「子供は、自分の判断で大きくなっていくものさ。最後は自身が選び取るんだ――君だってそうだったろう？」友人は涼やかに笑った。
「ううむ……流石は友人だ。忘れていたよ。そうだな、子供の判断を信じよう」
「――お二人とも、わたしが子供なのを前提で話してますよね……」
「ところで友人よ、今日はどうしたのかな？」
「無視ですか！　無視ですか！」マナはぴょんぴょん跳びはねた。
「いやあ、実はね、長谷川さんに衣装を借りに」
友人がくるりと回ると、豪奢なスカートがふわりと舞った。花のフローラル香りが香った。香水まで付けているらしい。
「そう言えば、そろそろ稽古も本格化か」
「うん。今回は特別だからね」いつの間にか、友人は紙の束のようなものを持っていた。まるで扇のように広げ、友人は妖艶に口元を隠す。
「それは私が探し、なぜか、いつの間にか、独りでに、友人の机の中に忍ばされていた、不思議な本では無いかー」
「……なんだか、すごくわざとらしい気がするのは気のせいか？」

誰かが突っ込んだ。
「気のせいだ」
「うん」友人は、環状に繋がった紙を、くるくると回していく。「これはね、ラストとオープニングが繋がってて、ループしてるんだ」
「ほう、それで？」
「バッドエンドで終わってね、最初に戻って、もう一度繰り返すんだ。嫌なラストを知っているから、読み手は最初とは違う読み方を余儀なくされる。あの悲劇的なラストを知っていると、2度目に読む時には本当に心が苦しくなる。で、予定されたとおりに、バッドエンドで終わる。運命は変わらないんだね。そして、再びオープニングにもどる。何度読んでも最後は変わらない。物語は変わらないんだけど、変わってゆくものが一つだけある。――何だと思う？」
私は少し考え、思いつくままに言う。
「読み手の、感情だな」
「ご名答。読み手には、変わらない物語へのフラストレーションがどんどん溜まって行く。環状の本を読む度に、読み手の感情は変わってゆく。これは、そういう物語なのさ」
「うむ。実に、悪趣味だ」これを作った奴は相当性格が悪いのだろう。
「でも、変わってる。だから、ボクは好きなんだ。でね、今年の学園祭では、これを元にした演劇をやろうと思う。題名は――『廻り姫』」
「また、実に劇風のタイトルだな。シェイクスピアを意識したか？
私も生徒会の仕事の合間を縫って見に行こう。楽しみにしているぞ」
「うん。それじゃあね」姫姿の友人は、スカートを少したくし上げ、かわいらしくおじぎをして去っていった。友人を見て、私はしみじみと思うことがある。美しさは罪である。美しき友人に欲情しても、友人は男の子である。無論、私は欲情などしないが。ああ、何というジレンマか。これが人生か。

「かいちょーさん、友人さんって、女の子だったんですか？」
「何を言っている、友人は正真正銘かわいいかわいい男の子だぞ」
「普通の女の子より、かわいかったですね」
「友人だからな」
「――説明になってるようで、なってない」また誰かが突っ込みを入れた。
この心地よい的確な突っ込み、いったい誰なのか……エルレインであった。
いたのに、気づかなかった。
「……なんだよ、その『いたのか』的な視線は」
私はエルレインの肩に手を置き、言う。
「とりあえず、お前はツッコミどころがあったら突っ込んでろ。な？」
「それによって存在感をしめせってか！　やっぱりアタシがいることに気づいてなかったな！　へんっだ！　どうせアタシは世界に無視される女ですよっ！　いいもん、アタシにはマリナがいるもん！」
エルレインはぷいっと顔をそらし、駆けて行ってしまった。
走り去る後ろ姿が、少し寂しげであった。
「エルちゃん、なんだかかわいそうですね」
「仕方があるまい。リンゴが地面に落ちるように、自然法則とあらば従うしかないのだ」
「そんな時こそ魔法の出番です！」
『そんな時こそ我が社の製品をお使いください』的なノリであった。見事なプレゼンでもするのなら認めてやらなくもないかもしれんが、今回はそういう問題ではない。
「未成年、お酒、ダメ」
「かいちょぉさぁん」
「涙ぐんでも駄目なものは駄目だ！　お前はドランクドランカーか！」
ちなみにドランクドランカーなる単語はない。勢いで作った造語

である。新しく言葉を作る。これこそが未来の王たる伊統会長の御技である。

「わたしはただ、みんなが幸せになってほしいから……」

「魔法などに頼らなくても、人々を幸せに出来る」

「例えば？」

「例えか、そうだな……」思案する。

そして、友人が言っていた放送コードという単語から、ある計画を閃いた。

「いいだろう」思わず、口角が上がってしまう。

「かいちょーさんが、すごい悪そうな顔をしてます……」マナはがたがたと震えた。

「お前に、魔法がなくても人々に幸せを与える体験をさせてやる」

次の日の放課後、私は生徒会を招集することにした。

生徒会の教室には、既に生徒会のメンバーが集まっている。机が円上に配置され、それぞれが座り、談笑している。

上座には私――会長の席が空いている。そこを軸に、右側に副会長の藤堂春香、その隣には霧島京香書記長がいる。

「何であの高飛車なのが副会長じゃないんだ？」エルレインが書記長を指さし訊ねた。

「人事権が私にあるからだ」

「会長の座を狙われないようにってことか？」

「いや、副会長は『普通』がいい。単に私の趣味だ」

「春香ちゃんは力持ちですよ。『普通』なんですか？」マナが小首を傾げる。

「ああ普通だ。他の面々と比較すると、普通すぎる程だ」

「他の奴がどんだけだよ……あの子なんか、普通っぽいけど？」

霧島書記長の隣には、亜麻色の髪のかわいらしい雰囲気の男の子がいる。おそらく、私服だと性別が判別つかないほどに。あの子は、一年の物部渡消しゴム委員である。

「消しゴム委員？」エルレインは胡散臭そうな表情になった。
「ああ、彼は霧島書記長の推薦で生徒会入りした。見た目はかわいいが、いろいろと気になる人物だ。特に、あの消しゴムが気になる」
物部渡消しゴム委員の右肩には、何故か消しゴムが乗っている。
「ああ、なんか普通じゃないな」エルレインは、妙に納得したようだ。
「かわいい消しゴムさんですね」マナは消しゴムを見て、にこりと微笑んだ。
そう言えば、マナはあの消しゴムと酔っ払って会話をしたのであった。
「あ！　あいつなんか、見るからに普通じゃ無いな」
エルレインが指さしたのは、金髪の一年。本郷光太郎風紀委員兼、番長委員である。
「ばん、ちょう？」
「そうだ。お前の時代には無いか。番長とは、校内のはみ出しもの――まあ、ここでは不良のことだが、それらをとりまとめ、風紀を守る重要なポストだ」
「はみ出しものをまとめる、か。……マリナと一緒だな」
エルレインは遠くを見るような表情になった。
エルレインの感想はよく分からんが、本郷光太郎委員は、この中では普通な方である。彼はその恐そうな見た目から恐れられているが、実際は根の真面目な実直な男だ。あの金髪も実はクォーター故の地毛であり、決して染めているわけではない。
彼には学園内の番長として、力で弱気を押さえつけようとする不遜な輩を、力で押さえつける役割を担って貰っている。
「へー。人は見た目で判断したら行けないって事か。ごめん。でも、一年でまとめるって、どう考えてもおかしくないか？」
本郷光太郎はその強面な風貌から上級生の不良共に目を付けられ、結果として数十名の不良に一人で立ち向かい、勝利を収めたという伝説を持つ。伝説は尾ひれがつき、一人で立ち向かった時の不良は

数百名。飛ぶ拳撃を放つだの、炎を纏った蹴りを放つだのと、根も葉もない噂がばらまかれている。
「あはは、まさか、それは無いだろ」エルレインは吹き出した。
「できたら、魔法ですね」
私は否定しない。二人が私を穴が空く程の勢いで見つめようとも、私は否定しない。
「おい、否定しろよ！」
「魔法ですか！　まほーですか！」マナは身を乗り出した。
ちなみに、その不良グループは後に私が完膚無きまでに叩きのめし、二度と這い上がれぬようにしてやった。あれは実に、虫けらを潰すような愉悦を伴う良い仕事であった。未だに元ウジ虫共のアンサンブルが心に残っている。録音しておけば良かった。
本郷とは、その時の縁で知り合った。
一度、不良グループ共をぶちのめした時に使ったというプロテクターグローブを見せて貰ったが、鮮血のように真っ赤であった。
「うわぁ……普通じゃ無い」
「いやいや、普通の『方』だ」
その隣は明星鈴奈会計委員である。さらさらのボブカットと、その名の通りの鈴のような声。こちらもかわいらしい子であるが、今は一心不乱にそろばんを叩いている。
「あれ、何だ？」
「そろばんをしらんのか、このゆとり未来人」
「知らないものはしらない！」エルレインは憤慨した。
「あれでお金の計算をするのだ」
「電卓とかでやればいいんじゃないの？」
「古き良きだ。元、未来人」
「悪かったな。ってことは、なに、あの子は一生懸命、あの変な道具を使って、生徒会のお金の管理をしてるって事？」
「いや、あれは、彼女の家の家計簿だ」見れば、真っ赤である。
明星鈴奈の家は神社を経営している。しかし不況の波は神職にも

訪れ、彼女の家は火の車である。彼女は母を無くしており、下には小さな兄妹が二人いる。彼女は仕方無く学校で禁止しているバイトをして生計を立てていたのだが、ひょんな事から生徒会で働いて貰うこととなった。

「なんだか、かわいそうな境遇です」マナはまたもやうるうるしている。

「同情だけでは誰も救われんぞ。むしろ、迷惑というものだ」

彼女には特別に給金が出る。生徒会に奉仕することで奨学金も出ることになっている。

「あしながおじさんって奴か？」

「かいちょーさんは、あの子を助けてるんですねっ」

「いや、違う。単に、彼女の才能を買っているだけだ」

明星鈴奈もまた、霧島書記長の推薦で生徒会入りした。彼女は書記長と同じ美術部に所属しており、驚くべき才能を開花させようとしている。この度、天照高校西側の壁に前代未聞の大きさの芸術作品を書いており、色が爆発したような、生命力溢れる一輪のひまわりが書き上がりつつある。普段のおとなしそうな雰囲気を持つ彼女からは想像できない、独創的な作品である。

「へー。今度観に行ってみよ」エルレインは頭の後ろで手を組んだ。

「わたしも観たいですっ。かいちょーさん、鈴奈ちゃんは、すごい才能をもってるんですね。絵で人を幸せに出来るなんて、まるで魔法です！」

「いや、彼女の本当の才能は別にある」

鈴奈会計士は危険人物である。彼女は、戦争を引き起こした。

「ええっ！」「あんなにかわいいのにですか？」

私は頷く。あれは、我が学園でかつて無い程の混乱であった。

きっかけは、鈴奈会計委員が恋愛に悩むクラスメイトにお守りを作った事から始まる。クラスメイトの恋は成就し、鈴奈会計委員――そのころは会計委員ではなかったが――に大層感謝した。

そしてあろう事か、そのクラスメイトはうれしさのあまり、その

ことを周りに吹聴した。
それを知った数人の女性達がこっそりと明星鈴奈を頼り、人の良い彼女は言われるがままにお守りを作り、それに――おまじないを込めた。
その、おまじないこそが問題であった。
『おまじない戦争』の始まりである。
彼女のお守りを受け取った数人の恋が、立て続けに成就した。
むろん、その数人の彼女たちのがんばりが報われたのだと思いたい。
だが、こうした偶然でも、重なると、力を持つ。
多くの女子生徒が明星鈴奈を頼った。女子生徒の間では、彼女のおまじないこそが神のみわざであり、宗教の教祖のように崇め奉られた。
さて、人気とは集中するものである。他人が欲しがっていると、自分も欲しくなるというあのメカニズムと同じようなものである。
ある一人の男子を好きな女子が複数人いた。明星鈴奈はそれぞれにおまじないを施したお守りをあげた。
そして、水面下での熾烈な争いが始まった。
表では目立たぬものの、それはまさに、戦争であった。
その詳細は語るまいが、彼女のおまじないを頼り、色恋沙汰に明け暮れ、学園は混沌とした。恋文が弾丸のように飛び交い、嫉妬と羨望、それぞれの欲望が顕わとなり、あちこちで水面下の諍いが起きた。昨日の友は明日の恋敵。幾人もの乙女が争い、悲恋に散っていった。女ってこわい。
明星鈴奈自信は恋愛に疎かった。そんなことになっているとはまったく気づかない。
事態は大きくなり、私が気づいた時には既に、手に負える範囲では無くなってしまった。私は学園の崩壊を覚悟した。その時――。
――なんとも拍子抜けの結末だが、その騒ぎは何故か一週間で収束してしまった。

何故収束したのか、それは未だにわかっていない。
ただ、その時偶然知り合ったのがあの赤毛の悪魔、石上アカネ嬢である。
彼女が何らかの暗躍を行なったに違いないのだが、未だに尻尾を掴めてはいない。
リメンバーおまじない戦争。私は明星鈴奈というカリスマ性を持つ人物を、最重要危険人物として監視下に置くことにした。調査をしてみれば、彼女の家計は苦しく、禁止しているバイトをしているというではないか。これを利用しない手はない。
霧島書記長の推薦もあり、私は難なく彼女を生徒会入りさせることに成功した。
「何というか……壮絶だ」エルレインは若干引いていた。
「恋は、人を魔法に掛けてしまいます。すごいパワーを秘めてるんですね」
マナが夢見がちな表情でとても恥ずかしいことを言ったが、無視する。
「後は、昨日の神崎愛美体育祭実行委員兼、動物愛護委員がいるが……今はいないな。彼女の紹介は後にしよう」
エルレインは、今時の無造作ヘアの男子生徒に注目する。
「あれ、あの男子は？」
松田俊介である。へらへらしながら物部渡達と談笑している。
「ああ、あれはただの女好きだ。気にするな」
「……あやしい」エルレインは、私を探るような目つきで見た。
「友人さんは入ってないんですね」
「ああ。友人がいたら、私と票を二分化してしまうからな。友人は自主的に身を引いている。そういう約束だ」
「『やくそく』ですか？」
「彼は外側から社会を見る方が好きだということだ。さて、生徒会メンバーの紹介はこのくらいにしよう。――盗聴盗撮終了」
「ちょっとまてこの外道！」突然エルレインが叫んだ。

「何か？」
「何か、じゃなあいっ！　盗聴、盗撮とはどういうことだこらあ！」
「何って、貴様も観ていた先程の映像のことだが？」私は再びモニターをつける。
「まさか盗撮だとは知らなかったぞ！」
「まあ厳密に言えば、防犯用監視カメラの映像をちょっと拝借しているだけだ。取り締まる法律もないし、特に問題はない」
「やっぱりアンタは伊統会長だよ！　アンタがそんな考えだから、完全管理社会はアタシ達にとって生きづらい社会になったんだ！」
「元ＦＢＩ長官ジョン・エドガー・フーバー殿は、盗聴で権力を築き上げたのだ。秘密を握って人心掌握は策謀の基本であろう？」
「寂しい人生だな！」
「そんなことはない。非常に充実した良い人生だ」既に娘も二人います。
その時、モニターの中の霧島書記長が、机をばんっ！　と叩いて立ち上がった。
「あのバカ！　私を待たせるとはどう言うつもりなの？」
文脈からすると、バカとは私の事を言っているようである。
「きょ、京香、いーくんもいろいろと忙しいんだよ。ほら、なんか植物かなんかの企業経営も大変だって言ってたし」藤堂が、慌てて霧島書記長をなだめようとする。
「あんなの学生のすることじゃないわ。二足のわらじなんて中途半端になるだけよ。第一、今日は定例会議の日じゃないはずよ！　私だって暇じゃないの！」
「それは……そうだけど……いーくん、私にカメラ持ってこいって、いったいなんなのかなぁ」藤堂は横に置いてある大きなバッグを触った。
「やっぱり、あんな奴にこの学園を任してはおけないわ。こないだだって、いきなり例の子を養女になんかして、挙げ句の果てに自分の屋敷に連れ込んで同棲してるって言うじゃない。屋敷の中で何が

行なわれているか、わかったもんじゃないわ。どんなロリコンよ！」

その後、霧島書記長は藤堂とのやりとりで、私への誹謗中傷のフルコースをえげつないまでに並び立てた。

「お、おい、会長……」エルレインが戸惑いを浮かべて私を見る。

「気にするな、いつものことだ。彼女は私を引きずり落とそうとするのがライフワークみたいなものだからな。全ては計算ずくの言動だよ。今更気にもならん」

関西人の『アホ』と同レベルで、今では彼女の親愛表現だと思っている。

「わたし、自分のいないところで自分の噂をされるのを聞くのなんて、耐えられません」マナは目を閉じてしゃがみこみ、耳を押さえてがたがた震えている。

「うむ。私だからこそ、できるわざと言えよう」流石は私だ。

「おいそこ、威張るな外道」

「的確なツッコミご苦労。では、我らが変人……いや、賢人生徒会の――」

「――今、変人って言ったよな！　絶対に言ったよな！」エルレインの人差し指が近づいてきた。

「エルレイン、円滑な会話実現のため、ツッコミは用法と用量を正しく守って――」

「――アタシは医薬品か！　どこに処方箋がある！」

「おおっ！」「おお」

私とマナは、エルレインをまじまじと見た。

「……な、なんだよ」エルレインは、かあっと赤面症である。

「なんだか、キレが良いです」「お前、お笑い芸人になる気は――」

「――あるかっ！　断わる！　断じて断わるっ！」

「冗談だ。本気にするな。友人曰く、お笑い芸人はすばらしいストーリーテラーだ。生半可な努力ではなれん。諦めろ」

「だから、なる気はないっ！」

エルレインの白い指先が鼻先まで来たので、私は彼女の爪先数ミ

リの所でがちっと歯を鳴らした。エルレインは驚いて指を引いた。
「ともかく、人の顔と特徴と関係と弱みを握っておくことはとても大事だ。よくよく観察しておくように」
マナが、はいっ！　と手を挙げた。
「わたし、わかりました！」
マナはモニターの映像に視線を向ける。
「本郷くんは京香ちゃんのことが好きで、京香ちゃんは物部くんのことが好きです。鈴奈ちゃんも物部くんに仄かな気持ちを抱いているみたいですけど、本人は気づいてないかも知れません。で、その物部くんは、春香ちゃんが好きです。で、春香ちゃんは――」
「まてまて、お前は何を言っているのだ！」
「え？　だから、人間関係を――むぐっ」
私は人差し指をマナの口に突きつけ、黙らせる。
「妄想も大概にしろ。私が管理する生徒会でそのような色恋沙汰があってたまるか。過去に色恋沙汰で滅んだ組合は星の数程ある。そのような病原、私の生徒会に限ってあるわけがない」
マナは私の人差し指を小さな手で握る。
「でもでもっ！　かいちょーさんが関係を掴んでおけって……ねえ、エルちゃん、えるちゃんならわかるよねっ！」マナは必死に助けを求めるが、
「……そうかなあ」エルレインは首をかしげた。
「お前は幻想に浸りすぎだ、恋愛脳。さて、それでは変人……賢人生徒会を開会するぞっ！」私はモニターを切り、隣室へ向かうために外へと出る。
「うーん……わたしの勘違いなんでしょうか」マナは納得のいかない様子。
「また変人って言った。アンタ、いつか墓穴を掘るぞ」エルレインの細かすぎるツッコミも絶好調であった。
「随分と遅かったじゃない」霧島書記長は露骨に批難の視線を向け

た。
「やあ、書記長。前座をこなして喉が渇いただろう。飲み物の差し入れだ」
前座とはもちろん、先程の誹謗中傷の事である。
「あら、ありがと。ちょうど喉が渇いてたところなの」
霧島京香は私の差し出したペットボトルを受け取り、にこりと微笑んだ。暗に誹謗中傷を認めたことになる。
私は席に着き、宣言する。
「これより、臨時賢人生徒会を開会する。書記長、先ずは緊急の議題からだ」
霧島書記長は、机の上に置いてあるプリントを読み上げる。
「学園の情報システムに侵入したコンピューターウィルスだけど、先日、バックアップからリストアして、完全に駆除を完了。私の部下の調査によると……今、日本中のネットワークをを騒がせているウィルスと同じものだということが判明。情報漏洩などの被害は、今のところ確認できていないわ。情報部の見解では、愉快犯型のウイルスだと推測。詳細は現在仮想環境を構築して解析中。同時に、感染源の特定も急いでいるけど、こちらもまったくの不明。以上よ」
「ご苦労。つまり、何もわかっていないということになるな。あれから一ヶ月経つが」
「ええ。正直、霧島カンパニーの情報部にまかせて、ここまで何もわからないというのも異常だし、何も被害がないというのも逆に気味が悪いわ。ウィルスの挙動を調べても不可思議な所が多いし、バイナリを解析してるチームによると、解析を邪魔するような難解な構造をとっているらしくて、ホワイトボックステストにまで漕ぎ着けるには時間がかかりそう。それに、仮想環境でのブラックボックステストの結果が奇妙なの。このウィルス、ボットネットのようにネットワーク構造を組むらしいんだけど……指令を送信するはずの親が、よく分からないの」
「わからない？」

「指定しているアドレス構造が、どうやら特殊なものらしくて、ＩＰｖ４でも、ＩＰｖ６でもないわ。簡単に言えば、そんなアドレス構造存在しないのよ。それなのに、何処かには送信されているらしいの。しかも、仮想化環境は完全閉鎖環境のはずなのに、何処かから通信を受け取っているらしいの。そもそも、仮想環境で無くてもスイッチやルーターが受け付けないでしょうから、通信なんて出来るはずがないのに。それに通信もよく分からない技術で暗号化されてて、まるで、未知の技術を使っているみたいだって変な報告も上がっているわ」

「ふむ、調べれば調べる程奇妙か。由々しき事態だ……」

「……あのう」藤堂が、控えめに手を挙げた。

「どうした、副会長」

「二人の言ってることが……さっぱり、わからないんですけど」

見渡せば、私と霧島会長以外の全員が、ぽかんとしていた。

「あら、ごめんなさい」書記長が含み笑う。「つまりね、学園の情報システムに侵入したウィルスは働き蜂のようなもので、行動を解析するには働き蜂に指令を出している女王バチがいるはずなんだけど、それが、どこにいるのかよく分からないのよ。まあ、働き蜂自体もおかしな挙動をしていて、どうやらＰＣの物理構成をスキャンして、デバイスを操って、物理層まで干渉しているらしいんだけど、それが何をやっているのやら――」

「――書記長、また面々がついて行けていないようだ。解析が困難なことは伝わっただろうから、この件に関しては後ほど議論するとしよう。あと、そのウィルスを私にも回してくれ。解析できそうな奴に心当たりがある」

「あら、うちの情報部でさえ手こずってるのに、出来るとは思えないけど……まあ、いいわ。ウィルスが蔓延しないよう、くれぐれも気をつけてね」

プリントを捲る。次の議題に入る。

「続いては……体育祭の件だが、みんな良くやってくれた。今年の

体育祭は大成功だ。特に神崎愛美は目を見張る活躍だったが……今日は欠席か」

「あの……」明星会計委員が小さな体をさらに縮めて、自信なさげに手を挙げた。「愛美ちゃんは、ネコちゃん達とひなたぼっこしなきゃいけないから今日は休むって……」

「まったく、あいつらしい。まあ今回は大目に見てやろう」

明星会計委員は、ほっとした様子で、手を下ろした。自分が悪いわけではないし、そこまでかしこまる必要は無いと思うが、彼女の性格的なものなのだろう。彼女にはもっと成功体験を重ねて自信を付けて貰い、是非とも芸術家としての才能を開花させて欲しいところだ。私も未来の才能には尽力は惜しまないつもりである。

くいくいっと、制服の袖が引かれた。みると、隣に座ったマナであった。

「かいちょーさん、たいいくさいって、なんですか？」

「学園内の皆で体を動かし、競う、お祭りのようなものだ」

我が校の今年の体育祭は少し特殊だったが、この場で説明することではないだろう。

「お祭り！　……でも、もう終わっちゃったんですよね」

マナはしゅんとなって、とても寂しそうな表情をした。

「何を言っている、これからが本番だ」

「ふぇ？」

「天照高校学園祭、通称――天照祭が始まるのだ。我が学園だけでなく、町を挙げて行なう。残暑を吹き飛ばすフェスティバルだ！」

「ふぇすてぃばる！」マナはきゃっきゃと喜んだ。「わたあめ、りんごあめ、焼きそばに、射的、水風船釣りに、幻想的な提灯の灯りですねっ。わたし、お祭りに行くのが夢だったんです」

マナは、根本的に勘違いしているようだ。

「マナよ、それはおそらく、夏祭りだ。今はもう、微妙に季節を過ぎてしまったな」

「そんなあ……」マナはがくりと落ち込んだ。

もう少し早い季節ならば、連れて行けたのだが。まあ、仕方がなかろう。

「ところで、なんでその娘がいるの？」霧島書記長だった。

当然のように、エルレインには気づかない。

「京香！　マナちゃんがいたって良いじゃない、かわいいし！」藤堂は隣に座るマナに抱きついた。最近の悪い傾向である。

「春香、そういう問題じゃないわ。ここは生徒会よ。関係ない生徒は――」

「――藤堂、良い意見だ」

私は立ち上がる。マナを立ち上がらせる。

「さて、本日の本題に入ろう」

ぽかんとしているマナを示し、宣言する。

「伊統マナを、天照高校賢人生徒会――マスコットキャラクター委員に任命する！」

言い切った後に周りを見回せば、生徒会メンバー全員が顔に疑問を浮かべていた。

霧島京香が立ち上がり、口火を切る。

「ちょっと待って、マスコットって……あなた自分の娘を何だと思って――」

私がリモコンのスイッチを押すと、プロジェクターが動き出し、パワーポイントが映し出された。学園にマスコットキャラクターが必要な理由、そしてマナがマスコットキャラクターに最適な理由をアピールするためのプレゼンを開始する。

「書記長、我が学園は、既に進学校としての地位を確立している。クリーンで芸術的、快適な校舎、広いグラウンド、高い水準の文化活動を実現する各種施設。厳しい審査によって選ばれた先生方にも手厚い教育を施し、さらに磨きをかけて頂いている。彼らは公務員ではない。頑張れば頑張っただけ対価を与える。生徒達は、いつでも彼ら彼女らの手厚い教育を受けることが出来る。塾に通う必要など無い。この学園の内側で、全ての生活が完結する。にもかかわら

ず、安い授業料を維持している。すなわち、理想郷である！　全ては、私と書記長の提供する資金、そして、ここにいる賢人生徒会メンバーの尽力、そして、私の完全なる経営方針の賜物だ！」

「だから何？　単に自分の業績を自慢したいわけ？」

「だがしかし――一つだけ問題がある」

私は一旦口をつぐみ、メンバーを見回す。

「この地は、微妙に都心から離れている。まあ、だからこのように広大な敷地が確保できたわけだが……緑の多い穏やかな町、のどかな町……聞こえは良いが、ようは田舎である。統制されていない無秩序な自然が、のさばっているだけの、不便な、田舎である。それがどういう事態を引き起こしているかが、これだ」

スライドに写真が映し出される。郊外に建設された、巨大なショッピングモール。

その登場により、次々と閉店していく商店街のシャッター通り。閉店したシャッターには、悪趣味な落書きがされている。

「まあ、経営努力を怠った商店街が淘汰されるのは仕方がないとしてもだ……」

スライドを捲る。骨組みが剥き出しとなっているマンションの写真が映し出される。資金繰りの悪化で建設工事が中断されたものだ。

「これが、理想郷と言えるだろうか？　我々の学園内が理想郷でも、一歩外へ出れば、閑散とした風景が広がっている」

私は言葉を切る。そして、間を置き、おごそかに言う。

「私は、私の理想郷を拡大したいと考えている」

「理想郷の」「拡大？」

生徒会メンバーは、半信半疑なようである。私は続ける。

「現在、交通の便を良くすべく、各種交通機関・土木業者と計画を進めている。私の経営するバイオ系企業もこの地に誘致し雇用を促進する予定である。しかしながら、それだけでは不十分。奴らは採算が取れない路線は運営せん。ゆえに、私はある計画を実行しようと思う」

プレゼンのスライドを進める。計画の骨子が、映し出された。
「人は食からという。テレビでも食べ物とペットさえ映せば視聴率が上がる時代があった。食べることこそが人間の欲望の中でも大きなウェイトを占めていると、私は考える。だから、私はこの町を――先ずは食で盛り上げようと思う！」
霧島書記長の瞳がぎらりと光った。口元にはバカにしたような笑みが浮かんでいる。
「あら、意外とありきたりじゃない。そんなの他でもやってるわ。あまり良い成果が上がったとは聞かないけど」
「そこで我が社の立ち位置が重要となってくる。農業規制が緩和し、企業が本腰を入れて農業を行なうことが可能となった。故に、私はこの地に大規模農業工場を建設する」
「流行の農業工場化ってやつ？　あれにはいろいろと問題があるのよ。特にコストの問題が。人口光で作れるのなんて、レタスが限界よ」
「それなら既にクリアしてある。詳しいことは企業秘密だが、我が社の技術は既に他の企業の数十年先を行っている。それに関しての情報の一部は、後でウィルスと交換だ」
無論、それを可能にしたのが、養生部の技術である。
「完全なる管理体制の下で生産された食材は、今までとは異なる次元の味を実現する。我が社が供給する至高の食材によって、この町の食の水準は大きく底上げされることになるだろう。小手先の町おこし計画とは訳が違うのだ。この計画は、我が社が提供する至高の食材をいかに有効利用するかという側面も持つ、地に足着いたビジネスなのだ！」
「ふうん、実物を見ないことには信用できないけど。けれど、問題はそれだけじゃないわ。作り手はどこにいるのよ？　素材がいくら良くても、作り手が三流では豚に真珠。金にまかせて田舎に高級店の三つ星シェフを勧誘するっての？」
――罠にかかったな。私はプレゼンを進める。

「先日の『カツ丼騒動』を覚えているだろうか？　ある商店街の一角にあるソースカツ丼が自慢の小さな店が、霧島書記長率いる卵とじカツ丼のチェーン店と戦い、見事引き分けたことを！」

　その騒動にも赤毛ポニテ悪魔の影がちらついていたが、こちらも尻尾を抑えることが出来なかった。

「だからなんだって言うの？　いっとくけど、私は負けた訳じゃないから。カンパニーを貶めようとしているのなら無駄よ」

「私は感動した。大きな存在を小さな存在が倒したのだ。しかも現在、両者は共存の道を歩き出している」

「は？　あなた、何を言って――」

「大きな力には頼らん。大きな力は私一人だけで充分だからだ」

　私はこの町の地図を映し出した。所々にマーキングがされている。

「あの騒動を期に調査を行なったところ、この町には数人の有力な料理人がいることが判明した。彼らがこの地に来た理由は様々だが、現在、彼らの才能は埋もれているといって良い。調査結果を見るに、立地条件の不利と認知度の不足が影響しているのだ。だが、私にとっては好都合。先ずは彼らの才能を使い、『作り手』としての役割を発揮して貰う予定だ。だが、それだけでは手が足りない。故に、私はこれを使おうと思う」

　スライドに、寂れたシャッター通りが映し出された。

「既に商店街には計画を内々的に周知し、賛同者の中で力のある者には早速取りかかって貰っている。現状戦う力のない者にも、研修に行って力を付けて貰う貰う手はずは整えてある。商店街の皆さんは巨大ショッピングモールの存在に憤っていてな、この計画を話したところ『あんなのぶっ潰してやる』とモチベーションは充分だ。人間、追い詰められた時に一番力を発揮するという。彼らはその執念を持って必ずや成長を遂げて帰ってくるであろう。まあ、私はショッピングモールを潰すつもりはないが。彼らには彼らの役割を担って貰う。我々が彼らから取り上げるのは、『食』に対する需要だけだ」

「使えない人間を使えるように教育しなおすってわけ？　しかも商店街の経営者は老人どもよ。年寄り連中は今まで生きてきた中で培ってきた固定概念で凝り固まってるの。何も考えてない若い奴らの方が、まだ順応性が高いわ」

「きょ、京香……商店街のみなさんにしつれいじゃ……」藤堂はあたふたしている。

「はっきり言って、無駄な努力ね」霧島京香は、容赦なくこき下ろす。

そうでなくては、張り合いがない。

「ふん、ほざけ。不要となった人材の再活用こそが、今の社会に急務だ。彼らを使わねば、意味がない」

「たかが食べ物で、人が集まるとは思えないけど」

「いいや、高水準の食を提供すれば、必ず人は集まってくる。無論、それに備えた環境の整備も同時に行なってゆく。至高の食を呼び水として、快適で、過ごしやすい都市を体験して貰う。ゆくゆくは最高水準の医療、教育、防犯、各種娯楽施設、パワースポット、理想都市としての展開を考えている。これは夢物語などとは違う。我が社の技術を基盤としたビジネスモデルを確立するための現実的な計画なのだ！」

語り負えた時、教室内は、しんと、していた。

戸惑いを浮かべる生徒会メンバー達。

そして、冷たい視線を突きつける霧島書記長。

私は計画書を霧島書記長へ提出する。

「計画と技術的裏付けの詳細に関しては、そちらの資料にまとめておいた。興味があれば目を通すといい」

書記長はぱらぱらと計画書を速読してゆく。

すると、書記長の読み進める内に表情が変わり、目を見張る。

「……うそ、生育二週間の壁を突破したというの？　しかも、人体実験結果……？　被験者が会長くん……いったい何をやっているの……？」

計画書を閉じ、霧島書記長が口を開いた。
「……あなた、よくこんな馬鹿げた計画、思いつくわね」
書記長の、遠慮のない鋭利な視線が、私を捉える。
「ま、いいわ。お手並み拝見といきましょう」
霧島財閥令嬢、霧島京香が認めた瞬間であった。
「書記長、同窓のよしみで貴女には特別に参加を許可しよう。霧島カンパニーの誘致も歓迎するぞ」
「成り行き次第よ。うまくいくとは限らないわ。むしろ、現時点では不安要素の方が多い。いい気にならないで頂戴」
「あの……ところで、マナちゃんの話はどうなったの？」藤堂だった。
流石は普通副会長。普通の疑問が、我々の議論の中では心地よい。我が生徒会で、普通の感性こそが最も抜けているものであり、最も貴重な存在と言えよう。
「そして、この計画の最後の鍵となるのが、この、伊統マナであるっ！」
「えっ、わ、わ、わたしですかっ！」
「……まったく、話が読めないんだけど」書記長は怪訝な顔をした。
「人を呼ぶためには、知って貰わねばならん。この試みを広く知って貰う時、どのような方法が考えられるだろうか？　テレビ局と交渉？　有名人を起用？　そのような既得権益を使うような計画、私は好まぬ。あくまで自分たちでこの町を盛り上げなくてはならん！　既に言い古された言葉を使えば、幸か不幸か情報社会である。誰もがワンアイデアでメディアになれる時代である。巨大な怪物をぶっ潰すには最高の時代であると言えよう！　そして、人々に興味を持って貰うための最も有効な方法、それこそが――エンターテイメント性だ。――これを見よ！」
画面いっぱいに写真が映し出された。
それは養生部が撮った、マナのベストショットであった。
「はあっ……かわいいっ……」藤堂の表情がとろける。非常に異常

な反応ではあるが、今は好都合である。
「いやあ、金髪童顔ばいんばいん、不思議な瞳の女の子って、本当に良いものッスね。これこそ、至宝ッスよ」今まで寝ていたはずの松田俊介が、深く頷いた。本日の生徒会、初めての発言である。これで女子生徒から白い目で見られないのは、この男の日頃の行ないの賜物である。
「ただ、かわいいだけならば、いくらでもいる」私は釘を刺す。
「そうね」霧島書記長は自慢の艶やかな黒髪をさらりとかき上げる。この女性は、自分が美しいことを自覚しすぎている。
「ああっ、霧島先輩、しっとりとした黒髪が素敵です是非触らせて――ぐあっ！」
霧島書記長の放った茶せんが松田の額を捉え、松田は椅子ごと後ろに倒れた。
「あっ、松田くん！」隣に座っていた明星会計委員が、心配そうな表情で、松田に手を差し伸べた。
「ありがとう明星。明星もかわいいなあ」
「……ばか。早く立ち上がって」
「藤堂先輩もかわいい。ワタルもかわいい。みんなかわいい」松田は心底幸せそうな表情をしている。
「そうね、渡くんが一番かわいいわね」霧島京香の発言だったが、あまりにさりげなかったため、メンバーは誰も気づかなかった。
当の本人である渡くんは、小さくなって下を向いている。あまり目立つのが好きではない子らしい。私には考えられないことである。
ともかく松田は調子が良いのである。だからその発言は極限にまで軽んじられる。
「さて、お調子者の発言は無視して、元の議論に戻るぞ」
「――ええっ、そんな！」松田が頓狂な声を出した。
「――お前は黙ってろ！」
私はリモコンを操作し、映像を出す。
「これは、先日の我が家の食卓を映した映像だ」

マナは満面の笑みを浮かべながら、幸せそうに、食べる。食べる。食べる！

「これは……」今まで退屈そうにしていた本郷光太郎が、思わず目を見張った。

「……すごい」引っ込み思案の明星鈴奈までもが、思わずそう呟いてしまう。

そう、なぜなら――

「あ、いーくんが、ごはんをよそってる。へー」

「あら、なかなかエプロンがかわいいじゃない」

若干注目するところが違う女子二人、後者は絶対に確信犯である。

「そこではない！　――なんといっても、コイツの食い意地！　大盛りカレーを計16杯お代わりし、なお空腹を訴えたこの胃袋！　まさに才能っ！　ぽてんしゃるっ！」

「……かいちょーさん、褒めすぎです」

マナは頬を染めてもじもじしている。奇跡的に恥じらっている。

「だからって、どうするの？　具体的な――」

「――具体的なプランならある！」

私は机をばんっと叩いた。

「藤堂、お前は放送部に入っていたな」

「うん、もちろん。いーくんが進めてくれたんでしょ」

霧島書記長のせいで藤堂に開花してしまった馬鹿力を有効に活用するため、藤堂を放送部に勧誘し、重い撮影機材を扱わせる事となった。元々テレビの世界に興味があった藤堂は、嬉々として受け入れた。

「これから、マナの食べ歩き武者修行を撮影して貰う」

大食い、それは一昔前にテレビで流行った企画の一つである。今更それをやって何の意味があるのか、そう思うメンバー諸君もいるかもしれない。

しかし、マナが大食いをやることは、今までの大食いとはまったく違う意図が含まれている。

松田のいかがわしい言葉を借りるならば、金髪童顔ばいんばいんの少女が大食いに挑戦する。松田や藤堂曰く、かわいい少女が、だ。あの小っちゃな体のどこに、あんなに大量の食べ物が入るのか。視聴者はそのギャップに心奪われる。小っちゃいものが大きいものを倒すという征服感、爽快感も暗示されている。

マナが食べる大食い料理は、今回の計画に合わせて創作させるものである。町中の料理屋を競わせ、創意工夫を凝らして作らせるそれは、私が監修し、必ず魅力的に映るように作らせるつもりだ。味、質、量、共に私の基準を超えなければ合格にはしない。

この計画は立ち上げでどれだけ成功するかが肝心だ。既に私の基準に耐えうる腕を持つ料理人をリストアップし、了承をいただいている。

他の料理屋にとっても、今回の計画が成功するかしないかは死活問題になる。やる気のないものは容赦なく切る。私の課す課題に全力で取り組み、生き残ったものだけが計画の恩恵を受けることが出来るのだ。

そうしてできあがった料理を、マナはおいしく食べ尽くす。その行動自体が、町の宣伝となるのだ。ＣＭなど必要ない。店の場所を提示するだけで充分だ。

藤堂の視線が右上に泳ぎ、考えるような表情となった後、

「かわいいマナちゃんが取り放題って事？」

「そうだ。お前の力でマナを魅力的に納めてやれ。話は既に部長に通してある。ほれ、これが企画書と脚本の決定稿だ」

プリントを受け取った藤堂の表情が、きらきらと輝かんばかりに明るくなった。

「いーくん冴えてるねっ！　私、がんばって撮るよ！　さ、マナちゃん、いこ！」

「ちょ、ちょっと待ってください、かいちょーさん！」

「マナよ、社会の厳しさを味わってこい。そして、その才能、存分に生かせ！」

「かいちょーさん、わたしはかいちょーさんのお側に――」
私は腕を伸ばし、マナを指さす。
「自立せよ！　我が娘よ！」
「ええっ！　ちょっとまって――」
「――さ、マナちゃん、いこっ！」
藤堂はマナを小脇にひょいと抱えた。もう片方には、十数キロはあろうかというプロ顔負けの撮影用カメラを軽々と持ち上げている。
流石は馬鹿力。
「それでは、マナの食べ歩き武者修行――作戦名――」
私は、ばっと腕を伸ばした。全ての委員が、私に注目した。
「――『味修羅ん』の開幕をここに宣言するっ！」
決まった――完璧だ！
「……パクリじゃない」霧島書記長が、あきれ顔で突っ込んだ。
「よーし、マナちゃん、張り切っていくよー！」
藤堂は溢れんばかりの情熱をエンジンにして、暴走機関車のように会議室を飛び出していった。
「――かいちょおさあああああああああああああ――――……」
マナの叫びが、だんだんと小さくなっていった。
マナよ、がんばれ。最初はがむしゃらで良いのだ。
呆気にとられている面々に向かって、私は宣言する。
「これにて臨時賢人生徒会を閉会する。１８時より経営会議に移るので、霧島書記長と明星鈴奈会計委員は忘れず出席するように。他は解散――松田、お前は居残りだ」
「ええっ、オレッスか？」松田は素っ頓狂な声をあげた。
いつものパターンに、メンバーは苦笑いで教室を後にした。

教室からメンバーが立ち去り、私と松田だけが残った。
「貴様は居眠りしすぎだばかものがあっ！　……と、周囲へのカモフラージュはこれぐらいにして、報告を頼む」

「すいませんごめんなさいたすけてぶたないでー！　……了解です」
松田は黒いソフト帽取りだし、目を隠すように深く被った。
体をずらして、椅子に深く座り込み、長い足を組む。私の前でこのような堕落しきった姿勢が出来るのは、この男ただ一人だけである。
続いて、松田は黒い手帳を取り出す。彼の手帳は無限のページがあり、その中には、天照高校の全ての噂が網羅されているとの噂を聞いたことがあるが、真相は不明だ。
さて、『裏・賢人生徒会』の開会である。
松田『諜報委員』は、『変人』について調査し、報告するのが仕事だ。
「今回はっと……休み時間中に『あたしは超能力者だあっ！』と叫んだ女子一名。経緯は不明。彼女はその言動と他者を寄せ付けない性格で、周囲から孤立しかけています」
「ううむ、それは由々しき事態だ。コールイエローだな」
人の本質は悪だ。誰もが自分の理解出来ない者、もしくは、自分の欠点を思い起こさせる者を排除し、蔑もうとする。それは意識的にではなく、無意識的である方が多い。
故に、憎むべき『いじめ』などが発生する。私の管理下でそのような悪は許されない。いじめに発展しないように、水際でくい止めねばならない。
それが、松田に　『変人』を調査させる理由の一つである。
「まあ、フォローはこちらでしときましたんで、大事にはならないと思うッスよ」
「具体的に述べよ」
「告白、しました」
「は？」
「撲たれました」松田は頬をさすった。
「何の対策にもなっていないように思われるが？」
「何言ってるんッスか、この行動を期に、勘違い強気ツンデレキャ

ラとしての彼女のイメージを定着させるんッスよ。2〜3か月も経てば、彼女がどんな痛い発言をしても、みんな生暖かい目で見てくれるようになるはずッス」

「私には理解出来ない単語のオンパレードだな」

「今までオレが失敗したことありましたっけ？」

「無い。後ほど計画を書類にまとめて提出しろ」

「えー、めんどう――」

「人一人の人生がかかっているのだ。手を抜くな！」

「へーい」松田は露骨に嫌々といった感じで返事した。

「――次！」

「続いて、どうも人形的な反応の絶世の美女一名。ロボット疑惑が浮上しているッス。これが良いとこのお嬢さんで美人、まさに箱入り娘――」

「――次！」余計な情報はいらん！

「へーい。次はっと……何と養生部に幻の幽霊部員がいまして、これが――」

「その件に関しては認識している。次だ」

「ですよねー。会長の管轄内ですもんね」

「貴様、わかっていてやってるだろう」

「大変ですね。毎週欠かさずは」松田の口端がにやりと上がった。

「――次！」彼女の存在をなぜ知っているかは聞かないでおいてやる！

「へいへい。そう怒らないで、にこにこ笑顔で生きましょうよ。夕刻に疾走する謎の美少女執事みたいに」

「情報が速いな。それは私のだ。除外しておけ」

「了解ッス。お次はえっと……美化委員で、掃除が大好きな女子なんですけど、どうもその『掃除』の意味が、あやしい方向なんじゃないか――」

「待て待て！　何で女子ばかりなのだ！　男がいないではないか！」

「あれ、もしかして会長、そっちのけがあるんッスか？」

「男女平等に探せと言っているのだ！　このまま女性ばかり増えれば、男の比率が減り、やがては乗っ取られる可能性がある」霧島書記長辺りにな。
「はーれむはーれむ理想郷」
「この外道があっ！　……と、また乗せられるところであった」
「会長？」松田の口元から笑みが消えた。
私は深呼吸し、平静を取り戻すと、真っ直ぐに松田を見る。
「お前に頼みたいことがある。マナの過去を探って欲しい」
「それはまた、唐突なご依頼で。娘さんを信じてあげないんッスか？」
「娘ではない。養女だ」
「ようじょようじょ」
「黙れ外道。お前、まさか養生部か？」
「俺は女の子ならみんな大好き。ようじょだなんて、分け隔てしないッスよ」
「それはさぞかし幸せな人生だろうな」
「ええ、とても。ま、俺は別にいいッスけど。マナちゃんかわいいし」
「かわいい？　お前、ロリコンか？」
「――ブーメラン」松田は手首をスナップした。
「どういう意味だ」
「そのまんまの意味ッスよ」
「訳のわからん奴だ。ところで――葉上の消息は？」
「未だ掴めず」
「お前は何でも知っているのではないのか？」
「大体のことは知ってます。葉上先輩の消息は、知らないことの中に含まれています」
「そうか……お前でもわからないとは……」
「待ってれば、その内ひょっこり現われるかも」
「それは、情報か？」

「いえ、勘です」
「勘……か」勘は経験から来るというが、はたして。
「ま、調査は継続しますんで。あんまり俺なんかに期待すると、体に毒ッスよ」
自分で自分を卑下するか。これがコイツの手口だ。周囲はそれで騙せても、私は騙せん。
「私は賢人生徒会の中で、お前が一番切れ者だと思っている」
「まさかぁ、買いかぶりッスよ」松田は手をひらひらさせた。
「その頭の悪そうなしゃべり方、やめたらどうだ？」
松田はにやけた笑顔を口元に張り付かせ、びくともしないが、
「――人には色々思惑があります。俺のしゃべり方も、その一つってことです」
明らかに、雰囲気が変わった。鋭く、キレるようになったと表現するのが良いかもしれない。
「馬鹿に見せかけるのが、か？」
「誰もが会長みたいな生き方をしたいと思ったら大間違いですよ。馬鹿でいることの方が、面白いことだってあるんです」
「私には、理解できんな」
「だから、人間なんです」松田は帽子を触った。
「知ったような口ぶりだ」
「口から出まかせッスよ」
松田の口調は、元に戻った。
「道化め」
「その昔、道化だけが、王を馬鹿に出来たと言うッス」
松田は徐ろに立ち上がり、演劇の中で道化師が王にするように恭しく礼をした。
「じゃあオレ、もう行きます。あんまり長いと、明星やワタルを心配させちまうんで」
ソフト帽をとると、いつものお調子者に戻りきった松田がいた。
軽く挨拶すると、松田はすたすたと教室を出て行った。

「あくまでも道化を演じるというわけか……面白い奴だ」
教室の戸ががらりと開き、松田が顔だけ出す。
「あ、会長！　マナちゃんのお風呂シーンの撮影は？」
「駄目に決まってるだろうこの外道が！」
にっと、いたずらな笑みを浮かべ、松田は顔を引っ込めた。
やはり私の買いかぶり過ぎか？
「――なるほどな。そうやって、はみ出しものを見つけ出して」
「社会にコミットさせる」
「慈善事業って奴か？」
「偽善事業だよ」
「洒落のつもりか」
いつの間にか、教室にはエルレインが立っていた。いや、ずっといたのだろう。
「見事な空気っぷりだったな、エルレイン」私達が気づかなかっただけだ。「その才能を生かし、隠密として働く気は無いか？」
エルレインは答えない。眼鏡の奥からじっと私を見つめている。
「どうかしたか？」
「あいつ、誰だ？」
「松田俊介諜報委員。ただの『情報屋』だ」
エルレインは沈黙したままだった。しばらくして口を開いた。が、出てきた言葉は何の脈絡のないものであった。
「……アンタ、何を考えている」
「知っているのだろう、未来人？」
エルレインは私を品定めするかのように、じっと私を見つめている。
「私は、この地を首都にする」
エルレインは、緘黙した。
「この地を理想郷へと変えた経営者、伊統会長は、地元民からの熱い支持を経て、国政へと殴り込む。むろん、一人では変革は不可能だ。ゆえに――」

「――もう、いいっ！」エルレインは突然、憤った。
「どうだ、なかなかのシナリオだろう？」おそらくは、当たっている。
「……アンタこそが、理想主義者（バカ）だ」
「おべんちゃらどうも。さあ、そろそろ戦争の時間だ！」
夕日が、赤く染まった。
《――にゃおーん！》開戦を告げる鳴き真似が、今日も響いた。

第十一話　エルレイン・イン・ザ・レイン

あれから一ヶ月が過ぎようとしている。
未だ残暑がのさばり、近年で一番の異常気象という話だ。
マナはめまぐるしい活躍を見せている。ネットに公開する前に編集した番組を学園内で放送したところ、大変な反響を呼んだ。しかも、意外な方向で、だ。
天性の人なつっこさが受けたのだろうか。マナ自身に人気が出ている。
私には理解できないが、『ちょっとドジだけど、明るく元気に一生懸命がんばっている』という姿勢が受けているらしい。
収録毎に長谷川お手製の魔女っ子衣装が作成され、これもかわいいと好評らしい。
私の予想通り、アイドルというよりは、かわいいマスコットキャラクターとしての立ち位置となったようだ。
マナ本人は、かわいい服が着れるのと生徒達が喜んでくれるのが何よりうれしいそうだ。
「どうだ、魔法が無くても、人を幸せに出来るだろう?」と私が言うと、
マナは首をひねった。自覚は無いようだ。当初の目的が達成されていないことに、私は愕然とした。
「ほら、生徒達が喜んでくれると言うことは、お前がそれだけ生徒達を幸せにしていると言うことだろう?」
「でも……最近、かいちょーさんのお側にいられませんから、かいちょーさんをお守りすることができません」マナは、しゅんとなった。
放課後夕焼けにゃんにゃん戦争では、エルレインは相変わらず正体を隠し、ネコ仮面としてマリナを守っている。
私は容赦なくマリナを殺しにかかり、ネコ仮面は全力で阻止する。

綱渡りのような均衡の中で、私達は戦争という日常を繰り返している。

エルレイン本人としてはマリナとの溝が深いままだが、ネコ仮面としては、二人の仲は徐々に深まっているようだ。あとは、どのようにして正体を明かすか。そのタイミングだけである。

「気にするな。こちらはこちらで順調だ。お前に守られる必要は無い」

「でも、わたしのお仕事は、かいちょーさんを、たーぼもーたーから――」

「たーぼもーたーではない。ターミネーターだ」

「ターミネーターからお守りすることですっ！」

「だから、必要がないと言っている！」

「……アンタら、今度は何のケンカ？」エルレインであった。

黒を基調としたTシャツにジーンズという、予想通りのつまらない私服である。

「大したことではない。ターミネーターとターボモーターの違いを正していただけだ」

「わたし、ターミネーターが何か、知りませんっ！」

マナはむんっ！　とばいんばいんを張った。

「……威張るな」敵の情報ぐらい知っておけ。

「あ、アタシも知りたい。映画なんだろ？」エルレインが小さく手を挙げた。

「お前はターミネーター本人だろうがっ！」何故知らない！

「いやぁ、アタシ達が知ってるの、リメイク版だし」

「はあ？」

エルレインは気まずそうに目をそらした。

「ぴっちぴっち、ちゃっぷちゃっぷ、らんらんらんっ！」

「こらマナ、はしゃぐな」

魔法少女コスチューム風のレインコートに長靴という重装備で、

マナは水たまりを率先して踏み歩いた。お前は一体何歳なのだという文句は、既に言い飽きた。

今日は昼過ぎから雨が降り続いており、マナの収録もお休みである。

しかも、曇りや雨の日は何故か隙間ターミネーターも現われない。夕日が出ないことが影響しているのだろうか？　いや、それはおかしい。所によっては夕日が出ているはずで、やけに主観的な現象である。

暇だというエルレインも連れて、我々は雨の中レンタルショップへと足を運んだ。

「かいちょーさん、これっ！」

意気揚々とマナが差し出したのは、ふりふりきらりんな魔法少女ものであった。

「却下」

「ええっ、何でですか！」

「旧作３本で３００円」

世の監督達が命を削って作った作品がワンコインとは、酷い時代になったものだ。

「会長、３もあったよー」エルレインがパッケージを持って意気揚々と近づいてくる。

「２までで充分だ」

「ちぇっ、何でだよ。会長のケチ」

３のオチは、エルレインには酷だろう。

エルレインはぶつぶつ不満をたれながら、ケースを返しに行った。

「あいつ、私達が敵だと言うことを完全に忘れているな」

「いいことじゃないですか。みんな、仲良しがいいです」

「自分の目的を見失うことは、あまり良いことだとは思えんが」

「かいちょーさん、そんなことより」

マナは魔法少女物のケースを控えめに差し出した。

「なにとぞ！」

「却下」
マナはじわりと瞳を潤ませた。
「７５０円になります」店員はにっこりと微笑んだ。
「一本で４５０円とはどういうことだ……」私は家路を歩きながら頭を抱えた。
その頭痛の元凶であるマナは、レンタル店の袋を大事そうに抱えて、うれしそうにスキップしている。お前は一体何歳だ。
その光景をほほえましそうに眺めながら、エルレインが口を開く。
「会長って、変なところでケチだよな。お金なら有り余る程持ってるくせに」
「ばかもの。生き金にはいくらでも使い、死に金には極力つかわんのが私の流儀だ！」
「はいはい」エルレインはあっさりと返した。
貴様、生き金と死に金の定義を知っているのか――。
「でも、マナには甘いよなー」
マナが私を見て、にぱっと笑った。
「かいちょーさん、ありがとう！」
「……タダで勝ち得たと思うな！　日頃のがんばりの対価だと思え！」
「は、はい！」マナはしゃきっとした。
「怒ってるんだか、褒めてるんだか」エルレインが横目で茶化した。
屋敷に戻る。ニコニコ微笑の長谷川が出迎えた。
世のお父さんの夢――シアタールームにて、上映会のセットをする。
「……アタシはアンタのお金の使い方がよく分からない」
豪勢な設備に、エルレインはあきれ顔だった。
世のお父さんの夢は、いつも家族に理解されないものだ。
「かいちょーさん、ふかふかです！　ふかふか！」

マナはソファーに座り、ふかふかぽんぽんやっている。
「こらそこ、暴れるな！」
「うわぁ、液晶テレビだ。ぶあつっ！　本当に過去なんだな……」
エルレインは薄いテレビをぽんぽん叩き、何やらしみじみと感じ入っているようだが、その反応自体がそもそも異常である。
「未来人ごっこはその辺にして、そろそろはじめるぞ」
「――アタシは本物の未来人だっ！」
「そこ、危ないぞ」自称未来人の痛い台詞をさらりと無視し、私はスイッチを押した。
「へっ？」
重厚感を存分に含んだ音が、部屋全体に広がった。
巨大スピーカーの側にいたエルレインは、その音圧に圧され、尻餅をついた。
「わはは、風を操れるのはお前だけではないと言うことだ」
「ううっ、いつか殺してやる……」エルレインは奥歯を噛み締め、わなわなと震えた。
「初心忘れるべからず。その意気だ。さあ、始まったぞ」
「へん！　過去の映画なんか、古くて見られないに決まってる――ええっ！」
エルレインの眼がまんまるに見開き、視線がモニターに釘付けになる。
「何あれ！　ぴかって光った！　ドドドドッってなにあれ！　ひいっ！」
エルレインは両手で顔を覆った。驚き様は凄惨をきわめた。
「わあっ、なんか襲ってきた！　逃げて！　いやあっ！」
エルレインは隣に座っていたマナに抱きついた。残虐なホラー映画を観るがごときの驚きようである。どうした未来人。
「大丈夫ですよー。お姉ちゃんがついてますからねー」
長谷川お手製のノンフライポテチを食べながら、マナはエルレインの頭をよしよしと撫でた。すごくうれしそうである。

「ふう……」
　映画が終わると、エルレインは眼鏡を外して涙を拭った。
「……ぜ、全然大したこと無かったな！」笑顔が引きつっている。
「嘘付け」先程のエルレインを納めた映像を、大画面モニターに映す。
「――いやあああっ！　やめてええっ！」エルレインは慌ててモニターを遮った。
「いつ何時とも気を抜いてはならないという、良い教訓になったな。さて、続けて2を観るか」
「えっ……」エルレインの顔から血の気が引いた。
「どうした未来人、暇だろう？」
「いや、その……『ぴかどどど』が……」エルレインは俯いてもごもご言った。
「小さい声では聞こえないぞ」
「いやあ、流石に2作連続は体力的にきついだろ。な、マナ」引きつった笑顔をマナに向けた。
「観ましょう！」マナは確信している。もう一度観れば、また頼られることを。
　エルレインを縛り付け、頭をモニターに向けて固定し、2作目を再生する。
「鬼！　悪魔！　人でなし！」始まる前から既に半泣きである。
「鬼は人。悪魔も人。人で無しとは矛盾しているぞ」
「わけわからない屁理屈はいいからほどいてお願いっ！」
「残念ながら、私はターミネーターというものをお前に教えなければならないのだ」
「かいちょーさん、ほどいてあげた方が……」マナは抱きつかれないから寂しそうだ。
「――お茶のお代わりをお持ちしました。おや、これは2でございますね」
　長谷川であった。いつも登場は突然である。流石は私の超・執事。

「うむご苦労。長谷川も観るか？」
にこにこ執事が加わり、上映再開となった。意外と映画好きなのだろうか。
長谷川はソファーの中心を進められ、縄を解かれたエルレインが、ひしっとしがみついて震えている。
「大丈夫ですよ。2は心温まる物語ですから」長谷川はエルレインに笑顔を見せた。
反対側にはマナも抱きついており、これはこれでうれしそうであった。
まるで母親と子二人といった様相であった。あくまで、長谷川が女性だと仮定しての話だが。

「ううっ……」エルレインは号泣しながら、モニターに向かって親指を立てた。
長谷川は白いハンカチを取りだし、エルレインの涙をそっと拭う。
「――ね？」頭を傾げてエルレインに微笑んだ。
「あ……うん……」エルレインは惚けたような表情で長谷川を見上げた。
マナは長谷川の肩にもたれて、すやすやと気持ちよさそうに眠っていた。
「さて、ターミネーターの語源はいかがだったかな？」
「あ、うん。アタシの知ってるのと……だいぶ違った」
「どう違う？」
「アタシの知ってるのは、あんな野蛮じゃなくて、最後は話し合いで解決するんだ」
「それは愉快なリメイク版だな」未来よ、どうなっているのか。
エルレインは、重々しく口を開いた。
「会長、あれは……フィクションだよな」何かを訴えるような眼で、私を見る。
「ん？　ああ。当たり前だ」

「じゃあ、あのぴかって光ってどどどって飛び出すあの筒みたいな奴も、作り物なんだよな」
「ああ。銃のことか。撮影で使われているのは作り物だろう」
「え？　じゅう？」発音が、何処かおかしかった。
「どうした未来人、まさか銃を知らないとは言わせないぞ」
エルレインはゆっくりと首を横に振った。
「……しらない。あんな恐いの、アタシ知らない」エルレインは真顔で答えた。
どうやら……未来はそうとう狂っているらしい。――わけがあるか！
「なら、なぜ爆弾は知っている？　同じ火薬を使った武器だぞ」
「それは……何でだろ？」エルレインは首をかしげる。
「お前、嘘をつくならもう少し上手に――」
「――嘘じゃない！　……嘘じゃないんだ。嘘なんてついても……何にもならない」
エルレインは寂しそうな表情になり、俯いた。
「完全管理社会では、刃物とか、金槌とか、人を殺す危険のあるものに関しては、すごく規制が厳しいんだ。マリナのフライパンだって、マコトの旗だってそうだよ。完全管理社会の眼を盗んで、試行錯誤した結果なんだ」
「なら、お前の十徳ナイフはアウトだ。明らかに刃物がついている」
「確かにそうだけど……でも！」
「悪いが、矛盾のある話を簡単に信じるわけにはいかん。次はもう少し説得力のある話でくるのだな」
「……アタシにだって……わからないよ」エルレインは、そっぽを向いた。
「ターミネーターの話も、どこまでが本当なのやら」
「――それはっ！　そもそも、過去を変えるなら、ターミネーターだって言い出して、それで、そうなんだって……」
「誰がだ。主語を示せ、未来の日本人」

「えっと……誰だったかな……？」
「お前は都合が悪くなると、忘れたふりをするな」
「ふりなんかしてないよ！　たぶん……夕焼け空間に入ったら思い出すと思う」
「どういうことだ？」
「この数日、うすうす感じてたことなんだけど……アタシの未来に関する記憶は不完全なんだ。思い出せるはずなのに、思い出せないことが多すぎるから。『変身』した時は思い出してるみたいだから、たぶん、あの空間の何処かに、記憶の一部も一緒に置いてきたんじゃないかって、思うんだ」
　エルレインは下を向き、拳をぎゅっと胸の前で握っている。嘘を言っているようには、見えなかった。
「……難儀だな」
「気にしないで。失った訳じゃないって、わかってるから」
　エルレインは微笑んだ。
「アタシは、あの空間でだけ、生きてるから」
　この言葉が意味するのは、あの戦争――非日常のみの肯定。そして、日常の否定であった。本来ならば、即座に否定するところだが、今の私には出来なかった。
　なぜなら、エルレインはこの日常で、私とマナ以外の人間にことごとく無視されているからだ。彼ら彼女らにとって、エルレインはいないも同じ。
　誰が悪いわけでもない。『法則』がそうなっている。
　言うなれば世界が悪いという事になるが、だからと言って『法則』は変えられない。『法則』を変えるということは、それすなわち、リンゴが木から落ちることを変えるようなものだからだ。
　エルレインを取り巻く難儀な法則は変わらない。それでも日常は続く。
　ある日の登校途中、気がつくと娘二人が遥か後方でしゃがんでい

た。
「おい、なにをやって――」
二人は段ボールを覗いていた。それだけで嫌な予感が広がる。
「わあ、かわいいです」マナはすりすりする。
小さな黒猫であった。首輪はついてない。段ボールの中に入っていたと言うことは、誰かが捨てたと推測できる。
「かいちょーさん」マナが何かを訴えるように、上目遣いで私の眼を覗く。
「駄目だ。返しなさい」先手を打った。
「かいちょーさんっ！」マナは大きく眼を開け、必死になる。
「うちに猫を飼う余裕はない」それよりもやっかいな娘が二人いる。
マナはいやいやと頭を振った。何故にコイツは王道的なトラブルを持ってくるのか。
「生き物を飼うというのは多大な責任を伴うのだ。ほら、行くぞ。エルレインも何突っ立ってる。遅刻するぞ」
「……会長」エルレインは、目をそらしながら言う。「アタシからも、頼む」
「なに？」意外であった。私はエルレインをまじまじと見つめる。
「その……他人事とは思えないんだ」控えめに私を見て、またそらした。
「駄目だ」
「会長！」エルレインは私に迫った。
「お前はその黒猫に孤独な自分を重ねているだけだろう。自分でもわかっているはずだ。そんな押しつけ、この黒猫が望んでいるとでも？　そんな歪んだ同情、双方の為にならん」
「かいちょーさん！　そんな言い方……エルちゃんは孤独なんかじゃありません。わたしが孤独になんかさせ――」
「――わかってるよ」エルレインは噛み締めるように言った。
「エルちゃん……」マナの表情まで暗くなる。
「でも……それでも……」エルレインはばっと顔をあげ、私を真っ

直ぐ捉えた。「孤独になったことがあるか？　一人ぼっちがどれだけ辛いか知ってるのか？　会長は知らないから――」

「知っている」

「……え？」エルレインの表情に、戸惑いが浮かんだ。

「知っている。だからと言って、怯えていては何にもならん」

エルレインはじっと私を見て、俯き、そして、

「そっか……」ふっと自虐的な笑みを浮かべた。「アタシ、何にも知らないんだ……」

それを見て、マナは困惑したような表情で叫ぶ。

「かいちょーさんは、全ての人の幸せを目指すんじゃ無いんですか！」

「私が目指すのは人々の幸福だ。動物はそれに付随しているが直接的なものではない。管轄外だ」

黒猫が、にゃあと鳴いた。

「いいよ……会長がそう言うんなら」

エルレインは黒猫が入った段ボールを持ち上げた。

「この子は、アタシが一人で育てる」

射貫くような瞳であった。眼鏡の奥の目尻には、涙が溜まっていた。

「エルちゃん、わたしも！」

マナはじっと潤んだ瞳で私を見つめる。

まったく、何と頑固なのだ……。

終始無言。私を責めるような事は一言も言わない。

ただ、じっと見つめ続ける。

「……わかった」

なぜ、こうなるのか……。

「解決する方法はある……だが……」

エルレインが心細そうな表情で見つめる。

「かいちょーさん」マナがうるうるとした眼差しを向けてくる。

……仕方がない。あいつは少々苦手だが……。

「ちょっと待ってろ。それは私の管轄外だ」
「管轄外？」マナとエルレインは互いに顔を見合わせた。
「だから、適任者を招集する」私は電話を掛けた。

「紹介しよう、『神崎愛美』体育祭実行委員兼、動物愛護委員だ」
「……ねむいよう」愛美は猫手にして、手の甲で眼をこする。
そのしぐさ、そのまんま猫である。
しかし、この目の前のちっちゃな少女こそ、天照市のわんにゃんを統べる存在である。
神崎愛美は天照高校一年生。私の下級生だ。度々動物と話しているらしき所を目撃されており、マイペースな性格と独特な雰囲気で周囲から一目置かれている。
というか、完全に浮いていた。人間といるよりも他の動物といることが多いらしいが、本人はいたって気にしていない様子である。
さらに、何故か異常に動物に好かれており、『飼っているペットが逃げ出したら、神崎愛美に聞け』と言われている。
事実、彼女に相談した者は必ずペットとの再会を果たしている。
虐待をされていない限りは。
仔細はともかく、私の統べる賢人生徒会で、この度みごと体育祭実行委員をやり遂げたのも記憶に新しい。彼女の健全なる社会復帰も、私の計画の一つである。
「遅刻せずに済んだのだ。ありがたく思え」
「遅刻って、人間の決めた単なる決まりだよ」愛美は頬をふくらました。
「単なる決まりを守ることこそ、人間社会で生きるための資格となるのだ」
「べつに愛美は資格かくかく欲しくないもん」
「欲しい欲しくないではないのだ」
「……いかちゃんの分からず屋！　ところてんになっちゃえー」
愛美はいーっとしかめ顔をした。

「――『いかちゃん』？」マナが耳敏く繰り返した。
「なんで……ところてんなんだ……」エルレインはひっそりと呟いた。
「あー今日は良い天気だなーこんな日はお昼寝が一番だよー」愛美は眼を細めてのほほんとした表情をしている。
「そうですねえ」マナものほほんとした顔つきになる。
「お、一緒にお昼寝する？」愛美はにかっと笑った。
「するっ！」マナは元気よく答えた。
こいつらは根源的なところで似ている！　堕落しているのだ！
「まだ朝だが」私の頬の筋肉が、ひくひくと引きつる。
「いーじゃん。朝でも昼寝なの！　いかちゃんは細かいこと気にしすぎ。はげちゃうよ？」
だから……その名を呼ぶな。
「『いかちゃん』？」マナがしつこく繰り返しながら、私を見る。目を合わせてはならない。
「大丈夫だ会長、アンタははげない」エルレインは場違いな励ましをした。
「説得力のある励ましどうも」私は皮肉を言った。「そんなことより、ほれ、お前の管轄だ！」私は黒猫を突きつけた。
「どの子？」愛美は小首を傾げた。
「――私の持っているコイツに決まっているだろうが！　他にどれがあるっ！」
「おおっ、なかなかの男前だねー」愛美はかがんで、黒猫の顔をまじまじと見つめた。
猫の顔に男前も何もあるか。人間と猫の区別ぐらい付けろ。
「そいつがほれ、そこに捨てられていたのだ」私は段ボールを指した。
「――おれっちが、捨てられてる？　冗談じゃねーぜ」
突然、愛美の口調がかわった。
「……だって」黒猫が、にゃあと鳴いた。

突然のことに驚いたのか、マナとエルレインは眼をまんまるにして固まっていた。
黒猫がにゃあと鳴く。
「おれっちは、おにゃのこのハートを虜にしちまう罪なやつさ」
愛美が、人格が変わったような口調で喋る。
「この箱に入ってると、やさしいおにゃのこ達がよってきて、にゃんにゃんなのさ」
黒猫が、さっと地面に降り立つ。
「ほれほれ、この愛くるしい動作。全ての生物を超越したかわいさだろう。ほーれ、にゃんにゃん、ふりふりー、もっふもふー。抱っこしたくなってくるー……だって」
黒猫が喋っているのではない。愛美が猫の動作にアテレコしているのだ。
「なんと嫌味な猫であろうか」言っていることが真実ならばな。
「会長、お前に言う資格は無いぞ」エルレインが窘めた。
エルレインはちらちらと黒猫のもふもふ一挙一動をさりげなくチェックしては、そのたびに眼を輝かせている。
「だけどなあ、おにゃのこ達よ、おれっちにほれちゃあいけねえ」
黒猫は、しっぽをぶんっと背を向けた。
「くろにゃあは孤高の黒猫なんだって」愛美が言った。
くろにゃあは、にゃん、と背筋を伸ばした。
愛くるしい姿とは反対に、愛美の語る性格はハードボイルドであった。愛美の言うことを鵜呑みにするのならばな。
「……なんか、かっこいいな」エルレインはしゃがみ、うれしそうな表情で黒猫を見つめている。
きっと自分自身を重ねているのだ。
「そうはいっても――きゃわいいですっ！」マナがくろにゃあを抱きかかえる。
「おいっ、やめろ！　やめねえか……って言ってるよ」
愛美は言い、くろにゃあはにゃあにゃあ暴れる。

突然、黒猫の毛が毛羽立った。
「おおっ、この感触……なんて事だ、ふにんふにんしてやがる。おい、こりゃあ、一生に一度お目にかかれるかどうかってやつだぜい。まさに至上。天にも昇るここちだぜ。こりゃあ、じっとしてられねえ……ってな感じかな？」
「あっ……ちょっと……こら……」マナはくすぐったそうな表情をしている。
そして、くろにゃあはマナのばいんばいんで大暴れである。
「このエロ猫」
「くろにゃあは、女の子だよ」愛美が答えた。
「――貴様さきほど男前と言ったではないかっ！」
「女の子で、男前なんだよ。わかってないなー、いかちゃんは」
「――いかちゃん？」
「マナ、しつこいぞ」つい、反応してしまった。
「『いとーかいちょーちゃん』だから、『いかちゃん』」愛美はさらりとばらした。
「――こら、愛美！」
「あはは、いかちゃん、いかちゃん」マナはわたしを指さして、けらけら笑った。
「ほれ！　子供が真似する！」
「かいちょーさん、わたし子供じゃありません！」マナは頬を膨らました。
その行動が、既に子供である。
エルレインはじーっとくろにゃあを見ている。
私はくろにゃあの首根っこを掴んで、エルレインの前にひょいとやる。
「……な、な、な、何だよ。アタシは別に抱っこしたいとかそんなこと考えてないぞ！」
実にわかりやすい単純バカである。
くろにゃあが、にゃあと鳴く。

「安心しな、かわいこちゃん。おれっちは、ちょっと恥ずかしがり屋さんで、純真な乙女の胸の中では、暴れたりしねえよ……って言ってると思うよ」

エロ猫、ノリノリである。

「愛美、そろそろこいつの言っていることを語るのはやめろ」

「えーっ、なんでー？」

精神的に耐えられない。色々な意味でな。

「か、かわいこちゃん……純真……乙女……」エルレインはぽーっと赤くなっていた。

エルレインは操られるようにくろにゃあに手を伸ばし、そっと抱いた。

「わあ……」くろにゃあはエルレインの顔をぺろぺろ舐め、すりすりする。エルレインはくすぐったそうな表情になった後、くろにゃあのおでこに頬をくっつけた。

「あったかい……」子猫を抱きしめながら、至福の表情。

くろにゃあの言う通り、今のエルレインは純真なる乙女であった。

エルレインはくろにゃあの虜となってしまったようだ。

くろにゃあはしばらくじっとしたあと、突然ぴょんと跳びはね、塀の上に着地した。

「くろにゃあ、もう行くって。ばいばいって言ってるよ」

本来は、じゃあ、おれっちはもう行くわ。騒がせて悪かったな、おにゃのこちゃん達。とでも言っているのだろう。意訳をさせて正解である。

くろにゃあは、塀の向こうに消えてしまった。

「愛美ちゃんはにゃんにゃんの言うことがわかるんですね！」

「気のせいだ」私は口を挟む。

「会長、思いっきり見たよな。聞いたよな」信じられないと言った表情で、エルレインは批難の視線を向ける。

「気のせいだ」動物と話せる？　ははっ、あるわけがない！

ともかく問題は解決したのだ！

「……最低」エルレインは私を睨んだ。

私達は学校へと向かった。

愛美とマナは堕落者同士気があったらしく、にゃんにゃんとたわいのないおしゃべりに花を咲かせていた。

だが、私は気づいていた。私は満足そうな笑みを浮かべ、真っ直ぐに前を見て歩く自称隙間漂流者を見る。

結局、愛美自身はエルレインに一度も関心を向けなかった。関わりがあったのは、くろにゃあの行動から推察したアテレコをした時のみ。

ん？　まてよ。

もし、愛美が本当に動物の喋ることがわかるとしたら……いや……そんなことは絶対あり得ないが……。だが、もし愛美が言っていることが真実だと仮定して……。

あの『くろにゃあ』という黒猫がエルレインを認識できたとしたら、

一体、あの猫は何ものなのだ？

私の疑問は解決せぬまま。日々は続く。

普段のエルレインは退屈そうで、ぼうっとしており、まるで魂の抜けた抜け殻のようであった。

エルレインは夕刻の一瞬だけを生き甲斐に生きている。そして、私が出来ることといえば、その生き甲斐をエルレインに提供してやることぐらいであった。

私は戦った。エルレインは必死で守った。端から見れば地獄のような光景である。だが、エルレインにとっては、その地獄こそが生きる意味であった。

日常は、エルレインにとって苦痛以外の何者でもなかったはずだ。全ての人間から無視され、いない者として扱われる。

時々、エルレインはマナを羨ましそうに眺めていた。

マナは生来の人なつっこさで地域の人々と積極的に関わっていった。
昼休みに流される番組は好評を博し、マナは学校でも人気者となった。マナの周りはいつでも会話と笑顔に満ちあふれていた。
そんなマナを遠巻きに眺めながら、エルレインはふとした瞬間に寂しげな表情になるのだ。
そんな中、事件は起こった。

それは、夕焼けにゃんにゃん戦争の最中だった。
私の放ったロケットペンシル弾『チェス』の爆発によって、エルレインの被っていたネコの仮面が砕けたのだ。エルレインはそれに気づかず、マリナの手を取って走る。
「……はあっ……はあっ……マリナ、大丈夫か？」
「あ、うん……」マリナは、ネコ仮面の正体に戸惑っている様であった。
私は追いかけなかった。ネコ仮面とエルレインをつなげる絶好の機会だと思ったからだ。
「痛っ……」マリナは、腕にケガを負っていた。
「まって、たしかリペアキットがあるから」エルレインは、黒い包帯のようなものを取りだし、マリナの腕へ丁寧に巻き付けて行く。
「……これで大丈夫だ」
「……あ、ありがと」
二人は並んで座り、廊下の壁にもたれかかった。
エルレインは、マリナをやさしげな表情で眺めている。
「なあ、マリナ」
「……な、なによ？」
「もう、やめないか？　この数日、戦ってきてわかったんだけど、伊統会長はそんなに悪い奴じゃない」
「それは……そんなの、わかんない。きっと、騙されてるのよ」
動揺するマリナを眺めながら、エルレインは言う。

「過去は、未来に内包されるんだ」
「えっ？」マリナは、はっとしてエルレインの表情を覗き込む。
「過去は変えられない。それは、夢と同じだ。ワタシたちは、過去を変えるんじゃなくて、未来を変えなければいけなかった。初めから、間違ってたんだよ」
「……」マリナは、俯いた。
「だから、過去の伊統会長を殺すのは、間違いなんだ。未来の伊統会長を、倒さなくちゃ行けないんだ。だからマリナ、伊統会長を殺すのは、やめ――」
「……そういうことか」
「マリナ？」
マリナは、立ち上がった。そして、見下した視線をエルレインに向ける。
「あんた、バカじゃないの？　自分の顔をよく見てみなさいよ」
「マリナ、何を――っ！　仮面が……無い……？」
「そうやって、アタシを騙して、諦めさせようって魂胆だったんだ」
マリナの瞳が、滲んでゆく。
「あたしがバカだった。あなたなんかを……」
声は震え――頬を、涙が伝った。
「あなたなんか……あんたなんか――大っ嫌い！」
マリナは走りだす。
――まずい、これは最悪のパターンではないか。
私も二人の所へ向かって駆け出す。
エルレインが慌ててマリナの肩をつかまえた。
「マリナ、待って！」
「――離してっ！　離してよっ！」
マリナは背中から黒い棒を射出し、フライパンでエルレインを撲った。エルレインの額から、つぅと赤い線が滴り落ちた。
「マリ……ナ……？」
それを見たマリナは、顔面を蒼白にして、

「あ、あ、あなたなんか……死んじゃえ！」そう言い捨て、走り去った。
ゲートを守るマコトの横を通り過ぎ、マリナはゲートの向こうへと消えた。

《――にゃんにゃんにゃおーん！》停戦を告げる鳴き声が響いた。

「エルレイン！」私はエルレインの元へ駆け寄る。
エルレインの額に傷は無かった。しかし、エルレインは額を押さえて離そうとはしなかった。まるで、自分の表情を隠すようであった。
「……だいじょうぶ、だから」
エルレインの声は、震えているような気がした。

次の夕刻、マリナは開幕一番フライパンビームを放ってきた。
私はチェスの爆発ではじき飛ばし、続けざまにもう一発放つ。
完全にマリナを捉えたペンの切っ先が、黒い風によって弾かれた。
「マリナ、だいじょ――」
マリナはエルレインを追い越し、私に向かってフライパンを振り下ろす。マナの白い杖を使ってくい止める。ギチギチと硬いもの同士が噛み合う音が、振動が、体を伝わる。
「伊統会長、さっさと死になさいよ……！」
「そうは、いかないっ……！」
私はチェスの切っ先をマリナに向け、ゼロ距離で発砲する。
その瞬間、黒い突風が吹き抜け、マリナは教室の隅へと避難させられた。
「マリナ……」エルレインは、そっとマリナを下ろす。
マリナは再び私に向かって駆け出す。エルレインへの感謝の言葉はない。一言も交わさない。目も合わさない。
マリナは、エルレインを完全に無視している。

その後の戦いでも、マリナの無視は徹底していた。エルレインを無いものとして扱い、撤退の時刻が来たら、すぐさま帰っていった。

その次の夕刻。エルレインの様子がおかしいと言って聞かないマナが、強引に参戦してきた。

「……マナちゃん」

マリナを視認したマナの表情が、ぱあっと明るくなる。

「マリナちゃん、お久しぶりですっ！　最近ちょっと忙しくて――」

マリナはフライパンを振って、マナを静止した。

「なんなの、今度はマナちゃんを盾にする気？　相変わらずの外道ね！」

「マリナちゃん、やめてくださいっ！　エルちゃんはマリナちゃんのことを思って――」

「――加速装置っ！」

黒いビームがマナ目掛けて放たれた。突然のことに、私の体は動かない。

ビームは一瞬のうちにマナに接近し、マナの額を――

――鋭い音が響いた。エルレインの黒い風がフライパンを弾き、フライパンは壁に激突した。

「……やっぱり、あいつの味方か……」マリナは、小さく呟いた。

――再び黒いビームが跳ぶ。私はマナを背に隠し、白い杖で防いだ。

「あはははは！　どうよ！　もう、あたしにその作戦は効かないっ！　誰であろうと、邪魔する奴は殺すわ！」マリナは高笑いをした。眼は、笑っていなかった。

マリナの頬を、涙が伝った。

「……マリナ……ちゃん……」

マリナは嗤う。泣きながら、嗤い続ける。

「あはははははは――ごふっ……」

マリナの口から、鮮血が吹き出した。

「マリナっ！」「マリナちゃんっ！」
二人が駆け寄ろうとするが――突如現われた青い布に遮られた。
マコトであった。今まで微動だにしなかったマコトが今、マリナを庇っている。
「マリナ、帰るよ」相変わらずの、冷静で抑揚のない声だった。
「はあっ……はあっ……何言ってんのよ……まだ時間はたっぷりあるわ。あいつを……殺すまでは……」
「――その体で何が出来るのっ！」上擦った、悲鳴のような声だった。
マリナははっと眼を見開き、突然、力が抜けたように倒れた。
マコトはマリナを担ぎ上げ、ゲートへと向かう。
「――待って、マコト！」エルレインが叫ぶ。
マコトの足が止まった。
「……誰か知らないけど、目障り」マコトはお面を取った。
「えっ？」
「やり方が回りくどい」
マコトは肩に掛けていた旗を手に取り、軽い動作で振り下ろした。
凄まじい轟音と地鳴り。地震のような振動が辺りを襲った。
旗が振り下ろされた箇所は、完全に陥没していた。
「……次にマリナの心を弄んだら、今度は、ウチがあんたらを殺す」
言い捨て、マコトはゲートの向こうへ消えていった。

「ごめん、ちょっとだけ、気持ちの整理させて」
あれから数日、エルレインはほとんどの時間を、自室に閉じこもって過ごした。
当然、戦争にも参加しない。エルレインの姿が無いことを確認したマリナは、
「……あの人……いないんだ……」
それだけ呟き、やけになったように、私を殺しにかかった。
無機的で、不毛な戦いであった。何も進まない。何も変わらない。

時間が来たら戦い、時間が来たら去ってゆく。
そんなある日、エルレインの部屋の扉が開かれた。
「……ごめん、心配かけた」寝間着姿のエルレインが、申し訳なさそうに佇んでいた。
「エルちゃん、大丈夫ですか！」すかさずマナが駆け寄る。
エルレインはマナの頭を撫でた。
「言ったろ、例え嫌われたって、マリナを守るって」
意外であった。てっきり眼は腫れ、頬に涙の後があるものと思っていたが、今のエルレインには、そのどちらもなかった。
「エルレイン、お前……」
「だいじょうぶ……大丈夫だ。アタシは、『覚悟』したんだから」
エルレインは微笑んだ。
強くなった、と思った瞬間、
「エルちゃん、泣きたかったら、泣いてもいいんですよ」マナが言った。
一瞬だけ、エルレインの瞳が揺らいだ。
「……ばか、ませたこと言うな。アタシは泣かない。あたしが泣くのは、マリナを守りきった後だ。それまでは、絶対に泣かない」
エルレインはもう一度微笑んだ。その笑みは、どこか、ぎこちなかった。
それから夕刻には、マナとエルレインが必ず参加するようになった。
マナは『味修羅ん』の収録が終わり次第、全力で駆けつけている。
マナは堂々と私達の戦いを止めようとするが、徒労に終わっている。
マリナが危うくなると、一瞬だけ黒い風が吹く。――エルレインである。
エルレインは、マリナに気づかれぬように守ることを決めたらしい。
「そのほうが、マリナを傷つけなくて済む」彼女はそう言っていた。

それでも、時々マリナが感づいているのではないかと思う時があった。だが、マリナは気づかなかった。気づかないふりをしているのかも知れなかった。

重苦しい緊張感の中、淡々と戦争は続いた。事態は何も好転しなかった。

マナはみんなの人気者。エルレインは一人ぼっち。陽と陰のコントラストが、益々鮮明になっていった。

廊下を歩いていた時、ぼうっとしていたエルレインに女子生徒がぶつかった事がある。書誌生徒は教科書を落とす。

「あ、ごめん……ぼうっとしてて――」エルレインはそれを拾い、女子生徒に渡す。

女子生徒は無言無表情のまま教科書を抱え、エルレインとすれ違った。

責められもせず、感謝もされない。それは、一番辛いことなのかもしれない。

その一番辛いことを、今、エルレインは一番愛する人にされている。

マリナまでもが、エルレインを『いない者』として扱おうとしている。

私の視線に気づくと、エルレインは笑った。

「だいじょうぶ。大丈夫だ。アタシは、マリナが生きてさえいてくれたら、それで……いい」そう自分に言い聞かせているようであった。

空元気であることは見え透いていた。

マナが楽しそうに談笑する姿を、エルレインは時々遠目で眺める。その視線に、今までとは違う何かが含まれているように、私は感じた。

その後、しばらく雨の日が続いた。雨の日はなぜか、隙間ターミネーターは現われない。焦燥感だけが募ってゆく。

今日の天気予報は大はずれだった。
予報は晴れだと言っていたにもかかわらず、放課後になる一歩手前で雨が降り出した。
「雨、止みませんね」マナは廊下の窓に、顔を寄せる。
「おそらく、長谷川が傘を持って来るだろう。少し待っているとしよう」
エルレインは窓から遠くを眺めていた。そんな彼女を、マナが心配そうに見つめていた。
「かいちょーさん」マナはすがるような眼で私を見てくる。
私はエルレインが『覚悟』し、強くなったのだと思っていた。
しかし、マナはエルレインが強がっていることを、あっさりと見抜いた。
先日もそうだった。マナに言われるまで、私は霧島京香が物部渡に好意を抱いていることにまったく気づかなかった。そしてどうやら、それが真実であるらしいことも、最近わかってきた。
マナは、私にわからない何かを、察知しているのだろうか。
「こら！　くろにゃあ、まって！」小さな黒猫が、私達の間を通り抜けた。その後を、神崎愛美が追ってゆく。
ぶつかりそうになり、私は避けた。愛美は周りが見えていないようだ。
黒猫――くろにゃあは、エルレインの側で止まった。エルレインが、それに気づく。
「……あんたは」エルレインが手を差し伸べると、くろにゃあはぴょんと跳び乗った。
くろにゃあはエルレインのほっぺを舐め、くすぐる。
「こ、こら……あはは」
愛美が追いついた。
「あ、くろにゃあ、いた！　いかちゃんに見つかったら怒られちゃうよ！　……あれ、くろにゃあ、懐いてる……」
「え……？」エルレインは、愛美を見た。

神崎愛美は、エルレインを見ていた。エルレインを、認識していた。

時が止まったように、二人はお互いを見つめている。二人とも口をつぐみ、一言も発しない。廊下はしんとし、地面に叩きつけられる雨音が大きく感じられる。

「あなた、寂しいの？」愛美が、唐突に訊ねた。

「な、何を言って……」突然話しかけられ、エルレインはどぎまぎしている。

「だって、その子、寂しがってる人にしか懐かないもん」

エルレインは、ゆっくりと視線をくろにゃあに向ける。見つめられると、くろにゃあは、にゃあと鳴いた。

エルレインの瞳が、揺れ出す。くろにゃあを放り出す。

「あたしは……そんな……」エルレインは後退る。頭を振る。焦点の合わない瞳は、辺りを見回す。その視線が、私達と合って、固定された。

「エルちゃん……」マナが呼ぶ。

エルレインは、はっとして私達を見た。

そして、私達から逃げるように駆けだした。

その刹那、エルレインの頬を何かが伝うのを見た気がした。

「エルちゃん、まって！」マナがエルレインの背中を追う。

くろにゃあが愛美の腕から抜け出し、駆ける。

「あ、くろにゃあ！」

廊下を進み、分かれ道に来た。エルレインが廊下を左に曲がった。

くろにゃあが右に曲がる。マナは左、愛美は右へ曲がる。

私は……どちらへ行けばいい？

あの黒猫、エルレインを認識し、愛美にエルレインを認識させた。

あいつを探れば、エルレインを取り巻く『法則』から救えるかも知れない。

だが、今はエルレインを追うのが先決ではないか？　もし、あれ以上不安定になれば、収拾がつかなくなる気がする。

走りながら惑う。私は……どうすればいい……。分かれ道に辿り着く。

私は左に曲がった。

「エルちゃん！」マナの声が聞こえる方へと急いだ。

エルレインが校舎を飛び出すのが見えた。降りしきる雨の中へと、ためらいを見せずに突っ込んだ。

「――来るなっ！」背を向けたまま、エルレインが叫んだ。

マナはびくっと驚き、立ち止まる。

「来たら……濡れちゃうだろ……」

そういうエルレインは、雨に打たれ、ずぶ濡れであった。

エルレインは、こちらを振り返った。

「エルちゃん、泣いて――」

「――泣いてなんかないっ！」

エルレインは、笑った。顔面は蒼白で、体は震えていた。

「泣くもんか、アタシは『覚悟』したんだ。泣いてたまるか。雨に濡れて、そう見えるだけだ」

マナは、一瞬ためらった後、校舎の外へと足を踏み出す。

「――くるなっ！」

マナの足が止まる。マナは俯き、胸に手を置く。

「わたしじゃぁ……駄目なんですか……」マナの声は震えていた。

「駄目？　何のことだよ」エルレインの笑みが消えた。

「だって、エルちゃん、寂しいって……」

「あんなの嘘だっ！　アタシは寂しくなんか無い！」

「わたしはっ、わたしはエルちゃんが大好きですっ！　エルちゃんが寂しがってるのなんて嫌です！　寂しいのは……つらいです」

「……黙れよ」

「エルちゃん？」

「お前に、お前なんかにアタシが……アタシの何がわかるって言うんだ」

「エルちゃん！」

「優しい言葉をかけられるのが……どれだけ辛いか……」
「……えっ？」マナの表情が、凍り付いた。
エルレインは燃えるような視線でマナを睨み付ける。
「お前に何がわかるっ！　いっつもみんなにちやほやされて！　アタシは、アンタみたいには一生成れない！　アンタにアタシの気持ちなんてわかるはずがないっ！」
「……エルちゃん、いったい、何を……？」
「どうせアンタも心の底では笑ってるんだ」
エルレインは堰を切ったようにマナを罵る。
「お前のやってることは……傷口に塩を塗るのと同じ事だ。アタシの気持ちなんかこれっぽっちも考えてない……お前の、独善的な――」
「――エルレインッ！」私は思わず叫んでいた。
それ以上は言ってはならない。言えば、取り返しがつかなくなる。
「……会長」エルレインは、私を見た瞬間、愕然とした。
気づいたのだ。自分が、何を言ってしまったのかを。
エルレインは私の瞳をまじまじと見つめる。瞳孔は開き、怯えている。
「アタシは……何を言って……違う、そんな、アタシは――」
エルレインはその場にへたり込んだ。
「アタシは……醜い。マリナだけいればいいって、そう思ったのに、みんなにちやほやされてるマナが……マナが、いつの間にかうらやましくて……アタシは、誰にも気づいてもらえないのに……あの子はいつも誰かと笑ってる。誰かを笑顔にしてる。アタシに向けられる表情はいつも無表情。でも、そんなの、アタシが悪いのに……アタシ、勝手に嫉妬して、勝手に怒って、勝手にマナを傷つけて……アタシは、アタシは最低だ！　アタシは醜いっ！　アタシは無視されて当然の存在で……だから、マリナも……アタシを」
そして、地面に拳を叩きつけた。何度も、何度も叩きつける。水しぶきがばしゃり、ばしゃりと飛び散る。

「アタシは……最低だ……何が……何が『覚悟』しただ！」
エルレインが、『覚悟』という言葉に捕らわれているように感じだ。
「アタシは……何も変わってないっ……」自傷するように、エルレインは自分の拳を地面に叩きつけた。
そして『覚悟があるものは強い』そう彼女にすり込んだのは、他ならぬ、私であった。
私が……彼女を、あそこまで追い詰めたのか……。
エルレインはなおも拳を叩きつける。水しぶきが——飛び散っていない。
「アタシは……いない方がいいんだ」
マナが、震えた声で呟く。
「エルちゃん……手が……」
エルレインは、自分の手を見る。
その手は——うっすらと消えかけていた。
エルレインは、ふっと諦めたように眼を閉じた。
——違う。私が言いたかったのは、私が彼女に伝えたかったことは、こんな終わりをもたらすような事ではない。『覚悟がある者は強い』とは——。
「——エルちゃんだめえっ！」マナが雨の中へ駆け出す。
私も傘立てから傘を抜き、雨の中へと駆け出す。全身を土砂降りの雨が打ち付ける。
その瞬間、マナがバランスを崩し、転んでしまった。水たまりの中に顔を打ち付け、泥まみれになってしまう。
エルレインは消えてゆく。
——間に合わない！　私が叫びかけたその時、
消えかけたエルレインの腕を、取る者があった。
はっとして、エルレインはその人を見上げる。
その人は、女神のようにやさしく微笑み、
「風邪をひいて、しまいます」

そっと、緑色の傘を、差し出した。
エルレインはその人――長谷川を見つめる。長谷川の差しだした傘は小さく、長谷川の銀糸のような髪に、黒い執事服に、雨粒が降り注ぐ。
子供用の折りたたみ傘であった。
デフォルメされたカエルの顔の形をした、小さな傘であった。
長谷川がいつも大事にしているお気に入りの傘だ。不釣り合いだから他の傘に変えろと言っても、長谷川はこの傘が良いと言って聞かない。その傘を、エルレインのために差し出していた。
「エルさま」
半透明になったエルレインは、ぼうっと長谷川を見上げる。
「いいのです」
「長谷川……さん……？」エルレインが履き腫らした顔を長谷川に向ける。
「あなたは、とても人間らしい素敵な人です」
「違う……違うよ。アタシは、そんな――」
「大丈夫。あなたは強い」
それは、私がかつて母にかけてもらった、魔法の言葉だった。
長谷川は、エルレインの頬にやさしく触れ、微笑んだ。
消えかけていたエルレインの体が、徐々に元に戻ってゆく。
「だから、誰よりも傷ついてしまう」
エルレインの瞳に、涙が溜まって行く。
「はせがわさん……」
肩を震わせる。
「無視されるのは嫌だよ」
しゃくり上げ始める。
「一人ぼっちはこわいよ」
長谷川は、柔らかな微笑でエルレインを見つめる。
「……一番大好きな人に……無視されるのは……嫌だよ」
エルレインの唇がわなわなと震え、涙があふれ出す。涙を隠す雨

は、傘によって遮られている。しゃくり上げながら、エルレインは思いを絞り出す。

「辛いよ……無視されるのは辛いよ。アタシ、ここにいるんだよ……無視されるのは……辛いよぉ」

押しとどめていた思いが崩壊したのか、エルレインは大声で泣き出し、長谷川に抱きついた。

その姿を、緑色の傘が、デフォルメされたカエルの顔の形をした傘が隠した。

そんな滑稽な傘でも、今は、泣きじゃくるエルレインをしっかりと包み込み、彼女冷たい雨から守っていた。

私の言いたかった言葉は、そっくりそのまま、長谷川に言われてしまった。

まるで、目の前の超・執事が私の言葉を代弁したかのように。

二人を前に、マナは雨に濡れながら、立ち尽くしている。その寂しげな背中を見て、私の役割は他にあることを悟った。

「……マナ」私はマナの隣に並ぶ。

「かいちょーさん……わたし……エルちゃんの気持ち……全然わかってない」

私は、マナの濡れた金髪を撫でた。

「お前は彼女を救おうと思った。行動が裏目に出たとしても、その精神は尊い。私はそう思う」

「そんなこと……」マナはぶんぶんと頭を横に振る。水しぶきが飛ぶ。

「お前は今、雨に濡れている。エルレインと同じ雨にだ。お前は境界を越えた。お前にはエルレインを助ける資格がある」

傘を開き、娘を雨から守る。

「……わたし、難しいことはよく分かりません」

マナは、顔を上げた。

「でも、エルちゃんのために、何かしたいです」

「何をする？」

マナは、うーんと考え、そうだ！　と叫んだ。
「わたし、エルちゃんの側にいます！　もう、無視したりなんかしません。みんなに変な子だって思われたってへっちゃらですっ！　エルちゃんが消えちゃわないように。例え、嫌われちゃっても。エルちゃんがんばってます。だから、わたしもがんばりますっ！」
「そうか」
私は頷き、傘の中で泣きじゃくるシルエットを見る。
「ならば、私も探そう。エルレインを助ける方法を」
「かいちょーさん」
「安心しろ、私は、有言実行の男だ」
ぱああっと、マナの表情が明るくなった。
「その意気だ。笑え。元気で明るく、前向きなところがお前の良い所だ」
私はマナの頭をぽんぽんとやさしく叩いた。
「はいっ！」マナは元気よく返事をした。
自然の『法則』だから諦めるのか。
そんなもの、私の性に合わない。
例え自然の『法則』であろうと、私の『法則』に従わせてみせる。
私を誰だと思っている。
私は伊統会長――完全管理社会の王となる男だ。

私は、勝算のないことを口にはしない。
あの黒猫、くろにゃあが鍵を握っているはずだ。
私は早速リガンを使い、学校中をくまなく調べた。
が、あの黒猫は、どこにも見当たらなかった。
「愛美、見つかったか？」
神崎愛美は頭を振った。
「ううん、全然。あの子、気まぐれだから」
愛美は心配そうな表情で私を見る。
「もしかして、いかちゃん、くろにゃあを叱るの？　お願い、やめ

て」

「違う。あの黒猫、私の娘を救えるかも知れん」

「むすめ？　まーにゃんのこと？」まーにゃんとは、おそらくマナのことだろう。

愛美はエルレインの事を覚えていないようだった。

「違うが、そうだと思ってくれてもかまわん」

愛美は頷いた。

「なら、愛美も精一杯協力する、愛美の『わんにゃんねっとーわく』にかかれば、くろにゃあもきっと見つかるよ」

「……頼む」非常事態だ。エルレインの存在自体が、既に異常。

異常には、異常で対抗するしかあるまい。

愛美は「わんにゃんたちの王さまに会いに行くね」と、不可思議なことを言い残して何処かに行ってしまった。

突然、キィィィン！　と耳鳴りのような音がする。

リガンの映像が、独りでに動いてゆく。なんだ……これは……。

――黒猫を見つけた。何故、屋上プールに？　先程スキャンをかけたときには、反応しなかったが。

疑問を抱きつつ、急いで屋上プールに辿り着く。可動式のガラスの天井に雨が叩きつけられ、雨音が響いている。

黒猫を視認した。そして、あることに気がついた。

黒猫は、プールの中心――水面に、ちょこんと座っていた。

これは……どういうことだ……？

またもや、キィィィンと耳鳴りのような音がし、こめかみ辺りに鋭い痛みが奔る。

《おれっちを見つけて、どうするつもりなんだい？》

なんだ、これは、猫の言っていることが……わかる？

迫り来る頭痛と吐き気を堪えながら、私は発話する。

「お前に、聞きたいことが、ある。何故、お前はエルレインを、認識できる？」

《それは、おれっちがおれっちだからさ》

「どういうことだ……お前は、一体何者だ？」
《そんなこと聞きたいんじゃないんだろう？　もっと根源的な質問をしたらどうだい？》黒猫の黄色の瞳が、妖艶に光る。
根源的な……私の……。
「……エルレインを……どうすれば救える？」
《ざんねんっ！　ボクには救えない》主語が、変わった。
「何？　お前は――」
《自分で見つけなきゃ。人に頼るのは良くないよ。だって君は――》
黒猫は、そこで話を切った。
「私は……なんだ！」
《――おっと、口が滑るところだった。とにかく、今のボクの役目はここまでさ。彼女の心はかき乱された。そうしなければ、前へ進めないからね》
「前へ、進む？　貴様、何を言っている？」
《ボクがここに現われたのは、君があの黒猫に執着しているからさ。それでは、何も進まないんだよ》
「黒猫？　黒猫はお前ではないか」
《ああ、そうだったね。じゃあ、こう言おう。――ボクなんかにかまってないで、自分の娘の本質を考えろって事》
黒猫の姿が歪み、水面に――溶けるように消えた。
「いかちゃん、いかちゃん！」愛美の声だった。
「愛美、あの猫は――」
振り向くと、
「くろにゃあ、いたよ！」驚いたことに、愛美は、くろにゃあを抱えていた。
「いったい……どういうことだ……？」
「いかちゃん？」
「今のは……何だ？」
プールの水面は、ただ、灰色の空を映しているだけであった。

第十二話　ネコ耳にゃんにゃん騒動

あれから、エルレインは塞ぎ込んでいる。
愛美を介してくろにゃあに話を聞いても、にゃあにゃあ言うだけで要領を得ん。そもそも黒猫なんぞに話を聞こうとしたのが間違いだったのだ。
どうした伊統会長。この現実主義者が、エルレインの異常に当てられて日和ったか！
とにかく、振り出しに戻ってしまった。あてにしていた黒猫がわけのわからん結果に終わり、エルレインを助ける手がかりが無くなってしまったことになる。
エルレインの傍らには、常にマナが寄り添っている。
「エルちゃん、おかし食べます？」
「……」エルレインは俯き、膝を抱えている。
「雨、止みませんね」マナはエルレインと背中をくっつけて、体育座りしている。
「……」エルレインは、じっと黙っている。
「あ、そう言えば今日、春香ちゃんがね……」
エルレインは一言も話さないが、嫌がっている様子はない。
マナはマナで、戦っているのだ。私は、どうするべきか……。
「ちょっと、出かけてくる」
「あ、かいちょーさん、外は雨ですよ」
「行ってくる」
「……いってらっしゃい」マナは小さく手を振った。
屋敷の中にいても意味がない。足は第二の心臓。血流を良くし、頭の働きを活性化させる。
どうすればいい？　相手は自然『法則』だ。そう簡単には変わらん。
だが、無理だとは思いたくない。人類は、技術を使って不可能を

可能にしてきたのだ。
ゴゴゴゴゴという音が、頭上に響く。雷の音ではない。飛行機の音である。
例えば飛行機。鉄の塊が空を飛ぶなど、誰もが不可能だと諦めてきた。しかし、現にいま、鉄の塊は飛んでいる。諦めなかった者が、『法則』に打ち勝ったのだ。
だが、どうすれば……マナの、魔法……いや、妄想はいらん。具体案を提示せよ！
具体的な、案……技術……もの……モノ……？
……まさか。嫌な予感がし、ふと、視線を上げる。
『ＩｔｅｍＳｅｒｅｃｔｉｏｎ』と書かれた、洒落た看板が目に飛び込んできた。
ガラスの向こうから、退屈そうに頬杖をついた赤毛ポニテの悪魔が、にやりと笑った。
私はすぐさま立ち去ろうと――取り憑かれたように、道具屋の扉をくぐった。
――なぜだ！　体が勝手に動くっ！
「いらっしゃい。お茶でもいかが？」赤毛ポニテの悪魔がにっこり微笑む。
……どうなっている。私は、立ち去ろうとしたはずだ。
内心の動揺を隠し、私は話す。
「相変わらず、閑散としているな」
「今日は雨だからねー」
「暇か？」
「それなりに忙しいよ」アカネ嬢は小さくあくびをした。どう見ても暇そうである。
「なら、邪魔者は帰るとしよう」私はきびすを返した。実にスムーズな運びである。
「あら――いいのかな？」
足が――動かない？

「ここへ来たって事は、相談事があるんじゃないの？」アカネ嬢が突然、私の肩の上に顎を乗せ、耳元で囁いた。
いつの間に立ち上がり、私に近寄ったのだ。そんな気配、まるでなかった。
アカネ譲の顔が近い。恥辱なことだが、良い匂いがする。
横目で見ると、アカネ嬢の瞳が金色に輝いた気がした。見透かすような瞳に耐えきれず、私は答える。
「……実は、ある」
「あははっ、そうこなくっちゃ！」ばんっ！　と、私の背を叩き、アカネ嬢は勢いよく背筋を正して胸を張った。ポニーテールが躍動的に揺れた。「それでこそ、人払いをしたかいがあるってもんよねっ！」アカネ嬢は、片目を閉じた。
この人は、私が来るのを予測してたとでもいうのか。
「今からお茶入れるね！」
そんな私の疑念を無視して、アカネ嬢は店の奥へと消えていった。戻ってくると、その両手には湯気を噴かせたヤカンとポット。
「そこに座って」アカネ嬢は視線で私を促す。
気がつくと、隣にテーブルと椅子があった。先程までは無かった……ように思われるが……。気のせいだと、思いたい。
「ところで、『リガン』の調子はどう？」アカネ嬢は高い位置から、ガラスのような材質で出来た透明なポットにお湯を注ぐ。蓋をする。茶葉がジャンピングする。
「すばらしいな。何処にいようとも、複数の監視カメラによる映像を一度に認識できるあの視点、まるで神の視点だ！」話すうちに興奮し、つい、力が入ってしまった。
「へー、あっそう」
対照的に、アカネ嬢は何処かがっかりしたような、つまらなそうな反応であった。
「どうかしたか？」
「いいえーなんでもなーい」

何だ、この投げやりな反応は？
「他には？」アカネ嬢はぱちぱちとまぶたを瞬いた。
他に？　神の視点を提供する防犯システム。これ以上、何があるというのだ。
……いや、待て。そう言えば、
「不思議なことがあった。耳がキーンとなって、こめかみが痛くなり……」
「で、で、それで？　どうしたの？」今度は一転して、目を見開いて、身を乗り出してきた。凄まじい食いつきようである。
「どうしたって……」
私は幻聴が聞こえたこと、黒猫の幻影を見たことを話した。このような非科学的な事、きっとシステムの不具合に違いないと、クレームを入れた。
「へー、なるほどね」アカネ嬢はうんうん大げさに頷くと「じゃあ、見てみましょう」
「は？」
急にアカネ嬢の顔が近づき、私の目の前にアカネ嬢の薄い唇が近づき、その中からピンク色の舌が飛び出し――私の眼球を、舐めた。一瞬の出来事であった。
「な、な、な、何をするっ！」私は当然のように動揺する。眼球に感じたざらりとしたいやらしい感触が、残って消えない。
「へ、何って、コンタクトを取ってあげたんだよ？」アカネ嬢の舌先には、リガンのマスターキーであるコンタクトレンズが乗っていた。舌で、絡め取った訳だ。
「ふ、ふざけるなっ！　何で、舌で……そんなっ！」
「あれ、イトーくんどうしたの？　ほら、もう一個も」官能的な魅力を含んだ声色である。やさしげなアカネ嬢の顔が、近づく。まるで、キスでも迫られているように錯覚してしまう。私の背中に腕を回し、「ほら、力抜いて」
その言葉に、私の理性は爆発しそうになる。

「いいっ！　自分で取れるっ！」思わず私は叫び、アカネ状の体を突き放した。
「どうしたの？　遠慮しないで。取ってあげるよ？」アカネ嬢はきょとんとしている。
「――普通の人間はそのようなコンタクトの取り方はせんっ！」
そう言うと、アカネ嬢はぽかんとして、
「あ、そうか。ごめんごめん」なぜか、恥じらいながら謝った。
私はこの人がわからない。本当にわからないっ！
コンタクトレンズを取り、アカネ嬢に渡す。
アカネ嬢は不思議な箱を持ち出し、コンタクトレンズを中に入れた。背面がプロジェクターになっているようで、店の白い壁に映像が映し出される。
天照高校二年女子生徒の着替えシーンである。どうやら、体育の授業前を映し出したもののようだ。知り合いの下着姿がアップで映し出される。多角的なアングルで決定的な瞬間を逃さない……って、ちょっと待て！
「何だ、なんだ、なんなのだこれはっ！」思わず声が裏返ってしまう。
「おやおやー？　イトーくんも男の子だねー」わざとらしく批難するアカネ嬢。
もちろん私には、まったく心当たりがない。いったい、こんな映像、誰が何時……ふと、気づく。映像の日付がリガンの引き渡し以前のものになっている。
「くそう！　計ったな！」
「あはは、ばれたかー」
「ばれたかではない！　さっさと消去しろ！」
「あ、でもでも、これ、見たよね」アカネ嬢は、映像を指さした。ちょうど、ある女子生徒が下着の位置を直しているシーンであり、私はすぐさま目を背けた。
「は？　何を言って――」

「生・着替え、見たよね」アカネ嬢は『なま』という言葉を強調した。
「だからどうしたというのだ！」
「いとーくんのえっちぃ」
「――ふざけるなっ！」
「かお、赤くなってるよ」
私は、閉口した。この私が、顔を赤らめるだと……？
恥ずかしい気持ちを隠すように、アカネ嬢が差し出したお茶を飲んだ。ほんのりと甘い香りが広がった。
「ねえ、共犯って知ってる？」
「知らんっ！」私は無実だっ！
「う・し・ろ」
振り向くと、明らかに防犯カメラにしか見えない機械が、天井に取り付けてあった。もちろんレンズは、こちらを向いている。
「はい、カットー。いとーくんの顔がばっちり映ったところで、クランクあっぷ！」
「だから、何だというのだ！　私にやましいところなど何も無い！」
「イトーくん、編集の魔術をなめてはいけません」アカネ嬢は人差し指をちっちっと横に振った。
「貴様捏造する気だなどう言うつもりだやっぱり私に恨みがあるのかこのやろう何が目的だっ！」私は机を叩いた。
「イトーくんイトーくん、落ち着いて」
「これが落ち着いていられるかっ！　帰る！　私は帰るぞ！」
アカネ嬢は私の話を聞いてか聞かずか、一人で勝手にさっさと話を進める。
「いいのかな？　帰っちゃって」
扉へと向きかけた足が、止まる。この人は知っている。私が、この人に頼らざるを得ないことを。それを計算した上での、先程の無礼。
この人は知っている。私が、この人に逆らえる状況ではないこと

を。

「さて、イトーくん。相談事って何かな？　例の防犯システムの話？　それとも――女の子の悩みかな？」

思えば以前、『前者だ、それ以外にあるか』と答えたことがある。だが、今回は……振り向きざま、私は答える。

「……後者だ」

言った瞬間、アカネ嬢の口端がにやりと上がった。

「さあ、おねえさんに話してみなさいっ！」

アカネ嬢の勢いに押され、私は隙間漂流者について話した。洗いざらいだ。

後から気づいたのだが、アカネ嬢の差し出したお茶の中には本物の『自白剤』が入っていたように思う。

「むーん、なるほどね。イトーくんはその子が気になるんだ……惚れたな」

アカネ嬢はいやらしい目つきで私をじろじろと見てくる。

「何処をどうしたらそういう話になるのだ！　私は客観的に語ったつもりだ！　それ以上のやましい推測は止めて貰おうかっ！」私は吠えた。真っ赤になって吠えるエルレインの気持ちが、少しだけわかった気がした。

「あははっ、ホントにイトーくんは面白い反応をするようになったね」

「なっ……！」私が……おもしろいだと……？

「ここに来たばかりのイトーくんって、感情が薄くてロボットみたいだったじゃない？　今はホントに表情豊かになって……。イトーくん、あなた――変わったわ」

アカネ嬢は、どこかうれしそうに微笑んだ。

「ば、バカ言え、私が変わったなどと……。私はいつも通り、品行方正な伊統会長だ！」

「誰の……せいかしら？」アカネ嬢は意味深な物言いで微笑んだ。

そう言われた瞬間、紅葉したイチョウの葉の様な金髪が、脳裏に

浮かんだ。
「別に、誰のせいでもないっ……」
アカネ嬢は私の顔を穴があくほど、じーっと見つめた。私は、その無遠慮な視線にしばらく耐えなければならなかった。
「まあ、いいわ。本題に入りましょう」
そう言って、アカネ嬢はテーブルの下から袋を取り出した。
「生身で実現できないのなら、道具を使えばいいんじゃない？」
袋から、見慣れぬ物体を取り出した。
「これはなんだ？」
「ネコ耳よ」
「ネコ……？」
「ネコ耳よ」
「耳……？」
「だから、ネコ耳よ」まさか知らないの？　とでも言うように、アカネ嬢は眉を顰めた。
「いや、それは分かったが、これを使ってどうしろと言うのだ」
「決まってるじゃない。被せるのよ、こうやって。――どう、似合う？」
アカネ嬢は『ネコ耳』なる奇っ怪な耳を被った。
「帰る」私は立ち上がった。
「まって、ちょっとまって、一人にしないで！　これ付けたまま一人になったらあたし変態じゃない？」アカネ嬢も立ち上がり、急激に慌てだした。この人は何がしたいのだ？
「自覚しているならやるな。今でも十分変態だ」
「何よ、どっかの誰かさんみたいに少しは顔を赤らめるとかしてみなさいよ。イトーくんはやっぱりこれだからかわいげのない……」
アカネ嬢は背を向け、テーブルの隅に座り込んでぶつぶつ言っている。ネコ耳を付けて。
「そこ、座り込んでぶつぶつ言っていじけてないで、さっさとテーブルにつけ」

私はしかたなく、テーブルに戻る。
「はいはいー。では本題」アカネ嬢は、今まで落ち込んでいたのが嘘のように、にこにことしてテーブルに戻った。ネコ耳を付けたままで。
こいつ、さっきのは絶対に演技に違いない。
「あははっ、ご名答」
「人の心を読むなっ！」
「あら、イトーくんはできないの？　まだまだね」アカネ嬢は優越感を隠さない。
「勝ち誇るな。なんかむかつく」ついに白状しやがったなこいつ。
「あら、イトーくんでもむかつくなんて言葉使うんだ。意外ね」
「ああ、もうっ！」なんなんだこの女はっ！
「あははっ！　とうとう怒った。いや、イトーくんも激情すんのねー」
「はあっ？　私だって怒る時は怒る！」
「――あなた、やっぱり変わったわ」
アカネ嬢は、急に真面目な表情に変わった。
「な、なにを――」
「何かいいことでもあった？」
アカネ嬢は、ふわりと笑った。今までに見たことのない、穏やかで、どこか年上の魅力を感じさせる艶美な笑顔であった。
「な、何も――」
「――ところで、そこにへばりついている金髪ちゃんは誰かしら？」
アカネ嬢の視線が、私から、私の背後に移る。
私は、背筋に寒気を感じた。恐る恐る、後ろを振り向く。
店のガラスの向こう、金髪ばいんばいんが、こちらの様子を覗うようにへばりついている。
マナであった。眉をつり上げ、不思議な瞳は私を懐疑的に見つめている。
本人は精一杯こわい顔をしているのだろうが、間抜けにしか見え

ない。
　あの顔からなら、私にも人の心が読み取れる。
「人の気も知らないで勝手においしそうなお茶して、おまけに『艶やかな赤毛の素敵な超絶美人』と楽しく会話してるなんて、わたしというものがありながらむきー」
「……アカネ嬢、人の心を読むまではともかく、勝手に人の心を捏造するのはやめてもらおうか」
「あれ、違うの？」
「おおむね合っているとは思う。その……美人の件より前は」
「えーっ、美人も含めなさいよう……ま、いいわ」アカネ嬢は含み笑いをして、マナに向かって手招きをした。すると、マナが入ってきた。
「――かいちょーさんっ！　どう言うつもりですかっ！」マナは怒っている。何故かはわからんが怒っている。
「待て！　入ってくるな！」ここは危険だ！　悪魔のすみかだぞ！
「何ですかっ！　エルちゃんが落ち込んでる時に、かいちょーさんはきれーなお姉さんと楽しくおしゃべりですかっ！」マナの視線は、テーブルの上のお茶と、お茶菓子に向いている。こいつの思考が手に取るようにわかる。
　――わたしに内緒で、おいしいもの食べてるっ！
　しかし、『きれーなお姉さん』だと？　マナはこの赤毛ポニテ悪魔のことを覚えていないのか？
「人は恐怖の限界値を超えると、その記憶を封印するものよ。イトーくん」
「あなたは私の心を読むな！　あとさらりと恐ろしいことを言うな！」
　アカネ嬢は私に向かって舌を出した。この女、完全に私をバカにしている。
「いらっしゃい。おいしいお茶とお菓子はいかが？」アカネ嬢はマナに向き直った。

「いただきますっ！」マナの表情は一転、にっこり笑顔になった。
何という単純な奴、意地汚い奴か。私はそんな子に育てた覚えはありません！
が、よく見ると、その体は小刻みに震えていた。頭では覚えていなくとも、体は覚えているのだろうか。何と恐ろしいことか。
「はじめまして、伊統マナです」マナはぺこりとおじぎする。
「あらーようじょようじょ」アカネ嬢は、マナの頭をなでなでした。
「へ？」マナは小首を傾げた。
「あははっ、挨拶よ。気にしないで」
「はいっ！」マナはげんきいっぱい！　といった感じで答えた。
アカネ嬢は、私にすっと向き直る。
「よくよく見ると……伊統くん、なかなかの趣味をお持ちね」目つきが何処かいやらしい。
「何を勘違いしているのだアカネ嬢」
「あははっ、さあ、イトーくんの隣へどうぞ」アカネ嬢はお茶を入れ替えようとするのか、後ろを向いた。そして、マナが椅子に座った瞬間――
「――ばあっ！」アカネ嬢が振り向いた。
「――ひゃあああああああああああああああっ！」マナは椅子ごと後ろに倒れた。
アカネ嬢は、世にも恐ろしい地獄絵図のようなお面を被っていた。
「マナっ！　大丈夫か、頭打ったのか？　おい、しっかりしろ！
……アカネ嬢っ！　貴様どう言うつもりだあああっ！」
「あははっ、『貴様』でたー。その射貫くような視線ぞくぞくしちゃうっ！　少し心地良いかも」アカネ嬢はお面をずらし、笑顔を見せた。
「どう言うつもりだと聞いているっ！」
「いやー小さな子を見ると、つい」アカネ嬢はてへっと舌を出した。
「つい、で許されるかあっ！」かわいい子ぶったら全てが許されると思ったら大間違いだぞ！

「でも、イトーくん、どうしてそんなに必死になるの？　冷静なイトーくんは何処に行ったのかなー？」

そう言われて、私は自分が冷静さを失っていたことに初めて気づいた。

「あははっ、イトーくんが変わったのは、その金髪ばいんばいんちゃんのおかげねっ！」

私は、否定できなかった。それよりも昏倒したマナを起こすのが先決だと思ったからだ。茶葉の香りがお湯に移るタイミングで、マナは眼を覚ました。

「マナ、大丈夫か？」

「あれ、かいちょーさん？　おはようございます」マナは眠そうに小さな手の甲で目を擦る。

何度目のやりとりだろうか。彼女に『おはよう』と言われるのは。

「――おはよう。マナちゃん」赤毛ポニテ悪魔の声が、背後から響いた。

マナの顔からさっと血の気が引き、ぷるぷる震えだした。きっと、今のショックで色々なことを思い出したのだろう。

「あら、すっかり嫌われちゃったみたいじゃない？」

「自業自得だろうがっ！」

マナは私の背後に隠れ、怯えている。震えが背中を通して伝わる。

「貴様、我がむす……いや、我が校の生徒をこのように怯えさせた罪、必ずや償わせてやるぞ！」

「あれ、おっかしーなー。やってる事はイトーくんのとそれほど変わらないと思うけど。あ、あと、無理しなくていいよ。娘でいいよ。わかってるから」

そうであった。あなたは全てをお見通しであったな！

「さて、今度こそ本題」

この人が本題と言って、本題になったためしがない。いつも脱線するのだ。

「このネコ耳についてです」

やはり、まだ本題には入れなかったか！
「風が吹けば、桶屋が儲かる――ってね」
アカネ嬢はぱちんと片目を閉じた。膝を曲げて、マナと目線を同じにする。
「ごめんね。ちょっと驚かせちゃったね。これ、お詫びのしるし」
アカネ嬢はアメを差し出した。いくらマナでも、この程度で懐柔される訳があるまい。というより、完全に子供向けの対応である。
マナは恐る恐る、手を伸ばしてアメを取った。その表情は、警戒を解いていない。
「あちゃー、ホントに怖がらせちゃったかー」
アカネ嬢は苦笑いして、背後から何かを取り出した。そして、それを頭に被った。
「ほーらにゃんにゃん♪　こわくないよー♪」アカネ嬢が頭に付けたのは、先ほどのネコの耳であった。
「アカネ嬢、いくら何でもそれは……」「わあっ」
響く歓喜の声。見ると、マナが目をきらきらと輝かせていた。……嘘だ。
「マナちゃんも、ほーれネコ耳」アカネ嬢は、マナにもネコの耳を被せた。
「わあいっ。にゃん、にゃんっ♪」マナは楽しそうにネコの真似をした。
「あははっ。にゃん、にゃんっ♪」アカネ嬢も真似をした。
「にゃん、にゃんっ♪」
いい年した女子二人のにゃんにゃんごっこを眺めている。私の内心は何とも言えぬ複雑な心情になった。ああ、恥ずかしい。恥ずかしいのに、何だろう、この気持ちは。
「イトーくんも、ほおれ！」調子に乗ったアカネ嬢は、私の頭にもネコ耳を被せた……って、ふざけるなあっ！
「私はこのような破廉恥な耳は被らん。第一こんなもの、私のイメージに合わないではないかっ！」私は急いでネコ耳を取ろうとする

が、

……とれ、ない、だと？

破廉恥な耳を取ろうと奮闘する私を見て、アカネ嬢が邪な笑みを浮かべた。

背筋が凍る。かつて感じたことが無い、途轍もない嫌な予感が、私の胸中に生じる。

「アカネ嬢、外せ」

「い・や」

「嫌じゃ無いだろうが私に一生このまま醜態をさらして生きろと言うのかこの悪魔！」

「イトーくんもにゃんにゃんやりましょう？」アカネ嬢は猫の手をして招くような動作をした。そのしぐさに一々色気を感じてしまい、私は名状しがたい焦燥感に駆られた。

「そーです！　かいちょーさんもにゃんにゃんしましょうよ！」マナは輝くような笑顔である。先程までの恐怖はどうした！

「マナ！　貴様は何をしに来たのだ！　私達がこうしている間にも、エルレインは落ち込んでいると言ったのはお前ではないかっ！」

「はっ！　そーでした……ごめんなさい」マナの表情が、みるみる暗くなってゆく。

「こらこら、マナちゃんをいぢめないの！」アカネ嬢がマナに抱きつき、さりげなくばいんばいんをまさぐる。「おおっ……柔わっ」

「アカネ嬢？　貴様、警察に突き出してやろうか？」

「死なばもろともって言葉、知ってる？」

「前言は撤回してやる。この耳を外せ」くそう、この外道め！

「あはは、それ無理」アカネ嬢は大笑いした。

「貴様……」私は拳に力が入る。

こうしてふざけている間にも、エルレインは苦しんでいるのだ。膝を抱えて落ち込む妹思いの少女の姿が、思い起こされる。

何が、相談に乗るだ。相談に乗るどころか、時間を無駄にしているだけではないか。ふざけるな。

「あははっ、だいじょぶだいじょぶ。アタシが意味もなくこんなことすると思う？」
「……どういう意味だ」
「風が吹けば、桶屋が儲かるのよ」にこりとして、アカネ嬢は言った。「だから、イトーくんは今、にゃんにゃんするべきなの。にゃんにゃんしなくちゃ、そのネコ耳は取れないわ。ネコ耳生徒会長……それも素敵だけどね」
「お、おい、いま、何と？　『にゃんにゃんしなくちゃ』だと？」
「――さあ、マナちゃんもご一緒に！　これはイトーくんの為でもあり、あなたたちが助けたい人の為でもあるのよ！」
「そうなんですか！　わたし、がんばりますっ！」
「おい、ちょっと待て――」
にゃんにゃんっ♪　二人が迫ってくる。あの恥ずかしいしぐさを、私に強要してくる。ふざけるな。助けてくれ。ふざけるな。嫌だ、絶対に嫌だ。それだけは――
「風が吹けば、桶屋が儲かる――ってね」
アカネ嬢はぱちんと片目を閉じた。

私は命からがら屋敷へと戻った。
私が右手にぶら下げている袋の中には、あの『ネコ耳バンド』なる精神的凶器が入っている。私の頭には残っていない。どうして外れたのかは、永遠の秘密だ。
帰路の途中でマナが語った話によると、エルレインが寝てしまったので、長谷川に世話をまかせて私を探しに来たとのこと。
私が帰った時には、エルレインは既に目覚めていた。
「……おかえり」エルレインはやはり、元気がなかった。
――生身で実現不可能なら、道具を使えばいい、か。
私は、エルレインの頭にネコ耳バンドを被せた。
「わっ、な、なんだこれ！　……外れないっ？」
「エルレイン」両肩に手をかけ真っ直ぐ眼を見て言う。「お前は今

日から猫だ」
「は？」エルレインの口が、ぽかんと開いた。
「猫だ。お前は猫だ。今日から猫になるのだ！　な！」
エルレインの眉が、ぴくりと動いた。体全体がぷるぷると震えだし、額には青筋のようなものが――
「――ざけんなああっ！」
顎に激痛が奔り、気がつくと私は天井を仰いで宙に舞っていた。
……誤解だ。きっとエルレインは何か誤解をしているに違いない！
「誰がお前の変態プレイにつきあうか！」エルレインは顔を真っ赤にして怒鳴り上げた。
「それは違うぞエルレイン！　これを見ろ！」
「にゃにゃーん」私の背から飛び出して来たのは、黄色いネコ耳を付けたマナ。
マナは手をグーにして、手の甲でネコ耳の裏をかく。楽しそうに四肢を駆動して、躍動感たっぷりに走り回る。
ごろんとして、仰向けになり、こちらを見つめる。手は猫の手を崩さない。なんという破壊力か。
丸まって、気持ちよさそうに目をつむったかと思うと、次の瞬間には私の足下へ来て、私の足で「にゃにゃにゃにゃ」と爪研ぎの真似をする。
私がのど元をこちょこちょとくすぐってやると、気持ちよさそうな表情でごろごろと鳴く。
かと思いきや、また走り出す。まさに気まぐれな子猫である。
マナは輝くような笑顔で愛くるしい子猫を演じている。というか心底楽しんでいる。
エルレインは彫像のように凍り付いている。
「どうだ、エルレイン、すごすぎて声も出ないか」
「お、お……」
「ん？　どうした？」
エルレインはマナの肩をがしっと掴んだ。

「――お前は人間のプライドすら無くしてしまったのかっ！」
「にゃっ！？　（なんで！？）」
「何で猫の真似なんてしてるんだよ！　バカじゃないのか！」
「にゃんにゃん♪　（結構楽しいですよ♪）」マナがエルレインに微笑みかける。
　エルレインの頬が朱に染まった。あまりの愛くるしさに見とれてしまったのだろう。
　しかし上手だ。マナにこれほどの特技があったとは。この強み、何かに活かせないだろうか。私は頭の中のそろばんを弾き、経済効果を算出――。
「――だ、騙されないぞ！　大体、なんでマナがこんなことを！」
　いい質問だ。絶妙のタイミングを見計らい、私は彼女の疑問に答える。
「マナを見ろ。羞恥心の欠片もないだろう。お前には羞恥心があり過ぎるのだ。奥手で恥ずかしがり屋の女性はすばらしいが、控えめで存在感に欠けてしまう。恥ずかしがってないで、自分の心を開けばきっと存在感も増すに違いない！」私は拳を握りしめた。
「にゃおーん！　（うんうん、そうだそうだ！）」
「……どういう理屈だよ」エルレインは気だるそうに肩を落とした。
「まあ、ものは試しだ。やってみろ」
「やだ！　なんでアタシがこんな」エルレインはネコ耳を外そうとするが「取れないっ！？　――ってなんだその極悪人のような笑みはっ！」
　おっと、感情が顔に出ていたようだ。
「それは羞恥心を検知すると、取れなくなるネコ耳バンドだ」これを外すのに、私がどれだけ苦労したか。どうやって外したのかは、やはり永遠の秘密だ。
「んな馬鹿げたもんがあってたまるかっ！　この、このっ――痛っ！」
「無理に外そうとすると頭皮がもげるぞ」

「何でこんなことするんだこの外道っ！」エルレインは既に半泣きである。
「私だって辛い！」あんな真似、二度とやりたくはない。「だが、やるしかないのだ！」やらねば一生、ネコ耳が取れない。私だって、あの時は半泣きであった。どうやって外したかは以下略である！
「お前……いったい……何を？」
「エルレインっ！」私はエルレインの肩を強く掴んだ。
エルレインはしばらくおろおろしていたが、やがて目を伏せ、
「……ちょっと……待って……」恥ずかしそうに、そう言った。
しばらくして、エルレインは手を、ゆっくりと丸くした。
「にゃ、にゃーん……」エルレインは顔を赤らめて、呟くように言った。
私はふと、現実に戻る。
「なぜ、私はこんな馬鹿げたことをやっているのだ？」
「――あんたが言い出したんだろうがあっ！」エルレインが真っ赤のまま吠えた。
どうやら、無意識のうちに思ったことを口に出していたようだ。
だが、これこそが私の本心のはずだ。なぜ、こんな馬鹿げた展開になっている？
私は冷徹で、誰よりも現実主義であったはずだ。その私がなぜ、こんな事を？
そもそも、私はこの方策に期待していなかったはずだ。もしエルレインのいうように『法則』が存在するのなら、それは絶対普遍の論理であり、そのような論理に打ち勝つ論理など、存在するはずがない。
だからこそ私はダメ元で、アカネ嬢の提唱する、論理に打ち勝つ『超・論理』にかけてみることにしたのだ。馬鹿げてはいるが、理屈は通っている。
「まあ、続けないとそのネコ耳は取れん。がんばれ。でないと明日はそのネコ耳を付けて登校だ」

「ちくしょう！」エルレインは半泣きで悪態をついた。
そう、理屈は通っているのだ。理屈は。しかしなんだろうか、この違和感は。
まるで、自分が自分でないような、違和感を感じる。
そういえばアカネ嬢は、私が変わったと言っていた。
なぜ？　気がつくと、私はマナを見ていた。
マナはエルレインに手取り足取り、猫になりきる奥義を伝授しているようだ。
私の視線に気づいたのか、マナは私を見ると、
「にゃんにゃん♪」と猫の手を頬に持って行き、頭を少しかしげて微笑んだ。
不覚にも、見とれてしまった。ありえない。この私が。
私は頭を振って今までの考えを全てかき消した。
視線を戻すと、エルレインがいない。目の前にはマナと黒猫がいるのみである。
やつめ、逃げたか。
「エルレイン！　どこに行った！　逃げても無駄だぞ！　隠れてないで出てこい！」
「――アタシはここだあっ！」
瞬間――黒猫がエルレインに変わった。私の顎に再び痛みが生じ、再び宙を舞った。
「これは……どういうことだ……？」
「どういうことも何もあるかっ！　どうせこれは嫌がらせだろう！　アタシが敵だから！　殺すならさっさと殺せよ！　こんなはずかしめ……死んだ方がましだ！」
目の前には涙するエルレイン……ネコ耳を付けて。
「にゃにゃにゃん！　（エルちゃん！）」
一瞬、エルレインを認識できなくなった。いや、本当に認識できなくなったのか？　あの時、エルレインの変わりにいたのは――。
「何やってるの？　猫プレイ？」

声の方を向くと、友人が微笑んでいた。
まさか、『法則』に打ち勝つための駄目もと訓練などと、説明できるはずもない。
「やあ友人、まあそんなところだ」
「――違うだろ！」エルレインは顔を真っ赤にして吠えた。
「なるほどね」
エルレインの最近冴えはじめた突っ込みが、当然のごとく友人に無視された。
エルレインは床に視線を落とす。
きっと友人には、エルレインが激情し、泣いていることすら認識できないのだろう。
「マナちゃん可愛いね」友人はかがんで、マナの頭を撫でる。
「にゃ……にゃぁん（あ、ありがとう……ございます）」
マナはエルレインを気遣ってか、微妙な表情で答えた。
私はその間も、先程のことを考えていた。先程、エルレインは消えた。代わりに私が認識したのは……。
私は、あることに気がついた。
「エルレイン、友人に猫の真似をして近づけ」
「……ふざけるなっ！」エルレインは鬼のような形相で私の喉を掴み、締め上げる。
非力な握力だった。この程度の力では、私を殺すことはできない。
「エルレイン！」私はエルレインの瞳を真っ直ぐに見た。「――頼む」
静かに言った。エルレインの眼がはっと見開かれた。
「……あんたが、アタシに、お願い……？」
「頼む」私はもう一度言った。
「お前……」エルレインの瞳が揺らいでいる。あと、もう一歩か。
「これで駄目なら、私を殺してもかまわない」
エルレインは俯き、ピタリと止まった。
「……ふざけるな」

「なに？」
「――ふざけんなあああああっ！」エルレインは叫び、走り去ってしまった。
「にゃ！　にゃにゃにゃんっ！　（あっ！　エルちゃんっ！）」
何がいけなかったのだろうか。いや、色々といけなかった気がするが。
「にゃにゃにゃ！　にゃにゃにゃん！　にゃんにゃにゃんっ！」
既に何を言っているのかわからないが、どうやら『エルちゃんを追わないと！』と言いたいらしい。
急いで追いかけたが、エルレインは既に外に飛び出した後であった。
外は雨が降っている。エルレインは傘も持たずにネコ耳のまま飛び出したに違いない。
私達は町中を捜したが、ネコ耳を付けた黒髪の少女を見た者がいるはずもなく、捜索は徒労に終わった。
既に帰っているかも知れないと思い、ひとまず屋敷に引き上げたが、エルレインは帰っていなかった。
しばらくそのまま待ってみても、エルレインは帰ってこなかった。
「帰ってきませんよ」マナは頬を膨らませて怒っている。
「うーむ……」今度ばかりは、私も弁解のしようがないように思える。
これも全ては、あの赤毛ポニテ悪魔の口車に乗ってしまった私の責任であろうか。
エルレインは私達以外の人間には認識できない。私達から離れてしまえば、彼女は真の孤独に晒されてしまう。それは、致命的な事態を引き起こす。私は想像する。人混みの中、誰にも避けてもらえずぶつかり、倒れ、大勢の人々に蹴られ、踏まれる少女を。
私はいても立ってもいられず、
「もう一度、探しに――」
その時、屋敷の玄関辺りから轟音が響いた。

「な、何だ！　敵襲か！」ついに『例の組織』が動き出したのかっ！
ちなみに、『例の組織』というのは――。
「会長はいるか？」この声、聞き覚えがある。
目つきの悪い金髪、鮮血のように赤いプロテクターグローブ。
「本郷光太郎ではないか」
「お、ここにいたか。会長、あんたの出番だ」本郷はずかずかと部屋に入ってくる。
土足であった。
「ご安心ください。玄関をまたぐ瞬間、わたくしが汚れを拭き取っておきましたから」
いつの間にか傍らにいたのは、にこにこ執事の長谷川。
流石ではあるが、そういう問題ではないと思う。
「ほれ、喋る黒猫だ」本郷はひょいと、黒い何かを持ち上げた。
それは、私と目が合うなり、頬を染めた。
「にゃ、にゃーん……」あきらかに、エルレインであった。
本郷はそんなエルレインに語りかける。
「今さら普通の猫の振りをしても遅いぞ。さっきみたいに喋ってみろ。大丈夫だ。この人は大概の超常現象を受け入れて、力になってくれるから、な」
本郷はエルレインのことを本当の黒猫だと思っているようだ。不良少年と迷子猫、何とも王道な組み合わせである。
「エルちゃんっ！」マナがエルレインの姿を見るなり駆けつけ、抱きついた。「もうっ！　心配したんですよっ！　何処に行ってたんですかっ！」
「にゃ、にゃぁん……」エルレインは申し訳なさそうに鳴いた。
「……なんだ、知り合いだったのか？」本郷は目つきの悪い目を大きく開いた。
「まあ、な」説明するのには少々複雑すぎる。
「それは良かった。普通の猫なら愛美の範疇だろうが、こいつは人間の言葉を喋る猫だからな。こういう超常現象はあんたの範疇だろ」

それは大いなる間違いである。私は超常現象が大っ嫌いであり、出来れば関わりたくないと思っている。だからこそ、超常現象に出会った時には積極的に関わり、常識を教え込んで強制してやることを繰り返していたら、いつの間にかこのざまである。

「まあ、とりあえずはこちらで預かるとしよう」

「ああ、助かる。じゃあ元気でな……黒猫」

「あ、あの……」

エルレインが突然、立ち上がった。

「その……助けてくれて……ありがと」

本郷は驚いたように、目を見開いた。今のエルレインが、彼の目にどのように見えているのかは不明である。ただ、本郷はエルレインに近づき、

エルレインの頭をがしがしと撫で、去っていった。

「あ、あと、屋敷の玄関壊しちまったから。修理は俺の親に頼むといい」

本郷の親は例のリフォーム業者である。ちゃっかり自分の家の仕事を増やし、本郷は帰っていった。無論、出費は私のポケットマネーからである。

案外したたかだな、あのえせ不良め。

そういえば、先月の和洋折衷戦争は長谷川の勝利であった。我が屋敷の中心、憩いの和室まであと一部屋。つまりは王手である。何とかしなければならない。

とはいえ、先ずは目の前の課題である。

「やあ。出戻り」私は出来るだけ爽やかに声をかけた。何故かエルレインは沈んだ。

聞けば、エルレインは屋敷を飛び出したあと、真の孤独を経験したらしい。

「あんなの……嫌だ……二度と、経験したくない……」

エルレインの表情は、みるみる青ざめていった。

長谷川の淹れたホットチョコレートをすすりながら、エルレインは語った。

何処に行っても、誰も自分を見向きもしない。辺りは薄暗い闇に包まれてゆく。

エルレインはわけのわからぬまま走りさまよい、誰かにぶつかり、道路に倒れ込んでしまったらしい。目の前には、大型のトラックが迫っていた。

エルレインの全身を凍り付くような死の恐怖が襲った。

エルレインは咄嗟に道路の隅へと避難した。トラックは、すぐ側を通り過ぎた。もちろん、自分に気づいていない。

死を回避し、安堵したのもつかの間、今度はさらなる恐怖がエルレインを襲った。

自分が死にかけたのに、こんなにも苦労しているのに、誰も、何も自分を見ていない。

あそこで死んでいたとしても、何も変わらなかったんだ。

自分が死のうが、生きようが、何も、誰も、変わらない。

だとしたら、なんで、生きているのか。生きていると、言えるのか？

ここにいる意味はあるのか？　誰も答えてはくれない。当たり前だ。自分は、本当に一人になってしまったのだから。一人？　一人はこわい。誰も助けてくれない。死んでも、誰も悲しんでくれない。

エルレインは、その場でうずくまり、そのまま動けなくなってしまった。

体の震えが止まらなくなってしまったのだ。

エンジン音が聞こえた。見ると、光が自分に向かって迫ってくる。

ああ、あの光に飛び込むのも良いかもしれないな。エルレインの思考は正常ではなくなっていた。体は自然に動き、光に吸い込まれるように飛び出した。すると――

「――危ないっ！」

声が響き、自分の首根っこが捕まれた。エンジン音が、自分の目

の前を通り過ぎた。
通り過ぎる瞬間、エルレインはその正体を見た。
それは、バイクであった。あのまま飛び出したら、自分はひかれて死んでいた。
「あの人が助けてくれたんだ」
エルレインを助けたのは、先程の男。本郷光太郎であった。
道路から、エルレインを抱き上げてくれたらしい。本郷は慌てふためき喋る自分を見て、大層驚いたようだった。そして、呟いた。
「猫が、喋った……？」
その反応に、エルレインも驚いてしまった。
「な、何というか、久しぶりの他人とのふれあいに、その……」
私達以外の人間に話しかけられ、戸惑ってしまったそうだ。
だから、エルレインは黒猫の振りをすることにした。
「それが、『にゃ、にゃーん』か」
エルレインの頬が朱に染まった。
だがしかし、これは大いなる収穫だ。私はエルレインの話を聞いて確信した。
「おや、見つかったみたいだね」友人であった。丁度いいところへ来てくれた。
「友人よ、提案がある」
「提案？　それはお願いでも、相談でも無いんだよね」
「ああ」
「なら、いいよ」
私達は急遽、学園へと向かった。

第十三話　隙間漂流者の才能

「おお、いとーか！　ごきげんようじゃな！」
フリフリ巻き毛、長髪の幼女が、仁王立ちで勝ち気な挨拶をした。
彼女はこれでも高校三年生である。この私よりも年上である。未だに信じられないが。
「ご無沙汰しております、お子様会長」
「お子様って言うなー！」幼女は、ぷんすか怒った。
マナも顔負けの、子供らしい怒りようである。
「わははは。そういう所がお子様なのです」私はお子様会長の頭を押さえつける。
すると、お子様会長の短い手足では、抵抗出来ないのだ。すごい！
「年上に対して敬うと言うことをしらんのか！」お子様会長は手足をじたばたさせる。
「何をおっしゃる。『お子様』とわざわざ様付けで敬っているでは無いですか。大多数の生徒は『こども会長』と呼ぶなか、ここまで敬っているのは私ぐらいですよ」
「そ、そうなのか！」
「ええ。嘘です」私はにこりと微笑んだ。
「むきーっ！　帰れー！　無礼者かえれー！」お子様会長はぶんぶん腕を振り回す。
「おっと、そうはいきません。本日はお子様会長にお願いがあって来たのですから」
「うるさいうるさいうるさいーっ！　冷やかしなら帰れー！　かえれー！」
彼女こそ、前期生徒会にて生徒会長を務めた、伝説の『こども会長』もしくは『お子様会長』である。
何が伝説かと言えば、私語を慎まない愚民、もとい生徒共に対し『聞いてくれなきゃ、泣くぞ！』の一言で黙らせた経緯を持つから

らしい。どうして生徒会長になれたのかは不明であるが、その武器は、部費予算割り当ての公開討論の時に効果を発揮している。

「部費を上げてくれなきゃ泣くぞ！」と幼女っぽい容姿と泣き顔でアピールし、養生部を味方に付けて戦うその姿はまさにジャンヌダルク顔負けの――我が儘を言うただの子供であった。計算かと思いきや、本人はいたって真面目に泣くのだから手に負えない。むしろ最近では名物になっている風潮がある。

彼女は現在、会長職を勇退し、本業である演劇部の部長を務めている。

私は彼女と友人が所属する演劇部へ、エルレインを半ば強制連行したのだ。

「ほら、アメ上げますから、機嫌を直してください」

私はすかさずアメを差し出す。棒付きの、ぐるぐるになった特製の奴だ。今時、漫画ぐらいでしかお目にかかれないだろう。

隣でマナがゴクリと喉を鳴らした。ちらりと見れば、よだれを垂らしかけ、物欲しそうな顔でアメを見ていた。

「こ、こんなアメなんぞで、わらわの機嫌がなおるなどと……」

体は正直である。お子様会長の右腕はアメに向かって伸びていた。

「このうらぎりものー！」お子様会長は、自分の右腕に向かって叫んだ。

「で、わらわに何用か？　何でも言え。うーん、美味じゃのう」

大きなアメをしゃぶり、お子様会長はすっかりご機嫌である。口元はべたべたである。

ちなみに私はこの方法で彼女を権力の座から引きずり下ろした。もちろん無血革命である。

「それにしても、少し会わないうちに随分偉そうな口調になりましたね。正直、鼻につきます。私より偉そうなので至極不愉快です」

「……お前が言うなよ」エルレインの突っ込みが耳に入ってきた。

「ん？　次の役は姫じゃからの！　えらそうじゃ！　えっへん！」

前会長であるお子様会長は、役に没頭するあまり一人称や性格を変えてしまう。生徒会長になった理由も、生徒会長役の演技の幅を深めるためだったという噂があるくらいだ。思えば去年の演劇で、お子様会長は生徒会長役であった。

「それにしても友人よ、ちょっとキャラ付けが過ぎるのではないか？」

「でもねー、昨今はこれくらい過剰にやらないとキャラ立てしないんだよ」

そういうものなのだろうか？　私にはよく分からないが、一つだけ確実に言えることがある。

お子様会長が大人になってから昔を思い出した時、きっと恥ずかしくて死にたくなるだろう。

「これでも控えめなんだよ？　部長はただでさえ変人なんだから」

「変人って言うなー！　……もう、ゆーじんはかわいげのない後輩じゃ」ぶつぶつ良いながら、お子様会長はアメをしゃぶる。

「……いいなー」マナは指をくわえ、物欲しそうにアメを眺めている。

「あ、お前は大食い金髪ばいんばいん」お子様会長がマナに気づいた。

マナは物欲しそうにアメを眺めている。

「な、なんじゃ、やらんぞ。これはわらわのじゃ」お子様会長はマナからアメを隠した。

マナは悲しそうな顔で、じっとアメを見つめている。お子様会長は、そんなマナの反応を、横目でちらちらと覗う。

「……少しなら、舐めても良いぞ」お子様会長はそっぽを向いて、ぐいとアメを差し出した。アメはお子様会長の唾液でべとべとである。個人的にはあんなもの、頼まれても願い下げである。しかしマナは、

「わあっ、ありがとうございますっ！」うれしそうに手に取り、舐め始めた。

「……うまいか？」
「はいっ、おいしいですっ！」
「そうじゃろ！　そうじゃろ！」お子様会長の表情がぱっと明るくなった。
お子様会長も少しは成長したと言うことか。偉いぞお姉ちゃん。
子供同士、すぐに打ち解けたようでなにより……。って、待て。こいつら、高校生ではないのか。
「全部舐めるなよ。わらわのじゃからな」
「はいっ！」
二人はアメを交互に舐め合った。そして、お子様会長がアメをしゃぶる番になったその時、
「――あら、会長ちゃん、駄目じゃないですか」
背後から、おっとりとした雰囲気の、女性の声が響いた。その瞬間、お子様会長の体が凍り付いたように、ピタリと止まった。そして、震え始めた。
「お、おお、ふくちゃん……これは、これには深いわけが！」
「言い訳は聞きません。知らない人にお菓子を貰ったら駄目だって、昔から言ってるじゃないですか」
そう言って、つかつかとお子様会長に歩み寄ったのは、お子様会長の幼なじみにして前期副会長。私が入る前の生徒会を実質一人で運営していた女子、伊福部先輩であった。
彼女には黒髪の乙女という言葉がふさわしい。華道の家元を親に持つ彼女は、私好みの才色兼備の才女であり、全国模試でもトップ８に入る実力を持つ。いわゆる、男子生徒の憧れの的という存在であるが、本人はそのことに気づいてすらいない。
彼女の視野は常にお子様会長一直線である。何かとお子様会長の世話をしたがり、何時もお子様会長にべったりである。生徒会副会長になったのも、現在演劇部で副長をやっているのも、そもそもこの学校に入学したのも、全ては『お子様会長の世話をするため』という理由らしい。

以前に、進路調査を行なった時の事。
将来何になりたいのかという質問事項に対し、伊福部先輩の書いた答えが、『保母さん』であった。実に彼女らしいと思い、理由をたずねたところ、
「保育園の先生になって、合法的に会長ちゃんのお世話がしたいから」
何かが間違っていた。が、あまりの狂気に、その依存度に、私はそれを正すことが出来なかった。
まあ、時々恐怖を感じることもあるが、基本的には優秀な人である。
「いとーは知らない人では無い。わらわの友達じゃぞ」
「いいえ、敵です」
伊福部先輩は私を露骨に嫌っている。理由は、無血革命を行ない、お子様会長を権力の座から引きずり下ろしたから……ではない。
お子様会長にアメをあげ、いいように取り入った『男』だからというのが、理由らしい。どうも、彼女は何かを勘違いしているような節がある。
故に、私への当てつけのように、彼女は今でもお子様会長のことを『会長ちゃん』と呼ぶ。私に対しては、
「いとーくんから、物を貰っちゃ行けないとあれほど言っているでしょう」
である。私に対しての敵意剥き出しである。
「わーん！　返してー！」
「だーめ！　会長ちゃんは今、虫歯の治療中なんですから」
伊福部先輩はアメを取り上げ、大切そうに透明な袋に入れて密閉、空気を遮断した。あれが今後どう使われるかについては、想像しない方が良いだろう。
「あーめー！　あめ舐めるー！　舐めなきゃ泣くぞー！」お子様会長は地面に寝転がって手足をじたばたさせている。
「はいはい」伊福部先輩は気にする様子もなく、ウェットティッシ

ュを取りだしお子様会長の口元を拭った。依然じたばたするお子様会長を放っておき、私に向き直る。
「いとーくん。会長ちゃんに物をあげないでください。会長ちゃんのおやつはわたしの手作りと決まっているんですっ」
彼女の得意料理は、お子様会長が嫌いなにんじんがたっぷり入った、あまあまキャロットケーキである。いったい何処まで王道を突き進むのか。それに、あれこそ虫歯の元凶であると、私は睨んでいる。
「アメは私からの献上品です。これから頼み事をする時に贈り物をするのは、当然の権利ですよ」
「いとーくんはこれ以上、会長ちゃんと仲良くしないでくださいっ！」
「わかっていますとも。お願いを聞いて頂ければすぐに帰りますから」
「えっ……帰っちゃうのか？」お子様会長が寂しそうな目でこちらを見る。
先程、帰れと連呼したのはそちらではないか。内心を抑え、私は話す。
「今日こちらを訪れたのは、紹介したい演者がいるからです」
そう言った瞬間、お子様会長の耳がぴくりと動き、雰囲気が変わった。
「演者？　生半可な者では、わらわは採用せんぞ」腰に手を当て背筋を伸ばし、眼力を強める。その高圧的な態度、幼女教皇のようであった。
「そちが、入部希望者か？」お子様会長は、マナをさした。
「えっ、わたしですか？　かいちょーさん、そうなんですか？」マナはおろおろしながら訊ねる。
「違います」
「ならば、何処におる。まさか、いとー、お前だというのではないじゃろうな」

「それも、違います」
「なら、何処におるのじゃ！　わらわを愚弄するのもいい加減にせい！」
お子様会長は獅子のような威厳に満ちた声で吠えた。
お子様会長に、彼女は見えていないか。まあ、今は都合が良い。
彼女の才能、証明させて貰おう。
「友人、何か役をくれ。どんな端役でもいい。台詞のある役を」
「会長……？　わかった、なら、この子にするといい」
友人は脚本を差し出し、指で役名を指し示した。
「エルレイン、読め」
「……はあ？」突然脚本を渡され、エルレインはきょとんとした。
「読め。お前の役はこいつだ。こいつの台詞を読め」
「な、何をバカなことを。ネコ耳の次は朗読か？　アタシをバカにしてるのか！」
「いいから」私は促す。
エルレインは、渋々といった感じで読み始めた。
「……かえせー。いもーとをかえ――」
「――なんだ、その棒読みは」友人であった。
言外に、静かな怒りが含まれていた。
「ボクはそんな読み方をされるために物語を書いてるんじゃない」
あの温和な友人が、怒っていた。私は驚いた。いや、それ以上に驚いたのは――友人が、エルレインを認識していることである。
「あ、アタシはそんなつもりじゃ……」エルレインはどぎまぎしている。
エルレインに、友人は詰め寄る。
「いいや、今君は、ボクの物語をバカにした。たかがフィクションだと、そんなもの興味ないと態度が示していた。ボクはこれでも物書きの端くれだ。人間観察は常日頃心掛けてる。君の態度から心情をくみ取るなんて、造作もないことだ」
「そ、それは……」エルレインは視線を下げた。

「ボクは命を賭けて物語を紡いでるんだ。一人一人、心を込めて描いているんだ。誰も欠けてはいけない。一人一人がかけがえのない存在なんだ。君が読んでいるその子だって、妹思いのとっても良い子なんだ。君の読み方は――その子に対する冒涜だ」

「妹……思い……」エルレインの瞳が揺れる。

友人は、エルレインの肩に手を置く。

「お願いだ、その子の気持ちになって。その子がどんなことを考えているか、どんな思いをしているか、想像して読んで欲しい」

「この子の、気持ち……」エルレインは真剣な面持ちで脚本に目を通す。

すっと目をつむり、そして開く。口火を切る。

「――返せ！　私の妹を返せ！」

第一声から凄まじかった。

エルレインのものではない声が、辺りに響き渡る。声質が変わったなどという生やさしいものではない。別人なのだ。

空気が一変するとは、こういうことなのか。

流れるようにエルレインはセリフを読み上げる。いや、違う。心からの思いを紡いでいる。

「その為なら、私の命を差し出してもいい！」

友人の書いた台詞は彼女の中で咀嚼され、増幅し、昇華する。抑えきれなくなった思いが、彼女の口からあふれ出ているのだ。

今まで胸の内に抑えてきた思いが、愛が、声となって発散する。声は波となって空間を伝わり、この場にいる誰もの体に響き、振動させ、胸の奥を震わせる。

震えは激しい温度を伴う。時に熱く、時に冷たく、彼女の熱情と冷厳さが渦を巻き、私達の体内で暴れ回る。

まるでエルレインという存在が消え、物語の登場人物がそこにいるかのような錯覚。いや、彼女は実際にそこにいる。

そこに、いるのだ。

やがて、台詞は終わり、思いは緩やかに収束した。

そこには物語の登場人物はおらず、脚本に視線を落とし、無言で立ち尽くすエルレインがいた。
「――お姉ちゃん！」お子様会長が突然叫んだ。
お子様会長の瞳は、潤んでいた。
「……あ、ごめん。間違えちゃった」お子様会長は子供のように恥じらった。
その後、はっと、目を見開き、
「そんなことより！　なに、今の！　声だけで、この感情……お主、何者じゃ！」
お子様会長は眼をかっと見開き、エルレインに詰め寄る。その眼には嫉妬と羨望が入り交じったような、狂気のような光りが宿っている。
「あ、アタシは……」エルレインは驚いて言葉が出ないのか、口をまごまごさせる。
「廻り姫！　廻り姫がここにいるっ！」
お子様会長は、くるりと私に向き直った。
「いとー！　この子の入部を許可する！　いいや、それ以外の選択肢なんて認めぬ。この子、わらわが貰うぞ！」
興奮に頬を上気するお子様会長に、伊福部先輩が駆け寄る。
「会長ちゃん、だめですっ！　万一その子を入れるとしても、新人がいきなり――主役だなんて！」
「主役だと？」「エルちゃん、すごいですっ！」
「ちょ、ちょっと待ってよ、アタシ、そんな……」
頭を振るエルレイン。すると、友人が口を開いた。
「丁度いいじゃないか、廻り姫の役は、まだ決まっていなかったんだ。この役を演じるにふさわしい『演じ手』がいないって理由で」
「友人くん！　でも、部のみんなにはなんて」伊福部先輩は困惑の表情を浮かべている。
「――わらわが、説得する。こんな才能、埋もれさせておくには惜し過ぎる。この才能を認めない役者など、役者をする資格もないわ

！　逆に追い出してくれるっ！」

「――いっちゃんっ！」伊福部先輩は、お子様会長をそう呼んだ。

すると、お子様会長はふっと物憂げな笑みを浮かべた。何処か、大人びて見えた。

「このわらわが嫉妬して、しきれぬほどの衝撃を感じた。この才能、人知を越えておる。これに体の演技を加えたら、一体どうなってしまうのか想像も付かない」

お子様会長は、エルレインを、きっと見上げた。

「わらわが、お前を主役にしてやる」

お子様会長と、エルレインの視線が、合った。

「え、ちょ、ちょっと、待って」

「早速稽古じゃ、廻り姫！」お子様会長は、エルレインの手を取った。

「ちょ、ちょっと待って！　アタシは演劇をやるとは一言も――」

「――わらわは、廻り姫の妹、白百合じゃ。よろしく頼むぞ、お姉ちゃん！」

「お……お、ねえ、ちゃん……」エルレインの頬が、ぽーっと赤くなった。

「さあ、いくぞ廻り姫！　ごーごー！」

嵐のように、突風のように、お子様会長とエルレインは部屋を出て行った。

黒き嵐が、動き始めた。そんな言葉が、脳裏によぎった。

何故かはわからないが、確かにそう思ったのだ。

「んもうっ！　いっちゃんはああなったら止まらないんですからっ」

伊福部先輩は珍しく頬を膨らまして怒っていた。「いとーくんのせいですよっ！」

「計画通りですよ」

「あなたと話していると、なんだか……ほんっとうにいらいらしますっ」

「ご忠告を一つ」
「……なんですかっ」
「『いっちゃん』とそのまま呼び続けた方が良いのでは？　先程そう呼んだ時、お子様会長は何処か安心しているご様子でした」
「ふぇ？」伊福部先輩は奇妙な声を出し、呆然とした。その後、かあっと赤くなると「余計なお世話ですっ！　あなたの指図は受けませんからっ！」
　くるりと背を向け、教室の扉へと向かう。その足取りは、何処か過剰に力が入っているように見えた。
「会長ちゃんったら、わたしに内緒でおやつを食べて、本当だったら、おしり『ぺんぺん』ものなんですからねっ」そう言い残して、伊福部先輩は教室をあとにした。
「おおそう言えば、忘れていた……」私はマナを見る。
　マナは、何かに気づいたように震え始めた。
「どうやら今、私とお前の脳内はシンクロしているようだな。これが魔法か」
　マナは肩をビクッと跳ねさせた。じわりと瞳を滲ませ、
「――『ぺんぺん』いやあっ！」

「はあっ……はあっ……かいちょーさんっ……んもうっ、だめえっ……」
　マナは、私の体にしな垂れかかる。頬は熱をおび、うす桃色に上気している。
「かいちょーさん、お願い……脱がしてください」
『ぺんぺんの刑』最中での出来事であった。マナの潤んだ瞳は、彼女の我慢がもう限界であることを雄弁に示していた。
　私は彼女の背中のジッパーに手をかけ、一気に引き下ろした。
「はあっ……」マナは天にも昇らんとするような、恍惚とした表情になった。
　私はマナを脱がし、汗ばんだ体を横たえる。

私がマナに差し出すと、マナは両手で掴んで、無我夢中でしゃぶりついた。
「こら、慌てるな。ゆっくり舐めないと――」
「お前ら、なにやってんだ？」エルレインであった。扉を半開きにし、体を半分出して室内を覗いている。
「何って、見ればわかるだろう。『ぺんぺんの刑』執行中だ」
エルレインはマナが脱ぎ捨てた物をみて、そしてマナを見た。
「……着ぐるみ？」
そう、マナが脱ぎ捨てたのは、ペンギンの着ぐるみである。
「ほら、そろそろ魔法少女風衣装もマンネリ化してくる頃だろう。次の衣装は何が良いかと言うので、『ぺんぺん』にかこつけて、着ぐるみを着せてみたのだが……」
見ての通り、この異常な暑さで、マナは熱中症になりかけてしまった。
「故に、棒アイスを与えた。ご褒美ではないので嫉妬するなよ、エルレイン」
「誰が嫉妬するか！　子供じゃあるまいし！」
マナは私が差し出したソーダアイスを、無我夢中でしゃぶっている。
「ほら、そんなに慌てて舐めると、ぽんぽん壊すぞ」
「……お前ら、本当にバカだな」エルレインはあきれ顔で言った。
「バカと天才は紙一重だと言うだろう？」
「アタシにはよく分からない。……それより、行くぞ」
エルレインは気まずそうに目をそらし、所在なげに、足をぶらぶらさせる。
「稽古は、楽しいか？」
「ば、ばか！　アタシはアンタのせいで、強引にやらされてるだけだっ！　楽しいとか、楽しくないとか、そんなんじゃない！　とにかく！　……アタシじゃないと、駄目だって……言うから、しかたなく……」エルレインの語気がどんどん落ちていく。

「ああ、わかった。すぐ行くから、ちょっと待て」
一度、エルレインは一人で出て行った時に恐ろしい思いをしている。そのため、外出する時には私か、長谷川、もしくはマナが付き添うことに決めた。
最近、長谷川は演劇部の衣装作りやら何やらで忙しく、私かマナが付き添わねばならない。そしてマナは今日、大食い武者修行番組の収録がある。
必然的に、私が『保護者』として付き添うことになる。
学園への道すがら、マナと別れ、学園内へエルレインを送り届ける。
学園内には大勢の生徒が残り、活気付いている。
そこはまさに、異界である。生徒達は、学園祭の準備に精を出しているのだ。
私は学園内を見回る傍ら、電子デバイスを駆使して我が社に指示を出す。そして最近、養生部があやしい動きをしているとの報告を受け、調査に乗り出した。
三つの行動を同時にこなしていると、注意が散漫になる。すると、廊下で何者かとぶつかってしまった。
「おっと……すまない」前方を見ると、女子生徒がへたり込んでいた。お下げ髪の、何処かで見たことがある顔であった。「大丈夫か？　さあ、手を」
「あっ、ごめんなさい」少女のはにかんだ顔を見て、気づいた。
「ああ、君は清掃部の……」
毎朝、校門辺りを竹箒で掃いている少女だとわかった。毎日笑顔で挨拶を交わしていたのを思い出したのだ。
「こんにちは、会長さん」少女はにこりと微笑んだ。
確か、彼女は清掃部『クリーンピース』筆頭、主席清掃部員の神木来夢さんだったか。
「ごめんなさい。急いでて」
「忙しそうだな」

「校内が活気付くと、ゴミも増えますから。私たち清掃部のがんばりどころです」
「君たちの活動はすばらしい。私は誇りに思うよ」
「ほこりは私たちの天敵です。掃いても掃いてもわいてきますから。それでは、急ぎますのでこれで！」神木さんは走って行ってしまった。
誇りと埃を間違えるとは、実に清掃部らしい天然ぶりであった。
その後いくつか調査したものの、養生部はなかなか尻尾を出さなかった。日が傾いたのを確認し、私は事前に決めていた場所に向かった。
そして、日が、赤く染まった。

《――にゃおーん！》開戦を告げる、鳴き真似が響いた。

すると、カーテンの隙間から、隙間ターミネーターは現われた。
「こんにちは伊統会長！　今日こそあなたを殺す……って、何これ！　どういうこと！」
マリナは周囲をきょろきょろと見回し、困惑していた。その反応も当然だろう。
なぜなら――ここは、学園祭準備の教室真っ只中なのだから。
「どう言うつもりなの……こんな、人が沢山なんて……」
「人が沢山いることの、何がおかしいのだ？」
「何って、あなた、関係ない人を巻き込んでも良いって言うの？」
そこまで言って、マリナの困惑は、はっと驚愕の表情に変わった。
「お前が気づいた通りだ。外道であるはずの伊統会長が、どうして、関係ない人を巻き込まないと言い切れる？」
「それは……」
「お前は何処かで信じていたのか？　私が、関係ない人々を巻き込むことはないと」
「バカ言わないで！　そんなはずないじゃないっ！」マリナは叫ん

だ。
その声の大きさが、生徒達の注目を集めてしまう。
教室内の生徒は、突然現われた黒ずくめ二人に、無遠慮な視線を向ける。
「なっ……何よ！」その視線に、マリナは少なからず動揺しているようだ。
「おっ、何だ？」「演劇部か？」「良くできた衣装ね」「おい、よく見ろよ。かわいいぞ」「おお、ホントだ」「どこの子かしら」「見ない子だよね」「あれって、フライパンだよな？」「食べ物系の出し物かな」
「ねえ、君、何組の子？」生徒の一人が、マリナの肩に手をかけた。
「なっ……、あたしにさわるなあっ！」マリナは動揺し、大げさに振り払った。
「彼女はそういう設定なのだ。演技中でね、気分を害さないでくれたまえ」
私は蕩々と嘘を述べた。
「アンタ、どういうつもりよ」ぎっと、マリナは私を睨んだ。
「ここはギャラリーが多すぎる。場所を移そうではないか。そちらの、マコトくんも」
「ウチは、ここを守る」
「まあ、好きにするがいいさ。2組の諸君、彼女は旗を持って突っ立っているのが演技だ。ほら、路上パフォーマーで人形のまねごとをするのがいるだろう？　それの練習だと思ってくれ。おもちゃにすると痛い目見るぞ。注意が必要だ。では、これにて」
私はそそくさと教室を出る。
「あっ、伊統会長、待ちなさいっ！」
廊下に出る。廊下にも学生は溢れている。
「待てって言ってるの！」マリナはフライパンを構えた。フライパンビームを発動する前の構えである。
「良いのかな？　『関係のない人々』を巻き込んでも」

私は、背後に必ず学生が来るように移動する。そうすれば、マリナはビームを撃てない。マナへのフライパンビームを後ろめたく思っているのなら、彼女は絶対に撃つことは出来ない。私はそう確信している。

案の定、マリナはビームを撃つことをためらっていた。

「あたしは……それでもっ――」マリナはフライパンを掲げようとする。

しかたがない。逃げ道を与えてやるか。

「――どうする？　この中にお前の仲間の先祖がいるかもしれんぞ」

「ぐっ……卑怯者めっ！」マリナはフライパンを下ろした。

「さて、どちらが卑怯者かな？」

「ど、どういう意味よっ！」

引っかかった。今、エルレインはいない。エルレインのいない状況で、私はマリナにどうしても確かめたいことがあった。

「……気づいていただろう」

言った瞬間、マリナの瞳が揺らぐのを、私は見逃さなかった。

「な、何の事よ」

「知っていたのだろう」

「あ、あたしは……な、何を言っているのかわからないわねっ！」

「あんな低レベルな変装、貴女が気づかぬ訳がない」

マリナは、下を向いて立ち尽くした。

「お前は、あのふざけたネコ仮面の正体がエルレインであることに、初めから気づいていたのだろう」

「うるさいっ……」

「気づいていてなお、知らない振りをし、そして、それを好都合とばかりにエルレインを慕った」

「うるさいうるさいっ！」

「それを卑怯者と言わずして、誰を卑怯者と罵るか！」

「あたしは……あたしがバカだったから……弱かったから……初めから信じるべきじゃなかった！　……ちがうっ！　認めないっ！

あたしがそんな、騙されるなんてこと、あっちゃいけない！　あたしは知らないっ！　何にも知らないっ！」

マリナは涙を堪えるように、目に力を入れ、私を睨む。

「……そうか」私は背を向け、廊下を歩く。

「待ちなさい……待ちなさいよっ！」

「ついてこい。見せたいものがある」

私は校内を歩く。学園祭の準備をする生徒達の表情は、誰もがきらきらと輝き、眩しいばかりだ。そんな生徒達を、マリナは戸惑いながらも眺めていた。

「どうだ、誰もが輝いているだろう？　これが、私の学園。私の目指す理想郷のモデルケースだ」

私が学園のすばらしさを紹介すると、その都度マリナは戸惑いを含んだ表情をし、そして、忌々しげに顔をしかめるのだった。

「嘘よ……こんなの、信じないから」

私は階段を下り、地下へと向かう。そして、とある部屋に辿り着く。

そっと教室の扉を開けると、中から張り上げるような大声が響き渡ってくる。この部屋は防音性になっているのだ。

室内では、演劇部が稽古を行なっていた。激しい稽古で体中を汗でしたたらせたエルレインが、一生懸命に主役を演じている。

それを見た瞬間、マリナは衝撃を受けたように目を見張った。

「エルレインは、学園祭の演劇に出演することになった」

この地下室には窓がないため、エルレインは夕焼けの時刻になっている事に気づいていない。一心不乱に、自分の役を演じている。

「……こんなもの見せて、あたしにどうしろって言うの？」

「別にどうしろとは言わん。ただ、お前に見て欲しかったのだ。私がこれから作り上げようとしているものを」

「嘘よ！　何か裏があるに違いないわ！　あの時だって……！」

「あの時とは、何時のことを言っているのか？」

私の予想が正しければ、エルレインが『戦いを止めよう』と説得

した時のことだ。
マリナは、沈黙した。しばらく、それが続いた。そして、徐ろに口を開いた。
「……どうして」
「マリナ？」
「どうしてっ！　あんたみたい奴が、あんな社会を作ることになるのよっ！」
泣き出しそうな顔で叫ぶと、マリナはきびすを返して走り去った。
おそらく、ゲートのある教室へと戻っていったのだろう。
私の胸の内に、何故か空虚な感覚が広がった。
「……私にもわからんよ。未来の私が、何を作り上げたのか」
マリナの姿が見えなくなったあと、私はそう、呟いた。
「――どうしても、入れて欲しい台詞があるんだ」
エルレインの声に、何気なく視線が向く。
エルレインは、友人と話していた。そして自分が考える、廻り姫の台詞を提案した。
それを聞いて、私はそっと扉を閉じる。その瞬間、
《にゃんにゃん、にゃおーん！》休戦の鳴き真似が響き、日が沈んだ。

明日は、いよいよ天照高校学園祭『天照祭』の開幕である。

天照祭開幕直後、私はついに養生部の計画の尻尾を掴んだ。
奴らは、裏でいかがわしい物を取引しようと企んでいる。
私は、養生部を見つけるなり、片っ端からしょっぴいていった。
「さあ、そのいかがわしい物を出して貰おうか！」
「いかがわしくなんかありません。我々は純粋に幼女のすばらしさを伝えるために――」
「だぁかぁらあっ！　それがいかがわしいと言っているのだ！」

「これを見れば、きっと伊統会長も幼女の良さがわかります。虜になりますよ！」

養生部員が差し出したのは、何やら雑誌のようであった。

「誰がなるか！　そんなのごめんだ！」私は強引にそれをぶんどり、中を開く。

飛び込んできたのは――見えそうで見えない。けしからんポーズと格好のマナであった。物欲しそうな目で、こちらを見つめている。

「……なんだ、これは」私は雑誌の表紙を見る。

――金髪幼女ばいんばいん！　今最も旬の、奇跡の幼女。マナちゃん大特集！

今までの魔法少女風コスチューム全衣装図鑑、ブルマ体操服姿から、何時取ったのかわからん水着姿、挙げ句の果てにはお風呂シーンまで……何々、隅に小さく文字が書かれている。『寄稿、松田俊介』

あの男っ！　人間のクズめがっ！

「会長くん？　あら、何やってるの？」

わざとらしく入ってきたのは、霧島京香書記長である。

書記長は、美しい着物姿であった。私は無言で養生部作成の雑誌を渡す。書記長は、二、三ページぱらぱらと捲る。その間、無表情である。

書記長が養生部二、三人に視線を送ると、視線に捉えられた養生部員は焼け死ぬように固まり、気絶した。

「おい」私は、拳を固める。すると残りの養生部員共が震え出す。

「幼女の良さだと？」

「か、会長、幼女はとても良いもので――」

先ずは、目の前のクズ共から強制せねばならぬようだな！

校舎の片隅に、下らぬ幻想に取り憑かれた人間共の端末魔が響いた。

「書記長、協力感謝する」

「いえ。でもマナちゃん、かわいく取れてるわね。春香のために一

冊貰ってもいい？」

「駄目だ。全て焚書とする」

「ご苦労様ね。あなたが学園の風紀を守るという雑用に明け暮れる間、私はせいぜい楽しむとするわ」書記長は去っていった。

養生部員は未だ、至る所に潜伏しているはずだ。これを機に、決着を付けようではないか。全ての養生部員を捉え、それらを影で操るヨウ・ジョーなるふざけた外道を見つけ出してやる！

《ぴんぽんぱんぽーん！　マナちゃんの学園祭出し物完全制覇のコーナーです！》

廊下中にモニターが出現し、マナが映し出された。『リガン』の機能を使えば、この程度造作もないことである。今回はライブ中継スペシャルだ。

「みなさん、元気ですかー？　こちらはバナナ大判焼きさんのお店です！」

マナは学園祭の出し物一軒一軒を訪れ、明るい笑顔でレポートしている。最近ではコメントにも慣れ、着実にレベルアップしていく姿がほほえましい。

良いぞ、マナ。お前は楽しめ。

《エマージェンシーコール・イエロー！　不良とおぼしき集団が塀を乗り越え侵入！　現在、本郷風紀委員が殲滅に向かっています》

リガンが私の脳に直接、警告を発した。

ふん、何処ぞのバカめが侵入したか。そのあとさき考えぬ行動、後悔させてやろう。

私はモニターを見上げる。マナは輝かんばかりの笑顔である。

マナよ、お前が楽しむことで、視聴者達は幸せになるのだ。お前はお前の役割を全うしている。だから、私は私の役割を全うしよう。

この学園の治安は、私が守ってやる。

不良共の殲滅はものの数分で完了した。

血みどろの正当防衛暴力戦から帰還し、私は喫茶店を開いている

教室で一息ついていた。そこで出された紅茶を飲んで、私は驚嘆した。

近年希に見るすばらしいお茶に出会ったのだ。長谷川の入れたお茶にも匹敵する美味である。口の中に広がる茶葉の香りがやさしく、後味にこくもある。絶妙な技である。

「すばらしい。是非、このお茶を入れた人物に面会したい」

すると、しばらくしてメイドが来た。メイドはしなやかな動作で挨拶をした。

「おお、貴君か。すばらしいお茶であった。いったいどのようにして入れたのか、是非ともご教授願いたい」

メイドはにこりと笑うと、銀色の御盆をしなやかに持ち上げ、掲げ、私の頭を――思いっきりぶったたいた。私の眼前に一瞬火花が散った。

「あはははははっ！」どうしたことが、メイドはお腹を抱えて笑い転げている。「ホントに気づかないのか？　アタシだー！」メイドの姿が一瞬ぼやけた。

笑いすぎで出た涙を拭ったのは、紛れもなくエルレインであった。ただし、メイド姿である。

「あはは、騙されたなー！」

「これは、いったい」

「あはは、会長がきょとんとしてる」エルレインは私を指さし笑った。失礼な奴である。

「メイドが……エルレイン？」

「伊福部先輩の手伝いでこっちに来たんだ。そしたら会長が入ってくるからさ。ちょっと悪戯してみた」悪戯っぽく、エルレインは言った。

「と、言うことは、このお茶を入れたのは、お前ではない？」

「ぶー、残念でした。このお茶を入れたのはアタシです。どうだ！　驚いたか！」

エルレインは終始上機嫌で、楽しげであった。

「ん？　何ぼんやりしてんだ？」
「お茶、ごちそうさま。その服もなかなか似合っているではないか」
エルレインは、ぼっと顔を赤くした。そう言えば、赤面症であったな。
「ところで、演劇の稽古は、もう良いのか？」
そう言うと、エルレインの顔がみるみる青ざめ、膝ががくがく震えだした。
「い、いや、その、稽古は、もう、おわって、る、んだけ、ど」
ああ、なるほど。つまりは緊張しているから、仕事でも手伝って気を紛らわせという伊福部先輩方の配慮らしい。ならば、
「少し、抜けられそうか？」
「え、あ、うん、たぶん」エルレインはガチガチに緊張していた。

私がエルレインを伴って訪れたのは、小物細工の店を開いた、一年の教室である。
エルレインは色とりどりの小物細工を楽しげに眺めていた。
「あ、会長さん」店でレジ打ちをしていた明星鈴奈会計委員が、私に気づいた。
私は鈴奈会計委員と二、三会話し、はしゃぐエルレインを見つけて店を出た。
「ほれ」私がエルレインに差し出したのは、美しいガラス細工である。紐を通して、アクセサリとして腕につけられるようになっている。
「これは……？」
「お守りだ。これを持っていれば、演劇もきっとうまくいくだろう」
エルレインは、もじもじしながら受け取った。
「なんか、会長がこういう迷信みたいなのを信じるなんて、意外だな」
「迷信？　それはきちんと心理学的根拠に基づいているのだが」
「そ、そうなんだ」

「それでは、私は行く」
「あ、ああ」
きびすを返し、立ち去ろうとしたその時、
「会長！」
エルレインが私を呼んだ。振り向くと、
「あ、ありがと……」エルレインは早速、アクセサリを腕に付けていた。
私は頷き、人混みの中に紛れた。
「さて、あとは養生部をどう解体するかだが……」
「――待ってー！　待ってくださいーっ！」
聞き覚えのある声が、こだまする。
前方から、何か巨大な物が走ってくる。
あれは……まるで小屋だ。青色の小屋が、廊下を暴走している。
小屋は勢いよく私の横を通り過ぎ、そしてその後に続くように、金色のひらひらしたものが、私の横を通り過ぎた。
「――マナ！」
「かいちょーさんっ！　……はあっ、はあっ」マナは急ブレーキをかけたように止まり、私の下へとやって来た。マナは息も切れ切れで、苦しそうに肩を上下している。
「どうしたというのだ？」
「あれが、最後です」マナは前方を走る謎の青い小屋のようなものを指さす。
「最後……というと？」
「マナちゃん、追いついた！　……あれ、いーくんだ！」
巨大なカメラを担いだ藤堂春香がマナを、そして私を映す。
「藤堂……ということは」
「食べ歩きレポート！　あれが最後の――ヨウ・ジョーさんの空色クレープどーなっつ屋さんですっ！」
「ヨウ・ジョーだと！」私が作ったリストには、そのような店舗、存在しないはずである。私は、マナが提示したリストに目を通す。

最後の一つに、確かに『ヨウ・ジョーの空色クレープどーなっつ』と書かれている。

「何でも、そこら中を走り回っているらしくって、まだ誰も買えていないって噂です。噂はもう一つあって――」

――クレープどーなっつを食べれた人はどんな願いでも叶う。

という噂があるらしい。馬鹿げている。非常に馬鹿げている。私の内側に、憤怒の炎がめらめらと燃え始める。

ヨウ・ジョー。正体不明の幼女大好き紳士。養生部を今の姿に変えた、憎き敵。

それが今、目の前に、暴走する青色の小屋という、最高にふざけた形で存在する！

「いいだろう。手伝ってやる」

私はリガンに接続し、校内放送とリンクさせる。

《聞こえるか、生徒諸君！》私の声が全校に響き渡る。

校内がにわかにざわめきたつ。

《スペシャルタイム！　青色の小屋を探せ！　青色の小屋を探し出し、その中にいる人物を引っ捕らえた最初の一名には、すばらしき賞品が与えられるっ！　それは、天照高校学食一年分であるっ！

あと半年で卒業してしまう卒業生も同様！　卒業生が栄冠を勝ち取った場合には、その人のためだけに、卒業後もデリバリーサービスとして、いつでも天照高校の至高の学食を提供できるシステムを構築しよう！　さあ、諸君、青い小屋の中身を引きずり出す勇者は誰だ！》

――うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

校内のあちこちで歓声が上がった。それもそのはず、我が校の学食は美味・ヘルシー・ロープライスと三つ揃った完璧な食事である。一流のシェフが監修するその至高のメニューは、そんじょそこらの店では太刀打ちできないクオリティである。

さあ、食の欲望の権化達よ、ヨウ・ジョーの行く手を阻み、我が覇道を開け！

「行くぞマナ！」
「はいっ！　……学食一年分って、わたしももらえますか？」
「例外は無い。お前も学園の生徒だろう？」
「はひっ！　わたし、がんばりますっ！」
駆け出す。私の後ろをマナ、そして藤堂がついてくる。もちろん、闇雲に駆けているのではない。
「かいちょーさん、ヨウ・ジョーさんの居場所がわかるんですか？」
「私を誰だと思っている？　私はこの学園の生徒会長だぞ！」
『リガン』のシステムによって『校内千里眼』と化した私に、捉えられぬ対象物など無い。青い小屋とすれ違った瞬間の映像を元に、３Ｄデータを作成。それを検索キーとして、校内に設置された防犯カメラから集めた膨大な映像を検索する。
《青い小屋は現在２―Ｂの教室前を北側へ移動中。賞品が欲しい者は止めろ！　そうでない者は逃げろ！》
リガンのシステムに指示を送り、常に青い小屋を追跡させるように設定する。
青い小屋は依然として廊下を爆走している。幾人かの生徒が進路に先回りし、飛びつこうとしたが、当然のように跳ねられてしまった。――普通の人間では駄目か。
リガンでスキャンしたところ、命に別状はない。私は保健委員に負傷者の手当を指示し、青い小屋を追う。
すると、青い小屋の進路に赤と金の人影が。本郷光太郎である。本郷光太郎は、鮮血のプロテクターグローブをはめた両腕を構える。すると、炎のようなオレンジ色の輝きが生じる。どうしたことか、防犯カメラのバグであろうか？
青い小屋は本郷の出現など気にもとめず、暴走するように直進する。
二つの距離はみるみる縮まり、本郷がエネルギーを解放するように拳を勢いよく前へ突き出す――小屋が本郷をひき殺さんばかりにぶち当たる――かと思いきや、小屋が横へスライドした。本郷の拳

を避けるように、突然横へ動き、傾き、廊下の窓に車輪の跡らしき傷を付けながらの壁走り、さらに上へと動き、逆さまになったまま天井を駆け抜け、反対側の教室の窓にも同じように壁走りで車輪の跡らしき傷を付け、そのまま床に着地し、走り去ってしまった。

完全に重力法則を無視した、でたらめな動きである。

本郷はオレンジ色に燃える拳を突き出したまま呆然としている。

「かいちょーさん、どうしたんですか！」

私の動揺を感じ取ったのか、マナが心配そうな表情で訊ねてきた。

まさか、あの小屋も養生部の発明なのか？　だが、既存の法則を無視するあの物体は、常識を越えた存在。私が追い求める『技術的特異点』そのものではないか。

技術的特異点。それは『その技術が存在することによって、飛躍的に技術の進歩が進む』という技術である。近年では集積回路の成長が指数関数的に成長しているなどの例が挙げられる。不可能を可能にする。存在自体が未来を変える。そんな技術のことである。

私が追い求めていた技術の一つを、ヨウ・ジョーなるどこの馬の骨かもわからぬ存在に横取りされてしまったというのか。そのような屈辱、認めるわけにはいかない。

学生達を強引にかき分けながら、青い小屋は爆走し続ける。

その時、スマートフォンに通信が入った。

《会長くん？　シキガミ達を使ってバリケードを張るから、あの目障りな小屋を捕縛しなさい》霧島書記長であった。

《どうしたのだ、霧島会長？　ご機嫌斜めなようだが？》

《あの小屋にぶつかって、渡くんが怪我したのよっ！》霧島書記長の口調は尋常ではなかった。

先程の負傷者といい、私の技術を横取りし、しかも我が校で騒ぎを起こし、さらに私の生徒に怪我を負わせるとは……許すまじ、ヨウ・ジョー！

《わかった。屋上プールにおびき寄せてくれ！》

霧島書記長に指示し、私とマナ、そして藤堂は屋上プールへ向か

う。

屋上プールに辿り着いた。しばらく待っていると、青い小屋が階段を駆け上がり、飛び出して来た。そのまま小屋は、屋上プールの真上を飛び越えようとする。

私はアカネ嬢特製の防弾ガラスを展開し、それを遮る。ガラスに激突し、その小屋の青い色と同じ青色のプールに沈め！

しかし――ヨウ・ジョーの青い小屋は防弾ガラスをぶち破った。戦車の大砲でもくい止めるはずの、特注の防弾ガラスを。

勢いそのままに屋上プールを飛び越え、これまた屋上プールを囲むガラスの壁を突き破り、青い小屋は空へと飛び出す。――まずい、このまま逃げる気か！

いや、そもそもこの高さから落ちれば、ひとたまりもない。

私はバラバラに砕け散った小屋を想像する。ヨウ・ジョーめ、自殺でもするつもりか！

「――あっ！」藤堂が叫んだ。青い小屋に尻尾のようについているものを見て、その意味がわかった。

「マナ！」「マナちゃん！」

マナが、青い小屋の後方にしがみついている。

「離せ！　危ないぞ！」

「駄目ですっ！　全部レポートしないといけないんですっ！　これが――わたしのお仕事ですっ！」

マナは叫んで、そのまま小屋と共に落下した。私はリガンを呼び出し防犯カメラの映像を確認するが……だからどうする？　何も出来ない事に私は気づく。

全身が凍り付いたような悪寒が奔る。

マナは空中に放り出される。小屋と平行して落下する。すると、小屋の方がマナによっていった。マナはそこで何かを見て、目を見開いた。

マナが何を見たのかは、防犯カメラの死角になっており、捉える

ことが出来ない。
マナは小屋に向かって手を伸ばし――何かを受け取った。
「マナっ！」私は叫びながら、ガラスのぶち破られた箇所から乗りだし、下を見た。
あまりの高さに一瞬意識が揺らぐ。
マナが、小屋と重なり、落ちて行く。
そして、小屋が粉々に砕けた。酷い音が、耳に響いた。
目の前が、暗闇に包まれた。

第十四話　黒嵐の廻り姫

「いーくんっ！」突然、強い力で後ろに引っ張られた。
落下しそうになった私を、藤堂が引き留めてくれたのだ。
視界が元に戻り、開ける。
「……マナ！」私は階段へと走り、駆け下り、小屋の落下点へと走る。
そんなことがあってたまるか。私の学園で、私の作らせた技術で、私の……娘が……マナが、落下し、そして……。その先を想像すると、名状しがたい心情が私の内から広がってゆく。私はそれを否定するように落下地点へ全速力で駆けた。
初めに目に飛び込んできたのは、木片のようなものの残骸。おそらく、先程までは青い小屋だったものだろう。青い小屋はバラバラに粉砕され、原形をとどめていなかった。
そして、その中心にいるのは――。
「……うまくいった」
そこにはメイド姿のエルレインが立っており、その腕にはマナが抱えられていた。
「……会長、アタシ、やったよ」
宙には、黒いペン――かつて私が胸ポケットにさしていたもの――が、回転しながら浮いていた。回転はやがて止まり、からんという音を立て、地面に落ちた。
「未来の力が使えた。マナを、助けられた」エルレインは、泣き出しそうな表情だった。
聞けば、ペンによる回転で嵐を起こし、その風圧を使ってマナの落下速度を相殺したという。にわかに信じがたい話であった。
エルレインはマナを下ろす。
「かいちょーさん、かいちょーさん！　わたし、やりましたよ！」
マナが、たっ、と立ち上がる。手には、ピザを入れるような大き

さの偏平な箱をぶら下げ、これ見よがしに私に提示する。
その姿を見て、またもや名状しがたい気持ちがこみ上げてきた。
「――ばかものがあっ！　どれだけ心配したと思っているっ！」
「ひあっ！　で、でも！　これを食べれば何でも願いが叶います！　エルちゃんとかいちょーさんにも分けてあげますよ」マナはそそくさと箱を開こうとする。
「私は、そんな迷信信じない」
「そういじけないでください」マナは箱を開いた。
あまい香りが広がった。
中には、ドーナツ状になったオムレツのようなものが入っていた。おそらくはその中身が何層にもなっているのだろう。だからクレープどーなっつ。どうやって作ったのかがまるでわからない奇妙なお菓子である。きっとこれも、養生部の技術を使っているに違いない。
マナは匂いに誘惑され、よだれを垂らさんばかりにその物体を欲している。ゴクリと喉を鳴らし、よだれを拭き、
「では……いただきま――」
突如として、無数の黒い何かが、クレープどーなっつに向かって群がる。
「――いやあああああああああああっ！」マナの絶叫が響き渡った。
目の前に広がるのは、無数のカラスがクレープどーなっつをついばむ、おぞましい光景である。
その光景、まるで鳥葬であった。
一瞬にしてクレープどーなっつは消え失せ、跡形もなくなってしまった。
「そ、そんなぁ……」マナは膝をつき、この世の終わりのように絶望していた。
あり得ない現象である。あり得なすぎて、逆に呆れる。そんな事象であった。

これすらも、ヨウ・ジョーなる存在の得た力なのか……？

青い小屋の残骸は残ったが、その裏側はベニヤのような素材で出来ており、はっきり言ってハリボテ以外の何物でもなかった。

そして、ヨウ・ジョーなる存在は影も形もなかった。

エルレインに聞いたところ、そのような人物は見当たらなかったとのこと。エルレインがなぜ、未来の技術を使える様になったのかも聞けぬまま、

「あっ、そろそろ時間だ！　演劇の準備があるから行かなくちゃ！　ごめんな！」と言って、エルレインは慌てたように去っていった。

時計を見ると、演劇の開演時間まで残り一時間半を切っていた。

その後、藤堂春香と霧島京香が駆けつけた。ヨウ・ジョーを捕まえられなかった事を伝えると、霧島書記長にこっぴどく罵られた。

彼女の私に対する威厳は、元々小さかったものが、さらに矮小なものとなった。

藤堂春香はマナを撮影することも忘れ、マナに泣きながら抱きつき、強く抱きしめ過ぎて、泡を吹かせた。

意識を取り戻したマナは、ヨウ・ジョーらしき人物を見たという。

丁度、長谷川も戻ってきたので、マナの証言を元に似顔絵を描かせてみたところ、何とも奇妙な風体の存在が描かれた。

全身青ずくめ。青色のコートに身を包み、青い手袋をはめている。

青い不思議な形の帽子――テンガロンハットのようなつばの大きな帽子を被り、顔はこれまた不思議なマスクで隠されている。まるで――。

「陰陽ではないか」

黒と白の勾玉のような形が互いに混じり合った様な模様。中国に関連した装飾などでよく見かけるあの模様を模したマスクで、ヨウ・ジョーの顔は覆われていたという。

異常すぎる風体であった。例え仮装パーティーであっても、前述のような格好をすれば、たちまち周りから浮いてしまうだろう。

本当にこんな格好の人物が存在するのかと懐疑的になったが、マ

ナは確かに見たと譲らなかった。確かに、青空を切り取ったような人物であったという。

どう考えても身元を撹乱するための変装であると思う。が、これ以上の手がかりが無いため、霧島京香と情報を共有し、互いに調査を続けることで合意した。

最後に、マナは気になる証言した。

ヨウ・ジョーが、一言発したのだという。その言葉は、

――ぷーくすくす。

何処かで聞いたことのある言葉を使って、ヨウ・ジョーは嘲笑ったのだ。

その嘲笑が示すように、騒ぎの裏で、養生部のいかがわしい雑誌は全て完売した。

私は、わけのわからん存在に、完敗したのだ。

霧島書記長は、もう少し調査を続けると言い残し、去って行った。

藤堂とマナも、撮影を再開するという。

「さあ、それじゃマナちゃん、撮影の続きを――」

「――春香！　見つけたぞ！」背後から声が聞こえた。

何処かで聞き覚えのある声だと思った。

「うっ……しまった」私の背後を見て、藤堂春香の表情が苦々しいものになる。

藤堂はすぐさま逃げようとしたが、

「逃がすかあっ！」また、後ろからの声である。

振り向きざま、何かがきらりと光った。

それは長靴だった。きらびやかな装飾が施された、絢爛豪華な長靴である。その長靴を所有している人物を、私は一人だけ知っている。

その人物に、藤堂は背中から電撃的な跳び蹴りを食らわされ、地面に突っ伏した。

「ここに居やがったか。サボってないで、準備するぞ」

「ちょ、ちょっと待ってくださいっ！　私はマナちゃんの撮影が―

―」

「つべこべ言わずに来いっ！　お前が必要なんだよ！」

「轟先輩」

「おお、ソウ……じゃなかった、今は伊統会長だったな」

轟先輩――轟響先輩は、三年の女子生徒である。燃えるようなオレンジ色の長髪をなびかせ、モデルのような体型をしており、足が長い。

綺麗と言うよりは、格好いいと形容した方が良い容姿をしている。彼女とは、私が本名を名乗っていたときに少しだけ親交があったが、この天照高校を改革するに辺り、偶然再会した。まあ、それ以上の仔細はどうでも良いことだ。

それよりも、先輩の体が心配である。

「あなたは何をやっているんですか！　無茶を出来るような体では――」

轟先輩は、絢爛豪華な装飾の長靴を履いた足を大きく開き、腕を組んで私を見据えた。その足下には、しっかりと藤堂のスカートが踏まれている。

そして、にかっと笑う。

「お前も聞きに来い。おれの演奏と歌声に痺れろ！」

先輩は藤堂の首根っこをつかみ、強引に引っ張って行ってしまった。

「……まったく、あの人は」頭が痛くなる。

「あれ、かいちょーさん？」

マナが、不思議そうな顔で、私の顔を覗き込んでいた。

「なんだ……？」

「かいちょーさん、熱でもあります？」

「あるわけないだろう」健康には、人一倍気を遣っている。

「なら、もしかして……」マナは、意味ありげに口を押さえた。

嫌な予感がしたため、私は話を打ち切る。

「マナ、邪推していないで行くぞ！」

「あっ、はいっ！」

轟先輩は我が校でバンドを主催し、藤堂はそこでギターを演奏している。

そう言えば、エルレインの演劇の前だったから、開演まで後一時間も無い。それでよく、マナを追いかけ回していたものだ。

私が会場に辿り着くと、ちょうど藤堂達の演奏が始まった。

先程藤堂を連れに来た女子生徒――轟先輩は、バンドのボーカルだ。

透き通った歌声で、オリジナルであろう楽曲を歌い上げていた。

その横で、藤堂も上手に演奏している。思えば、上手くなったものだ。

色々な理由があって、藤堂にギターを勧めたのはこの私だ。初めにギターをあげた時は、嫌な顔をされたのだったな。

少し気になったのは、演奏する藤堂が終始無表情だったのだが、観客の女子生徒にはそれが逆に格好良く見えるらしく、黄色い声援を受けていた。

「かいちょーさん、すごいです！　すごいです！　きらきらしてました！」

マナの言うとおりだ。流石は轟先輩。熱いステージだった。

「あの一番後ろにいる人が叩いてた、太鼓みたいなのやってみたいですっ！」

マナはどうやら、ドラムに興味津々らしい。意外である。

「どこどこどこって！　ねっ、かいちょーさんっ！」

興味があるのなら、一度、やらせてみるのも悪くはないかもしれない。

大食いの次は、次はバンド活動でもやらせてみるか。と思案していると、

《十五分間の休憩後、演劇部による演目が開催されます》というア

ナウンスが鳴った。
ふと、不安がよぎる。
そういえば、こんなすばらしいステージの後で、あいつは、大丈夫だろうか。
『リガン』を通して、舞台裏を覗く。
「あああっ！　もうだめだあああっ！　あんなすごいステージの後でアタシできない！」
「あまえるにゃっ！　……あ、あまえるなっ！」
お子様会長がエルレインを叱咤しているが、一度噛んでしまったために、威厳がない。
「――だめだあああっ！　怖いよおっ！　恥ずかしいよおっ！」
……まったく。世話の焼ける奴だ。
「あれ、かいちょーさん、どこ行くんですか？」
「ちょっと、お手洗いだ」
「あ、おしっこですね。わたしもわたしも！」
「直接的に言うな。あと、女子トイレは混むから、少し遠くの所を使った方が良いぞ」
「ありがとうございます！　じゃあ行ってきますね！」
「迷子になるなよ」こいつならやりかねん。
「はいっ！」マナは笑顔で手を振りながら駆けていった。
マナはうまく撒いた。では、行くか。

「エルレイン」
私は舞台裏を訪れた。そこには、演劇の衣装を着ることを拒否し、演劇部の生徒達をおろおろさせるエルレインがいた。
「かいちょぉ……」エルレインは半泣きだった。涙でせっかくのメイクが台無しである。
「何をやっているのだ。『覚悟』はどうした？」
「無理だよ！　アタシにはあんなに沢山の人の前に出るような度胸ないよ！」

「お前なら出来る。いや……なんとしても出なければならない」
「会長？」
そして私は、エルレインに計画を告げた。
「そ、そんなの無理……」話を聞いたエルレインは、益々あたふたする。
「既に友人やお子様部長には計画を伝えてある。後戻りは出来ない」
「――っ！　勝手なことをっ！　またアタシを騙したな！」
エルレインは憤然として私を怒鳴りつけた。あまりの剣幕に、演劇部の生徒達は引いている。それでも、泣きじゃくられるよりはマシだと思った。
だから、さらに挑発する。
「騙してはいない。その証拠に、今、お前に全てを打ち明けた」
「同じ事だろっ！　アンタはどうしてそんなに勝手なんだ！　アンタがいくら押しつけても、無理なものは無理なんだ！」
「無理じゃない。お前になら出来る」
「なんでわかるんだよ……アンタに、アタシの何がわかるっていうんだよ」
エルレインは俯いた。視線の先には、私が先ほどあげたお守りのブレスレットがあった。そのブレスレットにすがるように、紐をぎゅっと握りしめた。
「……っ、こんなものっ！」手に力を込め、引きちぎろうとする。
私は手を伸ばし、止めた。そして、言った。
「信じろ」
エルレインは驚き、大きく開かれた眼が真っ直ぐに私を見つめた。
私も真っ直ぐにエルレインを見つめた。視線は絶対に逸らさない。逸らしてはいけない。それが、彼女に対する誠意だ。
「お前、演劇をやってみてどう思った？」
「えっ……？　どう、思ったって……」
私は、マリナと共に見たあの光景を――演劇の稽古をするエルレインの姿を思い出す。

「演劇の稽古をするお前は、輝いて見えた」
「なっ……何を言って――」エルレインの頬が、朱に染まる。
「私には、お前がとても生き生きとしているように見えた」
エルレインは、はっとした。しばらく、呆けたように私の顔を覗き込む。
「お前は、演劇を楽しんでいるように見えた。……違うか？」
「それは……そうだけど……」
エルレインは戸惑っていた。どうしていいのかわからないと言うように。
「会長……でも、アタシは――」
「お前は、あの時と同じ気持ちで臨めば良い。あの時と同じように、楽しめ」
そして、私は繰り返した。
「お前になら出来る。信じろ」
エルレインは、こくりと小さく頷いた。
「それでいい。お前は強い」

そして日が傾きはじめた頃、エルレインが主役である演劇『廻り姫』は開演した。
戻ってきたマナと並んで、観戦する。
『廻り姫』のストーリーはこうだ。
ストーリー開始時、廻り姫の妹である、白百合姫が死んでしまう。姉と妹、二人を巡る取り巻きの権力闘争。王権を巡る謀略と数々の不幸が重なり、白百合姫は姉を守るために服毒自殺を遂げてしまうのだった。
「何故だ……何故、妹は死なねばならないっ！」
騎士のような男装をしたエルレインが慟哭する。
その迫真の演技に、最初から引き込まれてしまう。
主役を演じるエルレインは、役そのものであった。稽古当初はぎこちなかった動きも改善され、妹思いの姉を見事に演じていた。

そこで突然、友人演じる『時の王』なる青魔導師が出現する。彼は言う。

「白百合の死は、あまりにも理不尽であった。そなたにやり直す術を与えよう。ただし、それには重大な代償を支払わなくてはならない」

廻り姫は言う。

「妹の死を回避できるのなら、どんなものでも差し出す！　この命でさえも、差し出してかまわないっ！」

青魔導師は、頭を横に振る。

「そんなもの、何の役にも立たぬ」

「では、何を差し出せばいい！」

青魔導師は、答える。

「お前の、『存在』だ」

青魔導師の言葉に、廻り姫はしばし言葉を無くす。

「……『存在』？　命と何が違う？」

青魔道士は、何も答えなかった。

それでも、当然のように廻り姫は答える。

「わかった。私の存在を差し出す」

「いいのだな？　地獄のような苦しみを味わうことになるぞ」

「かまわないっ！　あの子を生き返らせるためなら、何だってしてやる！」

廻り姫は勇猛に言い切った。青魔導師はしばらく廻り姫を見つめた後、頷いた。

「彼の者の全存在と引き替えに、彼の者に時間の制約を越える力を与えよ！」

瞬間、青魔導師の持っていた杖から、凄まじい光があふれ出した。

そして、舞台は暗転した。

再び明かりが灯ると、そこは舞踏会の中心であった。廻り姫の衣装は、男装から豪奢なドレスへと変化していた。見事な早着替えである。

「やった……やったぞ……私は、過去に戻れた！」
廻り姫は、すぐさま辺りを見回す。すぐにお子様会長演じる白百合を見つける。
「白百合！」
廻り姫は踊る貴族らしき人々をかき分け、一直線に白百合へと駆け寄る。
「白百合、白百合だ！　生きてる！　よかった！」
驚嘆する廻り姫に、白百合は訝かしげな表情を向ける。
「お主、誰じゃ？」
「誰って……私だ。お前の姉の黒百合じゃないか」
ここで気づく、まだ、彼女は廻り姫ではないのだ。
白百合は突然、怒り出す。
「無礼者！　わらわに姉などおらぬ！」
「白百合？　私を忘れたというのか！　……はっ」
黒百合は、目を見開く。
「衛兵！　衛兵はおるか！　わらわの姉を語るこの不届き者を連れ出せ！」
黒百合は呆然としたまま、駆けつけた衛兵に連れ出されてしまう。
かつて権力の匂いをかぎつけすり寄ってきた貴族達、親しかった従者、果ては最愛の白百合まで、誰も黒百合のことを覚えてはいなかった。
「これが……存在を差し出すということなのか……」
黒百合は、自分の手のひらを見つめ、沈痛な面持ちで独りごちた。
「いいだろう……白百合のため、この存在を捨てよう！　今日から私は何者でもない。ただ、白百合を助けるだけの存在となろう！」
舞台の中心で、黒百合は一人、天を仰いで宣言した。
私は、我が目を疑った。この物語自体が、まるでエルレインとマリナの関係を表わしていたからだ。
白百合に忘れられた黒百合と、マリナに忘れられたエルレイン。
私の中で、両者の関係がぴたりと一致していた。これは……偶然な

のか。
そして、地獄が始まった。
運命が決まっているかのごとく、黒百合の試みはことごとく失敗する。
そのたびに、白百合は死ぬ。黒百合は慟哭する。
暗転し、最初の舞踏会へと戻る。
「また、ここからか……」
楽しげに踊る白百合を見つめ、廻り姫と化した黒百合は、うれしいとも悲しいとも取れる、何とも複雑な表情をするのであった。

廻り姫は、何度も白百合を助けようとする。毎回違うやり方で、白百合を救おうとする。だが、努力の甲斐無く、白百合は死んでゆく。
しかも、その努力は決して報われない。白百合といくら親睦を深めようとも、いとおしい気持ちを伝えようとも、白百合が死に、暗転すれば、全ては白紙に戻っているのだ。
白百合は、廻り姫のことを知らない。その事実に、黒百合は何度も打ちのめされる。
この不毛な繰り返しを、何度も、何度も繰り返す。繰り返す度に、白百合の死に様は悲惨なものとなり、黒百合は苦悩する。
自分が白百合の死を回避しようとする度に、一人の白百合が死んで行く。彼女たちはそれぞれ違う白百合のようであるが、どの白百合も、黒百合にとっては紛れもなく、たった一人の妹なのである。
そして、彼女たちは別々の理由、別々の原因で、例外なく、悲惨な死を遂げる。
まるで、黒百合がいるが故に、白百合は、何度も悲惨な死を経験しなければならないかのように。
自分が白百合を諦めれば、白百合は、何度も死ななくても済んだのではないか。
自分の存在こそが、白百合を苦しめる元凶なのではないか。

白百合の死を経験する度に、黒百合の表情は険しくなってゆく。
限界であった。最愛の人の死を何度も見せられ、それを止めることの出来ぬ自分を罵り、研ぎ澄まされた刃のような鋭さで、天を仰いた。
「やめてくれ……」
震えた声で、呟く。
「もう、やめてくれ……」
それでも、黒百合を助けたいという自身の欲望は止まらない。
自分では、止めることが出来ない。
そして、白百合は死んだ。
舞踏会へ戻る。絢爛豪華な舞台の中心で、黒百合は打ちひしがれる。
その廻りを、豪奢に着飾った貴族達がくるくると回る。終わらないワルツをくるくると踊る。
回る、廻る。
黒百合を――延々と時を廻り続ける廻り姫を嘲るかのように、延々と廻り続ける。
「――やめろおおおおおおおおおっ！」
ぴたりと、音楽が止まった。ワルツが止まり、踊り手達は人形のように動かなくなった。
廻り姫が顔を上げると、傍らには、あの青魔導師が立っていた。
廻り姫の表情に、憎しみが沸き上がる。
「……お前、こうなることを知っていたな」
「忠告したはずだ。地獄を見ると」
「私はどうすれば良かったのだ！　私は、白百合を救いたかった！　それの何がいけなかったのだ！」
「いけないとは言わぬ。誰も否定してはいない」
「なら、何故このような苦しみを受けねばならない！　これではまるで罰だ！」
「罰ではない。苦しみを感じるのはお前のせいだ。変えられぬ運命

を変えられると思い込んでいる、お前の傲慢さが、お前自身を苦しめているのだ」

「変えられない……運命だと……ならば！　なぜ私にこのような力を与えた！」

「お前が、欲したからだ」

「欲した……？」

「そうだ。お前が欲したのだ。『やり直す』力を」

廻り姫は、探るように青魔導師を見た。

「……まて……そもそも、お前は何者なのだ」

青魔導師は、にやりと嗤った。悪魔的な笑みであった。

「『理』」

それだけ言って、青魔導師は、消えた。

廻り姫はしばらく、呆けたように青魔導師の残滓を眺めていた。

そして、

「ふざけるなあああああああああああああっ！」

それから幾度も、廻り姫は白百合を助けようと、試行を繰り返した。

何度も、何度も。彼女をかろうじて支えていたのは、青魔導師への憎しみと、意地であった。

それでも、運命を変えることはできなかった。

そして、血まみれになった白百合を抱き、天に向かって叫ぶ。

「お前がどれ程冷酷であろうと、私が必ず変えてやる！　私が、運命を変えてみせるっ！」

変えられぬ運命に打ちひしがれようとも、何度も挑むその狂気を最後に、物語は幕を閉じた。

徹頭徹尾、悲劇であった。エンターテイメント性を極力廃し、文化祭で演ずるには決してふさわしくない内容であった。

そして、この演劇は、私の計画と全く異なっていた。

内容も、終わる時間も。何もかも私の予想に反していた。

友人も、お子様部長も、演劇部も、何を考えているのか。

ここで終わらすとは、正気なのか。
閉幕した直後から観客席はざわつき始めた。人々の大部分を支配している感情はおそらく、困惑であった。
「かいちょーさん……黒百合ちゃんは、幸せになれないんですか……？」
マナの瞳も揺れていた。気持ちの整理をどう付けて良いのか、わからないのだろう。
他の観客も同じだ。目の前に提示された物語に、どう反応して良いのかわからない。
この感情が何なのかわからない。なのに、心は動かされてしまった。
一度心を動かされてしまった観客は、この演劇を忘れないだろう。それは、傷だ。観た者の精神につけられた、抉られたような傷だ。ある観客にとっては、一生消えない可能性もある傷だ。
友人よ、何というものを作ってしまったのか。
君は、この物語を提示することで、何がしたかったのか。観客を楽しませてこそのエンターテイメントではないのか。
やはり私が監修すべきだったのか……。いや、友人と私は友人関係である。友人が作った物語に、私が口を出すことはできない。
物語の是非を、問うことはやめよう。過ぎてしまった事柄は変えられない。これはこれとして、正当に評価しよう。
私個人としては、学園祭であえてこのような悲劇を演じた演劇部一同に、敬意を表したい。
物語の良い悪いは別として、エルレイン達の熱演には目を見張るものがあった。
それだけに、この演劇をマリナに見せることが出来なかったことを、私は無念に思った。
私の計画は、エルレインが演じている姿をマリナに見せることだった。
彼女が輝いている姿をマリナに見せることで、いつもとは違う角

度からエルレインという存在を知ってもらおうと思ったのだ。そしてそのことが、きっと姉妹の関係にプラスになると考えていた。

しかし、『廻り姫』のクライマックスは、ちょうど夕暮れの時間帯だった。

マリナがエルレインの演劇を見ることは、もう、無い。

もし、この物語をマリナが見たとしたら、彼女は何を感じただろうか。

会場は、まばらな拍手に包まれた。やはり、この物語を理解する客は、多くはない。その時、

《――にゃおーん！》開戦を告げる鳴き真似が、ホールに響いた。

いつの間にか、横には水鏡マリナが立っていた。

マリナは、降ろされた幕をじっと見つめていた。その表情は、どこか寂しげであった。

……遅かった。

私は、無念を噛みしめた。何故、このタイミングなのか。

「マリナ」

呼びかけられたマリナは、はっと気づき、

「こ、こんにちは伊統会長、きょ、今日こそ、あなたを――」

開演を告げる、ブザーが響いた。

「――えっ？」

幕が、開いた。

初っぱなから、飛び込んできた光景に圧倒された。

舞台の中心に立つ、一人の人影。背後からの光で、文字通り影としてしか見えない。その背後には、舞台の壁をびっしりと埋める無数のディスプレイが広がっている。

あんなもの、私は聞いていない。それに、どうやって用意したのか。

そこには延々と、今までの繰り返しと、白百合の死が映し出され

ている。
まさか、一度幕を閉じたのは、終わるためではなく、あれを設置する為だったのか。
すると、エルレインの声がスピーカーを通して伝わってきた。
「あれから、幾人もの妹が死んだ。それでも私は救おうとし、幾人もの妹を見送る事となった。私の心は灰色に染まり、残ったのは、気高き精神でも、憎しみでも、意地でもなく……ただの、惰性であった」
スポットライトが、人影を照らした。
廻り姫の姿が、観客の前に晒されると、観客は息を飲んだ。
彼女の髪は、白銀に染まっていた。想像を絶する苦悩が、彼女の髪を白銀に染めたに違いなかった。
廻り姫は、剣を地に挿し片膝を尽き、弱々しく震えながらも、剣を杖のようにして立ち上がろうと懸命にもがく。
「ああ……私は、いったいなぜ、彼女を守ろうとしているのか……既に、その理由も忘れてしまった」
廻り姫は、微かに掠れたような声で、独白する。
「誰からも愛されず、慕われず、憎まれず、罵られず、見向きもされず、一人、孤独の中に身を投じ、それでも彼女を守ろうとしたが、全ては徒労に終わった……今思い出すだけでも数千通りの彼女の死に顔を、鮮明に思い出すことが出来る……逆に……それ以外のことは、全てわからなくなってしまった……血しぶきと悲鳴の砂嵐の中で、私は、盲目と化してしまった……」
必死で立ち上がろうとする廻り姫の体から、突然、力が抜けた。
剣にしがみついたまま、目を閉じ、俯き、石のように動かなくなってしまった。
「……っ！」
気配を感じ、私は横を見た。マリナが、口元を抑えていた。その視線は、廻り姫へと注がれている。
「終わりが近づいている。幾重にも繰り返した思いが……既に感覚

が麻痺し、感じることさえ不可能となった思いが……我が身を歪ませ、滅ぼそうとしている」

廻り姫は、うっすらと、微睡むように薄目を開く。

「いったい……私は、どうしてここにいるのだろうか……」

廻り姫の周囲に、花が咲き始めた。色とりどりの花が咲き揃い、その生を全うしようとする。打算無きその生き様は、純粋が故に、美しい。

そして、彼女の目の前に、一筋の光が差し込む。

その光を受けて輝くのは、みずみずしく咲き誇った白い花。

廻り姫は、ゆっくりと、大きく目を開ける。

その花は、廻り姫に微笑むように輝いていた。

「……しら……ゆり……白、百合……白百合……」

廻り姫の背後に、白百合が現われ、無邪気に花を摘む姿が演じられる。

「ああ、そうだ……それが……彼女の名……」

これが実在の出来事なのか、廻り姫の心情風景なのかはわからない。

「……かつて……私も……あそこに、いた……」

「――お姉ちゃん」白百合の声が聞こえた。

「そうだ……彼女は幼い頃、そう、呼んでいた……。『お姉様とお呼びなさい』と家庭教師に窘められても、二人きりの時は、うれしそうに、少し恥ずかしげに、そう呼ぶのだ。いつも一緒で、二人並んで笑い、時には諍い、それでも、すぐに仲直りした。その後は、よりいっそう絆が深まった気がした……あの幸せな日々は……もう」

廻り姫の頬に、一筋の涙がこぼれ落ちた。

「二度と、戻ってこない」

……私の、せいだ。剣を握った廻り姫の手に、ぎゅっと、力が入った。

「私のせいで、白百合は死んでしまったのだな……醜い権力争いなどに巻き込まれて、白百合は追い詰められて……私はそんなことす

ら、忘れていた……そして、絶望し……全てを捨てた。だから、私は、地獄に『いる』」

……待て。

「『いる』……だと？」その瞬間、

空気が、動いた。

そう形容するのが正しいかはわからない。だが、廻り姫は――エルレインは、一声で、がらりと流れを変えてしまった。私には、そのように思えたのだ。

「私は、『存在』を捨てたはずだ」

廻り姫の体に、力が灯る。全身のエネルギーを爆発させるように、突風のように、廻り姫は立ち上がる。

「なのに、なぜ私はここに『いる』？」

廻り姫は、観客に向かい、立ち尽くす。空気が、ピタリと止まる。

「ああ……そうなのか……」

――くくくっ、あはははははっ！　廻り姫は、狂ったように笑う。

「『存在』を『捨てた』ところで、私は、ここに『居る』ではないか」

その刹那、青魔導師が出現した。何も言わずに、廻り姫を見ている。

廻り姫が青魔道士に気づいた。

「計ったな、『理』よ。捨てるだけでは、駄目なのだ。私が『存在』する限り、白百合は運命から逃れられない。私が――黒百合が存在するから、運命が白百合を殺してしまうのだ。思えば、黒百合と白百合の間を取り巻く権力闘争こそが、白百合を死に至らしめたのであった。運命という『法則』が『存在』を繋ぐ『鎖』であるならば……」

廻り姫は、言う。

「『鎖』を断ち切れぬのであれば『存在』を消すしかない」

青魔導師は、おごそかに、口を開く。

「それは不可能だ。何人たりとも『存在』を消すことはできぬ。それこそ、私が作り出した『法則』なのだから」
『理』は廻り姫に向かい、非情に、言い捨てる。
しかし、廻り姫は動じない。
「いや、できる」
廻り姫は、胸に手を当てる。
「私のこの身を粉々にし、全ての存在に分け与えろ」
「何？」
「幾度も運命を巡り、わかったことがある。私の行動が、どちらのドレスを着るかという些細な事柄が、些細な違いまでもが、結末に大きな違いを与えたのだ」
廻り姫の独白を、青魔導師は聞く、石のように。
「……『違い』。そう。違いだ。人間は、違いを認識することで、他者を『認識』するのだ。それならば」
青魔導師が――『理』が、目を見張った。
「全てに遍在すれば、無いものと同じだ」
「全てに均一に存在することで、己を無くすということか」
『理』は、そのまま口籠もった。圧倒されたと言った方が、正しいかも知れない。
やがて、
「……いいだろう」
『理』は呟くように言った。
「お前の『存在』を粉々にし、三千世界へ振りまこう」
『理』は、杖を振り上げる。青い炎のような光が『理』を包み、舞い上がる。
「これでいい……これで、白百合は救われる」
舞台の中心に立った廻り姫の体を、光が包む。
「――だが、覚えておくがいい！」突然、廻り姫は声を張り上げた。
廻り姫は――エルレインは、観客に向けて、胸の内を宣言する。
「例え、私の『存在』が消え失せても」

彼女の熱い視線が観客の理性を焼き尽くす。
「私が抱いたこの思いは決して消えない！」
観客は熱に浮かされ、彼女の存在以外、何も考えられなくなる。
「刻みつけろ」
彼女の発する声、汗、肉体の躍動、熱、匂いまでもが在り在りと脳裏に刻みつけられる。彼女を中心に、空気が回る。
「私の全てを」
彼女が発する熱情と冷厳の渦に観客は取り込まれ、その中心に彼女はいる。
――嵐の中心に彼女はいる。
「私が出会った人々全てを」
彼女に動かされるのは観客の心だけではない。演者も、主役から端役まで、全ての存在が、心を突き動かされる。
彼女を中心とした存在の嵐が、彼女を取り巻く嵐となって吹き荒ぶ。
嵐は舞台を超えて、観客へと到達する。観客もまた、世界を構成する一部となる。
彼女が創造した世界が、嵐に乗って広がってゆく。劇場を、黒い嵐が吹き荒れる。
そして彼女は、前方へと腕を伸ばす。観客の視線が彼女の指先の延長線上へと引き付けられる。
そこには白い球が、あたたかな光を放ち、浮いていた。
それは、光に包まれて眠る白百合であった。
彼女は嵐の中へ手を伸ばし、白百合を――彼女の妹を抱き寄せる。
今、世界は二人を中心に回っている。
「どんなことがあっても、私は、あなたのお姉ちゃんだから」
そして彼女は妹への愛を叫ぶ。
「アタシの存在が消えても、アタシはあなたを絶対に守るから！」
その台詞は、廻り姫のものであり、そして、
――どうしても、入れて欲しい台詞があるんだ。

それは、マリナに向けた、メッセージであった。
「絶対に、あなたを守ってみせるから！」
彼女の愛。それは憎しみも、悲しみも、エゴも、自己否定をも超越した、純粋なる覚悟であった。
「……っ」
水鏡マリナは握った拳を胸に当て、何かをこらえるような、悲痛な表情をしていた。
その瞳には、涙が溜まり、そして、
舞台が暗転し、彼女の表情は暗闇に守られた。
そして、舞台の中心がスポットライトに照らされる。
何も無い。何も居ない。その場所を、ライトが照らしていた。
まるで、そこにはすでにいない存在――廻り姫を称えるように。
そして、幕は下りた。
静寂が、辺りを包んだ。
ぱら、ぱら。と、辺りからまばらな拍手が鳴り出した。
音の波は瞬く間に広がり、万雷の拍手が会場に響き渡る。
観客一人一人の熱がうねり、一体となって会場を揺らした。
一人、また一人と立ち上がり、一心に手のひらを叩き、今宵の主役を賞讃する。
マナも立ち上がり、涙で顔をくしゃくしゃにして拍手していた。
――にゃあーん、にゃあーん。帰還の時を告げる鳴き声が響き始めるが、
嵐のような拍手が、その声をかき消す。
気がつけば、隣にいたマリナは忽然と姿を消していた。
《――にゃんにゃん、にゃおーん！》休戦の鳴き声が、辺りに響いた。
そして全ては、無に還った。

不思議であった。
にゃんにゃん空間内で起きた出来事は、全ては無かったことになるはずである。
それなのに、この光景は何だろうか。
ずらりと立ち並ぶスタンディングオベーション。延々と響き渡るアンコールの声。
誰もが今夕の主役を待ちわびていた。
……記憶が、残ったというのか？
奇跡、という言葉が頭をよぎった。しかし、私は頭を振って否定する。
あり得ない。それはあまりにも都合が良すぎるというものだ。
今までの『法則』からすれば、あの感動的な舞台は、クライマックスは消滅しなくてはならない。
しかし、目の前の光景が、拍手の嵐が、それを否定している。
賞讃につぐ賞讃の嵐に、私は戸惑いを覚えていた。
「かいちょーさん」
泣き笑いでぐずぐずとなったマナが、
「よかったですね」
私に、微笑んだ。
ああ、この子は、矛盾も何も気にせずに喜んでいるのだな。
そして、その反応が最も正しいのではないかと思った。
思った瞬間、体の内側が、何か暖かい感触で満たされた気がした。
気がつけば、夕焼け前のエピローグで受けた精神的な傷が、癒されていた。
まるで粉々になった廻り姫の欠片が傷跡に入り込み、満たしてくれたかのように。
その想像に恥ずかしくなり、
「ほら、ひどい顔になってるぞ」
「ずびばせん……」
私はハンカチを取りだし、マナの顔を拭ってやった。

拍手は続く。
それにしても、当人はいつまで経っても出てこない。不審に思った私は、マナを残して舞台袖へと向かった。

舞台袖では満身創痍といった様子のエルレインが、座り込んでいた。
全身に汗の玉を光らせる彼女の表情は、全てを悟ったような表情をしていた。
「皆が呼んでいるぞ」
エルレインは放心したように、ライトの輝きを眺めていた。
「……エルレイン？」
はっと驚いたように、エルレインは私を見る。
「かい、ちょう？」
「どうした？」
エルレインは目をつむり、ゆっくりと頭を振る。
「なんだか……良くわかんないんだけどさ、アタシ今、すっごく満たされてる」
「そうか」
「何だろう、この気持ち……うん……これが、生きてるってことなのかな」
エルレインは目を閉じ、じっと拍手に耳を澄ましているようであった。
生きてる……か。
そうかもしれない。エルレインは、自分の才能を生かし切ったのだ。隙間漂流者であるということは、その『存在』は『隙間』にあるということだ。
『隙間』それは至るところにある。木々の隙間、物と物との間。
また、隙間は物質的なものだけではない。
隙間産業、人間関係の隙間、そして、人の心の隙間。
私は、エルレインが猫になった瞬間、その『才能』に気づいた。

エルレインは、猫を演じたのだ。人間関係の隙間に入り込み、人々の認識の隙間に入り込み、猫そのものを演じ、見事に騙したのだ。
その行動、まさに『演劇』の極みであった。
私はすぐさま友人を介し、演劇部に乗り込み、エルレインの才能を認めさせた。
結果、エルレインはその才能を存分に発揮し、そして――。
「皆が待っている」
言った瞬間、エルレインは、ふっと寂しげな表情になった。
「……どうした？」
エルレインは俯く。
「みんなが見たいのはアタシじゃない。アタシが演じたあの子だ。アタシが出て行ったところで、誰もアタシのことなんかわからない……」
「……なんだ、そんなことで悩んでいたのか」
「そんなこと、か」
エルレインは笑う。自嘲するように。
私はエルレインに、現実を突きつけてやる。
「私は知っている。一見キツそうに、ぶっきらぼうに見えて、本当は泣き虫で、恥ずかしがり屋で、ドジで、自虐的で、すぐに落ち込んで。けれど、誰よりも人情深く、妹思いで、妹の前では強くて、やさしくて、頼りになる姉として振る舞い、何時も妹を支え、妹の手を汚さないために、汚い部分は全部自分で被ろうとする。私を殺そうとするぐらいに」
「会長？」エルレインは、私を見上げた。
「エルレイン、お前は、そんなお前を演じればいい」
「アタシを、演じる……？」
「そうだ、お前が、お前自身を演じるのだ」
「アタシが……アタシ自身を？　でも、アタシなんか――」
私は、エルレインの両肩に手を置き、言う。
「自信を持て。――お前は美しい」

エルレインの顔が、一気に燃え上がった。
「な、な、な、何を……！」
「お前の生き方は美しい」
「ひゃっ、へっ、ああっ、そ、そういうことね、あははは……」
エルレインは引きつったような笑いを浮かべる。
「どうかしたか、何を動揺している？」
「な、何でもない！　ちょっと疲れているだけだよ！」
「そうか……それは大変だが、民の期待に答えてやれ」
「えっ、あ……うん……でも」
エルレインは両手を胸の前で組んで、もじもじしていた。
「さあ、しっかりしろ。今日この場だけは、お前が王だ」
座り込んでいるエルレインに、私は手を伸ばす。
「会長」
エルレインは、差し出した手を受け取ろうとしない。
「やっぱりやめとくよ」エルレインは微笑む。
「どうして、お前を望む人々が待っているのだぞ」
「アタシは、本来ここに居ちゃいけない存在だ」
「エルレイン、お前は――」
「一生に一度の、幻の公演……それでいい。それ以上、望んじゃいけない」
そう、大切そうに呟いた。その悟ったような清々しい表情をみて、私は何も言えなくなってしまった。
「会長」
エルレインが、再び私の名を呼ぶ。
「良い夢を、ありがと」
夢……？　これは、夢なのか？　彼女の努力は……。
……いや、違う。
「夢ではない！　お前の努力は、才能は、確かに観客の心を動かしたのだ！　それを夢というのなら、全ては空虚な幻に過ぎない！　お前は、お前の力で、この万雷の拍手を生み出したのだ！　エルレ

イン、お前は――」
「――そうじゃ！　夢なんかでは、終わらせんぞお！」
突然、甲高い声が響いた。
「……お子様、会長」
声の方を見やると、お子様界長が白百合のドレスのまま腕を組み、仁王立ちしていた。
お子様会長はつかつかとエルレインの側までやって来て、
――ぱんっ！　と、エルレインの頬を平手打ちした。
「なっ……」
「それだけの才能、わらわが望んでも手に入らぬ才能をやすやすと諦めるなど、わらわ達、演劇者への冒涜じゃ！」
「部長……でも、アタシは」
「――でももなにもなあいっ！　立てえぃっ！」
お子様会長は、一喝し、エルレインを無理矢理立ち上がらせた。
「お前はわらわと演劇をやるんじゃ！　やらないと……泣くぞお！」
お子様会長の瞳が突然潤みだし、今にも泣きだしそうな表情になる。
「……わたしからも、お願いします」
伊福部先輩であった。
「廻り姫さん……いえ、伊統エルさん、あなたを、正式な演劇部員として迎え入れたく思います」
「伊福部……先輩……」
伊福部先輩はエルレインのことをずっと快く思っていなかったはずである。その伊福部先輩が、エルレインを廻り姫としてではなく、エルレイン自身を迎え入れようとしている。
「勘違いしないでください。わたしは、あなたが居ないと、会長ちゃんが泣いちゃうから言ってるだけですからねっ。……あなたの演技には、少しは感動しましたけど……」
「わらわは泣かんぞ！　絶対に泣かんぞ！」
お子様会長はぴょんぴょんしてアピールしているが、その顔は今

にも泣き出しそうである。それを指摘されたお子様会長は、むきになったようにエルレインを指さす。
「わらわがお前を主役にしてやる！　――わらわが卒業した後も、ここに残ってお前をびしばし鍛えてやる！」
「会長ちゃん……それはいくら何でも無理だと思う」
伊福部先輩は、覗うように私を見る。
「それは、認めなければ泣きますか？」私は訊ねる。
「泣くもんか！　わらわは我が儘を通すだけじゃ！」
吠え、噛みつく様に、お子様会長は言った。
私は、じっと見つめるお子様会長に答える。
「……それこそ、お子様の特権です」
私は嫌味を含めてにっこり笑顔を作った。
「お子様って言うなー！」
お子様が突進してきたので、すかさず頭を掴む。
「このこの！　ひきょーじゃぞ！」ぶんぶん腕を振り回すが全て空振りである。すごい！
「わははははは」
「んもうっ、伊統くんは、会長ちゃんを虐めないでくださいっ」
「……そうだぞ。会長、小っちゃい子をいじめるな」
「こらっ、わらわはいぢめられてなど……」
お子様会長は、はっと声の主を振り向いた。
エルレインが、気まずそうに顔を背けて立っていた。
「やっぱりアタシ、もう少しだけ、がんばってみます」
「ほんとか！」お子様会長が表情を輝かせて駆け寄る。
エルレインはしゃがんで、お子様会長と目線を合わせる。
「部長」その瞳を、眩しそうにエルレインは観た。
そして、抱きしめた。
「ありがとう」目をつむり、安らかな表情で言った。
「……いいのじゃ。お前は、わらわの好敵手じゃ」
お子様会長は、ぎゅっと抱きしめ返した。

「伊福部先輩も、ありがとう」エルレインは微笑んだ。
「わ、わたしは別に、感謝されるようなことは何も……」
「あなたは、アタシの名前を呼んでくれました」
それがどれほど重要なことか、伊福部先輩にはわからないだろう。
「そ、それがどうしたと……それより離れてくださいっ！　会長ちゃんはわたしのですっ」
「あ、ごめんなさい」
どう考えても伊福部先輩の言い分がおかしいが、エルレインは素直に離れようとした。
その腕を――お子様会長が掴む。
「あ、あの、部長？　すぐに行きますから、その手を離して――」
「いやじゃ」お子様会長はにっこり微笑んだ。
「ちょ、ちょっとまって、アタシは会長と話が」
「駄目じゃ。観客が待っておる。これ以上待たせてはおれんでの」
「でも！」
「……わたし、わかりました」伊福部先輩は、俯いていた。表情が陰り、見えない。
「え？」「へ？」「何がですか？」
「エルさんが会長ちゃんと離れられないのなら、エルさんもまとめてお世話すれば良いんです……」
がっ、と、伊福部先輩は二人の肩を、包み込むように握った。
「さあ、お二人とも、行きましょう。ねっ、え・る・ちゃんっ！」
伊福部先輩の満面の笑みを見た瞬間、私は理解した。この人、常識を越えたな。
「伊福部先輩が壊れた！」エルレインが愕然として叫んだ。
「良いぞ！　ふくちゃん！　ごーごー！」
「さあ行きますよー！」
「ちょ、ちょっと！」
エルレインは二人に連れられ、進んでゆく。
「会長！」

エルレインは、私を見る。
「アタシ、アタシ自身を演じてくるよ！」
そんな彼女に私は問う。
「お前は、『本来ここに居ちゃいけない存在』だろうか？」
「えっ？」エルレインは戸惑うような表情になる。
「その答えが、すぐにわかるさ。――エルレイン」
この時の私の表情は、もしかしたら、心から笑っていたのかも知れない。
「やはり、お前は美しい」
エルレインの顔がみるみる真っ赤になり、目を大きく見開いたまま硬直し、そのまま両脇を抱えられて、エルレインは舞台へ引きずり出された。

歓声が上がる。会場の熱が、一瞬にして沸き上がる。
舞台の中心で、スポットライトを浴びたエルレインは目を見開いて立ち尽くしていた。
熱を帯びた観客から、次々と賞讃の声が上がる。
やがてその表情が、くしゃりと歪む。
エルレインの瞳から、ぽろぽろと涙がこぼれ落ちる。
なんども、何度も拭うけれど、一度決壊した防波堤は、涙をとどめておくことができない。
隣でお子様会長がエルレインを優しげになだめる。その表情はもう、好敵手としてのものではない。慈愛に満ちた母のような眼差しで、エルレインの背中をさする。
観客からは励ましの声。それを受けて、エルレインは益々涙を流してしまう。
感極まったエルレインは、口を開く。
「あ……がと」
声の震えを必死で抑え、涙を拭うのをやめ、精一杯声を張り上げる。

「ありがとーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！」
爆発するような喝采が轟と響き、会場の熱は頂点を迎えた。
……まったく、やりすぎだ。
「えるちゃーん！　えるちゃーーーーーん！」隣ではマナが必死に手を振っている。
幕が下りても喝采はいつまでも鳴り響き、止む気配はない。
どう収拾を付けるか、それが問題だ。
幕が開く。拍手が大きくなる。幕が閉じる。アンコール。幕が開く。拍手がまた、大きくなる。この繰り返し。
どうするか、と思っていると、
エルレインが観客に向けて両手を振った。
観客もそれに釣られて、両手を振り替えした。
拍手が、止んだ。
「みんなーーーーー！　ありがとーーーーーー！」
輝くような笑顔で元気いっぱいに手を振るエルレイン。
あんな表情が、できるのか。
私はその笑顔を、やはり、美しいと感じていた。
幕が閉じた後も、エルレインの笑顔は、しばらく焼き付いて離れなかった。
閉じた幕を観ながら、私は呟く。
「エルレイン、お前は誰でもない存在だ。だからこそ、きっとお前は何にでもなれる」
天照高校学園祭は、こうして幕を閉じた。

第十五話　天照高校後夜祭

学園祭が無事終わり、私の仕事も一段落ついた。
必ずしも満足行く結果ばかりではなかったが。
一人になりたくなった私は、夕暮れの中、休息がてら学園を離れ、近くの河原で一人佇んでいた。
「終わっちゃいましたね……」
見ると、いつの間にかマナが隣に立っていた。よくここがわかったものだ。
「エルちゃんとマリナちゃん、また元のように仲直りできるでしょうか？」
肯定して欲しい、と懇願するような表情で、マナは私を見上げる。
だが私は、その期待にはこたえられない。
「さあな。本人達次第だろう」
あくまでも、二人の問題なのだから。二人が落としどころを見つけない限り、解決はない。
「そうですか……」マナは落胆したように目を伏せた。
そのような暗い表情をされると、私としては、気まずくなる。いや、気まずくなること自体、おかしな事なのだが……。
しかたがない。私は、マナに少しだけ教えてやる。
「まあ、そう悲観的な話でもないさ」
「かいちょーさん？」
「二人が元通りになることはないが、お前の言う『仲良く』させることは可能だろう」
エルレインの思いは確実にマリナに伝わっているはずだ。マリナも、何処かでエルレインを必要としている。エルレインが存在していたという事実が微かに影響しているのか、別の要因なのか、今はわからない。だが、マリナがエルレインに少なからず好意を抱いていることは、これまでの行動から導き出される明白な事実だ。

「そして、それを導くことも」
あとは、二人の関係を阻むものが何かを明確にできれば……。
マナは私を見上げ、目をぱちくりさせた。そして、ふっと微笑んだ。
「なんだか、不思議です」
「何がだ」
「わたし最初、かいちょーさんは、分からず屋の頑固さんだと思いました」
そして、マナは呟くように付け足す。
「わたしの魔法も全力で否定しますし」
「お前のは、ただの手品だ」
「それです！　わたしの魔法は手品じゃありませんよう」
マナは眉根を寄せて、少しむくれた。
「でも、かいちょーさんは、エルちゃんを助けてくれました。だから、不思議だと思ったんです」
「何が、不思議なのか？」
私には、マナが何を言わんとしているのか、さっぱりわからなかった。
しかし、次にマナが放った一言で、私は、自分自身も気づいていなかった問題を浮き彫りにされた。
「だって、現実主義者のかいちょーさんだったら、絶対に信じないと思うんです」
マナは時々核心を突いてくる。私の思っても見ないところから。
「当然、エルちゃん達が未来から来たなんて、信じない。エルちゃんを見捨てちゃうんじゃないかって、わたし、はらはらしました」
霧島書記長の思い人を見抜いた時からうすうす感じてはいたが、こいつ、人を、よく見ている。
「でも、かいちょーさんは、エルちゃんを信じて、エルちゃんを救おうとしました」
それがマナの天然の資質なのか。それとも、私が今認識している

マナはバカのふりをしているだけで、実際は洞察力の鋭く、計算高い人間なのか。

「ねえ、何でですか？」

マナは、試すように、純粋無垢な視線を向けてくる。

そう。マナの言うとおりだ。私は、超常現象的なものは一切信じず、今まで全てに現実的な解答を突きつけてきた。そういう生き方をしてきた。

――イトーくん。

赤毛ポニテ悪魔の言葉が、記憶から引き出される。

――あなた、変わったわ。

薄い口元に浮かんだ冷笑が、脳裏に浮かび上がる。

アカネ嬢の言うとおり、私は変わったのだろうか？　変わったのだとしたら、なぜ、変わったのだろうか。

――誰のせいかしら。

私は、隣に座った少女を見る。

――イトーくんが変わったのは、その金髪ばいんばいんちゃんのおかげねっ！

思い出した瞬間、体が火照った。絶対に怒りが原因だ。他の原因など、あるはずがない。

マナが原因で私が変わったなど、絶対にあり得ない。ふざけるな。私が、このような勘違い妄想人間に影響を受けるなど、あってはならないことだ。

第一、目の前にいる妄想少女に、この私が影響を受ける理由など何一つ無い。

そう、何一つ無いのだ。いくら養女にし、同じ屋根の下で暮らしているとは言え、所詮は赤の他人。私が保護しなければどうなっていたかわからない、この脆弱な存在に、未来の王、伊統会長が影響を受けることなど、あり得ないのだ。

そんなこと、あり得ないし、絶対に許せない。

……そうだ、許せないのだ。私は、良い理屈を思いついた。

「私は、許せなかっただけだ」
エルレインの存在が消えてしまったことで、未来がどう変わったか。それを考えれば、エルレインがどれだけ重要な役割を担っていたかは自明だ。
最初のマリナは、良くできた人格者であった。いつもは穏やかで、それでいて、怒る時は嵐のように怒る。
しかし、エルレインがいなくなったことで最初のマリナは消え、強気のマリナが出現した。おそらくエルレインが消えたことにより、彼女が担うはずであった役割がマリナに押しつけられたのだ。
マリナが代わりに戦う事になり、そして今、追い詰められている。エルレインの存在が未来から消えたことにより、マリナを取り巻く現状が悪化したように、私には思えるのだ。故に――
「いなくなることで、周りに悪影響を与えてしまうような存在が、どうして『いない者』として扱われねばならないのか。それは、有用な存在をみすみす無下にしているようなものではないか。まさに人的リソースの非活用。大いなる無駄だ」
マナは、ぱちくりと瞬きした。そして、またもやくすりと笑った。
「かいちょーさんは、やさしいですね」
「なぜそうなる」論理の飛躍だ。お前はバカか。
「なんだかんだ言って、結局みんなを助けちゃいます。かいちょーさんがかわいい女の子だったら、きっと魔法少女になれますよ」
「ばかもの、私は男だ。将来は立派な日本男児である。魔法少女になど慣れるわけがあるまい」
「うーん、なら……ヒーロー？」
「は……？」
「魔法少女じゃなかったら、かいちょーさんはヒーローです。ほら、前番組ですし」
「バカ言え。私はヒーローでも無い。そもそも何もしていない。きっかけを与えているだけだ。あとは勝手にそれぞれが努力しているだけだろう。人心掌握、人を操ることこそ、完全管理社会の基盤と

なる技能だ。私はそれを体現しているに過ぎない」

そう、人は悪だ。信じてはならない。自分の意のままに統制する事が必要だ。私は、それを実行しているだけだ！

「照れ隠しです」

「なんだとっ！」ぐりぐりして欲しいか！

「あはは。むきになりました」マナはころころと快活に笑った。

私は、握った拳を解いてしまった。力が、抜けてしまったのだ。

きっとマナの反応に呆れたからに違いない。

決して、『照れ隠し』という一言が、私の心臓を射貫いたからではない。

「かいちょーさんは、やさしいから、信じたんです。エルちゃんが未来から来て、未来に帰れなくなっちゃって、それで、未来のみんなから忘れられちゃって、一人ぼっちになっちゃって、そんなエルちゃんをかわいそうだと思ったから、かいちょーさんはエルちゃんを助けたんです」

マナは、いつものように、夢見がちでまっすぐな視線を、私に向けた。

マナは、いつも臆さずに『かわいそう』という言葉を使う。同情される方の身になれば、『かわいそう』という言葉ほど残酷なものはない。

『かわいそう』という言葉をかけられた人間は、嫌でも自分を『かわいそうな人間』だと認識させられてしまう。

それは、自分をかわいそうだと思わない人間にとっては、全人格を否定されるに等しい。一方、自分を『かわいそう』だと思う人間にとっては、『かわいそうな自分』を強化し、肯定する魔法の言葉、そして、『かわいそうな自分』へと陶酔し、埋没させてしまう破滅の言葉だ。

私もかつて、幾度となくその言葉をかけられた。そのたびに否定するのに、どれだけ苦労したか。

その言葉を、マナは臆さずに使う。それは、無知故の偽善的精神

から来るのか、それとも、言葉のもたらす意味を理解していて、それでもなお現実を変えようとする、強さ故の現実的精神から来る行動なのか、私にはまだ、捉えきれないでいる。

目の前にいる少女は、私が捉えきれない程、不確かな存在に思える。

そんなマナが、私を『やさしい人間』だと宣い、そして、

「だからきっと、わたしの魔法も、いつか信じてくれます」

聞いた瞬間、私の頬がかあっと熱くなり、不意に、恥ずかしくなった。

……ふん、バカめ。信じる、信じないだと？　本当にそんな考えで生きているとしたら、笑いぐさだ。そんな幻想、即座に否定しなくてなはならない。

「エルレインが未来から来たなどと、はなから信じてなどいない」

「えー、それはおかしいですよう。また照れ隠しですか？」

照れ隠しという言葉に、私はカチンときた。

「未来から来たかどうかなんぞ、関係ない」

「関係ない？」

「言ったろう、私は、見たものしか信じない。私が認識したのは、私達以外の全てから忘れられた、影の薄い、一人の少女だ。……妹思いのな」

彼女が妹思いなのは間違いない。だから、付け加えても問題ない。

彼女――火野坂エルレインがなぜ今回ような状態に陥ったのか、夕焼けにゃんにゃんなるタイムマシンは本当にあるのか、隙間漂流者とは結局何なのか、なぜ、驚異的なまでの演劇の才能を発揮できるのか、それは、彼女自身の才能なのか、それとも、隙間漂流者であるが故の特殊な技能なのか……そもそも、隙間漂流者という言葉を信じるのもおかしいか。

だが、現にその事象は起こっているわけで、信じる信じないという次元では無くなっているのも事実。未解明な事象は多く、様々な推測が頭をめまぐるしく駆け回る。

しかし、少ない証拠と不確かな証言だけで考えても、意味がない。
故に私は、自分の見たもの経験したものから導き出される、一つのシンプルな解答に帰結する。
「未来という単語を『帰る場所』に変換する。帰る場所に帰れなければ、ここで生きていくしかあるまい」
その為の場を、私は整えただけだ。私はそう答えた。
「かいちょーさん……」
マナは瞳をうるうるさせる。どうやら、感動しているらしかった。
今の話のどこにそんな要素があるのか……ばかばかしい。
マナは目をごしごしと擦り、それでもなお食らいついてくる。
「でも、これだけは言えます。普通の人なら相手にしませんよ。生徒会の皆さんだって、揃って普通じゃありません」
「……お前が本気で夢見る勘違い少女なのか、それとも実はまともなのか、時々わからなくなる」
「ひどいです。わたしはまともな方ですよっ！」
「ふん、そうかもしれんな」
「その言い方は、信じてませんね！」
それは違う。私は、マナの言い分を『半分』認めている。
「私はお前以上にまともでない人間を、知っている」
「えっ、そうなんですか？」
「ああ」
一見、超常現象に見える事象も、綿密な調査と実験を重ねれば、必ず現実的な解答にに帰結可能であると、私は確信している。
そして、もし仮に、それでも否定できない超常現象が現われたとしたら、それは――『特異点』だ。
特異点、それは、今までの価値観をひっくり返す存在。
その特異点を基準に、次の理論が作られる。ただ、それだけなのだ。現実的解答は消えず、ただ、拡張される。現実的事象が拡張されれば、『まともじゃない』は『まとも』になることもあるだろう。
私は一人、そう呼べるかも知れない人物を知っている。だからこ

そ、生半可な超常現象もどきでは驚かないのかもしれない。
マナが今挙げた生徒会の面々は、それぞれ一癖も二癖もある一見不可思議な存在だ。だが、それすらも霞んでしまう才能を私は知っている。
今は消息不明の、あの男の才能を。
あいつの才能に比べれば、マナの自称『魔法』など消し滓のようなものだ。
マナがあいつをの才能を知れば、ショックで寝込むか、もしくは目を輝かせて『魔法ですっ！』と決めつけるに違いない。
故に、マナに会わせることは止そうと思っていたのだが、むしろ、そいつに引き合わせてやる方が、手っ取り早いかもしれない。
「……まあ、お前にもその内見せてやらないことも、ないかもな。そうすれば魔法だのという世迷いごとなど言っていられなくなるさ」
真の特異点たり得る存在を知ったマナは、自らが井の中の蛙であったと早々に悟るかも知れない。そして、幻想は解ける。いい計画だ。
「やっぱり……かいちょーさんは変わってますね」
「お前に言われたくない」自称魔法使いの妄想患者が。
会話は途切れ、ふいに静寂が訪れた。
幻想論議は疲れる。それに、不毛だ。そんなことよりも、もっと話すべき事は沢山ある。現実的なことを、話そう。
私は、ふっと一息つく。そして、マナに訊ねる。
「今日は、楽しかったか？」
「はいっ！　とてもとっても楽しかったです！」
マナは今日の楽しかったことを語った。身振りを交えて一生懸命に伝えようとするマナの表情は、確かにとても楽しげであった。
その仕草を見ていると、私の内にも暖かなものが流れ込むような気がした。
この暖かなものは、なんであろうか。昔は知っていた気がするが、

今は知らない。
ふと、暖かなものを、言葉にしてみようと思った。
「よかったな」
言って後悔した。思った以上に陳腐な言葉であったからだ。しかし、
「はいっ！」マナの笑顔は益々輝いた。
不思議だ。たった一言、たわいもない言葉のはずなのに。やはり、目の前のこいつは不思議な反応をする。
いや、それとも、私が何かを知らないだけなのか……。
「でも……」マナの表情が、突然陰った。「かいちょーさんとも、一緒に回りたかったです……」
「私と……？　私と一緒でも、退屈するだけだろう。私はお前のはしゃぎ様を全力で止めるぞ」
「そんなことありません。家族は、一緒に楽しまなきゃだめです！　ねっ、おとーさん」
マナはにっこりして小首を傾げた。金髪がさらりと流れ落ちた。
「……甘えるな、ばかもの」
「だって、もう、こんなに楽しいこと、無いかもしれないから」
そう言ったマナの表情は、どこか寂しげであった。
その横顔に、一言呟く。
「安心しろ」
「へ？」
私は立ち上がる。
「帰るんですか？」マナも立ち上がり、おしりをはたく。
名残惜しそうな、すがるような目で、マナは私を見上げる。
「何を言っている、天照高校の学園祭は、これからが本番だ。これから後夜祭が始まる」
「こうや、さい……？」
そう、天照高校学園祭は終わった。
次は、天照高校後夜祭である。

――ひゅーーーーーどんっ！
私達の後ろで、大きな音が鳴った。
「な、な、なんですか？　敵襲！？」
「何を言っている、あれだ」
マナが振り返った瞬間、暗く染まった空に、光の大花が咲いた。
「わあ……きれい……」
マナは、夏祭りを体験したいと言っていた。
「……ぽんぽんに響きますね」マナはお腹を押さえて呟く。
「……ぽんぽんに響くな」私も頷く。
その願いは、後夜祭で果たされる。お前が本当に楽しむのは、これからだ。
私達は並んで、しばらく花火を眺め続けた。
「――会長さま」にこにこ微笑の長谷川であった。
「長谷川。丁度良いところに来たな。もちろん――」
「――用意してございます」長谷川は大きめの紙袋を渡した。
「流石は長谷川だ。着付けしてやってくれ」私は親指でマナを指す。
「かしこまりました」
「えっ、えっ、何ですか？」
シュッという音がすると、一瞬でマナの服装が替わった。いつ見ても鮮やかな着付けである。
「えっ、わっ、わあっ……」
マナは藍色に花柄をあしらった浴衣を着ていた。いつの間にか髪も結わえている。マナは自分が着ているものを見て、袖をふりふりきゃっきゃと喜んだ。
隣に佇む長谷川は、実に満足げな微笑であった。
「浴衣に似合う、メイクも施しておきました」
確かに、魅力的なナチュラルメイクが施されている。
「長谷川流、超・メイキャップ術か。お前、本が出せるぞ」
「いえ、わたくしは、端の方にいる存在ですから」
「また謙遜する。あまり自分を卑下しすぎるな。有能なる執事よ」

「そのお言葉が頂けるだけで、光栄でございます」
「長谷川、お前は――」
「――わたくしは所用がございますので」申し訳なさそうな微笑であった。
「そうか。残念だ」
「わたくしのことは気にせず、ごゆるりとお楽しみください」長谷川は笑顔を少しも崩さず、頭を下げた。ううむ、何という忠臣か。
自分の尻尾を追いかける子犬のように、自分の背中のリボン状になった帯を見ようとくるくる回るマナに向き直る。
「マナ、夏祭りは好きか？」
マナは止まり、ばいんばいんの前で両拳をにぎった。
「わかりませんけど、是非体験したいです」
「では、行くか。私は屋台を回る」私は頷き、河原を歩き出す。ふと立ち止まり、背中越しに訊ねる。「マナ、お前も来るか？」
マナは意味がわからなかったのか、きょとんとした後、
ぱあっと、笑顔に変わった。
「はいっ！　一緒です！」

天照高校後夜祭は、天照高校だけでなく、天照町全域を巻き込んでのビッグプロジェクトである。ちなみに今年で二度目。今回は、いつまでも居座る残暑にかこつけての『ラスト夏祭り』という名目で企画、周知した。
一応は、明星鈴奈会計委員の神社で祀っている神に感謝を捧げるという建前を取ってはいるものの、その実体は、普段の生活で溜まった鬱憤のガス抜き兼、町おこしエンターテイメントである。
普段は暗い夜道に、町中至る所に張り巡らされた提灯の明かりが灯る。配線が蜘蛛の巣のように縦横無尽に広がり、天照町の夜を幻想的に彩る。
町中には本格的な屋台が散らばり、我が社と霧島財閥の財力と人脈を駆使して、一流の味と、昔懐かしい遊戯を提供する。

いわゆる社名を高めるための地域貢献事業としても、一役買っているのだ。
夏祭りとハロウィンの隙間で開催されるからか、町は普段見られないような賑わいで活気付き、都心やその他周辺から来た人々によって、黒山の人集りとなっている。
あと2~3年もすれば、地域恒例の祭りとして定着するだろう。
むろん、そういう計画である。
「わあっ、すごい、すごいですっ！」
喧噪、人混みの中、マナは負けじとはしゃぐ。
「これ全部、かいちょーさんが作ったんですか？」
「私は企画だけだ。それぞれの役割を担う人々の努力が、これだけのものを作り上げたのだ」
「すごい、すごいです……魔法みたい」
その純真なはしゃぎ様を見ると、私達の努力も浮かばれるというものである。
「魔法ではない。現実だ」無論、そんなそぶりも見せるつもりは無いが。「適切な計画力と行動力さえあれば、魔法などに頼らなくとも、大きな事業は可能なのだ」
と、私が滔々と諭しているのにもかかわらず、
「あ、あれも綺麗……やっぱりかいちょーさんは魔法使いなんですねっ！」
このざまである。私の苦労を返せ。
「さて、私はパトロールに……」
「あっ！」マナが突然立ち止まった。
「どうした？　人混みの中でいきなり止まると危ないぞ」
マナがじっと見つめている先を見ると、
演劇部の面々と一緒に楽しそうにはしゃぐエルレインの姿を見つけた。
どうやら、私達にはまだ、気づいていないらしい。
「える、次はリンゴあめを食べに行くのじゃ！」

「ちょ、ちょっと部長、そんなに引っ張らないで……」
「さ、エルちゃん、急いで、ごーごー！」
「い、伊福部先輩まで……」
「そんなことでは主役になれんぞ！　主役は誰よりも楽しむのじゃ！」
「あ、アタシは主役になるなんて、一言も言ってませんから！」
言葉とは裏腹に、エルレインの表情はまんざらでもなさそうであった。
「あ、会長、マナ！」
エルレインが私達に気づき、助けを求めるように手を振り駆け寄ってきた。
「マナ、浴衣着たんだ。かわいいな」
「はいっ、ありがとうございます！」マナはうれしそうに袖を広げた。
「お前のもあるぞ」私は強引に紙袋を押しつけた。
「あ、アタシはいいよ……そんな、女の子らしい格好、苦手だ」
エルレインは慌てて浴衣の入った紙袋を突き返そうとする。
「――そうはいかんのじゃ！」
「――そうです。いけません」
お子様会長がエルレインの制服スカートをがしっと掴み、伊福部先輩が浴衣の入った紙袋を取り上げた。
「いとー、こいつ借りるぞ」
「着付けは責任を持ってわたしが」
「ええ、よろしくお願いします。門限までに返してくだされば、こちらとしては問題ありません」
「門限は何時じゃ？」純真なお子様会長は、律儀にも訊ねてくる。
私は顎に手を当て、考えるそぶりを見せる。
「……そう言えば、決めていませんでした。そちらで勝手にお決めください」
お子様会長が、にっと治療中の白い歯を剥き出し、悪戯な笑顔を

見せた。
「おーる決定じゃ！」
「えっ、ちょっと、ちょっとまって」
「さ、行きましょう。伊統くんも、マナちゃんも楽しんでくださいねっ」
「あ、アタシはマナ達と――」
「ほらほら、邪魔しちゃ悪いでしょ」
「えっ、なになに、どういうこと？」エルレインはあたふたしながら聞くが、
「こどもは知らなくてもいいのじゃ。行くぞ。ごーごー！」
言っていることの意味がわからないが、嵐のような二人である。
エルレインは大丈夫だろうか。
ふと観ると、三人の後ろには友人もいた。いつ見ても涼やかな笑顔である。
私の視線に気づいた友人が、片目を閉じる。
私は頷く。友人にまかせておけば安心だろう。
「ゆーじんくんも、行きますよー！」
「はいはい。じゃあね、会長。またあとで」
友人は爽やかに手を振り、エルレイン達と合流した。
「か、かいちょー！」
エルレインが、慌てたような声色で叫ぶ。
「アタシ生きるよ！　この時代から、未来のマリナを助けるんだ！」
エルレインの笑顔は、祭りの雑踏の向こうへ消えていった。
「……まったく、調子のいい奴だ」
「あ、かいちょーさん、いい笑顔です」
マナが、私を見ながら言った。
「ああ、確かに良い笑顔だな」エルレインは。
すると、マナはくすっと笑って、困ったような笑顔を見せた。
「違いますよう。かいちょーさんのことです」
「……ばかもの。からかうな」

「たまにはお返しです」マナは、屈託のない笑顔であった。
その返しに、私は言葉を失ってしまった。今まででは、あり得ないことである。
この一ヶ月で、マナもまた成長したと言うことか。
気づくとマナは、エルレインが消えた雑踏を見つめていた。
「かいちょーさん」
「ん？　なんだ？」
「エルちゃん、楽しそうでしたね」
「そうだな」
「わたし、うれしいです。うれしいんですけど……」
マナの視線が下がる。その表情は、少し寂しげである。
「でも……なんだか、エルちゃんが、遠くに行ってしまったみたいで、少し悲しいです」
なんだかんだ言って、マナはまだ精神が幼い。だから、私は教えてやらねばならない。
「そういうものだ。子供はやがて巣立ち、親を離れる」
マナは驚いたように顔を上げ、傷ついたような表情で私を見た。
「わたしは、かいちょーさんと、ずっと、ずっと一緒にいたいですっ！」
寂しげな表情で、マナは私を見つめる。
「……お前にも、その内わかるさ」
私は、マナの頭を撫でた。
「もうっ、ソウくんのばかっ！」
マナは頬を膨らまし、ぷいっとそっぽを向いてしまった。
『ソウくん』か、私の本名の断片だ。マナはやはり、私の過去を知っている。それは、意識してのものなのか、それとも、無意識のものなのか。
「お前、やはり、私のことを――」
振り向いたマナは、笑顔であった。怒ったと思ったら、次の瞬間には笑顔。ころころと変わる、この秋の空のようだと私は思った。

「かいちょーさんは、全ての人を幸せにするとこーげんしてはばからないんですよね」
マナの呼び方は、『かいちょーさん』に戻っていた。
「そうだが、なんだその言い回しは」
「えへへ、ちょっと、かいちょーさんを真似してみました」
「次真似したら、ぐりぐりな」
「えーなんでですか？」
「気に入らん。なぜか知らんが気に入らん」
「でもでも、かいちょーさん、異文化交流の基本は、先ず相手の真似をすることから始まるじゃないですか」
「貴様は初めて分明に接する原始人か何かか」それになぜ、そのことを知っている？
「違います。魔法使いですよう」
「わたしは魔法など信じない」
「なら、信じてもらえるように、がんばります」
「マナよ、夢を見ることは悪いことではない。だが、見ても良い夢と、見るべきでない夢があるのだ」
「なら、魔法は、見ても良い夢です」
マナの瞳は色とりどりに輝き、自信に満ちあふれていた。
「かいちょーさんは、わたしに現実を教えてくれるんですよね」
「そうだ。お前に現実とは何かを教え、真人間に矯正してやる。その上で、まっとうな夢を目指して頑張ればよい」
「なら、わたしは、かいちょーさんに魔法を教えてあげます」
「なに？」
マナは、突然、私の手を取った。
「たのしみましょう」
マナは、ふわりと微笑んだ。
「全ての人々を幸せにしたいのなら——かいちょーさんも幸せにならなきゃ、嘘です」
マナはにこっと笑って、走り出した。

「お、おい、マナ！」私には、この町の警備という役割が！
「楽しみましょー！　あはははは！」
マナの手に、腕に、流れる髪に、笑顔に、引き寄せられるように足が自然と動き、私の体が前へと進む。
夢のような光景が、広がった。
人々の賑わい、屋台から立ちのぼる熱気、幻惑的な提灯の灯り、舞い上がる金髪から香る仄かな匂い、白く、小さな、微かな温もりが伝わる手、そして、溢れんばかりにこぼれ落ちる、彼女の、楽しげな、笑み。
私はいつしか役割を忘れ、彼女と共に屋台を廻った。
わたあめ、りんごあめ、焼きそばに、射的、水風船釣り。私の頭の中はのぼせ上がったように淡い光に包まれ、まるで、夢の中に居るかのようであった。
夢の中で、私は、満たされていた。
――ソウくん。
そう、私はかつてそう呼ばれ、そして、今と同じ気持ちで時を過ごした事があった。
――お母さん。
黒髪の女性が、優しく微笑む。やさしく、大事そうにぎゅっと手を握ってくれる。
耳には祭りの囃子。目には星々のような提灯の輝き。
――楽しいねっ。
――うん、楽しいね。
私は知っていた。母の体は、既に限界だった。それでも私は母と一緒に居たくて……見ない振りをしたのだ。
私の人生において絶頂の記憶。そして、罪の記憶。
なぜだ。なぜ思い出すのだ。
思い出したところで、あの時は還ってこないのに。
あの人は、もう二度と、微笑んではくれないのに。
忘れていたいのに。

――えっ、お祭りを知らないの？
誰だ、これは、私の記憶なのか？
――じゃあ、ボクが連れてってあげる。
そして……そうだ。『本当ですか？』と、彼女はうれしそうに微笑んだのだ。
――うん、約束だ。
彼女……？　いったい、それは……。

気がつけば、私は一人、学園内のベンチに座っていた。
「私は……いったい……」
「会長？」
見ると、友人の涼しげな笑顔が私を覗き込んでいた。
「大丈夫？」
「ああ、問題ない」
「どうしたの、こんな所に一人で？　マナちゃんは？」
言われて気がついた。マナが、居ない。
「いや、ついさっきまで……」
「ははあ、変な事して、振られちゃった？」
「誰が！」私の品行方正は揺るがない！
「あはは、冗談」
「まったく、いくら友人といえど、言っていい冗談と悪い冗談がある」
「あはは、そうだね」友人は笑いながら、私の隣に座った。
まったく悪びれた様子がない。ある意味、流石である。
マナがいないと言うことは、途中ではぐれたのか。いや、それ以前に、私はどうしてここにいるのだ。
マナと一緒にいると、なぜ、このような不思議な目にあってしまうのか。
マナ、不思議な少女だ。
いきなり私の前に現われ、いつの間にか、共に暮らすことが当た

り前となっている。
だが、彼女が何者なのか、未だに掴めてはいない。
「あいつの正体を必ず暴いてやる」
「恩返しの鶴は、正体がばれると消えてしまうよ？」
「あいつが恩返しの鶴に見えるか？」
「マナちゃんは鶴と言うより、もふもふ小動物だね」
マナが、もふもふ。と言う姿が容易に浮かび、私は慌てて頭を振った。
「言い得て妙だが、気に喰わんな」
「なら、妖精かな？　ほら、ちっちゃくてかわいいし」
「友人よ、自称魔法少女の変態の毒気にあたり、視覚がおかしくなったか」
「なにいってんの。マナちゃんがかわいいのは客観的な事実じゃないか。藤堂さんだってメロメロだし、あの気高い審美眼を持つ霧島さんだって暗に認めてる。養生部なんか写真集まで作って発売する始末」
「単に、外人童顔ばいんばいん幼女が珍しいだけだろう」ツチノコみたいなものだ。
「会長にしては珍しくこだわるね」
「どういう意味だ？」
「あははははは」友人は笑った。
「まったく、ごまかすな」
それにしても、と私は話題を変える。
「友人、あの舞台は見物だったぞ」
「それはどうも」
「しかし、経費がかかりすぎではないか。あの無数のディスプレイと言い、派手な演出効果と言い……」
「……何を言っているんだい？」
「……は？」しらを切られた、のか？
「いや、だからさ、そんな演出、やった覚えはないけど？」

「いや、待て。確かに私はこの眼で……」
「じゃあ、みんなに聞いて見なよ。第一、そんな予算、ウチの部には無いじゃないか。おかしな会長だ」
友人は、あははは、と笑った。
そんな馬鹿な。確かに私はこの眼で見た……はずだ。
それなのに、知らないだと？
何が何だかわからない。わからないまま戸惑うのも癪である。だから、
「わはははははは」
とりあえず笑っておいた。
「あはははははは」
「わはははははは」
「――男子二人で、何ベンチに座って笑いあってるのよ。友人くんは美形だから、あなた達、変に誤解されるわよ」
「それこそ貴女にとっては願ったり叶ったりだろう――霧島書記長」
「ま、確かに。どうかしてたわ」
前を見ると、美しい浴衣姿の霧島書記長が、冷ややかな目でこちらを見ていた。
「貴女は、あの舞台を観たか？」
「ええ。とても感動的だったわ」
「無数のディスプレイについて、意見が欲しい」
「あなた、頭がおかしくなったの？」
霧島書記長に、露骨に嫌そうな顔をされた。
明らかに『何言ってるのこのキチガイ』的な反応である。これ以上訊ねては、私の立場が危うくなる。
「……冗談はこの辺にしておくとしてだな」
「あら、あなたも冗談を言うのね。全然笑えないわ」
軽いやけどは負ったが、被害は最小限に食い止めた。ディスプレイの真偽は後回しにするとして、すかさず、別の話題を振る。
「後夜祭の準備、ご苦労だったな」

「急に何よ。まったく、あなたが急に『後夜祭は夏祭り風にする』って言い出して、こっちは大変だったのよ」
「すばらしい演出だ。流石は霧島財閥の跡取りだな」
「それだけ？」書記長は、露骨に不満そうな顔をした。
「綺麗な浴衣だな。……これ以上に何を？」私はおどけて見せた。
「労っても、褒めても、感謝はしないか、徹底してるわね。それにしても……あなたにしては珍しいじゃない？　当初の計画を土壇場でねじ曲げるなんて。何か理由があるのかしら」
「特にない」
「わかりやすいわね」書記長は、獲物を捕らえたような目で、私を見た。
「何が？」
「あの子の為でしょ？」
「私は――」
言い返そうとした瞬間、
――花火が爆ぜた。霧島書記長は、何処か寂しげな表情で、光を見上げた。
「あの子の過去は、結局わからずじまい」
「それは貴女の諜報力不足だ」
「いいえ、あなたも知らないんでしょう？」
「まさか、私はあいつの全てを掌握している」
「なら、あなたの私生活は私が全て掌握してるわ。あなたにプライベートは無いの」
「スター並みの待遇だな。貴女の人生の一部を消費できて光栄だ」
書記長は、私の軽口を無視して続けた。
「気をつけた方が良いわよ。普通の人間なら、必ず生きてきた痕跡というものがある。でも、あの子には無い。ということは……」
――普通では、無い。霧島書記長は暗に、そう告げている。
「ところで、あの子は？」
「知らん。はぐれた」

「そう」霧島書記長の表情が、突然深刻なものになった。
「どうした？」
「あの子、大丈夫かしら。もしかしたら、いきなり消えたり……」
――まさか！
いや、今まで一緒にいたのが、気がついたらいきなり消えてたのだ。
まさか、マナは本当に……！
私の内側で、何かがざわつく。
「こうしてはいられんっ！」私は立ち上がる。
「会長？」友人が私を呼ぶが、私は気が気ではない。
「マナを、マナを捜さねば――」
その時、校内放送の開始を告げるベルが鳴った。
《ぴんぽんぱんぽーん！　迷子のご案内でーす！》
……まさか。
《伊統会長さん、伊統会長さん、伊統マナちゃんが……って、ちょっと！》
がさごそと、スピーカーの向こうで音がする。
《かいちょーさんっ！　どこですかぁ！　かいちょーさん、うわーーーん！》
「――あんのバカ！」あいつは一体何歳なのだ！
「そういえば、さっきあの子を見たわ。心細そうにきょろきょろと誰かさんを探してたわよ。あの人混みの中、一人で大丈夫かしら」
霧島書記長は白々しく言った。
「なぜ言わない！　なぜ保護しなかった！」
「たぶん、その方が面白くなると思って――」
霧島書記長はくすくすと笑った。この魔女め。
「せいぜい足を引っ張られないように、がんばりなさい」
「ふん、私の娘だ。どんな変人だろうと、まっとうな人間にしてみせるさ」
霧島京香はきょとんとし、そして、

「会長くんらしいわね」
ふっと笑った。
「さて、面白い顔も見れたし、私は渡くんを探しに行くわ」
「ワタル……ああ、一年の物部くんか。最近はご執心だな」
私の皮肉に霧島京香は、
「ええ。私は――彼が好き」
当たり前のように返した。こちらが、恥ずかしくなるくらいに。
「あの少年の消しゴムへの執着は確かに侮れんが、基本的には普通の少年だぞ」
「あなたにはわからないでしょうね」なにやら、意味深な言動である。
「さては、ショタコンの気があったか」
「それは、付随的な要素に過ぎないわ」
「貴女は強い男が好きと口外していたが、本郷光太郎ではないのか」
「流石は会長くん。女心がわかってないわね。いいえ、人の心がわかってないのかしら」
「人の利害関係メカニズムと、欲望への意志は理解しているつもりだが？」
霧島書記長は冷ややかな視線を向けたまま、口を開かなかった。
「まあ、貴女が誰を好きになろうとどうでもいい。肝心なのは、貴女の弱点が増えるということだ」
「あら、何でそうなるのかしら？」
「大切な人が人質に取られた時、貴女ならどうする？」
「そうならないように、事前に策を張り巡らせるわ」
「満点の解答と賞讃したいところだが、それは無しだ」
「いいえ、有りよ。守りたい大切な人がいるから、より強くなれるの」
「まさか書記長からそんな歯の浮くような甘い台詞を聞くとはな」
「実感したのよ。だから言えるの」
「そうか。私には一生わからないだろう」

「いいえ――あなたにも、直にわかる時が来る」
「そんな時は来ない！」自分でも驚くほど、私は声を荒げてしまった。
それも仕方があるまい。私は『実感』以上に、『体験』しているのだから。
「――会長」窘めるような声の方を見ると、友人が意味深な笑みを浮かべていた。
……見透かされているな。少し、感情的になりすぎたか。
「かわいそうな子」霧島書記長が言った。
「それは貴女だ。あのような繊細な子に心を奪われてしまうとは」
「彼は誰よりも強くなるわ」
「そうは見えないが？」
彼は決して目立とうとはしない。むしろ、目立つことを避けている節がある。
強いと言うよりは、鋭い。自分の力で自分を傷つけ、自滅してしまうタイプだ。
「じゃあ、なぜあなたは渡くんのことを物部『くん』と君付けで呼ぶのかしら」
「さあな」言えない。『くん』と付けないと、男の子か女の子かわからなくなるから、なんて言えない。というより……それはどうでも良い。
「まさか霧島書記長、貴女は物部渡に関する、何か重大な秘密でも握っているのか？」
「握ってないわ。隠してもいない。独占してるだけよ」
「物は言い様だな。まあいい、今の私はそれどころではないからな。とにかく、演出はすばらしかった。特に、この花火だ」
「その件だけど……」
霧島書記長は口をつぐむ。まるで、いいあぐねているようである。
「何かな？」
「……花火は、私じゃないわ。会長くんじゃないの？」

霧島女史は、物部くんを探しに戻っていった。
最後に、
「ところで、私が『あの子』って言ったのが、マナちゃんだってよく分かったわね」
という嫌な捨て台詞を残して。
だが、私はそんなことにかまっている余裕など無かった。――この時は。
「友人、マナを迎えに行ってはもらえないか？」
「やだ。君が迎えに行きなよ。あの子が一番迎えに来て欲しいのは、君だ」
友人の返答は、極端すぎるほどに冷たかった。
「友人」
「ボクは、君の助けにはならない。絶対に。まさか、忘れたの？」
そうであった。慌てるあまり、私はどうかしていたのだ。
「じゃあね。もしかしたら、気が向いたら、マナちゃんに会いに行くかもね」
「そうか」感謝する。と、私は内心呟いた。

友人と別れ、私は花火が打ち上げられたであろう方向を目指してひたすら進んだ。
花火はどうやら、校舎の裏山から打ち上げられたらしい。
生い茂った木々雑草をかき分け、ようやく視界が開けた。そこで見たのは……。
――茎から上がない花畑。
森林に似つかわしくない、火薬の匂い。
そして、真上で爆発した、最後の花火。
異界が、目の前に広がっていた。
まるで、無数の首無しの死体のように、つぼみのない茎が、穏やかな風に揺れる。

ただ、それだけだ。それだけなのに、何故かグロテスクなものを感じる。

誰もいない。ただ、首無しの花だけが、ゆらゆらと揺れている。

異常だ。私の中の何かが、そう判断する。

驚きのあまり、声が、なかなか出ない。

何度も喉を嚥下し、ようやく絞り出た言葉が――。

「葉上……お前なのか？」

呟いてから、気づいた。無意識の言葉だった。

しかし、このような芸当ができる人間を、私はあの男以外に知らない。

だが、彼がなぜ、こんな事を……？

あの男――『特異点候補者』――葉上大介。

私の前から、消えた男。

拭えぬ直感が、暗い未来を示唆していた。

第十六話　床下の幽霊部員

風呂場に、私の悲鳴がこだました。
「マナっ！　いい加減にしろっ！」
湯気の向こうには、バスタオル一枚のマナが立っている。
「いいじゃないですかっ！　家族なんですから一緒にお風呂に入るべきですっ！」
「エルレインと入れ！」
「エルちゃんとはいつも一緒に入ってますし、楽しいです。かいちょーさんとも一緒に入りたいです！」
「お前は何もわかっていない。私は男で狼だ」
「え、かいちょーさん、狼男さんなんですか？」
「色々な意味でな！」くそう、こいつにはたとえが通じないのであった。「そもそも、お前は羞恥心というものが足りん！　健全な男女の付き合いというのがな――」
「だから、わたし、しゅーちしんがわかりませんっ！」
「……威張るな」
だが、わからないものを理解しろと言う方が、無理なのも事実。
「うーむ」私は思案し、そして、閃いた。「お前に、羞恥心というものを見せてやろう」

しばらくして、私達は二人、風呂場に向かった。
「かいちょーさん、いったい何を」
「――しっ、感づかれたら終わりだ」
扉の向こうから、声が聞こえる。
「あ、これ懐かしいな。マナのかな……ちょっと、使ってみてもいいよね」
私は、扉に手をかける。

「では、行くぞ。羞恥心というもの、しかと刮目せよ」
扉を勢いよく開けた。
「かっぱー。あはははは……は？」
私達は見てしまった。全裸のエルレインが、シャンプーハットを被って「かっぱー」という姿を。
「おっ、おまっ、か、かっ――」エルレインは顔を真っ赤にして、口をぱくぱくしている。
「どうだ、マナ、あれが羞恥心というものだ……と思うが」
エルレインは、驚きすぎて、体を隠すのを忘れている。
「えっ？　いつものエルちゃんですよ？」
「まあ、確かにそうなのだが……エルレイン、全裸だぞ」
「えっ……ひゃわあああっ！」
エルレインは、はっとし急に前を隠し、白い背中を見せて座り込んだ。
「どうだ、あれが純情なる乙女の清浄な恥じらい方だ。マナよ、男に裸を見られた時は、あのように恥ずかしがるものだぞ。それこそが、羞恥心だ」
いやあっ、いやあっ、いやあああああっ！　エルレインの悲鳴がこだまする。風呂場にある色々なものが飛んでくる。私は最小限の動きで避ける。
「ほー、なるほどー」マナはじっと、エルレインのしぐさを観察している。
「あ、アンタはっ、アンタ達はっ、何をしてるんだっ！」
顔だけこちらに向け、エルレインは悲鳴を上げる。真っ赤で涙目である。うむ、いい反応だ。
「マナが、羞恥心がわからんと言うのでな。実際に見て貰うことにした」
「エルちゃん、ありがとうございますっ！　勉強になりますっ！」
マナはぺこりとおじぎした。
「べ、勉強っ？　じ、実際にって、お前、あたっ、アタシのっ……

裸……」
「ああ、大丈夫だ。問題ない」
「問題ないって――！」声が上擦った。
「お前は私の娘だ。それに、隙間漂流者になった時に、既にお前は全裸を公開しているではないか」
「だ、だからって――」
「第一、つるぺたで下の毛の生えてもいない子供の体など、見ても欲情しな――ぐあっ！」
風呂桶がもの凄い速度で額にぶち当たり、意識が吹っ飛んだ。
「最っ低！」というエルレインの声と、
「なるほど！」と何かに感心するマナの声を聞いたのが、
私が覚えている最後の瞬間だった。

鏡を見る。私の額には、長谷川お手製の大きな湿布が貼ってある。実に間抜けだ。
「そもそも、お前は羞恥心があり過ぎるのだ」
「あんな姿見られたら、誰だってああなるわあああっ！」
エルレインは絶叫する。吠える。泣きわめく。
「ああ、『かっぱ』――」
湯飲みが、嵐のような勢いで飛んできた。私はかろうじて避けた。
「……かっ、かっ、かっ」殺す気か。殺す気だ。目撃者ごと事実を抹消する気だ。
「ふんっ！」エルレインはぷいっと、そっぽを向いた。
「しゅーちしんがありすぎると、風呂桶を投げちゃうんですね。勉強になります」
しまった、マナが色々と誤解している。
「お前のせいだ」エルレインを指さした。
「アンタのせいだろうがっ！　最低！　最低っ！　ホントさいてーっ！」エルレインは顔を真っ赤にして反論した。恥にせよ怒りにせよ、真っ赤にはなるのだな。

「まったく、今さら裸を見られたくらいで、何を――」
「――じゃ、じゃあアンタは、裸を見られても問題ないって言うのかよっ！」
「ああ、時と場合によるが、問題ないな」
「くうっ……この人でなしめっ！」
「まあ、普通の人間ではないな。未来の王だ」
「くそうっ……事実だから否定できないっ！」エルレインはわなわなと拳を振るわせた。
「――かいちょーさんは、恥ずかしがってましたよ」
「えっ？」「マナ！　お前！」無邪気な笑顔でぬけぬけと！
「だって、わたしがかいちょーさんと一緒に入ろうとしたら、エルちゃんと同じ反応――もごもごむーっ」
「マナ、少し黙っていようか、な」迅速な口封じに限る、何事も。
――氷のような殺気！　これはっ！
「……かいちょぉ」エルレインが、恨みがましい視線を私に向けている。「……アンタ、裸が恥ずかしくないんだよなぁ」何やら、じわじわと迫ってくる。
「時と……場合による……」なんだ、その、わしゃわしゃとした、いかがわしい手つきは。
「アタシのも見たんなら自分のも見せろおっ！」エルレインが跳びかかってきた。
「変態！　変態がいる！」恥ずかしすぎて、おかしくなったのだ。
「どっちが変態だ！　この覗き魔っ！」
「私が覗き魔なら、お前は脱がせ魔かっ！」
「二人とも仲がいいですねー。時々羨ましくなります」
「――マナさま、お茶のおかわりは、いかがですか？」
「あ、長谷川さん、ありがとうございます。いただきます……ずずずっ……うーん、とってもおいしいです」
「貴様らっ！　この窮地に何をやっているのか！　助けろ！」襲われる！　脱がされる！

「えっ？　きゅーちなんですか？　仲良しさんですよね、長谷川さん」
「わたくしは自業自得だと思うのですが」長谷川は、微妙な微笑で答えた。
なるほど、無垢一名、他は敵だらけだ。
そして、私は押し倒された。
「ああっ……止めろ！　婦女子として、そのアグレッシブさはどうかと思う！」
「アンタこそ未来の王としての自覚が無いわっ！　よくもっ、よくもあんな！」
「英雄色を好むと言ってだな！　彼の将軍も、風呂場でお手つき子供沢山！」
「黙れ！　アタシが受けた辱めをアンタにも受けさせなきゃ気が済まない！」
「長谷川さん、これは何と言うんですか？」
「そうですね……一般的に、修羅場と言います。マナさまはこのようなお痛をなさらぬよう、お気をつけください」
「そこ、何を冷静に解説しているのか――あーッ！」服がっ！
「こ、こらっ、変な声出すなっ！」
「出させているのはお前だ！」
「別にアンタの変な声なんか聞きたくもないし、裸も見たくないっ！　でもそれじゃあ気が収まらないっ！」
「ならば止めよう早まるな！」
「もう後戻りはできないっ！」
まずいエルレインの目つきがおかしい病んでいるっ！
「――わかったーっ！　わかったから！　お前に羞恥心克服の極意を教えよう！　それで手打ちだ！　お前も助かり、私も助かるｗｉｎｗｉｎだっ！」
エルレインはじーっと私を値踏みするように見下ろし、そして、ぷいっとそっぽを向いた。

「……ふんっ、責任は取って貰うからな」
あらゆる意味で、鉛のように重い言葉であった。

「と言うわけで、今からエルレインの羞恥心克服訓練を行なう」
「何が、と言うわけでだ！　何だよこの紅白の幕は」
「趣向を凝らした」形から入るのが、私のやり方だ。
「わけがわからない……」エルレインは頭を抱えた。
「先ずは上半身の服を脱ぎます」私は颯爽と脱ぎ捨てた。
「――できるかあっ！　アンタは男でアタシは女だっ！」
「ぺったんこのくせに」
「下の方も脱がしてやろうか！」
いかん、エルレインの眼がまた病んでいる。ごまかさねば。
「まあ、先ずは手本だ。見てろ、おじさま達にはどっかんどっかん大ウケだ」
「なんか、すごく胡散臭い」エルレインは懐疑的な眼で私を見た。
「くそじじい……もとい、我が祖父の大いなる遺産。秘技『超・腹踊り』！」
そして、私は盛大に散った。

まさか、あれだけおじさま方にどっかんどっかんだった実績を持つ、我がくそじじい直伝の秘技が、いとも簡単に敗れ去るとは。
私の惨状に、エルレインは笑顔でこう言った。
「ああ、うん。なんか、気が済んだ」実に晴れやか、実に爽やか。恨みが晴れたかのような爽快感を体現した表情である。
「さ、マナさま、おやすみのお時間ですよ」
「ふぁー」
三人は、さっさと部屋を出て行った。去り際に、捨て犬でも見るような視線でエルレインが一言。
「あんまり、気を落とすなよ」まさか、本気で心配されるとはっ……！

くっ……私は膝をつかずにはいられなかった。
女性陣には、驚くほど不評だった。長谷川が女性だったとするなら、そもそも女性しか居ないが。ええい、つまりは全員に不評だったのだ。
この違いはなんだ。お酒の力が必要だったのか。いやいや、私達は未成年だ。それとも、『超・どじょうすくい』の方が良かったか？
いや……やはり、ジェネレーションギャップか。まさか、十代のうちから経験するとは。いやいや、いかんいかん。これしきのことで、挫折する伊統会長ではない。鉄のよろいを、鉛の精神をっ！
軽い絶望と共に、その日の夜は更けていった。
そのまま朝が来るまで、何事も無かった……はずだったのだが、
そうだ、始まりは、突然の声だった。

マナは、こどものような拙い口調で一生懸命に歌う。
「ぱけらぱーのーぱっけらぱーのー♪」
はいはい。ぱおぱおぱぱっぱー……歌い終わってさっさと寝ろ！
私はピアノを演奏しながら考える。どうして……こうなったのか。

「かいちょーさん、何してるんですか？」
深夜。元・牢屋の、現・防音室でピアノを弾こうとしている所を、マナに見られてしまったのだ。私はごまかすために、自然と嘘をついた。
「ピアノの……練習」
おおっ！　と、マナの目が輝くようになったのは、言うまでもない。
その結果、幼稚園の、お歌の時間的様相になってしまった。
歌い終わったマナは、満足げに頬を上気させて言う。
「わたし、この歌が好きです」
「ほう、なぜだ？」
「えっと……なんとなく！」

「一字一句、具体的に説明せよ」
「えー、またそれですか？　うーん……」
マナは頭を抱えて、必死に考える。
「……取り返しのつかないところが……なんとも」
マナは意外とペシミスト的趣味なようである。アホか。
「ん？　お前ら、なにやってんだ？」エルレインまでやって来た。
どうやら扉が半開きになっており、そこから演奏の音が洩れていたらしい。
くそう。またもや事態がややこしくなる。
「あれ、ここ……牢屋だったよな」エルレインは室内に入るなり、辺りを見回した。
「何を言っているのだ。あれははったりだと言ったろう。長谷川お手製のセットだ。長谷川の技術は某ハリウッドをしのぐ勢いだからな。このことが表に知れれば、医術と同じく引っ張りだこだろう」
「……あんたの執事は、いったい何者なんだよ」
「何を言っている、長谷川は長谷川ではないか」
「すぐに現実的解釈を持ち出すくせに、アンタのその開き直りがわからないっ！」
「……ところで」私はさっとエルレインに視線をやる。「お前も歌うか？」
「あ、アタシは、その……歌は……苦手だし……」エルレインはみるみる戸惑いだした。
はいはい。だろうと思ったよ。恥ずかしがり屋さんはさっさと寝ろ！
「どなどなどーなーどーなー♪」マナはまたもや悲しめの曲を歌っている。
「お前も、そろそろ寝ろ。寝ないと背が伸びないぞ」
「いやですっ。もっと歌うんですっ！」
マナは目を大きく見開いて、ぎんぎんに輝かせている。
「あんまり歌うと著作権お化けが来るぞ」

「お化け！」マナはがつんとショックを受けたように、ぎょっとした。
「そうだ。奴らはこわいぞー」主に、金銭的な面でな。
「お化けいやですっ！」
「ならば就寝のお時間だ。魔法少女の夢を見るなら、起きて見ないで寝て見ろ」
「で、でも……こ、こわくて……」
マナはがくがく震えている。逆効果だったらしい。
「かいちょーさん、何か子守歌みたいな曲を弾いてくれませんか」
この甘えんぼうさんめ！　ふざけるな！
「……一曲だけだぞ」しかたがない。
「時々思うんだけど、アンタって、時々相当甘いよな」エルレインが苦笑する。
「気のせいだ！　合理的思考の帰結に過ぎんっ！」
マナが眠ればこの場からいなくなる！　それだけだ！
私は気を取り直して、鍵盤に手を置く。
考えるまでもなく出てきたのは、やさしい、旋律。私は内に流れる旋律を、指の先から、鍵盤へと、乗せてゆく。
この曲を弾いていると思い出す。母の、やさしく、きびしい指導を。そして、楽しかったあの頃の思い出を。
この曲を弾いている間だけ、私は現在から飛び出し、過去へと赴く事ができる。
この曲は、私にとってのタイムマシンなのだ。
母との優しい記憶がありありと蘇る。ずっとこの記憶に浸っていたい。
だが、そうはいかない。旋律は終盤へと入り、そして必ず、終わりを迎えてしまう。
演奏を終えて残るのは、ほろ苦いものとなった記憶の残響と、そして、
過去は変えることができないという、残酷な現実だけだ。

演奏が終わっても、拍手は無かった。マナはすやすやと眠り、エルレインの体にもたれ掛かっている。エルレインは座り、やさしげな視線で私を見つめていた。

「すごいな会長、ピアノも弾けるんだ」エルレインが口を開いた。穏やかな声だった。

「まあ、な」母に教わった、大切な技能だ。

「やさしい……曲だったな……でも、なんか、ほんのり、寂しい」

「わかるのか」

「何となく……それに、なんだか懐かしいような、気がするんだ……」

そう語るエルレインは憂いをおびたような表情であった。

その表情を見つめていると、私は、どこか、不思議な気持ちになった。既視感……だろうか。未来から来たはずの少女に、なぜか、懐かしい感覚を感じてしまったのだ。

「なあ、会長……」

「なんだ?」私の感情は、エルレインの問いかけに中断された。

エルレインは、下を向き、何やらもじもじしていたが、

「……また、弾いてくれるかな?」ぼそっと、呟くように言った。

「ああ。また弾いてやるさ。お前が人生を全うする限りはな」

「あ、ありがと……」エルレインは、はにかんだ。

「さあ、夜も遅い。早くマナを寝かせてやってくれ」

「うん。わかった」エルレインは立ち上がり、そっとマナを支えてやる。そのまま扉の方へと歩いて行く。扉に手をかけた瞬間、ふと、立ち止まった。

「会長」

「ん?」

「おやすみ」

「ああ、さっさと寝ろ。良い夢を」

「うん」

エルレインはマナを連れて、部屋を出た。

さて数々の妨害があったが、ようやくここからが本題だ。
二人が出て行った後、私は、しっかりとドアを閉めた。ドアを閉めれば、この部屋は防音になる。これで、外に音は漏れない。
私はピアノの前の椅子に座りなおし、指に力を入れ、叩きつけるように旋律を奏でる。
それは、『絶対に普通では奏でることのない不自然な旋律』だ。
すると、何の変哲もない壁に切れ目が奔り、扉のように、開いた。
いや、扉なのだ。――秘密の地下空間へと通じる。
私は螺旋階段を下りてゆく。途中で滅菌のスプレーが噴射される。
そして、扉に行き着く。扉を開くと、眼下に広大な緑の大地が広がった。
養生部特別地下研究施設である。広大な敷地には昼間の太陽のような照明が灯り、地上では見慣れぬ植物が自生している。上から見下ろすと、まるでジャングルのようにもみえる。戦前にはシェルターだったらしいこの空間をさらに広げ、私が研究施設に作り変えたのだ。
さらに螺旋階段を下り、地面に降り立ち、そのまま進む。
しばらくすると、何やらおかしな光景が見えてきた。私は近づき、目を凝らす。
そこには――少女が、倒れていた。
少しウェーブのかかった黒い長髪は、床に乱れている。
少女は奇妙な服に身を包んでいる。体のラインにぴっちり密着した、白い服だ。
遠目から見ると、まるで白いタイツを着ているように見える。
しかし、さらに近づいてみると、近未来映画で科学者達が着ているようなデザインの、不思議な光沢を放つ、洗練された白いボディスーツであることがわかる。
少女の周りには赤い液体が広がり、少女はその中心に浸り、うずくまっていた。

その右腕は前方に伸び、赤い液体の端っこから、少女の指へと線が伸びている。
赤い線は文字になっていた。まるで、ダイイングメッセージである。
その文字は、こう書かれていた。
『いとーか――』途中で力尽きたようだ。
なるほど、最後の力を振り絞って、自分を殺害した犯人の名前を書いた訳か……。
途中書きでも、ここまで書かれれば、容易に推測できる。
『いとーかいちょう』。そう……。
目の前の少女を殺害したのは、私である。
「……って、そんなわけあるか！　起きろ！　イナイ！　井内ユウ！」
私は少女――井内ユウを揺り起こす。
体に触れた途端、ぞっとするほどの冷たさを感じた。
まさか――本当に……。
「ういー……」井内が、突然奇声を上げた。
「何を……やっているのだ、お前は」私は内心、ほっと胸をなで下ろした。
「死体ごっこー。うひひっ、いとくん、驚いた？」
「ふざけるな！」
一喝を気にもとめず、井内は寝ぼけ眼で地面を見た。
「あー、ダイイングメッセージが途中書きだよー。これは行けませんな。井内ちゃん人生、最大の失態です」
「お前なあ……」私は呆れ、頭を抱えた。
このふざけた増えるワカメみたいな髪をした奴こそ、養生部幽霊部員の井内ユウである。人格破綻者であり、ちょっと気を許すとよくわからん寒いギャグを連発する。我が学園きっての危険人物である。
井内は目を爛々と輝かせて、訊ねる。

「さて問題です。ダイイングメッセージはなぜ途中書きだったでしょーかっ？」
「それより私はお前がなぜ死体になっているのか聞きたい」
「せーかいはー井内ちゃんが途中で寝オチしちゃったからでーす。がっはっはっ」
「お前は一体、何をやっているのだ……」本当に、頭痛がしてきた。
「だってー暇だったんだもん」
「暇だからって、こんな事をやるな！　……で、これはなんだ」私は地面に広がった赤い液体を指す。
「トマトジュース、鉄分添加。貧血気味のお嬢さんにどうぞ」
井内は血まみれではなく、トマトジュースまみれであった。こんなトラップに一瞬でも引っかかってしまった自分に、情けなさを感じずにはいられない。
「バカ言ってないで、さっさと、洗い流してこい」
「うーい……のぞいちゃ、ダメだぞぅ」
「誰がっ！」
「うひひっ。じゃ、ちょっと待っててねー」
井内は跳びはねるように走り出す。なぜか足が地面につく度に、ぴょこぴょこという奇妙な音が鳴る。数歩歩いたところで、井内は止まり、振り向いた。
「あ、そうそう。待ってる間、飲んでて良いから」
「……何を？」
井内は、赤い液体がぶちまけられた地面を指した。
「トマトジュース。井内ちゃんスープ入り。なかなか飲めないんだからねっ」井内は軽くウィンクした。
「誰が飲むかあっ！　さっさと行け！」
「さ、じゃあ、おいとまして、後は若いもんだけでごゆっくり……」
私は、その一挙手一同を無言で見守る。
「いとくん！　無視はダメ！　心が寂しくなるよ！　突っ込んで！　でないと井内ちゃん、死んじゃうっ！」

神に祈るように手を組み、本気で泣き出しそうな、傷ついて寂しそうな表情で私を見てくる。
「もうお前に突っ込むのはこりごりだ」特に、わけのわからん寒いボケにはな。
なんでこんなめんどくさい奴が、我が屋敷の地下に引きこもっているのか……。
「じゃあしーぬー、つまんないからしーぬー」井内は驚くほど脱力し、地面を左右にごろごろ転がった。
「じゃあ死ね」
井内はぎょっとし、すかさず叫ぶ。
「いとくん、そこは全力で止めるところだよ！」
「お前の死ぬ死ぬ詐欺は聞き飽きた」
「いとくぅん……『はがみん』無き今、井内ちゃんにはいとくんしか生身で話せる人間いないんだよう」
「黙れうっとうしい外へ出ろ。あと葉上はまだ生きている……はずだ。勝手に殺すな」
「井内ちゃんが人見知りなの、知ってるくせにー」
「じゃあ数学の未証明問題にでも取り組んでろ。あっという間に人生を棒に振ることが出来るぞ」
「数学は嫌い。得意だけど」井内は無意味に胸を張った。
「お前ほど数学の才能がありながら、数学嫌いも珍しいだろうな！」
「だって一瞬で答えがわかっちゃうんだもん。証明なんてめんどくさいだけだしー」
初めて井内の解答を見た時は驚いた。
なんせ、回答欄以外が、全て綺麗まっさらなのだ。それなのに、答えだけは合っている。私はカンニングを疑ったが、いくら調べてもそのような事実は見つからなかった。
真偽を調べるために完全監視の下でテストを受けさせたところ、井内は複雑な模試の証明問題を一瞬にして終わらせた。めんどくさそうな顔で、じっと問題を読むように視線を滑らせた後、鉛筆を持

ち、直接答えのみを書いたのだ。
その才能に私は惚れ、輝かしい未来を井内に示し、口説いた。
しかし、井内は首を縦に振らなかった。その頃の井内は誰とも打ち解けることなく、無表情な少女だった。私の誘いを断わった井内は、すぐさま逃げた。
後で聞いた話だが、この時の彼女は自分の才能を知られたくなかったらしい。なんでも自分の才能のせいで両親が離婚した事が原因らしいが、井内は多くを語らない。
私はこの逸材をのがしたくない一心で彼女を追い回し、法律すれすれの範囲でつきまとい、説得し、未来を語った。
井内は私が視界の隅に入っただけで逃げ出すようになり、仕舞いには怒り出した。それでも私は諦めずに説得した。
そして、何が決め手だったのかは忘れてしまったが、井内は私の申し出を了承した。その時はまさか、こんな変人だとは思っても見なかった。
私は井内ユウを養生部の研究主任として迎え入れ、丁度空いていた屋敷の地下空間に一流の研究設備を整え、彼女に与えた……所までは良かったのだが……。
それこそが、最大の過ちであった。
あまりに居心地が良すぎたのか、彼女はそのまま引きこもってしまったのだ。私は現在の保護者である彼女の祖母に連絡し、引き取って貰おうとしたのだが、
「まあ、ユウちゃんが？　それはすばらしいわ。あの子、お友達と仲良くすることなんて無かったから。どうぞ、ユウをよろしくお願いします」
と、逆に至極丁寧にお願いされてしまい、今に至る。
「お前は今、世界中の研究者を敵に回していることを理解しているか？」
「え、井内さん株大暴落！　まさかのストップ安です！　諸行無常は世の常と言うけど、あんとき売っときゃよかった井内ちゃん！

後悔先に立たず！　ああ、残ったのは膨大な借金だけ！　かくなる上は切腹をー」

やけに舞台めいた口調で、エア切腹を井内は演じる。観客として見ている方は、身が凍る思いである。

「バカ言ってないでさっさとシャワー浴びてこいっ！」

「やりたい盛りの高校生くんはせっかちさんなんだから」

こういう時に、人は人を殴りたくなるのか。私は自分の感情を噛み締めた。

井内は『シャワー』という単語に反応したのだろうが、血まみれのような格好で言われても、何とも思わない。それこそ、うっとうしいだけである。

「じゃあ、待っててね、だーりん（はあと）」

やけに芝居がかった口調としぐさで、ぴょこぴょこという奇妙な足音を立てながら、井内はシャワー室へと向かっていった。

無論、私は井内の『だーりん』ではないし、そのようなこと、絶対にお断わりである。

しばらくして、井内は戻ってきた。戻ってくるなり手で口を覆い隠し、

「井内ちゃんの……飲んでくれたんだ……うれしいっ！」いかにもわざとらしく感動して見せた。

「――掃除しただけだっ！」

「ですよねー」井内はうひひっと笑った。

その湯上がり姿を見て、ふと思う。

「お前、いつもその白いボディースーツだな」

「はっ、井内ちゃんとしたことがあっ！　湯上がりで火照った体を包むのは、きわどい下着だけと相場が決まっていたのに……ごめんね……不肖な娘で……ううううっ」

「娘でもなければ、そういうことを言っているのでもない！　単にそのボディースーツのことを言っているのだ」

「ああ、これ？　すごいっしょー。おしっことか濾過して、ミラクルジュースにしてくれるんだよ。ボトラーさんも安心だねっ！　……飲んでみる？」
「誰が飲むかあっ！」
「そういう性癖はなしっ……と」井内は指で手のひらにメモするような動作をした。
「まったく、お前とこうして遊んでいる暇はない。さっさと成果を報告して貰うぞ」
「そうでした。待ってました！　ん……」井内は、私に向かって両手を差し出した。
「……何か？」
私にはわかっていた。わかってはいたが、ただ井内の言いなりになるのは癪であった。
「世の中、ギブアンドテイクで成り立ってます。さ、ほれ、早く」
井内はくいくいっと手首をスナップさせ、欲した。
「今週の。はっはっ」井内はお預け状態の犬のように、これ以上我慢できないといった様子むき出しである。そこには、純粋な欲望しかない。
こいつに対して駆け引きをするのも馬鹿らしいと思った私は、
「……ほれ」渋々隠し持っていたものを渡した。
それは、週刊で発行される漫画雑誌であった。
「いつもありがと、いとくん大好きー」
井内は週刊誌をものすごい勢いで剥ぎ取り、大切そうに抱きしめて言った。
「あの漫画の連載が終わるまでは死ねないんだよねー」
ちなみに井内は外に出られないため、週刊誌は毎週、私が買ってくる。
「私はお前の親御さんか何かか？」
「ううん、いとくんはいとくんでしょ。おバカさん？」井内は地べたにうつぶせになり、雑誌をぱらぱら捲りながら、いかにも投げや

りな様子で返事を返した。
「不敬罪で島流しにしてやろうか」
「死ぬよ？　ネット無いと死ぬよ？」
「その漫画の連載が終わるまで死ねないのだろうが」
「うーん……そうだなーでもこれ、井内ちゃんがこどもの頃からやってて、今でもまだ話の半分くらいしか終わってないって作者が話してたし……」
井内はにっこり笑って、私を見た。
「いとくん、このちょーしで、一生、やしなってね」
聞く者が聞けば、プロポーズの言葉である。が、
「その手は喰わん。自分の力で生きろ」
「えー、ケチー」
「ケチで結構。ギブアンドテイクだ。さあ、報告しろ」
「んー……これ読んでから」
物語に没頭しているのか、返事はまたもや投げやりであった。
結局、私は井内が漫画を読み終わるまで待たされた。
「はふー、今週もおもしろかったー」井内はほっと一息ついた。
漫画を読んでいる間の彼女は、息を止めているのではないかと錯覚するぐらい静かで、ページを捲る動作と、絵と文字を追う目の動作以外は、微動だにしない。
「よかったな。では、報告しろ」
井内は露骨に嫌そうに眉を顰めた。
私の内側から不快な感情が沸き上がってきたので、私は本日報告して貰う項目をまとめたアジェンダを、叩きつけるように井内の目の前に提示した。
「アジェンダなんて格好付けてるけど、結局は、ただの進捗確認項目だよねー」
「まあ、な」それは否定しない。
先ずは、先日校内の情報ネットワークを騒がせた、ウィルスの解析結果からだ。

「これいっじょうは、わっかんねーきゃはは」
井内は両手を挙げた。実に清々しい。これが本当のお手上げ、
「って、ふざけるなあっ！」
「わっかんねーもんはわっかんねーって」なぜか井内は訛った。
「お前の頭脳をもってしてもわからんのか」
「うん。だって、解析しても、見たことのないデータのオンパレードっすよ？　猿と宇宙人くらいの差があるって。なんかどっかに怪電波みたいなもん、ゆんゆん送ってるし」
「怪電波？」
「そ。仮想化環境で動かしても、実ハードまで検出して操ってくるしさ。あり得ないってマジで。しかも、それで一定の振動みたいなものを出すんだよ。ゆんゆん、って！　技術レベルが一〇〇年は違うね。作・宇宙人。どこのＳＦだよまったく。撃退するの大変だったんだからね！　いとくんのせいだー」
「撃退できたのか。それは進歩だ。どうやった？」
井内は、両腕を突き出し、私に手のひらを見せた。
「井内ちゃんパワー」ほあーっ、と気功のように深く息を吐く井内であった。
「殴るぞ」無論比喩であり、我慢の限界であるというアピール……でありたいものだ。
「おっと、家庭内暴力反対。ワクチンソフトを作りましたー……えっと」
井内はゴミ山のような場所へとぴょこぴょこ駆けていき、がさごそ漁っている。
「……紛失しましたーてへっ」井内はぺろっと舌を出した。
「作り直せ」一度、本当に殴ってしまおうか。いやいや、相手は仮にも女性である。
「だってーキーボード打つのも疲れるんだよ。非力な井内ちゃんに愛の手を！」
引きこもり生活が長いためか、極端に体力が無く、キーボードの

タイピングをするのも一苦労である……って、
「外に出て運動しろ！」
続いて、養生部として研究している、植物の話である。
「もう完成してるよ。つまんなーい……ぽちっとな」
ウィィンと唸り声をあげて、機械が動き出す音が響く。地下空間の中に自生する植物に巧妙に隠された、ベルトコンベアーが動き出したのだ。その上には、青いゼリーのようなものが幾つも乗っており、その中には、数々の植物が根を生やしている。
そして、その植物達には特徴があった。
トマト、ナス、レタス、キャベツ、ジャガイモ、トウモロコシ。
みずみずしく実ったのは、全て、野菜である。しかも、ただの野菜ではない。
「これで、生育七日ってところかな」
既存の植物の概念を超越した、恐ろしいまでに生育の早い植物たち、あえて名付けるとすれば、未来植物である。
「植物の発育を促進する微生物を組み合わせれば、あと三日はいけるかもね」
「それはすごいな」
「ま、八割ははがみんの業績なんだけどさー。井内ちゃんいじけちゃうよ？」
『人は食から』。私の哲学が示す通り、先ずは食を充実する事こそ、社会の幸福を押し上げる事に繋がるのだ。
我が国は土地が狭く、食物の大半を輸入に頼っている。もし戦争になった時、『飢え』が、深刻な問題となることは明白。故に、その根源的とも言える恐怖から、近隣諸国にへこへこしなくてはならなくなるのだ。
問題はそれだけではない。もっと身近なところにも存在する。近年の異常気象で、一般の家庭も食物価格の高騰に気をすり減らしている。そのことが、国民の漠然とした不安を駆り立てる。
そして、この国には、依然、食うにも困る人民が存在する。そう

した人々の惨状をみて、国民の不安は無意識のうちに増幅する。
『食物』というものが、いかに国民の幸福に直結するかがよくわかるだろう。
私は完全管理社会実現の第一歩として、植物の工場化を促進し、食物の安定供給を実現することに決めた。工場化すれば、季候や害虫に影響されることなく、上質の食物を育て上げることが可能になるのだ。
現在、食物工場化は否定されることが多い。なぜなら、
一、食物の生育には時間が掛る。時間が掛かるので、管理コストが膨大になる。
二、植物は動かすと根が傷んでしまうので、動かすことができない。スペースを取る。
三、人工光は、太陽に比べて光が弱い。光を強めると熱とコストの問題が浮上する。
という問題が主にあり、結局は高コストになってしまうからだ。
しかし、最もネックであった一の問題は既に解決し、
「いとくん、調子どお？」
「すこぶる好調だ」
「良かったね。人体に害が無くて」井内はにっこり笑顔を見せた。
私は未来植物を実際に食した。数ヶ月経つが、体に変調をきたしたと言うことはない。
「まあな。事前にラットによる実験は入念に行なったし、当然の結果だ」
他の問題も、我が社が保有する技術で解決可能である。
「この青いジェル状のようなものが、例のアレか？」
「そ。土の代わりー。ま、代わりって言っても、保温、保湿、栄養全て、土以上だけどね。これがあれば、世話する必要ないよ。この中に種さえ植え込めば、植物くん達は、勝手に栄養素や水分を吸収するし。適度な硬さのジェル状だから、移動もらくらく。鉢植えもいらない。土いじりも必要ない。手も汚れない。支えが必要な植物

でも、こうやって、植物の支えがとなる棒さえ立てればおーけー。これこそ、植物界の土壌革命であります」

「ほう、それは大したものだな」植物工場化にはもってこいの技術というわけだ。

残りの光源についても、井内が開発した高エネルギー効率の人工光で、強い太陽の光が必要なトマトですら育つ。

「井内ちゃんスゲー。いとくんに褒められたー。それだけじゃないんだよ。ほら、さわってみ。ふにんふにんしてるでしょ。この柔らかさが根を伸ばしやすく、かつ、保護しやすい環境なんだよ。特別なんだなー」

「ふむ。確かにやわいな」

「井内ちゃんのこだわりは、おっぱいのやわらかさです」

私は、咽せた。

「お前、そんな、直接的で、卑猥なっ」

「あれー？　もしかして、照れてる？　むっはー、いとくん意外と純情だね。もしかして、おっぱい触った事無い？」

「黙れ！　それくらいある！」事故だがな！

「それはそれで引くわー」井内は冷ややかな目で、私を見た。

その反応に、私の動揺が大きくなる。

「お前はっ、本当に無駄なことに労力をかけるな！」

「無駄なことだけじゃないもん！　ほれ！」

井内は銀色の小箱を投げて寄越した。開けてみると、薬のカプセルのようなものが、三つ、並んで入っている。

「これは？」

「惚れ薬。好きな人にのませてみんしゃい」

私は即刻突き返す。

「え、井内ちゃん？　いやぁー気持ちはうれしいんだけど、心の準備が……ちょっとだけ……時間をちょうだい？　ねっ？」井内は恥じらう乙女のように頬を染めて見せた。

「何を勘違いしているのか」

「ちぇっ、なーんだ。つまんないの」井内は口をすぼめて尖らせた。
井内はアジェンダを指さす。その項目には、『大判クッキー・ナノマシン』と書かれていた。
「これが、あのクッキーの中に入っていたナノマシンだと？」
「そーいうこと。これずっげーね。なんっつーか、重ね合わせ？」
「凡人でもわかるように説明しろ」
「えっとぉ……『在る』と『無い』が、重ね合わさっているって言うかぁ……とにかく、普通の物質じゃない気がするんだよね。……どこから持ってきたの？」
「企業秘密」どう考えても未来からとは言えない。
「うわっ、うぜー。どうせ未来からなんだろー」
当たっている。流石は直感鋭い天才である。
「で、なんで三つなんだ？」私は話題をそらす。カプセルは、三つある。
「いとくんは細かいね」あはっ、と、井内は屈託無き笑顔を見せた。
「いっぺん折檻してやろうか」
「いとくん、折檻がご褒美になる性癖も、世の中にはあるんだぜ。世の中って広いね！」
「問題ない。じきに私が矯正してやる」
「うっひゃーこわー。いとくんも、もう少し人の暗黒面の多様性を認めて欲しいな。ほら、生物多様性っていうじゃん？　ぺったんこコンプレックスだって、ぺったんこが好きな人といっしょになれば、幸せ二〇〇倍のリフレインなんだよ。ごめんね、小さくて。ううん、僕は小さいのが好きだから。手・を・伸・ば・す・きゃー！」
「頭が良すぎて言語野がショートしたか？　私には言っている意味が理解出来ない。理解したくもない。ともかく、さっさと答えろ」
「ちぇっ、つまんなーい。カプセルが三つなのは、じょーしきじゃん。この非常識人」
私の顔の表情筋が、一瞬ひくついた。
「カプセル怪獣は、三匹いるでしょ！」

「は？」何を言っているのか、さっぱりわからない。
「もうっ、いとくん特撮見ないの？　最近の特撮は一見さんもウェルカムです。夢と希望と昼ドラが詰まってるぜ！　って、いつの話じゃーい！」井内は突っ込む動作をした。
わけがわからない。とりあえず無反応を装う。
しばらくの沈黙が続いた後、井内は凍えたように自分の体を抱いて震えだした。
「いとくん……井内ちゃん、自分の心が寒い。死んじゃう」
「自業自得だ」こいつは重症だ。手遅れかも知れない。
「突っ込んでよ」
「お断わりだ」
「カプセル怪獣は、本当は五匹だろうがっ！　とか」
「知るか……」本当に、頭が痛い。
アジェンダを進める。次は……爆弾についてだ。
一ヶ月前、市内を騒がし、そして、我が校にしかけられた爆弾。
偶然か、夕焼け空間内でそれは爆発した。そのせいでエルレインは爆発に巻き込まれ、未来に帰れなくなった経緯を持つ、あの忌々しき爆弾。
夕焼けに起こった事象は全て無かったことになる。夕焼けの空間内で起こった爆発も例外ではなかった。爆発は無かったことになり、長谷川と、そしてマナが爆弾を解体し、犯人の計画は失敗に終わった。
計画の失敗を知った犯人が、黙っているはずがない。そう思った私は、犯人がもう一度校内を狙うのではないかと、システムリガンを張って待ち続けていた。
しかし、リガンの運開と同時になりを潜めたのか、防犯網に掛かることはなかった。
それどころか、以降、爆発騒ぎは発生しておらず、犯人も依然として捕まっていない。
計画の失敗で見切りを付けたのか、捕まるのを怖れて何処かに潜

伏しているのか、それとも……。
　ともかく、犯人に繋がる手がかりは、あの解体した爆弾しかないのである。
　ゆえに、私はこの目の前にいる変態引きこもり系天才の井内ユウに爆弾の解析を依頼したのだが……。
「だが、断わる」井内はきりりと真面目な表情を作った。
「お前に拒否権はない」
「へー、そうやって返すんだ」井内はなぜか、感心しているようであった。
「まさか、まだ解析できてないとでも？　もう、一ヶ月経とうとしているのだぞ」
「いや、その……ちょい前から、解析中で……」井内は目をそらした。
「つまり、今までサボっていたと」
「あっ、いやー、そうじゃなくて……気乗りしないって言うか、一目見た時から、なーんか、嫌な感じがしたんだよねー」
「嫌な、感じ？　それは、直感か」こいつの直感には、何らかの理由が伴う。
「うん。だから、無意識のうちに、避けてたんだけど……」
　井内の指が、遊ぶ。不安を紛らわすかのように。
「ほら、はがみんの挑戦状も解いちゃったし、こないだ、あまりに暇だったから、肝試しだとおもって、解析してみたんだ。そしたら……」井内は口をつぐんだ。
「そしたら？　何か、犯人に繋がる手がかりのようなものがあったのか？」
「うーん、今調べてるんだけど……指紋はないしー。ＤＮＡも検出できなかったしー。簡単な方は、そこら辺の大量消費ー大量販売ーなショップで変えるものばかりだしー。複雑な回路の方は、逆に珍しすぎて、ネットとかで簡単に調べられるような情報でもないしー。つか、こんな芸術品みたいな回路、そんじょそこらの技術者じゃ作

れんって。でも……それにしては……」
「それにしては、何だ？」
「手口が雑。簡単な方なんて、完全にド素人。もし、わざと汚く作ったとしても、あんな複雑な回路を作ったやつの、プライドが許すのかな？」
「プライド……？」
「だって、何度も言うけど、こんなに複雑な回路、ちょっとやそっとじゃ作れねーって。すごい時間をかけて、神経を研ぎ澄まして……そう、執念、妄執、執着みたいなもんが無いとできないって。そこには、絶対にプライドみたいなもんが生じるはずだよ。井内ちゃんが捜査するなら、絶対に玄人に絞って捜すね。つか、これだけのものが、なんでこんな片田舎で見つかるわけ？　おかしいっしょ！　存在自体が矛盾してんの！」
　ド素人が作ったような爆弾と、玄人が作ったような爆弾……か。
「つまり、犯人は最低二人以上いるのではないか、と言いたいのか？」
「うーん……でも、必然性がない。爆弾作るだけなら、ここまで手をかけなくても良いじゃん。反対に、ここまで雑に作る必要ないじゃん。井内ちゃんも、最初は別人だと思った。二つの組織があって、それぞれが別々に同じ所を狙ったの。でも、それはあり得ないって、最近わかったんだ」
「と、いうと？」
「この二種類の爆弾には、共通点があるんだ。使われている爆薬が、いっしょなんだよ。はいポチッとな」
　からからと音がする方向を見ると、ホワイトボードのようなものが、独りでに自走してきた。
「これは？」
「自走式ホワイトボード。一々移動させるの疲れるから、作ったー」
　私の感覚としては、自走式の機械を作る方が疲れる気がするのだが……。こいつの考えはわからない。

井内は、ホワイトボードにC、N、Oなどの英字と、棒線を書いてゆく。化学構造である。
「分子構造も安定してて、気化圧が極端に低いから常温では気化しないし、爆発しても無害の無煙、しかも少量で驚きの破壊力！　まるで最近の洗剤だね！　何これ馬鹿じゃないの？」
井内は化学構造を書き切り、ホワイトボードをばんっと叩いた。
「知識がないので、よくわからないのだが」
「どこにも存在しない」
「は？」
「とある研究機関のデータベースを拝借して、分析してみたんだけど」
「待て、それは犯罪だぞ」
「いとくんは細かいこと気にしないの！　とにかく、存在しないんだよ。この物質、なんでこんなもんを使うわけ？　馬鹿じゃないの？　馬鹿じゃないの？　大事なこ――」
「つまり、あの爆弾に使われていた爆薬はこの世に存在するはずのないもので、例えばダイヤモンド以上の価値があり、片田舎で爆発させるにはもったいない、と言いたいのか？」
「流石いとくん、すばらしい解説だね！」
「ほめるな。当たり前だ」
「まるで、これだけ未来の物質みたい」
『未来の物質』その言葉を聞いて、私は隙間ターミネーターを連想した。まさか、彼女らが？　しかし、未来の事象は、夕焼け空間内限定のはず。現代に物質は持ち込めない。しかも、記憶を定着させるには、このナノマシンが必要だ。
いや、そもそも、このナノマシンが現代に存在していること自体が、矛盾なのだが。
それでもあり得ない、と私は思った。
なぜなら、隙間ターミネーターの狙いは、あくまで私。
しかも、そのトップは、あの水鏡マリナだ。

だが、もし私の認識が間違いであると仮定すれば……。
「でも、やばいよ。いとくん」
「何がだ？」井内の言葉に、私は思考から引き戻された。
「この二種類の爆弾が同一人物によって作られたとすると、すごくやばい。そう思って、今度は警察のデータベースを拝借して――」
「お前は幾つ罪を重ねるのだ」
「まあまあ。でね、爆弾騒ぎの証拠にアクセスしたんだ。流石に現ナマ証拠は無理だけど、最近のポリ公ちゃんは、なかなか几帳面に証拠をデータ化してくれるから助かるね。ま、証拠と言っても、爆弾自体が粉々に吹き飛んでて、大した手がかりにならないんだけどさ。でさ、証拠をマトリクス化して、時系列順に眺めてみた訳よ。そしたら」
井内がホワイトボードの一端を叩くと、驚いたことに、ＰＣのモニターと化した。何という無駄な技術だろうか。モニターの画面には、証拠の電子画像が並べられている。
「なんていうか……手慣れてきてる。そんな気がするんだ。何がってのは……正直、わからないんだけど、でも、井内ちゃんの直感がそう言ってる。だんだん、熟練してるような……いや、そんなもんじゃなくて、急激に成長してるような。はがみんが作ったあの植物達みたいに。超常的な速さで」
井内は、辛そうな表情をして、軽くウェーブの掛かった黒髪をがさがさとかく。
「でも、まだ何か引っかかってる。何かぽっかり落とし穴が空いてるみたい。気持ち悪いよ。井内ちゃんの直感が納得してないんだ。この回路についても、どうもおかしいし。まだ直感なんだけど……所々、超常的な匂いがするんだ。だから……こいつには関わらない方が良いよ」
井内の話は、そこで途切れた。
「……それで？」
「えっ？　なになに？　もう終わりですぜ、奥さん」

井内はとぼけているようだが、私には見え透いている。
「井内、何を隠している」
「井内ちゃん、何にも隠し事してないよ。清廉潔白だぜ？」井内はへらっと笑う。
「警察のデータベースの話から先は、有用だが、蛇足だった。お前は『簡単な爆弾と、複雑な爆弾を作った犯人が同一人物だった時のやばさ』について、直接的には触れていない。お前が脱線したのは明白だ」
「うぐっ……かなわないかも」井内は肩を落とし、嘆息した。
「全ての証拠を示せ。事実をねじ曲げるな。現実だけを示せ」
「……うん……一つ言えることがあるんだけどさ……」井内の返答は歯切れが悪い。
「なんだ、言ってみろ」私は促す。
「ごめん。もっと、早く取りかかるべきだったのかも知れない」井内は、頭を下げた。
あの変態馬鹿の井内が、神妙な様子で謝っていた。
「どういうことだ？」
「この爆弾を作ったやつ、絶対に楽しんでるよ」
井内は重々しく言った。その眼は、確信に満ちたように真っ直ぐであった。
「解体が簡単な方の爆弾は、わざと解体できるように、簡単に作られてる。でも、最後のは違う。一見簡単な回路を装ってるけど、実はもの凄く複雑で、こんなの、正直、解体できたのが奇跡だと思う。いとくんは、相当運が良かったんじゃないかな」
運が良かった？　この私が？
「実はね、ちょっち時間が掛かっちゃったのは、この爆弾、見たくなかったんだ。現実逃避」
「は？」
「いやー現実逃避して、逃避しまくって、沢山プラモデル作っちゃった。現実逃避エネルギーってすごいよね。普段は出来ない事をや

ってのける。このエネルギー解析して、ノーベル賞取ろうぜー。あっ、でもだめか、ノーベルさん達に認められる頃にはおばはんになってまうぜい！　あの人達、審査長いからー」

井内はいつものように饒舌でどうでも良いことを口にし、話を脱線させていこうとする。しかしそこにはいつもの自然さは無く、彼女の言ったとおり、見たくないものから逃避するようであった。

「井内」

私が彼女をじっと見続けると、

「……ちぇっ、わかったよ」気まずそうに顔を背け、観念したように、呟いた。

そして、井内は語り始めた。

「この爆弾達からは……悪意を感じる」

「悪意？　それは、お前の直感か？」

「いんや、直感もそうだけど……論理的に考えても、そうなんだよね」

「どういうことだ？」

「だって、ここまで複雑な回路を作っておいて、赤と青の配線二本、なんて、『さあ、解体してみんしゃい』って言ってるようなもんじゃん？　でも実際、この回路で解体できるやつなんて、そうはいない。井内ちゃんでさえ、解析するのにけっこーな時間掛かったんだよ。制限時間ぎりぎりで止まってたけど、制限時間内にこれを解体するなんて、えいやって、運任せで配線切らないと無理だよ。だから、いとくんは運が良かった」

それを、マナは一瞬で解体して見せたわけだが……。

「この爆弾は、巧妙に、意図的に、わざと解体させて、間違えさせるように、作られてる。初めの方の爆弾で希望を見せて、後の方の爆弾で絶望へ叩き落とす。最低の、爆弾だ……いくら人の性癖が多彩だっていっても、井内ちゃん、こいつを理解したくないよ」

井内は、自分の白い肢体をぎゅっと抱きしめた。

「これって、いとくんの教室にあったんだよね。簡単な方は、いと

くんの机の中にあったんだよね」
「ああ、そうだが？」
井内は心配そうな表情に代わり、私の手を取った。やはり、ぞっとするほど冷たい。
「いとくん、気をつけて。こいつ、絶対普通じゃ無いよ！」
井内は必死な形相で、食らいついてくる。
「いとくん、井内ちゃんといっしょに引きこもらない？　ここは安全だよ、外は危険だよ、こわい人がいっぱいいるよ！」
「断わる」
「いとくんに拒否権は……って、拒否権がないのは、井内ちゃんか」
井内はその冷たい手を離し、顔を伏せた。
「井内、心配してくれるのはうれしいが、逃げているだけでは何も解決しない」
私は井内の肩に手をかける。手のひらから伝わる温度は、ぞっとするほど冷たい。
「普通じゃ無い奴には慣れている。そいつらを矯正することこそ、今の私の役割だ」
「……役割……か……」
井内はしばらく顔を伏せたままだったが、突然、顔をがっと上げ、
「――なんちゃってーっ！」
「……は？」
井内はちっちっち、と人差し指を振る。
「ノンノンっ。井内ちゃんにシリアスなんて似合いません。似合いませんよー……似合わないんだからねっ！」
井内はむきになったように吠えた。まるで、駄々をこねる子供のように。怯えをはねつけようと必死になっているようにも見える。
「今の話全部嘘！　いとくんが引きこもっちゃったら、井内ちゃん引きこもれなくなっちゃうもんねっ！　あはっ、あははっ」
天才の直感が、何か得体の知れない恐怖を感じ取り、その恐怖に、彼女自身が耐えきれなくなっているのかも知れない。

今の彼女は、無理をしている。そう思った。
「井内……わかった。これで充分だ。これらの証拠を例の刑事に提供して、後のことは警察にまかせよう。ご苦労だった」
「……いとくん」井内は、しゅんとしたようにおとなしくなった。
「それと、とある研究機関の名前を教えるように」
「へ、どうするの？」井内はぽかんとなった。
「買う。さすれば合法だ」
「……うわぁ、徹底してる。井内ちゃん引くわー」
「引くだけ引いてろ。私は気にしない」
井内はふふっと、笑った。
「いとくん、気を取り直して、もっとくだらねー話で盛り上がろうぜー」
「断わる」
「利用するだけ利用して、井内ちゃんを捨てるのね！」
「はいはい」
「反応が投げやりでおもしろくなーい。たいくつーたいくつー」
「あのなあ……」
「生きる意味が無くなったー、いとくんのせいだー」
井内は床をごろごろ這いずり回った。
「……たく、あの巨大サーバといい、どれだけお前に投資していると思っているのだ」
私は地下空間の中心に燦然とそびえ立つ、黒々とした巨大な塔のような機械を見る。
これこそ、おそらく世界で片手で数えられるほどの性能を持つ、国には非公開のスーパーコンピューターである。何でも、動かすと超高温になるらしく、液体窒素による冷却が必要だと井内は力説した。故に、膨大な電力を喰い、管理保守には桁外れなコストが掛かっている。
「それは井内ちゃんがーかわいいからー」井内は恥じらうように、両手で頬を覆った。

「サーバ撤去」
「ごめんなさいごめんなさいっ。あのサーバだけは駄目えっ」井内は縋り付く。
「そもそも使っているのか？」
「使ってるよ！　すっごいフル活用だよ！」井内は両腕を大きく広げて訴える。
「じゃあ、使用目的を具体的に述べよ。ただし、簡潔にな」
「えっと……」
井内の視線が、明後日の方向へと泳いだ。
「……動画の、エンコードとか」
「没収」
「お願いっ、心入れ替えるから！　これから本気出すからっ！」
「これから本気出すといって、本気を出したためしがない」
「おねがいっ！　あの中には色々大切なものが詰まってるの！」
「具体的に述べよ。簡潔に」
「えっと……乙女の、秘密……」井内は、はにかんだ。
私は、あえて突っ込まず、放置した。
「ごめんなさいごめんなさいっ！　今すっごく恥ずかしかったよ！　死ぬかと思った！」
いっぺん本当に死んだ方が良いのではないかと、私は本気で考えた。
「具体案見つけた！　はがみんの挑戦状とかも、あのサーバで解析してますっ！　だからお願いっ！　ねっ、あのサーバだけは止めないで！　止めたら井内ちゃん死んじゃうよ！　いとくんの名前書いて死んじゃうよ！　この人のせいで、井内ちゃんは死に追い込まれました！　最悪！　すきゃんだるっ！」
井内は鬼気迫る表情で訴えた。何が彼女をあのサーバに執着させるのだろうか。今の彼女の様子では、サーバを撤去してしまえば本当に死んでしまいかねない勢いであるし、彼女の今までの功績を考慮すれば、膨大な管理コストだろうと十分元が取れる。

「まあ、そこまで言うなら」
「ほんと!?」
「ただし、私が納得する報告書を作れ」
「うげぇー」
井内は女子としてあるまじき顔をした。だが、
「じゃあ、フォーマットちょーだいよね」
しぶしぶであるものの、従った。面倒なことが死ぬほど嫌いな井内が了承するとは、よほどあのサーバが重要なのだろう。
「ちぇーっ、たいくつは嫌だけど、面倒な事はもっと嫌なんだよねーでも死ぬのはまだごめんだしー」
「お前はたいくつたいくつ言うが、それはお前が人生を一所懸命に生きていないからだ」
「人生は壮大な暇つぶしですよ、いとくん」
「そういう考えも認めないわけではないが、同じ暇を潰すなら、他が為、人の為でありたいものだ」
「なに、偽善？」
「世の中全て偽善だよ。人の本性は悪だからな」
「またまたー心にも思ってないことをーなーにー遅めの中二病ですかー」ぐふふと井内は口元に手を置き、眼を細めた。
「黙れ」誰にもわからんさ。かつて私が経験したことは。
「ま、井内ちゃんは偽善でも悪でも良いよ。そのおかげで井内ちゃんはここで生きれてるし。いとくんと馬鹿話できるし」
「馬鹿言ってないで、恩を感じるなら、外に出て働け」
「だって、はがみん居ないと張り合いが無いんだよねーこらぼこらぼ。ねーねー、はがみんはまだ帰ってこないの？　はがみんいないと張り合いがないよー」
井内はごろごろ地面を転がった。
「葉上は今、行方不明で捜索中だ」
ぴたりと、井内の動きが止まる。
「なーにーケンカでもしたの？」寝転びながら、私を見上げた。

「……喧嘩はしとらんが、色々ある」
井内は起き上がった。その顔には、疑問が浮かんでいる。
「ねえ、前から気になってたんだけどさ、はがみん、どうしたの？　もしかして、不登校？　それなら、井内ちゃんといっしょに引きこもった方が良いよ？　病気なら、井内ちゃんが頑張って直しちゃうかもよ？　直感でとあーって針を突けば、奇跡がっ！」
「病気ではない。個人的な……問題だ」
ほへーっと、井内はわかったのかわかってないのか、よくわからない奇声で答えた。
「そうだ！　京都へ行こう！　みんなで旅行いって、嫌なことぱーっと忘れようぜい！」
「お前、外に出れるのか？」それ以前に、なぜ京都なのか？
「いとくんが、この地下室を京都までつなげてくれればいいよっ。うひひっ」
その発想に呆れ、私は溜息をつく。
「まったく、規格外は一人で良いのだ……」
私の脳裏に赤毛ポニテがちらついた。
「え、なになに？　聞こえなかった、ぱらどんぱらどんわんもあぷりーず？」
なんだそれは、魔法の呪文でも唱えているのか？
「おまえに絶対に合わせたくない人間がいる」いや、人間かどうかも疑わしい。
「そう言うと会ってみたくなるのが井内ちゃんです」井内は片目を閉じた。
「お前、人に会えるのか？」
「むり。絶対に無理。人こわい。他人こわい」井内は突然がたがた震えだした。
「まったく……少しは外に出る努力をしろ」
「やーだ」井内はぺろっと舌を出し、ぴょこぴょこ走り出した。
「おい待て井内っ！　まだ話は終わってないぞ！」

反射的に、私も後を追いかける。
「おいかけっこー……はっ、おいかけっこでキャッキャうふふの後に捕まえちゃったぞで、ふれあいだめぇ！　よいではないかよいではないか！　若い純白に伸ばされる魔の手、穢される純潔！　ああんっくやしいっ、でも、感じちゃうっ！　で泥沼か！　溢れるぱっしょんっ！」
「そんな展開になる可能性は一ミリもない」天才よ、お前の思考はどこへ行く。
「えー？　先生っ！　井内ちゃんの穢れた青春はどこに落ちてますかっ！」
「しらん！　外に出ろ！」
「やっだねー！　外に出るくらいならもやしになるー」
「あんな白くて不健康そうな人間になってどうする！　未来を見ろ！」
「井内ちゃんの視線は、いつも暗黒の未来に向いています」
「『うざい』という言葉は、こういう時に使うのだろうな」
「あ！　いとくんがあり得ない言葉使った！　井内ちゃんすげー！　大・勝・利ぃ！」
井内は腰に手を当て、堂々たるVサインをこちらに見せた。私は呆れるしかなかった。
そして、井内の動作にはもう、怯えはなかった。
私にはわかっていた。彼女が爆弾のことを忘れたいことも、運動が苦手なくせに、運動をしてでも、気を紛らわそうとしたことも。
一見ふざけたように見える井内の行動には、全て意味があるのだ。
規格外の変人故に、普通の人間には理解しにくいだろうが、注意深く観察すれば井内がいかに気を遣っているかがよくわかる。
彼女と一年半を過ごして来て、私もようやくわかり始めた。
鋭すぎる直感が故に、井内は変人になるしか無かったと言うことに。
「ん、どした？　そんなにじろじろ井内ちゃんのお顔を見て……ま

さか、惚れたっ？」
「いや、ありえない」容姿は悪くないが、精神が悪い。
「うわっ、ひっでー」井内は、あははと笑った。
井内の精神が正常な時は、『あはは』ではなく、『うひひ』と笑う。まだ、根源的な部分では、得体の知れない恐怖を払拭できてはいないのだ。
しかし、彼女をそこまで怯えさせる恐怖とは、何なのだろうか。あの爆弾を作った奴が爆弾に込めた悪意とは、いったい何なのだろうか。
「いとくん、やっぱりおかしいや」
「そんなことは無い」
「そうかなー」井内の視線は、斜め上を向いた。
実に鋭い観察眼だ。やはり、私はおかしいのかも知れない。井内に、同情するようになるとは。
「まったく、お前はそれだけの才能を有していながら……。何か、なりたいものでもないのか？　お前なら大抵のものには成れるぞ」
「うーん……そうだなぁ……」
井内は少し考えるそぶりを見せ、そして言う。
「コンピュータウイルスになりたい」
「頭冷やせ。人間の世界に帰ってこい」やはりコイツは変態だ。
「だってぇ、世界中を駆け巡って、みんなに嫌がらせ……ええっ、この人がこんな画像を！　あの人一見温和でいい人だったのにねー、あんな性癖があったなんて、ちょっと引いちゃう。でも、いいんじゃない？　価値観は人それぞれだもん。うんうん、恥ずかしくなんか無いっ！　ああっ、何と多彩で悲劇的な人の性癖よ！　ビバ！　性癖！　さあ、世界中の皆さんっ！　この人の性癖を見よ！　……ってなこと、できるんだよ？　すごくない？」
「対策ソフトに検知されて駆除されろ」前言撤回。確信的に変態だ。
「ううっ！　それはやだなーやっぱやめ」
「まさか、本気だったとは言わないよな」

「ううん、割と本気だったり――」

その時、地下空間の入り口付近で、がたんと音がした。

見ると……。

――金髪幼女姿、ばいんばいんであった。目をつむったまま、階段を下り、こちらにふらふら歩いてくる。ふざけるな。

第十七話　戦争な日々

夢遊病のように、目をつぶったマナがふらふらと歩いてくる。
しまった……井内の死体ごっこに気を取られ、ドアを閉めるのを忘れていたのか……いや、確か、ドアは閉めたはずであったが？
それにしても、なぜここにやってくるのだ！　バカか！
これは、先手を打って説明した方が良さそうだ。
「井内……ん？　井内？」
辺りを見渡すが、井内の白い肢体は見当たらない。
「いとくん……こっち」震えを含んだ小声で、井内の声がした。
声の方を見ると、何やら柳のような植物の影からである。ぴょこっと、井内の上半身が飛び出した。
「なんだ、それは」
「カクレヤナギ」
カクレヤナギは養生部開発の未来植物の一種で、一見普通の柳の木に見える。しかしその実体は、影に隠れてじっとしている限り、気配を消してくれるという超常的な植物だと言う。
井内は、そのカクレヤナギの影に隠れ、がたがた震えていた。
「お前は、本当に人嫌いが加速しているのだな」
私は無意味に怯える井内をひとまず放り出し、マナに駆け寄った。
マナは相変わらずふらふらと歩いている。私はそのままマナをガイドし、入り口へ返そうとするが、
「あ……れ……かいちょーさん？」マナが、眼を覚ましてしまった。
「マナ、さあ、自分の部屋に戻ろうな」
「あれ、わたし、いったい、――はっ、ここはっ！」
ざわざわっ、と葉々がこすれるような音がした。タイミングの悪いことに、マナの声で、井内が驚いてしまったのだ。
マナは、ばっと音がした方を見る。カクレヤナギの奥をじっと見据える。

「マナ、何でもないぞ。さあ、戻ろうか」
「かいちょーさん、何か、います。――はっ、まさか、暗殺者さんっ！」
マナは、カクレヤナギに向かってじりじりと近づいてゆく。あり得ない。なぜ、気配を感知できるのか。
「マナ、止せ」私はマナを止めようとするが、
「かいちょーさんは、さがっててくださいっ！」と、すごい勢いで止められてしまった。
「いや、そうじゃなくてだな……」くそう、何とか穏便に済ませたい。と思った瞬間、
――とあっ！　マナは突然俊敏に動き、カクレヤナギをなぎ払った。
「いやー！　いやーっ！　いやーあああああっ！」
井内は草食動物のように驚き飛び出し、怯え泣き顔でへたり込んで、叫んでいる。
「えっ、女の……子？」
私は、頭を抱えた。なぜ、こうなるのか。
二人は、距離をとり、互いの存在を探り合うように見つめ合っている。
「あの……」マナが口を開いた。
ビクゥッと、井内がすごい勢いで痙攣した。がたがたと震え、見るからに怯えている。
「あっ……その……だ、だいじょうぶですよー。こわくない、こわくなーい」
マナが両腕を軽く広げて、硬い笑みを浮かべながら、じわじわと、近づいてゆく。
「――しぎゃー！」
「――ひゃあっ！」
突然、井内がマナに跳びかかった。井内の理性は恐怖に吹き飛び、獣と化している。

「やられる前にやるしかねーっ！」
「井内、やめろ！　よく見ろ！　それはようじょだ！　人畜無害のようじょだ！」

数分の懸命な説得の後、井内はなけなしの理性を取り戻した。というよりは、さんざん暴れ回ったあげく、体力切れになったという表現の方が、正確だろう。
「はあ、はあっ、いとくん、この子誰っ？」
息も切れ切れ、井内はマナを羽交い締めにしたまま、私に訊ねる。
「わ、わたしはっ、マナ、伊統マナですっ！　かいちょーさんの娘です！」
「娘……？」
井内はマナを見て、そして、私をゴミ溜めでも見るような目つきで見た。
「二次元の流儀を三次元に持ち込むのは感心しないけど……うん。いとくん、性癖は人それぞれだもんねっ！」井内はにっこり笑顔を仮面のように作った。
「どうやら例に漏れず、大いなる勘違いをしているようだな」
私は、何度目かわからない説明をした。
「ホーなるほど。養女かー。……ようじょようじょ」
井内はマナを後ろから羽交い締めにしたまま、その金髪を撫でた。
「お前なら、やると思ってたよ」
それはともかく、どうやらマナを無害な存在だと理解したらしい。
「ってことは、既にやった人がいるんだね。井内ちゃん、その子とお友達になれるかも！　うひひっ！」
マナとの遭遇で、久しぶりの人に慣れたのか？　井内にしては前向きな発言である。彼女の進歩は賞讃したいが、
「やめてくれ。社会が崩壊する」あの赤毛ポニテには会わせたくない。
「ひっどいなー……っと、おや？」

井内はマナの胸部に顔を近づけ、まじまじと見る。
「うっひゃーすげーばいんばいんだ！　ちょっと、お医者さんごっこしましょうか。では！　触診しますね――いただきますっ！」
井内は有無を言わせる暇も与えぬまま、マナの谷間に手を突っ込んで、揉みしだく。
「ひゃっ！　冷たいっ！　……か、かいちょーさん、こちらの、あっ！　だめっ！　く、くすぐったいです……こちらの、か、方は……」
「あっ、そっか、井内ちゃんの自己紹介まだだったね」
井内はくるりとマナの体を自分に向け、微笑む。
「こんにちは。長女です」
「ええっ、か、かいちょーさんっ！」
「隠し子です」井内はしれっと嘘をついた。
「ええっ！」
「井内、いい加減にしろ」
「かいちょーさん、三人目ですか！」
「実はー君にはーおねーさんがいたんだー」井内は、ゆっくりと諭すように、マナに語りかけた。こいつ、絶対にふざけている。
「え、ええっ！」マナは何の疑いもなく、驚きっぱなしである。
「誰が娘だ！　この居候駄目人間ニートがっ！」
「よっしゃ三冠王」井内は誇らしげにガッツポーズをした。
駄目だ。コイツ、早く何とかせねばならない。
「ええっ、ええっ、かいちょーさん、どういうことなんですかあっ！」
「井内ちゃんは、井内ユウ・零式であります」
「いつから『零式』なるコードネームみたいなものがついたのか」
「まー色々ありまして。いとくんの屋敷の地下に幽閉されています」
「えっ！　えっ！」マナはきょろきょろと、私と井内の顔を行ったり来たりする。
「マナ、こいつの言葉を信じるな。九割方嘘だ」

井内は地面に手をつき、しなだれた。
「井内ちゃんの才能を独り占めにする気なのね……よよよ」
「ええっ！　ええっ！」きょろきょろきょろきょろ。
「うひひっ、この子おもしろーい！　やわーい！」
井内はマナをぎゅっと抱きしめ、私を見て、言う。
「パパ、これちょーだいっ！」
「だあれがパパだ！　誰が！」
「井内ちゃん、いとくんの仲じゃない」
「あのなあ、お前――」
「――駄目ですっ！」
マナが突然、叫び声を上げた。
「わたしは、かいちょーさんと一緒にいるんですっ！」
マナは私に駆け寄り、ひしっとしがみついた。
「ねっ、かいちょーさんっ、そうですよねっ、ねっ！」
私に対し、必死で縋り付くような視線を向けてくる。
「えっ……まじ、で？」
驚いたのか、井内はきょとんとしていた。なかなか観られない表情である。
「いとくん、いったい、どんな調教を……」
「――人聞きの悪いことを言うなあっ！」
私は、今までの事情を簡単に説明した。
「いやー、人生って、本当に面白いですね」井内はうんうんと、何度も頷く。
「お前は一体、何を噛み締めているのだ」
「そのお年で、娘がお二人とは……いやはや、最近の若いもんは進んどりますなー」
おっさんのような口調で、井内は語る。
「マナ、帰るぞ」
「……はい」マナはひしっと私にしがみついている。
まずい。たった一ヶ月程度でこれか？　こどもじゃあるまいし。

依存度が高すぎる。一刻も早く、親離れ作戦を計画、実行せねばなるまい。

「いとくん。井内ちゃん、ほんとーにいとくんの娘になってもいいからね」

「財産はやらん」魂胆は見え透いている。

「えー、けちー」井内は口を尖らせた。

「お前のその図々しい精神はどこから来るのか」

「井内ちゃんぱわー」ほあーっと、井内は両手を前に出した。

「さて、帰るぞ」無視が一番だ。

「待って、お願い！　もっとズコバコ突っ込んで！」

「断わる」突っ込みだしたらきりが無い。それこそ、際限なく広がるウィルスのようだ。

「もー、つれないナー。まっ、いいや――マナちゃん」

マナは私にピタリと寄り添いながら、恐る恐る振り返った。

「これに懲りずにまたきてね。井内ちゃんはマナちゃんのお越しをいつでも歓迎します」

マナは困惑するような表情になり、すがるように私を見て、また井内を見た。

「ばいばい」井内は手を振る。

マナは戸惑っている。

「あー、嫌われちゃったか」井内は気まずそうに頬をかく。

すると、マナが、小さく手を振り替えした。

「――はうっ！」

井内は、それを見て、なぜか果てた。

「やべー……やべーよ……こんな逸材が……いたなんてっ。マナちゃんかわいすぎて、井内ちゃん死ぬ……きゅん死にする……」

井内は、はあはあと息を荒げていた。末期である。

「お前はバカやってないで、さっさと外に出る努力をしろ」

井内はむくりと起き上がった。

「いとくんこそ早く、はがみん見つけなよー」

「言われなくても」言いながら、マナを扉の外へと促した。
井内は、ふと真剣な面持ちになる。
「気をつけて、あの子も含めて」
「……ああ」
隠し地下室を出て、マナをエルレインの部屋へと送る道すがら、
「すっごい人でした」マナが実直な感想を述べた。
「いろんな意味でな」抽象的ではあるが、実に、的確な表現である。
「あの人が、かいちょーさんが言ってた、『わたしよりまともじゃない人』ですか？」
「まあ、お前よりまともでないのは確かだが、正確には違う」
「ええっ、あれ以上なんですかっ！」
「まあ、いろんな意味でな」
「おおーそれはとってもすごいんですねー」
マナはわかっているのかわかっていないのか、とにかく大げさなほどに感心していた。
エルレインの部屋についた。最近はエルレインがマナと一緒に寝てくれるため、私の負担もだいぶ減った。思わぬ所でエルレインの存在が役立っている。
ドアノブに手をかける。……回らない。開かない。
ガチャガチャと音を立て、ドアノブを回そうとするが、すぐに不可能との結論に至った。ドアには、鍵がかかっている。
「マナ、お前、どうやって部屋を出た？」
「わかりません。気がついたらあの部屋にいましたから」
沈黙が、流れた。私とマナは、しばし見つめ合った。
「マナ、一人で――」
「いっしょに寝てください」
見るからに心細そうなしぐさで、マナは訴えた。
「駄目だ。一人で寝なさい」
マナはいやいやをする。お前、歳は幾つだ。さらに言えば、しぐさが容姿にマッチしすぎているのが問題だ。井内が見たら卒倒する

のではないか。
結局、私はマナの部屋の前の廊下で寝ることとなった。しばし話し合った上での妥協点である。特に深い意味は無い。
時は深夜を回っている。健全なこどもの発育を考えれば、少しでも早く就寝させるのが親の務めだ。例え仮の親だとしてもな。
「かいちょーさん、起きてますかー？」
ドア越しに、マナが訊ねた。
「はいはい、起きているよ」
「わたしより先に寝ちゃ、だめですよ」
「お前こそ、ぽんぽん出して寝るなよ。風邪引くからな」
「大丈夫です。ぽんぽんのガードは鉄壁です！」
まったく、世話のかかる娘だ。それに、未来の王が床に布団を敷いて寝るなどと、絶対に外部には漏らせない汚点である。
何度かそんなやりとりがあり、しばらくすると、マナが訊ねて来なくなった。きっと、眠りについたのだろう。私も次第に眠りに誘われ、意識は……まどろみの中に……。

「――わあっ！　な、なにやってんだお前ら！」
エルレインの声に、私は眼を覚ました。
「……んっ？」眼を開ける。廊下の窓から見える空は、うっすらと白みかけていた。どうやら、早朝のようである。
「何をやってると……」ふと、気づいた。
やわらかな温もりを感じる。見れば、マナが抱きついて眠っていた。
「ああ、またか」このパターンにも、だいぶ慣れたな。
「ま、またかって……」エルレインは、何故かたじろいだ。
「まあ、初めてじゃないからな」
「初めじゃ、無い！」なぜかエルレインは素っ頓狂な声をあげた。
何がそんなに彼女を動揺させているのか？
「そもそも、なんでこんな所で寝てるんだよ！」

そこは是非とも突っ込まれたくなかったところである。そもそも未来王が地べたで寝るなど、あまり好ましくない事だ。

そうだ、記憶を消せる装置ができたら、こいつの記憶を抹消しよう。……っと、いかんいかん、自称魔法少女や隙間ターミネーターの毒気に当てられているぞ伊統会長。

とにかく今は、説明をしなければならないだろう。

「それはだな……」ふと気づく。私がここで寝ているのは、マナといっしょに寝ないための妥協案である。そもそも、なぜそんなことになったのかと言えば、エルレインの部屋の鍵がかかっており、マナが中には入れなかったからだ。中には入れなかったのは、マナが地下室にきたからであり、地下室には……あまり人に知られたくない変態が占拠している。故に私は、

「……いろいろ、あったのだ」曖昧にすることに決めた。

「――全然説明になってないっ！　むしろ気になるっ！」

「ところで、お前はこんな所で何をしているんだ？」

「あ、アタシは……ちょっと……」

エルレインは内股になり、もじもじしている。

「ああ、トイレか、早く行け。漏らすなよ」

「だ、誰が漏らすかあっ！」

もちろん、エルレインの顔は真っ赤になった。

早朝トレーニング後、朝食を取る。いつもの習慣である。

そして、その習慣に、最近新たに加わった事がある。

「エルレイン、紅茶を頼む」

「うん。わかった」

学園祭で判明したことだが、エルレインの淹れる紅茶は絶妙である。私はその技能に着目し、長谷川の監修の元、彼女に毎食後、お茶を淹れさせる事にした。

薄琥珀色の液体が茶器になみなみと注がれ、湯気と共に、芳醇な香りが匂い立つ。一口啜れば、より強い香りが口腔内に広がり、心

地よく鼻孔を抜けてゆくのだった。しっかりと茶葉の風味を水に抽出できている証拠である。

すばらしい。実にエクセレントな妙技であった。

「相変わらず、すばらしいな」

「はい、すばらしーです」マナは私の横で、恍惚とした表情を浮かべていた。

「いやあ、長谷川さんの仕入れた茶葉が良いんだよ」エルレインは照れていた。

「いえいえ、エルさまの淹れ方も、すばらしいですよ」長谷川が、にこにこと褒める。エルレインは益々頬を赤く染める。

「どこで、淹れ方を教わったのだ？」

「いやあ、それがさ……よく、わかんないんだよね」

「わからない？」

エルレインの表情が、一転、曇る。

「うん、前にも少し言ったと思うけど、どうにもアタシ、未来の記憶が不完全なんだ」

パズルのピースが欠けてしまったように、情報が断片的なのだと言う。しかも、何かを忘れていることはわかっても、それが何かわからない。非常に気持ち悪い状態なのだとエルレインは語った。

「『変身』の度に、なんか少しずつ思い出してる気がするんだけど、夕焼けが終わっちゃうと、やっぱり忘れた気がするんだよな」

なるほど。ならば、これが使えるかも知れない。私は銀色の小箱を取りだし、エルレインにカプセルを渡す。

「これは？」

「強気になる前のマリナが作った、夕焼け空間内での記憶を保持するらしいナノマシンだ。マリナが焼いたクッキーの中に仕込んだものを、抽出してカプセル化した」

「へー……で？」

「飲めば、『変身』した時に思い出した記憶が、定着するかも知れないぞ」

「あっ、そうか……試してみる価値は、あるかも……」
エルレインは、カプセルを手に取る。
「ただし」私は、エルレインの瞳をじっと見る。「毒かもしれんぞ」
「へっ？」エルレインは、きょとんとした。
「私が、お前を殺そうとしているかも知れない」
すると、エルレインは破顔した。
「ばーか。何を今さら。殺そうと思えば、とっくの昔に殺してるだろ。論理的に考えてありえなーい、だっ！」
瞬間、目の前に、エルレインに被さるように『文字』が浮かんだ。
《アタシは、会長を、信じるよ。だって――》
あり得ない現象に、私は目を擦る。すると、文字は既に消えていた。
なんだ、今のは？　幻覚を見るとは、疲れでも溜まっているのだろうか。
エルレインは長谷川から水の注がれたグラスを受け取り、さっさと飲んでしまった。
数秒待って、
「ほら、何ともないだろ？」エルレインは私に対して、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。その表情が気に入らないので、私は一矢報いてやろうと思った。
「ところで、なんだ、さっきの『ありえなーい』ってのは」
「えっ……何って、その……会長の、マネ……」
「壊滅的に似てないな」
「すっごく似てません」マナも賛同した。
「う……うるさいうるさいっ！」
エルレインは真っ赤になって、半泣きになった。

いつものように登校する。校庭では、主席清掃部員の神木来夢さんが箒で落ち葉を掃いている。いつものように挨拶を交わし、教室へと向かう。

すると教室で、珍しく霧島書記長から声をかけてきた。
「やあ、霧島書記長。今日も白いな」
「心のこもっていないお世辞どうも」書記長は、射貫くような視線でじとっと睨んだ。
「気にするな。社交辞令だ」
霧島書記長の形の良い眉が片方、ぴくりと動いた。
「わかってるけど、率直に言われるともの凄くいらっとするわね」
「カルシウムを取れ」
「そんなことはどうでも良いわ。会長くん、また――爆発騒ぎが起こったわ」
「爆発騒ぎ？　まさか、一ヶ月ほど前に起こったあの騒ぎと――」
「関連性があるかどうかはわからない。でも、一ヶ月前の犯人も未だ捕まってないし、可能性は高いわね」
爆弾がしかけられたのは市内東部にある通称らいおん公園。
爆発の発生源は、空き缶回収用のリサイクルボックスだったらしい。
当時の公園に人はおらず、負傷者は出ていない。
しかし、爆発の威力がかなりあったらしく、爆発で吹き飛んだ破片によって公園のシンボルであるデフォルメされたライオンの頭がもげてしまったそうだ。
今回も一ヶ月前と同様、犯人からの声明は無いと言う。井内は『犯人は絶対に楽しんでる』と言っていた。愉快犯だとしたら、益々たちが悪い。
「生徒達への周知が必要だな。早速、議題に取り上げるとしよう」
「周知、配布用のプリントは私が作るけど……それだけ？」
「我々にどうしろと？　せいぜい不審な場所に立ち寄るな、早く帰るようにと警告するのが関の山だろう。どちらにせよ、私達にはどうすることもできん。犯人を捕まえるのは警察の仕事だ」
「それはそうだけど」霧島書記長はどこか不満げである。
「いいか、我々はヒーローではないのだ。繰り返すが、我々は我々

の役割があるように、犯人を捕まえる役割をになうのは、警察だ」
私の保有していた証拠も、とある知り合いの刑事に渡した。この件は、すでに警察に移譲したのだ。
「へたに捜査し、犯人に勘繰られてでもみろ。標的はお前になるぞ。さすれば、危害が及ぶのは霧島カンパニーだ」
「……わかってるわ」
「――京香！」藤堂春香だった。血相を変えてこちらに走ってくる。
「どうしたの、春香？」
「また爆発騒ぎだって！　今度はショッピングモールで小さな女の子が怪我したみたい」
「……会長くん」霧島京香は批難するように私を見る。
「駄目だ」
一ヶ月前、最後に狙われたのはこの学園。そして、しかけられたのは私の教室、私の机だ。犯人は私を狙っている可能性がある。
もしそうだとしたら、これは好都合。へたに周囲の人間に目が向くよりも、この学園が狙われた方が、何かと都合がよい。なぜなら、この学園は一ヶ月前とは違う。
『次世代学校防犯システムリガン』が運開しているのだ。
犯人が侵入し、爆弾をしかければすぐにわかる。
それに、実のところ、長谷川に指示して、極秘裏に調査をして貰っている。私の周辺で動きがあれば、すぐさま長谷川を通じて私に報告が上がるはずである。
対策は万全だ。故に、変に動いて貰うわけにはいかない。
「くれぐれもシキガミを使って調査をするなんて、馬鹿な真似はするなよ」
「……っ、あなたには関係ないわ。私のシキガミがへまを――」
「――しないとは限らん。やめておけ、前回はたまたま運が良かったのだ」
「ここは私達の町よ。脅威は排除しなければならないって、会長くんも言ってるでしょ」

以前、私達は凶悪犯を追い詰めたことがある。前例があるために、霧島書記長には変な自信がついてしまっているのだ。私はその妄想めいた幻想を消し去らねばならない。

「良いか、次もうまくいくとは限らない。失敗した時のことを第一に考えろ。犯人、いや――爆弾魔は一度に大勢を殺傷できる力を持っている。しかも、愉快犯の可能性がある。これだけの事件を起こしておきながら、手がかりは依然として見つかっていない。狡猾で頭が切れるやつかもしれん。前のように、明確な意志を持った犯人とは違うかも知れない。貴女がもし狙われれば、貴女の大切な人も狙われかねんそ。貴女の大切な人を、危険にさらすな」

霧島書記長は手をぎゅっと握り、じっと私を射貫くように睨んでいたが、やがて、

「……わかったわ」嫌々ながらも、納得した様子であった。

彼女には失いたくないものがある。故に、弱い。だが、今は好都合であった。

「――かいちょーさん！」

「こ、こら、マナ、走るなって！」

どうやら、マナがエルレインを伴ってお手洗いから帰ってきたようだ。こんな話がマナの耳に入れば、絶対に「助けましょうっ！」と言うに決まっている。

「藤堂、今の話、マナには話すなよ」

「えっ、でも、みんな噂してるし」

「それでもだ。最善を尽くせ」

「……う、うん」藤堂は戸惑いながらも頷いた。

「この話は、これで終わりだ。我々が屈するのは、恐怖した時だ。我々はいつも通りの日常を過ごせばよい。さあ、授業が始まるぞ」

爆弾魔が捕まることも重要だが、それと同じくらい重要なことを、私は幾つも抱えているのだ。

その一つが、山場を迎えようとしている。

何事もなく放課後。夕焼けの時刻が来た。

《――にゃおーん！》猫の鳴き真似ような声が、開戦を告げる。

気がつけば、目の前に黒ずくめのバイクスーツのような装甲、そして、白いマフラーをなびかせた水鏡マリナが立っていた。

その背後には、青い旗をなびかせた、らいおんのお面。黒岩マコトがゲートらしき隙間を守っている。

水鏡マリナの手には黒いフライパンが握られているが、こちらの様子を覗うように、きょろきょろと眼だけを動かし、じっとしている。

私の傍らにはマナがいる。マナは後ろで手を組み、じっとマリナを見つめている。

「どうした」私がマリナに語りかけると、

水鏡マリナははっとしたように肩をびくつかせ、

「なっ、なんでもないっ！」動揺したかのように、大声を出した。

「そうか」

沈黙が、流れた。

「こ、こんにちは伊統会長！　今日こそ、あなたを殺すわ」マリナはどこかぎこちない。

「ほう、ならばかかってこい」私は腕を、横に薙ぐ。「戦争を始めようかっ！」

「う……」マリナの体が、小刻みに震えた。それを期に「うわあああああっ！」

マリナが強く床を蹴り、駆けだした。鬼気迫る形相で、フライパンを振り上げる。

「いやあああああああああああっ！」悲鳴のような声を狂ったように上げながら、加速した勢いを存分に使って、マリナはフライパンを振り下ろす。

私は丸腰であり、動かない。じっと、フライパンの一点を見続け

る。

——ガチイッ！　硬い物質同士がぶつかり合うような音が響いた。

黒い風が吹く。

「あ、あなたは……」

マリナの漆黒のフライパンは、同じく漆黒の十徳ナイフによって防がれていた。

マリナ達と同じ黒ずくめのバイクスーツのような装甲に身を包み、赤いマフラーをなびかせる、その顔は、デフォルメされた黒猫のお面で隠されている。

十徳ナイフを薙ぎ払った。火花が散って、マリナがフライパンごと後ろにはじき飛ばされる。マリナは体勢を立て直し、距離とって着地した。

そして、介入者が黒猫のお面を——取った。

水鏡マリナの姉、火野坂エルレインがそこにいた。

「な、何なのあなた！　やっぱり、そいつの手下だったんだ！　あたしを、邪魔しにきたのね！」

「手下じゃない」エルレインが口を開く。透き通った甲高い声が響き渡る。「アタシは、アタシの意志で、マリナの邪魔をしにきた」

「意味がわからないっ……なんで！　なんであなたは邪魔をするのよっ！」

「——大切な人が人殺しになるのを黙って見てられるか！」

エルレインは声を張り上げた。

「だからアタシはマリナの邪魔をする。マリナを人殺しなんかにさせないっ！」

「わからないわからないわからないっ、なんで！　何でよっ！」

「アタシはマリナのお姉ちゃんだから！」

「嘘よ！　あたしにお姉ちゃんなんかいないっ！」

「それでもアタシはマリナのお姉ちゃんなんだ。マリナに忘れられたって、この中にある衝動は消せないっ！」エルレインは、胸をぎゅっと押さえた。

青い旗が、二人を別つ。
「マリナ、騙されないで」マコトが、淡々と言った。
「――黙れマコトっ！　アンタは一体何をしているんだ！」
「何を……」
エルレインの気迫に、マコトの機械的な反応が乱された。
「どうしてマリナを苦しめたままにしておく！　なんで傍観者をつらぬく！　アタシがマリナの側にいられたら、マリナをこんなに苦しめたりはしないっ！」
「あんたに……ウチの何がわかる」マコトが一瞬、淀んだ。
「わかるさっ！　アンタはマリナに一番近いところにいながら、今一歩踏み出せないでいるっ！」
「な、何を……っ！」
「アンタはアタシだ。マリナもアタシだ。アタシが担うはずだった役割を背負って、アンタらは苦しんでるっ！　全部アタシのせいだ！　アンタ達が苦しむ必要なんてないのに！　悪いのは全部アタシなんだ！」
エルレインはマコトの胸ぐらをつかみ、引き寄せる。
「できることなら、アタシが未来に帰って、アンタ達を支えてやりたい。でも、できないんだ。アタシは未来に帰れない。ここにいるかどうかもわからない曖昧な存在になってしまったから。でもマコト、アンタは違うだろ！　アンタはアタシが渇望しても戻れない位置にいるんだ！　アンタが変えるんだよ！　過去じゃなく未来を！　お願いだ、アンタの役割を全うしてくれ！　逃げるな！　勇気を出して戦って！」
エルレインは叱咤する。以前とは明らかに違う、強い信念が垣間見える。
「う、ウチは……っ」マコトが動揺している。
そんなマコトを、戸惑いの表情でマリナが見ている。
エルレインがマコトをそっと押すと、マコトがマリナの前から退いた。

「マリナ、あなたの夢を、覚えてる？」
「あたしの、夢？」
「そう。未来は大きく変わってしまって、アタシ達が目指した夢とは違うかも知れないけど、あなたには、夢があるはずでしょ？」
「あたしの……夢……」
「そうだよ。なぜ完全管理社会と争う事になったのか、そのきっかけを」
「……あたしには……夢なんかないよ……」マリナは寂しげな表情で、俯く。
「マリナ……？」
エルレインの表情がショックを受けたようにこわばり、口をつぐんでしまった。
「あたしが、完全管理社会を壊そうと思ったのは……」
その時、マリナの瞳が一瞬だけ淡い赤に光った。瞬間、マリナは辛そうに頭を抱え出す。
「――ううっ、痛いっ、あたまが……割れるっ」
「マリナちゃんっ！」思わずマナが声をあげた。
なんだ、今の一瞬は？　私は何かの違和感を感じたが、その時、
――にゃーん、にゃーん、どこからともなく、鳴き真似が聞こえてくる。
「早く戻れ！　マコト！　何を呆けてるんだ！　お前がマリナを守るんだよ！　――二人ともアタシのようになりたいのかっ！」
「あっ……マリナ！」マコトは慌てて、苦しむマリナを支える。
「あたしは、大丈夫。ちょっと目眩がしただけだから」
マリナはマコトの助けを拒み、自分の力で立ち上がった。
「伊統会長……今日の所は、引き上げてあげるっ……でも、今度は、必ず、殺すわ。……あなたも」マリナは、挑むようにエルレインを見た。「邪魔できるものなら、邪魔してみなさいっ、あなたが、邪魔しようと、あたしが会長を殺そうとするのを、止めることはできないわ」

――にゃーん、にゃーん。

「わかってる。すぐに理解して貰おうとは思わない。でも、アタシは何度でも止めるよ。何度でもあなたを説得するから。だから、また来て。待ってるから」

「……ふんっ、馬鹿じゃないの、気持ち悪い」

「それでも、待ってるから」

マリナは、口をつぐんだ。そのまま、隙間に向かって駆け出す。

隙間に半分体を埋めたマコトが、マリナの手を取った。その時、エルレインが声をかけた。

「マリナ」

マリナが振り向く。そして、エルレインは言う。

「愛してる」

「なっ……！」マリナは目を見開いた。頬が、赤く染まった。

――にゃーん、にゃーん、にゃーんっ！　鳴き真似の感覚が、狭まってゆく。

「愛してるから」

マリナの表情は、そのまま固まってしまった。

「――マリナ、時間が無い！」

マコトが強引に引き込み、マリナはそのまま隙間に吸い込まれていった。

《――にゃんにゃん、にゃおーんっ！》停戦を告げる、鳴き真似が響いた。

エルレインはマリナが消えたゲートに向かって、佇んでいる。

その背中に、私は声をかける。

「エルレイン、よくやったぞ。めざましい成長だ」

エルレインは返事をしない。よく見れば、体が震えている。

不審に思った私は、回り込み、エルレインの顔を覗き込む。

「エルちゃん……泣いてます」

エルレインは、ぽろぽろと涙を流していた。
「マリナ……夢なんて無いって……アタシ、マリナから夢まで奪っちゃったんだ……」
マリナは教室の床に膝を突き、両手を突く。涙が、床にこぼれ落ちてゆく。
「ごめん、ごめんな……駄目なお姉ちゃんで……ほんとごめんな……」
「エルちゃん……」マナは、エルレインに手を伸ばす。
その時、エルレインが顔を上げた。マリナが消えた隙間に向かって。
「でも、大丈夫だよ。アタシ、取り戻すから……この時代から、絶対にマリナの夢を取り戻して見せるから……」涙混じりの鼻声で、エルレインは力強い言葉を放った。
絶望に打ちひしがれるだけのエルレインは、もう、いなかった。
ああ、この子は大丈夫だ。
私は自分が殺されかけているという事実を棚上げにして、そう思った。二人目の娘の成長は私の内に、何とも言えぬ、不思議で暖かな感情を呼び起こした。この感情をなんというのか、私は知らない。
マナはにっこり笑顔で、エルレインに手を差し伸べる。
エルレインは一瞬戸惑ったものの、涙を拭いて、マナの手を取り、微笑み返した。

マナの大食い武者修行を動画サイトで公開したところ、それなりに反響を呼んだ。
『金髪、童顔、ようじょ、ばいんばいん、前代未聞の規模の大食い、突っ込みどころの多いB級構成、なぜか私の認識外で進んでいたコスプレ』ネットで反響を呼びそうな要素をあえて散りばめたため、当然と言える。ネットの反響はテレビにまで届き、朝や夕方のニュースの一枠で、少しだけ取り上げられた。すると、
「みなさん、元気ですかー?」マナが笑顔でカメラに小さな手を振

る。
「「元気、でーす！」」」不特定多数の人々（特に野郎共が多い）の声が、一斉に唱和する。中には養生部も混じっている気がする。
それにしても何だ、この人混みは。
今日が休日だということは、理由にならない。マナの周りには、野次馬共が群がっている。学園の生徒も混じっているようだが、見たことがない顔が大半である。
どうして、こうなったのか。
私としたことが、テレビの力というものを侮っていたのだ。
改めて調べてみると、ネットを使った広告というのは、ネットで反響を起こした後、テレビに取り上げて貰うことによって一気に広めて貰うのが定石らしい。
今回の騒動は、図らずもそのケースに一致したというわけだ。まだまだ、テレビの力は強力だと言うことか。
ちっ、マスゴミ共め。私は内心、舌打ちする。
「すっごいひとだなー。ん？　会長？　なに変な顔してるんだ？」
エルレインが、不思議そうな顔で私を観た。
「なんでもない」説明してわかるものではない。
「「「マナ、ちゅあーん！」」」むさい男共の声が、マナにかけられる。
マナは、その声に反応し、にっこり笑顔で手を振った。
男共は至福の表情で、射貫かれるように倒れた。ありえない。
その仕草を見ていると、何とも言えぬ不快な感情がわき上がってくる。
「ふんっ、流行に左右される馬鹿共めが。どうせ一過性のものだろう」
「あー、わかった」エルレインがにやにやした視線を向ける。
「なんだ」
「妬いてるな」
「馬鹿な！　なぜ私があんな金髪童顔ばいんばいんにっ！」

私は全身全霊を持って否定する。
「なら、娘にたかるハエ共がー！　とか？」
「相変わらずお前のものまねは似てないな」
エルレインはむっとし、少し顔を赤らめた。
「似てなくて悪かったな！　でも、それに近い感情だろ？」
「ありえない。娘がどの男と付き合おうと、知ったことではない」
私は、マナの親離れ計画をすでにスタートさせたのだ。
その第一弾は、すでに娘二人には伝えてある。

昨日の夕食での話である。
「私のボディーガードには、エルレインを任命する」
「おおーっ、エルちゃん、いっしょにがんばりましょうねっ」
「何を言っている、お前は解雇だ。ふぁいやーおーけぃ？」
マナが勢いよく立ち上がり、椅子がガコンと倒れた。
見れば、マナは顔面蒼白である。
「ええっ、どどど、どういうことでしゅかかいちょーさんっ！」
「慌て過ぎだ。とりあえず座れ」
マナはいそいそと椅子を直し、そこにちょこんと座った。
「よし。先日のにゃんにゃん戦争を思い出して貰えばわかるが、この問題は私と隙間ターミネーターの問題と言うより、マリナとエルレインの問題にシフトしつつある。エルレインはマリナを人殺しにさせないために、マリナの邪魔をするのだな？」
「うん。絶対に、マリナを人殺しになんかさせない」
「それはつまり、不本意だろうが、私を守るということになる」
「別に……不本意じゃないよ」エルレインは、ぼそっと呟いた。
「まあ、ともかく、私の護衛はエルレインが行なってくれるということだ。エルレインはマナ、お前より何倍も強いし、頼りになる」
なぜかエルレインが顔を赤くして俯いたが、気にしない。
「そ、そんなぁ……」マナは泣き出しそうな顔になった。
「マナ、何か勘違いしているようだが、私はお前が役立たずだと言

っているのではない。戦争において、お前が役立たずだと言っているだけだ」

「会長、あんまりフォローになってない」エルレインは的確にツッコんだ。

「最後まで話を聞け。マナよ、お前には、お前の役割がある」

「役割……ですか……？」マナはぐすんと涙を溜めている。

「そうだ。お前の大食い武者修行、全て鑑賞しているぞ。お前の働きはすばらしい。お前は、行動によって人々を幸せにできる才能がある」

私は知っている。マナが言われたことだけをやっているのではなく、どうすればおもしろくなるか、どうすればもっとみんなに笑顔になってもらえるか、自分で考え、提案し、試行錯誤しながら番組を撮っていることを。

「え……いやぁ……えへへ。かいちょーさんに、ほめられた」マナは照れたように頬をかく。

「お前はそのまま進めばいい。そして、本当に自分がしたいこと、できることを見つけ出すのだ」

「わたしが、したいこと、できること……」

「そうだ」

マナは、真面目な顔になった。

「わたしがしたいことは、かいちょーさんを御守りすることです！」

「それは、できるのか？」

「できますっ！　できますよう！」

「本当にそうか？」

「えっ……？」戸惑いが、浮かんだ。

「今までの戦いを思い出して見ろ。確かに、何度かまぐれで助かってはいるが、それはエルレインのドジや、マリナのミスなどが直接的な原因だ」

「……わるかったな」エルレインが恨みがましく睨んだ。

「そのおかげで私は生きている。そう怒るな」

「わたしはっ……かいちょーさんを……」
「マナ、人には向き不向きがある。私はお前が戦いに向いているとは思えない」
「わたしだって、お酒さえあれば！」
「マナよ、それは駄目だ」
「何でですかっ！」マナは椅子から立ち上がって、横に座っている私を睨んだ。
「酒で駄目になった人を知っている」
「えっ？」「会長？」
マナは私の横から、エルレインはテーブルの向かい側から、二人は揃って私の顔を覗き込む。その表情には、戸惑いと疑問が浮かんでいる。
私も、戸惑っていた。知らぬ間に口走っていたからだ。私が、酒で駄目になった人を知っている？　私に、そんな記憶はないはずだが？　マナに言い返すうえで、自然と、失言が出てしまったのか？
それとも……いや、今はマナを説得することが先決だ。
私は、先程の失言をごまかすように、理詰めで責める。
「酒は、耐性のある人が少量飲む分には良い。酒は百薬の長という言葉もある。だが、飲めない人が大量に飲んだ時には毒になり、体を蝕む。……マナよ、お前はアルコールを摂取したあと、必ずもどす。体が拒否している証拠だ。お前は酒が飲める体ではない」
「そ、それはそうですけど……でも、それでも」
「最悪、死ぬぞ」
マナは声を荒げて叫ぶ。
「大丈夫ですっ！　今までだって――」
「――駄目だ！　それは今まで運が良かっただけだ！　第一お前は未成年だ。お前が成年に達するまで、私はお前の飲酒を許可しない」
「かいちょーさんっ！」マナの瞳にじわりと涙がにじむ。
私は立ち上がる。マナの肩に手を置く。体温と、微かな震えが手のひらから伝わる。

「お前は、戦わずに人々を幸せにすることができるのだぞ？」
「わたしが……？」今にも泣き出してしまいそうな表情で、マナは私を見上げた。
「そうだ。お前は酒などに頼らなくとも、カメラを通して、人々を笑顔にしているではないか。それは戦いで人々を守ることと同じくらい、いや、それ以上にすばらしいことだとは思わないか？」
「……でも……その……」力が抜けたように、マナは椅子に座り込む。
「マナ、私はお前を責めているわけではない。もちろん、すぐに納得しろとは言わない。だが、少し考えてみなさい。自分に、何ができるのかを」
マナは納得いかない様子で、自分の膝上で握った拳をじっと見ていた。

番組を収録している今は、不満を微塵も感じさせない笑顔で収録している。プロ意識が芽生えている証拠だろう。
マナも、マナなりに成長しているのだ。
隣で見ているエルレインが、呟く。
「マナの頑張ってる姿を見ると、なんか……うずく」
「うずく？」
「うん、なんて言うのかな……なんか、アタシも頑張らなきゃって気持ちになるんだ」
「そうか」
立ち去ろうとした私の背中に、エルレインの甲高い声がかけられた。
「あれ、会長、どこに行くんだ？　マナの収録、見ていかないのか？」
「私には他にやることが山ほどあるのだ。お前は残りたければ残れ。今日は休日だから、隙間ターミネーター共も来ないだろう」
「……アタシも、行くよ。一応、アンタのボディーガードだし……

何が起こるか、わからないしさ」エルレインは顔を背け、少しずれた眼鏡をかけ直す。

「好きにしろ。ただし、つまらんぞ」

私は歩き出す。エルレインが慌ててついてくる。横に並んで、エルレインが言う。

「アタシは未来を変えるんだ。それにはアンタといっしょに行動するべきだと思う。まだ未来は変わってないし、少なくとも、アンタがあんな社会を作った理由を突き止める必要があると思うから」

「ふん、お前は未来人だろう。私が完全管理社会を作った理由など、自明ではないのか？」

「アタシが教えられたのは、アンタの栄光の歴史だけだ……と思う。どうもその辺の記憶が欠落してるような、嫌な感じなんだけど……」

そう言えば、前にもそんなことを言っていた気がする。

エルレインが隙間漂流者になり、私の屋敷に連れ帰った時に感じた違和感。

自白剤と称したブドウ糖の点滴のプラシーボ効果で、未来について自白させた際の歯切れの悪さは、これが原因だったのか。

「どうも胡散臭いな。お前本当に未来人か？」

「当たり前だ！　……なんか、とっても重要なことを忘れているような気がするんだけど。なんだろう、隙間漂流者になった時、その辺の記憶をにゃんにゃん空間において来ちゃったのかな？　ということは、『忘れていること』を忘れている記憶ってのも、あるのかも」

「まったく、おかしな話だ」どうも、これが現実であると信じ切れない自分がいる。

「あっ、でも、アタシさ、最近、未来の記憶が戻り始めてるんだ。『変身』する度に、少しずつ。まるで、パズルのピースをはめていくみたいに。たぶん会長がくれたナノマシンのおかげだよ。……早く、全部の記憶が戻らないかな。そしたら、アタシ達が戦う理由とか、アンタがどんな社会を作ったとか、教えてあげられるだろ」

エルレインは微笑んだ。ついこないだまでは、彼女が私にこんな表情を向けるとは、ついぞ思わなかった。彼女もまた、変わっているのだな。

「ん……？　どうかした？　ぼーっとして……」

「ごちゃごちゃうるさい」

エルレインは噴火した。

「なんだと！　人がせっかく――」

「第一、お前が仮に未来から来たとして、未来の事を教えて貰うなど断固拒否する」

「なんでだよ！」

「私は私の信じる信念に従って行動する。その結果が未来だ。お前に教えて貰わんでも、未来は実現する」

「その未来が問題なんだろ！」エルレインは憤慨し、顔を突き出した。

「お前にとってな。他の国民からすれば、楽園かも知れない」

私は突き出された彼女のおでこを、ちょんとつついた。エルレインは驚き、さっと顔を引っ込めた。その慌てたしぐさが、中々にかわいらしい。

「うーん、くそう……記憶が完全なら、言い返せそうなのに」

エルレインは肩を落として、とぼとぼ歩く。

「まあ焦るな。これからゆっくり思い出していけばいいさ」

「会長……」エルレインが私を見上げた。

「まあ、お前がどれだけ整合性のある作り話をでっち上げられるか、期待しているよ」

「アンタ、アタシの話を信じてるのか信じてないのか、時々わからなくなる」

「私は、自分の見たものしか信じない」

「時々見たものも信じないくせに。賢人生徒会とか、マナとか！」

「現実的解釈をしているだけだよ」

「むかつく！　なんかむかつく！」

「なら、ついてこなくても良いぞ」
「やだ。ついてくもんね。意地でもついてくもんね！　アタシは未来を変えるんだ！」
「はいはい。好きにしろ」まったく子供のように意地を張るな。
「するさ！」エルレインは両手を広げ、空を飛ぶように駆けた後、くるりと回ってこちらを向き、そして、勝ち気に笑った。「――アタシはマリナを幸せにするんだ！」
　何度目だろうか、こうして、絶望的現実から立ち直った彼女の笑顔を見るのは。
「ん？　会長、どうかしたか？」エルレインが私をみて、疑問を浮かべた。
「また、びーびー泣くなよ」
「だ、誰が泣くかあっ！」
　エルレインは、ぼっと顔を真っ赤にして怒った。赤面症は未だ治っていない。
「どうだか」とは言ったものの、目の前で真っ赤になって言い訳する少女を見て思う。
　何度も理不尽な現実に打ちのめされ、それでも這い上がってきたこの子を……妹思いの、やさしく、本当は誰よりも弱いのに、必死で強がる献身的な姉を、再び泣かすものがいるとすれば、それは大いなる悪だ。
　私は認めない。そのような悪を。私がこの手で、排除してみせる。だからこそ作り上げてみせる。目の前の少女が、普通に、笑って暮らせる社会を。
　それこそが、私が作り上げるべき理想の社会――完全管理社会だ。
「……ところで会長、どこに向かってるんだ？」
「学校だ」
　――伊統会長、この世は、理不尽だ。
　かつて、そう言った男がいた。
「何しに行くんだ？」

「人捜しだ」

私は、その男を見つけなければならない。理想の社会。完全管理社会を実現するために。次の社会への変革には、彼の力が必要だ。

特異点技術保有候補者、葉上大介。

第十八話　移りゆく日々

学園に着いた私は、すぐさま裏・賢人生徒会を招集した。
「まったく今日は休日だっていうのに……あれ、エルちゃんじゃないッスか」
教室に入るなり、『情報屋』こと松田俊介諜報委員がとぼけたような表情で言った。
「ちゃ、ちゃんっ？」エルレインは驚き、頬を赤らめた。眼鏡が少しずれた。
どうやら、エルレインの存在が認知され始めているらしい。喜ばしいことである。
「上級生を『ちゃん』付けにするな」
「まあまあ、細かいことは気にしない。マナちゃんだって、マナ『ちゃん』ッスよ」
「そのことでお前に言いたいことがある」
「ああ、残念ながら、マナちゃんの過去については、一切情報なしッス。調べても調べても、なんの手がかりも出てこない。まったく、ミステリアスな子ッスよ」
「情報が……無いだと？　まあいい、それはともかく、私が言いたいのは――」
「ああ、やっぱりマナちゃんがかわいいと」
「違う！　貴様、あの写真集はどういうつもりだ！　弁解の余地はないぞ！」
「写真集？　あれ、オレって会長と写真集の貸し借りしてましたっけ？　そう言えば、秘蔵のエロエロ二、三冊が」
「ちがうわっ！　マナの！　写真集だっ！　あの写真はお前が盗撮した奴だろうが！」
「あれっ、なんでわかったんッスか？」松田はあからさまにとぼけた。

「寄贈と書いてあって良くとぼけられるな！」
「ああ、見たんッスね。良いものでしょう？」松田は屈託のない笑みを浮かべている。
「黙れ、外道」
「褒め言葉です」松田はしたり顔であった。
「貴様が養生部の上層と関わりがあることはわかっている。さあ、養生部幹部の名前を白状して貰おうか！」
「依頼人の名前は、秘匿義務があるので……って、そもそも」
松田はエルレインをちらりとみて、言う。
「いいんッスか？」
おそらくは、裏・賢人生徒会に部外者がいても良いのか、と言いたいのだろう。
「隠密だ。信頼はできる。気にするな」
「へー」松田はエルレインを上から下からじろじろと見た。
「な、なんだよっ」エルレインは松田の視線を避けるように、腕で体を隠す。
「かわいいから、おーけーッス」松田は私に向かって親指を立てた。
「か、かわいいっ？」エルレインの顔が、ゆでだこのように赤くなった。
あの程度のお世辞でこうなるとは、大丈夫か、こいつ。
「あれ、言われたことない？」松田はきょとんとして聞き返す。
「言われたことも……何も……あたっ、アタシはっ」エルレインは湯気が出んばかりに真っ赤になり、何やら恥ずかしすぎて痙攣している様子である。
「松田、からかうな」
「別にオレはからかってないッスよ」
私は溜息をつく。
「あっ、幸せが一つ逃げますよ」
「黙れこのお調子者の漁色家めっ！　エルレイン、こいつの言うことなど気にするな。とりあえずお前は空気にでもなっておけ」

「あっ、うんっ、わ、わかったっ、が、がんばるっ」エルレインは顔を真っ赤にしたまま直立不動で挙動不審であった。かわいいと言われただけでトラウマになりかけているとは、どんな人生を送ってきたのか疑問である。

「空気って……色々酷いッスね」

松田は色々と誤解している様だが、説明する義理も暇も無い。

「松田、無駄話はこれぐらいにしろ。私も暇ではないのだ」

「だから、依頼人の名前は――」

「それはいい」後で拷問にかけて吐かせる。「私が今すぐに知りたいのは、葉上の消息だ」

「ああ、葉上先輩ッスか。残念ながら、こちらも全然で」

松田は黒いハンチング帽をかぶり、目元を隠す。椅子に腰掛け、気だるそうに姿勢をだらしなくずらす。意外と長い両足を組み、そして、ブレザーの裏ポケットから、黒い手帳のようなものを取りだして、ぱらぱらと捲った。

その瞬間、松田から感じる雰囲気が、柔和なものから、人格が変わったように、一気に鋭いものへと変化した。

「お前が見つけられないのか、この辺の噂なら全て網羅しているお前が」

「オレにも知らないことは沢山ありますよ」

松田の口角が、にっと、不自然なまでに上がった。

「第一、葉上先輩が消えた理由すら教えて貰ってません。まあ、消息を絶った前日には、会長と口論しているような姿が目撃されていますけど」

「私を疑っているとでも？」

「まあ、白ではありませんよね。でも、それなら、なぜオレに葉上先輩を捜させるのか、矛盾が生じますし。……それとも、絶対に見つからない自信があるのか」

「ふん、ばかばかしい推理だ」

「まあ、可能性論なんで。でも、その線は薄いと考えています」

「なぜだ？」
「あなたは人を殺せない。甘いという意味ではなく、法律を遵守するという意味で。あなたが人を殺す時は、自分の身が本当に危ぶまれた時だけでしょうね」
「わかったような口をきく」
「まあ、知っていることの範疇なんで」松田は帽子に触れた。
「お前に私のことがわかるとでも？」
「わかるとは言っていません。知っている事だけ知っていると、言っているんです」
松田は組んだ足をとき、反対に組み直した。
「私はわけのわからん話を聞きに来たのではない。葉上の話を聞きに来たのだ」
「そうでした。まあ、あなたが葉上先輩を殺していなくたって、監禁することはできるわけで、その点に関しては、あなたはまだ白ではありません」
「あくまでも、私を疑うか」
「いいえ、可能性の話をしているだけですよ。葉上先輩に恨みを持つ人物や、葉上先輩を狙う人物からとっかかった方が、早いでしょ？」
「葉上を……狙う……」
「心当たりがありそうですね。……実は、葉上先輩の行方を調査するうえで、葉上先輩の素性を色々と調べさせて貰いました。葉上先輩の『才能』を狙う奴らなら、ごまんといますよ」
「……だろうな」私の脳裏に、記憶がありありと蘇る。
星の見えぬ深夜。炎に包まれた蜜柑畑。炎の中、必死で妹を抱きかかえる葉上。
彼は叫んだ。
――どうして、どうして俺たちがこんな目にあわなければならないっ！　俺たちは静かに、普通に暮らしたいだけだ！　それなのに……どうしてだ会長っ！

「……お前、どこまで知っている」
「ほぼ、全て」
「葉上を狙う奴らは、全て滅びた」謀略を駆使し、社会的に抹殺したはずだ。
「次から次へと、湧いて出ますよ」
「私の庇護下でそれはみとめん！」
「か、会長？」エルレインが声を上げた。
自分が取り乱していたことに、今さらながらに気づく。
この程度の挑発で……情けない。
「まあ、落ち着いてください。これも、可能性ってことで。オレが一番高いと思っているのは、葉上先輩が自分で失踪した可能性です」
「……理由を述べよ」
「葉上先輩、失踪の数日前、妹さんを亡くしてますね。何でも、すごく珍しい病状だったそうで」
確かに、その通りだ。
失踪する前、葉上の精神状態は異常だった。憔悴しきっていた。
この世にたった一人の肉親を失ったショックは、計り知れないものがあるだろう。
――会長、この世は、理不尽だ……。
彼は全てに絶望したように、そう呟いたのだ。
かつて私もそうだった。たった一人の肉親を、母を、亡くしたあの時の辛さは、二度と癒えることはない。
だからこそ、私は彼を支えようと思った。私には、彼の痛みがわかったから。
しかし、私に何も言わず、葉上は消えた。
「会長、わかってたんでしょ？　葉上先輩が、自分で消えた可能性が高いって」
私はショックだった。彼は、誰よりも私に近い人間だと思った。
そして、私と同じ痛みを共有できる人物として、挫折を乗り越え、私と共に戦ってくれる人物だと思ったのだ。それなのに、葉上は消

えた。奴は、現実から逃げたと思った。
だが、私は待つことにした。
今は心の整理ができていないだけだ。かつての私がそうだったように、時間が経てば、彼は必ず帰ってくる。彼の傷が癒えるまで、待とうと。
それまで、私は完全管理社会をめざし、行動し続けよう。だが……。
「葉上先輩の消息を捜せという依頼はわかりますよ、一応心配でしょうから。でも、焦って捜させる理由がわからない。会長、最近何があったんです？」
松田は、初めから確信めいた問いを放った。
その瞬間、私の頭に浮かんだのは、全ての蕾の切り取られた、首無しのような花畑。
花火。
何かが燃焼したような匂い。
葉上の『才能』。
そして――。
「……今は、言えん」
「まったく、信頼できない依頼者だ。まるで小説ですよ。しかも時代遅れの三文小説」
松田はハンチング帽をずらして顔を覆った。
「まあ、いいです。葉上先輩の消息を優先して調査する。それでよろしいですか？」
私は、頷いた。松田はハンチング帽を被りなおした。
「了解です。ま、オレが調査してもわからないって事は、何か超常的な力が働いていると思いますよ。例えば、葉上先輩自身の『才能』とか」
「さっきは謙遜しておきながら、自分の能力に対してずいぶんな自信だな」
「ま、事実を言っているだけなんで」松田はしれっと答えた。

「葉上が、妨害していると？」
「さあ、これも可能性の問題ですよ」
松田は立ち上がり、私を見下ろす。帽子の隙間から見えるのは、冷たい視線だ。
「気をつけてください。最近、この辺は物騒です。爆弾魔もまた出てきましたし」
「それについて、何か知っている事はあるのか」
「いいえ。残念ながら何も」
ということは、超常的な力が働いていると言っているも同意ではないか。
「さあて、それじゃあ良い時間なんで、オレ行きます」
松田はハンチング帽を背中の何処かにしまい、黒い手帳のようなものをブレザーの裏ポケットにしまった。
「今日は渡と予定があるんで」松田はへらへらした笑顔を浮かべた。
「渡……物部くんか。お前も彼の『力』について、何か探っているのか？」
「はい？　なんのことッスか？」松田はとぼけたように素っ頓狂な顔をした。
「とぼけるな。霧島書記長といい、なにかとあの子を担ぐ人物が存在する」
「渡は友達ッスよ。そんな目で見ないで欲しいッスね。霧島先輩に惚れられてるなんて、ものすんっごく羨ましいッスけど！」
「……泣くな」松田は本気で悔し泣きしている。
「負けません。オレ、負けませんよ！　オレ、今年こそは絶対に彼女つくって、自転車の後ろに乗せて、登下校するんです！　そしてクリスマスをいっしょに過ごすんです！　もう、聖夜の負け犬はいやだっ！」松田は拳を固めてわなわなと震わせた。
「うん、なんか、もういい。帰れ」そんなことに全力を注ぐとは、馬鹿な奴だ。
「はいっ！　ではっ！　失礼しまッス！」松田は一礼して、そそく

さと教室を後にした。
その後ろ姿を見送り、私は溜息をついた。
「あっ！」エルレインが突然、宙に手を合わせた。
「何をやっているのだ」いたのか。本当に空気だったな。
「幸せが、逃げるって」真面目な顔して、合わせた手を目の前に差し出した。
「迷信だ」ああ、馬鹿がもう一人居た。
「でも、幸せは大切だよ」エルレインが言うと、すごく重く感じる。鉛のように。
私は早々に観念し、エルレインの言う、『幸せ』なる空気を受け取った。
エルレインは満足そうに頷いた後、ふと、疑問を浮かべる。
「ところで、養生部……だっけ？　聞かなくて良かったのか？」
一瞬、なんのことだかわからなかったが、
「――あいつっ！」策士め！　計ったな！
まさか、私が養生部上層の人物について聞き忘れるとは！
「こしゃくな真似を！　逃げられんぞ！　この学園に所属している限り、私からは逃げられんぞ！」土方歳三先生ばりの拷問で吐かせてやる。
「アイツが誰よりも頭が良いって、会長が言った理由、少しわかったよ」
「それなのにあいつは道化を演じている。人的リソースの大いなる無駄だ！」
「それにしても、葉上……だっけ、なんか、聞いたことがあるような気がするんだよな」
「きっと未来の社会で大臣でもやっているのだろう」
「……うん、そう、なのかな」
「無理に思い出そうとせずとも、『変身』を積み重ねれば思い出すのだろう？」
「うん。そうだな、そうだよな」

エルレインは頷いて、微笑を浮かべた。

休み明けの平日、放課後、夕焼けの時間帯の教室。

《――にゃおーんっ！》開戦を告げる鳴き真似が響いた。

いつものようにマリナが現われ、口上を述べる。

「伊統会長、今日こそあなたを殺すわ！」

しかしこちらにはエルレインがいるため、マリナの発言通りにはいかない。

「――マリナぁあああっ！　好きだあああああっ！」

「ちょ、ちょっと、なんなのよあなた！」

「だから、人殺しになんかさせないっ！」

「ばか、いや、だいきらいっ！」その言い方では、好きの裏返しにしか聞こえない。

二人は、漆黒のフライパンと十徳ナイフを打ち合わせる。互いの存在を確かめ合うように。

二人は、戦場の中でお互いの親睦を深め合う。綱渡りのような日常を生きている。

私はそんな二人の戦い、というか、ふれあいを眺めながら、隙間ゲートの前で、黙ってじっと立っているマコトに声をかける。

「お前も加わったらどうだ」

「……ウチには、ウチの役割がある」相変わらずの、機械的な返答である。

「まったく……前にも思ったが、完全管理社会に反逆するお前が、役割を語るとはな」

マコトは答えない。私など存在しないかのように。その視線は、じっとマリナを捉え続ける。

私は後ろを向いて、マコトの前に座り、あぐらをかく。そして、言う。

「今なら、私を殺せるぞ」
「……は？」
「――ちょ、ちょっと！　やめてえっ！」マリナの悲鳴が上がった。
「マリナぁ、待ってよぅ！」エルレインの表情がにやついている。なんというか、肌がつやつやしている気がする。
　マリナがエルレインの変態すれすれの行動に追い立てられ、教室を出て行った。
「私はお前に背後を向けている。今なら簡単に殺せるぞと言っているのだ」
「……ふざけてんの」
「殺せないのか？　殺すのがこわいか？」
「違う。あなたを殺すのは、マリナの役目」
「なぜだ、マリナはお前の友達ではないのか、友達を人殺しにさせて、お前は納得できるのか？」
「黙れ、あんたに何がわかる」自分の感情を押し殺すように、マコトは言った。
「またそれか。いつも、『あんたに何がわかる』。――話してみなければわかるものか！」
「……どういう風の吹き回し？　今までウチらのことなんか、関心を持とうともしなかったくせに」
「さあな、私に聞くな」
「自分の事のくせに」
「自分の事など、得てして理解出来ないものだ。どうやっても客観的にはなれん。お前、自分の命と見ず知らずの他人の命、どちらかが死なねばならぬとしたら、どちらを助ける？　決定権はお前にあるとする」
「そんなの答えるわけないじゃん。そんな手にはのるもんか」
　そう言いつつ、私との会話は成立している。以前なら、私の言葉になど耳を貸さず、無視を決め込んでいただろう。
「そう言わずに、答えて見ろ」私は、もう一押しする。

「答えたって、無意味。どうせ、他人を殺すに決まってる」
「どうして、そう言い切れる」
「見ず知らずの他人なんかに、命なんか捧げられない」
「でも、お前はマリナになら、命を捧げることができるのだろう？」
「マリナは、見ず知らずの他人なんかじゃない」
「なら、なぜそこでじっとしている。お前はマリナの為なら命を喜んで差し出すくせに、マリナが追い詰められても、助けようともしない」
「それは……」
「私は当初、水鏡マリナを本気で殺しにかかった。エルレインがいなかったら、確実に死んでいたぞ。それで『帰る場所を守る』だ？　帰る奴がいなくなれば、そんなもの無意味だ。お前はマリナの指示に従っていると言うが、そんなもの甘えだ。マリナの指示に従うしかなかったというふざけた理由で、自分の失敗を正当化しているだけだ」
「違っ……ウチは――」
「――今のお前はマリナの指示無しには何もできない操り人形だ。そんな奴、換えなどいくらでも作れるわ！」
「なんだと……お前に、何がっ」マコトの声が震えている。
我慢が、臨界点に達しているのだろう。
いいぞ、一見機械的に見えて、彼女はしっかりとその内に感情を持っている。
その感情を、押し殺しているだけだ。
「またそれか」
私は立ち上がり、振り向く。
マコトは一見平静を保っているように見えるが、憎悪の宿った視線は隠せない。
彼女は今、憤っている。私の言ったことが、図星なのだ。
「千載一遇のチャンスを逃すとは、まったく忠実な番犬だな。いや、ただの能なしのポールガールか」

マコトは反射的に旗をカチャリと揺らすが、こちらに襲いかかってくる様子はない。
「いいか、お前に一つ良いことを教えてやる」私はマコトに近づき、その首を掴み、引き寄せる。「――自分の頭で考えて行動しろ！お前は何がしたい、お前はどうしたい、お前は何をすればマリナを救える！　そんなところに突っ立ってないで、さっさと行動に移せ！」
「そんなこと……できない」
「何故だ」
「だって……ウチは……」
これで、マコトの本心が聞けると思ったその時、
――にゃーあ。
ネコの鳴き声が聞こえた。
見ると、マコトの足下に、例の『くろにゃあ』なる黒猫がすり寄っているではないか。
マコトは不思議そうな顔で足下を見ていた。そして、徐ろにしゃがみ込み、黒猫の喉を撫でる。そして、
「うん……ありがとう」と言って、微笑んだ。
私には、何が何だかわからない。
「あっ！　くろにゃあ、こんな所にいた！」そう言いながら入ってきたのは、
なんと、神崎愛美であった。
「愛美……なぜ、ここに？」部外者は、ここに立ち寄れないはずなのに。
「あれ、いかちゃんじゃん？　なにやってんの？」
「あ、いや、お前こそ、どうしてここに」
「くろにゃあと追いかけっこしてたの」
そんな理由でここに来てもらっては困る。仮にも、私たちはここで戦争をしているのだ。そんな私の苦心も知らずに、愛美はてくてくとマコトの下へ歩み寄る。

「あなたが、くろにゃあと遊んでてくれたんだ」
愛美の真っ直ぐな瞳が、向けられ、マコトはうろたえる。
「いや……ウチは別に……」
「え、なに、くろにゃあ？　えっ！　この人、お話しできるの！」
愛美の表情が、ぱあっと明るくなった。
「おい、今なんと！」こいつが、黒猫と話せる？　一体どういうことだ？
愛美はマコトの手を取る。眼には、涙がうっすらとにじんでいた。
「初めて会った……愛美と、同じ人」
「あ……あの……」マコトは戸惑うばかりである。
「ねえ、お友達になって！」
「で、でも……ウチは……」
「ねえ！　お願いっ！」
気配を感じ、私は愛美を連れて咄嗟に後ろに跳び下がった。
「やめて」
――黒い質量をおびたビームが、私達とマコトの間を別った。
「マコトが嫌がってるじゃない」
マリナが一瞬でマコトの盾になり、フライパンをこちらに向ける。
すかさずエルレインが私達を庇う。
「ああっ、だめだあっ！　マリナ、この子は神崎愛美ちゃんで、とっても良い子だからマコトに危害なんかくわえないよ！」
エルレインは愛美に向き直る。愛美は怯え、震えていた。
「愛美ちゃん、ごめんね。この子はアタシの妹で――」
「――そんなことどうでもいいのよっ！」マリナが叫んだ。
マリナは激情していた。理由は簡単に推測できる。
「友達が取られるのが、そんなにも嫌か？」
「なっ……！」マリナが私を睨んだ。
「図星か。醜いな」
「――会長っ、アンタはまたそんなこと言う！」
「……最低」マリナが吐き捨てるように言った。

「マリナっ、違うんだって！　会長は本心で言ってる訳じゃないから！　アタシの時もそうだったけど、本当は思いやりがあって――」
「最低で結構。私は他人にどう思われようとも、自分のしたいようにやる。法律と、ご近所さんへ迷惑のかからない範疇でな」
「会長はこう言ってるけど、実は照れ隠しで――」
「エルレイン、お前はさっきから何をごちゃごちゃ言っている！　私が照れてるだと！」
「照れてるじゃないか！　アタシにはわかるんだぞ！　アンタとどれだけいっしょにいると思ってるんだ！」
「まだ一ヶ月とちょっとだろうが！」
「一ヶ月もずっといっしょだ！　アンタはなんだかんだ言いながらアタシを助けてくれた。それが証拠だ！」
「ああもう恥ずかしい事をべらべらと！」
「やっぱり照れてるじゃないか！」
「――あなたたち……一体何を言い争ってるのっ！」マリナが大声で割り込んできた。
「あっ、マリナ、えっと……」
「あなた達の敵はあたし達じゃないの？　なに仲間同士で言い争いしてるのよ！　あなた達が言い争いしてると、こっちまでむかむかしてくるじゃないのよっ！　……って――なんであたしがあなたたちの仲裁をしてるのっ！」
「私に、聞くな」むかむかするのは、どうせ違う理由だろうが。
――にゃーん、にゃーん。
「ああもうっ、マコト、今日のところは撤退よっ！」
「マリナ……マリナが先に――」
「――今日はあなたが先に行って」マリナは有無を言わさない口調であった。
マコトはしばらくマリナを見つめ、私に一瞥くれると、
「……わかった」
「あ、待って！」愛美が叫んだが、

マコトは自ら隙間に飛び込み、そして消えた。
「えっ……どういうこと？」愛美は、何が起こったのかわからず驚いている。
――にゃーん、にゃーん、にゃーん。
夕焼けの終わりが違い事を告げる、鳴き真似の間隔が短くなる。
それなのに、マリナは隙間に飛び込もうとしない。
そして、愛美をキッとにらみつける。
「マコトに二度と関わらないで」
「マコト？　あの子、マコトって言うの？」
「うるさいっ！　部外者のくせにっ！」
「部外者じゃないもんっ！　あの子、くろにゃあの言ってたことわかったもん！　愛美と一緒だもん！」
「わけのわからないことをごちゃごちゃと！　どうせあなたなんか、全てを忘れるくせにっ！」
「……どういうこと？」
感情を抑えきれなくなったのか、マリナは漆黒のフライパンを愛美に向けた。
「――マリナ」私は愛美の盾となる。
「……なによ」
「ゲートの前に突っ立っているだけのポールガールに、ずいぶんとご執心だな」
「か、会長っ！」エルレインが素っ頓狂な声を上げた。
「マコトは、そんなんじゃない」マリナは、じっと私を睨み付ける。
「会長も、マリナも落ち着いて！　マリナ！　早く隙間に飛び込まないと時間が！」
「あの子を責めるのは、お門違いよ。マコトがああなったのは、あたしのせいだもの。責められなきゃ行けないのは……このあたしだ」
マリナは、どこか寂しげだった。
そのままマリナは背後の隙間に飛び込み、消えた。

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》停戦を告げる鳴き真似が、今回も響いた。

「あれ？　愛美、ここで何してるの？」

愛美は、夕焼けの記憶を失っていた。

私は彼女にナノマシンを投与するか迷ったが、結局やめた。

マリナの言ったとおり、神崎愛美は部外者だからだ。

「昼寝でもしてたのではないか？」

「うーん、そうかなー？」

愛美を何とかごまかし、校門まで見送った。

「……本当に、何も覚えていないのだな」

「そりゃそうだよ。夕焼け空間内のことは、全部忘れちゃうんだ。そうしないと、未来が変な風に変わっちゃうだろ」制服・赤眼鏡姿に戻ったエルレインが得意げに答えた。

「私を殺して未来を変えようとしたお前が、えらそうに言うな」

「うるさいなー。……アタシだって、少しは反省してるんだよ」

エルレインはいじけてしまった。確かに、昔の過ちを責めるのは、少々大人げなかったようにも思える。

「それにしても……私の記憶が保持されているのは、マリナが作らせたナノマシンのおかげなんだったな。私はマリナに感謝すべきかもしれない」感謝はしないが。

「うん。マリナ、すごいよね」エルレインは自分のことのように喜んだ。

まったく、マリナを褒めるとすぐに元気になるのだから単純だ。

そういえば……。私は、マリナが言っていたことを今さらながらに思い出す。

――体内に取り込まれたナノマシンは一定期間、脳に定着し、夕焼けにゃんにゃんの記憶を保持し続ける。

『一定期間』という言葉が、引っかかる。

いつかは、愛美のように、私の記憶も消えてしまうのだろうか。

「エルレイン」
エルレインに聞こうと思ったが、
「マリナ、マコトのこと……自分のせいだって言ってたけど、どういうことなんだろう」
暗い顔をしたエルレインが呟いた。先ほどの話か。どうやら、マリナの話を振ってしまったことで、思い出してしまったらしい。
「お前は知っているのではないのか？」
「いや、知らない。忘れてるだけなのかな、それとも、アタシの知ってるマリナ達と、少しずつ違うのかな」
「聞いてみたらどうだ」
「……うん。そうだね。次会ったら、聞いてみようかな」
「罵られるかもしれんぞ」
「もう、慣れたよ」エルレインは、軽く笑って見せた。
本当に、強く成長したものだ。私は少しだけ感慨深くなる。
「なんというか、こう、少しうれしくなるっていうか、罵られた時に、一瞬、良い気分になるっていうか……」
まずい。これはまずい症状なのではないだろうか。うちの娘が変態に目覚めかけているような気がするのは、気のせいだろうか。
「とにかく、どんな関わりでも、うれしいんだ。一度、失ったと思ったものだから」
どうやら、私の思い過ごしであったようだ。いや、そうであって欲しいものだ。
「会長」エルレインが、なぜかもじもじしながら、私を見て、視線をそらして、を繰り返す。そして、決意したように、すっと私を見つめる。「ありがと、な」
「なんのことだ」
「いや、その、あの、いろいろ……協力してくれて、今日の、マコトに対する事もさ、マコトとマリナ達のことを思って、やってくれてるんだろ？」
「お前……最初にあった時から思っていたのだが……」私は、恥ず

かしそうに視線を下に向けるエルレインに近づき、まじまじと見つめる。
「な、なに？」エルレインの頬が赤く染まる。戸惑ったように、目を見開く。
「やっぱり、恥ずかしい奴だな」おまけに赤面症だ。
「なんだとっ！」エルレインの眉がつり上がり、さらに真っ赤になって憤慨した。「そういう会長だって、意外と恥ずかしがり屋さんじゃないか！」
「『さん』を付けるな、『さん』を……って、私のどこが恥ずかしがり屋だと！」
「赤くなってる」
「うるさいっ！」
「あはは！　べーだ！」エルレインはあっかんべーをして駆けだした。
すぐに捕まえようとしたが、楽しそうな笑顔を浮かべながら、エルレインは逃げ回る。
……まったく、あいつは子供か。
エルレインにナノマシンの事を聞きそびれてしまった。
まあいい……良い案を思いついた。
忘れてしまうのなら、手帳にでも書いておけば良いのだ。
私は懐から手帳を取り出し、今までの経緯を簡単に書き留める。
そして、読み返す。
『にゃーん。にゃにゃにゃん、にゃおーん。にゃんにゃん……』
なんだ……これは。
私が書いた夕焼け空間に関する記述は、全て『にゃんにゃん語』に変わっていた。
これは……いや、待てよ。まだ、ボイスレコーダーという手がある。
録音し、再生する。
〈にゃーん。にゃにゃにゃん、にゃおーん。にゃんにゃん……〉

駄目だ……どうなっているのだ……私の頭が、おかしくなってしまったのか。

「ん？　会長、どうしたの？」エルレインが戻ってきた。

「おお、エルレイン、良いところに来た」

私は、『にゃんにゃん語』の経緯を話した。

「ああ、ナノマシンのせいじゃない？」

夕焼け空間内の情報が外部に漏れないように、ナノマシンを使って制限をかけているんじゃないか、とエルレインは言った。

そんな馬鹿げた話があるか。

ナノマシンに頭をいじくられるなど、考えただけで吐き気がするし、ぞっとする。

それに……。

「どうするのだ！　私の記憶が消えれば！　大きな損失になるぞ！」

本音を言えば、私の夕焼け空間の記憶が消えれば、マリナの事はもちろん、エルレインのことも忘れてしまうかもしれない。そうなれば、誰が彼女を保護するのか。

とは……言えない。エルレインに不要な心配をかけるわけには……。

「大丈夫だよ。マリナと仲直りして、ナノマシンをまた貰おうよ」

エルレインは、けろりとして言った。

「……お前、頭いいな」

あまりに単純明快な解答だったので、私は拍子抜けしてしまった。

「そうかな……あははは」エルレインは照れた。

「――かいちょーさーん！　えるちゃーん！」マナの声であった。

声の方を見ると、やはりマナであった。なぜか白いエプロンをしている。

「やっぱりここでした」マナはとたとたと元気よく走って近づいてくる。

「マナ！」「マナ、どうしてここに？」

「ごはんの時間ですよ！　お二人をお迎えに来ました！　さあ、帰

りましょう！」
「……それだけ？」エルレインは不思議そうに、マナの顔を覗き込む。
「それだけじゃありませんっ！　今日は、わたしが作ったんですよ！」
マナはばいんばいんを張り、えっへんとでも言いそうなポーズをした。
「えっへん！」
訂正しよう。言った。こいつも恥ずかしい部類の生き物であった。
最近は家事も持ち回りのシステムが確立し、長谷川の指導もあってか、マナの料理も急激に上達している。
つまりは、自分の成果を少しでも早く自慢したくて、ここまで来てしまったという訳か。
「ささ、お二人とも、いきましょう」
マナは私達の後ろに回り込み、背中をぎゅーぎゅー押す。
「まさに、花嫁修業街道一直線だな」
「アンタのたとえがわからないし、マナに何をさせたいのかがわからない」
「そう言うお前は、マナ以上に料理が壊滅的である事が判明したわけだが」
「うるさいうるさいっ！　アタシはまだまだ発展途中だっ！」
「色々なところがな。いや既に発展が止まっている可能性も」
「どこ見て言った！」エルレインが顔を近づけ、睨む。
「自意識過剰なのではないか？」私も睨む。
この勝負、視線をそらすか、体を離した方が負けである。
「恥ずかしがりの皮肉屋」エルレインが言えば、
「赤面症の変態シスコン」私も応酬する。
お互いに視線をそらさない。ふむ、どうやらこいつは勝負のわかる奴のようだ。
「――とあーーーっ！」マナが突然、体を割り込んできた。

「おわっと……マナ？」「……お前、何をやっているのだ？」
「隙間があったから、入り込んでみただけですっ！」マナはなぜか、むくれていた。
「訳のわからん奴だ」
「わけがわからなくてけっこーですっ！　ねっ、エルちゃんっ！」
「え、アタシ？　うーん、そうかな……」
「あれ、エルちゃん、なんか綺麗になりました？」
「えっ？　な、何を……」エルレインは、ぽっと顔を赤らめた。
「そう言えば、肌とか張りが出てきたかもな」
「えっ……そうかな……やっぱり、大好きな人と会うと、綺麗になるっていうし……」
大好きな人というのが実の妹というのも、色々な意味で危なくはあるな。
「冗談だ」
「冗談かよっ！　……って」
エルレインはきょとんとした。
「どうした」
「会長が、冗談を言った」
「私だって、たまにはいうさ」私は咄嗟に、目をそらしてしまった。
エルレインは腹を抱えて笑った。マナもつられて笑った。
恥をかいてしまった。
やはり、慣れないことはするものではないと、つくづく痛感する。
「二人とも、笑ってないで、さっさと帰るぞ！」
「はいっ！」「はーい……照れ隠しだ、絶対に照れ隠しだ」
夕闇の中。性格も、容姿も、まったく異なる二人の義理の娘が、本当の姉妹のように冗談を言い合い、笑い合いながら、こちらへ歩いてくる。我が屋敷には、母のような微笑の黒執事、長谷川も待っている。
何の因果か、偶然に偶然が重なり集まった、仮初めの家族。それでも、こうして笑い会うことができる。これが、社会全体に広がれ

ば……。

そう思うと、何とも言えない感情が、胸の奥底から沸き上がってくるのを感じる。

長くはないだろうが、しばらくはこの日常が続くのだろう。

この時の私は、安易にそう考えていた。

この日常というものが、どれだけ貴重で、得難いものであったのか。

ひとたび亀裂が奔ってしまえば修復不可能な、薄いガラス細工のような脆弱性を含んでいることなど、つゆも知らずに。

そして、その始まりは、その日の夜に訪れた。

風呂から上がってくると、長谷川の部屋から、マナの声が聞こえてきた。

「――お願いします！　長谷川せんせいっ！」

長谷川……先生？　気になった私は扉をノックする。

「何をやっているのだ」

すると、ドアの向こうから、マナの声が。

「あっ、かいちょーさん！　かいちょーさんからもお願いします！」

扉が開き、私は強引に長谷川の自室に連れ込まれた。

話を聞いてみると、何やら、ヒロくんなる人物の手術をして欲しいと、長谷川に頼んでいる様子である。

そういえば、マナが倒れて病院へ連れ込まれた時、そのような名前の子供がいたな。確か、心臓に重い疾患を患っていたのだったか。

「お願いします。長谷川さんっ！　長谷川さんは、すごいお医者さんなんですよねっ！　わたし、看護師さんに聞きました！」

長谷川は、困ったような微笑を浮かべていた。

「残念ながら……わたくしはもう、医者としての技術はありません」

「嘘ですっ！　こないだ、一緒にヒロくんのお見舞いに行った時、長谷川さんは、しゅじゅちゅで患者さんを治したじゃないですかっ！」

初耳であった。すると、長谷川の表情が、益々困ったような微笑になる。

「――長谷川、事実なのか？」

長谷川は、重そうに口を開いた。

「たまたま、緊急搬送された患者様と、容態が急変した患者様が重なりまして……人手が足りないというので、仕方なく……。本当に、たまたま、助けられる方だっただけなのです」

「でもっ、看護師さんは、『かみわざ』だって、言ってました！長谷川さんなら、ヒロくんのしゅじゅちゅだって、できるって！」

「それは……」長谷川は、口をつぐんだ。どうも様子がおかしい。

「マナ、少し外してくれないか。長谷川と二人で話がしたい」

マナは納得のいかない様子だったが、渋々身を引いた。

「……わかりました。長谷川さんっ、わたし、信じてますから」

マナが出て行ったのを確認してから、ぶしつけに言う。

「さて、今月の和洋折衷戦争を開戦しようか」

「会長、さま？」長谷川は、困惑の微笑を浮かべた。

二人の間にチェス盤を並べ、私と長谷川は、向かい合わせに座った。

交互に駒を動かしてゆく。その間、無言。長谷川の微笑には戸惑いが浮かんでいたが、私は黙々と駒を置き、長谷川にもそれを促す。

やがて、勝敗がついた。完敗であった。

「お前の勝ちだ」

「会長さま……どうして」

長谷川は、わかっている。チェスでは、どうやっても長谷川に勝つのが不可能であることに。長谷川は、戸惑っている。何故、私があえてこの戦いを挑んだのかと。

「初めての戦いが、このチェスであったな。覚えているか」

「……はい。わたくしの、勝ちでした」申し訳なさそうな微笑を、長谷川は向けた。

「ああ。だが、勝ちなどと言う表現では生やさしすぎる。あれは圧

勝と言うのだ。私は訊ねたな。『どうしてそんなに強いのか』あの時お前が言ったことは、今でも忘れられんよ」

長谷川は、無言で私を見つめる。もちろん、微笑を崩すことは無い。

「『チェスは将棋や囲碁などと比べて、比較的パターンの少ないゲームです。全ての可能性を網羅すれば、自ずと勝利は決まります』お前は、そう言った」

長谷川は、仮面のような微笑を崩さない。

「馬鹿げていると私は声を荒げた。『そんなのまるでスーパーコンピューターだ。人間業では無い』と。だが、お前と過ごす内に、お前なら可能だと思うようになった」

そうだ。長谷川は、笑顔の仮面を被っている。

「『死神先生』……だったか」

仮面が、少し崩れた。長谷川は、戸惑うような微笑を浮かべた。

「やはり、関係あるのだな」

長谷川は、観念したような微笑で、語り始めた。そして――

「――あの子は、助かりません」きっぱりと断言した。断言してなお、微笑であった。

「……たしか、難しい症例だとは聞いたが」

「そう言う意味では、無いのです」長谷川は、頭を振った。「わたくしには、どうやっても助けられないのです」自分の手を、苦々しげな微笑で見た。

「医療に関して私は素人だが、それは戦う前から諦めてしまう事と、同じでは無いのか」

長谷川は、首を横に振った。

「わたくしが救えるのは、助かるべくして助かるべき命だけなのです」

それは、長谷川が初めて見せる微笑だった。まるで、苦しんでいるような、悔しがっているような、そういう微笑だ。

見た瞬間に、人の生き死にが分かってしまうのではないか。医者

時代の長谷川の事を教えてくれた人は、そう語っていた。
「それは、お前の超人的な技術に起因するものなのか」
長谷川は答えない。
「お前にとっては、このチェスと同じだというのか」
しばらく、沈黙が続いた。じっと長谷川の表情を覗った。
やがて、長谷川の固い微笑が、ほんの少し緩んだ。
「……そう思って頂いて、結構です」諦めたような、微笑であった。
それが医者を止めた理由なのか。なぜ、今は私の執事なんぞをやっているのか。
人の過去を詮索する趣味は無いが、気にはなる。だが、聞かれたくない過去というものがあることも、私は知っている。実感している。
「……わかった」
長谷川は、悲しそうな微笑を浮かべていた。悲しそうでも、微笑は微笑だ。
「お前はなぜ、そうして笑っていられるのだ」
長谷川は、傷ついたような微笑になった。
「……失言だ。聞かなかったことにしてくれ」
私は席を立ち、扉を開けるために背を向けた。
「会長さま」長谷川の声が、背中越しにかけられた。
「……戦争はお前の勝ちだ。好きな部屋を取るが良い」
部屋を出ようと、扉を開けた。すると――
「ヒロくん……死んじゃうの？」マナが、涙を流して立っていた。
感情を殺されたような絶望的な表情が、マナに張り付いていた。
和洋折衷戦争のチェスには、時間稼ぎとカモフラージュの意味もあった。てっきり、諦めて自分の部屋にでも戻ったかと思っていたのに。
「マナ――」
「いやです……そんなの……」マナは糸が切れた人形のようにへたり込み、すすり泣く。

このままにしておく訳にはいかない。マナの肩に、手を置く。
「マナ、わかってくれとは言わない。だが、人にはどうしようも無い現実というものも、この世にはあるのだ」
マナは乱暴に、手を振り払った。
「わかりませんっ！　始める前からあきらめるなんて、そんなの、おかしいですっ！」
「今はわからなくてもいい。大人になればわかる」
「嫌です……そんな大人になんかなりたくありませんっ！」
マナは大声を上げて泣き出してしまった。
これには、私もほとほと困った。何を言っても、マナは言うことを聞かない。
しかし、最後には受け入れるしかないのだ。
この世には、理不尽な死など、ごまんとある。乗り越えるしかないのだ。マナも、そして、今は消息を絶った葉上も。
私だって、乗り越えてきたのだから。だから……。
「……一週間だけ、お暇を頂けませんか」
「長谷川？」思わず、振り向いた。
「海外ですが、『技術』を持ったお医者様に心当たりがございます。とてもご多忙な方ですが、その方の元で研鑽を積みたく思います」
「しかし、お前……」
「一週間で結構です。わたくしに、お時間を頂けませんか」長谷川は、黒い手袋に覆われた手を、自分の薄い胸に置いた。
「可能なのか」
「やるだけのことは、やってみようと思います」肯定は、しなかった。だが、
長谷川の微笑に、覚悟が宿った、そんな気がした。
普通ならば、たった一週間では何もかわらないだろう。だが、この『超・執事』長谷川なら、可能ではないか。そう思わせてくれる実績が、長谷川にはあった。
「マナ様、よろしいですか」

マナは、涙を拭った。そして、長谷川に抱きついた。
「……信じてます。長谷川さんなら、絶対にできるって」
「ありがとうございます」長谷川は母のような微笑で、マナを抱きしめ返した。
――キュィィィン！　つんざくような耳鳴りと、頭痛がする。
《ごめんなさい》長谷川の背後に、文字列が生じ、そして消えた。
目を擦る。文字列は無い。
「会長さま」長谷川が話しかける。「しばらくの留守を、お許しください」
私の、気のせいだったのだろうか。
「かまわん。最善を尽くせ」
長谷川は、寂しげな微笑を浮かべた。
翌朝、長谷川は消えるように旅立った。

第十九話　爆弾魔

長谷川が旅立った日の昼休み。
マナが焦ったような表情で、私の下へと、とたとた駆けてきた。
「かいちょーさんかいちょーさんっ、最近街で爆発騒ぎが起きてるのって知ってますか」
「知っているが、何か？」今さらな情報である。私は努めて冷静に返す。
マナはぎょっと目を見張って、私を責めるような表情で近づく。
「何かじゃありませんよう。わたし、こんな事になってるなんて知りませんでした！　今こそ、魔法少女出動の時です。かいちょーさんっ！　爆弾魔法使いさんを捕まえましょう！」マナはばいんばいんの前で、両手をぎゅっと握る。
そして私は頭を抱える。
「お前は、何を言っているのだ。霧島書記長にも言ったのだが、爆弾魔を捕まえるのは、警察の役割だ」
「でもでもっ、『魔』ですよ！　まっ！　魔法使いには、魔法使いが対抗しないと行けませんっ。かいちょーさんも協力してください！」マナは必死であった。この――
「――ばかものがあっ！」
私の罵倒に、マナはひあっと奇声を上げて、反射的に頭を抑えた。
「爆弾魔の『魔』は魔法とは無関係だ！」
「でもでもっ、爆発が起こるなんて、魔法ですよ！　絶対に魔法です！」
またマナの魔法解釈か。しばらくなりを潜めていると思ったらこれだ。だからマナには爆弾魔の情報を仕入れさせないように気を遣っていたというのに。
しかし流石にここまで騒ぎが大きくなると、隠すのも無理が出てきたか。

ここ数日、街のあちこちで爆発騒ぎが起きるようになった。奇跡的というべきか、単なる偶然と言うべきか、死者は出ていないものの、負傷者が出るようになった。

前代未聞の規模の犯行に報道も過熱し、警察は無能と罵られ、爆弾魔の行動はさらにエスカレートしているようにも思われる。しかし、これと言って目立った目撃証言もなく、警察の懸命な捜索も空振りし続けている。

爆弾の構造も巧妙化しているらしく、爆発の残骸ではなんの証拠能力も無いとの話。捜査は暗礁に乗り上げ、完全に手玉に取られた形となっている。

これが警察のデータベースに侵入し取得したという、井内ユウからの情報である。

そのような犯人と、マナを関わらせるわけにはいかない。

私は、霧島書記長を説得した理屈で、マナを丸め込もうとする。

「いいか、絶対に捕まえようなんて思うな。お前が爆弾魔を捕まえようとすれば、お前が狙われる可能性がある。それだけではない。お前の大切な人も狙われることになるぞ」

「かいちょーさんが狙われちゃうって事ですか！」

マナはショックを受けたように目を大きく開いた。

大切な人と聞いて、なぜ私の名前が出るのか。馬鹿か。

とにかく、話の腰を折るわけにはいかない。私はマナに合わせる。

「エルレインや、長谷川、藤堂も狙われる事になるぞ。それで良いのか」

マナの顔色が、さっと引いた。

「嫌ですっ！　そんなの、絶対に嫌ですっ！」泣き出しそうな顔で、叫んだ。

「ならば馬鹿な真似は止せ。爆弾魔を捕まえるのは警察の役割だ。お前はお前にできることをすればいい」

「……むー」マナはあまり納得のいかない様子だったが、言い返しては来なかった。

放課後。マナは撮影に行き、エルレインは演劇の練習へ赴いた。
私は誰もいない教室に一人残り、次世代学校防犯システム『リガン』のテストをする。
以前に道具屋店主の赤髪ポニテ悪魔石上アカネ嬢にリガンの調子について聞かれた際、アカネ嬢の反応に引っかかるものがあったからだ。
――不思議なことがあった。耳がキーンとなって、こめかみが痛くなり……。
――で、で、それで？　どうしたの？
アカネ嬢は突然身を乗り出し、凄まじい食いつきようであった。
ここから推測できる事実が、一つある。
リガンには、まだ隠された機能がある。
私はリガンを使い、学校の至る所を同時に視認する。
部活動を行なう生徒達、教室に残ってだべっている生徒達、それぞれの方法で青春を謳歌している生徒達の姿が見える。この機能だけでもすばらしいものであるというのに、これ以上の機能があるとでもいうのか。
無論アカネ嬢にも訊ねたのだが、あの時は結局、女子生徒の生着替えシーンなるいかがわしい映像を見せられ、動揺して……。
いかんいかんっ！　何を思いだしているのだ。心臓がばくばくとなっているぞ。白い生肌などさっさと忘れてしまえ！
思い返してみれば、あの時は、意図的に煙り撒かれたような気がする。
そう言えば、エルレインの心を乱したくろにゃあもどきの存在、アレは一体何だったのか。リガンのメモリーを見返しても、それらしき映像は残っていなかった。あれがリガンの隠された機能と関係あるものなのか……。
――か……さ……。
突如として耳がキーンとなり、こめかみ辺りに鈍痛が生じる。…

…これは、まさか。

――かい……さん……。

ラジオのノイズのように雑音が入り、上手く聞き取れない。私は耳に神経を集中し、必死に間隔を研ぎ澄ます。

――かいちょーさん！

「……はっ？」聞こえてきたのは、マナの声だった。

リガンのメモリーは再生していないし、学園内にマナはいないはずである。今日の今頃は藤堂達と共に、とある店で大食いの収録を行なっているはずなのだから。

とうとう私も過労で幻聴が聞こえるようになったか。それがマナの声とは、私も酷くつかれているものだ。そう思った矢先、

――やめてくださいっ！

再び、マナの声が、脳裏に響いた。そして、

――みなさんは逃がしてあげてくださいっ、わたしが残りますからっ！

そう言い残して、マナの声は途切れた。

なんだこれは、まさかテレパシーだとでも言うのか。そう言えば、マナに携帯電話を与えた時、テレパシーがどうとかの騒動があった。……いや、ふざけるな。そんなもの使わずに、携帯電話を使えと窘めたはずだ。

テレパシーなど時代遅れ。今は携帯電話という技術がある。テレパシーが役立つ時など、携帯電話が無い時代の……。

やむを得ず、テレパシーを使ったとしたら？　携帯電話が、使えない状況？

妙な、胸騒ぎがする。マナの声は、どこか寂しげな雰囲気を含んだ口調であった。

いや、待て伊統会長、テレパシーなる非科学的なもの、認めるわけにはいかない。しかし、幻聴にしては、明瞭な音声であった。『虫の知らせ』という言葉が浮かぶ。いや、それも非科学的だ。そんなもの……。

次の瞬間、私は駆けだしていた。気のせいであればいい。幻聴であればいい。だが、なんだ、この胸の内に広がるざわめきは。

廊下に飛び出した途端、誰かにぶつかってしまった。

「痛ったー……」何処かで聞き覚えのある声である。私は衝撃でぐらついた視界のまま無理矢理立ち上がり、相手の安否を確認しようとする。すると――。

「よっ！」尻餅をついたまま軽く手を挙げ、にっと微笑みかけたのは、赤毛ポニテ悪魔の石上アカネ嬢であった。

「もー、イトーくん駄目だなぁ。廊下は走ったら駄目じゃない？」

「正論だな。――次から善処するっ！」

「あっ、ちょっと、イトーくんっ！」

アカネ嬢は私を呼び止めるが、私は今それどころではないのだ。ざわめきが納まらぬ。こんな、非科学的な感情に焦燥感をかきたてられるとは、しかし、動かずにはいられない！

そのまま走り続け、校門を出る。

確か、マナは今日、天照市北部の喫茶店で、超宇宙級銀河系パフェーに挑戦するはずだったが……天照市南部にある天照高校からでは距離があり過ぎる。かといって、この沸き上がるような衝動を抑えることができない。

なんだ、どうした、現実的に考えろ、公共交通機関を使って……スマートフォンで調べるが、最寄りの駅までこのまま走って一〇分。次の電車が出るのは八分後。このままでは間に合わず、次の電車は三〇分後、待ってなどいられぬ！

バスはどうだ……駄目だ。マナのいるはずの喫茶店はバスの路線外であり、さらにいえば、電車よりも本数は少ない。くそっ、田舎の弊害かっ。

とりあえず私は大通りに出る。タクシーを拾うのが最善の手段……って待て、財布がないっ、あまりに慌てすぎて、学校にでも置いてきたとでもいうのか、待て、私が慌てる、そんなはずはない。あり得ない。……なら、なぜ今私は息を切らして走っているのだ！

くそっ、ああもうっ、わけがわからないっ！

「あれ、会長じゃねえか？」横からくぐもった男の声。

見ると、やけにごつい大型バイクに跨がった、バイクスーツに身を包んだフルフェイスが、こちらを向いている。エンジンがドルンドルンと脈打つ。こんな大きな音にも気づかないとは、私はいったい何を見ているのだ。

男はフルフェイスを取った。短い金髪、そして、目つきの悪い緑色の瞳。

「本郷光太郎！　貴様、なんでそんなものに乗っているっ！」私は走りながら声を張り上げた。

「とりあえず走るか怒るかどっちかにしろよ」本郷は冷ややかな視線を私に送った。

途端に、目の前が真っ暗になった。

気がついた時には、本郷に抱きかかえられていた。どうやら、酸欠を起こしたらしい。この、私がっ。

「おいっ！　大丈夫か！　しっかりしろ！」

「貴様うちの学園では大型二輪禁止だぞ！」

「第一声がそれかよ。仕方ねえだろ、親の手伝いだし。あのバイクも親のだ。一応特例の申請は出してるぞ」

「紛らわしいわっ！」親の手伝いとは、意外と好青年だな！

「あんた、相当焦ってるな」

「知るか！　よくわらんっ！」

「あんたにも、そんな時があるんだな」本郷は目つきの悪い目を、大きめに見開いた。

「私も初めてだ！　だが、マナのところに行かないといかんのだ！」

「マナ……？　ああ、あのほんわかとした先輩のことか」

「手間をかけた。私は行く！」

再び立ち上がり、駆け出す。すると、背後から声をかけられた。

「よくわからんが、乗ってけ」

振り返ると、本郷光太郎が大型バイクを指していた。

「……ヘルメットはもう一つあるのだろうな」
「あんた、急いでいるのか余裕なのか、どっちなんだ」
「どんな時でも法律守れ！　赤信号でも黄色信号でも止まれ！」
「はいはい。乗るのか乗らないのか、どっちだ」
本郷は、シートを空け、もう一つのヘルメットを取り出した。
その時、激しい頭痛が私を襲う。マナの声が、再び響く。
――かいちょーさん、聞こえていますか。
頭の中に、直接響いた。そして、
――ごめんなさい。
何を……何を謝っている！
「……マナ」
「おい、あんた、本当に大丈夫か、一度病院に――」
「――乗るっ！」今はなりふり構っている場合ではない……気がする。

本郷のバイクでマナのいる喫茶店付近まで来ると、そこには人集りができていた。
おかしい。最近の過熱ぶりに、大食いに挑戦する店は非公開にしたはずだったが。
これはどういうことだ。
「本郷、ここで良いっ！　感謝する！」
私はすぐさまバイクを降り、ヘルメットを投げつけるように渡す。
「会長が……お礼を……？」背後で本郷が呟いた声が聞こえた。
ちっ、人に感謝しないという誓いをやぶってしまったか。それほどまでに、私は焦っているのか、なぜだ、これが気のせいならばそれで良い。とにかく確認を。
私は人混みをかき分け、先頭に出て、店に入る。
「――マナっ！」
私の視界に広がっているのは、喫茶店などではなく、色とりどりの花々であった。

「これは、一体……？」
「あのう、お客さん？」妙にやさしげな印象を受ける、男性の声だった。
見ると、黒縁眼鏡が特徴的な青年が、戸惑いを含んだ表情でこちらを見ている。
「マナはどこだ！　いや、まて、ここは喫茶店ではないのか？」
すると、青年は店内を見渡し、苦笑した。
「どう見ても、花屋ですが……喫茶店なら」青年は頭上を指さす。
「この店の二階ですよ。ですが今は、立ち入り禁止のようです。何でも、撮影を行なっているとか」
どうやら、慌てたあまり、間違えて違う店に入ってしまったらしい。なに、慌てているだと、私は断固慌ててなどいないっ！　いや……それ以前に、
「なぜそれを知っている」
「あの人達に聞いたんです。何でも、ネットに情報が書き込まれてたって」
なんだと、情報が、流出したというのか？
「失礼した！」私は駆け出し、外に出る。確かに二階へ続くテラス式の階段が二階へと通じていた。私は駆け上がる。すると、店員らしき女性が控えめに立ちはだかった。
「お客様、当店は今、貸し切りでして……」
「黙れ！　私はマナの保護者だ！　ほれ、ここに証明する書類もあるっ！」私は書類を見せる。財布は忘れても、こういった書類は忘れないのが、実に私らしい。
店員は妙に挙動不審で、私が押し入ろうとすると焦りだした。
「と、とにかく、今は駄目です！　お願いです！　お願いしますから！」
この行動、明らかに異常である。まさかとは思うが、本当に店内で、何かが起こっているのか……。
ガチャと音がし、店の扉が開いた。ベルの音はしない。ここはそ

ういう店なのだろう。実に私好みである。が、
「いーくん、なんでここに……」藤堂は、ショックを受けたように青ざめ、私を見ていた。その瞳は少し充血し、目が腫れているように見える。
「――伊統会長だね。……まあ、いい。そいつを中に入れるんだ。――早く」店内から、奇妙な声がする。まるで、そう、機械で音声を変えているような、典型的な声だ。
「じゃないと……」
その先を聞くまでもなく、藤堂はびくっと体を震わせた。
藤堂を控えめに押しのけ、私は店内に入る。背後で、扉が閉まった。
「か、かいちょーさんっ！　どうしてっ！」
店内に、マナはいた。椅子に座り、目の前のテーブルには空っぽになった大きめのバケツ大のグラスがある。おそらくは、パフェーの残骸だろう。
テーブルにはもう一つ。黒く、四角い固まりが。黒い固まりには手錠のようなものがかかり、もう片方は、マナの腕にかかっている。
「マナ、それは」
「――近づかないでくださいっ！」マナは泣き出しそうな表情で、声を張り上げた。
「別に近づいても良いじゃないか。爆発までは、まだ時間がある」
突然店内に声が響いた。奇妙なことに、藤堂とマナ以外は、客も店員も店長も含め、誰もいない。
「やめてくださいっ！　わたしだけで十分でしょう！」
マナは、黒い箱のようなものに向かって叫んだ。どうやら、声はあの箱から出ているらしい。
「爆発って、まさか……」黒い箱は、マナの側には開いている。覗くと、無数の配線が敷き詰められていた。しかも、ご丁寧なことに、アナログのタイマーまである。
時計の針の表示を見るに、残りあと一四分程。針の進む速さが、

一秒ごとだとは限らない。
〈ひっひっひっはははあはははははははあはああああっ！　そうだ、それは爆弾だ、この店なんか軽く吹き飛ぶ、こわいこわい、爆弾さんだあああああっはははははっ！〉
機械のような音声は、狂ったように笑っているようだった。
「……かいちょーさん、なんで、なんで来ちゃったんですか」
「マナ、これはどういうことだ。なぜ、この店には誰もいない、なぜ、お前が……」
〈新参者のために、涙ぐましく献身的な少女の話をしてやろうか。とある少女が爆弾を掴まされた。店内はパニック！　いやあ、混沌として、良い光景だった。叫びのハーモニーって言うけどさ、まさにあれ。耳に心地よかったーうずうず来ちゃうよねえっ〉
「貴様、外道の類か」
〈外道……？　道を外れると書いて外道？　実に良い響きだあーっ！　ぞくぞくしちゃうね。そうだよ。外道だ。こわいこわい外道さんだよーっ！　ひゃはははああっ！〉
「貴様……」（マナ、手錠を出せ、私が切る）
私が小さな声でマナの耳に囁き、手錠を掴む。
〈手錠を外せば爆発する〉
なに……？　あの機械に聞こえてはいないはず。とすると……。
〈お前らの行動は全て見張ってるから無駄だ。……駄目じゃないか――伊統会長〉
こいつ、私を知っている。いや、私を知っている奴など、この町にいくらでもいるし、犯人の特定までには至らないか。
〈ぼくの話を、最後まで聞かなきゃ〉
ぼく、と言った。犯人側のミスか、それとも、ミスリードか。
〈ぼくは、もう少し楽しもうと思ってたんだよ。待ちに待った、ようやくの晴れ舞台だったんだからさ、でもさ、その子、言ったんだ。『みなさんを解放してください。あなたの狙いがわたしなら、他の人は無関係なはずです』ってね！　泣けるよね！　この極限状態で、

今時そんなことを言える子はなかなかいないと思うよ！　こんな極限状態、フィクションでしか見た事無いけどさ！　ひゃはははははあっ！〉

　この笑い声、いちいち癪にさわる奴……。

〈面白いことを言うなって思ったよ。でも、解放なんてしたらこちらの不利だ。周りに周知されちゃったら、警察来ちゃうし、でも、すごく心打たれたんだ。ネット上で見てる時から思ってたけど、やっぱりこの子面白いよ。ファンになっちゃいそうだ。……だからね、譲歩してあげることにしたんだ〉

「譲歩、だと……？」急に、私の中で、不安が募る。

〈条件付きで解放してあげたよ。条件は二つ。一つ目は、解放した人間が、今回のことが終わるまで誰にも言わないで黙っておくこと。もし、警察なんかが来たら、すぐにわかるからさ、この子、思いやりがあるだろう？　だから、ぼくも思いやりで答えてやろうと思ったのさ。みんなが約束を守る限り、爆弾が爆発することはない。ああ、美しい人類愛っ！　反吐が出るね！　まあ、みんなが約束守ったところで、この美しい極限状態はなんら変わらないんだけどさひははははっはあはっはっ！〉

　マナは怯え、震えている。

　反吐が出るだと？　聞けば聞くほど反吐が出るのはこちらの方だ。私が心底憎む、人間の悪。それを体現したかのような行動に、身を焦がすような激しい憤りを感じずにはいられない。いつの間にか、私の拳は握りすぎで、白くなっていた。

〈……なんか言えよ、伊統会長！　すましてんじゃねえよ！　怒りたければ怒ったらどうだ！〉

　その手にはのらない。私は激しい怒りを抑え、訊ねる。

「貴様が、爆弾魔か」

〈ああ、そうかも知れないな。どちらかと言えば、爆弾魔より、爆弾魔法使いのほうがよかったなぁ〉機械的に加工された声でもわかる。こいつは、おちょくっている。〈そういえばさあ、その子も魔

法少女に成るのが夢なんだって……ひゃははっ、笑っちゃうよねえっ！〉

マナは、膝の上に置いた手を、悔しそうに、ぎゅっと握った。

「お前の目的はなんだ」

〈おんやぁ？　意外と冷静なんだねぇ。面白くないなああっ！〉

「お前の目的はなんだと聞いているっ！」

〈特に何も無い〉

「なに？」

〈しいて言えば、混沌？〉

「ふざけているのか」

〈大いにふざけているね！　一世一代の大ふざけだよ！〉

今までなんの声明も発しなかった爆弾魔が、このようなクズだとは。こいつと話していても、埒が明かない。打開策を見つけねば。

〈おんやぁ？　どこに行くのかな！　何処かに行ったら、爆弾爆発しちゃうよ！〉

私の足が、止まる。

〈お前らの行動は全て見張っている。手錠を外せば爆発する。外に出ても爆発する。外に向かって叫んでも爆発する。先程解放した誰かが、このことを外部に漏らしても、その時点で爆発する。もちろん、あやしいしぐさをしてもだ！　一番利口なのは、何もしないことだ〉

こんな時に長谷川がいてくれれば……。いや、それは無理だ。長谷川は海外に行ってしまった。おそらく傍らにはいないだろう。

〈まあまあ、そんな深刻な顔しないで〉

こいつは、どこから見張っている？　一番可能性の高いのは、あの爆弾にカメラが搭載されている事だが、私は今、爆弾に背を向けていた。店内に防犯カメラはあるが、それも私の顔を映すことはできない。死角になっている。

〈無駄だよ。どうやってお前らを監視しているかなんか、絶対にわかりっこ無いからね。なんてったって、ぼくには力があるんだ。す

っごい力がさ！　……ほら、藤堂さんもマナちゃん達の近くにおいでよ。そこに突っ立ってないで〉

藤堂の体が、ビクリと跳ねた。自分を抱きしめるように、腕をまわしている。

〈おや、怖がってる怖がってるひゃあはははははっ！　自業自得だよ。君は自分の意志で残ったんだからね〉

「藤堂、お前」

〈いやあ、すばらしかったよ、君の台詞。『友達を見捨ててなんか行けない』って、いやあ、美しい友情だよねえ。おもしろくないっ！　……ああ、美しい友情と言えば、いやあ、もう少しだったのになぁ〉

「……やめて」藤堂が頭を抱え、震えだす。

〈君とマナちゃんの美しい友情が、もう少しで、極限にまで昇華するはずだったのにね〉

「いわないでええっ！」藤堂は狂ったように泣き叫ぶ。

「……どういうことだ」

〈その言葉を待ってました。伊統会長。ぼくは客を解放するために、二つ条件を付けた。一つはさっき言ったね。もう一つは〉

「いやあああっ！」藤堂が叫ぶ。

〈うるさいなあっ！　爆発させっぞ！〉機械の音声が、跳ねるように叫んだ。

それを聞いて、藤堂は怯え、うずくまる。

「藤堂！」

藤堂に駆け寄ろうとするが、いやっ、いやあっ！　と泣き叫び、私を遠ざける。一体、何があったのか。

〈もう一つの条件は、『何でも言うことを聞く』だ〉

その言葉を聞いた瞬間、一瞬、頭が真っ白になった。

〈いや、素晴らしかったよ。マナちゃんは期待にこたえてくれた。ばっちり記録させて貰ったよ〉

マナは俯いたまま、ぽろぽろと大粒の涙を落とす。

〈マナちゃん、頑張りながら繰り返すんだ。『ごめんなさい。かいちょーさんごめんなさい』って。いやあ、泣けるよね！　おかげでそんじょそこらのモノ以上の作品になったよ！〉

――かいちょーさん。

あの時、マナの幻聴が聞こえたのは、

――ごめんなさい。

この時か……っ。

私は、気づいてしまった。よく見れば、マナの着衣は、乱れている。

「――貴様マナに何をしたあああっ！」

べらべら喋り続けていた音声が、一瞬、途切れた。

〈……それだよ。その顔が見たかった〉

「なにぃっ！」

〈もっと酷くさせてやる。マナちゃんのがんばりを見てさあ、思ったんだ。これ、見るだけじゃもったいないなって。でもさあ、残念だけど、ぼくがそこに行くわけにはいかないんだよね。元はと言えば、ぼくが独り占めにするために他の奴らを追い出したんだけどさ。でもさ、いたんだ。そこに、もう一人！　ぼくって天才だよねえ〉

「お前……何を……」

〈その子を使ってからませればいいじゃん！　最高にさえてるよなあ！〉

「――いやあああっ！　いやあっ！　いやあああああああああああっ！」藤堂が機械の音声を遮るように、叫び続ける。

〈いいねえ。良く泣く子だねえ！　おもしろいっ！　面白いよ君っ！〉

藤堂は泣き叫び、マナは堪えるように涙を落とした。

頭が、真っ白になった。

「――ざけるなあああああああああああああああああああああああああああっ！」

〈あーあー切れちゃった。伊統会長も切れる若者なんだねぇ。切れ

たって、何の意味もないのにひゃあはははははっはははははははっはははははあっはは！〉

爆弾魔の嘲笑に、私は拳を固く握りしめることしかできない。

どうした、伊統会長、私は、何もできないのか。

今までの鍛錬は、努力は、謀略は、一体何のためにあったのか。

目の前で二人の少女が泣いているというのに、これでは……これでは……。

母を失った時と、何ら変わらないではないか。

爆弾魔は見えないところにいる。せめて形があれば、『チェス』を放つことができるのに、見えない敵では……。

私はかつて、そういう不確かなものと戦うと誓ったのに……いざ直面すると、なにも、できないのか。

私の叫びも虚しく消え、爆弾魔の笑い声も消え、店内には、二人がすすり泣く声と、爆弾の、針の動く音だけが聞こえる。

タイマーの表示は、残り五分を切っていた。

「春香ちゃん、かいちょーさん、逃げてください」突然、マナが言い出した。

「マナ、何を……？」

「残ってくれたのは、すごくうれしかったです。けど、足手まといです」

マナは、にっこりと笑った。

「マナ、ちゃん？」

「爆弾魔さん、良いですよね！」

〈まったく、マナちゃんは何を考えてるのかなぁ。ぼくが良いって言うと思ってるの？　そんなの、全然面白くないよ〉

「わたしが死ねば、春香ちゃんは泣き叫びますっ」

空気が、固まった。

「マナちゃん、何を――」

〈んー……ふふふっひひひっひっはははいあひあははははっはっはいあははあ……良いねーマナちゃん良いねー。ほんっと面白れー殺

すの惜しいよ。良いよ、君はぼくのことを一番理解しているのかも知れないなあっ！〉

「それじゃあ――」

〈でも、駄目だ、一人だけだ〉

「えっ……」

爆弾魔の機械的な声色が、猫撫で声のようなトーンになる。

〈マナちゃん、ぼくにだって慈悲深い心はあるんだよ。君を、一人で死なせるわけが無いじゃないか。君の一番大切な人と、一緒に死なせてあげるよ〉

マナの表情が、さあっと、白んでゆく。

〈伊統会長、君は残れ〉

「そんなっ、爆弾魔さん、お願いだから――」

「――良いだろう」

「かいちょーさんっ！」

私は藤堂の腕を無理矢理引っ張り、ドアまで引きずる。

「いーくんっ、お願いっ！　やめて！　一緒に居させてっ！」

藤堂は子供のように駄々をこね、泣きじゃくり、凄まじい怪力で私の腕をふりほどこうと振り回す。私の足が、体が、遠心力で宙に浮く。なんという馬鹿力だ。長谷川仕込みの体術を駆使する私でも、このままでは抑え続けることができない。

私は藤堂の肩を掴み、腕に力を入れて体を近づけ、そして、

「藤堂！」

藤堂を背中から抱きしめた。糸が切れたように、藤堂はおとなしくなった。彼女の息づかいが、心臓の鼓動が、彼女の背中を通して伝わってくる。

「いーくんっ……私、嫌だよ……マナちゃんといーくんがいなくなるなんて、耐えられないよ。泣き叫びたくなんかないよっ！」

「大丈夫だ」私は藤堂の首に腕を回す。「私は死なない」

確信があるわけではなかった。

「……嘘」藤堂の肩が下がり、全身から力が抜けた。

嘘……か、そうかもしれないな。
私は、藤堂の首に回した腕に、力を込める。
「い、いー……く、ん……？」藤堂が、苦しそうに呻く。
〈おい……会長、何を……〉
爆弾魔の言葉も気にせず、無言で藤堂の細い首を絞める。しばらくの間、弱々しく抵抗したが、やがてそれも止まり、ぐったりと動かなくなった。すぐに力を緩め、首に手をやり脈動を確認する。
「悪いな、藤堂」
ドラマのように説得する時間も、余裕も、私には無いのだ。
「おい、爆弾魔」
爆弾魔は答えない。スピーカーは沈黙している。
「――おいっ！　聞いているのか！」
〈……ヒヒヒッ……〉
不愉快な笑い声が、スピーカーから発せられた。
〈ひゃはははっはははひゃはははははっ！　お、おいっ、おかしっ、可笑しすぎて死ぬっ！　馬鹿かよ会長！　良い雰囲気だったのに、絞めちまうんだからよ！　いいよ、いいよっ！　お前のその馬鹿さ加減！〉
「黙れ」
〈ああん……？　そんな口聞いていいのかよ。爆発させっぞ――〉
「入り口に店員がいたな。そいつに引き渡す。ドアまで近づくぞ」
〈……ちっ〉
私は藤堂を抱え、店のドアに近づく。
〈逃げるなよ。逃げたら爆発させるぞ〉
「かいちょーさん逃げてっ！」
「馬鹿が。誰が逃げるか」
ドアを開ける。外では店員と本郷がもめていた。
「いや、だから中に入れろって……ああくそっ、男だったらぶん殴ってんのに！」
「ですから、今は無理ですっ！　お願いですから入らないでっ！」

店員の声は震えていた。今まで必死でくい止めていたのだろう。
「取り込み中の所、悪いのだが」
「へっ？」「会長？　おい、それ、先輩が」
「逃げろ」無理矢理藤堂を引き渡した。
「え……っ？」店員は突然のことに戸惑っていた。
「こいつを連れて逃げろと言っている！　周りの野次馬にもだ！　放したらゆるさんぞ！　本郷、お前を男と見込んで頼む！　藤堂を守れ！」
「会長――」
「――頼んだぞ！」
私はドアを閉めた。マナの元へと戻る。
残り、二分を切っていた。
「お酒を……お酒をください」突然、マナが呟いた。
〈……はあ？　なに言っちゃってんの。マナちゃん、ついにおかしくなっちゃった？　ああ、でも、それ、アイドルの発言としては致命的じゃね？　でも、普通じゃ思いつかない発想だよねえ。もしかして、君、常習者だったりするのかなぁ。そうだったら面白いなぁ。ネット上で話題になったきわものアイドルが、実はアルコール中毒だった！　スポーツ紙の見出しとしては十分だなぁ！　B級記事で、十分世間を騒がせれるよ！〉
機械の向こうの爆弾魔は、子供のようにはしゃいでいるように聞こえる。
「マナ、やめろ！」
「かいちょーさんは黙ってて！　わたし、お酒が欲しいんですっ！　お酒欲しいっ！　欲しいのっ！　くださいっ！」
突然、私のこめかみ辺りがうずき、耳鳴りがし始めた。くそっ、こんな時に……。
なんだ、マナの背後に、何かが見える。
あれは……コンピューターなどの画面上で見かけることがある『ポップアップ』のような吹き出しが生じている。

そこには、こう書かれている。
《こうするしかありません》
〈ああ……ショックだろうなあ。ファンはショックだろうなあ。でも、快感かも……良いよ。たっぷりお酒を飲んで、泥酔したマナちゃんもいいなあっ！〉
爆弾魔がのってきた。まさか、マナは……。
「かいちょーさん、このお店で、一番強いお酒を持ってきてください」
〈いいねいいねっ！　欲しがるねえええええっ！〉
「何を言っている、お前は――」酒が飲めないのだぞ。一番強い酒など呷ったら……。
「早くっ！　欲しいんですっ！」《かいちょーさん、お願いっ！　わかって！》
マナの後ろに、次々とポップアップが現われる。
《この状況では、こうするしかありません！》
《かいちょーさん、このまま爆弾魔さんの言いなりでいいんですかっ！》
《わたしの魔法なら、みんなを救えますっ！　救って見せますっ！　だからお願い。わたしに、お酒をくださいっ！》
《みんなを、守るために》
《かいちょーさんを、守るために》
「かいちょーさん、お願いっ！」
「しかし……」
〈――なにやってんだよ伊統会長！　お前が取ってくるんだろうがっ！　お前がマナちゃんに酒を注ぐんだよ！　この能なしがっ！〉
私は厨房に向かって駆け出した。タイマーをちらりと見ると、残り一分に差し掛かっている。早くしなければ、時間が無い。
厨房に入る。漁れば色々な酒が出てくる。銘柄を比べてみるが、どれが一番強いかなどわからない。どうやらウォッカと書かれているらしい瓶は見つけたが……アルコール濃度が強すぎるのではない

か……。

――かいちょーさんっ！

時間が無い。私は急いでマナの元へと駆け戻る。

「お酒っ！」マナは酒の瓶を見るなりひったくった。

そして、蓋を開けるなり、ごくごくと喉を鳴らして、呷るように飲んだ。透明な液体が、マナの口元からつーとこぼれ落ちる程に。

「――ごほっ、ごほっ」マナは咽せ、瓶が床に落ちた。

「お、おい、マナ！　そんなに勢いよく飲んだら――」急性アルコール中毒に――。

〈いいねいいねっ！　良い飲みっぷりだ！　普段からそんなに飲んでるのかよ！　まったく、最近のアイドルは不潔極まりねーな！〉

その一言で、全てが吹っ切れた。

「……黙れ、クズが」

〈……ああん？　良いのかよ、そんな口聞いて、いつでも爆発させれるぞごるああっ！　ああ、もう時間か、どっちみち爆弾は爆発か！　ああ、ごめんごめん、どっちみちお前ら死ぬわ！〉

タイマーは、残り三〇秒を切った。

一気に酒瓶の中身を飲み干したマナは、虚ろな表情で、ふらふらと倒れそうになる。私はそれを支える。マナはぜいぜいと肩で息をし、今にも息絶えてしまいそうな状態だった。

以前に、マナは複雑な爆弾を解体して見せた。

わずかな可能性だったが、酔えば爆弾を解体できるのではないかと思ってしまったのだが……これでは、どのみち無理だ。

「気に入らない」

〈ああっ？〉

残り二〇秒を切った。

「お前のその態度が気に入らないと言っているっ！」

〈何言ってんだ？　死を覚悟しておかしくなったか？〉

そうかも知れない。おかしくなったのかも知れない。だからどうした。安全な場所から出てこないお前に、私が止められるはずがな

い。
「「何よりも気に入らないのは――」
得体の知れない感情が、腹の奥底でふつふつと、マグマのように激しく煮立っている。私はそれを抑えることができない。抑えることができないっ！
「――お前がマナの夢を笑ったことだ！　お前のようなクズに、マナの崇高な夢が理解出来るはずがないっ！」
私の頭はおかしくなっている。マナの馬鹿げた妄想を、崇高な夢だと宣うとは。
腕の中で息づく少女のおもさと、苦しそうな吐息。そして、柔らかな体温。
怒り、憎しみ、激しい死への恐怖。理不尽と絶望。爆発しそうな感情。
静と動。相反する感覚と精神が私の身を切り裂こうとする。そして、その隙間、切り裂かれた傷口のようなそこには、あたかも湖の底に沈んだ泥のように重たく、そして宇宙の闇ように黒々しい後悔が、ふつふつと生じる。
せめて、もう少し冷静でいられたら。長谷川を呼び、霧島書記長に辺りを捜索させ、本郷光太郎に爆弾魔をぶちのめさせられれば。もう少し、事態を俯瞰できていれば……。
自分の浅はかさを、恥じるしかなかった。
《かいちょーさん》
私の視界の隅に、ポップアップが出現する。その方を見ると、マナが、苦しそうに呼吸しながら、
《ありがとう》微かに、笑顔を見せた。
「マナ……」
《どっちみち》《あの爆弾は》《解体できませんでした》《あの構造》《絶対に》《解体できない》《温度センサー》《凍らすこともできない》《加速度センサ》《持ち出しもできません》《どの配線を切っても爆発するし》《お手上げでした》

次々と、ポップアップは現われる。マナの呼吸が途切れ途切れになるのに呼応するかのように、それらのポップアップは細切れになってゆく。

〈ーーーーーーーーーーーーーー！　ーーーーーーーー！〉

爆弾魔がごちゃごちゃ言っているようだが、私の耳にはもう入ってこない。息も絶え絶えのマナの背後に生じるポップアップの文字を読む事だけに集中する。

「かい、ちょー……さん」《最初から》《こうするしか》《ありませんでした》

こうする……？　こうするとは、一体――マナの弱々しく開かれた眼が、七色に輝いている。

「か……い、ちょう……さ……」《でも》《いざとなったら》《わたし》《こわくて》

《かいちょーさんに》《会えないままになるのが》

《こわくて》《こわくて》《こわくて》《こわくて》《こわくて》

《だから》

マナは、弱々しく手を伸ばそうとする。

「ごめ……な……さ……ぃ」《最後》《願い》

《かいちょーさん》《呼んで》《しまった》《のは》《きっと》《わたし》

私は、その小さく白い手を掴む。

《わがまま》《です》

マナの、うっすらと開いた眼が、ゆっくりと、閉じてゆく。

《だから》……《だから》

マナの体が、瞳の色と同じように、七色に輝く。

《ごめんなさい》

「――マナっ！」

マナの口が開き、小さく、動いた。

「ふぁにー……わーるど……」

マナの光がおぼろげになり、そして……消えた。

《お花》《ごめんなさい》二つの小さなポップアップが、出現した。
お花……？　いったい、何を言いたいのだ？
その時、爆弾のタイマーが時を刻む音が変調し、高く、耳障りになる。
タイマーを見やると、残り、5……4……3……、
私は、爆弾に背を向け、マナを抱きかかえる。
魔法は発動しない。奇跡は起こらない。無駄な足掻きだとは別っている。
それでも――。
せめて、せめてこの子だけは――。
爆弾魔の乾いた笑いが、聞こえた気がした。
2回、耳障りな電子音が鳴り、そして、激しい衝撃と熱が襲いかかったと思った瞬間、
私の意識は、途切れた。

第二十話　ふぁにーわーるど

「……こほっ」やけに煙たい。咳が出てしまった。
眼に痛みが奔る。しぱしぱする。目を閉じても開いても、暗闇しかない。
ここは……私は、死んだのだろうか。
ばんっ！　という大きな音と共に、空気が動く。視界を覆っていたらしい黒い煙のようなものが晴れて、突然の光が差し込む。
これは……まさか、天国への光！　まさか！　あり得ないっ！
私は死後の世界など信じないぞ！　天使共が居るとすれば消えてしまえ！
「やめろ！　来るな！　私はまだ――」
突然黒い影が光を覆い、私へ覆い被さった。
「――いーくんっ！」叫ぶなり、恐ろしい力で、私を絞め殺そうとする。
「やめろっ、このっ」天使め！　私が信じないと別った途端、殺しにかかるとは現金な奴らめ！　そんなに信仰が欲しいかっ！
いや待て、そもそも私は死んでいるのではないのか。この上また死ぬのか！　死んだ人間が死んだらどうなる！
「いーくんっ！」影は泣き叫ぶ少女ような声をあげる。
まったく、なんと悪趣味な、私をいーくんと呼ぶなと……いーくん？
私を『いーくん』と呼ぶ人物は、一人しか居ない。
「藤堂……？」
天使かと思った人影は、藤堂春香であった。涙を潤ませ、私に笑顔を向ける。
彼女が死ぬことはあり得ない。となると、ここは現世か。
「よかった、いーくん！　……マナちゃん、マナちゃんは！？」
はっ……そうであった。マナ、マナはどこだ。私は辺りを見回す

が……なぜだ？

なぜ店内が黒く染まっているのか。そもそも、爆弾は爆発したのではないのか。

足を動かした瞬間、何かに爪先が当たった。

眼を凝らしてみると、黒い何かの固まりが、地面に転がっている。

まさかと思い、しゃがんで見ると……黒い何かに染まってはいるが、形は人型――あのばいんばいんは、マナのシルエットである。

「――マナ！」私は慌てて抱きかかえる。

手で黒いものを拭うと、マナの金髪と白い肌が顕わになった。

「マナちゃん！　ああ……よかった……」藤堂はマナに抱きつく。

黒い煤のような何かで汚れるのにもかまわず、いとおしそうに頬ずりした。

これは、どういうことなのか。

普通、あの至近距離で爆発すれば、死は免れないはずである。それどころか、跡形もなく四肢は引き裂かれ、目も当てられぬ惨状になるはずであるのに……。

見渡せば、店内の家具などは滅茶苦茶になっており、窓ガラスも吹き飛んでいるようだ。それなのに、私とマナは無傷だ。明らかにおかしい。

「おい、会長大丈夫――わっ、なんだこれ、真っ黒じゃねえか！」本郷の素っ頓狂な叫び声が、部屋中に響いた。

私はこのようなシチュエーションを見たことがあるのに気がついた。しかし、すぐにばかばかしくなった。なぜならこの光景が、昔ちらりと見たことのある、トゥーンアニメの爆発シーンに似ていたからだ。

建物は吹き飛ぶが、登場人物はまっくろになるだけで死なない。

そういえば、マナは爆発の前に言っていた。

――ふぁにーわーるど。Ｆｕｎｎｙ／ｗｏｒｌｄ。直訳すれば、滑稽な世界。

成る程、滑稽だ。その連想は確かに滑稽で、私はすぐさま自分の

思いつきを否定した。
きっと今回の爆弾は脅しであり、爆弾魔の悪ふざけと言ったところだろう……と思いたいが、そこまで都合の良いことがあるわけがないと、私の現実的な思考が囁く。
一ヶ月前にマナと長谷川が解体した爆弾、それに使われていた爆薬は未知のものであり、しかも構造からして、爆発してもこのような黒い煙は出ないと井内が言っていた。
となると、マナが何かをした、としか言いようがないのだが……。
「……マナ」私は死んだように眠るマナを見る。まったく、不思議な奴だ。
……まて。マナの様子が、おかしい。初めは些細な違和感を感じただけだった。だが、明らかに何かがおかしい。そんな時、藤堂が叫ぶように言った。
「マナちゃん……息、してない」
その言葉を聞いた瞬間、全身の毛が逆立ったように感じた。すぐにマナの口元に手を当てると、確かに息がかからない。
「さっきアルコールを大量に――」
マナは、急性アルコール中毒に陥っているのかもしれない。
そう思った瞬間、天地がぐらりと揺れ、目眩がする。
「救急車……救急車を！」
私の叫びに、本郷は携帯を取りだす。
その横で、私は考える。とにかく、これ以上アルコールを吸収させるわけにはいかない。吐かせなければ。
いつもはすぐに吐くくせに、今はそのようなそぶりはまったく無い。
私はマナの体を横にする。喉に指を突っ込み、無理矢理吐かせる。
しかし、マナの嘔吐は途中で止まってしまい、さらに顔を青白くさせる。
「マナ……マナ！　しっかりしろ！」マナを揺さぶり、声をかけるが、

マナは、死んだように動かない。
無限のように長く感じる時間の中、救急車のサイレンが耳に届くまで、私は生きた心地がしなかった。
私はマナを抱え、扉が吹き飛び吹き抜けとなった出入り口へと向かう。
眩しい太陽の光が、一瞬、視界を眩ませる。人々の響めきが聞こえた。
視界が開くと、眼下に広がるのは、塵のように群がる野次馬の群れ。それが救急車を遮っている。私はとにかく急ごうと、ぐったりとしたマナを抱えて階段を下りる。
その時、キィィンという耳をつんざくような音と頭痛が再び襲ってきた。そして、再び群衆を見た瞬間、
《あれ、マナちゃん?》《大丈夫か?》《うわっ、ひでえ臭い》《あの男誰だ》《なんで真っ黒なんだ》《爆発はどうなったんだ》《なんで生きてるわけ? ありえねー》《写メ写メ》《マナちゃんどうしたんだろ》《うわお姫様だっこかようらやましいなあいつ》《うわあ、汚ねえ》《おい退けよ》《圧すなよ》《邪魔だなクズ共が俺のマナちゃんがみえねえじゃねえか》《ひでえ格好》《なんだよあれ、馬鹿じゃね?》《なんか臭い》《おいおい爆発現場なんてなかなか見れねえぜ。退けよ!》《マナちゃんどこだよ! あのばいんばいんを生でみてえんだよ!》《見えねえぞ》
ポップアップの、言葉の、情報の奔流が、私の眼を通して流れ込んでくる。
耳を突き破るような音と痛み、頭痛は益々激しくなる。
《邪魔》《ゴミ》《クズ》《うるさい》《臭い》《馬鹿》《汚い》《俺が》《見たい》《なんであいつが》《殺したい》《消えて》
文字が、悪意が、醜い本能が、私に文字となって襲いかかる。
その中で、ひときわ大きなポップアップが、一つ、点った。
《なんだ、無事だったんだ》
そして、もう一つ。

《あんな子、爆発して死ねばよかったのに》
心臓を、突き刺されたような思いがした。『あんな子』という言葉が、今まさに、私の腕の中で死にかけているマナを指していたからだ。
マナは、私達を助けるために、こんなにも傷ついてしまったというのに……。
「……誰だ」
奥歯を、割れそうなほど、食いしばる。
「今、死ねばいいと思った奴は誰だ！」私は叫んでいた。叫ばずにはいられなかった。
群衆は冷ややかな視線を私に突き刺してくる。
《何言ってんだあいつ？》《爆発で頭おかしくなったか？》《いきなり怒り出して、キチガイじゃない？》《馬鹿》《殺したい》《死ね》
群衆は沈黙している。だが、人の内なる悪意が、直接文字となって伝わってくる。
「――貴様ら！」私はそれらをはねつけるように吠えた。吠えれば吠えるほど、周りの視線はいっそう冷ややかに、悪意のポップアップはさらに大きくなっていった。
そして、群衆の中心、ひときわ大きな、黒いポップアップが、出現した。
《ひゃははあはははははっはははひゃはっはははははっひゃはははははっはははっひゃはははひゃはははっはははひゃっはははっはははっひゃはははっはははっはははっ

《醜態だ》
《あのまま死んだ方がよかった》
《そうだ》
《死ねばよかったのに》
《死ねよ》
《死ね》
《死ね！》

爆弾魔が、あの爆弾魔が、私に殺意を抱いた爆弾魔が、マナをこんな状態にした元凶が、すぐそこに居る！

「――貴様あああああああああああああああああああああっ！」

「いーくんやめてっ！」後ろから抱きつかれた。私をいーくんとよぶのは、藤堂しかいない。「早くしないとマナちゃん、死んじゃうっ！」

あれほど高ぶっていた気持ちが、熱が、急激に冷え切っていくのを感じた。代わりに凍えるほどの恐怖が襲ってきた。

マナを見る。死んだように動かない。それだけではない。体を通して伝わるはずの、鼓動が、消えている。

「マナ……そんな……」膝が震え、地べたに、崩れ落ちる。

「――おい、退け！　邪魔だ！　そこを開けろ！」本郷が、人混みをかき分ける。

人混みの向こうから、救急隊員らしき人が近づいてくるのを、見た気がした。

視界が霧に包まれたようになり、自分が自分でないような、ここが、夢の中のような錯覚に陥るような。今見ているものが、現実ではないような。

気がつけば救急車の中らしきところに居る。マナの傍らに、藤堂がいる。マナの手をぎゅっと握り、額に持って行き、祈るように目を閉じている。声が聞こえる。

「吐瀉物で気道がふさがっている。気道の確保を――」
ああ、私の行動は、間違いだったのか。
私は、何をやっているのだ。
また、救えないのか。
また？
私は、何を言っているのか。
わからない。頭が混乱しているのか？
わからない。なら、なぜ私は思考している。
わからない。今思考している私は誰だ？　なぜ、こんなにも冷静でいながら、何もしようとしない。何もできない。
何も、わからない。

何か、とても周りが慌ただしかった気がする。
薬品のような臭い。気がつけば、私はＩＣＵと書かれた部屋の前の椅子に、座っている。隣には、藤堂が居る、気がする。
白衣を着た男がやって来た。
「ご家族の方ですか」
私は、立ち上がり、頷いたように思える。
男は何かを話していたが、ほとんど頭に入らなかった。
藤堂が何かを必死で訴えている。声は聞こえない。だが、その表情は悲痛に染まっている。医師は困ったような表情をしているが、藤堂の激情に対しては淡々と答える。
そして、
「覚悟を、しておいてください」やけに、鮮明に聞こえた。
その言葉が、頭をリフレインする。
覚悟、そうだ。覚悟をしなければ。覚悟をしたものは、強い。
だが、何に？　何を覚悟するのか。それが、わからない。
何を覚悟すればいい、教えてくれ。
何を覚悟すれば、マナを救える。
視線を感じた。

その方を向くと、私をなじるように見上げる男の子がいた。
「おまえ、いとーかいちょーだろ……」
男の子は、私の名前を知っていた。何処かで見たことがある気がした。
そうだ、確か、マナが家に来た当初、気を失って運ばれた時に……。
「君は……ヒロ、だったか」
そう言うと、男の子の表情が歪んだ。まるで、自分の名を呼ばれたことが不快であるかのように。その表情は、子供がして良いものではなかった。
「なんで……なんでこんなことになってんだよ！」ヒロは、爆発したように怒鳴った。
その眼には、涙が溜まっている。
「なんでマナねーちゃんが運び込まれてくるんだよ！　ここに入るって、それって、危ないって事だろ！」
「マナが……危ない……？」何を、言っている？
「なんだよその顔は！　おまえ、おれよりでかいくせに、そんなこともわかってないのかよ！」
おぼろげになった恐怖が、急に現実感を伴って襲いかかる。
マナが……危ない……。
――覚悟を、しておいてください。
……何を？
マナが……死ぬのを……。
「マナは……死ぬのか……？」
ヒロが、突然私に跳びかかった。私は床に倒れる。ヒロが馬乗りになり、拳を固めてぽかぽかと叩いてくる。
「ふざけるなっ！　死ぬもんか！　マナねーちゃんが死ぬもんか！」
ヒロは涙をぽろぽろと流しながら、私の胸を、腹を、頬を殴る。
私は抵抗しない。されるがままに、殴られ続ける。不思議と、痛みはない。殴られて当然とも思える。自分で自分が理解出来ない。

ただ一つわかることがある。目の前で私を殴り続ける男の子の気持ちを、私は痛いほど理解出来るのだ。

なぜなら、かつて私も、こんな風に、ある男を殴ったことがあるからだ。

――なんで、なんで今頃おまえが来るんだよ！

――お前のせいでお母さんは死んだんだ！

――お母さんを殺したのは、

ヒロが、子供の頃の私に重なる。

――お前だ。

妄想の中の私が、私にそう吐き捨てた。

「ちょ、ちょっとやめなさい！　いーくんも、何やってるのしっかりして！」

「はなせっ！　はなせよっ！」

ふと気がつくと、藤堂がヒロを羽交い締めにしていた。

「ああ、ヒロくん！　すみません、本当にすみませんっ！」

母親らしき女性が駆けつけ、ヒロを必死で抱き留めながら頭を下げる。藤堂に支えられ、私は立ち上がる。

「はなせっ！　はなせよ！　かあさんっ、そんな奴にあたま下げんなよっ！」

ヒロは母親から逃れようと、必死でもがく。

「マナねーちゃんが言ってたのに！」

ヒロは大声で叫ぶ。顔を真っ赤にして怒鳴る。

「いとーかいちょーは、ヒーローだって！　みんなを幸せにするヒーローだって！　魔法少女と同じくらいすごいんだって！　それなのに……」

「ヒロくん、お願いだから暴れないで！」母親はヒロを放すまいと懸命に抑える。どこか切羽詰まったような感じを受けるのは、なぜだろうか。

突然、ヒロが大きく眼を開け、硬直した。途端にヒロは胸をかきむしるように押さえ、苦しそうに呻く。

「ヒロくん……？　ヒロくん！」母親はさっと血の気が引いたように顔面を蒼白にし、息子を抱きしめ、必死に名前を呼ぶ。

異変を察知した看護師が駆けつけ、あわや騒動となった。

後から看護師に聞いた話だが、ヒロは重い心臓病を患っており、非常にデリケートな状態なのだそうだ。

珍しい症例らしく、手術は難易度が高い。リスクも大きいと聞かされた。リスクとは、もちろん死へのリスクのことだ。

いざ説明を聞くと、長谷川が無理だと言うのも頷けた。

絶望的な状況に、あの少年は立たされたのだ。

そんな時、マナと出会ったのだそうだ。

マナはヒロと仲良くなり、収録の合間を縫って何度も病室に足を運び、時に励まし、時に叱咤した。ヒロは次第に、実の姉のようにマナを慕うようになり、病室で笑い合う二人の関係はとてもほほえましいものであったと言う。

私は、何も知らなかった。

そしてついに、マナはヒロに手術を受けさせることに成功したのだった。

もちろん、天才外科医の長谷川がこの病院に来たことも、大きな理由らしかった。

全ては、順調にいくかに見えた。

それが今、マナはＩＣＵに入り、ヒロは怒りで心臓を酷使している。

看護師達に連れて行かれるヒロが、おおよそ子供のものとは思えない憎悪を込めた目つきでギロリと私を睨み、言った言葉が焼き付いて離れない。

「何がヒーローだ……。マナねーちゃんを守れないおまえなんか、ただの役立たずじゃないか……」ゼイゼイと苦しそうに肩で息をしながら、呪うように言った。

役立たずという言葉が、胸に突き刺さった。

「いーくん……」藤堂が、私の制服の裾をぎゅっと掴んだ。見ると、

眼に涙を浮かべ、思い詰めたような表情で下を向いている。心細いのだろう。

本来の私であれば、彼女を励まし、勇気づける言葉をかけてやっただろう。だが、今の私はそのまま立ち尽くし、何もしなかった。何もできなかった。ただ、呆けたように突っ立ち、審判の時を待つ咎人のように、ただ、怯えていたのだ。

その後、警察が訊ねてきた。知り合いの刑事だった。

いくつか質問され、答えた。

あまり、何を話したのか覚えていない。あまり、信じて貰えなかった気がする。逆に、気遣って貰ったような気がする。どちらにせよ、屈辱だったような気がする。

マナがＩＣＵから出たのは、それからしばらくしてのことだった。

マナの元気な顔が、また見られると思うと、胸が高鳴った。

だが、私の淡い期待は、いとも簡単に裏切られた。

マナは、依然として死んだように眠り、動かない。

山場は乗り切ったが、油断はできないと医者は言った。

アルコールの中毒症状よりも、体の衰弱が問題だという。

ここまで衰弱するなんて、彼女はいったいどんな生活を送っていたのかと、医者から何度もきびしく問い詰められた。

私はありのままに真実を述べたが、到底信じてはもらえなかった。

私の虐待まで疑いだし、藤堂がむきになって猛烈に否定した。

屈辱、と言うより、辛かった。こちらは真実を述べているのに、相手に信じてもらえないことが、これほど苦しいとは。

マナ……私が彼女の妄想を否定した時、彼女はどう思ったのだろうか。今の私のように、辛く思ったのだろうか。

終いには、私は何も反論しなくなっていた。

他人にどう思われようとも、この時の私はかまわなかったのだ。

マナは病室に運ばれた。私は病室に入ることができなかった。

資格がなかった。
責任を、取らねばならなかった。
「いーくん……？　どこに行くの？」藤堂が訊ねる。
「藤堂、お前も来い」
私は、今後の計画について話した。
「いやっ！」
「我が儘を言うな」
「大切な友達の側に居たいのが我が儘だっていうの！」
藤堂は、声を上擦らせて私を批難した。
批難されているのに、嫌な気分はしなかった。
むしろ、うれしかった。
マナを友達だと言ってくれるのが、まるで自分の事のようにうれしかったのだ。
「藤堂――ありがとう」
「いーくん……？」藤堂は、まるでこの世のものではない何かを見たように、驚いた表情で私を見つめた。「いーくんが、『ありがとう』って……」
「わかったよ藤堂。お前は、マナの側にいてくれ」
「マナちゃんを置いてどこに行こうって言うのっ！　――いーくんっ！」
藤堂の叫びを背中で聞き流しながら、私は歩く。
私は、自分自身の存在に、強烈な恥ずかしさを覚えていた。
何もできなかった。娘一人守れなかった。マナの側にいる資格がない。いや、誰の側にもいる資格は無いのだ。なぜなら……。
病院内の供用のテレビに、爆散した建物の映像が映し出されていた。
またもや新たな爆発が起こったという。黒い煙のようなものは出ておらず、純粋に衝撃で破壊されている。例の爆薬を使用して引き起こされた爆発に違いなかった。
テレビでは、レポーターが熱をおびたように事の次第を解説して

いた。
市内の5カ所にしかけられた爆弾が同時に爆発。死者は出ていないものの、負傷者が何名か出たという。その内の1カ所は、なんの変哲もない民家の室内で起きた。
犯人からのものらしき声明文が、マスコミに届けられた。
『ぼくは、爆弾魔法使い』
レポーターはそれがさぞ自分の成果であるかのように高らかと読み上げる。
『これから市内の数十カ所にしかけた爆弾を、順々に爆発させる。どこにも逃げ場はない』
次第に、頭が鮮明になっていった。
『捕まえて見ろ。捕まえられるものなら』
これは、警察への挑戦状でしょうかと、司会者が問いかけ、コメンテーターらしき中年が、ゲームが、アニメが、漫画がどうだのと、紋切り型の意見を物知り顔で答えていた。
ちがう。これは、警察への挑戦状ではない。
疑惑が、確信へと変わる。
爆弾魔は、私の嫌うマスゴミ共を利用し、劇場型犯罪へとシフトさせようとしている。
私への、挑発だ。爆弾魔は明らかに私を狙っている。
いや、私が苦しむのを楽しんでいる。
私を狙うのならば、直接狙えばいい。だが、狙われているのは、なんの関係もない人々、そして、マナ。
爆弾魔は、自らを『魔法使い』と名乗った。
名乗ることで、マナを侮辱している。
私の大切なものを、次々と破壊しようとしている。
爆弾魔は、最上級の悪意を爆発に込めて、私を、狂い殺そうとしている。
――滅ぼさなければ。
何を？　と自分に問いかける。答えは、既に決まっていた。

――悪を。

私はスマートフォンを取りだし、操作する。

「……霧島書記長か」

私の内側で、何かが、ぐらぐらと煮立っている。

「臨時賢人生徒会を開会する。藤堂以外の全員を集めていつもの教室へ」

私はその衝動に突き動かされるように足を速めた。

私が教室に着く頃には、既に全員が揃い、着席していた。

相変わらずの黒髪ストレートと白い肌、霧島書記長が不機嫌そうな表情で腕を組み、その隣でかわいらしい少年、物部渡消しゴム委員が縮こまっている。例の消しゴムは机の上にある。

さらに隣には明星鈴奈会計委員が忙しそうにそろばんを弾き、そのまた隣には松田諜報委員がへらへらしている。

その向かい側には燃えるような金髪、本郷光太郎風紀委員が何かを待つように、目つきの悪い目を閉じてじっとしており、その横では神崎愛美動物愛護委員が、本気で爆睡している。彼女の周りには数匹の猫がまるまり、暖かそうに身を寄せ合って眠っている。その内一匹は本郷光太郎の腹の上に陣取っているが、本郷が嫌そうなそぶりを見せることはない。

実のところ、この教室の映像は我が屋敷の地下に配信されており、地下に引きこもっている直感型天才の、井内ユウ養壌部研究主任も見ているはずだ。

臨時賢人生徒会の開会である。

「皆に集まって貰ったのは他でもない、最近世間を騒がせている、連続爆破事件についてだ」

生徒会メンバーの表情それぞれに、困惑が浮かんだ。

「確かに最近エスカレートしてるけど。その事件と、今回の招集になんの関係があるわけ？」霧島書記長が、トゲと皮肉を含んだ口調で言った。

私は、ふつふつと沸き上がる感情を抑え、答える。
「爆弾魔を――捕縛する」
響めきが起こった。そんな中、霧島書記長が噛みつく。
「何を馬鹿げたことを言ってるの？　事件に関わるなと言ったのはあなたよ。事件に関われば、狙われることになるかもしれない。大切な人にまで、危害が及ぶかも知れない。私はその意見に納得したの。それが、今さら何？　どういう気の変わりよう？　発言がぶれるトップは信頼を無くすわよ」
正論であった。だが、私はその正論で動いている。
「狙われているのは、私だ」
「あなたが……！　なんで――」
それはまだ、わからない。だが、私を狙っていることだけは明白である。いや、
「正確に言えば、爆弾魔は私を狙い、私の周囲にいる人物に危害を加えようとしている」
「ちょっとまって！　それって――」霧島書記長は立ち上がった。
その表情に、先程までの不敵な余裕は無い。
「そうだ。だから、最も危険なのは、諸君だ」
ひっ、と明星会計委員が体を竦めた。霧島書記長が吠える。
「ふざけないでっ！　あなたのとばっちりを私達が受けるって言うの！」
「結果的にそうなってしまう。だから――」
「だから何？　私達に爆弾魔を捕まえる手伝いをしろって言うわけ？　バカ言わないでっ！」
「逃げろ」
「……は？」
「本日集まって貰ったのは、貴君らに爆弾魔を捕縛する強力をして欲しいからではない。爆弾魔を捕縛するまでの間、貴君らの大切な家族も含めて、どこか遠くへ避難して欲しいのだ。その為に、霧島書記長の力を貸して欲しい」

「あなたが、私に頼むって言うの？」
「頼んでいるのではない、忠告しているのだ。貴女といえども、大切な人を失うのは恐ろしいはずだ」
「だからって……あなた、勝手すぎるわ」
「知っている。私は勝手に爆弾魔を捕縛する。貴君らは温泉にでも行って、小旅行でも楽しんでくると良い。その間に脅威は去っているだろう」
「――いやっほう！　温泉！　温泉！　混浴しましょう！」松田がはしゃいだ。
本心からの変態なのか、計算なのかは、私には見分けがつかない。
「松田くん」明星会計委員が、控えめだが、冷ややかな視線を送った。
霧島書記長がブレザーの裏ポケットから何かを取りだし、松田の額に投げつけた。
「――ぐはっ！」
「……あなたは、少し黙ってなさい」
松田の額に当たったそれは、今もなお爆睡している神崎動物愛護委員の頭にこつんと当たって、床に落ちた。床に転がったそれは、茶せんであった。
「……痛ったいなーもう。なんだよう」神崎愛美は眼を擦り、大きくあくびする。
「おう、愛美、温泉行こうぜ温泉」
「ん……温泉？　あったかい？」愛美は眠そうに目を擦る。
「暖かいあったかい。ぽかぽかするし眼の保養にもなるぜ」
「ぽかぽか？　いく！　ニャーちゃん達も連れてっていいよね？」
「あーうーん……いいんじゃね？」松田の返しは適当であった。
「やったー。ねえ、ごーちゃんも行くよね？」神崎愛美は隣に座っていた本郷の服を、くいくいっと引っ張る。
「俺か……？　俺は――」本郷は、霧島書記長を見た。
「ちょ、ちょっと待ちなさい。そこ、何勝手に話を進めてるの！」

本郷は霧島書記長から視線を外し、愛美の膝元であくびをした三毛猫を見る。
「ニャーちゃんって、愛美、お前何匹連れて行くつもりでいるんだ」
「みーんな。にひっ」神崎愛美は、にかっと笑って、特徴的な八重歯を見せた。
「みーんなって……この街にいる全員か？」
「そうだよ。みーんな」愛美は大きく手を広げた。
「それは無理だろ。それこそ、にゃんにゃん大行進で大騒ぎだろうが」
本郷は冷静に述べたが、いかにも悪そうなルックスの男子の口から『にゃんにゃん大行進』は、滑稽を通り越してお笑いでしかない。
「えーやだ！　みんな連れて行きたいっ！　ねえ、ききょーちゃん！」愛美の腕の中で、灰色毛並みの猫がにゃあと鳴いた。
霧島京香だから『ききょー』らしい。霧島書記長をちゃん付けして許されるのは、神崎愛美の人徳かも知れない。
「まったく、あなたたちは何を考えて……」霧島書記長は頭を抱えた。
「明星、お前も行くだろ？」
「わ、わたし？　……でも」明星鈴奈は、私の顔色を覗うように、上目遣いで見た。「私の家は、それどころじゃないし……」
「家族で旅行のチャンスだぜ？　弟たちも喜ぶって。お金は会長が全額負担。でしょ？」
「ああ。日頃の働きに対する特別ボーナスだと思ってくれればいい」
実際、明星鈴奈は会計委員としてよくやってくれている。妥当な対価だ。
「あ、あのっ、でもっ」明星鈴奈はおろおろし、助けを求めるように物部渡消しゴム委員を見る。
成る程、明星鈴奈は物部渡に仄かな感情を抱いている、か。マナの推測は、あながち間違っていなかったのかも知れない。
「渡、お前ももちろん行くよな！」松田が笑いかける。

「のべたん！　行こうよ！」
素晴らしい展開の運びだ。まるで爆弾魔への恐怖を微塵も感じさせない。このまま旅行気分で安全なところへ批難してくれれば――。
すっ、と物部渡が静かに立ち上がった。
渡は、私を真っ直ぐに見た。
「……藤堂先輩は……どうしたんですか？」
そう言えば、マナが言っていた。物部渡は、藤堂が好きなのだと。思いを寄せる人のことが気になるのは当然か。私は答える。
「藤堂は大丈夫だ。私が既に保護している。家族も匿う。だが、貴君ら全員を匿う余裕は無い。だから、貴君らには霧島書記長をたよって欲しい」
完璧な理屈だった。不都合なことは一切隠し、正論とメリットでくるむ。
「あなたは、何かを隠しています」渡は言い切った。
普段のおとなしい行動からは考えられないほどの、鋭さであった。まさか、この子に指摘されるとは思わなかった。
「ほう、君はなかなか鋭いな」
私は渡に微笑みかける。栄誉を称えるかのように。
「確かに、私は隠している事がある。だが、それは貴君らを心配させんとするためだ」
霧島書記長対策として、事前にプランは考えてある。私は息をするように嘘をつく。嘘は得意だ。大なり小なり嘘をつかなければ、今の社会では生き残れない。
だが、私の嘘は、途中で遮られた。
「――いつもあなたの隣にいる人は、どうしたんですか？」
それを聞いた瞬間、私の弁舌が、止まってしまった。
いや、待て。マナが昏睡状態に陥っていることなど、わかるはずがない。私の傍らにいる人物と言えば、もう一人居る。
「……エルのことか、エルなら演劇の稽古を――」
「マナ先輩に何があったんですか！　会長さん、答えてください！」

的確に真実をついてくる。だが、私はマナのことを言いたくない。
それは私の恥であり、無力の象徴であり……。
「……何も無い」嘘をついた。
ぐらぐらとした感情が、吹き上がり、表に出ようとしてくる。
「嘘だ」
嘘をつく度に、ぐらぐらとした感情が大きくなる。
「嘘ではない」嘘は得意だ。
だが、
「なら、なんでそんなに悲しそうなんですか！」
この少年は、私の完璧な嘘を、いとも簡単に見破る。
「……黙れ」
「会長くん……？」霧島書記長が、戸惑いを浮かべる。
「お前に何がわかる」
言ってから気づいた。この言葉は、隙間ターミネーターのマコトが言った台詞と、まったく同じだ。
そして、事情を聞かなければわかるはずがないと、私は否定し――
「わかりますよっ！　あなたが傷ついていることくらい！　だって僕はっ――」
「――渡くんっ！」霧島書記長が、もの凄い剣幕で渡の言動を止めた。「それ以上は駄目」
「でもっ！」
「駄目よ！」
それは、霧島書記長が独占しているという、物部渡の能力に起因することなのだろうか。だが、今はそんなことどうでもいいのだ。
「もう嫌なんだ……逃げるのは」
彼自身が、どんな人生を送ってきたのか、その詳細を、私は知らない。
知っているのは、幼い頃に両親を亡くしていること。親戚中をたらい回しにされた過去を持つこと。以前の学校で転校を繰り返してきたこと。それが逃げることとどんな関係があるのか、私は知らな

い。
だが、彼の言動には芯が真っ直ぐ通っているように感じる。
「僕は、あなたの力になりたい」
「君に何の力が有るというのか」
「僕なら、爆弾の爆発を防ぐことができます」
「馬鹿な。君が？　残念ながら、君の華奢な体にそのような力が有るとは思えない」
「あなただって、大切な人を守りたいんでしょう！」
「私はそのような甘い理由で行動するのではない！」
「嘘だ。じゃあなんであなたの……」『あなたの』と言った瞬間、一瞬だけ渡の視線が逸れた。視線をそらしたのか、別の所を見ていたのか。「……なんであなたは悲しそうなんですか！」
「……悲しそう？　オレが悲しそうだと！　世迷いごとをっ！」
次の瞬間、全員が一斉に私を驚いたように見た。その無遠慮な視線に、私は胸の内を見透かされたような恥辱感を覚える。
がらりと扉が開いた。額に汗をかき、顔面を蒼白にしたエルレインが、必死の形相で室内を見渡し、私を見つけると、大声で、
「会長、こんなところにいたのか！　どういうこと！　マナが――」
もう、限界であった。そして、私の内側でぐらぐら煮立っていたものが、噴き出した。
「――ああ、そうだよ！　マナは今昏睡状態だ！　藤堂が付き添ってくれている！　オレの醜態だ！　オレのせいで爆弾魔に狙われ、傷ついた！　全てオレのせいだ！」
目頭が熱くなるが、必死で抑える。
「これから行なう戦いはオレの私怨だ！　だから、お前達に力を借りるわけにはいかない！　オレ一人の力で、あいつを……マナを傷つけたあいつをっ！」
「なら、なおさら放っておけませんっ！　例え、あなたがどれだけ否定したって、僕は――」
「そうだ。渡、お前の言うとおりだ」本郷光太郎だった。

神崎愛美に話しかけられた時以外、今まで何かを待つように、じっと沈黙していた本郷が、こちらを見て言う。
「最初からそう言えばいいんだ。あんたは、もっと人を頼れ」
「ニャーちゃん達も協力するって！　もちろんあたしも協力するよ！」愛美は灰色猫を抱き上げ、にかっと笑った。
「あのっ、わたしも、及ばずながら……いつも、会長さんにはお世話になりっぱなしですし、やっぱり……ひとりで、抱え込むのは、駄目だと思うんです。それを教えてくれたのが、会長さんですし……わたしにできることがあれば、何でもやりますから」
明星鈴奈はおろおろしながらも、しっかりと、協力の姿勢を見せた。
「俺も力になりますよ。かわいい女の子を傷つけるなんて、そんな奴、成敗してやる、ってね――京香先輩？」松田は相変わらずのへらへら顔とおどけた口調で、霧島書記長に同意を求める。
霧島書記長は、急に振られたからか、えっ、と少し動揺し、
「……そうね。かわいい子を傷つけるなんて、許せないわ。かわいいものは正義だもの。
……別に、あなたの為に協力するわけじゃないから。私達全員が狙われる可能性のある今、ヘタに逃げ回っても、戦っても、危険度は同じよ。この事件はもう、あなただけの問題じゃないわ。私達全体の問題なの」
「書記長……」
「大丈夫。私達は強い。色々な意味で『普通じゃ無い』。それがあなたの編成した、『変人』生徒会なのではなくて？」
霧島書記長は、はっきりと、『変人』生徒会と言ってのけた。知っていたのか。
「どう、実に合理的な判断でしょう。それに……私だって大切な人を守りたいし」
霧島書記長は、生徒会の面々を、一人一人いとおしそうに見た。
そして、私を。

霧島書記長は、陶磁器のように白い人差し指をまっすぐに私に向ける。

「絶対、あなたに感謝させてやるわ」そう宣言して、勝ち気な笑みを浮かべた。

一致団結し、張り切る生徒会の面々。

状況がのみこめてないのか、エルレインはきょろきょろ落ち着かない様子だったが、やがて、臨界点に達した。

「あ、アタシだって！　なんかやるっ！　マナも守るし、会長も守る！　守るからなっ！」エルレインは顔を赤くして、むきになったように言い切った。

全員が一斉にエルレインに注目したため、エルレインはさらに顔を赤くし、見ている方が恥ずかしくなった。その仕草を見て、全員が和やかな表情になった。これもまた、コミュニケーションの一種なのかも知れない。

全員が、希望に満ちた視線で私を見、私の言葉を待っている。

「……馬鹿者どもが」それだけ言うのが精一杯だった。

際限なく溢れてくるように感じていた黒々とした感情が、まるで分散されたように、気持ちが軽くなった、そんな気がした。

眼から溢れてきそうな思いを抑えるために、私は皆に背を向け、窓の外を見る。

太陽は傾き、黄色く染まり始めていた。

マナ、待っていろ。

お前が救ったこの命、必ず役立ててみせる。

この町は、私が守ってみせる。

第二十一話　ヘクセンケッセル

「私が今持っている情報を、皆で共有しておこうと思う」
私は一ヶ月前、学校にしかけられた爆弾のことを報告した。
「あなた、こんなに重要な情報を今まで隠していたわけ？」
霧島書記長は、驚きのあまり怒鳴った。まあ、無理もない。
「狙われたのは私に間違いないし、その後校内に罠を張り、犯人をおびき寄せる計画だったが、一ヶ月経っても何の音沙汰もなかった。情報を公開し、むやみに生徒を恐怖させることは得策でないと判断したのだ。もちろん、警察には証拠を内々に提出してある。特に問題はない」
「あなたのそういう所、今のお偉方とそっくりね」
「批判は後にしてくれ。甘んじて受ける。それより、これだ」
私はアタッシュケースを開けた。何重にも処理が施された、小指の爪サイズほどの透明な小瓶を提示する。中には、透明な液体が半分程入っている。
「これが、爆弾に使われていた爆薬だ。成分を分析したところ、この爆薬は特殊な構造で、凄まじい威力を誇る。故に、爆弾を捜すのは得策ではなく――」
「それ貸して」いつの間に近づいたのか、愛美がひょいっとカプセルを奪い、きゃっきゃと逃げる。
「愛美っ！　それは――」
「わんわんの中に、こういうのの臭いを捜すのが得意な子がいるから、あたし力になれるよ」自信たっぷりといった様子で、愛美は言った。
私は頭を抱える。
「いいか、その物質は気化率が非情に低く、臭いなどわかるわけが――」
「わんちゃんを舐めちゃいけないよ。人間よりも、ずっとすっごい

んだからね」
「いや、そもそも見つけても処理できないだろう。警察に引き渡すならともかく。もし爆弾魔が全ての爆弾を見張っていたらどうする。そんな危険なこと――」
「――それなら、僕にまかせてください」物部渡だった。「僕なら、どんな爆弾でも処理できます」
「何を言っているんだ君は」長谷川じゃあるまいし。
「ええ、そうね」霧島書記長だった。
「渡なら、問題ないな」本郷も頷いた。
「そうだよ。のべたんがいれば大丈夫」愛美はにかっと笑った。
なんだ、この三人の妙な自信は。渡を見ると、なぜか机の上の消しゴムを見て、微笑んでいる。わけがわからない。
「駄目だ。危険すぎる」何を考えているのだ、こいつらは。
「あなたは黙ってなさい。渡くん、お願いね」
「ありがとうございます。霧島先輩」
何だ、この信頼に満ちた雰囲気は。霧島書記長が独占していると豪語していた、物部渡の能力に、何か関係があるのか。私ははったりだと思っていたのだが、
「まてまて！　どういうことか説明を――」
「そんなに不安なら、俺を付ければいいだろ。俺なら爆風でも、拳一つで蹴散らすぞ」本郷は、両腕に燃えるようなプロテクターグローブを装着する。
物部渡の力はともかく、本郷の力は私もよく知っている。こいつがそう言うなら、まかせても問題ないが、しかし――。
「あんたに迷っている時間なんてあるのか？」本郷が私に問い詰める。
「……わかった。ただし、それ相応の理由を――」
「その時が来たら、お話ししますから」渡は、真っ直ぐに私を見ていた。
いつも、何故かおどおどしているくせに、今は、その瞳から強い

覚悟が感じ取れる。この少年、こんな眼ができるのか。
「社会に出たら、そんな言い訳通用せんぞ」
そう言っても、渡は私をじっと凝視し続けた。
「……いいだろう。君と神崎、本郷の三人でチームを組んで爆弾を捜せ。深追いはするな。危ないと思ったら直ぐに逃げろ」
いつもの私なら、絶対に反対しただろう。だが、今は少しでも戦力が欲しい。何よりも、あの冷徹魔女の霧島京香が信頼している事が、決め手となった。
続いて、マナの大食い武者修業先で爆発が起こったこと。爆弾魔と会話したことを簡潔に報告した。私達の行動が見張られていたこと、野次馬の中に爆弾魔がいる可能性を示唆し、リガンによって記録されていた野次馬の映像を写真にして、提出した。
「よくこんな写真を撮っていたわね」
「まあ、な」『リガン』のことは伏せておく。
「ま、出所は後で良いわ。顔さえわかれば大丈夫。シキガミ達、精鋭部隊に調査させれば直ぐに特定できるから」
霧島書記長の傍らに、黒いスーツにサングラスの男達が、音もなく出現した。
「聞いてたでしょ。お願いね」
「御意」黒スーツ達は一瞬にして消えた。
爆弾魔の正体の特定は、霧島京香率いるシキガミチームが担当することとなった。
「あのっ！」明星鈴奈だった。「わたし、霧島先輩について行っていいですか？　似顔絵くらいなら描けますっ！」
彼女の絵画センスは秀でたものがある。まさに適任だろう。私は頷いた。
「あと、委員全員分の安全祈願お守りは作れるか？　君の作るお守りは、すごく効くと評判だからな」
明星会計委員の表情が不安から一転、明るくなった。
「はいっ！」輝かんばかりの笑顔を浮かべた。成る程、彼女は笑っ

ていた方が美しい。
霧島書記長が耳打ちする。
「迷信をまったく信じないあなたが、よくお守りなんて言えるわね」
「ふん、それで委員全員が安心するなら、安いものだ」
「へえ、一応考えてるのね」
「ああ、明星くん、御守りにはこれを付けてくれ」
「……これは？」
「私なりのジンクスだ」
「はいっ」
見れば、明星がものすごいスピードで糸を編んでいる。
「会長！　おれおれ！　おれの事、忘れてる！」松田であった。
「松田、お前は……」
松田が、期待を込めた馬鹿っぽい視線を、私に向ける。
「適当に頑張れ」
松田は盛大にずっこけた。
「なんで俺だけ指示が適当なんすかっ！」
私は、眼で合図する。こいつなら理解するだろう。
「……ま、べっつに、良いッスけど」
松田は、いじけたようにそっぽを向いた。
裏の『情報屋』である松田には、爆弾魔に関する噂の収集を内々で依頼した。
「皆、どんな些細な情報でも良い。何かわかったら、私のメールアドレスに転送するか、急用ならば携帯に連絡してくれ」
私のスマートフォンに転送された情報は、さらに井内ユウがいる屋敷の地下のサーバに集約されることになっている。情報の分析・解読には、井内にも協力して貰う。
「できました！　みなさんこれをどうぞ。みんなが無事に戻ってこれるように、願いを込めました！」
明星会計委員がてきぱきと動き回って、自分が編んだお守りを配ってゆく。

手編みのお守りを手にした委員達の表情からは不安が和らいでゆく。

迷信だろうが、彼女の作るおまじないグッズは良く聞くと評判だ。評判は評判を呼び、彼女は一時期女子生徒の間でカリスマとなった。その結果、おまじない戦争という騒動が発生したほどに。騒動は第三次まで発展した後に収束したのだが、今は詳細を思い出している場合では無い。

とにかく、彼女のお守りがもたらす心理的効果は絶大だ。

「それでは各自、行動開始！」

私は生徒会の面々にそれぞれの役割を伝え、作戦を開始した。

『ついていく』と言って聞かないエルレインを連れて、私は廊下を急ぐ。

「あのさ、会長……さっきは、ごめん」

「お前は何か悪いことをしたか」

「え、いや、えっと……」エルレインはおろおろする。

「悪いと思ってなかったら、むやみに謝るな。つけ込まれるぞ」

「……うん」ほっとしたように、俯いた。それで良い。

「イトーくん、お疲れー」悪魔の赤毛ポニテ、石上アカネ嬢が、廊下の向こう側から歩いてくる。

「来たな、悪魔め」また邪魔をしに来たか。

「あら、ついに本音発言？　あたし、傷ついちゃうなー」

「何を、白々しい。これが、リガンの真の力なのだろう」

私はアカネ嬢の瞳をじっと見つめる。

ポップアップ。人の思念。瞳を見れば、わかるはずだ。

アカネ嬢の瞳が一瞬、金色に輝き、

「――正解」口端が上がった。「半分、ね」

「半分だと？」これで、まだ半分なのか？

「それは、なーいしょ」

ああ、いらいらする。

「第一段階、局地的千里眼。略して『リガン』。これはまー安直な

ネーミングね。そして第二段階、『リガン』の生態情報スキャン機能を駆使して相手の心理を読む機能、目は口ほどにものを言う――『Ｒｅ・眼』！　どうどう？　こっちは、すごいでしょ！　あはは！」

アカネ嬢は顔を近づけ、破顔した。今回も例外なく、ほんのりとあまいような、いい匂いがする。この人は計算してやっているのか。

私は距離を取り、気を取り直して訊ねる。

「真の機能はわかったが、発動条件がわからん。教えろ」

「人に物を頼む時は、土下座と相場が決まって――」

「するくらいなら、聞かん」

「えー残念。ま、いいや。教えたげる」

やけに軽いな、こいつ。と思ったことも伝わっているのだろう。

「まーねー。リガンの真の機能を発動させるには『スイッチ』が必要です」

「『スイッチ』？」

「ところで、その子誰？」アカネ嬢は、大きな瞳をぱちくりして、私の横を見た。

見ると、エルレインであった。それにしても、また話が飛んだ。

「おやー黒髪セミショートに赤眼鏡ですかー。イトーくんはやっぱり良い趣味をしていらっしゃる」

「何を勘違いしているのか」これは長谷川の趣味であり、王道であるらしい。

私の言葉を無視し、アカネ嬢はエルレインに近寄る。そして顔を近づけ、上から下から、なめ回すように見る。ついでに匂いを嗅いでいたのを、私は見逃さなかった。

「あなたも結構入り組んでるねー。マナちゃん程じゃないけど」

「あ、あんまり、じろじろ見ないで……ください」エルレインは、なぜか敬語であった。

「あら、赤くなった。あなた、かわいいわね」

「かっ、かわいいっ!?」

「あははっ、茹だった、ゆだった！」
エルレインは顔を真っ赤にして俯く。それを見て、私は補足する。
「目下、矯正中だ」成人する頃には、立派なレディになっている予定だ。
「えー、チャーミングで、かわいいと思うけど？」
「その辺でやめてやれ。恥ずかしさで悶え死ぬぞ」
「あたし、それも観てみたいなー」
エルレインは、ささっと私の背中に隠れてしまった。そして、もじもじしながらそっと囁く。
「綺麗な人だな……」その言動自体が恥ずかしい。
「まやかしだ。気をつけろ」何せ相手は悪魔だからな。
「失礼な、アカネさんの美貌は総天然物です」アカネ嬢はにっこり笑った。
「自分で言うな、恥ずかしい」ああ、聞こえてらっしゃった。地獄耳め。
「事実を言っているまでよ。イトーくんも、よく言うじゃない？」
「アカネ嬢、悪いが、私には時間が無いのだ。こうしているうちにも――」
マナは……。思い出すだけで、激情がふつふつとこみ上げてくる。
「はいこれ」アカネ嬢は突如、私に向かって何かを投げた。
慌てて受け取ると、文房具屋などで見かける、鉛筆を1ダースまとめて売る時の箱に似ていた。
「その通り。ロケットペンシル弾『チェス』1ダースです。これから必要でしょ？」
「……いいのか？　戦車の大砲ほどの威力のある凶器を」
「あははっ！　馬鹿とハサミは使いようってね。あたし、イトーくんを信じてるから」
「私は、あなたを信じられない」今まで為された仕打ちを考えれば、当然だ。
「うわあ、辛辣。でもでも、まあいいやって思うよ。あたしはイト

ーくんを信じる。それだけでいい」
「恥ずかしい台詞だ」私が言うと、隣でエルレインが、こくこくと頷いた。
「あたしは恥ずかしい台詞大好きなの」
「すごい……この人、すごい……」エルレインが何かをしきりに感心している、というか少し黙っていろこの恥ずかしがり屋さんめ。
「私には耐えられぬ」
人を信じることも、信じられることも。そして、裏切られることも。私には――。
「――『オレ』でいいよ」
「……さっきの話、聞いてたのか。醜態であった」
「ううん、そんな事無い。イトーくんの本音みたいなものが聞けて、ちょっぴり感動しちゃった」
「やめてくれ、こちらまで恥ずかしくなる」
あははっ！　ではなく、えへへ……と、アカネ嬢は照れたようにはにかんだ。きっとエルレインの行動を真似ての計算だ。
「でも、気をつけて。『オレ』という一人称、それが、あなたの最悪の『スイッチ』だから」
「『スイッチ』？」脱線前の話に、戻った？　奇跡か？
「人には、いくつかの『スイッチ』があるの。それは、物理的なものじゃなくて、ここの」アカネ嬢は、自分の胸の中心に手のひらを当てた。
「つまり、私が自分の一人称を『オレ』に変えれば、リガンの真の機能が使えるのか？」
「イトーくん、そのギャグつまんない」
「私は、ギャグを言った覚えはないが」この女、喧嘩を売っているのか。
「ねえねえ、君がリガンの隠し機能を使えた時、『オレ』って言ってた？」
「そんなもの……覚えていない」が、言っていなかったような気が

する。
「そうでしょ。今回のことと、リガンの『スイッチ』は別。とにかく、君の一人称が『オレ』になるのは、お姉さん的にまずいと思うから、十分気をつけてね」
「つまり、何もわかっていないという事ではないか」
「まあまあ、そう悲観なさんな。一度使えたんだから、きっとまた使えるはず。君は、もうちょっと自分を信じなさい」アカネ嬢は、片目を閉じた。
「私はいつでも自分を信じている」
「そうかな、どうかな。もう少し自己分析してみた方が良いんじゃない？」
「余計なお世話だ。必要とあれば、私は必ず『リガン』の『スイッチ』とやらを見つけてみせる」
「ま、がんばって」アカネ嬢の反応は、あくまでも軽い。「でもでも、『スイッチ』をむやみやたらに過信したらだーめ、だよ」アカネ嬢は小首を傾げた。ポニーテールが揺れた。
「なぜだ。このように強い力、利用しなければ損だろう」
「一度スイッチが入っちゃうと、いつも以上の力が出せるけど、力に喰われて殺されちゃうかも知れない。最悪、元に戻れなくなるかも知れない」
アカネ嬢は、茜色に染まり始めた窓の外を眺めて、独り言を呟くように言う。
「爆弾魔法使いちゃんは、もとに戻れなくなったのかもね」
「爆弾魔について、何か、知っているのか？」
「ううん、勘かな。爆弾魔について知ってるのは、イトーくんの方じゃないの？」
「私が？　なぜだ？」
「だって、狙われてるのは、イトーくんでしょ？　イトーくんに恨みでもあるんじゃない？」
「私に恨みを抱いている人物など、ごまんといる」

「あははっ！　人気者だね！」
「あのなあ……」その返しに、私は呆れてしまう。
「だから――」

《――にゃおーんっ！》開戦を告げる、鳴き真似が響き渡った。

「――不思議な子たちに狙われちゃうのかな」
アカネ嬢は、まるで悪魔のように瞳を輝かせて、不敵に笑っていた。
「アカネ嬢、離れろ――」
アカネ嬢は私の口を人差し指でふさぎ、片目を閉じた。
「――こんにちは伊統会長、今日こそあなたを殺すわって、誰ーーーっ！」
突然現われたマリナは、登場するなり絶叫した。
「あ、マリナだ」と、エルレインはうれしそうに手を振った。既に、慣れきっている。
「あ、そういや、恥ずかしがり屋ちゃんも合わせて、自己紹介がまだでした」
マリナに背後を向けていたアカネ嬢は、くるりと回ってマリナと向き合った。
「はじめまして、石上アカネ１９歳。女子大生で『道具屋』やってまーす。特技は人を操ることで、最終目標は『究極の道具』の創造。好きなものは、紅茶と、ソースカツ丼と――」
「――紅茶、お好きなんですか？」エルレインが尋常ではない食いつきを見せた。
「ええ、とても」アカネ嬢はエルレインに微笑んだ。
「そうなんだ……アタシも、好きです」エルレインはとてもうれしそうだ。
それを見て、マリナの表情がみるみる不機嫌なものになってゆく。
なんとわかりやすく、不器用な姉妹だろうか。

「そんなことを聞いているんじゃないわ！　そこのポニテのあなた、なんでこんなところにいるの！　危ないわ、離れなさい！」特にエルレインから、と言いたいのだろう。
「それが、言うほど危なくないんだよねーあなた」
「なんですって！」マリナは眉をつり上げ、沸騰した。
「同じポニテ仲間として、教えてあげる。ま、あなたはサイドだけど」
「な、なによっ、あたしはっ――」
「『殺す』なんて言葉をそんなに軽く扱える奴が、人殺しなんてできるはずがない」
間髪入れず、アカネ嬢は冷たく言い放った。それを聞いて、マリナはさらに動揺する。
「そ、そんなこと、そんなことないわっ！」
「あなたはいったい何がしたいの？　イトーくんを殺したいの、それとも……」
「あたしは、その男を殺さないといけないの！　未来で待ってる仲間のために！」
「まるで、借りてきたような意見ね。そのお仲間は、あなたが人殺しになってもいいんだ。あなた一人に汚い役割を押しつけて、それで納得してるんだ」
「――黙れっ！」
マリナは質量を持った漆黒のビームを放った。
「アカネ嬢っ！」叫んだ時には遅かった。ビームは、瞬時にアカネ嬢を襲った。
アカネ嬢は腕を横に薙ぎ払い、いとも簡単に弾いて見せた。
「あははっ！　軽い軽いっ！　――信念が無いわっ！」
アカネ嬢は快活に笑い、そして一転無表情になり、マリナを見下すように諦観した。
「憤りを感じるのは、それが図星だから」
「なんですってえっ！」マリナはフライパンを構え、放とうと――

「……ばあっ」
アカネ嬢は、いつの間にかマリナの背後に回り、右肩に、自分の顎を乗せている。
「な、なに？　あなた、何なの……」
マリナの体が、小刻みに震えている。
「――ごふっ……」マリナが突然、吐血した。
「……ごめんね。驚かせ過ぎちゃったか、あたしの悪い癖だ」
「マリナっ！　――『変身』っ」エルレインの姿が揺らぎ、隙間タイミネーターの黒い京香装甲に身を包む。赤いマフラーがなびく。
アカネ嬢に近づこうとするが、
「――っ！」エルレインが突然、頭を抱えて膝をついた。
「エルレインっ！」私はすぐさま駆け寄るが、エルレインは呻き、瞳を揺らしている。
「あーごめんごめん。今、『変身』するのは負担が大きすぎるわ」
アカネ嬢はエルレインに向かって腕を伸ばし、手のひらを見せる。空気に、波が発生したような気がした。すると、エルレインの息づかいが、次第に落ち着いた。
「大丈夫。落ち着いて。安心して。種も仕掛けもあるわ。空間にトラップをしかけて、時間を操作しただけだから」
「あなたっ、部外者の分際で、どこまで知って……」ごふっ、と、またもや吐血する。
アカネ嬢は、マリナを後ろから抱きしめた。
「落ち着きなさい。あなたの体のためよ」
目を閉じ、マリナの黒髪に顔を埋め、匂いをかぐ。
「あなた、そこの恥ずかしがり屋ちゃんと、同じ匂いがするわ」
「なっ……！」マリナの頬が、赤く染まった。
「残念だけど、今のイトーくんは忙しいの。あなたと戦ってる暇は無いのよ」
「なに、どういう――」マリナが振り返った瞬間、
アカネ嬢はマリナの両肩をがちりと掴み、固定した。

アカネ嬢は、眼の奥を覗き込むように、顔を近づけた。
アカネ嬢の瞳は、金色に染まっている。
「えっ……そんな……」マリナの瞳が大きく見開き、何かに驚いている。
アカネ嬢は、突然背後に跳び下がる。
――二人の間に、青い旗が突き刺さった。
「そこまで……それ以上は、手出しさせない」
マコトであった。マコトは旗を抜き、マリナの盾となるように構える。あれほど自分の役割を守ることに固執していたマコトが、自らの意志でマリナを守っているのか。
「なかなかの覚悟が、おありのようで」アカネ嬢は微笑んで、首を傾げた。
「ウチはマリナを守る。もう二度と、マリナを傷つけさせない」
「……過去のトラウマか、難儀ね」
アカネ嬢は、何かを知っているような口振りだった。
「今日のところは退きなさい。あたしが相手だと、勝てないでしょ？」
「そうさせてもらえると有り難いかも。あなたから、ぴりぴりした感じが凄いする」
マコトの頬に、汗が一筋流れた。よく見れば、マコトも体を震わせている。
「へえ、わかるんだ。あなた、普通じゃ無いのね……ああ、そうなんだ。そのおかげで、異変が察知できて、駆けつけたってわけね」
マコトが青い旗を翻すと、二人の姿が消えた。
「追えたけど……ま、いいよね」アカネ嬢は私達の方を向く。
エルレインが落とした黒い十徳ナイフを拾い上げ、
「へえ、この黒い『キョウキ』、形無いものでも殺せるかもね。勉強になるわー」と言いながら、私に提示する。「はい、コレ」
「凶器？」見るからに十徳ナイフを、凶器と定義するのか？
アカネ嬢は当然のごとく、私の疑問に答えない。

「じゃあ、イトーくん、恥ずかしがり屋ちゃん、がんばってね。……くれぐれも、力に溺れないように」

驚いたことに、アカネ嬢の姿が揺らぎ、消えた。

あの人は、隙間ターミネーター、タイムマシンについて、明らかに何かを知っているそぶりを見せていた。気にはなったものの、アカネ嬢が消えてしまった今、問い詰めることは出来ない。

「ううっ……」エルレインのうめき声が、耳に届いた。

「エルレイン、大丈夫か」

「あ、ああ……あはは、ごめん」エルレインの顔は青白く、どこか、無理をしているように見えた。

「謝るな。一体どうした？」

「あ、いや、なんでもない……ホントに……なんでもないんだ……」

エルレインは立ち上がったが、その表情は、どこか暗い。

「具合が悪いのなら――」私は手を貸そうとするが、

「いや、ホント、大丈夫だから」エルレインは手のひらを向け、拒否した。

「そうか。くれぐれも無理はするな」

「あ、うん」

私が歩き出した直後、背後で、エルレインの呟く声の断片が聞こえた。

「……誰かが、し――」

《――にゃんにゃん、にゃおーんっ！》その声は、猫の鳴き真似によって遮られた。

「何か言ったか？」

「あ、ううん、なんでもない。なんでもないよ」

制服、眼鏡姿に戻ったエルレインは慌てたように否定した。

じっとエルレインの表情を覗うと、エルレインは、あははは……と無理をしたような、乾いた笑いを見せた。そして、真顔になり、

「会長、気をつけよう。くれぐれも、慎重に」
「ん……ああ、もちろんだ」
なぜエルレインがそのようなことを口にしたのか、私には、わからなかった。

捜査を初めてから二日目。
私はスマートフォンを駆使し、逐一得られた情報をチェックする。
神崎愛美班の方は順調らしく、一つ、また一つと爆弾を発見していった。どれも時限式であり、爆発時刻はまちまちであった。
物部渡が処理しているらしいが、依然として、どのようにしているのかは不明である。
私はこのチームについていこうと思ったのだが、
「あなたは、あなたの役割をなさい」と霧島京香に言われ、
「だから、私はこの者達に――」
「知ってる？　あなた、この中で一番普通なのよ」
「は？　普通？　この私が？　常識人の間違いだろう」
「とにかくあなたは残りなさい。身内が傷つけられて気が動転しているのはわかるけど、だからこそ、今はおとなしくしてなさい」
「断わる。私は――」
「指導者はどんと落ち着いて構えているものよ」霧島書記長は、とても嫌そうな顔をして言った。「あなたは情報をまとめて報告しなさい」
返す言葉もなかった。が、落ち着いてなどいられるものか。今は電子ツールを駆使すれば、どこでも作戦本部と化すのだ。移動しながらでも情報はまとまるし、情報の分析と解析は井内が担当してくれる。
私は、マナが爆発騒ぎに巻き込まれた時の、例の現場に足を運ぶことにした。
移動しながら、爆弾の発見箇所を地図にプロットしていく。かなりバラバラに分布している。場所も様々で、一体どのように侵入し

たのかと疑わしい場所もある。
そもそも、神崎愛美班がそこへどうやって侵入したのか……考えただけでも恐ろしい。
今のところ、爆弾の設置箇所に法則性は見られない。法則など、無いのかも知れない。
それでも、着実に爆弾は処理されているようだ。
一方苦戦しているのが、霧島書記長達率いる爆弾魔の足取りを追跡するチームである。
手元には、野次馬達の素性を調査したリストがある。よくもこの短時間でこれだけ調べ上げたものだ。警察が泣くぞ。
ご丁寧に、一ヶ月前のアリバイまで調べ上げている。
基本的には、その人物が、どこで、何を買ったかの情報だ。ここまで露骨だと、霧島財閥は顧客情報を利用して、顔認証の素性特定ツールでも極秘裏に開発しているのではないかと勘繰らずにはいられない。
リストを確認すると、ほとんどが市外から来た人物であった。一ヶ月前に爆弾を設置できる可能性の無い人物を除外する。半分以上の顔が消えた。
そこまで絞り込んだところで、スマートフォンが振動した。本郷光太郎からの着信だ。
〈会長、さっきまた一つ爆弾を見つけた。至る所に設置してある。愛美が何か言いたいそうなので、代わる〉
そう言えば、愛美は機械嫌いで携帯を持っていなかった。今時珍しい人種だ。
がさがさとスピーカーから音がする。携帯を渡しているのだろう。
〈にゃーあ、にゃんにゃん、にゃあん。にゃーあ？〉かわいらしい声で、猫の鳴き真似が聞こえる。しかし、今は夕日も沈み、隙間タイミネーターは帰った後だ。
「すまないが、人間の言葉で喋ってくれないか」
〈あ、ごめん。さっきまでくろにゃあと――〉

「言い訳は良いから！」はっきり言って、心臓に悪い。
〈怒んなくてもいいじゃん。でね、『くろにゃあ』がね、爆発した時、人集りを見てたんだって〉
ああ、あの性格の悪そうな黒猫か。まさか、現場にいたとは。
〈そこでね、すごく怖い人を見たんだって〉
「怖い人？　特徴は？」
〈えっと……ん？　にゃ、にゃにゃにゃ？　……えっと、緑の、なんて言ったらいいのかな、被るもの、羽織るもの……ううん、纏うもの？　うん、フードみたいなものかな、を着てたんだって〉
直ぐに写真を確認する。緑のフードを着た人物は……いない。
「何かの間違いではないのか？　もしくは、嘘をついているとか」
〈間違いじゃないよ！　人間じゃないから嘘もつかない！　いかちゃんひどいよっ！〉
怒らせてしまった。だが、謝らない。
「わかった。参考にする」
〈信じてないなっ！　いいもん、これから『みどりちゃん』のこと調べるもんっ！〉
「お、おい、愛美」みどりちゃんって、また変な渾名を。
〈えーっと……ていっ、ていっ！〉
〈おい愛美、滅茶苦茶さわるな――〉
ぶつっと音がし、一方的に通話を切られた。……かけ直す。
〈ああ、会長か。――って、おい待て愛美！　愛美！　……会長、すまん。愛美は直ぐに取り押さえる。後でかけ直す〉
またもや一方的に通話を切られた。まったく、愛美の奴め。自分勝手な行動がどれ程危険がわかっていない。今は本郷にまかせるしかないのだろうが、やはり私もついていくべきだったように思える。
――あなたは、あなたの役割をなさい。
……わかっている。
だからこそ、私は現場に向かう。

現場は既に警察によって封鎖されていた。知り合いの刑事も見当たらず、途方に暮れる。そんな中、同じく途方に暮れていた店主と会い、今後の話をした。

このような時でも、町興し計画の協力者に対しては、保証をせねばならない。私が原因ならば、なおさらだ。私は割り切って店主と話し合う。

今後、我が社が援助することで手付を打った。その最中、不穏な噂を聞いた。

私はネットにアクセスし、教えて貰ったページを参照する。

何やら、ゴシップネタを集めたサイトらしかった。こういったB級ネタを集めたサイトは一定の需要があり、まずますのアクセス数を稼げるという。

ある記事を見て、私は眼を疑った。

『爆乳大食いネットアイドルが飲酒で搬送?』

内容を見ると、まさしくマナのことであった。あること無いことおもしろおかしく、えげつなく書かれ、そこには卑猥な言葉、誹謗中傷すれすれの文脈。読むにつれて不快感が増し――。

私の頭は、一瞬で沸騰した。気がつけば、壁を殴りつけていた。爆弾魔……マナを傷つけるだけでは飽き足りず、社会的に抹殺する気か……。

「あのう……大丈夫ですか……?」突然、横から声をかけられた。見ると、影の薄そうな黒縁眼鏡の男がこちらを見ている。理性を忘れてぶちぎれている者に、よく話しかける気になったものだ。

「……ああ、大丈夫だ。気にするな」

男は何かを抱えていた。それは、バケツいっぱいに入った、枯れた花のようであった。

「それは……?」

「なんだか、急に枯れてしまって。ほら、あの爆発騒ぎがあった直後なんですが」

男は悲しそうな表情を浮かべ、枯れた花々を撫でるようにさわっ

た。
「それは、災難だったな」言ってから気づいた。マナが、最後に発したポップアップ。
《お花》《ごめんなさい》
「こないだ、ウチの店に間違えて入ってきた人ですよね」
そういえば……顔は印象が薄くて覚えていなかったが、あの特徴的な黒縁眼鏡は覚えている。
「ああ、あの時の」
「やっぱり覚えて無かった」男は自嘲気味に苦笑した。「人に顔を覚えて貰うのが苦手で……だからこうして個性的な眼鏡を」
「……はあ」よくはわからないが、色々と苦労が絶えないようだ。
「あの時に話さなかったら、今話しかけたりなんかしませんでしたよ。あの時、あなたが上の店に入っていった後で爆発が起きましたからとても驚きました。でも、無事だったようで、安心しましたよ」
男は、人の良さそうに笑う。
「ああ。運がよかった」
「あの時、抱えて出てきた子は、あなたの……？」
「ああ、知り合いのようなものだ」
それを聞いた男は、心配そうな表情をしていたが、それ以上聞こうとはしない。きっと、先程の私の行動を見て、察しているのだろう。
「山場は越えたそうだ。まだ、危険なことに変わりは無いが」
「そうですか」男は、少し安堵したように息をつき、「そうだ！」と叫んで店内に入っていった。店内を見ると、全ての花が枯れている。明らかに異常である。
「これをどうぞ」男の手には、プレゼントの時に使うような箱いっぱいに敷き詰められた、パステルカラー調の薔薇の花々が敷き詰められ、綺麗にラッピングされている。
「……これは？」
「ブリザーブドフラワーです。店内の花は全て枯れてしまったんで

すが、この子達だけは何故か無事だったので。まあ、長時間保存することが出来るように専用の薬品を使って加工されたものなので、生きているとは言い難いですが……って、聞いてます？」

「あ、ああ。聞いている。だが、これは……」

「どうぞ、お持ちください。長持ちなので、お見舞いなどの用途で好まれます」

そう言って、男は半ば強引に、ブリザーブドフラワーなるものを私に手渡した。

「ああ……」私は多少戸惑ったが……言わねばなるまいな。「……感謝する」

男は一瞬、驚いたように眼を大きくしたが、直ぐに柔和な表情に戻り、

「いえ、早く元気になると良いですね」と微笑んだ。

わずかだが、胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

「ところで、この店に援助をしたい」マナのせいでこうなったとしたら、それは私の責任である。

唐突な申し出過ぎたのか、男は、きょとんとした。

「……あなたが？」

ああ、どう見ても高校生の私が、援助などと言うのもおかしな話か。

「こう見えて、会社を経営している」

はあ……。と、男は半信半疑の表情であった。まあ、無理もないか。

それでも、男はにっこり笑って言う。

「店長と相談してください。俺、バイトですし。店長、大損害で大慌てでしたから喜ぶと思います」

咄嗟に私を気遣ったのか。実に、素晴らしい人材である。私は名刺を渡す。

「安定して働ける場所が欲しければ、連絡をくれ。良待遇で迎えよう」

「ははは、ありがとうございます」本気かそうでないのかわからなかったが、男は名刺を受け取った。
その時、体に軽い振動を感じた。スマートフォンが振動していた。私は男に挨拶し、別れる。ディスプレイを見ると、藤堂からの連絡であった。
「藤堂か、どうした？」私の心臓が、早鐘のようになる。
「マナちゃんが――」
マナが、どうした、まさか……。凍り付くような不安が広がる。
「もう大丈夫だって！」
全身から、力が抜けるのを感じた。
「意識はまだ回復してないけど、バイタルは安定してるって、お医者さんが」
「……そうか」鼻の奥が、つんとなり、声が震える。
「いーくん？」
いかん、感づかれてしまう。
「もう少ししたら、そちらに向かう」
「うんっ！　あ、いーくん、京香から聞いたよ。犯人を捕まえるって。私にも何かできる事無いかな？」
「お前は、マナの側にいてやってくれ」
「何それ、態の良いやっかい払い？　私だって、力には自信あるよ」
いや、そうではない。言うべきか、言わぬべきか迷ったが、結局言うことにした。
「お前が側にいてくれると……私も、安心できる」
しばらく、スピーカーの向こうは無言であった。
「……うん。わかった」穏やかな声だった。
その後二、三会話を続け、通話を切った。すると、スマートフォンがまた振動する。
本郷からと言うことは、愛美チームか。
〈お、会長、今良いか？　また爆弾を見つけたんだが――〉
スピーカーから、耳をつんざくような激しい音が聞こえた。

「おい、本郷……本郷っ！」
何度か呼びかけてみるが、返答はない。だが、通話は繋がっている。
〈――会長〉
「本郷か！」
〈ああ、悪りいな。爆弾を処理したんだが、もう一つあったみたいだ。爆風は渡が『消した』から全員無事だ。正直、危なかった〉
物部渡が……消した？
「おい、消したってどういう――」
〈ん、何？　……渡が話したいことがあるそうだ。このまま代わる〉
一方的に話を打ち切られた。しばらくして物部渡の声が聞こえてくる。
〈会長さん、今の爆発なんですが……〉
渡は、そこで一度口籠もる。
「どうした？　言ってみろ」
〈僕には、爆弾が2種類あるような気がするんです〉
「何か、根拠があるのか？」
渡は答えない。答えられないのか。答えたくないのか。
「物部くん、君が何かを隠したがっているのはわかる。これは推測だが、君の力に起因することかも知れない。だが、力というのは隠そうとして隠せるものではない」
〈僕は……っ。きっと……会長さんは信じません〉
「物部くん、良いか、良く聞いてくれ。私は今、少しでも情報を、力を必要としている。馬鹿げていたとしてもかまわない。教えてくれ、もう二度と……」
マナを……身近な人を、傷つけるわけにはいかないのだ。
その一言が、どうしても言葉に出せなかった。
〈わかりました。ごめんなさい、我が儘言って〉
そして、渡は言う。
〈今までの爆弾には『悪意』がありました。でも、今の爆発には、悪

意は少しも感じられませんでした〉

「『悪意』……？」どういう事だ？　爆風を消したり、悪意を感じると言ったり、一体、物部渡の力とは……何なのか？

〈はい。馬鹿げているとお思いでしょうが。今まで僕らは緑のフードの人物の目撃情報を追って、爆弾を捜していました〉

「目撃情報？　爆薬の匂いでは無いのか？　緑のフードとは、愛美が言っていたあれか？」

〈はい。爆薬の匂いでは追い切れなかったんです。ですから、神崎さんの……〉

「神崎の『特技』なら知っている」きっと渡は、私のことを信用できていないのだな。

〈……そうですか。猫たちの目撃情報、わんにゃんねっとわーくの協力で、フードの人物の足取りを追っていたんです。そこで、僕が『悪意』の方向を特定して、爆弾を見つけてたんですが……って、会長さん、ついて行けてますか？〉

「あ、ああ……」正直、ついていけない。

〈今回の爆発からは、まったく『悪意』を感じられなかったんです。だから、見落としてしまった。それで、爆弾は二種類あると思ったんです。もちろん、まだ他にもあるのかも知れませんけど〉

言っていることが滅茶苦茶なわりには、論理は破綻していないようにも思える。これは、どう判断すべきか……。

〈会長さん……？　聞いてますか？〉

「……物部くん」

〈……はい〉物部渡は、重々しく返事した。

「君の意見、了解した。次からは、端から見てどれだけ馬鹿馬鹿しくても、事実を報告するように」

〈はいっ！　ごめんなさい！〉渡の返答は、どこかうれしそうであった。

「ところで、愛美は緑のフードの人物が野次馬の中にいたと言っていたな。野次馬写真の画像データを送るから、愛美に見せて、どの

人物かを教えてくれ」
〈わかりました。ちょっと待っててください〉
しばらくして、愛美の声が聞こえてきた。
〈いかちゃんも、ようやく信じるようになったんだねっ！〉
愛美の口調はやさぐれているようにも聞こえる。
「そう怒るな。お前の言う緑のフードの人物、画像の中いるか？」
〈うーん、愛美にはわかんない。くろにゃあは、どっかにいっちゃったし……あっ、みけにゃんに聞いてみるー〉
受話器向こうから、にゃにゃにゃんという愛美の可愛らしい声が、聞こえ続ける。
〈うん。わかったよ、いかちゃん！　いるって！〉
「どれだ？」そのような服装の人物は、見当たらない。
〈これ！　これだって、いかちゃん！〉
「これでは、わからん」
〈あっ、そうか。えっとね、あたしにも見えないや、あはははは〉
「あはは、ではないっ！　お前に見えないのに、どうして『これ』だと断言できるのか！」
〈きっと人間には見えないんだよ。にゃーちゃん達には見えるんだよ。尻尾で指して貰ったからわかるの！　すっごいだろう！〉
確かに、人間と他の動物では、世界の見え方が違うと言うが。
私は、三毛猫が尻尾でディスプレイを指している図を想像した。
途端に馬鹿馬鹿しくなった。
「ありえな……」いや、待て。
今までの犯人の行動から見ると、犯人は私達が知らない技術を有している可能性がある。もし私達が知らない技術で操作を撹乱しているとしたら……。
「いいだろう。それは本郷の携帯だったな。たしか私と同じＯＳが搭載されたスマートフォンタイプだったはずだ。画像加工ソフトの名前を言うから、ストアからダウンロードして、可能であれば猫に丸を付けさせろ」

〈言ってる意味がわかんない〉

「本郷に代われ！」

私は先程の説明を本郷に伝えた。しばらくして、画像が送られてきた。

「……これは」画像に上書きされた丸は、あり得ないところを囲っていた。

赤い線で囲われた丸の背後には、何者も、存在していなかったのである。画像は人混みが敷き詰められたようにぎゅうぎゅうになっている。

丸は、そんな人と人との小さな隙間を囲っていた。

凝視すると、何やら画像が歪んで見え、途端に気分が悪くなる。

この隙間に、いったい何があるのか、私には認識できない。

私はある可能性を考える。もし『人の認識をそらすことのできる技術』があるとしたら……。その時、火花が散るような閃きが生じ、私の脳内に格納されていた二つの要素が連結した。

人が認識できない緑のフードの人物がいると仮定し、さらに爆弾が二種類あると仮定する。

私は画像を操作し、加工する。……やはり、そうか。

一度、自分の屋敷に戻る必要があった。

屋敷に到着した。すぐさま地下に向かう。

「――井内！　いるか！」

植物の群生場所を抜け、目の前に広がる様々な緑色の中から、白い背中を見つけた。井内はディスプレイの前に座り込んで、画面を見上げていた。

画面には生徒会メンバー達が集めた様々な情報が映し出されている。その中で、表示された地図に線が引かれ、五芒星が描かれている。

「井内、この地図に引かれた線は……」

「爆弾の爆発場所を頂点にして、いろいろやってたらこうなった。

きっと、魔法陣だよ。マナちゃんを侮辱してるんだ」井内の声は籠もっており、いつもの元気がない。

五芒星の中心に、赤い点が灯った。

「この中心、少しずれてるけど、マナちゃんが入院した病院を指してるよね……色々考えたけど、生け贄ってことなのかなって……」

こちらからは、落ち込むように座っている井内の小さな背中しか見えない。

「……どうして！　どうしてこんなことするのっ！」井内は突然叫んだ。

「井内、お前まさか――」気づいたのか、犯人の正体に。

井内は振り向く。その顔は、悲しそうに歪んでいた。

「いとくん……だめだよぅ。何度反証しようとしても、井内ちゃんの直感が揺るがないよ」井内は、頭を抱えてぶんぶん振った。

私は先程の画像と、緑のフードの人物についての情報を話した。

そして、

「カクレヤナギ」

私は、自分の推測を話した。カクレヤナギは井内の隠れ場所であり、その背後に隠れた人物は、絶対に見つからない。そういう特性を持った植物である。

井内の研究報告では、カクレヤナギの『模様』が、背後に存在する物体から、人の認識を逸らす効果があるのではないか、と結論づけていた。

しかも、カクレヤナギの『模様』は、視認できる限り、１６０度以上の角度を付けても機能する。驚異的な実験結果について、井内はこう推測する。

「この模様はきっと、三次元とかじゃなくて、もっと高次元の存在なんだと思う」

光学迷彩に使えるのではないか、との私の問いに、井内はこう答えた。

「カクレヤナギの背後にいる物体は消せても、カクレヤナギ自体を

消せるわけじゃない。ほら、夜、街灯の真下にいる人を端から見ると、その人は見えにくくなるって実験結果があるでしょ。それと一緒なんじゃないかって、井内ちゃんは直感するよ。ジャングルとかなら使えるかもね」

だが……私は、先程加工した画像を見せる。

解像度を落としていったところ、ある時点で、画像に描かれた円の中心に、黒色が出現した。これが愛美の言う、緑のフードを着た人物。つまりは犯人候補だ。色が違うのが気になるが、出現したのは確かだ。

ほとんどモザイク状になっているため、残念ながら顔は見えない。この不鮮明な画像から推測するに、フードが顔を覆っているので、どちらにせよ顔はわからなかったものと思われる。

「こいつは、完全に認識できない」

「進化してる……のかな……わからないよ……こわいよ……」井内は小刻みに震えた。

「葉上なのか」その名を出した途端、井内は自分の体を大きく震わせる。

「信じたくないよ！　まだ違和感があるし、でも、反論もできないし。気持ち悪い、気持ち悪いよいとくんっ！　こんな感覚嫌だ……井内ちゃんを助けて！　嫌だ！　嫌だよ！」井内は髪をめちゃくちゃにかきむしった。

「井内！　井内落ち着け！」私は井内の白い肩に触れる。ぞっとするほどの冷たさが、手のひらに伝わる。思わず抱えていたブリザーブドフラワーを落としてしまう。それでも、私は井内の肩を強く掴む。「私が、明らかにしてやる」

「……いとくん」井内はすがるような瞳で、私を見た。

「お前の気持ち悪さは、何かの暗示だ。違和感があるのは、まだ見落としている何かがあるのだろう。自分の直感に従え。逃げるな。気持ち悪さを解消できるまで、戦って見せろ」

井内が心細そうな表情で、私を見上げる。

「……いとくん、どうするの」
「わからん。だが、葉上を見つけなければならん」
あの男が、何らかの関与をしている可能性が高い。
「いとくん！　井内ちゃん、嫌だよ！　二人が戦うなんて！　嫌だからね！　井内ちゃん達、昔の三人に戻れるよね！　はがみんが井内ちゃんに挑戦状を出して、いとくんがそれを判定するの！」
「それは、お前の直感か？」
「……そう、そうだよ！　井内ちゃんはこんな所で座り込んでる場合じゃない！　井内ちゃんは、井内ちゃんのために戦うんだ！」
井内は、思いっきり立ち上がり、拳を固めた。
「井内……」その懸命な姿に、私は胸を打たれつつあった。
「それでいつの間にか、はがみんといとくんは深い仲になる！　ええっ！　意外な事実に井内ちゃんたじたじっ！　井内ちゃんというものがありながらっ！　しかも同姓で！　普通は一人の美少女を二人の男が取り合うものだろうがっ！　でもでも複雑な胸中を抱えて、井内ちゃんははあはあ言い言い、夜な夜な盗撮するのであった！
色々な意味で性癖パラダイスだねっ！　それから――」
馬鹿であった。私の感動を返せ。いや、この私が感動などするはずがない。
「その辺にしておけ。そんなことは絶対にないし、考えただけで気持ち悪い」
「いーじゃんかー。井内ちゃん妄想世界の中くらい、好きにやらせてよう」
「口に出すな。外に出すな。他者に影響を与えるな。そのまま墓場まで持って行け」
井内はいひひっ、と笑った。
どうやら、落ち込みモードからは遷移したようだ。これでしばらくは安心だろう。
私は地面に落ちてしまったブリザーブドフラワーを拾い上げた。
「あれ、ところでそれって、花？」

「ああ、これは……ブリザーブドフラワーと言ってだな……」
「おとーさん、井内ちゃんへのお土産！」
井内はぴょんとジャンプし、花を取ろうとする。私はそれを無駄なく避ける。
「残念だが違う。これはマナへのお見舞いだ」そう言えば、マナに渡さねばならなかった。
「えーけちー……でも、マナちゃんじゃしかたないなーでも井内ちゃんも何か欲しいなー」
「お前には多額の投資をしている。どう見ても無駄なスーパーコンピューターとかな」
「ぶー。井内ちゃんは、まごころが欲しいんだよう」井内は頬を膨らませた。
「じゃあ、私は行く」
私はきびすを返し、植物の自生地を引き返す。階段を昇っている途中で、後ろから声をかけられた。振り返ると、井内が不思議な走り方で、ぴょこぴょこと近づいてきた。
「いとくんっ！　井内ちゃん、全力でサポートするから！　だから、いとくん」
井内は口をもごもごさせて躊躇した後、突然、爆発するように言葉を発した。
「死なないでっ！」
それは、彼女の直感だったのだろうか。直感にしては、不吉な警告だ。
「馬鹿め。私は死なん」
少なくとも、水鏡マリナが生きている時代までは、私は死なない。
未来が、変わらない限りは。

第二十二話　植物ネゴシエーター

屋敷を出た私は、スマートフォンを操作し、物部渡に連絡をとる。
「物部くん、植物に気をつけろ。仮に君が『何か』をわかるとして、それは植物から発されている可能性がある」
〈植物？　それは駄目です！〉渡は、語気を荒げた。
「駄目？　何故だ」
〈僕には、植物はわからない。僕がわかるのは、あくまで『物』だけなんです。生命……なんでしょうか。そういった複雑なものが介入すると、途端にわからなくなってしまうんです。でも、それだとつじつまが合うのかも知れません。もし、植物が爆発しているとしたら、僕には理解出来ない。だって、生きているのだから〉
物部渡は確信めいた口調でそう話した。彼の保有する才能がどんなものかは検討もつかないが、『つじつまは合う』と彼は言った。
やはり、葉上を見つける必要があるのか。
葉上大介。『人間特異点』とまで呼べる才能を保有する、稀有な人材。
私と似た境遇を経験し、私の理解者になり得たかも知れない男。
しかし、彼は数ヶ月前に失踪し、手を尽くして調べさせたが、依然として手がかりは掴めていない。何の手がかりも、だ。そのことがあまりにも不自然だと、私はもっと早くに気づくべきだった。
だが、それは無理だった。
葉上は、自ら身を隠したのだと、私は思っていたのだ。
なぜなら、葉上の失踪前日、彼の妹が、死んだからだ。

私がまだ中学生の頃。
金だけが有り余り、にもかかわらず、自分が具体的に何を成せば良いかわからなかったあの頃。
食糧難という問題に興味を抱いた私はある日、とある情報を入手

した。

ある農家が栽培している蜜柑が、急激に味を良くしているというのだ。

その蜜柑は年々味を濃くしてゆき、幾つものコンテストで絶賛されたらしい。その速度たるや、驚異的なのだそうだ。

何が驚異的なのかは、その時の私にはわからなかった。

早速、私は会いに行ってみることにした。

噂など、信じない。この目で見たものだけを信じる。私の信条であった。

都会からかなり離れた片田舎に、目的の人物は住んでいた。

田舎と言うよりも、何も無い、と言った方が正しかったかも知れない。

温厚な季候と、澄んだ空気と水だけが取り柄のような、のどかで寂しい場所であった。

訪ねると、人の良さそうな夫婦が出てきた。

それが、葉上の父母、夫妻の第一印象だった。

私は噂を聞きつけてやって来たことを伝えた。遠くから来たことを伝えると、

「わざわざ遠いところからどうも」と、被っていた帽子を脱ぎ、やはり、人の良さそうに笑った。

しかし、柔和な対応にもかかわらず、夫妻はなかなか口を割ろうとしない。

自分達の利益がかかっているのだ。当然だろう。

それでも私は、熱意を伝え続けた。

そして、

「誰にも言わないと、誓えますか？」

「当たり前です！　教えてもらった情報をうかつに漏らすような真似はしません！　必ずや私が独占し、利益に変えて見せます！　そのために、情報統制を徹底します！」

私のこの口上に、夫妻は苦笑いした。

今思えば、未熟な言葉であった。

しかし、何が気に入ったのか、夫妻は秘密を話してくれることとなった。

蜜柑が急激においしくなっているのは、自分たちの力ではないという。

息子の力なのだと、夫妻はまるで自分の事のように自慢した。私はまたもやその意味を理解出来なかった。

聞けば、当人はちょうど蜜柑畑にいるという。

そして、そこに行けば、求める情報がわかると。

私は夫妻に礼し、すぐさま向かった。

なかなかの面積である蜜柑畑を歩いた。蜜柑の木は、私がイメージしていたものよりもずっと大きかった。初めて実物を見たため、これが普通の蜜柑の木なのか、それとも異常に大きいのか、私には判別がつかない。

しばらく彷徨い、ついに、目的の人物を見つけた。

「やあ、結構遅かったな」銀色の脚立の上から、そいつは私に声をかけた。

上から見下されるような形となったので、私は勝手に内心、無礼な奴だと思った。

それに、遅かったとはどういう意味だ。まあ、どうせ家族から携帯に連絡でもあったのだろう。そう思っていた。

「ああ、これは失礼」少年は、さっと地面に降り立った。

どうやら、私の気分を害したことに気づいたらしい。

きっと、私の表情を読み取ったに違いない。私は、逆光で彼の顔が見えていなかったというのに。

少年の肌は健康的な小麦色に焼けており、くせっ気の強そうな黒髪は散らかったまま、白い歯をにっと覗かせた。

なかなかの好青年ではあった。だが、私よりも背が大きい。やはり、見下されているようで気に入らない。

「いやあ、ごめんよ。この子達が君の来訪を教えてくれてたんだけ

ど、俺たちも今は収穫時でね。色々忙しいんだ」
「この子達？　誰のことだ」
私は辺りを見回すが、やけに巨大な蜜柑の木があるだけだ。
「誰って……この子達」少年は、そっと、蜜柑の大木に触れた。
こいつ、何を言っているのか。
ああ、農家ともなると、蜜柑の木に対して人間のように語りかけるのか。
確かにここは寂しい土地だし、友人もできにくいだろう。目の前の少年は、蜜柑の木を友人のように敬っているのかも知れない。
「――もうっ、おにいちゃんっ！　いきなりそんなこと言ったら変な人だと思われちゃうよ！」
突然、少女の声が聞こえた。
尤もな意見だが、私は既に目の前の少年を、変な奴認定している。
振り向くと、
白いワンピースに、麦わら帽といった、ある意味避暑地のお嬢様としては王道な格好をした少女が、こちらに駆けてくる。私は王道が大好きである。長い黒髪が夏風になびく。こちらの少女の肌は少年と違い、漂白されたように白い。
「おい真由、そんなに走ったら、また気分悪くなるぞ」少年は何やらはらはらしている。
「おにいちゃんは黙ってて！」真由と呼ばれた少女は、少年に向かってぴしゃりと言い放った。どうやら、この少年の妹らしい。真由はこちらに向き直る。
「おにいちゃ……兄が変なこと言って、ごめんなさい」少女は頭を下げた。
黒髪がさらりと流れる。こちらの黒髪は真っ直ぐで、黒真珠のような光沢である。よく手入れされているのだろう。
「いや、特に謝られるようなことは……」まあ、確かに変だが。
いや、待て。麦わら帽？
確かに今は夏だが……。そういえば、蜜柑の収穫時期は、冬では

ないのか？
　見上げると、蜜柑の巨木には、大きなオレンジ色の実がたわわに実っている。
「ああ、これは夏みかんか」
「いいや、普通の蜜柑だよ」少年は答えた。
「普通の蜜柑が夏に収穫できるものか！」思わず、私は突っ込んだ。
「だから、この子達は特別なんだ。ほら、時期が違った方が希少価値も上がって、高く売れるし」少年は、やけに現実的な理由を語った。
　だが、その後に続いた言葉が現実的ではなかった。
「だから、お願いしたんだ。夏に実を付けてくれないかなって」
　少年は当たり前のように言い、当たり前のように微笑んだ。白い歯が見えた。
「おにいちゃんっ！　だからそんなこと言ってもわからないって！」
　真由は、兄の言動を窘めるが、否定はしない。むしろ、理解されないことを怒っている。と言うことは……。
「君は、何者なんだ」思わず、呟いていた。
「ああ、そういや、自己紹介がまだだったね」
　少年は、かごに入っていた蜜柑を掴み、そして、私に差し出した。
「俺は――葉上大介」
　自己紹介して欲しくて呟いた言葉ではなかったのだが、こうなってしまえば、私も返すしか無い。
「私は、伊統会長だ。君の噂を聞きつけて来た」私は差し出された蜜柑を受け取った。
「いとう……かいちょー？　変わった名前だな」
「あのっ、わたしは葉上真由です。その蜜柑、とっても甘酸っぱくておいしいんですよ」真由は、はにかむような笑顔を見せた。
　かわいらしい子だ、と思った。だから、そのまま言った。
「よろしく。かわいらしいお嬢さん」
　真由の白い頬は、瞬く間に朱に染まった。純情なのだな。

「お前、キザだな」葉上はむっとした。
「本当のことを言ったまでだ」何か問題でも？
「真由、こいつには気をつけろ」
真由は赤く染まった頬を隠すように、ほっぺに手を置いて恥じらっている。
「こいつとはやけに無礼だな」私はそう言いながら、蜜柑の皮をむぐ。やけに、薄い。
「妹に手を出す奴は全員敵だ」
「成る程。おにいちゃんはシスコンのようだな。真由くん、気をつけたまえ」
私はオレンジ色の果実を一房、口に入れた。
「誰がシスコンだ誰が。いいか、真由は体が――」
「――うまい」思わず、呟いていた。
「……へ？」葉上は、きょとんとした。
「何という旨さだ。味が濃い。まるで普通の蜜柑を濃縮したような甘さと酸味、そして香りが、見事なバランスで調和している」
「お、おい……」
「さらになんと言っても、この実の皮の薄さ。私は蜜柑を食べた後に残るあの薄皮の感じがどうも苦手なのだが、この皮は甘みや酸味と共に、溶けるように無くなってしまう。なんと言うことだ、このような蜜柑、今までに食べたことがない。まさに至高。この実、一粒一粒が、金貨ほどの価値を持っていると言っても過言ではない」
「ちょっと……褒め過ぎじゃないか」葉上は照れたように頭をかいた。
「いいや、葉上大介くん」私は、葉上の手を取った。「素晴らしい蜜柑だ。私は感動している。これほどの蜜柑に出会えたこと――感謝する」
「ああ、いや、その……」さっきまでむっとしていた葉上の顔が、まるで先程息子の自慢をしていた両親のように、デレデレになる。
「おにいちゃん、良かったね」真由が微笑みかけた。

「あ、ああ、うん……えっと、こういう時、どうすればいいんだ？」
「褒めてくれてありがとうって言えば良いんだよ」
「あ、ああ、そうだな。伊統会長……だっけ、お前、結構良い奴だな。ありがと――」
なんと言うことだ。私は、それどころではなかった。
「ああ、なんと言うことだ。なんと言うことだっ！」
「あの……会長……さん？」真由が語りかけた、気がする。
「この私が……感謝してしまったっ！　私が、人に、感謝してしまったああっ！」
私はあまりのショックで、地面に頭を打ち付けていた。
「お、おい！　しっかりしろよ！」
「私は人に感謝と謝罪をしないという誓いを立てているというのに！　あまりのおいしさに誓いを忘れてしまったああっ！」
「……うん、なんか、最低だ」葉上の口調には、明らかに軽蔑が含まれていた。
「駄目だよおにいちゃん。会長さんも、何か事情があるんだよ」
「真由、なんでこいつの肩を持つんだ？」
「えっ、それは……えっと……」
「おにいちゃん、こんな変な奴許さないからな！　絶対に許さないからな！」
なに？
「お、おにいちゃん、そ、そんなの、わたしの勝手だよ！」
変な奴、だと？
「――私が変な奴だとおおおっ！」
「ひえっ！」「ひゃっ！」
「貴様に言われたくない！　変なのは貴様だ――葉上大介！」
「……えー、なんで俺？」
「まるで植物と会話できるように振る舞いおって！」
「何だよ、できるもんはできるんだ。俺は、植物の言うことがわかるし『交渉』だってできるんだ」

「『交渉』？」
「そうだ。『交渉』だ。俺は、植物と話して、発育の方向性を『説得』できる」
「ははっ、世迷いごとを。まさかそんな――」
「さっき食べたろ。俺の蜜柑。それでも信じないのか？」
うっ、確かに、あの蜜柑は非常に美味であったが……。
「それでも、植物と会話できるとはとても思えんな」
私と葉上は言い合いの喧嘩になった。しばらく互いに論戦していると、
「――本当だもん！」真由が突然叫んだ。
見ると、目尻に涙を溜めている。
「おにいちゃんは、ホントに蜜柑さんとお話できるもんっ！　それでわたしのお薬代とか、稼いでくれて……わたしっ……ひっく……」
真由は向きになったように怒り、今にも泣き出しそうであった。
「真由……」葉上は、真由をいとおしそうに見つめ、頭をやさしくぽんぽんした。
それを見て、私は決断した。
「……信じよう」
「なんでだよ！」葉上は声を上擦らせた。
「会長さん」真由は涙を拭い、えへへと笑った。
「真由も何で許してんの！　何コレ！　無理矢理いい話かっ！」
「彼女は信用できる。そう思ったからだ」
「いや待て、俺の言うことを信じろよ！　って、真由、おい、おーい、おにいちゃんを見なさい。こいつを見るなあっ！」
「別に、お前の言うことを信じていないわけではない」
「何だよ、その回りくどい言い方」
「頭をやさしくぽんぽんできる奴に、悪い奴はいない」
葉上は、面食らったように眼を見開き、
「お前、恥ずかしい奴だな」
「――なんだとっ！」

「あのっ、あのっ。会長さん、良かったら今日、家に泊まっていってください」
「真由っ！　何を言ってるんだ！　ちょっと積極的過ぎないかい！」
「だって会長さんは、わざわざ遠くから来てくれたんだよ」
葉上は、きょとんとした。
「……へ、そうなの？」
「うんっ、お母さん達が言ってた。さっ、会長さん、こっちこっち！」
真由は私の腕を絡み取り、ぐいぐい引っ張った。
「では、お言葉に甘えようか」
「お、おまっ、真由とくっつくな！」
「見目麗しいレディのエスコートを無下に断わるわけにはいくまい」
「おまえなあっ！」
そして、私は夕げに招待された。

振る舞われた料理はどれもおいしかったが、どれも蜜柑で味付けがしてあった。
食後、あれほど楽しそうにしていた真由が、熱を出して倒れた。
「ほれ」葉上はマグカップを私によこした。なみなみと注がれていたのは、オレンジ色の液体であった。おそらく、また蜜柑ジュースだろう。
「悪いな。真由は大丈夫か？」
「ああ、今日はちょっとはしゃぎすぎたからな。でも、あいつうれしそうだったから。だから良いんだ。今日だけは」
「真由は、病気か何かか？」
「まあ、な」そして葉上は、聞いたことのない複雑な病名を述べた。
「子供が発症するのは珍しいんだってよ。治療法は確立されていないって、医者の先生が言ってたよ。そのままだと……あと半年も生きられないらしい」葉上の表情が、曇った。
「それは……悪かった」

「それ、謝ってるんじゃないか？　それに、さっきの『悪いな』も」
「いいや、『悪いな』は挨拶みたいなものだ。それに仮に『悪かった』と思っても、思っているだけで、実際に謝っているわけではない」
「うん、複雑すぎて、良くわかんない」
「お前、聞けば私と同い年らしいではないか。これぐらいの論理、瞬時に把握して見せろ」
「うん、お前の基準が間違ってると思う。それに俺、中学にはほとんど行けてないし」
「何だと！　義務教育だぞ。己の本分を果たせ」私は葉上の両肩を掴んで訴えた。
葉上は、気まずそうに視線を逸らした。その先には、暗闇に包まれた蜜柑畑がある。見つめる葉上の表情は、どこか寂しげに見えた。
「本分……ね。だったら俺は、真由の病気が完治するまで、稼ぐのが本分だな」
「どういうことだ」
「真由の病気は、綺麗な空気と、水、そして薬があれば、結構長く生きられるはずなんだ。だから俺たち家族はここに移り住んだ。あとは薬がいるんだけど、俺たちみたいな弱小農家じゃ手が出せない金額でさ、だから俺がこの力で稼いで、真由の命をつなぎ止めるんだ。俺の力、植物と『交渉』できる力は、きっと真由を助けるために、神様から授かった贈り物なんだ」
葉上の表情は、真剣そのものだった。
「はっ……馬鹿馬鹿しい」
「何をっ！」
「神などいない。神がいるなら、真由の病気はそもそも発症しない。もしくは、直ぐに完治するはずだ」
うぐっ……。と葉上は唸った。
「それはっ……そうかも知れないが……」
私は葉上に、現実を突きつける。

「お前の力はお前のものだ。誰のものでもない。神からの贈り物でもない。お前自身が持っている『才能』だ。それが最愛の人を助けるために使われていることを、私は嬉しく思う。その才能を保有しているのが、お前のような人間で良かった」

「……会長、お前」

「葉上、お前の才能、もっと人々のために役立てては見ないか」

「何？」

「真由の治療代から家族の生活の保証まで、全て私が請け負う。幸い、金なら無尽蔵にある」

「嫌味な奴だ。真由を利用するのか」

「好きに捉えて貰ってかまわん。お前が気に入らなければ、断わっても良い。お前だって、無意味な施しは好まんだろう」

葉上は、思い詰めたように俯いた。

「……少し、考えさせてくれ」

翌日、葉上は私の申し出を受けた。

だが、意外にも真由が反対した。

真由と家族をこの環境に残して欲しいと言うのが、葉上の条件だったのだが、

「おにいちゃんを取らないでっ！」真由は、葉上に抱きついて離れなかった。

真由が兄と離れればなれになるのを嫌がったのだ。

その姿を見て、私は諦めざるを得なかった。

別に、同情したからではない。単に、家族は共に居た方が良い。引き裂くわけにはいかない、そう思ったのだ。私にとっては、当たり前の事だった。

家族を失うことが、どれだけ辛いか。母とのことも、最近では祖父のこともあり、私は身をもって家族との別れを体験していたのだから。

私は葉上を手元に置くことを諦め、代わりに休みの日を使って、

葉上家に会いに行くことになった。蜜柑の収穫も手伝った。
「いーくんっ！　最近休みの度にどこに行ってるの！」
ある日、藤堂が怒って問い詰めてきた時があった。やっかいだと思ったが、直ぐに名案をひらめいた。
「……お前も、行くか？」
「行くっ！」藤堂は二つ返事だった。
私は葉上達に藤堂を紹介した。藤堂は人当たりが良く、人見知りもない。直ぐに二人と打ち解け、仲良くなった。真由はお姉さんができたと喜んだ。
私達は時々、葉上達の勉強を見た。葉上は畑の世話をしなければならない。真由は体が弱いから、なかなか登校できない。
故に、出席日数はぎりぎりで、特に葉上の成績は超低空飛行であった。私は葉上のために青空教室を主催した。
「葉上大介！　寝るんじゃない！　そんなことでは社会の荒波には勝てんぞ！」
「俺……もういい……歴史を知ったからって、蜜柑が高く売れるわけじゃないだろー」
「何を言っているのか。先人の過ちや知恵を知ることで、実生活に活かせ！　一見遠回りに見えるが、蜜柑が高く売れるヒントが眠っているのだ！」
「嘘だー」葉上は机に突っ伏した。
「嘘ではない」
「何だよ勝ち組」ふてくされたような言い草であった。
「何を今さら自明なことを」
「かわいい彼女がいるしさ」
「はあ？」
「藤堂さんのことだよ」葉上がふてくされた表情で、私を見上げた。
私は、盛大に噴き出してしまった。
「な、なんだよ、その笑いは」
「藤堂は、私の彼女ではない。あれはただのお隣さんだ」

「ええっ！　まじかっ！　……じゃあ、俺にもチャンスあるかな……あ、でも、俺なんかには……いやいや……」
「ぷっ……わははっわっはっはっはっは――」
「何だよ、急に笑い出して」葉上はじとっと睨んだ。
私は笑いすぎで出た涙を拭う。
「いや、『植物ネゴシエーター』の葉上大介も、人間相手には、たじたじかと思ってな」
「うるさいな。人間は植物ほど根が単純じゃないんだよ」葉上はそっぽを向いた。
「あいつは根が単純だぞ。案外、お前とお似合いかもな」
「か、からかうなよっ！」
「いや、まさかお前が藤堂を、わっはっはっは！」
「――いーくーん！　葉上くーん！」
藤堂が真由の手を引いてこちらへやってくる。
「と、藤堂さんっ！」葉上は急に意識しだしたのか、がちがちに緊張している。
「私が、仲人になってやろうか」
「へ、変な事するなよ。俺だって、まだ気持ちの整理がついてないんだ」
「まあ、気長に付き合うさ」
この時、私は幸せだったのかも知れない。
だが、幸せは長くは続かなかった。

思えば予兆はあった。
「なあ会長、最近家に変な奴が来たんだけど……」
葉上は、名刺を私に差し出した。
団体名の欄には『九龍・超人研究所』と書かれていた。
「なんだ、これは」
「いや、よくわからないんだけどさ、何でも、俺の脳波を取らせて欲しいとか言うんだよ。たぶん、会長みたいに俺の噂を聞きつけた

んだと思う」
　その頃には、葉上に能力を隠すように言っていた。だが、私がここに辿り着いた時点で、噂はかなり広まっていた。そのことについて、超・執事の長谷川に一度相談したことがあるが。既に広まってしまった噂は、どうしようもなかった。
「そいつがさ、俺に言ったことが引っかかって」
「……なんて言ってた」
「『やっと見つけた』って」
　その言葉に、何か、ざらついたものを感じた。
「両親には言ったのか」
「いや、ちょうど留守でさ。とりあえず、断わったけど。畑の世話で忙しいから、そんな時間ないって。なんか、また来るって言ってた」
「そうか。……あまりにしつこいようなら、私が何とかするが」
「いや、いいよ。会長とは友達でいたいからな。あんまり迷惑かけるとこっちが引け目になっちまう」
　友達……か。その言葉を聞くと、なぜか胸の内がくすぐったくなるような気がする。私は何度か防衛策を打診したが、葉上はそのたびに断わった。
「大丈夫だって。話せば分かってくれるよ」
　私は、そうは思わなかった。故に、葉上夫妻を説得し、防犯システムを計画しようと思い至った。私はその週末、いつものように楽しく過ごし、そして、帰路についた。
　夫妻には計画を打診済みだ。次の週には説明して、直ぐにでも防犯システムを構築しよう。そう思っていた。
　だが、奴らの行動は、こちらの予想を超えた速度で進んでいた。
　結局のところ、私も葉上と同じく、奴らを、甘く見ていたのだ。
　その日の深夜、真由から電話があった。連絡のために、葉上と真由には私が携帯を持たせていた。
「どうした、こんな遅くに――」

「会長さん」真由は小声で、こっそりと話しているようだった。「窓の外から、明かりが差し込むんです。だれかいます……わたし、こわいです」

私はすぐさまベッドから跳び起きた。

長谷川を呼ぼうと思ったら、既に私の気配を察知したのか、全てを準備した後だった。まさか、飛行許可まで取っているとは。

私は長谷川の操縦する軍用ヘリで空港まで飛び、そこからは自家用ジェットを使い、音速で葉上の家を目指した。

いざ上空に差し掛かると――葉上の蜜柑畑が、燃えている。

私はジェットから飛び降り、パラシュートを使って着地した。

パラシュートを外して葉上の家へと急ぐ。扉が開いていた。中は、しんとしている。

何やら、中が荒れている。ふと見ると、床にキャリーバッグが、転がっている……これは、荷造りをしていた？　私は捜索を続ける。

そして、夫妻を見つけたが……。

私は、壁に拳を叩きつけた。

私は、葉上達を捜した。

葉上達の位置は、ＧＰＳでわかるようになっている。

どうやら、蜜柑畑の一角にある、小屋に潜んでいるらしい。

途中、黒ずくめの男がマシンガンらしき銃を構え、乱射してきた。

私は慌てない。物陰に隠れつつ移動する。暗殺者に狙われることなど、何度か経験している。だが、これが日本なのか。銃規制はどうしたのか。

私は黒ずくめ共の背後に回り、一人一人を護身用の技と、特製のスタンガンで仕留めながら進んだ。

こいつらは一体何者なのかと気にはなったが、先ずは葉上兄妹の安全確保が先だ。

小屋の前にだれかがいる。そいつは小屋の扉に手をかけ――開いた。

その瞬間、私は黒ずくめの構えていた銃を蹴り飛ばし、ついでに顎に蹴りを入れた。
小屋の中を覗くと、葉上が真由を抱えて震えていた。
「いやあっ！　いやあっ！」「来るな！　来るなあっ！」
二人とも、恐怖で錯乱していた。
「――大丈夫か！」
「か、会長……？」「会長……さん……？」
「ああ、良かった。もう大丈夫だ――」
「――会長、後ろ危ないっ！」
もう一人いたのか、私が振り向いた時、そいつは銃を構えていた。
私は咄嗟に床に落ちていた銃を掴み、向けるが……。
その体が――横に吹き飛んだ。長谷川が強烈な蹴りをお見舞いしたのだ。
「会長さま、遅れて申し訳ありません。ご無事ですか？」
「いや、絶妙なタイミングであった。助かった」
私と長谷川は二人を保護し、小屋を出る。
すると、目の前にはとんでもない光景が広がっていた。
蜜柑畑が、燃えていた。
葉上が苦労して作り上げたものが、一瞬にして無に帰した瞬間だった。
「どうして、どうして俺たちがこんな目にあわなければならないっ！　俺たちは静かに、普通に暮らしたいだけだ！　それなのに……どうしてだ会長っ！」
炎の中、必死で妹を抱きかかえながら、葉上は叫んだ。
私が聞きたかった。どうしてだと。
神というものがいるとするなら、何故、この兄妹を不幸にするのか。
炎の灯りで瞳孔が収縮していたのか、
見上げた天には、星が一つも瞬いていなかった。
まるで、兄妹の暗澹たる未来を暗示するかのように。

自家用ジェットの着地地点まで、私たちは急いだ。
「ねえ、お母さんは、お父さんはっ！」真由が必死に訊ねてくる。
私は泣きじゃくる彼女を機内に押し込んだ。放心した葉上を乗せ、私も乗った。
長谷川が機体を発進させた。真由が窓に手を当て、泣き叫んでいた。
その横で、葉上がじっと地面を見ている。
その視線の先には、燃えさかる蜜柑畑があった。
私達の、そして、葉上の楽園は、失われてしまった。

両親を見捨てたと、真由は病院のベッドの上で私を罵った。
私は甘んじて、それを受け入れた。
葉上は、ただ、落ち込んでいた。
「……すまない。真由は」
「気にするな。今はそういう時だ。私を罵ることで彼女が救われるのなら、私はそれでもかまわん」
「……すまない」
葉上は、呆然と座っていた。一夜にして全てを失ったのだ。当然だ。
「葉上、私はこれから戦争を始めようと思う」
「戦争……？　だって？」葉上が私を見上げる。
「そうだ。何も、場所を取り合うだけが戦争ではない。己の正義と信念を賭け、戦う事すなわち戦争だ。先ずは手始めに、お前達を傷つけた奴らを――ぶっ潰す！」
葉上は力無く、首を横に振った。
「会長、駄目だ。奴らは普通じゃ無い。危険すぎる」
「何を言っているのか。私を誰だと思っている！　伊統会長は、未来の王となる男だ。驚異は……排除せねばならない！」
葉上はしばらく私を見つめ、そして、俯いた。

私が背を向け、去ろうとした瞬間、
「会長……待ってくれ。俺も、力になりたい」
振り向いた。葉上の視線に、狂気を感じた。
「私怨で動くな。あくまでも、奴らは現行法に従って弾劾する。奴らのやったことは、やろうとしたことは、そして、これからやろうとしているであろうことは、決して許されるべきものではない。間違った思想は、正しい方法で矯正せねばならない」
「でも、会長、そんなこと、一体どうやって……」
「安心しろ。力なら保有している。なあ――長谷川」
銀髪の黒執事が、影のようにゆらりと現われた。
「御意に、ございます」
「私を敵に回したこと、後悔させてやる。――さあ」
私は腕を薙ぐ。
「戦争を、始めようか！」

そして、私と葉上の戦いが始まった。
残りの中学生活は、奴らを滅ぼすために捧げたと言っても良い。
葉上と藤堂の関係も、いつしか消えてしまった。
私達は『九龍超人研究所』なるふざけた組織の資金源を経ち、上層部の正体を調べ上げ、国との癒着が明らかになるや、その政敵に情報を伝え、悪事を暴いて白日の下に晒し、警察に情報をリークして徹底的に追い詰め、独自に調べ上げた残党を改心させ、内部から瓦解させ、完膚無きまでに滅ぼした。
世間的には、いかれたカルト集団の事件として報道された。
天照高校に入学する頃、私達はようやく、勝利を確信したのだ。
全てが終わっても、葉上達との関係は、元のようには戻らなかった。
お互いに、無傷とまでは行かなかった。
私にとっても、失うものの多い戦いだった。
そのことについては、思い出したくもない。

そして真由とは、あれから一度も会っていない。

元はと言えば、奴らに対抗するために作ったバイオ系企業も、今ではかなり大きくなった。

葉上は、いわば戦友と呼べる存在だ。その彼が、今回の事件の犯人なのか？

だが、葉上はむやみやたらに他人を傷つける男ではないし、このように残虐な爆発騒ぎを起こすような奴でもない。そもそも、動機がない。

それに、数ヶ月捜して見つからない人物を、どうやって見つけ出せばいいのか。

ラッピングされたブリザーブドフラワーの花弁に、眼が止まった。パステルカラーの花が、笑うように咲き誇っていた。

それを見て、なぜかマナの笑顔を思い出した。

「……先ずは、行くか」

私はマナの病室へと向かった。

病室へ近づくと、歌声が聞こえてきた。かわいらしい少女の声。美しく澄み切った、それでいて、どこか儚さを感じさせる歌声だ。

私はこれでもメジャーなシンガーソングライターを母に持ち、幼い頃から音楽に慣れ親しんだ。その為、耳は良く、音楽への一家言もある。

その私が聞いても、この歌声は非凡であると感じた。

どうやら、マナの病室から聞こえているらしい。

扉を開ける。すると、歌声が止んだ。

ベットの傍らに座り、驚いたような表情で固まっている藤堂と視線が合う。

「今の歌は……」

藤堂は跳び上がるように席を立ち、どこか挙動不審に、ぎこちない笑みを浮かべる。

「い、いーくんっ、遅いよっ！　何やってたの？　ほら、マナちゃん、もう大丈夫だよ」
藤堂は私の背後に回り、促すように、強い力で私の背中をぐいぐい押す。
「わあっ、綺麗なお花だね。どうしたの、マナちゃんへのお見舞い？」
「ま、まあな。これは花屋の店員が――」
「さっすが、いーくん！　気遣い上手だね。あっ、じゃあ私、花瓶にお水汲んでこないと」藤堂は眼を大きく見開いて、手のひらを合わせた。妙にテンションが高かった。
先程の歌を、ごまかすかのように。
「いや、これはブリザーブドフラワーと言って――」私が言い切る間もなく、
藤堂は慌てたように室内を飛び出して行きそうになる。私は多少強引に呼び止める。
私は藤堂の腕を取り、明星会計委員が作った御守りを付けた。色とりどりの小さなガラス玉や、綺麗な糸が組み合わさって出来たブレスレットだ。
「……これ、どうしたの？」藤堂は眼を見開いて驚いている。
「御守りだ。身に着けていろ」
藤堂は、リングをじっと見ながら、目を潤ませた。
「……ん、どうかしたか？」
「あ、ううん……いーくんから、プレゼント貰うなんて、なんだか久しぶりだなって」藤堂は恥ずかしそうにはにかんだ。
「そうだったか？」
「……あ、ありがと。きらきらしてて、すっごくかわいいよ」
「そうか」
沈黙が、流れた。
「わ、私っ、水汲んでこないとっ！」
「いや、だから――」

藤堂は部屋を飛び出し、ばたんと扉を閉めた。
ミシッ……という不吉な音がしたのは、この際、見逃しておこう。
あいつは一体、何を慌てているのだろうか。自分の歌声を聞かれたのが、そんなに嫌だったのか？　昔は『歌手になるっ！』と張り切っていたくせに。
気を取り直して、ベッドを見る。色づいたイチョウような金糸が、白いベットの上を流れている。マナの長く、美しい髪だ。
マナはやはり、死んだように眠っている。
しかし、以前に見た時と比べて、血色も良く、だいぶ穏やかな顔つきに見える。
順調に回復に向かっているようで、ほっと一息つく。
「マナ……」私は、藤堂が座っていたらしき、ベットの傍らの椅子に座る。
ふと、絢爛豪華な花が眼についた。華やかな胡蝶蘭が、自分の存在を高飛車に主張している。きっと、霧島書記長のお見舞いだろう。
私の持ってきた花を見る。小さな花が、身を寄せ合って咲いている。
まるで、胡蝶蘭に威嚇され、怯えているかのように思える。無論、錯覚なのだが、そう感じずにはいられない。
店員には悪いが、天と地ほどの差がある。私は急に恥ずかしさを覚えた。
「……まあ、贈り物は気持ち、とも言うしな」言ってから、実に自分らしくない、妄想じみた発言だと気づいた。誰かに聞かれていれば、一生の恥だ。
――イトーくん、変わったわね。赤毛ポニテ悪魔の笑みが、ちらつく。
ふざけるな。私が変わったなどと。それも、こいつが原因などと……。
私は、マナのベットの直ぐ側にあった棚に、小さな花々を置いた。
これは、あの花屋の店員からで、私は運んだだけだ。何の関係も

ない。
私が関係しているのは……犯人の方だ。
私は、明星鈴奈から貰った私用の御守りを懐から取り出す。何やら特別な意味があるらしいが、私は知らない。私が知っているのは、このブレスレットが所持者の身を守ってくれるという迷信だけだ。
だが迷信というのは、自分が何も出来ない時に、何かにすがりたい思いから来るものとも言われている。
私はそれをマナの腕にくくりつけた。
「……早く、良くなれ」
自分の感情が少しだけ、落ち着いた気がした。
眠るマナをみて、私は徐ろに口を開く。
「マナよ、お前を傷つけてしまったのは、私の戦友となる可能性のあった人物なのかもしれない」
マナに語りかけているようで、
「そいつの才能を見いだし、そして、開花させたのは……私だ」
自分に語りかけているようにも思える。
「マナよ、そいつが犯人だった場合、私はどうしたらいいのか……」
お前に、何と詫びれば良いのか……。
――空気がビリビリと振動した、気がした。
爆弾かと思い、私は病室を飛び出した。辺りを見渡すが、特に異常は無い。気のせいか？
病室に戻ると、マナの金髪がきらきらと輝いていた。
何も、超常現象が起こったわけではない。単に、マナのベットに日が差し込んできたのだ。マナの髪に陽光が降り注ぎ、美しく輝く。
空も低くなり、日が傾くのも早くなった。窓が西側に向いているため、病室に直射日光が注がれてしまうのだろう。
マナが、眩しそうに顔をしかめた。
「今、カーテンを閉めてやるからな」
そして、カーテンに手をかけ、何気なく窓の外を覗いたその時――。

――ふざけるな。
眼前に広がる景色に、私は腹立ちを感じた。
そう言えば、井内が言っていた。
五芒星の中心には、『少しずれている』が病院があり、マナを生け贄に見立てているのだと。
……なるほど。そういうことか。灯台もと暗しとはこのことか。
なぜ、今までこんな下らない事実に気づかなかったのか。
私達の認識が、操作されているのか。
私は、ベージュ色のカーテンを閉め、マナを見る。
「……行ってくる」私はそう呟き、病室の扉に手をかけた。
――いってらっしゃい。背後で、マナがそう言ってくれたような気がした。
振り返るが、マナは眠ったままだった。
どうかしているな。私は、やはり変わったのだろうか。
いや、そんなことはもう、どうでも良いのだ。

私は歩きながら回顧する。
数ヶ月前、真由の病状が悪化した。
それでも私は彼女と会わなかった。代わりに、彼女のためにできる限りの事をしようと思った。私は真由の治療ために最良の環境を整え、病気完治のための研究を進めた。
葉上は、毎日病床の妹の元へと通った。
葉上は日に日に元気がなくなってゆき、追い詰められているように思えた。
真由の病気が完治することは無かった。
真由が死んだ。
私は、何もできなかった。
葉上は、全てに絶望した。
天涯孤独、最愛の家族を失う痛み、絶望する葉上の姿に、私はかつての自分を重ねた。

絶望する葉上を激励した。
葉上は失踪した。
そして――。
私は、目の前にそびえ立つ建物を見上げる。
爆弾魔の爆弾が描く五芒星の、ちょうど中心に位置するのが、この建物だ。
私はこの建物を知っている。街興し構想のプレゼンにて映し出した建物だからだ。
――スライドを捲る。骨組みが剥き出しとなっているマンションの写真が映し出される。資金繰りの悪化で建設工事が中断されたものだ――
そう、骨組みが剥き出しとなっている、はずだった。
だが、今はそうなっていない。
あらゆるところに植物のツタのようなものが巻き付き、建物全体をびっしりと覆っている。既に原形をとどめていない。言うなれば、植物の城塞と化している。
私がマナの病室の窓から見たのは、この変わり果てた廃屋だった。
このような異常に、なぜ今まで私は気づかなかったのか。そもそも、誰も異常だと思わなかったのか。いや――。
こうなるまで誰も気づかなかったこと自体が、最大の異常だ。
入り口は見当たらない。エントランスホールとなるはずだった箇所まで、植物の木々、葉々の緑がびっしりと詰まっている。
その時、植物の蔓が、早回し映像のようにするすると動いて行き、洞窟の入り口のような穴が、カーテンが開くように、ぽっかりと開いた。
奥は暗闇であり、何も見えない。まるで、巨大な生物の口腔のように見えた。
私はその深淵のような暗闇に惹かれるように、中へと進む。
かさかさと、背後で音がした。振り返ると、植物が互いに絡みついてゆき、瞬く間に入り口をふさいでしまった。

辺りは、暗闇に包まれた。
そして、気づいた。そもそもこの植物の城塞を、誰も異常だと思わなかったとしたら、なぜ、私はこの異常に気づくことができたのか。
考えられる可能性は一つだ。
――私は、故意に、ここに導かれた。
心臓が早鐘を打つ。生理的な恐怖が、ぞわぞわと背中を伝う。
かさかさ……がさがさ……と、葉々がこすれるような、虫か何かが暗闇で駆けずり回るような、そんな音が、至る所から聞こえる。
まるで私を嘲笑しているかのようにも思える。
ふいに、光が生じた。突然のことに、体がビクリと反応してしまう。
光は淡い緑色に輝く。次々と増えてゆく。視界が開けてゆく。様々な色彩の緑色、赤色、黄色が、暗闇から出現する。
見たこともないような奇怪な植物が、至る所に群生し、発光している。
植物の城塞の内部には、異界が広がっていた。
私の目の前、ホールのようになった屋内の中心に、絡まった植物が螺旋階段のようなフォルムを形作っている。いや、実際に螺旋階段なのだろう。
階段状の葉に足を踏み入れると、体重をかけた瞬間、葉が淡く発光した。
一段一段が私の体重に反応するかのように、一際強くライトアップされてゆく。
かがんで良く確認すると、光っているのは確かに植物の葉々であった。手をかざしてみるが、温度を感じることはない。徐ろに触れてみるが、やはり熱は無い。
まさか、非加熱照明とでもいうのか。植物が？　そんな事例、聞いたことがない。
私は、光に導かれるように螺旋階段を上り、植物に包まれた廊下

を進んだ。

一歩一歩踏み出す度に、階段の時と同様、目の前の床――植物が輝く。

しばらく進むと、淡く光る扉が現われた。これも植物でできている。光が生き物のように脈動している。

私が表面に触れると、城塞の入り口と同様、絡み合っていた植物がするするとほどけてゆく。

――強烈な光が、眼を眩ませた。暖かい空気が、肌に触れる。同時に、甘酸っぱく、懐かしい匂いが香った。

……次第に光にも慣れ、視界が開けてくる。

誰かが、正面に座っている。

テーブルのようなシルエットを挟んで、ソファーのようなものに、私と対峙するように座っている。

「やあ、結構遅かったな」

あの時……目の前の男と初めて会ったときと、同じ言葉がかけられた。

天井からツタのようなものがするすると降りてくる。その先端には、オレンジ色の果実が実っている。男は手のひらを差し出す。果実が、独りでに落ちて、男の手のひらに納まった。男はその果実を、私に差し出した。

まるで、私と初めて会った時を、再現するかのように。

「伊統会長、蜜柑でも食べるかい？」

がたいが大きく、くせっけの強い黒髪、紛れもなく――。

「これは一体、どういうことだ」

「まあ、座りなよ」

「どういうことだと聞いているっ！　今までどこにいた！　なぜ姿を隠した！　お前に聞きたいことはいくらでもあるぞ！　――養生部部長、葉上大介！」

「その呼称はもう古いよ。元・部長の間違いだろう」

その声、その顔つき、目の前にいる男は紛れもなく、

葉上大介であった。

第二十三話　ネクストステージ

数ヶ月間失踪していた男が、今、目の前に座っている。
「養生部があんな事になったのは、お前がいなくなったからだ！」
養生部は元々、葉上部であり、葉上が創り出した植物の特性を研究するための部活であった。だが、今は幼女をこよなく愛する変態の巣窟と化している。
「俺がいなくなった数ヶ月で、あそこまで変わるかな」
「どういう意味だ！」
「……まあまあ、そう声を荒げるな」
葉上の口調は、平静というより、棒読みのように抑揚が無い。
目の前の男――葉上大介は糸に操られるように、ゆらりと、ゆっくりと立ち上がった。
両腕を開いて歓迎の姿勢を見せ、笑い、白い歯を見せた。
「どちらにせよ、久しぶりの再会だ。我が深き森へようこそ。――天照高校生徒会長、伊統会長」
「質問に答えろ！」
「答えるさ。でも、立ち話も疲れるだろう。さあ、こちらへ。上座は空けておこう」
葉上はソファーらしき物体の前から移動し、部屋のドアから見て左側の椅子らしき物体へと腰掛けた。
「葉上！」
葉上は私を見ながら腕を前に出し、もう一方の席を勧めた。
座るまで答える気は無い。と、その柔和な表情が語っている。
私は渋々進み、右側の椅子に座る。
……馬鹿な。座っているような感触がない。まるで、宙に浮いているように、軽やかである。今まで座ってきたどの椅子よりも、座り心地が良い。
私の表情の変化に気づいたのか、こちらを黙ってじっと見ていた

葉上が、薄く笑った。その笑顔は、どこか作り物めいて見えた。
「どうだい、なかなかのものだろう？」
その言葉に、私ははっとさせられる。自分の座っている椅子を恐る恐る見る。革製のような光沢を放っていたそれは、近くでじっくりと見ると、葉脈が奔っていた。
「葉上、お前は――」
「おっと、忘れていた。早くしないとホットオレンジが冷めてしまう」
葉上は、君が来るのが意外と遅かったからね。と付け加えた。
「ここで育てた蜜柑から作ったんだ。体が温まる。君も少しは落ち着くだろう」
テーブル……らしき植物の上にのっていたポットからは、湯気が立っている。あの甘酸っぱい香りの源はこれか。
いや待て。ここは廃墟だ。電気もガスも通っていない。インフラと言えるものは全て停止している。それなのに、葉上はこのホットオレンジをどのようにして用意したというのか。
まさか、自家発電を備えているわけではあるまい。そもそも、ここは森の中のような状態だ。こんなところで火を使えば、たちまち大火事になってしまうだろう。
「気づいたか。流石に驚いているね」葉上の口調は、棒読みのように抑揚が無い。
目の前にいる人間は、本当にあの葉上大介なのだろうか。
そもそも、人間なのか。
向かいに座る男からは、まるで生気を感じられない。
私が今、対峙している存在は、いったい、何だ。
ここは、本当に現実なのか。
「根から吸収したエネルギーを、熱に変えて貰うように『交渉』したんだ。結構苦労したよ。何十世代とかかって、ようやく実用レベルになった。まあ、世代交代を加速して、2日のサイクルにしなくちゃ、ここまで早くはできなかったけどな」

2日だと……この男は、何を言っているのか。
植物の生育の加速は、微生物を利用しても、7日を切るのがやっとだったはずだ。井内の研究結果でもそう報告されている。
それに、植物が、熱を出すだと。そんなもの、どうして信じられる。
「お前は……いったい何を言っている」
あり得ない。いくら葉上でも、できるはずがない。
「あれ、どうしたんだい会長。顔色が悪い。さあ、ホットオレンジを飲んで、血の巡りを良くするといい」
だが、否定もできない。
私は、この男の『才能』を誰よりも高く買っているのだから。
葉上は白いカップに、オレンジ色の液体を注いだ。湯気と共に、蜜柑特有の柑橘系の匂いが強く香った。
私は恐る恐る、カップを手に取る。その素材が、植物でなかったことに、私は一抹の安堵を感じた。
口を付ける。
がつんとした濃厚な甘さと酸っぱさが口に広がった。だが、後味はさっぱりとしており、次の瞬間には、この極上の液体を口に含めたくなる。何度も続けて飲みたくなる。
まるで魔力のような魅力に囚われ、気づいた時には、カップの白い底が見えていた。
「それも、2日で生育するんだ」
私は、咽せた。
私の体内に取り入れた液体が、異常な速度で生育した果実から搾り取られたと明かされては、吐き気すらしてくるというものだ。
だが、私の喉は、体は、あのオレンジ色の液体を求めていた。
その欲求を読み取ったかのように、葉上は提案する。
「おかわりは、いるかい？」
「――いらんっ！」声を荒げていた。
理性で、無理矢理欲求を抑えつけた。

「遠慮しなくていいんだ。この力の持つ『可能性』に気づかせてくれたのは、会長なんだから」
「いらんと言っているっ！」
「……まあ、いいや。それは結構控えめな作品だし」
「控えめ……」
葉上は腕を伸ばし、私に蜜柑を差し出す。
「さあ、受け取ってくれ」
私には、そのオレンジ色の物体が、禁断の果実に見えた。
認めたくはない。拒否したい。
だが、それがもたらすのであろう驚きを求めて、手を伸ばさずにいられない。
受け取った。思っていたよりも、ずっしりと重い。
これが、何だというのか。一見何の変哲もない、ただの蜜柑である。
葉上は眼を細めて微笑を浮かべている。何も言わない。皮を剥いて見ろと言うことか。
私は蜜柑の底に指を入れ――。
「――ちがうちがう」葉上は制止する。
へたを、押してみな。
へたを、押した。
蜜柑の皮が独りでに裂け、みずみずしい果肉が顕わになった。
……は？
一瞬、時間の流れが制止した気がした。葉上と、目があった。
「ぷっ……」葉上は、吹きだした。「あっははっはっは」大笑いした。
快活に笑った。悪戯を成功させて、うれしくてしょうがない子供のように笑った。
再会してから初めて、葉上の感情が表出したように思える。
喜びや、安堵のような感情が生じなかったわけではないが、最も強く生じた感情は、屈辱であった。

「ふざけるなっ！　こんなっ！　こんなものがっ！」
「でも便利だろ」
「馬鹿言え、剥くのに便利だとしても、輸送はどうするのか。へたを押されれば皮が剥ける蜜柑などと、輸送の衝撃で全て剥けてしまう。売り物にはならんぞ」
葉上は、またもや朗らか笑った。
「さすが会長だな。確かにそうだ。君の意見はやっぱり、現実的で面白い。でもさ……やっぱり、便利だろ」
「……人間に都合が良すぎる」
葉上は悪戯っぽい笑みを浮かべた。消えたかに見えた葉上の感情は、完全に戻っていた。あの違和感は、私の杞憂であったのか。久しぶりに人に会ったが為の、アイドリング期間であったのか。
今の葉上は、子供っぽい、無邪気な表情を浮かべている。
初めて葉上家を訊ねた時に会った両親の、人の良さそうな表情が重なった。
こんな奴が爆弾騒ぎなど、起こすはずがない。
私はそう思い始めていた。
「人間に都合がいい。それだよ、会長」
葉上は人差し指を立てる。
「『交渉』を重ねる内に、色々わかった」
そうして、葉上は語り始めた。
「今までの原則はこうだ。一つの種に対して持たせられる機能は一つだけ。それも、機能を開花させる植物にとって、自身の繁殖に有利でなければならない。でも、実は違った。一つの種に対してではなく、何世代かに渡って持たせられる機能は一つだけ。複数の世代を重ねれば、複数の機能を持たせられるんだ」
そして、もう一つ、と葉上は言う。
「その植物に持たせられる機能は、その機能を開花させる植物にとって、自身の繁殖に有利でなければならない。俺はこれを『制約』だと思っていた」

けれど、違った。
「これは、大いなる『可能性』だったんだ」
「可能性？」
「植物は、鳥や他の生き物たちに自分の種子を運ばせるために、果実を甘くしたんだ。もし、人間の役に立つことが、植物の繁殖にとって有利になるとしたら……？」
「植物は、人間の役に立つ機能を開花させる……とでも言うのか」
「その蜜柑のようにね」
それだけじゃないんだ、と葉上は語る。
「地下水からポンプのように水を汲み上げ、濾過してくれる子だっている」
葉上は徐ろに立ち上がる。
「最近は発電の因子を持つ子を作ることにも成功したんだ」
葉上は嬉しそうに、子供のように瞳をきらきらさせる。
「水と、肥沃な大地、そして太陽光さえあれば、大抵のことは実現できる」
葉上の口調に力が込められる。語り口からは、未来の栄光が感じられた。
「これこそ、君の求めた『技術特異点』だ」
葉上は語りを止めた。私は言葉が出なかった。
驚きが、体を支配していた。
この植物たちが世に出れば、私たちの生活は、激変する。
今までの価値観が、変わる。
技術が、社会に変革をもたらす。
私は、確信した。
そして、恐れた。
異界めいた部屋に、沈黙が流れた。
葉上が次に口を開いた時、
「どうだい、会長。これが、俺の楽園だ」
何故か、彼の口調から力が抜けていた。穏やかを通り越し、平淡

で、無機質で、まるで葉上自体が植物の一部であるかのような感じを受けた。

その瞳から、強い狂気を感じた。

体が震えた。

葉上は両腕を広げ、天井を見上げた。天井には、葉々が淡く光る植物が群生していた。

葉上はそのまま背後に倒れ込んだ。高層ビルの屋上から、背を向けて身を投げ出すようであった。当然それは錯覚であり、葉上は背後の椅子にもたれ掛かった。

「君のおかげだよ。君が、気づかせてくれて、そして、真由がここまで育ててくれた」

真由が、育ててくれた？　一体、どういう意味だ。

「葉上――」

「――会長、昔の話をしないか」

葉上は唐突に切り出した。

「俺たちは、前だけを向いて生きてきた。ここらで、過ぎてきた時間を振り返るのも悪くはないだろう」

そんなことをしている場合では無い。爆弾魔を捕まえなければならない。

そう、私の理性が告げる。

「葉上、残念だが私は――」

「初めて会った時の事を、覚えているか」葉上は上体を起こし、訊ねる。

葉上の視線は、遠くを見ている。

「同い年くらいの少年が、しかも、知らない奴が、俺を探していたんだ。当時は俺も畑に付きっきりで、学校にもろくに通えてなかったし、友達なんていなかった。だから、俺は戸惑った。なんで、俺を？　ってね。でも、蜜柑の木がさ、俺に語りかけるんだ。――この子は、悲しい。深く、暗く。ってね」

途端に、私は恥ずかしくなった。

「出鱈目だ。私はそのようなこと、思ってはいなかった」
　否定せずにはいられない。だが、葉上は微笑みかける。
「植物は正直だよ、会長。嘘をつく必要が無いからね。まあ、語りかけると言っても、感覚がダイレクトに伝わってくるから、言語化したのは俺の方なんだけど。あれは確かに、悲しいとか、寂しいとか、そういう感覚だった」
「やめろ！　この私がそのような、恥ずかしい考えを……」
「恥じることはないよ。だからこそ、俺は君に会ってみようと思ったんだ。……俺も、寂しかったからね」
「寂しいだと、お前が？」
「家族はいた。植物達が友達だった。でも、人間の友達はいなかった。だって、俺の力を打ち明けた人達は、みんな俺を気味悪がるんだ。だから、俺は一線を引くしかなかった」
「当然の反応だ。第一、私だって――」
「君は、見たままを受け入れてくれた。否定せずに、現実的な解釈を俺に語ってくれた」
「お前の才能を認めただけだ。あそこまでの力を見せつけられれば、認めざるを得ん」
「悪いけど会長、俺はあの畑で、君の感情が読めたんだ」
　突然の告白に、私は呆けた。弁明するように、葉上は語る。
「俺の両親は弱小農家だったから、小売りに良いように言いくるめられて、二束三文で買いたたかれた。元々人が良すぎたせいもあると思う。俺は、何とかしなくちゃと思った。でも、相談できる奴なんていなかった。だから、毎日、あの蜜柑の木達に愚痴を溢してた。そしたらある日、あの木々が教えてくれるようになったんだ。人の、感情を。俺は、知らずの内に植物と『交渉』し、『機能』を開花させてしまったんだろうな」
「まさか……」そのようなそぶりは、全くなかった。
「大丈夫。感情を読んだのは最初だけだ。俺は直ぐに止めたよ。君と接してみて、実に紳士的な人間だと思ったからね」

「何を……当たり前だ」
葉上は苦笑した。
「それに……君とは、友達でいたかった。もちろん、君が俺を友達だと思ってくれているかは、わからないけど」
葉上は、視線を下げた。私は、答えなかった。
葉上と私は、友達だったのだろうか。私の友人は、友人ただ一人だけだ。
友人は駄目で、友達はいいのか。そんなことを考えている内に、葉上は口を開いた。
「最初に戻ろうか、俺は君に会ってみることにした」
私はその時のことをありありと思い出す。そう、私は葉上と会い、そして、
「君は俺の作った蜜柑を褒めてくれた。うれしかった」
この男は純朴な奴だ。こちらまで恥ずかしくなる。
「それでも、私はお前の才能を容易には信じなかった」私は視線を逸らした。
「でも、あっさり信じてしまった。そのきっかけが」
真由だ。真由が、怒った。
葉上の口から彼女の言葉が出たことで、私は少し、気まずくなった。
なぜなら、真由はもう、いない。死んでしまったのだ。
葉上はこのことにショックを受け、失踪したと、私は考えている。
「大丈夫だ」
葉上は微笑んだ。自然に見えた。
「俺は、大丈夫だから。なあ、会長……真由のことを、話さないか？」
驚いた。まさか、葉上がこのような提案をしてくるとは。
死んだ人間のことを話すなど、辛いだけに決まっている。その証拠に、私は死んだ母親のことを、誰かと話そうなどとは思わない。
「君は、真由のことを覚えている数少ない友達なんだ」

その言葉に、気持ちが揺らいだ。
……葉上がそう望むのならば。私は、印象的な出来事を思い出す。
「彼女の言動には、時々驚かされた」
ある時、私は蜜柑の収穫を手伝った。慣れないこともあり、雑に取り扱っていると、突然真由が怒り出した。
「――会長さん、駄目ですよっ！　蜜柑はもっと大切に扱ってください」
私は驚いた。久しく、怒られるような経験をしていなかったから。
「……すまん」思わず、私は謝ってしまった。
二度と謝らないという誓いがいとも簡単に崩れてしまった。
その言葉を聞いて、真由はにこりと笑った。
今でも、あの笑顔を忘れることが出来ない。忘れられるはずがない。
私が謝ったのは、後にも先にも、彼女ただ一人だけだ。
そう考えると、彼女は私にとって、特別な存在だったのかも知れない。
そのことを話すと、葉上は喜んだ。
「俺は君の言動に驚いたよ。ほら、一番最初、俺の家に戻るなり」
私は思い当たり、頭を抱える。葉上は容赦なく話す。
「俺の両親に『息子さんを私にください』だ。俺は君の恋人か」葉上は苦笑した。
「あの時は私も焦っていた。その後、『息子さんを私に預けてください』と言い直したではないか」
「それでも驚いたよ。真由なんか驚きすぎて、泣いてしまった」
「だから、それは」私の頬が、燃えるように熱くなる。こんな事、あってはならない。
「君はそれを見て、直ぐに俺を連れて行くのを諦めてくれたね」
「あたりまえだ」家族は、一緒にいる方が良いに決まっている。
「そう考えない奴もいる」葉上の表情が、一瞬険しくなった。
それはおそらく、九龍のような奴らのことだろう。

「その代わり、君は毎週末、遠くから俺たちの家に足を運んでくれたね」

「当たり前だ。お前ほどの才能、放っておけるか」

「どんな理由でもかまわない。俺たち兄妹の世界は、あの蜜柑畑だけだった。だから、君の話してくれる言葉、全てが新鮮だった。俺たちが、君にどれだけ救われたか」

「私は何もしていない」私は白いカップにホットオレンジを注ぎ、啜る。すっかり冷め切っていたそれは、やはり甘酸っぱかった。

「いいや、君は優しかった。だから真由は直ぐに君に懐いてしまったし。俺は最初、真由が取られてしまうんじゃないかと、はらはらしたもんだ」

「あの時のお前は、本当に無様だったな」

私達は真由の話、私達の話を交互に語り合った。

私達が振り返ることなく過ごしてきた時間が、話すことで整理されてゆく。

不思議であった。死者の話をしながらも、ここまで落ち着いていられるとは。

そして、唐突に葉上は切り出した。

「……真由は、君のことが好きだった」

「ああ。知っていた。……彼女の抱いていた思いは、年上への憧れだ。それを、恋だと勘違いしているだけだった」

「それでも、真由にとっては恋だった。病弱だった真由にとって、君は初めて親しくなった異性だったから。俺も最初は嫉妬したけど、君と過ごす内に、君だったらいいと思った……でも……」

私達は、葉上の両親の命を奪った研究機関を滅ぼした。

だが、人の死に対しては、無力だった。

「葉上、真由のことは……気の毒だった」私は顔を上げ、葉上の表情を見た。

意外だった。沈んでいるかと思っていた葉上は、にこやかに微笑んでいた。

何かがおかしい。私の中の理性が、違和感を告げる。
「いいや。俺は、もう大丈夫だ」
葉上は真由の死から立ち直ったのか？　だが、それにしては葉上の様子は朗らか過ぎる。まるで、真由が死んだこと自体を忘れているかのような……。
「だって真由は――」
葉上の口の動きが止まった。葉上は私の背後に視線を飛ばした。
「……もう少し、話したかったな」葉上は、呟いた。
そして、立ち上がった。その視線の先には、
「……物部、くん？」
傍らには、神崎愛美、本郷光太郎もいる。
「会長さん、なんでここに！」渡は驚き声をあげた。
「君らこそ、なぜここにいる」
「僕らは、爆弾を追って――」
「いやあ、驚いたな」私の背後で、葉上が言った。
「葉上、お前――」
「流石は会長が組織したメンバーだ。自力で俺の森にたどり着けるとは」
「にゃーちゃんが教えてくれたんだよっ！」愛美が大声を出した。
「こいつの猫が、何も無いところをじっと見つめていた。だから、俺がこの拳で」
本郷は赤いプロテクターグローブを見せる。グローブには、オレンジ色の輝きがまとわりつくように揺らめいている。まるで、燃えているように見える。
「殴ってみた」
葉上は吹き出した。大声を上げ、高らかに笑った。
今までの落ち着き払った葉上は、何処かへ消えていた。
「面白い、面白いよ。普通は殴らない。そもそも、認識もしないはずだ。成る程、人間以外には機能しないのか。これは盲点だったよ。しかし驚いた。なぜ俺が気づかなかったのか。建物中に『目草』を

群生させているはずだったが……」

物部渡が、静かに口を開いた。

「……『道具』だった。この建物内に生えてる植物は、みんな植物でありながら、『道具化』していた。だから、僕は、声を聞くことができた。この植物達はみんな、あなたを止めたがっている」

葉上は、笑いを止めた。顔をゆがめ、憤怒の形相となった。

「止めたがっている？　そんなはずはない。植物は正直で、単純だ。俺は植物の声を聞くことが出来る。でたらめを言うのも大概にしろ！」

「でたらめなんかじゃない。なぜこんな事をするんです。あの子達が僕に訴えたのは、全て悲しみだった。それは道具の作り手が――あなたが悲しんでいるからだ！」

渡は、激しく怒っていた。それにつられるように、葉上も憤怒する。

「植物は悲しまない！　俺も悲しんでなどいないっ！」

「それはあなたが聞こうとしないからだ！」

二人の意見は完全に食い違っていた。お互いが同じものを見ながら、別の認識をしているかのように。

「そう……悲しみだ……僕は、この感じを何処かで知っている」

物部は、はっとして私を見た。

「そうだ、この感じ――」

「――もういいっ！」葉上が吠えた。

大声に、物部は竦んだ。

葉上の手には、なぜか赤い薔薇が一輪。

葉上は腕をしならせ、薔薇を投げる。

薔薇は私の横を通り過ぎて、物部渡達の方へ――。

――その時、私は、蕾のない、首なしの花畑を思い出した。頭上には、花火。

「物部くん逃げろ――」咄嗟に叫ぶが、遅かった。

薔薇は、物部渡たちの目前に到達するなり、

――爆発した。

衝撃と凄まじい爆風で、視界がふさがれてしまう。

私は咄嗟に腕で顔を覆う。背後を――葉上を振り向く。

葉上は、うっすらと微笑んでいた。

「俺が、爆弾魔だ」葉上の口が、そう動いた。

馬鹿な、葉上自身が爆弾魔だと？　あの爆発、物部渡達は――。

「僕には効かない」渡の声が響いた。

凄まじい爆発だったのにも関わらず、渡達は、無傷だった。

いつも肩に乗せている消しゴムが銀色に光り輝きながら、渡の目の前でくるくると回っている。

「全て、消してしまうから」鋭い視線が、葉上へと向けられた。

一体どういう仕組みなのか。これが、彼の才能なのか……。

「気に入らないな」葉上は吐き捨てるように言う。

天井からツタのようなものが次々と垂れ下がり、葉上の体に巻き付く。

次の瞬間、私の体にも、滑り込むように巻き付いていった。

「悪いけど、今、邪魔されるわけにはいかないんだ」

急激な加速を感じた。下腹部が圧迫されるような、嫌な感じが生じる。

物部達が私を呼ぶ声が、姿が、急速に小さくなってゆく。

植物が絡み合ってできていた天井が開けて行き、ぐんぐんと上階へ引き上げられる。

絡みつくツタをほどこうともがきながら、私は叫ぶ。

「葉上っ……これはっ……どういうことだ！」

「もうしばらくの辛抱だ」

最後の天井が開いた。赤い空が、眼前に広がった。

屋上に出ると、ツタは私の体から離れていった。

葉上は、私から少し離れた所に佇んでいる。背後には、燦然と輝くオレンジ色の太陽。

「葉上！　どういうことだ！　お前が、本当に爆弾魔なのかっ！」

私の言葉は、虚空に消えた。
「会長、さっきの続きを話そう」
「ふざけるなっ！　私の質問に答えろ！」
葉上はゆっくりと首を振った。私の言動に失望しているようだった。
「会長、なぜ真由は死ななければならなかった」
葉上は無表情で、まるで感情を無くしたかのようだ。その心意はわからない。
そうだ、直視の『Ｒｅ．眼』を使えれば、葉上の心意がポップアップとなってわかるかも知れない。
「答えろ、会長。なぜ、真由は死ななければならなかったのか」
見せろ。葉上の心意を。なぜ、葉上がこのような事をするのか。
起動しろ。真の力を見せて見ろ。『Ｒｅ．眼』よ、私の意識に答えろ。
「答えろ――かいちょおおおおおおおおおおおおおおおっ！」
聞き覚えのある、叫びだった。
そして『Ｒｅ．眼』は答えない。
葉上は、頭を抱える。手のひらが葉上の顔を覆っている。
「会長、この世は、理不尽だ」
何処かで、聞き覚えのある言葉だった。
私は思い出す。そうだ、確かにあの時、私は葉上に言った。
「そうだ会長、真由が死んで、俺が落ち込んでいる時、君がかけてくれた言葉だよ」

記憶は、看護師の声から始まる。
「病院内では走らないでください！」すれ違う看護師が私に注意した。
私は急いでいた。目的の病室へと辿り着き、勢いそのままに扉を開けた。
「葉上っ！」

葉上が背を向けて座っていた。
その向こう、ベットの上には真由が眠っている。
葉上は、真由の手を握っていた。
「葉上、容態は――」
「……人は、なぜ死ななければならない」沈んだ、重々しい声だった。
その言葉を聞いて、わかった。
真由は、もう目覚めないのだ。
全て、遅かったのだ。
「なぜ……なぜなんだ……？」
私は、答えることが出来なかった。
「俺の一番大事な人を、なぜ奪われなければならないっ――伊統会長っ！」
葉上の目は、血走っていた。全てのものを恨むような表情であった。
「答えろ――かいちょおおおおおおおおおおおおっ！」
そして、私は言った。
「葉上、この世は、理不尽だ」
葉上は急に椅子から立ち上がり、私の胸ぐらを掴んだ。
「ふざけるなよ……何が理不尽だ。俺が何をしたって言うんだ。なぜ俺は一人ぼっちにならなくちゃいけないんだ。そんなの納得できるかあああああっ！」
葉上は思いっきり私を突き飛ばし、私は背後の壁に激突した。衝撃で一瞬、息が出来なくなった。
「お前は真由が死んで悲しくないのか、涙の一つも流せないのかっ！　お前は、そこまでの人でなしだったのかっ！」葉上は息づかい荒く、次々と私を罵倒する。
葉上の心中は痛いほどわかる。
それでも――私は精一杯呼吸を整え、言った。
「だからこそ、立ち向かわねばならないっ！」

葉上の罵りが、止まった。
私は立ち上がり、葉上に近づく。
「葉上、この世界は理不尽に満ちあふれている」
一歩一歩、着実に。
「だからこそ、変革せねばならない」
「変革……？」
「そうだ」
私は、葉上の肩に手を置いた。この男ならば――
「葉上、共に、新たな社会を目指せ！　全ての理不尽を屈服させて見ろ！」
――私の同士と成れる。

その直後、葉上は私の前から姿を消した。
そして、今、ここにいる。
「思い出したようだな、会長」
私の、敵として。
「お前の言うとおりだよ、会長。この社会は、変革されなければならない！　……それなのに、それなのに！」
葉上は、拳をわなわなと振るわせる。
「俺はずっとお前を観ていた。だが何だ、近頃の体たらくは。娘を囲い、育てるだと？　食べ物で街興しだと？　学園祭、演劇、祭り、そんなものに何の意味があるっ！　お前にそんな余裕があるのか！　変えるんだろう、社会を！　お前はその為に生きているんじゃないのか！　その為に、真由に会うのを諦めたんじゃないのか！　お前は何をやっているんだ伊統会長！」
何を……だと？
お前に……数ヶ月間姿をくらましていたお前に……何がわかる。
今まで溜め込んできた感情が、爆発した。
「私の行動を否定するか！　私には私の考えがあって行動している。お前にどうこう言われる筋合いはないっ！」

葉上は、溜息をついた。
「なぜわからないんだ会長。俺たちのやるべき事は、そんな事じゃないだろう」
葉上は、子供を諭すようにゆっくりと話す。
「俺たちのやるべき事は、俺たちが経験し、そして知ったことを、他の奴らに知らしめることだよ」
「……それが、この馬鹿騒ぎの理由だというのか」
「『カクレヤナギ』の機能を開花させた時、俺は思った。人間の認識とは一体何だろうか。いや……人間とは、何だろうか」
「何？」
「俺は思う、人は所詮、見たい者しか見ないんじゃないか。見たくないものからは、目を背けるんだ。貧困、不幸、そして――死」
葉上は手で、眼を覆った。
「大切な人を失うのは辛い。俺は、身をもってそれを感じた。確かに見ない振りをしたくなる気持ちはわかる。でも、理不尽だよ。誰にも責任を転嫁することは出来ない。憤りを、ぶつける相手がいない。それがどれだけ辛いか、お前は、知っているはずだろう」
「お前何を――」
葉上は、真っ直ぐに私を見た。
「――著名なシンガーソングライターを母に持ち、ある新鋭政治家の隠し子として誕生したお前なら！　マスコミに生活をめちゃくちゃにされ、社会に母親を殺されたお前なら、俺の痛みがわかるはずだろう！」
一瞬、耳を疑った。
何故、知っているのか。
誰も、知らないはずなのに。
「……お前、どこまで知っている」
私は名字を変えた。本名も隠した。それなのに、なぜ葉上は知っているのか。
「その知識を、どこで仕入れた」

葉上は蔑むような視線を私に向けながら、口端を上げた。
「――答えろ葉上！」
「真由が、教えてくれたんだ」
この男は、いったい何を言っている？　葉上の言っていることが理解出来ない。なぜなら、真由は、
「真由は死んだ」
「そうだ。真由は死んだ。死んで『天国』へ行き、戻ってきた！」
『天国』という言葉に、激しい違和感を感じた。
「どういう、意味だ」狂っている、という言葉が咄嗟に浮かんだ。
「そのままの意味だよ。真由のおかげで、俺の『才能』は次の段階へと進むことが出来た。ああ、植物は良い。下らない欲求に惑わされて、道を踏み外すことなんて無い。あるのは、生きる事への真っ直ぐな意志だけだ。植物は純粋で、だからこそ美しい」
「自然論者の戯言か……そのような論調、聞き飽きた！」
「種の存続のためなら、人間との共生だって可能だ」
葉上の手のひらの上で、何かが蠢いていた。
「この子は、人間の血液と体温を吸収して、生きることができる」
葉上が顔を撫でるようにすると、葉上の顔が、ぼやけて見える。
葉上の顔を見る事は出来る。だが、ひとたび目を離すと、自分が見たはずの顔を、思い出すことが出来ない。
記憶の中では、葉上の顔がのっぺらぼうのように見えるのだ。
「面白いだろう。カクレヤナギの改良種だ」
葉上は、ポケットから何かを取りだし、顔にかけた。すると――、
「お前はっ！」
嘘だ……そんな、馬鹿な。
「会長」
顔のぼやけた黒縁眼鏡の男。
「お見舞いは、届けてくれたかい」
目の前にいるのは、花屋の店員だった。
爆発騒ぎが起きて、マナが倒れることになった、あの店の下にあ

る花屋の。
そして、葉上が放った言葉の意味を、私は直ぐに理解した。
私の背後にはマナの運ばれた病院。
目の前にいる男に貰ったブリザーブドフラワー、つまりは植物を、私はマナの病室へと……届けた。
体中から血の気が、体温が引いてゆくのを感じた。
「止めろ」そんなことを言っても無意味なのはわかっている。「止せ」だが、言わずにはいられない。「葉上！」
「その狼狽えよう。本当に……変わったな」
葉上は笑みを止め、無表情になった。
「あの子が変えたのか」
葉上は断言した。マナが、私を変えたと。
「そのようなこと、あるはずがないっ！」
「そう思っているのは、お前だけだ。なあ、あの冷徹な会長はどこへ行ったんだ。真由が死んだ時も涙一つ流さなかった会長はどこへ消えたんだ！　あの子が、全てを変えてしまった！　冷徹な会長を、奪った！　だから――！」
「だから、あの喫茶店で……マナを狙ったと、言うのか……本当に、お前がやったというのか……。お前が、マナを……傷つけたと言うのか」
数々の外道。藤堂とマナの泣き顔。死んだようなマナの青ざめた表情。
怒りが、こみ上げてくる。
「そうだ。俺は、あの子を殺すつもりだった。……でも、なぜかお前が駆けつけてしまった。俺はお前を引き留めたかったが、あの時は姿を変えていたし、ばれるわけにはいかなかった。だから、俺はこう考えることにした。――あれは、試験だった」
「何？」
「あれくらいでお前が死ぬなら、お前はそこまでの男と言うことだ。……でも、お前は見事に生き残った。合格だよ、会長」

「何が合格だ……何が試験だ……お前はっ――」
ふと気づく。葉上の背後、太陽が赤く染まろうとしている。
夕焼け空間に入ることが出来れば、例え爆発してもリセットされる。
冷静になれ。耐えろ。今は、何が一番重要なのかを考えろ。
「……お前も変わった……真由の死が、お前を変えたのか」
「そうだ。真由の死が、俺に考える時をくれた」
「その結論がこれか、お前は、自分がやっていることを、本当に理解しているのか」
時間を稼ぐには、奴に考えさせる必要がある。
「もちろんだ」
「お前は自分が一番不幸だと思っているのか、そんなことをしても、真由が死んだ事実は変わらんぞ」
葉上は、笑った。顔はぼやけているものの、確かにそう感じた。
「知っているかい？　天国は、本当にあったんだ」
この返しは何だ、まったく話が噛み合っていない。
早く、早く赤く染まれ。太陽の沈んでいく速度がもどかしい。
私は質問を重ねる。
「あの爆弾もお前が作ったのか」
「だとしたら、どうする？」
「どうやって作った」
「そんなこと、どうでも良い」
「どうでも良くない！　答えろ！」
「会長……時間稼ぎは見苦しいよ」
葉上は片腕を横へ伸ばす。その白い腕を、緑色のツタが数本、するすると伸びてゆく。
そして、スイッチのような形の果実をつけた。何という、悪趣味だろうか。
「凄いだろう。あえて、わかりやすい形にしてみたけど、どうかな」
あれを押せば、病室が爆発するとでも言うのか……ふざけるな。

「止めろ葉上っ！」
「何を止めるんだ。俺は、この手の中に果実を持っているに過ぎない。爆弾のスイッチのような形をしているのは偶然かも知れない」
「ふざけるな。お前がやろうとしていることは、取り返しの付かなくなる事だ。あの病室にはマナだけじゃない！　藤堂もいる！」
葉上は、しばらく沈黙した。そして、ゆっくりと呟いた。
「それが、どうした」無機質な、言葉だった。
感情が見えない。まるで本当に何とも思っていないような、今目の前にいる男は、本当に人間なのか？　ただの無機的な機械ではないのか。そんな錯覚すら覚える。
「葉上っ！」
「じゃあ土下座でもして懇願するか――父親のように」
聞いた瞬間、頭が沸騰した。私は『チェス』を取りだし、葉上へと向けた。
「なんだそれは」葉上は失望したのか、額に指先をつけた。
私は『チェス』を撃った。
弾丸は葉上の背後で爆発した。灼熱の火炎が葉上を襲う。
しかし、葉上の背中からツタが現われ、絡み合い、葉上を爆風から庇った。
「次は外さない」
「へえ、なかなか凄い武器を持っているじゃないか。でも、それがお前の限界だ。――今俺を殺さなかったのが、お前の後悔となる」
葉上はスイッチに手をかけ――
瞬間、葉上の背後に、制服姿のエルレインが出現した。
宙を舞い、その手には、黒い回転。
刃のような回転を、葉上目掛けて――振り下ろす。
火花が散った。
ツタが、黒い回転を防いでいた。回転はツタを数本切り裂き、次第に弱まる。
回転の源は、元は私の所持していた黒いペンであった。エルレイ

ンはペンを手の中にしまい、逃れようとするが、
「エルレインっ！」
エルレインはそのままツタに絡みつかれ、首を絞められてしまった。
「ああ、自動防御にしておいてよかった。また邪魔が入ったとは、まったく気づかなかった」
そうだ、振り返ってみれば、エルレインは私と共に行動しているはずだった。それなのに、私は途中からエルレインの存在自体を忘れていた。なぜだ？
「ああ、君か。会長の二番目の養子だ。君も不思議な存在だ。いたり、いなかったりする。君を観る度に、カクレヤナギと認識の話を思い出すよ」
「くっ、くそっ……自分を……完全に消してたはずなのに……なんで……」
そうか、エルレインは自分の存在を消して、隠れていたのか。だが、何故？
「きっと、君の放った殺意に反応したんだろう。この子は、そういう子だ」
ツタは、次々とエルレインに絡まってゆく。
「惜しかったね。そんなに会長を助けたいかい？　でも、残念だったね」
じわじわと、ツタがエルレインの体を浸食していく。
「葉上止めろっ！」
「口だけでなく、行動で示せ。だろう」
「――あああああっ！」エルレインが悲鳴を上げる。
「エルレインっ！」私の手には『チェス』があるが――。
「まったく、俺が何をしようとしているというんだ。俺はただ、果実を持っているだけだ。それなのに君の養子は俺を攻撃した。これは、正当防衛だよ。お前は、俺が撃てるのか？　今のところ無実潔白の市民が」

くくっ……と葉上は笑い声を上げる。
「撃てるわけ無いよな。さっき俺を殺さなかったのも同じ理由だ。お前には、罪のない人を殺すことは出来ない。お前の遵守する法が、お前を縛り付けているからだ」
葉上は、両腕を大きく広げた。
「会長、既存の法律では、俺を裁けないよ」
私は、葉上を撃つことが出来ない。ツタに浸食され苦しむエルレインを、見ていることしか出来ない。エルレインの口が、ゆっくりと動く。
「……足手まといには……ならない」
エルレインは手に持っていた黒いペンを回転させた。
「――はあああああああああああああっ！」
回転は強まり、嵐が巻き起こる。
黒い嵐がツタを切り裂き、エルレインは脱出した。
葉上の手の中にあったスイッチ型の果実は切り取られ、エルレインの手の中にあった。
「どうだ、これでマナは――」
「――ざぁんねん。君の努力は無駄になる」
私の背後で、轟音が響いた。熱と、地鳴りを感じた。
……嘘だ。そんな、馬鹿なことが。
エルレインの表情が、蒼白になり、大きく目を見開いて、私の背後を凝視している。
私は、後ろを振り返るのが怖かった。
「いやあああああああああああああああああああああああああっ！」
私の視界は一気に暗転し、エルレインの悲鳴が耳を裂いた。
私は、恐る恐る、背後を振り向いた。
間違いであって欲しい。そう願いながら。
病院の一角、病室の窓が粉々に吹き飛び、炎が上がっている。

ベージュ色のカーテンが、燃え盛りながら、落ちてゆく。爆発したのは……燃えているのは、
マナの、病室であった。
「まるで魔法だろ」
『魔法』という言葉に、私は振り返る。
葉上は、元の顔に戻っていた。
笑っている。しかしその眼は、狂気と憎悪に満ちている。
私は、
「あああああああああああああああああああああああああああああああああっ！」
『チェス』を撃った。撃った。撃った。

エェェェジッ！」

化け物は体を仰け反らせて、葉上の声で絶叫した。

葉上の目の前で、凄まじい爆発が起こった。

気がついた時には、私は葉上に向かって『チェス』の先端を向けていた。

知らぬ間に私は、次の『チェス』を放っていた。

一六連弾を撃ち尽くした。

私は叫んでいた。

撃たなければ、叫ばなければ、藤堂、そしてマナに起こったことを――認めてしまう。

私は悪夢をかき消すように叫んだ。

怒鳴ると言うよりは、泣き叫ぶという比喩の方が、妥当だろうと思った。

叫ぶほどに冷静さを欠いた時は、もっと頭が真っ白になり、なにも考えられなくなると思っていた。だが、荒々しい感情の奔流が私の体中を渦巻くにも関わらず、体の芯の表面だけは穏やかな水面のように一線が引かれており、穏やかな理性の内側で、私は理性を保ち、認めたくない現実に繰り返し苛まれなければならない。

いや、私は、自分の芯が静かで澄み切っていると、思い込まされていただけなのかも知れない。

あまりにも激しい感情の湍流に、全身の感覚器が麻痺し、嵐の真っ只中にいながらも、それを感じることができないのかも知れない。

精神と行動が、完全に乖離していた。

――キュィィンと、耳を切り裂くような音と、こめかみ辺りに生じる頭痛。

『リガン』の真の機能『Ｒｅ．眼』が、起動した。

『Ｒｅ．眼』が起動しているにもかかわらず、あの化け物の心意はポップアップされない。激しい憤りが私をたぎらせる。

「会長、君のやり方では、遅すぎるんだ」

嵐のような感情を必死で抑えこみ、私は訊ねる。

「お前の目的は……何だ……なぜ、このような事をっ……」
「戦争」
葉上は、静かに言った。
「ふざけるなっ！」
「ふざけてなどいないさ。俺はこれから世界中に『悪意』をばらまく。現状の価値観を破壊し、次の価値観を創り出す。今の社会にとっての『悪』を。この、俺のような力を！　次の特異点を！　これが俺の戦争だ。――会長、俺が止められるか！」
「――今すぐ止めてやらああっ！」『チェス』を取り出し撃った。
『チェス』の切っ先は化け物に当たり爆散した。
「無駄だよ会長、お前の今の力では、俺を殺すことは出来ない！」
化け物の体は無傷であった。戦車の装甲を貫く弾丸が、目の前の木乃伊にはびくともしないというのか。
「さあ、次の特異点をかけた――」
化け物は、隙間無くびっしりとツタの絡みついた腕を前方に伸ばす。
「――戦争を始めようかあああああっ！」
「――それはオレの台詞だあああああっ！」
私は『チェス』を放つ。当然のように化け物は無傷。
……殺したい。
目の前にいるこいつが憎い。だが、力が足りない。力が欲しい。
こいつを、殺せる力が。
今までに感じたことのない激しい怒りで、身を切り刻まれる。
逆に、葉上は悠然として語る。
「お前と俺の格の違いを教えてやろう」
私は、自分の目を疑った。
――化け物の足が、ゆっくりと地面を離れた。
「これが、俺の力だよ。会長」
化け物は、宙に浮いていた。
私は、言葉も出ない。ただ、唖然と見ているしかない。

「俺が捕まえられるか、会長」
そして、後方へと下がってゆく。屋上の端を飛び越した。
落日の向こうへと、化け物が遠ざかってゆく。
「待て！」私の叫びは霧散する。
『チェス』は効かない。『Ｒｅ．眼』も化け物の心意までは読み取れない。
そして、ただの人間が空を飛ぶことは出来ない。
二人の間にある、絶対的な差。
だが、このまま奴を逃してしまえば、多大な犠牲者が出ることだけはわかっている。奴の理念が、私にとっての悪の種子が、世界中にばらまかれてしまう。
「待て葉上っ！」
叫びは虚しく消え失せる。
化け物はぐんぐんと高度を上昇させ、小さくなってゆく。
取り返しがつかなくなる前に、何とかしなければならない。
どうすれば……っ。
《――にゃおーんっ！》夕焼けの時間を告げる鳴き真似が響いた。

第二十四話　天国戦争

「……ぐっ」軽い、頭痛と目眩を覚えた。
「あああっ……！」甲高い叫び声が聞こえた。エルレインであった。
エルレインは地面に這いつくばったまま、隙間ターミネーターの姿に『変身』している。だが、その顔は蒼白で、今にも倒れてしまいそうだ。
「会長……」エルレインは言う。「記憶が……流れ込んでくる……頭が……割れる……」
エルレインは苦しみに顔をゆがめながら、頭を抑えている。
「そんな……っ。そんなことが……もう少し……早くわかっていれば……誰かが死ぬことは……わかってたのに」
エルレインは戸惑いを浮かべていた。
「藤堂さんが……そんな……未来は、変わらないのか」
エルレインの瞳は赤く染まり、四方へめまぐるしく動いている。
「でも葉上大介は……レインラインの基盤技術を作り上げた会長の右腕のはずだ。それが……どうしてこんな……未来は、やっぱり変わっているのか……？」
エルレインは、ゆっくりと、苦しみに耐えるように立ち上がる。
「会長……ごめん。アタシ、知ってたのに。誰かが死ぬって、思い出してたのに」
「エルレイン……」
「だから……チャンスを待ってたのに……未来を変える、チャンスをっ……」
「まさかお前、だから存在を消して――」
「――でもっ、駄目だったっ！　あいつがまさか、あそこまでの『技術』を持っていたなんて」
「どういう意味だ？」
「あいつの『力』はこの時代には存在してはいけないんだ。あれは、

アタシ達の時代の『技術』なんだから」
エルレインは手のひらを開く。
「もしあれがアタシの知っている『技術』なら、今対抗できるのはこの武器しかない」
その上には、漆黒の十徳ナイフが乗っている。
「アタシがこの『黒いキョウキ』で、ぐっ……」エルレインは苦しみに顔をゆがめ、片膝を付く。「……もっとしっかりしなくちゃ……アタシがあの時、葉上大介を殺せていれば……アタシが……マナをっ……」
エルレインは震えながら、必死で立ち上がろうとしている。
「……あいつを……あいつを止めないと……」
「そんな体で何ができる」
「でもっ――」
「――オレがやる」
「会長っ……！　でも、あれは、アタシ達のせいで生じた化け物かも知れないんだ！」
「関係ない。ここは、オレの時代だ。さっさとそれを寄こせ」
激しい怒りがぐらぐらと煮立ち、渦巻いている。
エルレインと視線が合う。エルレインははっとして目を見開く。
「会長、アンタ……目が、金色に光って――」
「お前が寄こさないというのなら、オレ一人でも奴を追う！」
「どうやってあいつに追いつく。アンタは空を飛べるのか！」
「それでも私は止めねばならんのだ！」
私は『チェス』を取りだし、両手に持つ。『チェス』の爆風を推進力にすれば、弾丸の様に飛び出すことは出来る。これは、賭だ。だが、賭は必ず成功する。なぜなら――、
「――オレは伊統会長だ。未来で完全管理社会の王となる男だ！」
私は駆け出す。エルレインに向かって。
「そうだろ！　エルレインっ！」
エルレインは俯き、そして真っ直ぐに私を見た。

「……わかった」
ポップアップを通じて、エルレインの心意が伝わってくる。
《アタシは、会長に救われた》
私はエルレインに向かって――あの化け物に向かって――葉上に向かって駆ける。
屋上を真っ直ぐ疾走する。
《会長がいなかったら、今のアタシはいない》
加速、加速、加速が必要だ。
もっと早く、息を切らせて。
《だからアタシは、会長の力になりたい》
エルレインはもう一つの十徳ナイフを取りだし、刃を全開した。
「あいつを追う力はなくても、あいつの所までアンタを導くことなら出来るっ！」
エルレインは刃を回転させる。ギャリギャリと鋭い風切り音を立て、黒い風が生じる。
エルレインは折りたたんだもう一方の十徳ナイフを私に向かって投げる。
《受け取ってくれ、アタシの力を》《思いを》《黒い『狂気』を》
私は走りながらそれを受け取る。
《アタシは思い出した》《それは、黒い狂気だ》《夕焼け空間内で、唯一人を殺せる武器だ》《なぜなら、『形無きモノ』を殺せるから》
私とエルレインの距離は、急速に近づく。
《会長、死なないで》
「……いくぞアタシの必殺技！　――舞い上がれ嵐っ！」
私は屋上の端から飛んだ。
背中に強い力を感じる。激しい推進力が私の体を押し上げる。
私は回転しながら茜雲を切り裂き、突き抜け、天高く舞い上がった。
眼前には、オレンジ色の空が支配する絶景が広がっている。
眼下には、守るべき町がある。

そして、『悪意』を振りまこうとする、化け物が存在している。
悪は、排除せねばならない。
高度は稼いだ。あとは――。
私は『チェス』を取り出す。化け物を貫く力は無くとも、空中での推進力にはなるだろう！
私は背後に腕を伸ばし、『チェス』の切っ先を連射した。切っ先は『リガン』で遠隔制御され、放たれた直後に爆発した。爆発の衝撃が大きな推進力となる。急激にかかる加速が、私の体中に痛みを生じさせる。
だが、それがどうした。
奴を止められるのならば、安い代償だ。
「――追いついたぞはがみいいいいっ！」
私は瞬く間に化け物に迫り――十徳ナイフを展開し――抱きつきざま、化け物の背後を切りつけた。ツタが――切断された。生気を失って、枯れるように切れた。
ツタの切断面から、気体が激しく噴射する。
すると、化け物の高度が、がくっと下がってゆく。
成る程、こいつは気球と同じような原理で空に浮いているわけか。
「なっ……伊統会長……なぜだ……！」
「会いたかったぞはがみいいいいっ！」
「はっ、離せ！」
「離すものかああっ！　離したら死ぬだろうがああっ！」
「なら……死ねえっ！」
化け物は――木乃伊は、私の頭を掴み、背中から引きはがす。
もの凄い力で私を宙刷りにすると、そのまま首を締め付ける。息が出来なくなる。
私は化け物の顔面を数度切り裂いた。
「がああああっ！」咄嗟に木乃伊は――表情を顕わにした葉上は、顔面を押さえる。
葉上の瞳を認識した瞬間、黒いポップアップが生じた。そこには

こう書かれていた。
《俺は、悪だ》
私は葉上の手から解放され、そのまま――落下してゆく。
まずい、『チェス』の反動で推進力を……『チェス』の切っ先が、放たれない。
こんな時に弾切れだというのか、くそっ……私は急いで内ポケットをまさぐるが、落下の抵抗に邪魔され、うまくいかない。
頭から落下しながら、上方を見る。無数の薔薇の花が降ってくる。私の落下速度よりも速い。ミサイルのように、真っ直ぐ飛んでくる。私を追い越す瞬間、私はその花弁をはっきりと見知した。
オレンジ色の薔薇の花弁のように見えているのは、燃えさかる炎であった。この花々は燃える花弁の推進力を利用して落下速度を上げているのか。
私のすぐ下で突然、花々が爆発した。熱がじりじりと肌を焦がす。ちいっ……追い打ちというわけか。徹底している。だが葉上の思惑通りにはいかなかったようだな。爆風で、落下速度が弱まった。
しかし、だいぶ高度が落ちてしまっている。速く『チェス』を取り出さねばならない。
このままではいくら私といえど――死ぬ。
死を前にしても冷静でいることが肝心だ。先ずは体勢を変え――。
――何か、むぎゅっというような柔らかな感触が、私の顔面を覆った。
何かが私の背中に触れた。締め付けられるような力と、圧迫感を感じる。
柔らかな暖かさを感じる。トクントクントクン……と、何かの音を感じる。
不思議なことに、甘いような、良い匂いがする。これは……一体?
「あなた……馬鹿じゃないの?」聞き覚えのある、少女の声だった。
「その声……水鏡マリナか」
「驚いた? あたしが空を飛べるなんて思いもよらなかったでしょ」

と言うことは、私が今、顔を埋めている柔らかな感触は……私は頭にひっついているものから顔を引き離すため、それに手をかけ――。

「ちょ、ちょっと、どこに手をっ！　変なところさわらないでっ！」

成る程、これはマリナの胸部か。知らずに鷲掴んでしまった。

「不可抗力だ。オレは気にしない」それ以前に顔を埋めていることが問題だ。

「ばかっ！　気にするのはあたしよっ！」

私は頭をぺしぺし叩かれた。今は、甘んじて受け入れよう。

「……え、オレって？」マリナは素っ頓狂な声をあげるが、私は無視する。

「好きなだけ気にしてろ。それよりもなぜここにいる」

「な、何よっ！　あたしが居ちゃいけないって言うのっ！　せっかく助けてあげたのに、落とすわよっ！」

「そう言う意味ではない。今お前が言ったとおり、なぜオレを助ける」

「な、なぜって……その……あの人に……お願いされたから……その」

「そうか。よくわかった」エルレインに頼まれたか。

「うっ……むかつくっ！」

「状況を整理するが、オレ達は今、抱き合いながら空を飛んでいるわけだな」

「だっ、抱き合うって、仕方ないでしょっ！」

何故いちいち驚いたように叫ぶのか。それよりも、

「飛ぶと言うよりは、落下しているようだが？」

「ああっもうっ、あなたが変な事言うからっ！」

「オレは変な事など一言も言っていない。事実を言ったまでだ」

「黙れっ！　『加速』するわ。反動抑制装置はあたしに触れてても少ししか効かないから、ちょっと我慢しなさい！　お仕置きだと思えばちょうどいいでしょっ！」

「好まん。オレがお仕置きをする側であるべきだ」
「だまれえええええええっ！　とにかくあなたも振り落とされないようにしっかり捕まりなさい……ひゃっ、そんなところつかむなあっ！　肩とか背中とかっ、色々あるでしょばかっ！」
またもや、ぽかぽか叩かれた。今が非常時であることを、こいつは理解しているのか。
私はマリナの肩に手をかけ頭を引き上げる。背中に手を回し、ぎゅっと抱きしめた。
「あっ……。ちょ……ちょっと変な声出ちゃったじゃないばかっ！」
「知るか、捕まれと言ったのはお前だ」
「あああっもうっばかばかばかっ加速装置っ！」
ばしゅっ！　と、マリナの背中あたりから音がした。
次の瞬間、途轍もない慣性が体にかかる。当然ながら、マリナの体に自分の体が押しつけられる。だが、いかがわしさなどまったく感じる余裕は無く、急激な加速で全身に負荷がかかる。先程『チェス』を逆向きに打ち込んだ時とは比較にならない苦しさが襲う。
町の景色が、飛躍的に小さくなっていく。視界が、暗転していく。
「……っと……ちょっと……しっかりしなさいっ！」
気を、失っていたのか。
「……マリナ」
「ひぇあああっ……ちょっと、息っ！　耳元で囁かないでっ！」
見ると、耳が真っ赤になっている。いちいち面倒な奴だ。
「ど、どうよ？　これが暴走超特急フライパンビームの反動制御装置を逆手にとった飛行術よ！　あなたなんかには考えもつかないでしょ！」
突然喉に違和感を感じ、私は、咳き込んでしまった。
赤いしぶきが、落下していった。私の口から、吐き出されたものか。
「ちょ、ちょっと、大丈夫？」
「……強引だな。未来の技術にしては、野蛮な飛行方法だ」

「うっさいっ！」
これでいい。マリナの側からは、私が吐血したのは見えていない。万が一でも心配されれば、それが足かせになってしまう。
化け物を殺すチャンスを、逃すわけにはいかない。
視線を動かす。マリナが首に撒いていた白いマフラーが白鶴の羽根のように左右に広がっている。さらにマリナは両腕を開き、腕には何やら振り袖のようなものが付いている。あれらを翼にしてバランスを取っているというわけか。
「化け物は見えるか？」
「化け物？　ああ、あの変なぐるぐる巻きの奴ね。あれならあたし達の上空に――って、何あれっ！」
「どうした」
「花が、落ちてくる……うそ、でしょ、なんで、なんであれがこの時代にあるの！」
「知っているのか、あれは爆発するぞ、気をつけろ」
「知っているも何も、あれは、あたしたちの『技術』……。『爆花（ばか）花火』っ！　何であれが落ちてくるのよっ！」
「回避しろ」
「あたしに命令するなあっ！　言われなくてもやるわよっ！」
ばしゅっ！　という音が響き、急激に加速した。何か黒い棒のようなものが落下していく。あれは、フライパンに変形する棒か。花を回避する度に射出されている。
しかし、これはっ……急激な加速の繰り返しで、全身に激しい痛みが奔る。
胸から、熱い感覚が喉に上って来る。
「がはっ……ごほっ……ごぼっ……」
「ちょ、ちょっと、ホントに大丈夫なの！」
「気にするな。酔っただけだ」吐いたのは赤いものだがな。
「ううっ……きたない」
「……おかしい」

「へっ……な、何がっ！」
「爆発しないぞ」
『爆花花火』はロケットミサイルのように、真っ直ぐ地面に向かって落下してゆく。
葉上の狙いは……私達よりも下の――町か。
ちっ、ふざけた真似をっ！
「オレの体を支えてろ！」
「えっ、ちょ、ちょっと――ひゃっ！」
タイミングがうまくいかず、私の頭は、またもやマリナの胸部あたりまでずり落ちてしまった。マリナが私の体を抱きしめたことで、バランスが崩れ、回転しながら落下してゆく。
「ちょっと、どこに頭をっ！　な、何をしてるのっ！」
私はブレザーの胸ポケットに十徳ナイフをしまい、内ポケットを探り、ありったけの『チェス』を掴む。
アカネ嬢は、『リガン』の機能を使い、遥か遠くのリンゴを撃ち抜いた。
彼女に出来て――私に出来ないはずがない。
「離せ、手を繋いでいろ」
「えっ、待って――いやっ！」
マリナと体を離す。『リガン』を操作する。体にかかる感性が強くなるが、この際我慢するしか無い。回転しながら、全ての『爆花花火』を視線で捉え――ロックする。
マリナの左手と私の右手を、指を絡めるように繋ぎ、左手の指の間には『チェス』が四本。私はロックした全ての花々に向かって、
『チェス』を――放つ！
回転しながら放たれた切っ先は全ての花々に命中し、火炎の華を咲かせた。
熱が、私達の肌をじりじりと焦がす。
「な、何これ……すごい……」マリナは落下しながら呆けていた。
「『爆花花火』なのに『爆花花火』じゃない……威力が違い過ぎ」

私は絡めた手から彼女の体を引き寄せ、空中で舞踊を踊るように抱きしめる。改めて思うが、なんと華奢な体か。
「わっ……やっ！」
そして、いちいち変な声をあげる奴だ。それに、先程よりも鼓動が速い。
「何をしている、加速しろ！」
「えっ、ちょっと、ああもうっ気にいらないっ！　次から次へと命令しないでよっ！」
ばしゅっ！　と音を立て、棒を射出。一気に加速し上昇した。
抱き合って飛行しながら、マリナが口を開く。
「一度、どこかに下ろすから！」
「断わる」
「はあっ！？　あなた何を言って――」
「力を貸せ」
「なんであたしがっ！」
「今はお前しか頼める奴がいない」
「あなた……馬鹿ね。敵であるあなたの頼みなんか聞かない」
元はと言えば敵同士。そう易々と承諾するわけはないか。
「もう聞いてるのよ、あの人から。マナちゃんをっ……絶対に許さないっ！」
ばしゅっ！　という音がして、加速した。
「頼みなんか聞かなくても、あいつはあたしが倒すわっ！」
ぐんぐん高度を上げ、上昇してゆく。
「ちょっと、また爆花花火が来たわよっ！」
「――そのまま突き抜けろっ！」
「でもっ！」
「信じろ！」
「なっ……あなたが……？」
無意識のうちに口走っていた。私も、余裕がないのか。
「撤回だ。信じなくていい。今だけでいい、オレの指揮下に入れ！」

「馬鹿、絶対にお断わりよ。……さっきの方が、数倍ましよ」
「なに？」
「うー、その、信じてあげるわよ……今だけだからねっ！　ばかっ！」
「――感謝する」こうなれば、大盤振る舞いだ。
「う、うっさい。あなたがそんなこと口走っても、気持ち悪いだけよ……」
「反転」
ばしゅっ！　という射出音が響き、私とマリナの位置がくるりと入れ替わる。
「『リガン』ならばっ！」私は両手の指の間全てに、八本の『チェス』を挟む。
ロケットミサイルのように飛んでくる全ての『爆花花火』を、ロックする。
上昇しながら、全ての花々に『チェス』の切っ先を発射する。
爆発音が、轟いた。
「――わっ！」驚いたマリナが、私の体をぎゅっと抱きしめる。
複数の爆発をかいくぐり、そのまま上昇していく。
遥か上空、葉上を捉えた。
――なんだ、あれは？
葉上の頭上に黒い何かが蠢いている。
黒い羽虫がえさに群がっているような、そんな光景だ。
黒い物体は球状に固まっており、そこから幾本かの足のようなものが、四方八方へ広がっている。足は夕焼空を切り取った後のように黒く、あまりにも大きい。
その全体像は、まるで、巨大な蜘蛛のようだ。
蜘蛛は肥大化し、赤い空を黒く浸食してゆく。葉上を飲み込む。
「ちょっと、そろそろ慣性が切れるわっ！　反転するわよっ！」
反転し、上下が入れ替わる。加速する。
「頭上に黒いのが見えるだろう」

「黒いの？　何を言っているの？」
「見えないのか、化け物を飲み込んだ」
「何も見えないわ。あなた、やっぱりどこかおかしくなったんじゃないの？」
マリナには見えないのか。だとすると、あれは何だ？
マリナに見えないで、私にだけ見える。と言うことは、あれは『Ｒｅ．眼』が見せているのか？
「そのまま頭上へ突き進め！　出来る限り高速で！」
「待って、そんなことしたらあなた――」
「――かまわんっ！　今は必要だ！」
「……フルスピードで突っ込むわよっ！　どうなってもしらないからっ！」
「本望だ！」
「加速装置多重起動リミッター解除――モデルフェニックス！」
ガチャガチャという音を立てながら、マリナの背中に次々とフライパンが展開されていく。その姿、まるで不死鳥と言うより――孔雀のようだ。
「一気に振り切るわ！　せいぜい歯を食いしばりなさいっ！」
そして、凄まじい加速が私を襲った。風圧だけで、爆花花火が次々と爆発する。
「あなた、本当に大丈夫なのっ！」
私は顎に力を入れ、無理矢理口を動かす。
「は、ん、て……ん」
「はん、て……反転ね。無茶を言ってくれるわ」
内蔵が縒り切れるような反転であった。意識をかろうじて保ちながら、私は上方を見上げ、黒い蜘蛛の球状の胴体へと迫る。
《死にたい》
文字が、飛び込んできた。至近距離で見た黒い球体の正体は、文字の羅列の集まりであった。
《死にたい》《死にたい》《死にたくない》《死にたい》《死にた

い》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたくない》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたくない》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》

何だ、これは。目をそらしたくなるほど醜悪な文字の羅列が、目前に迫ってくる。

考える間もなく、私達はその中へと飛び込んだ。

「俺は、なんのために生まれたんだ」

暗闇の中、葉上の声が響く。

「この子達はそんなこと考えない。あるのは純粋な、生きる事への意志だけだ」

葉上、お前なのか、どこにいる！

「俺はこの子達に嘘をついて、誤った進化を促進させているのかも知れない」

私は叫ぶが、葉上は答えない。これは、一体何だ？

「俺は会長が言うような才能の保持者じゃない」

うっすらと、一人がけのソファに座る男の輪郭が見えてきた。視界が、開けてゆく。

これは……私が葉上と再会した時の、部屋なのか。それにしては、家具もほとんど無く、植物も群生していない。骨組みだけの、殺風景な部屋だ。

「俺は、ただの嘘つきだ」

あれは、葉上だ。一人座り、うなだれている。

「この子達を騙す、嘘つきだ」

葉上は自分を苛むように、呪詛のような言葉を繰り返している。

「俺は、悪だ」

――わたしの声が、聞こえますか？

突然の、声。しかも、聞き覚えのある声だった。

「……その声は」

葉上は、顔を上げる。目は血走り、泣き腫れている。
「――真由っ！」
真由だと？　確かに、言われてみれば、真由の声だが……あり得ない。
真由は、病気で死んだのだ。死んだ人間は、生き返らない。
――ああ、ようやく見つけた。葉上おにいちゃん。
葉上の目の前のテーブルに、植木鉢が出現した。そして鉢には、オレンジ色に光り輝く薔薇が、揺らいでいた。
薔薇は、消えたり、出現したりを繰り返す。
葉上はそれを見て、はらはらと涙を流す。薔薇に向かって、手を伸ばす。
「――真由！」
葉上の背後に黒い影のようなものが蠢いてゆく。そして――瞳が赤色に輝き始め、

次の瞬間、場所が変わっていた。
葉上は、公園にいた。
爆発が起こった。
「……すごい。植物に、こんな『可能性』があったなんて」
葉上は、驚きに目を見開いていた。
そして……それを見つめる視線――くっ、なんだ、眩しいっ。
視界が白んでゆく、そして――。
《全うしなければ、俺の役割を》

眼前に茜空が広がった。
「会長、どうしたの、しっかりしなさいっ！」マリナの声が、私を叱咤する。
これは……現実か？
「頭上を飛び越えたわ！　どうするの！」
そうか、私はあの黒い球体の中に入り……あれが、葉上の心意な

のか。
だとしたら……今のは……あいつの妄想……。
「あいつは、大馬鹿者だ」
やり場のない怒りと、悔しさが広がる。
どうして、どうしてこんなことになってしまったのか。
どうして、私があいつを引き留められなかったのか。
「会長？」
同じ経験をしながら、同じ思いを抱きながら、どうして、お前はっ。
「馬鹿が……っ。――ごふっ……がほっ……がはあっ……」
私は激しく咽せた。血を、大量に嘔吐した。
お前は……何故壊れた。
「会長、ねえ、大丈夫なの？　どうしたの？　ねえっ！」
「……マリナ」
息が、苦しい。肺が、燃えるように痛い。胃が切り刻まれているようだ。
痛みから逃れようと、マリナを強く抱きしめてしまう。
「か、会長……ちょっと……痛い……」
彼女の体温と鼓動を聞いていると、少しだけ安らかな気分になる気がしたのだ。
……どうかしている。
ずっとこうしているわけにはいかない。怒りが、私を突き動かす。
「オレを離せ」
私はマリナの体から離れようとする。
強い力で、マリナが拒んだ。
「何言ってるのよ！　出来るわけ無いでしょ！　このまま離したら、あなたは――」
「――オレを殺せたら本望だろうが」
「――バカ言わないでよっ！　誰がっ……！」
マリナは、口をつぐんだ。

「……マリナ」
「殺さなくちゃいけないっ！　でもっ、殺さなくちゃいけないけどっ！　あたしはっ！」
「すまない」
「えっ、どういう――」
マリナの赤く染まった耳を甘噛んだ。
「ふぁあっ！」
白い首筋に接吻した。そのまま滑らせる。
「――いやああっ！」
マリナは叫び声を上げながら、私を突き放した。
「あっ……」
「それでいい。清浄な乙女の反応だ。気にするな」
マリナと、視線が合った。私の顔を見た瞬間、その表情が、強張った。
ポップアップが生じた。
《怖い》《嘘、なんで？》《ずっと、そんな顔で戦っていたの？》《嫌、駄目。怖れちゃだめっ！》《怖い》《寂しい》《恐ろしい》《あたしは、知っている》《怒り》《悲しい》《憎しみ》《この表情を》《狂気》《溺れる》《駄目っ！》《戻れない》《恐怖》《拒絶したら……》《畏怖》《冷たい》《取り返しが付かなくなる》《怖い》《悪》《死》《この人は――》
そうか……私は、そんな顔をしているか。
「会長っ！」
《死んだらだめっ！》
慌ててマリナが伸ばした手は、私には届かなかった。
……馬鹿め。お前は、私を殺したいのではないのか。
十分な距離を取って、私は『チェス』を爆発させた。加速する。
落下していく。頭から落ちてゆく。
心は穏やかだ。憎しみに染まりきっている。
私の両手には計八本の『チェス』がある。

だが、もう必要ない。私は一斉に手放す。
眼前には、黒く蠢く蜘蛛。
私がこれから必要なのは――。
アカネ嬢の言葉が、蘇る。
――へえ、この黒い『狂気』、形無いものでも殺せるかもね。
エルレインのポップアップが、フラッシュバックする。
《なぜなら、『形無きモノ』を殺せるから》
――この武器なら、殺せる。例え『形のない蜘蛛』でも。
黒い十徳ナイフを、この手に掴んだ。刃を展開する。
黒く蠢くモノへと、一直線に落下してゆく。落下しながら、私は十徳ナイフの黒い切っ先を振り下ろした。
黒い断片が切り取られた。断片は、ポップアップへと変わる。
《俺は、この怒りをどこにぶつければいい》
知るか。続けざまに切りつける。
《誰も責めることが出来ない》
切り裂く。薙ぎ払う。
《ただ、耐えることしかできない》《理不尽だ》
どこだ、化け物。私は刻む。切りつける。
《だれか助けてくれ》《誰も助けることはできない》
黒く蠢くモノは私の体にまとわりつこうとしてくる。触れられた瞬間、私の声が聞こえた。
「私は、この国の王になる男だ」
葉上の声が答える。
「王？　総理大臣ってことか？　ちょっとテレビで見たことあるけど、あんなのになりたいって？　うそだろ。だって、悪口ばっかり言われてたぜ。無表情で、顔色も悪かったし、国全体からいじめを受けてるみたいだった。あれじゃあ、生け贄と一緒だろ」
「ふん、無能なだけだ。耐えるのも王の義務だ。私なら民衆を押さえつけ、完全なる管理下に置いて見せる」
「えらい自身だな……でも、怖くないのか？」

「怖くないさ」
これは、葉上の、記憶なのか？
「嘘だ」
「嘘ではない。私は、約束をしたのだ」
「約束？」
「悪いが、これ以上は言えん」
「何だよそれ」
「言えば、消えてしまうからな」
くっ……。私は絡みついた黒いモノを切り捨てた。
《会長はああ言っていたが、俺には信じられなかった。会長が王になれば、それに反発する奴が必ず出てくる。俺は、その時、友達として何をしてやれる？》
『リガン』よ、お前は私に何を見せているのだ。
《ある時から、真由の声が聞こえなくなった》
こんなもの、邪魔でしかない。
《でも、俺の事をじっと見るんだ。口を動かして、何かを伝えようとしているんだ》
葉上は、藤堂とマナを……殺した。
《なんで、そんな悲しそうな表情をするんだ》
そんな奴のことを、何故知らなければならない。
《ほら、真由、見てくれ。また新しい機能が開花したぞ。なあ、笑ってくれよ》
お前が創り出した植物のせいで、
《どうして、笑ってくれない》
どれだけの人間が不幸になると思っている。
《俺が、悪だからか》
そうだ、お前は悪だ。
《それでいいじゃないか》赤い文字が、出現した。
眼下に、ツタの化け物が見えた。葉上を捉えた。
その姿が大きくなってゆく。距離が近づいてゆく。

葉上と、視線が合った。
《悪が、必要だ》黒い背景に、赤い文字。
「――はがみいいいいいいいいっ！」私は黒い刃を構える。
「――邪魔をするなかいちょおおおっ！」葉上はその腕から爆花花火を射出する。
《誰でも恨むことが出来る。負の指針が必要だ》
黒い背景に赤字。それは、野次馬で見た、特殊なポップアップ。
私は爆花花火の花梗を次々と切り裂く。花は枯れるように萎んで崩れた。
葉上にぶつかる。そのまま落下してゆく。もみ合いになりながら、私はツタを切り刻んでゆく。気体が、至る所から漏れてゆく。
「自分を悪者にして、私を引き立てる計画、そんな三文小説のようなシナリオ、私は好まんっ！」
一瞬、死人のようだった葉上の瞳が、揺らいだ。
「何の事だ……妄想は大概にしろ」
「どちらが！　そんな自分勝手な妄想で！　貴様は！」
私は葉上の体に絡みついたツタを切り刻む。
黒い固まりから抜け出す。赤い光が私達を包む。新たに、ポップアップが出現する。
《夕焼けが来れば、会える》
夕焼け……だと。
《俺は、それだけで充分だ》
誰に、会えるというのだ。
《俺が悪になる。そうすれば、人々の憎しみは俺に集まる》
《『人には役割がある』会長、お前はそう言った》
「ばかものがっ！」目頭が、熱くなる。
《これが、俺の『役割』だ》
「は、なせ……かい、ちょう……」
《このままでは、二人とも死んでしまう》
「黙れっ！」

《会長、お前は生きなければならない》
《理不尽を消してくれ》
《俺は壊れてしまった》
《お前は、俺を糧にして》
葉上が、私の喉を掴んだ。
《正義の大輪を咲かせてくれ》
――ふざけるな。
《真由、俺は『天国』には行けないだろう》天国という文字だけが、赤かった。
ふざけるな。そのような妄想――。
「――天国など無いっ！」
むきになったように、葉上は吠える。
「『天国』はあるっ！」
瞳が、赤く染まった。
「真由は戻ってきてくれた爆発で死んだ人間もそこへゆく死んだ意味が出来る誰もが幸せになれる――俺以外はっ！」葉上は狂ったように捲し立てた。
《真由は帰ってきた。死んだ人間も、天国へ行ける》黒い背景に、赤文字。
「それが、お前の妄想の根源かっ！」
バラバラだった要素が、私の脳内で連結する。
それならば、
気づいた時には、私の手のひらには『カプセル』が合った。
ナノマシンが入ったカプセルだ。このナノマシンを取り込めば、夕焼けの記憶は保持される。私は殴るようにして葉上の口腔内に突っ込む。
「お前に、これから『死』を体験させてやる」
「ごほっ……よせ、何を考えているんだ」
私は、葉上の喉を掴む。そのまま、落下していく。
「さあ、『天国』は在るのか、無いのか！」

はっきりさせてやる。今は夕焼け空間の中だ。死んだとしても、夕日が沈めば元通りになる。ただし、マリナとエルレインの黒い『狂気』この二つが私達に作用していないとは言い切れないがな！

「『天国』が在ろうが無かろうが、お前に一つだけ絶対的な現実を教えてやる」

私は葉上の胸ぐらを掴み、顔を近づける。

「死んだ人間が現世に留まるとすれば、それは残された者の記憶の中だけだ」

だからこそ私は、こうして生きてきた。

私はその眼をじっと見て、言い放つ。

「死んだ人間の価値は、残された者の行動によって決まる！」

母の死が無駄死にではないことを、私が証明せねばならなかった。

そして、決定的な事実を、突きつける。

「お前が死ねば、真由も消える」

葉上の表情が、恐怖に染まった。

「どうしたその顔は、まるで――『死ぬのが怖い』ようだぞ！」

葉上の体内から、文字の羅列が再び現われる。

《死にたい》《死にたい》《死にたくない》《死にたい》《死にたい》《死にたい》「――怖くなどない！」《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたい》《死にたくない》《死にたい》《死にたい》

黒いそれは、まるで葉上から逃げ出すように、四散してゆく。

《死にたくない》《死にたい》《死にたい》《死にたくない》《死にたくない》《死にたい》《死にたい》「怖くなどない」《死にたくない》《死にたくない》《死にたくない》《死にたい》《死にたくない》《死にたくない》《死にたい》《死にたくない》《死にたくない》《死にたくない》

『死にたい』と『死にたくない』の比率が、変化してゆく。

《死にたくない》《死にたい》《死にたくない》《死にたくない》

《死にたくない》《死にたい》「怖くなど……」《死にたくない》《死にたくない》《死にたくない》

「変革……？」
「そうだ」
私が、葉上の肩に手を置いた。
これは……あの時の……葉上の視点だ。
「葉上、共に、新たな社会を目指せ！　全ての理不尽を屈服させて見ろ！」
私の鋭い目が、葉上を捉えていた。

映像が消え、目の前に現われた葉上の瞳が、真っ直ぐに私を見た。
葉上の瞳は、血のように赤く輝いていた。
その瞳を通して、ポップアップが表示される。
《そうだ。理不尽に立ち向かうには、それしか方法はない》
《理不尽に立ち向かうためには、社会を変革するしかないんだ》
《だから俺は――》

再び、映像が出現した。
葉上は俯いて座っている。植物城塞の、あのソファーの中心だ。
葉上は、顔を上げた。強い覚悟が、その眼には宿っていた。
《真由、俺は、『あの人』を殺すよ》

映像は消えた。
そんな、馬鹿な。葉上を変えた原因は、この、私か……？
私の理念が、間違って伝わったというのか。
私の言葉が、変容して伝わったとでもいうのか。
そんなことが、そのような悲劇が……。
ぐしゃりという音と、何かが潰れる感触が手に生じ、私自身も地面に吸い込まれた。
痛みを感じる間もなく、私の意識は――

第二十五話　死の、そのさき

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》何も感じない暗闇の中で、下手な猫の鳴き真似だけが、聞こえた気がした。

「……ちょうっ……」

甲高い、声が聞こえる。

……生きている？　いや、死んでいるのか？

「……かいちょうっ！　かいちょうっ！　おねがい目を覚ましてっ！」

眼を開ける。

……エルレインだ。今にも泣き出しそうな悲痛な表情で、私を見ている。赤い眼鏡をかけているということは、変身が解けた証拠だ。

エルレインの表情が、ぱあっと明るくなった。

「会長っ！」

「……ここは、どこだ」私は上半身を起こす。エルレインが、手を貸してくれる。

辺りを見回す。空は夕闇に染まっている。

薄暗い視界では、ここがどこであるのか、判別が付かない……かと思われたが、あるものが視界に入り、すぐにわかった。

植物城塞が、目の前にそびえ立っている。

「ここは……何故、私はここにいる？」

私は遥か遠くの上空で戦い、そして、落ちたはずであった。

何故、こんな近くに倒れていたのか。

そう言うと、エルレインは怒ったように眉をつり上げた。

「知らないよっ。マリナが帰ってきて……顔が蒼白で……アタシを見るなり泣き出しちゃって、落ち着かせるのに必死で、アンタがどうなったか心配で、聞き出さなきゃ行けないのに、にゃんにゃん鳴り出しちゃって、慌ててマコトに引き渡して……もう、大変だった

んだから！」

だんだんエルレインの表情が、心細そうになってゆく。

「それでにゃおーんってなっちゃって……アタシ一人取り残されて……とにかくアンタを探さなきゃって……外に飛び出して、そしたらアンタ達が倒れてて」

見ると、葉上が倒れていた。ロープか何かでぐるぐる巻きにされている。それを見た瞬間、私の中に、暗い感情が呼び起こされた。

私は、この男を、殺してしまったのか。

「……眠ってる、だけだと思うよ」私の視線に気づいたエルレインが言った。

それでも、事実は変わらない。私は――。

「でもっ……さっきまではホントに心配したんだからなっ。何度も何度も呼びかけたのに、目を覚まさなくて……」

エルレインの瞳から、ぽろぽろと涙がこぼれ落ちる。

「よかったよぅ……よかったよぅ……うぇ～～～～～ん！」

手を猫のように丸め、手の甲で何度も涙を拭うが、涙は止めどなくこぼれ落ちる。

私は、ぎこちなく、彼女の頬に触れた。それがきっかけで、エルレインは私の胸に抱きつき、子供のように、わんわん泣き叫んだ。

ついこないだまでは、敵であったのに。私を殺そうとしていたのに。私のために、涙を流してくれるのか、この少女は。

暖かい感覚が、私の胸の内辺りに生じた。

「……取り込み中の所、悪いんだが」

驚いたエルレインが、びくりと体を痙攣させた。

声の方を向くと、本郷光太郎だった。

「あ、あの時の黒猫」本郷はエルレインを指して言った。

「本郷くんっ！　駄目だよ！　今はそっとしておいた方が！」

叫ぶように言ったのは、物部渡だった。

「ごーちゃんはわかってないなぁ」愛美もいた。何やら本郷の方を見て、呆れている。

エルレインは私を突き飛ばして離れ、立ち上がり、つかつかと距離を取り、皆に背中を向けてしゃくり上げている。
その仕草から何となく、彼女の頬が赤く染まっている気がした。
まあ、人前で号泣している所を見られれば、当然か。
「うるせえな。そういうのは全て解決してからにしておけ。会長、爆弾魔はあの人……葉上先輩だったのか？」
「ああ、そうだ」
そして、そうなってしまった原因を作ったのは、私だ。
葉上を捕まえたことで、全ては終わった。
「もう、爆発騒ぎは起こらないだろう」
だが、何だろうか、このむなしさは。
目の前に、暗幕がかかったかのようだ。
「どうして先輩が……って、おい大丈夫か？」
「……ああ」疲れ切っていた。体も、精神も。
「ほら、本郷くん、会長さん疲れてるから後にしよ。会長さん。今、救急車を呼んでますから」渡が私に微笑みかける。
「救急車……」その単語から、病院が連想される。
病院……爆発……マナ、藤堂……。
拳に、力が入った。
……そうか。目覚めてから今まで、全ては夢の中で起こった事のように錯覚していたが……あの子は……もう……。
唐突に、思った。
なぜ、私が生きている。なぜ二人は死に、私が生きているのだ。
私が死ぬべきだった。葉上に殺されるべきは、私だった。
こんな、理不尽……くっ……これでは、葉上と同じではないかっ。
「あの、会長さん、本当に大丈夫――」
「……余計なお世話だ」
「えっ……？」
救急車だと？　私一人が、のうのうと助かり、生き恥をさらすのか？

「オレは何ともない」立ち上がる。視界が暗む。目眩がする。
「――会長さんっ！」物部渡が私を支えようとする。
「――さわるなっ！」苛立っている。むかむかする。
「会長！」本郷が渡を庇うように前に出る。
「本郷くん！　いいんだ！　会長さんは――」
「いいわけあるかっ！　こいつは八つ当たりしているだけだ！　会長も怒鳴るな。そりゃあ気持ちはわかるが、今は――」
その通りだ。最低だ。私は、八つ当たりをしている。
「わかっている……」だが、この憤りは、消すことが出来ない。
「いかちゃん……怖いよ」愛美は私の顔を見て、怯えた。
「会長……」私の声に驚き、戻ってきたエルレインは俯く。
やはり、葉上は間違っていた。
私は葉上が憎かった。私は葉上を夕焼け空間内で殺した。
それでも、気持ちは晴れない。今、葉上をもう一度殺しても、同じ事だ。
奴を殺しても、マナは……藤堂は……私の大切なものは、二度と戻っては来ない。
突如としてやって来た理不尽に対する怒りは、例えぶつける対象が在ろうとも、納まることは無いのだ。そのことを私は今、身をもって体験している。
こんなっ……こんな結末が……。
――ブロロロロロロロロッ！　激しいエンジン音が、辺りに響き渡った。
妙な形のトラックが、私達を横切る。その看板らしき場所には、こう書かれていた。
『ヨウ・ジョーの空色クレープどーなっつ』
そのふざけた文字を見た瞬間、マナの言っていた言葉を、思い出す。
――クレープどーなっつを食べれた人はどんな願いでも叶うんですっ！

『どんな願いでも叶う』……。

「嘘に……決まっている」

私は、駆けだしていた。

背後で私を呼ぶ声が聞こえる。私は振り返らずに、走り続ける。

全てを置き去りにして、私は不格好な移動クレープ屋を追う。

移動クレープ屋は私を嘲け笑うかのように、つかず離れず一定の距離を保つ。

エンジンを吹かせれば、もっと早く走れるはずなのに。

無様だった。迷信を信じない伊統会長が、不確かな噂に縋り、必死に駆けている。

どれだけの間、こうして走り続けたのかは覚えていない。

辺りが暗闇に包まれてからは、地理も、時間も、わからなくなった。

ただ、目の前に光る赤いテールランプを追っていた。

肺が限界に達し、地面に倒れ込むと、トラックも止まる。まるで、私の様子を覗うように、じっとしている。私を試しているようでもあるし、やはり、挑発しているようでもある。

立ち上がり、再び駆け出す。意識はとうの昔から、朦朧としている。

走る。追う。時々、思い出す。

金糸のような髪が、小さな手が、七色の瞳が、かいちょーさん、と私を呼ぶ声が。

短い黒髪が、人の良い素直な笑顔が、いーくん、と私を呼ぶ声が。

意識の片隅にちらつく。

そのたびに無理に速度を上げ、肺が痛み出し、減速する。

苦行だ。地獄のようだ。光はない。あるのは、暗闇だけだ。

突如として、視界が白く染まった。強い光で、目が眩んだのだとわかった。手で目を覆う。指の隙間から覗く。

太陽が、昇り始めていた。その光に、自分が途方もない時間、走

り続けていることを知らされた。
「――ごっ！」いきなり、何かにぶつかった。
それは、トラックの後部だった。止まった……のか。
トラックの車体を這うように、手で掴みながら側面へと移動する。また発車されてはたまらない。
そして、奴と対面した。
トラックの側面は、対面式の店となっていた。その奥に、奇妙な格好の人物が。
全身青ずくめ。青色のコートに身を包み、青い手袋をはめている。青い不思議な形の帽子――テンガロンハットのようなつばの大きな帽子を被り、顔はこれまた不思議なマスクで隠されている。まるで、『陰陽のマーク』であった。
マナの証言通りの奇抜な風体に、私はしばし、固まった。
これが……ヨウ・ジョー？
すると、ヨウ・ジョーらしき人物は、学園祭でマナが手に入れたピザの箱らしき物を、私へ突き出した。
操られるように、それを受け取る。瞬間、
――ぷーくすくす。
機械のような声で、何処かで聞いたことのあるような嘲笑をかけられた。
唖然としていると、トラックは凄まじい勢いで発車し、瞬く間に小さくなり、見えなくなった。
あれは確実に、信号を無視している。
一人取り残された。ずっしりとした重みの箱を抱えながら、私はどこかもわからない場所に突っ立っている。
――ぷーくすくす。ぷーくすくす……特徴的な嘲笑が、頭の中をリフレインする。
むなしさと、屈辱的な思いだけが、残った。
こんなものを手に入れても、なにも変わらない。
マナは、藤堂は、生き返らない。

そして、彼女たちの命を奪った根本的な原因は……私だ。
私の語った理念が、間違った形で葉上に影響を与えてしまった。
爆弾魔は誰か、と問われれば、それは、私だ。
箱を開ける。バニラの様な、あまい匂いが香る。
確かに……クレープどーなっつだ。マナが手に入れたのと、同じものだ。
だからどうした。衝動が、体を動かす。
ドーナツ状になったクレープの一部を素手で掴み——喰った。
甘い味が、口の中に広がった。
少し、しょっぱかった。

タクシーを使い、病院に着いた。
マナの病室へ向かう。足取りが、重い。
見れば、現実になってしまうから。
見なければ、ずっと二人は……駄目だ。これが私の考えだというのか。
だとしたら、落ちたものだ。
焦げたような臭いが鼻をつく。悪夢のような想像が、事実であることを囁く。意識が、ぼうっとする。立ち入り禁止の文字を見た気がする。歩く。
心臓の鼓動が早鐘のようになり、胃が、きりきりと痛む。頬が、顔が、頭が、熱い。
私は立ち止まった。酷い有様だった。あらゆるものが、めちゃくちゃに破壊されている。黒く、炭化している。剥き出しになっている。それだけわかれば充分だった。
「今まで一体、どこにいたわけ？」
振り返ると、霧島書記長が、今まで見たこともないような神妙な面持ちで、批難するような視線を私に向けていた。
私は、返す言葉もなく視線を下に向けた。
彼女の射貫くような視線に、耐えきれなかった。

「……まったく、みんな心配してたわよ」
私が答えないでいると、霧島書記長は溜息をついた。
「今度のことは、本当に残念だったわ」
残念か……そんな言葉では、この気持ちは表わしきれない。
「……泣きたかったら、今だけは泣いてもいいと思う。私は向こうに行ってるから。誰にも、言ったりしないから」書記長の口調は、穏やかだった。
いつもは互いにいがみ合っている霧島書記長が……私に優しい言葉をかけるなどと……私は、そんなに酷い有様になっているのか……。
「あれ、いーくん？　なにやってんの？」
何をやっているだと？　こんな時に……私がどれだけ――。
「……いーくん？」
私をそう呼ぶのは、一人しか居ない。
藤堂が、きょとんとして立っている。
「どうしたの？　呆けたような顔して」
「お前……なんで……」
「えっ、私？　私は、えっと、迷っちゃって」
藤堂は、あはは……と、恥ずかしそうに笑った。
「なんで……生きて……」
「えっ？　どういうこと？」
藤堂は、またもやきょとんとした。
どういうことだ。こちらが聞きたい。
頭が混乱している。わけがわからない。
なんだ、私はついに、死人の幻想を――。
「……ちっ」霧島書記長が、舌打ちした。
その瞬間、私は理解した。
「――どういうことだ霧島書記長っ！」
「もう少しで、あなたが泣く顔を見れたのに」
「貴様……私を嵌めたな」

「世の中には、良い嘘と悪い嘘があるわ。こっちは、人生のスパイスになる良い嘘ね」
霧島書記長は悪びれた様子もなく、しれっと言い切った。
「勝手に決めるなっ！　最低だっ！」
藤堂がスライドするように、私と霧島の間に立ちはだかった。
「い、いーくん……京香も悪気があったわけじゃ――」
「――悪気大ありだ！　悪気の固まりだ！　悪気しかないっ！　お前は人が良すぎるのだ！　少しはっ――」
「――ひやっ……！」藤堂は、頭を抱えた。
「……お前、本当に、生きているのか」
すると、藤堂は頬を膨らし、ぷんすか怒る。
「あっ、当たり前でしょ。生きてるよ！　ぴんぴんしてるよっ！　ひっどいなー。いーくん私のこと何だと思って――ひっ」
私は、藤堂の頬に触れた。やわらかい、暖かい。他にも色々と触れてみた。
「ど、どこさわってるのっ！」
私は思いっきり突き飛ばされ、吹っ飛んだ。
「あっ、いーくんっ！　ごめんなさいっ！」
痛すぎて、片目から涙がこぼれた。痛かったからだ。もの凄く痛かったからだ。決して……決して……いや、止めておこう。
「この力、確かに、藤堂だ」
「ううっ……なんでこんな力が出ちゃうんだろ……」
「悲劇ね」
「霧島……お前が原因だろうが……」
霧島書記長は、不機嫌そうに私を睨んだ。そして、目をそらした。
「……身のこなしはともかく、こんな馬鹿力が出るはずないのだけれど」
「京香が馬鹿力っていったぁ……」
「春香、嘘よ」
「そっかぁ……嘘かぁ」

「藤堂、人が良すぎるのもいい加減にしろ」
「ん？」藤堂はきょとんとした。
「もう……いい。お前はそのままでいろ」
「うん。なんだか良くわかんないけどさ、いーくん」
藤堂は、にっこり微笑んだ。
「早く、会いに行ってあげなよ」
私は、藤堂を見つめたまま固まった。『早く』と『会いに行って』の間が示しているものに、気がついたのだ。
私は固まったまま、内心、震えた。

病室のドアを開ける。
金髪の少女が、私の顔を見るなり、嬉しそうに笑った。
「かいちょーさん！」
「……マナ……本当に、マナなのか」
「あたりまえですよう。会長さん、どうしちゃったんですか？」
マナが、こちらを見ている。
マナが、動いている。
マナが、笑っている。
ああ、マナが、生きている！
「おかしな会長さんです」
「ばかもの……お前のせいだ」
「えっ？」
「なんでもないっ！」
「ところでかいちょーさん、それは……もしかして」
マナの視線はあざとく、クレープどーなっつの箱に向けられている。よだれが少しでている。まったく、相変わらずな奴だ。
「ああ、これは……ちょっとな」どう説明したものか、非常に気まずい。
マナの瞳がきらきらしている。期待に満ちあふれている。表情が、食べたいっ！　と訴えかけている。この欲望の権化め。

私は箱を開ける。すると、一部がぐちゃぐちゃになった、クレープどーなっつが現われた。
マナは、クレープドーナッツを見たまま固まり、そして、私を見る。
つり上がった眉が、わたしより先に食べた！　と訴えている。
「かいちょーさん？」
「……かっとなって、つい」
「んまあっ！　かいちょーさんはすぐにかっとなりますっ。もっと穏やかに行かないと駄目ですよっ」
こちらはお前のせいでかっとなったのだ……とは言えず、私は黙るしかなかった。
ふと、思った。今、私は怒られたのだろうか。
マナの表情を見る。
一生懸命、真面目に怒った表情を繕ってはいるが、まったく怖くない。
私が見続けていると、自然と柔和な表情になった。
「マナ」
「はい」
「無事で良かった」
マナは、頭の後ろに手を当てた。
「……えへへ。ごめーわくおかけしました」
「迷惑などと……お前は、よく頑張った」
「えへへー。そうでしょうか」マナはでれでれに照れている。
いつもは恥知らずのマナだが、こうやって褒められるのには弱いのかもしれない。
「かいちょーさんが来てくれるまで、必死でしたから。がんばったって実感は、あまりないです」
「聞いたぞ。爆弾魔の無茶な要求を受け入れ、皆を逃がしたそうだな」
「死んじゃう人が出なくて、本当によかったです。大切な人が死ん

じゃうと、とっても辛いですから。だから、爆弾魔法使いさんの無茶振りなんて、どうってことないです」

「マナ……」

私が駆けつけた時には、マナの衣服は乱れていた。相当無茶な要求をされたのだろう。それなのに、マナは健気に笑っている。これを強さと言わずして、なんと言おうか。

マナは、ばっと顔を上げた。

「『腹踊り』、見せつけてやりましたよ！」

「……は？」

「爆弾魔さんが『なんか、一発芸やれ』っていうから」

「お前、何を言っているのか」意味、わからない。

「だって……エルちゃんにやったじゃないですか、一発芸」

「は？」確かに、私はエルレインの恥を矯正しようと、手本として腹踊りを見せた。

世代と価値観の違うおじさま達に取り入るために、祖父が私に伝授した宴会芸、それこそ、魅惑の『超・腹踊り』であったが。

「見よう見まねでしたけど、やってみました。そしたら、爆弾魔さんすっごく喜んでくれました。やっぱりかいちょーさんはすごいですね」マナは、きらきらと微笑んだ。

ふざけるな。どういうことか。それに、

「あれは宴会芸だ！」

「あれ……どう、違うんですか？」マナは小首を傾げる。

「いや、そのだな……お前、私が駆けつけた時には、泣きそうになってたはずでは……」

マナは、しゅんとなった。

「そこまでは良かったんですけど、春香ちゃんまでやれって言われて、でも、春香ちゃんすっごく嫌がっちゃって」

それは、嫌だろうな。普通の女子なら。

「春香ちゃん、泣き出しちゃって。爆弾魔さんは暴言吐くし。なんだか、わたしまで泣きたくなっちゃって……」

「それで、最悪のタイミングで私が来たわけか」
「あっ、でも、すっごく助かりました」
マナは、ほわんと微笑んだ。
体から、一気に力が抜けた。傍らにあった椅子に、座り込んだ。
「かいちょーさん？」
「いや……私はてっきり……」
藤堂が、あまりにも話すのを拒絶していたから、もっと凄いことをやらされていたのかと思った。
「……なんでもない」
「かいちょーさん、わたし、少しはみんなを幸せにできたでしょうか」
「ああ。お前は充分、よくやったよ」
「えへへー」マナは、とろけるように笑った。
「さあ、食べるか？」
「はいっ！　待ってました！」
マナは、大口を開ける。
「……何をやっているのか」
「あーん」
「自分で喰え」
「えーっ」マナは甘える子供のように、いやいやをした。
まったく、お前は一体何歳なのか。その仕草が見た目にマッチしすぎているのも考え物だな！
「……ほれ、一口だけだぞ」
「はむっ。もぐもぐ」
マナの瞳が、ぱあっと輝くように大きくなった。
「……そんなに、美味かったか？」
マナはうんうん頷いた。そして、「あっ」と、何かを思い出したように声を上げた。
「かいちょーさんは、何をお願いしましたか？」
何かと思えば、そんなことか。

もう、叶った……とは言えない。
藤堂が、マナが、生きていて、目の前で笑ってくれることを。そんなささやかで、それでいて、実はとても得難い願いを。
「私は願わなくとも、力尽くで全て叶える。願いなど無い」
マナは「おおー！」と何故か感心した。「さすがです」
「……お前は？」
「へ？」マナはきょとんとした。バカまる出しの表情である。
「お前は何を願った」
「わたしは……」
マナは手をあわせ、目をつむる。祈るようなしぐさで言う。
「ヒロくんのしゅじゅちゅが成功しますように」
「しゅじゅ……手術か」こいつ、そう言えば一度も言えていないな。
しかし他人の幸せを望むとは、無欲な奴だ。
「まったく、お前は……何か、自分に関する願いはないのか」
「えっと……あの……」マナは指で遊ぶ。
こちらの様子を覗うような上目遣いで、マナは言う。
「あたま、ぽんぽんって、してくれませんか？」
「おまえ馬鹿か」
マナは心外だとでも言うように、眉根を寄せた。
「あたまぽんぽんは、最高のほめ方だと思うんですっ！」
むきになっているからか、頬が高揚している。
「誰にでもやって欲しいって訳じゃ無いんですよっ！　むしろ、何とも思ってない人に頭を触られると、ふぁーーっ！　て怒っちゃいます！　して欲しい人にやって貰ってこそ、ぽんぽんは最高なんです！」マナは何やら頬を赤くして力説している。
「恥ずかしい理論を力説するな。恥ずかしい」
「かいちょーさん、おねがいっ」
視線が眩しい。こいつ、自分の破壊力がわかっていて、計算でやっているのか。
「やっぱり……駄目ですか？」マナは、とても悲しそうな顔をする。

「いや……その、だな」意識すると、やる方にとっても敷居が高い。
しかし……まあ、今日くらいは。
私は手を――。
自分の手が、血で汚れていた。
突然のことに、動揺してしまう。
「……かいちょーさん？」
マナが、私の顔を覗き込んだ。
「どうしたんですか、おなか、痛いんですか？」
「ち……ちがう……お前じゃあるまいし」突然のことに、体の震えが止まらない。
「ああっ、せっかく人が心配してあげてるのにっ！」
「私は……大丈夫だ」
手のひらを見る。依然として、赤黒い血がこびりついている。
頭では妄想だとわかっていても、振り払うことが出来ない。
消せぬ不安が、胸中に広がる。
白くて小さい手が、そっと私の手を包むように、握った。
「いたいのいたいの……とんでけっ！」
突然のことに私は驚き、思わずマナの顔を見る。
「もう大丈夫ですよ」
マナは、にっこりと、輝くように微笑んだ。
「……お前は、馬鹿だな」
「えーっ！」
手のひらを見る。血は、消えていた。
体の震えも、いつの間にか止まっていた。
私は、マナの頭をぽんぽんっ、として、病室を出た。

藤堂の話によると、爆発の前に、急遽病室を移動することになったらしい。
主治医の指示だったそうだ。
「それが……病院へ匿名の連絡がありまして、マナさんの病室を変

えなければ、爆弾を爆発させると」
「連絡？」
「はい。電話に出た者の話によると、声は機械か何かで変えられていて、すぐに切れてしまったと」
それで、病室を変えたということらしい。
どうも腑に落ちない。
病院の屋上で秋風に吹かれ、沈み行く太陽を見ながら考える。
あの時の葉上は、本気でマナを殺すつもりだった。そうでなければ、私に復讐という動機を植え付けられないからだ。
ならば、その電話をしたのは……。

《――にゃおーん！》夕焼けの時間帯を告げる、鳴き真似が響き渡った。

「あの……会長……？」
恐る恐るといった口調で、背後から声をかけられた。マリナの声だ。
私は振り向く。
一瞬、マリナが怯んだのがわかった。
「……私が、恐いか」
マリナは、はっとして反論する。
「ばっ、バカ言わないでよっ……それよりも……その……」
マリナは、何かを言いたそうにするが、躊躇しているように見える。
「マナは助かったよ。ぴんぴんしてる」
マリナの表情が、一気に明るくなった。
「ホントっ！　はあーっ……よかったぁ」マリナはその場にへたり込んでしまった。
私は、夕日に向き直った。
マリナが、私の横で、同じように欄干にもたれ掛かる。

「あーもうっ……安心したら、なんか戦う気が失せちゃったじゃない」

そう言うマリナは、今まであまり見たことのない、穏やかな表情をしていた。

「……そうか」

「……ん？　会長……どうかしたの？」

「何がだ」

「いや、マナちゃん助かったんでしょ。それにしては、元気ないし」

「ばかもの、敵の心配をしている場合か」

「うっ……それは……そうだけど」

マリナは視線を逸らし、また私を心配そうなしぐさで、ちらりと見た。

「さっき、マナの病室で、自分の手が血に染まる幻覚を見た」

「えっ……」

「見ていただろう。私は、葉上を殺した。夕焼け時間内といえど、事実は変わらない」

私は、自分の手のひらを見つめる。

赤いのは、夕焼けが反射するから、だけではない。

「おそらく、私はＰＴＳＤを発症している。我ながら、軟弱な精神だ」

……私は、人殺しだ。私はマリナに向き直る。

「どうだマリナ、これが、人殺しの姿だ」

マリナは一瞬、驚いたように私を見て硬直したが、

「……ばーか」

すぐに脱力して、欄干に顎を乗せながら、じとっと私を斜視した。

「全然変わらないわ……全っ然、変わってないから。……あなたは今でも間抜け面。全然恐くない。恐くなんか無いから」

マリナは体を起こして姿勢を正し、私に人差し指を突きつける。

「あたしがあなたを殺せば、そんな戯言、言えなくなるから。それで終わりよっ！」

「お前が私を殺せば、今度はお前がこうなるかもしれない」
「ふん、あたしはあなたとは違うのっ。アタマいじって、戦いでのストレスを感じにくくしてるから大丈夫なのよ。ほら、吐血もしないでしょ……って、何でそんな目で見るわけ？」
「いや、何というか……。未来の社会で、私はそこまで、お前を追い詰めているのかと……」
「あっ……ああ、この時代ではまだ普通じゃ無いんだっけ。あたしの時代では、アタマいじるのなんて普通だから。いっとくけど、同情なんてお門違いよっ！」
マリナはくるりと反転し、私に背中を向ける。
「……まったく、誤算よ。あなたと、こんな風に話しちゃうなんて」
「何故だ」
「なぜって……結局、あたしは、あなたを殺さなくちゃいけないから」
「未来で待っているみんなのために、か」
「そうよ。何、悪い？」マリナは不機嫌そうな顔をして、横目で私を見た。
マリナの行動原理に、一つの言葉が思い当たった。
「高貴なるものの義務か」
「何よ、それ」
「……上に立つものは、下で支えるものの希望に、答えなければならない」
私は欄干に体を預ける。夕日が美しい。
「お前が戦う理由、少しは理解しているつもりだ」
そして、夕日に照らされた彼女も。
「は、はあっ？」
「お互い、難儀な人生だな。まあ、私は望んでこの役割に付いたわけだが。……望まずに祭り上げられた場合は、どうなんだろうな」
私はじっとマリナを観察する。
マリナは驚き、思わずなのか、こちらに向き直って、私をじっと

見ている。そして、見つめ合っていることに気づいたのか、慌てたように口を開く。
「か、勝手にわかった気にならないで。侮辱されてるのと同じよっ」
「それもそうだな……だが、こうして話すのも、悪くはないのかも知れん」
「な、何言ってんのっ！　あたしとあなたは敵同士で――」
「『いっぱい、お話ししましょう』」
「喧嘩売ってんのっ？」
「前のマリナが言っていた言葉だ」
「……そう」マリナは、目を伏せる。
「前のマリナは、何が言いたかったんだろうな」
「そんなの、あたしに聞かれたって、わかるわけない」
静寂。冷たい風が頬を撫でる。
「……ねえ、あの人、本当にあたしのお姉ちゃんなの？」
「エルレインのことか」
「……うん」
「お前の『お姉ちゃん』かどうかはしらんが、お前が来る以前のマリナの姉であったことは確かだ」
「ううっ……複雑。でも、ホントに……あたしのお姉ちゃんだったんだね」
「ああ」
「ねえ、どんな子だった？」
「誰が？」
「あたしが来る前の、もう一人のマリナ」
「そうだな……清楚で、やさしく、そして、芯の強い女性であった」
「そうなんだ。羨ましいな、その子」
マリナの表情が、陰った。眼を伏せ、呟くように言う。
「きっと、愛されて、守られてたんだろうね。幸せで……」
「マリナ？」
「あたしは、汚れてるから」

唐突に、マリナは言った。自分の手のひらを見つめて、
「きっと、その子の変わりにはなれない」
そう言うマリナの表情は、酷く寂しげであった。
「当たり前だ。お前は、お前なのだから」
「……そうだよね」
「お前は、汚れているようには見えない」
「知らないだけよ」マリナは、自嘲の笑いを洩らした。
「自分の評価を決めるのは、自分ではない。いつも、他人だ。私は、お前を汚れているとは思わない。むしろ、美しいとすら思う。たとえ、本当に汚れていたとしても、そう思うだろう」
マリナが、軽く口を開けたまま固まった。
「ばっ、馬鹿じゃないのっ！」
マリナの反応に、少しだけおかしさを感じた。マリナの表情がはっとなり、私を物珍しそうに見つめた。
「どうかしたか」
マリナは、顔を背けた。夕日に染まった彼女の頬は、ほんのりと赤かった。
「……帰る」
「そうか」
「あ、あの人もっ、今日は来ないみたいだし……」マリナはぼそっと呟いた。
「逢いたいか？」
「ばっ……！　なに、聞こえてたのっ！　ばっ、バカ言わないでよっ、だれがっ……あんな……」わかりやすいほどに、マリナは動揺を見せる。
「もう、強がる必要は無いと思うが」
「……今まであたしがあの人に吐いてきた暴言、知ってるでしょ。それなのに、今さら無理よ」マリナは背を向けた。その背中が、抱きしめれば壊れそうなくらい、小さなものに見えた。
「無理かどうかは、あいつが決める」

マリナの体が、わなわなと震える。
「バカっ」
マリナは駆け出し、そのまま走り去った。
マリナが最後に言った言葉を、胸の内で反芻する。
「……そうだな」
たしかに、その通りだ。
「私は、大馬鹿者だ」
一時の感情に身をまかせて、人を殺した大馬鹿者だ。
停戦の鳴き真似が聞こえるまで、私は沈み行く夕日をぼんやりと眺め続けた。

夕焼け時間内に来ないと思いきや、エルレインは葉上を見張っていた。
「どこへ行ったかと思えば、夕焼けの時間が終わってしまったぞ」
「……あっ……ううん、今はいいんだ。それにしても会長、『どこへ行った』はこっちの台詞だよ。急に駆け出すんだから、びっくりしたじゃないか」
「……まあ、迷惑かけたな」
「でも、無事だったんだ、良かった」
エルレインは、ほっとしたように微笑んだ。
「葉上を見張っていてくれたのか」
「うん。だって、こいつが目覚めたら、何するかわかんないだろ」
「……まだ、目覚めないのか」
「全然、起きる気配もない。……会長、もしかして、アタシの十徳ナイフでこいつ自身を切りつけなかった？」
「ああ、背中と……顔を」
「もしかしたら、それが原因かも知れない」
「どういうことだ？」
「全部思い出せたわけじゃないんだけど……アタシの十徳ナイフや、マコトの旗、マリナのフライパンのような『黒い武器』は、特殊な

んだ。アンタを殺す為に作られた武器だから。夕焼け空間内では、これでしか人を殺すことが出来ない」

「そう言えば、前に言っていたな」あまり、信じてはいないが。

「だから、あの武器で切りつけることで、夕焼け空間外にも影響が出てしまったんじゃないかって……妄想じみてるよな。でも、確かなんだ。アタシの記憶がそう言ってる」

「記憶、か。忘れてしまった記憶があると言っていたが」

「うん、最近思い出したんだけど、あの『黒い武器』、気が狂うって書いて『黒い狂気』ってアタシは呼んでたはずなんだ。でも、それが何で、『人を殺せる』事に繋がるのか……ずっと思い出そうとしてるんだけど……どうしても思い出せないんだ」

エルレインは涙ぐみ、泣きそうになる。

「エルレイン」

「こいつは……アタシが知ってる史実上の葉上大介は、爆弾魔なんかじゃない。『完全管理社会の基盤技術を作り上げた伊統会長の腹心』。それが、アタシの知ってる葉上大介だった。それなのに……これはどういうことなんだろう。アタシ達がこの時代に来たせいで、未来は変わってしまったのかな……だとしたら、こいつがこんな事になっちゃったのは……アタシのせいじゃないか」

エルレインは、必死で涙を堪えている。

「エルレイン」

「こいつだって、マナ達だって……今回のことは、アタシがもっと早く思い出せてれば、防げたかも知れないんだ」

「エルレインっ！　……自分を追い詰めるな。お前の悪い癖だ」

「……うん。ごめん」エルレインは眼鏡を外して涙を拭った。

この少女は、自分を追い詰めすぎる傾向がある。壊れてしまう前に、フォローしなくてはならない。

「お前も、マナに会ってきたらどうだ。あいつの能天気さに触れれば、少しは気も晴れるだろう」

「そうかな」エルレインは鼻を啜った。

「そうだ。ここは私にまかせて、行ってこい」
エルレインは、困ったように眉根をひそめた。そして、軽く微笑んだ。
「……やっぱ、いい。会長こそ、少し休むといいよ。疲れが顔に出てるよ？」
「お前も同じだろう」とは言ったものの、エルレインの表情に疲れは感じられない。
だが、無理をしているのは確かだ。
「大丈夫だよ。アタシ、なんだか疲れないみたい。隙間漂流者になるってのも、悪いことばかりじゃないのかも知れないね」
エルレインはぎこちない笑顔を見せた。自虐的に見えた。
「だから、アタシはここでこいつを見張る」葉上を凝視した。
「私は、お前の精神のことをだな」
「見張るんだ。もう、誰も傷つけさせない」
エルレインの眼差しは真剣そのものであり、今までの経験から、こうなったらテコでも動かないであろうことは、容易に想像がついた。
「……お前は頑固だな」
「アンタに言われたくないよ」エルレインは、ふわりと微笑んだ。
なぜだろうか、そのしぐさに儚げな印象を感じた。
「いいか、無理はするなよ」こう言っても、エルレインは無理をするだろう。
「ああ。わかった」
エルレインの背後に、人影が生じた。それは私だった。当然、幻覚だろう。
――お前は、強引にでも連れ帰れるはずだ。それをしないのは、彼女に見張っていて欲しいからだ。結局の所、お前は彼女を利用しているのだ。
ああ、そうかも知れないな。
幻覚の戯言から逃げるように、私は病室を離れた。

翌日。物部渡から連絡があり、葉上の創り出した城塞へと赴いた。
「あ、会長さん」渡がこちらに手を振る。
つま先立ちして一生懸命に手を振る仕草がやけに可愛らしい。
私服でいると、男か女か区別が付きにくい奴だな。と、妙な感覚に陥ってしまった。
その隣には、見知った金髪の、目つきの悪い男がいた。
「本郷、お前もいたのか」
「ああ。何かあったらまずいからな」本郷は私服の上に、私が贈呈した特注の学ランを羽織り、腕には赤いプロテクターグローブをはめている。完全なる戦闘態勢だ。
「それは、どちらの意味だ」私が物部渡を取って喰うとでも思っているのか。
「両方だ」本郷は鋭い目でじろりと、私を睨んだ。
渡はあわあわと慌てている。
「ほ、本郷くん、会長さん……ごめんなさい。僕が無理を言って、本郷くんにも来て貰ったんです。本郷くん、強いし、頼りになるし――」
「――俺の意志だ。勝手についてきた」本郷は堂々と言った。
「本郷くんっ！」
「君は、嘘をつくのが得意なようだな」今回のことと言い、才能の事と言い。
「ううっ……すみません」渡はしょんぼりと肩を落とした。
「まあいい。こちらも井内を連れてきた」私は耳に付けたワイヤレスレシーバを見せる。
井内とは、『リガン』とスマートフォンを介してネットワークで繋がっており、私の見たものが直接、屋敷地下室のモニターに出力されるようになっている。
〈Wデートだねっ！〉耳元で井内の声が聞こえた。
〈いっぺん死ね〉と返しておいた。

「井内先輩……生きてたのか」
「目下、療養中だ」既に手の施しようがないほどの重症だがな。特に精神が。
「……誰？」渡が本郷に訊ねる。
そう言えば彼は、最近転校してきたのであった。知らないのも当然か。
「ええっとだな……」本郷は説明しようとしたが、言葉に詰まった。
〈いとくん、いとくんっ！　紹介！　しょーかいっ！〉井内は鼻息が荒い。
〈黙れ、人間嫌いの引きこもり〉
「おそらく、君は関わらない方がいい人種だ」紹介はこれで終わりだ。
〈かわいい子独り占めかよっ！　ちくちょう井内ちゃんの、どストライクだよっ！　性癖的な意味でっ！〉
〈アピールしたければ、外に出ろ〉
井内がぎゃーぎゃーうるさいので、私は音声を切った。

私が入り口に近づくと、独りでに植物のツタのようなものが動き出し、入り口が出現した。まるで、私を誘っているかのようだ。
私達は入り口から見える暗闇の中に入る。持ってきたライトの明かりを頼りに進んでゆく。
「すみません。無茶を言ってしまって」渡が、徐ろに口を開いた。
「いや、君の才能が、捜査にとって有利に働く可能性が高いからな。私としても、願ったり叶ったりだ」
それに一昨日、感情的になり、怒鳴ってしまった後ろめたさもある。
「……『才能』なんて、凄いものじゃありません」渡は、何故か暗い表情になった。
「会長、渡の力を利用しようなんて、考えるんじゃねえぞ」
「まさか本郷、お前も物部くんの才能を知っていたとはな」

「ふん、生徒会メンバーで知らないのは、あんただけだ」
「すみません。僕が、隠して貰うようにお願いしてて」
「いや、気にしていない。君には君の事情があったのだろう。君の隠れた才能を見落としていたのは、私自身の落ち度だ。まあ、私一人が知らなかったというのも、いささか不愉快ではあるがな」
「ごめんなさい……きっと、信じて貰えないだろうと思ってましたから。……他のみんなにばれてしまったのだって、偶然というか、事故みたいなものでしたし。だって、『特定モノが擬人化して見えて、しかも話が出来る』なんて……おかしいでしょう？」
「ああ、おかしいな」『擬人化』か。人に見えると言うことか。確かにおかしい。
そう言うと、物部くんはしょんぼりと肩を落とした。
「――会長っ！　てめえっ！」本郷が怒鳴る。せっかちな奴め。
「だが、認めざるをえん。私はこの目で、君の『才能』を見てしまったからな。それに……こいつがこれだけむきになるのだ。君を信頼している証拠だろう。こいつの信頼は、君の行動が勝ち取ったものだ。こいつの偏屈ぶりは、私もよく知っているからな。こいつが信頼するというのは、案外凄いことだ」
「は……はあ……」渡は顔を逸らし、俯いてしまった。
「けっ……回りくどい奴」本郷が舌打ちした。

葉上がいなくなった植物城塞の中は、活力が消えてしまったように、しんと静かだ。
建物の中だというのに、暗く深い森の奥を探索しているような錯覚に陥る。我々の先を照らすライトが心許ない。
「こんな凄いものを作り上げたなんて、葉上先輩は、本当に凄い人なんですね。そんな人が……なんであんな事をしちゃったんだろう」
「会長、そろそろ話したらどうだ。葉上先輩が、なんであんな騒ぎを起こしたのか」
「……いいだろう」

歩きながら、私と葉上の過去、そして、葉上が爆発騒ぎを起こした理由を簡潔に話した。

「妹と……天国の妄想ですか？」

「ああ、私が再開した時の奴は、既に狂ってしまっていた」

それが、あんな暴走を引き起こすとは。全ては、私の責任だ。

「……そうでしょうか。一見、筋が通っているようにも思えます。でも、なんだか、途中で変な方向に入ってしまったような……どうしてなんだろう」

渡の疑問に、本郷が横槍を入れる。

「知るか。渡、あいつは人を殺そうとした奴だ。今回のことだって、一人で考え込んだあげくに自分勝手に騒ぎを引き起こしやがって。一歩間違えれば、藤堂先輩や、マナ先輩が殺されてたかもしれないんだ。そんな奴の事、考えるだけ無駄だろ」

「それでも……僕は……」

「物部くん？」

「いえ……やっぱり、おかしいですよね」渡は元気を無くしたように、俯く。

どうなっているのか、渡の胸元辺りに、消しゴムが留まっている。渡は、消しゴムを見つめた。そして、ふいに微笑んだ。

――キュィィィィィィィィィィン！　耳鳴りと頭痛がした。

一瞬、消しゴムが、手のひらサイズの銀髪の女の子に見えた。女の子は、渡に向かって微笑んでいた。

私は目を閉じ、頭を振る。目を開くと、消しゴムはやはり、只の消しゴムであった。

……疲れているのか。渡の話に影響され、幻覚を見てしまったのか。

「会長、どうした？」

「いや、なんでもない」

「そうか、気分が悪くなったら無理せずに言えよ。あんたは倒れてたんだからな」

「問題ない」

私達は一階一階、各部屋を調べて回ったが、無秩序に植物が群生しているだけに見えた。まるで、建物全体が眠っているようにも見える。

私達は全ての部屋の探索を済ませ、一階に戻ってきた。

「……おかしい」

「はい。おかしいです」渡が頷く。

「おいおい、お前ら、何がおかしいんだ」本郷が慌てたように聞き返す。

「爆弾を作るための設備が、ありませんでした」

「と、言うよりは、機械自体が無かった。本来、無機的機械で構成されるところが、全て植物――有機物で作られている。とんだオーバーテクノロジーだ」

「だから、どうした？」

「あれだけの『技術』を保有していれば、わざわざ機械式の爆弾を作る必要性が無いということだ」

「それは……まさか」

「――爆弾魔は、もう一人いる可能性が高い」

「爆弾が二種類あったのは、そのせいだって言うのか」

「わからん。あくまでも可能性の話だ。葉上の撹乱かも知れん。どちらにせよ、爆弾を作った場所があるはずだ」

爆花花火はともかく、機械式の爆弾は……どこで作ったのか。

「渡、何か見えるか？」本郷が訊ねた。

昨日の段階では、渡はここにいる植物が『擬人化』して見えたらしい。しかし、渡は浮かない顔をしている。

「はっきりとは見えない……でも、何だろう。この間は感情だけが、直接伝わってきたんだ……こんなこと、無かったのに。相手が、半分植物だからかもしれない。でも、今はその感情すら伝わってこない。まるで、眠っているみたいだ」

突然、渡がはっと息をのんだ。
「……何かが、呼んでる？　会長さんを、呼んでます」
渡は、導かれるように螺旋階段を下りてゆく。
渡を追って、私達は地下へと進んでいった。

辿り着いた先には、簡素な空間が広がっていた。ライトを当てる。
天井や壁、地面には、びっしりとツタが張り付いている。
部屋の中心に、何かがある。
植物で出来ているが、まるでその形は、ピアノのようだ。それ以外には、
「何も、無いようだが」
「でも、微かに……聞こえる……歌のような……」
「歌？」
葉上――地下室――ピアノ……まさか。
私は、ピアノのような植物の前にある椅子に座り、そして――。
『通常は絶対に奏でない旋律』を奏でた。
地鳴りが、響く。
私の目の前、ピアノのすぐ側の地面で、植物が蠢いている。
植物は絡互いにほどけ、絡まり――地面のさらに下から、何かが、せり上がってきた。
せり上がってきたものは、不思議な形をしていた。
複数のツタによって、球状のガラス玉のようなものが、編み目のように包まれている。
ガラス玉のようなものは、樹液が固まったものなのか。透明な表面の内側には、淡い緑色に発光する液体が満たされている。
そして、その中心に、
正方形の物体が、私の照らすライトの光に煌めきながら、ゆったりと、回っていた。
「……女の、子……？」渡はそう、呟いた。
渡は大きく目を見開いて、それに見入っていた。

彼には、あれが人に見えているのだろうか。
「渡、そいつは、モノだ」本郷が忠告した。
「えっ……あっ、そうなんだ」渡は、驚いていた。
そして、どこか寂しげで、苦々しい表情をしたのだ。
そうか。彼は、人間と、『擬人化したモノ』の区別が付かないのか。
今まで、どれだけその見え方に翻弄されたのだろうか。彼がその才能を隠したがる理由の一端を、見た気がした。
いや、推測だけで物事を判断するのは、出来る限り止めるべきだろう。私は今の考えを振り払った。
容器に近づく。ガラス状の表面に、横書きの文字が刻まれている。
『Ｇｉｆｔ　Ｄａｅｍｏｎｓ／ｓｅｅｄ.』
「……デモンズ・シード？」
言葉を発した瞬間、突如として立方体が輝き出し――容器が、破砕した。
液体が流れ出る。立方体が、地面に落ちた。
刹那――部屋中に張り巡らされた植物のツタが、立方体を起点に光り出す。光はツタの中を駆け巡るように、行ったり来たりを繰り返す。まるで、何かの情報をやりとりしているかのようだ。
部屋全体が振動し始めた。私は異常を感じ、後方へ跳ぶ。
先程まで立っていた地面が、突如として盛り上がった。
植物が絡み合い、立方体を包み、形作ってゆく。
植物は、緑色に発光する巨人の姿を作り上げた。
葉上が『変身』した時と同じ――まるで植物木乃伊だ。
その傍ら。物部渡は、巨人を凝視していた。その表情が困惑に染まっている。
「……何？　『力を持つ資格があるか』だって？　君は一体、何を――」
巨人が、渡目掛けて、凄まじい速度で拳を振り下ろす。
「――物部くんっ！」叫んだ時には遅かった。

渡の小さな体は巨大な拳に押しつぶされ――。
「――軽いな、こんなものか」
本郷光太郎が渡の前に立ちはだかり、プロテクターグローブの炎で拳を防いでいた。
「大丈夫か、渡」
「あ……ごめん」
「こういう時は、ありがとうだ」
「うん、ありがとう」
「当然だ、友達だからな」本郷は口端を上げた。
「そうだね、ありがとう」渡は、にこりと微笑んだ。
「さあて、俺はこいつを蹴散らすが……一応話し合ってみるか？」
「うん。できる限りの事はやりたいから」
巨人が拳を振り下ろす。衝撃で、部屋全体が揺れた。本郷は片手で、いとも簡単に受け止めた。まるで、気にもとめていない様子だ。
「ならその間、お前を守ろう」
その言葉に、眼差しに、二人の強い絆のようなものを感じる。
「僕は物部渡、君の声は聞こえている。僕らは会長さんじゃない。君は、何故会長さんを呼ぶの？」
拳が振り下ろされる。本郷は炎を操り、拳の表面を焼き尽くす。
「本郷くん、彼女、痛がってる。手加減してあげて」
「ああ、わかった」
次々と振り下ろされる拳を、本郷は黙々と捌く。
「本郷、物部くん！」
「ちょっと待ってください。えっ……資格を見せろって言ってる……どういうこと？」
その時、植物の拳から、オレンジ色の炎が生じた。炎と炎がぶつかり合った瞬間、本郷の体が少し沈んだ。
「くっ、少し、重くなりやがった、こいつ……俺の『技』を――」
「本郷、加勢するっ！」私は『チェス』を構える。
「おい待て！」「会長さんっ！　この子は――」

私は間髪入れずにチェスの先端を放った。先端は植物の胴体に直撃し、爆発した。巨人の上半身は吹き飛び、部屋の壁に四散した。
巨人の失われた上半身があった部分に、立方体が浮き、煌めいている。
「伊統会長は私だ。無関係の人間を巻き込むのは止めて貰おうか！」
「駄目です！　会長さん、その子は力を――」
立方体の背後から、無数のツタが出現した。互いに絡み合い、作り上げたその形は――『チェス』？　それも、ツタの先端に無数に配備されて――。
『チェス』に似た切っ先が、一斉に発射された。私を覆うように発射された無数の弾道に、逃げ場はない。
「会長っ！　――だりゃあああああっ！」本郷が足を薙ぎ払うと、波のような炎が出現し、切っ先に触れた側から爆発してゆく。あれは、やはり『チェス』――残りの弾道が私目掛けて突き進む。
突然、チェスの爆発の中から現われた亜麻色の髪と小さな背中が、目の前に立ちはだかった。物部渡だ。
「物部くんっ！」
「いくよ、バンコ！」渡の手で、例の消しゴムが回転している。消しゴムは銀色の輝きを放ち、そして――
――渡は、消しゴムを薙いだ。瞬間、『チェス』の切っ先が全て消えた。
渡は、膝をついた。
「物部くん、これは、一体」
渡の息は荒く、顔色が青白くなっていた。
「ごめんなさい、道具の力を引き出すと、ちょっと、体力をつかっちゃって……っ、たった一度で、こんなに小さくなるなんて」
渡は苦々しい表情で、まるで消しゴムを心配するように見つめる。
消しゴムは、三分の一以上が欠けていた。
「――おいっ、ここは俺にまかせてお前らは避難を！」
「冗談は止せ。これは、私の問題だ」

「今はそんなことを言ってる場合じゃねえだろ！」
「本郷くん、扉が見当たらない……このままじゃ、脱出も出来ないよ」
「扉の場所は覚えているだろ、俺がこじ開ける」
「ならば、その間は私が囮になろう」
私は、巨人に向かって駆け出す。巨人は既に上半身を再生しており、先端に『チェス』をかたどったツタが、羽根のように背中から伸びている。
「会長――ったく！」
走る私の後ろで、どんっ！　と言う音と、激しい振動が響いた。
私は両手いっぱいに『チェス』を持ち、『リガン』の機能を使って、全てのツタをロックする。
巨人の『チェス』が発射された。私の『チェス』がそれを迎え撃つように放たれた。
凄まじい爆発の連鎖が広がった。
「……ちっ、駄目だ！　俺と同じ炎で防がれるっ！」本郷の声が聞こえた。
「――物部くんの消しゴムで消せ！　消えた瞬間を突け！」
「渡！」「わかった！」
本郷と同じ炎を纏った巨人の拳が、私目掛けて振り下ろされる――くっ、早い。
私は咄嗟に『チェス』を至近距離で爆発させ、爆風で自分の体を吹き飛ばした。
「――ぐっ！」背中を強打し、激しい痛みが生じる。それでもあの炎に焦がされるよりはましだ。
「――会長、開いたぞ！」「会長さんっ！」
ぼやけた視界で見ると、確かに地上への扉が開いている。しかし――扉はみるみるツタに包まれ、今にも閉じようとしている。
「先に出ろ！　私もすぐに――」
巨人が、私の方を向いていない。巨人の関心は、今、本郷達にあ

る。
「ちいっ――」私は『チェス』を爆発させ、飛んだ。
今度は体勢を制御し、足を踏ん張って着地する――二人の盾となる。
「会長さんっ！」渡の声が聞こえる。「本郷くん、炎を！」
「けど、渡、消しゴムが」
「……そんなっ」
おそらくは使い切ったか、他に使えない理由があるのだろう。
予測はついていた。いくら私が爆発の速度で扉まで吹き飛んでも、人一人分の隙間も無いことを。ただし、『チェス』数本分が通れるだけの穴が空いているであろう事を。
そう、扉に向かってくる脅威は巨人そのものではなく、『チェス』の無数の弾道。
ここで回避すれば、二人を巻き込むことになる。私は、考え得る限りの打開策を瞬時に検討する。そして、一つの結論に達した。
「残念だったな、葉上」
それを防げば、二人を守りきれる。
「守りきるぞ」
たとえ自分が死んだとしても、それが最良の選択だ。
「王の誇りは保たれる！」
瞬間、チェスの切っ先が、全て爆発した。
部屋中に絡みついていたツタが、するすると一点に収束してゆく。
無機質なコンクリートの壁と、床が顕わとなった。
「……これは、一体」
「――会長さんっ！」渡が、悲痛な表情を浮かべて駆け寄ってきた。
「ごめんなさいっ、僕はっ、僕はっ……」
渡は、消しゴムの欠片を大事そうに握っていた。
私はその消しゴムが、銀色の髪の、かわいらしい女の子に見えたことを思い出す。
そうだ、彼には、道具が人と同等に見えるのだ。消しゴムを使い

切れば、きっとそれは死と同じ事なのだろう。
「君にとって、それはとても大切なモノなのだな」
渡ははっとして、そして、悲痛な表情で、頷いた。
「いいさ。守るべきモノにも、順序はあるのだから」
極限の状態になれば、何かを捨てる選択をしなければならない時が、必ず来る。
「それに、この程度で私は死なん。私にはやるべき事があるからな」
強がりであったのかも知れない。だが、確信めいたものはあった。
「……どうなってる？　あの化け物は、なんで消えたんだ」本郷が訊ねる。
「消えたんじゃない。あの子が、さっきの巨人の正体だから」渡が答えた。
その視線の先、部屋の中心には、立方体が転がっている。
「えっ――『資格は、得られた』……？」
渡は、ぼんやりと私を見た。
「会長さん、あの子、あなたのモノになりたいって、言ってます」
「ふん、何かの罠か」
「いえ、僕が今まで出会ってきたモノ達は、みんな純粋ですから。嘘をつくことは無いと思います」
私は、部屋の中心へと近づく。そして、立方体に対して徐ろに手を伸ばし……拾った。
触れた瞬間、私は一驚した。
一見、ひんやりとした金属のような質感であるのに、触れると、生き物のように暖かい。しかも――微かな脈動を感じる。
まるで、ゆるやかに鼓動する心臓を、この手に掴んでいるようだ。
これは、何だ？　植物、機械どちらとも判別がつかない。
葉上は、これを私に持たせて、どうしようというのか。
「……あっ」
渡が、声をあげた。
「微笑んでいます。愛おしそうな、眼差しで」

第二十六話　認識できない緑のレインコート

結局、爆弾を製作できそうな場所は見つからず、探索は空振りに終わった。
手に入ったのは、『デモンズ・シード』なる奇妙な立方体だけ。
葉上が何を考えていたのか、皆目わからない。
このあやしげな立方体を使って、何かを成せということか。
渡達と別れ、屋敷の地下へ戻る。
「……いとくんのばかぁ」出会い頭、井内はむくれた。
物部渡に紹介しなかったことを怒っているのだろう。
「どうせ紹介しても、話しかけられたらお前は全力で隠れるだろう」
「うるさいなー！　世の中にはフラグ立てって言うのがあってね！」
「じゃあ外に出ろ」何を言っているのか、よくわからない。
「お断わりじゃぼけーっ！　井内ちゃん、もういとくんの協力しないもんねっ！」
井内はぷいとそっぽを向いた。そこは、人として断わってはいけないところだと思う。
そして、協力しないと言った割に、目の前のディスプレイには、爆弾事件の証拠類が表示されている。
「ふんだー！　井内ちゃんは調べないと気持ち悪いから調べてるだけだもんねー！　べ、べつにっ、あなたのために調べてるんじゃないんだからっ！」
「何というか、わざとらしい小芝居だな。もしかして、また元ネタがあるのか」
「ツンデレを理解出来ないいとくんなんて、だいっきらいだー！」
「大嫌いで結構」わからないままにしておいても問題ないだろう。
「お願いっ、一人にしないで！」井内は泣きそうな顔を作って縋り付く。
「お前は一体……何がしたいんだ」非常にめんどくさい奴だ。

井内は手を離し、打ちひしがれたようなポーズをとった。
「最近は上様のお渡りの頻度も少なくなり……一方マナちゃんへの覚えめでたく、井内ちゃん姫は毎晩枕と袖を濡らしているのよでござーますわよよよ……」
私はその寸劇を、冷ややかな視線を持って迎えた。
「いとくんっ！　リアクションはしっかり！　井内ちゃんといとくんの約束だよっ！」
約束した覚えは、無い。
「最近は愛してるって言ってくれなくなっちゃったし」
「一度も言った覚えはないが」
「そこら中に女作って、昔の女はぽいなのねっ！」
「おまえは私をドンファンに仕立てて、どうするつもりなのだ」
「最後の台詞は一度言ってみたかっただけー」えへっと、井内は舌を出した。
「私ではなく、他の人間に使え」
「井内ちゃんはいとくんの気を惹きたいんだよ。きっと」井内は真顔で言った。
しかし、その言動はどこか他人の事のように聞こえた。
「冗談はそこまでにして、爆弾事件の件だが」
「話の転換、露骨っ！」
「暇がない」
すると、井内は眼を伏せ、いじけたように呟く。
「……井内ちゃんは、いとくんが襲われた時、すっごく叫んだのに、聞いてもくれないんだもんな」そのしぐさは、寂しげであった。
「元はと言えば、お前が悪いと思うのだが……」
井内のしぐさを見ていると、私にも少しは非があるような――
「あーあー、気分転換にかわいらしい少年を襲って、『あなたの性感帯はどこかしら』とかやってみてーなー」
私が馬鹿であった。
「お前には絶対に会わせない。それ以前に、お前を外に出そうとす

ることが間違っているのかも知れない」
「いとくんも、井内ちゃんの恐ろしさがようやくわかったようだね」
井内はうひひっ……、と笑った。私は会話が誘導されたことを知った。
「矯正し終えたら、お前を外にほっぽり出してやる」
「がんばってー」井内はまるで他人事であった。
こみ上げる怒りをおさえ、私は本題に入る。
「何か、わかったか？」
「もう一人の件だね」井内は急に真面目な顔になった。
ディスプレイに、様々な物が映し出された。
「とりあえず、並べてみました。『井内ちゃん、なんだか気になる、どうしてかな、なんでかな、なんでかなーリストー』だよ」
「『直感リストか』……」
「えらい縮めましたな。いとくんも最近の若者ですか」
「黙ってろ。私は何事も簡潔を好む」
「その割には、お話が回りくどい」井内は嘲るように、うひひっと笑った。
「黙れ」
エルレインが隙間漂流者となるきっかけとなった、やけに完成度の低い爆弾と、並のの技術では作れない爆弾。
マナと私が巻き込まれた爆発で、奇跡的に残った爆弾の部品。
『リガン』が記録し、解像度を落としたら出現した、緑のフードの人物が写った画像。
地図上に描かれた、六芒星の魔法陣。
「あと、この映像も」
「これは……爆発が起こった店の、監視カメラの映像か」
巨大なパフェーをもの凄い速度で平らげていくマナの姿が、映し出されている。
「うん。でもね……」
映像が早送りになる。マナが食べ終わり、藤堂達と談笑している。

マナが席を立った。
急に、映像が途切れた。次に映像が映し出された時には、マナの手に手錠がはめられていた。また、映像が途切れた。
「これは……」
「重要な箇所だけ、防犯カメラが機能してないの。ふっしぎー」
確かにそれぞれが奇妙な証拠ではある。
「特にこの部品が、すっごく気になるんだよね。最近、これのことばっかり考えちゃう。まるで……これは恋！」
「ついに人外に手を出し始めたか」末期だな。
「冷静に返さないでよぅ。ま、無視されるよりかはましだけどさ」
「どう気になる？」
「うーん……笑わない？」
「場合による」
「これは宇宙人の残したものです」
「わっはっはっはっは」私はわざとらしく声を上げた。
「やたー。いとくん笑ったー」井内は、ばんざいした。
しまった、嵌められた。
「うんうん、いとくんの笑顔、素敵だよ。気分いいからもっと教えちゃう」
もしかして、こいつのペースに乗った方が、話を聞きやすいのか。
いや、これも井内の策略かも知れない。
「あのね、これは『わけわからん電波送受信機』なの」
「わけわからん？」やっぱりこいつは、ふざけているのだろうか。
「うん。なんかようわからん電波を出すんだよ。そんでね、この電波の周波数パターンをどっかで見たことある気がしたから検索かけてみた。そしたら……一、二ヶ月前に発生した、例のコンピュータウィルス。いとくんの学園にも広まった、あの『ゆんゆんウィルス』に感染したパソコンが発する周波数のパターンと、良く似てたんだ。わけわからん電波は、『ゆんゆん波』だったんだね！　井内ちゃんびっくり！」

良く、似ている？　忘れかけていたが、確かにウィルス騒動があった。あの時はバックアップから戻すことで対処したが……まさか、そことリンクするとは。

「だからさー思うんだよね。このウィルスを作った奴と、あの爆弾を作った奴は同じ。で、この二つはオーバーテクノロジー。もちろん、はがみんの技術は一切使われてない」

井内は、得意げに人差し指を立てる。

「だから井内ちゃんは思ったのです。この二つは、地球を侵略する宇宙人がばらまいてるんだーって」

井内が言い切ると、井内にとっては耐え難いであろう沈黙が流れた。

「――お願いだから何か反応して！」井内は泣きそうな顔で縋り付く。

「それで、お前は納得したのか」

「うーん……実は微みょー。なんかずれてる気がする」かと思えば、けろっとしている。実に気分転換の早い、とらえどころのない奴だ。

こいつの思考・行動については、常識の範囲内で考えない方が良い。

「これ以上気づいたことがなければ、私は行くぞ」

「いとくん……ちょっぴりドライだね」井内が私を覗うように、控えめに覗き込んだ。

「遊んでいる場合では無いからな」

「気にしてるんだ」

「……何を」

「はがみんのこと」

虚を突かれた。思わず私は、井内を見た。

「今のいとくん、昔に戻っちゃったみたい。マナちゃんが来てから、いとくんやわらかくなったし」

井内は、心配そうに眉を顰めて私を見ていた。

「あんまり自分を追い詰めちゃ駄目だよ。昔のクールないとくんも

好きだけど、最近のやわらかいとくんも好きだったんだからね」
「井内……」
井内は白いボディースーツの首元からストローを抜き出し、ちゅーちゅー吸った。
「お前、それはもしかして」
「ん？　井内ちゃんのミラクルジュースだよ？　飲む？　井内ちゃん、口付けちゃったけど、いとくんならぁ～」井内は自分のぷっくりとした唇に指を這わせ、官能的なしぐさを演出しているつもりだ。
「断じて拒否する」王として、いや、それ以前に人として。
「綺麗に濾過しているとはいえ、自分の排泄物を飲むという、この背徳感がたまりませんな、むはっ」
「変態め」少しだけ感傷的になってしまった、先ほどの自分を恥じる。
「変態だからこそ、井内ちゃんとの逢瀬は楽しいと思いますわよ？」
時々、もうこいつは駄目なのではないかと思う瞬間がある。今のような時だ。
「ねーねーいとくん、はがみんは井内ちゃんのこと、なんか言ってた？」
「葉上との会話で、お前の話は出てこなかった」私と、真由の事だけだ。
「うわっ、地味にショック。でもでもいーもんっ、いとくんがこうして来てくれるから、井内ちゃん生きていけるもん」井内はいじけたように下を向いた。
「井内……」さんざんおちゃらけてはいるが、今のこいつには、私が必要――。
「いとくんが持ってきてくれる数々の漫画、ああ……日本最高……」
こいつのうっとりした表情をみていると、何故か無性に腹が立つ。
「私が漫画を買ってこなくなれば、お前も外に出るだろうか」
「残念でした。対策済みです」
「なに？」

井内は、とあっ！　と叫び、腕のボタンをぴこぴこ押した。
ディスプレイに、外の景色が映し出された。
「……は？」これは、何だ。
ディスプレイの映像は、道を進んでいく。本屋に辿り着いた。店員がぎょっとした顔でこちらを見た。
「どうもー。これ、ください」
井内が言うと、映像に漫画雑誌が入り込んだ。どうやら、ロボットハンドのようなもので、レジに提示したらしい。
店員は戸惑いながらも受け取り、会計を済ませた。
「んじゃーねー」ロボットハンドが、腕を振った。来た道を戻ってゆく。ここまで来て、大体察しはついた。『技術力の無駄遣い』である。
しばらくすると、台車から腕が一本生えたような無様な形のロボットが帰ってきた。キャタピラがついており、急な階段も難なく降りることが可能、か。
「お帰りー『ロケットマン二号』」井内は雑誌を受け取り、頬ずりしている。
自分の頬が引きつるのがわかった。
「一応聞いておこうか。それは、何かな」
待ってました！　と言わんばかりに、井内は瞳をきらきら輝かせた。
「ふっふっふ、これぞ、井内ちゃんの脅威の科学力！　未来の引きこもり必須のアイテム！　遠隔雑誌購入マシン『ロケットマン・システム』だっ！」
井内の表情が語っている。「ほめてほめてっ！」と。
「どうやら貴様にとって、私は用済みの存在のようだ」
「そんな事無いよっ！　井内ちゃんはいとくんが無いと生きていけませんっ！」
「ふん、白々しい」何故だろうか、己の全てを否定されたような憤りを感じる。

すると井内は、しゅんとなった。
「だって……井内ちゃんを覚えてくれてるのって、たぶん、いとくんだけだもん」
いじけたように、両手の人差し指どうしをつんつんする。
「井内、お前……」
「いとくんは、井内ちゃんをわすれないでね」寂しげな表情で、私を見上げた。
「……ばかもの」忘れたくても、忘れられんわ。
井内はやわらかく微笑んだ。
「いやーでも、はがみんが見つかるまでは、流石の井内ちゃんも気が気じゃなかったよぅ。気が気じゃななさすぎて……現実逃避っちゃったぜ」
井内の瞳がきらりと光った。おそらくは、何らかのサプライズを用意している。
「またプラモデルか」
「ううん、これだよ」
ディスプレイが縦に回転し、ホワイトボードが現われた。そこには、何やら複雑な数式が書かれている。
「『認識回避高次元構造』回避方程式。最初はもっと複雑だったんだけど、ここまでまとめきりました。いやー、井内ちゃん凝り性だから。やっぱり方程式も様式美だよねー」
「凡人でもわかるように、解説してくれ」わけがわからない。
「つまりね、この方程式を通して画像をフィルタリングすると――」
井内はホワイトボードに向かって、手をわさわさする。
すると、ホワイトボードがディスプレイになり……先程の縦回転は一体何のためにあったのかという疑問が一瞬よぎったが、天才の感性を考えるだけ無駄なので振り払う……気がつくと、画面には爆弾騒ぎの時の野次馬画像が表示されていた。
「ほれ、適応。ぽちっとな」
「――これはっ！」

画像に、緑色のフードの人物が表示された。
今回は画像がぼやけることなく、鮮明な人相を見ることが出来る。口元が、嘲笑うかのように上がっている。顔の上半分はフードに隠れており、見る事ができない。
「残念。顔の全部は見えないんだよね。体も緑のコートに隠れて見えないし、全然意味ないじゃーん。でも、意味のない事って大好き……」井内はうっとりとしている。
「あの時、野次馬の最前線にいたのに、私はこいつを捕まえられなかったのか」
「しょうがないよ。相手ははがみんの発明だよ。普通のやり方じゃ勝ち目無いって。ね、元気出して？」
「それは、そうだが……」
「あ、そうそう。大事なこと忘れてた。方程式の関係で、『認識回避高次元構造』の色が、一部色落ちしてます。具体的には……うーん、この場合は赤色だね」
「赤？」
「うん、正確には、緋色っていうの？　血の色」
「何かの手がかりになるだろうか……」
「さあね、井内ちゃん、難しいことわかんなーい」
「今さらアホの子ぶっても無駄だ」
「てへっ」井内はぺろっと舌をだした。
「あまり計算が過ぎると、嫌味になるぞ」
「いいのいいの」井内は手を差し出した。
「……なんだ、突然。次は金でもせびるつもりか」
井内は、首を横に振った。
「ほれ、立方体出しんしゃい。解析しちゃるから」
「ああ」私は立方体を渡した。
「はがみんも『デモンズ・シード』だなんて、厨二力がなかなかおありで……ぐふふっ」
井内は、実に楽しそうであった。葉上が、爆弾魔であったという

のに。
「お前は、葉上があんな事件を起こしたことについて、どう思う」
「うーん……はがみん、助かって良かったねー」井内は立方体をわしわし触りながら、気のない返事をした。
「……それだけか。あいつは、マナや藤堂を殺しかけたのだぞ」
井内の手つきが、止まった。
「井内ちゃんは、はがみんがそんなことしないって、信じてるから」
「だが、現に奴は――」
井内は、真っ直ぐに私を見て、
「直感がそう言ってる」
よどみなく、はっきりと言った。
「いとくん、前にも言ったけど、この事件、超常的な匂いがするのは確かだから、気をつけて」

超常的……か。井内の直感には、何らかの根拠がある。
「と言うわけで、あなたが犯人だと思う」
「それ、かなり失礼じゃない？」アカネ嬢は眉をつり上げて見せた。
「まあ、言ってみただけだ」
『超常』と聞いて、『リガン』の映像の解析がてら、アカネ嬢の店を訊ねてみた。今までの経緯からすると、この人の専門分野だろう。
私は店内を見回す、色とりどりの様々な小物が、一見煩雑ながらも秩序を保ったままのように配置されている。実に私好みの店構えなのだが、
「相変わらずこの店には閑古鳥が鳴いているようだな」私以外に客はいない。
「イトーくんって、いちいち言うことが爺臭いよねー」
「まあ、否定はせん。多少の影響は受けているだろうな」
中学までは、祖父に育てられたようなものだ。その祖父も、もうこの世にはいないが。

「そっか、あたしもおじいちゃんっ子だったから、案外話が合うかもねー」

冷気が吹き込んできた。店の扉が開いたのだ。

「アカネさん、いるか？」聞き覚えのある男の声がする。

「お前は……本郷」「あんたは、会長」

「「知り合いだったのか」」私と本郷の声が、被った。

「あははっ、二人は仲良しね」

そう言われ、互いに気まずくなる。

「……俺は、『こいつ』を調整してもらいに来ただけだ」

本郷は、真紅のグローブを机の上に置いた。

「まあ、『おもいグローブ』の『スサノ』じゃない、おかえりなさい。うんうん、愛されてるようね。お茶でも飲んで、ちょっと待ってて。これくらいなら、すぐに終わるから」

何故か上機嫌になったアカネ嬢は、すたすたと店の奥へ入って行ってしまった。

姿が消えたのを確認して、私は訊ねる。

「お前も、アカネ嬢に振り回されている質か？」

「まさか！　あの人は……いい人だ」本郷は眼を見開いて驚いているようだった。

「いい人だと！　あの傍若無人の悪魔がか！」

「そりゃ、ちょっと傍若無人な所があるが……」本郷は目をそらした。

「ちょっとどころじゃないぞ、あれは」

「……アカネさんは、俺を助けてくれたんだ。命の恩人なんだよ」

「ほう、それは初耳だな」

「話す必要がねえだろ」本郷は睨んだ。これ以上は聞くなと言うことか。

「それもそうだな」

沈黙が流れる。アカネ嬢は、すぐ終わると言っていたくせに、なかなか帰ってこない。

徐ろに、私は本郷に訊ねる。
「お前、年上好きか」
「――なんでそうなるっ！」本郷はこの上なく狼狽えている。
「霧島京香といい、色々、な」
かつて本郷は霧島京香に告白し、玉砕した。
調べてみたところ、どうやらあの二人は幼なじみだったらしく、本郷が親の海外転勤でこの町を離れるまで、仲良く遊んでいたらしい。
つまりは、初恋の相手だったというわけだ。
このことを知っているのは、告白された本人と私ぐらいだろうから、良い取引の材料となっている。
「もうあれは時効だろうが」
「ほんの数ヶ月前だ」
「うっ……あいつのことは……もう、何とも思ってねえよ」
アカネ嬢が戻ってきた。その手に持ったプロテクターグローブは、気のせいか新品同様に洗煉されている様に見える。
「あら、青春？」アカネ嬢は小首を傾げた。ポニーテールが揺れた。
「なんでもねえよ」
「またいつでもいらっしゃい」アカネ嬢はプロテクターグローブを本郷に手渡し、にっこり笑った。
「お、おう……あ、ありがとう、じゃあな」
本郷は慌てるように受け取り、すぐにきびすを返して出て行った。どこか、どきまぎしていた。
「かわいいわねー純真で。イトーくんも、あれくらいの反応をしなさい、そしたらお姉さん、かわいがってあげちゃうから」アカネ嬢は、にこにこしている。
「忘れてしまったよ。あんな純粋さは」
「若い者の言葉とは思えませんなー。お姉さんがイトーくんの純情、思い出させてあげようか？」アカネ嬢は、顔を近づけ、にっと笑う。
相変わらず、いい匂いがする。

「いや、遠慮しておく」
「それは残念っ！」アカネ嬢は目をぎゅっとつぶって、おでこをぺちんと叩いた。
　この人はいちいちリアクションが古い。狙ってやっているのか、祖父の影響なのか。
「それにしても、あのプロテクターグローブも、あなたの作品だったのか」
「まあねー」
「道理であの力……どうやら、至る所で暗躍しているようだな」
「『風が吹けば――』理論を使いこなすためには、影で色々な努力が必要なのよ」
「もしかして、あの消しゴムもか？」
「残念。惜しいけど、あれはあたしの作品じゃないわ。おじいちゃんのね。ところで、今日は世間話をしに来てくれたの？」
「無論、違う」
「それも残念っ！　アカネさんの残念三連発の中で、一番の残念だわ」
「残念ついでに残念ながら、今回はあなたと無駄話をしている暇はないのだ」
「なるほど、困った時のアカネさん頼みってわけね」
「不本意だが、そう取って貰ってもかまわん。『リガン』についての相談は、あなたにしかできないだろう」
「なるほど。いいわ。じゃあ、早速。……どきどき」
　アカネ嬢は私の両肩を、ぎゅっと掴み、口づけをするように、ゆっくりと顔を近づける。
「な、何をしようとしているのかっ！」私の眼球に、あの時のざらりとした感触が蘇る。
「アカネたんのフレイムタンにお目々ベロちゅーされるのが、そんなにお嫌い？」
「嫌いとかそう言う問題ではないっ！　そもそも、あの時は、あな

たも恥じらっていただろう！」
「そりゃあ、最初は恥じらうよね。でも、一線を越えれば、後は快楽しか残らない――」
「――越えんでいいっ！」
私は『リガン』のコンタクトレンズを自力で外し、アカネ嬢に渡した。
「じゃあ、ぱいるだーおーん」
「あなたは本当に何歳なのだ」
「あら、元ネタわかるの？」
「気にするな」母が好きで、子供の頃にちらっと見ただけだ。
「なるほどーへー」
「……読んだな」私の内心を。
その時、けたたましい警告音が鳴り響いた。
〈――ＷＡＲＮＩＮＧ！　ＷＡＲＮＩＮＧ！　ＷＡＲＮＩＮＧ！　不正侵入を検知〉
これには流石のアカネ嬢も、驚きは隠せなかったようで、
「うそ……驚いたわ……『リガン』に侵入できる奴がいだなんて」
と洩らしていた。
アカネ嬢は空中に光のキーボードを表示させ……って、なんというオーバーテクノロジーなのか。アカネ嬢は、驚くべき速さでタイピングしてゆく。
〈汚染レベル２。コアの非汚染を確認。状態を保全。バックアップ処理を起動。レベル１の改変履歴から、ウィルスの特定を開始…………名称『ゆんゆんウィルス』〉
「ゆんゆん……だと？」
「マジ？　……とりあえず、隔離はしたけど。ありえないなー。対策はしたはずだったんだけど。まあ、第一階層はいいとして、第二階層まで侵入されるなんて」
「どういうことだ？」
「多段防壁。防壁と言っても、実在の防壁じゃなくて、セキュリテ

ィ構造上の呼び名なんだけどね。第一防壁はハニーポット的な構造もかねてるからいいとしても、まさか第二防壁まで侵入してくるとは、恐ろしいわね」

アカネ嬢は独り言のように、次々と言葉を紡ぐ。

「『ゆんゆん波』かー。こりゃあ、ただ事じゃないわね」

「アカネ嬢、『ゆんゆん波』について、知っていたのか」

「ん……？　ゆんゆん言うから『ゆんゆん波』だけど、何？　ってか、イトーくんこそ、何で知ってるのよ？」

「いや、それはだな……」井内の存在を明かすかどうか、非情に悩ましいところだ。

アカネ嬢はそんな私の苦悩も気にせず、ひたすら光のキーボードを叩く。

「何処かに情報を送ってるみたい」

「わかるのか」

「ま、ね。ちょっち前に手こずった奴だからこいつはっ！」

〈隔離が完了しました。システムオールグリーン。通常動作モードに遷移します〉

「ふいーっ。こんなこともあろうかと、結界をはってましたー。備え安心才色兼備っ！　アカネさんってほんとーに天才。ああっ……自分の才能が恐いわ」

アカネ嬢は自分で自分を抱きしめ、身をくねらせた。

「……寂しいのか」

「誰がっ！」アカネ嬢は顔を近づけ、吠えた。

「いや、何となく。それより、実は『リガン』に組み込んで欲しいアルゴリズムがある」

私は、井内から貰ったデータを提示した。

「あら、この方程式、なかなかやるじゃない。そもそも認識できないものに対して回避策を定義できるところが異常ね。イトーくんが組んだの？」

「いいや、違う」

「へえ。そりゃ是非ともお会いしたいものね」
「いずれ、な」断わる。絶対に逢わせたくない。
「そりゃ残念。そう言われると、是非とも逢いたくなるのがアカネさんです」
「ならばこう言おう。『前向きに検討する』」
「何よこのえせ社会人」
「脱線している場合では無い」私はえせではない。れっきとした社会人だ。「リガンにこの方程式を適応できるか？」
「確かに脱線している場合じゃなさそうね。へえ、社会人なんだ。一生懸命背伸びをしちゃう子って、結構かわいいよね。アルゴリズムだから、組み込むのは簡単よ。でもその前に、ウィルスを駆除しなくちゃ」
「ゆんゆんウィルスを？」かわいい、とかからかわないで頂きたい。
「そ。ゆんゆんウィルス。ほら、少し前に流行ったでしょ。あの時、ウチのシステムから殲滅するのに結構手間取ったのよ。最近になって、ようやくワクチンソフトを開発できてね……まったく、お姉さんの黄金のような青春の一ページを返して欲しいくらい」
　では、参ります。アカネ嬢はそう言って、両手を前に出した。
「そーれい」アカネ嬢がぱちんと両手を叩いた。瞳は、黄金色に輝いていた。「はい。これでおしまい」
「ふざけているのか」
「何？　イトーくんともあろうものが、ゆんゆん波を相殺しつつ、波を逆に利用してウィルス自体を自滅させる波に改変する、計算し尽くされた奇跡のような音律がわからなかったわけ？」
「あなたが何を言っているのか、正直わからない」
「まあまあ、とにかく悪魔払いが出来たって事で」
　アカネ嬢は、あくまでもお茶を濁そうとする。
「悪魔が悪魔払いとは、笑えるな」皮肉を込めて言ってみた。
「本音をぶつけてくれるようになって、お姉さんうれしいっ。でもでもノンノン、悪魔は頂けませんな。全然かわいくありません。『

ま・じょ』なら、百歩譲ってもいいけど？」
「どうでもいいから、早く本題に入ってくれ」だんだん、いらいらしてきた。
「……余裕が無いのね」
「……否定はせん」
「いいわ。お望み通り、ちゃっちゃと進めましょう。あまり前ばかり見すぎて、躓かないといいけど」
アカネ嬢は、またもや意味深な発言をした。
「さあ、準備出来たよ。早速試してみましょう。お望みの時間帯は？」
私は、マナと爆発に巻き込まれた直後の時間帯を述べる。
野次馬の映像が表示された。
緑のフードを被った……映像は前より鮮明だが、顔の上半分は見えない。フードと言うよりは、まるでレインコートか。体全体がてるてる坊主のようにすっぽりと覆われている。周りの人間と比較するに、身長は平均的か、ほんの少し低めのようだ。
これでは、男女の区別すら付かない。
「うんうん、上手くいってるようね。じゃあ――ここをこうして、こうして……こうするとっ、と！」
画面に映し出されていた映像が、私の主観視点から、客観的な視点へと遷移した。
「……これは……どうなっているのだ」
私の後ろにいる藤堂の姿までが、映像で見える。にもかかわらず、私自身の姿は見えない。私がいる場所には『主観』という文字と、人のシルエットが存在しているだけだ。
「いやー最近のＶＦＸはすごいですなー」
「そう言うレベルでは無いだろうがっ！」
「そうかなーあははっ」
「しらを切る気か。答えろ、リガンには、あといくつ隠し機能があるのか」

「――おっと手が滑った」アカネ嬢の手が、何も無いところへと滑った。
映像の場面が変わり、屋上での葉上とのやりとりが映し出される。
「あら彼、凄い力ね。それになかなかの男前だわ」
葉上が顔を手のひらで撫でると、葉上の顔が緑色に染まった。
なるほど、確かにあれもカクレヤナギの『認識回避高次元構造』か。
そして、その後、爆発が起こり……。
「あらあら、イトーくんも高ぶるのね」
「冷静さを失った男の醜態だ。恥でしかない。……もういい。後は私一人で分析する」
私は『リガン』のコンタクトレンズを取ろうと手を伸ばす。
「おやおやあ？　夕焼けの時間が途切れてるぞー？」
「そのわざとらしい反応、やめてもらおうか」
コンタクトレンズを取った。映像が消えた。
「なになに？　なんのこと？　もしかして、お姉さんには言えないあんなことやこんなことや具体的にはいやだめぇな情事に励んでた？」
「品行方正だ。それより――ごまかさないで頂きたい。昨日の学園での出来事……あなたは、どこまで知っているのか」
「なんにも知らないよ？」アカネ嬢は、きょとんとした表情を作って、小首を傾げた。
「嘘だ」
「じゃあ、覗いてみる？」アカネ嬢は頭を傾げたまま、どこか不気味さを感じさせる笑みを浮かべた。
「……望むところだ」この女から、全てを引き出してやる。
――キュイイイン！　私は、『Ｒｅ．眼』を起動させる。
アカネ嬢の目の前に、茜色のポップアップが生じた。自分のは特別製というわけか。
≪ほんとは１８さい未満は、だーめ。だよ（はぁと）　それでも…

…いい……？》

ポップアップの下部に、『はい、いいえ』ボタンのようなものがある。

私は躊躇わずに、思念で『はい』のボタンを押す。

《イトーくんのえっちぃ（笑）》

怒りが、こみ上げてきた。

《こんな事だろうと思った》言葉にせず、アカネ嬢の金色の瞳を見る。

《おお、お姉さんのスイッチが、ついに押されました。もう使いこなしてんだ。流石はイトーくんね》

《ふん、嵐のような猛々しさの内側に、澄んだ水面のような静けさを作る。これが『Ｒｅ．眼』の発動条件だ》

《この短期間で、大したものだわ。例えがちょっと独特だけど。まあ、つまりは無心になって、外側に囲いをつくって、相手を受け入れる体勢を作るって事と同意なんだろうけど》

《なんだと！》

しまった、つい、反応を……。

《何というか、もしかして偶然？》

《うるさい》

私達は、ポップアップで会話を進める。

《あなたはこの機能を使って、私達の精神を読んでいたわけだな。使いこなせば逆に防衛も可能というわけか》

《読む？　何を言ってるのかしら》アカネ嬢は、しれっととぼけた。

《どういう意味だ》

《イトーくん、あたしたち、無言で見つめ合っているわね》

いつの間にか近づいていたアカネ嬢は、ぐいっと顔を近づける。

《話を逸らすな。私の質問に答えて貰おうか》

「ねえ……キスしよっか」囁くように、言われた。

「――ばっ！」

途端に、全てのポップアップが消滅した。

咄嗟に離れようとした私の頭をがっちりと固定し、アカネ嬢は、私の目前で囁く。
「残念。心に波風が立っちゃったね」
「なっ……！」なんというっ、卑怯なっ！
「あっ、赤くなった。かわいいー」アカネ嬢は勝ち気に、にっと口元をゆるめた。
「ふっ、ふざけるなっ！　私はっ――」
「そうだね。今はそれどころじゃないよね。爆弾魔法使いちゃんを捕まえないと」
アカネ嬢はさっと身を引く。赤毛のポニーテールが揺れた。
私の精神も、まだ揺らいでいた。屈辱的であった。
「くっ『夕焼けの事』については後回しだ。全てが終わったら、貴女を問い詰めてやる」
「楽しみに待ってる。とびっきりのお茶を用意して」アカネ嬢は片目を閉じた。
そして、何かを思い出したように、手を叩いた。
「あ、そうそう。くれぐれも気をつけて。――見た目に騙されて、本質を見失わぬよう」
「それは、お得意の『風が吹けば――』理論か？」
「そうね。正確には『相関理論』。イトーくん、全ての物事は、根源的なところで繋がっているのよ。だから、些細なことでも見落としちゃ駄目」
「あなたはいつも思わせぶりな台詞を言うな」
「老婆心みたいなものよ……って、あたしはまだまだぴちぴちよっ！」
アカネ嬢は突然噴火した。
「あなたは一体何歳なのだ……言い回しが古くさいのは、狙ってやってるのか」
「おっ、流石はイトーくん。あたしの年齢詐称に気づくとは」
待ってましたと言わんばかりに、アカネ嬢は胸を張った。

「……は？」
「実はあたし、飛び級で大学に入ってね、ほら、天才だから。１９歳ってのは嘘で、実は実は、１７歳。それも永遠の――」
「失礼する」何処かで聞いたような話は聞き飽きた。
私が扉を開き、出て行こうとした時、突然、アカネ嬢が口火を切った。
「――大丈夫、あなたは爆弾魔法使いちゃんに会えるわ」
「それは、あなたの『理論』が導き出した結果か」
「さあね」
「否定はしないか」
「でも肯定もしない」
「ならば何故言い切れる」私は振り返り、アカネ嬢に向き直る。
「爆弾魔法使いちゃんは、きっとあなたに見て欲しいから」
「何をだ」
「自分の存在を。だから、騒ぎを起こす」
「まさか、貴女は犯人を知っているのか」
「ううん。知らない。あたしが知ってるのは、爆弾魔法使いちゃんの行動から導き出される、あの子の感情だけ」
アカネ嬢の瞳は、金色に光っている。
「相変わらず、何かを知っているような口振りだな。だが、いつもはぐらかす。あなたが爆弾魔を捕まえれば、少なくともこの町に住む人々の平穏は保たれるはずだ。あなたはこの町がどうなってもいいのか」
「政治には興味ないの。自分の事で精一杯」アカネ嬢は頭を傾げて、にこりと微笑んだ。
「あなたも忌むべき人民の一人というわけか。この社会に住む人々の大部分はそうだ。自分の事に手一杯で、他人の事など顧みない。どうすれば、あなたの協力が得られる」
「そうね……じゃあ、頭を下げる？」
「必要とあらば。今はその時ではない」

「ふふん、変わったわね」
「自分ではそうは思わない。もし変わったとするなら、失いたくないものに気づいただけだ」
「順序があるわよね」アカネ嬢の言動は、どこか意味深だ。
「何が言いたい」
「大丈夫よ。あたしの力を借りなくとも、あなたは爆弾魔法使いちゃんまで辿り着くから。自分の力を信じなさい」
「結局はそれか」紋切り型の返しに、私は落胆を隠せなかった。
「うーん、それじゃあアカネさん冷たい、大っ嫌いって言われて好感度下がっちゃいそうだから、アドバイスだけ。いい？　当たり前の事を言うよ？」
アカネ嬢は、人差し指を立て、私に向けた。
「全ての可能性を精査しなさい。否定して否定して否定して、最後に残ったものが真実よ」
「確かに当たり前だな……だが、忠告として、受け取っておこう」
「イトーくん、ホントに変わったね。あたしは好きよ」
『好き』という言葉に一瞬、胸中がざわついた。
「からかうな」
「あははっ、じゃあ、からかいついでに――ちょっと待ってて！」
アカネ嬢は、店の奥へと消えた。しばらくすると、白と黒の巨大な何かが一対、店の奥から出現した。
「ふはーっ、さすがに重いわ。はいこれ、どうぞ」
「……なんだ、これは」お、重いっ！
「何って、うさぎのぬいぐるみに決まってるじゃない」
確かにうさぎだ。耳がなければ、あの有名な熊のぬいぐるみと間違えるかも知れないが。白い方は耳が二つともぴんと伸びており、黒い方は片方の耳が折れ曲がっている。
「白い方はマナちゃんに、黒い方はあの恥ずかしがり屋ちゃんにあげて」
「何故、私がっ……」この人の考えは、まったく読めない。もどか

しい。
「マナちゃんへのお見舞いと、夕焼けの空間で妹ちゃんをいじめちゃったお詫びです」
「ふん、理由付けはしっかりしているな……しかし、どうやって持って帰る」
「そのままじゃ、だめ？」アカネ嬢は、頭を傾げた。
「だめ！」反射的に、私は答えた。

道具屋からの帰路の途中、悪態をつく。
「……ったく、なんで私が、このようなものをっ」
巨大ウサギのぬいぐるみ二羽分は、重くかさばる。前を見るのも一苦労だ。
アカネ嬢、不思議な人だ。彼女の言動や行動には、妙な説得力がある。それは、今までの経験で裏付けられているわけだが。
アカネ嬢の言うことが事実ならば、爆弾魔は私に会いたがっていることになる。
だが、何故だ。なぜ『爆弾』などという手段に出たのだ。
逢いたいのならば、自ら会いに来れば良いではないか。
物部渡は、機械式の爆弾には私への悪意が籠もっていると言っていた。
悪意があるのなら、直接殺しに来ればいいのだ、卑怯者め。
とにかく、リガンに『認識回避高次元構造』回避方程式は組み込んだ。これで、二度と爆弾魔を見過ごすようなことは無くなるだろう。後は、捕まえるだけだ。
私は、学園内で起こった爆発を思い返す。
あれだけの数の爆弾を、どうやって運んだ？　どこで作った？
「――あ、いーくんだ。おーい」後ろから声をかけられた。
私を『いーくん』と呼ぶのは、一人しかいない。
「こんな時間に何をしている、藤堂」
辺りは既に、夕暮れに差し掛かっている。

幸い、本日は週末だ。隙間ターミネーターは来ないだろう。
「何って、病院からの帰り道だよ？　マナちゃんも良くなったし、もう安心だね」
「あまり一人で出歩くな」
「何、いーくん、私のお父さんみたい。それにまだ、夕暮れでしょ？　爆弾騒ぎは解決したって京香から聞いたよ？　犯人については教えてくれなかったけど」
そうか、藤堂は何も知らないのか。
葉上が、爆弾魔だったことも、そして犯人が他にいる可能性があることも。
ならば、いたずらに不安にさせるのは良くないだろう。
「それでも、何が起こるかわからん。模倣犯が出る可能性もあるし、しばらくはおとなしく――」
「そんなに私が心配？」探るような視線で、藤堂は私の瞳を覗き込む。
「何？」不意打ち的なしぐさに、鼓動が少し早まった。
「ううん、ごめん。ちょっとからかってみただけ」藤堂は苦笑した。
そして、私が持っている紙袋を見て、
「なんか、大変そうだから持ってあげる」
「いや、遠慮しておく。男が婦女子に重い物を持って貰うというのは、まるで逆――」
「はいはい。いいから、いいから」
大きな袋の片方を、藤堂に取られてしまった。
「あれ、意外と軽いね」
それは、お前が馬鹿力なだけだ。と内心思う。
「まったく迷惑なお土産だ」
「いーくんも色々大変なんだね」
「私ほど大変な人間も珍しいぞ」
「あはは、何それ」藤堂は破顔した。
「単なる冗談だ」

すると、藤堂がきょとんとした。
「……どうした」
「いーくん、変わったね」呆けたような表情で、藤堂は私を見つめる。
「お前まで、そう言うか」そんなに私は変わったか？　どこが？
「だって、ずっと……」藤堂は顔を逸らし、口をもごもごさせた。
「ん、なんか言ったか？」最後の方が聞き取れなかった。
「ううん、なんでもないよ」藤堂はにっこりと笑った。「それにしても、なんだか懐かしいねー。小学校の頃とかは、こうして毎日、二人で一緒に帰ったよね」
「ああ。帰る方向が同じだったからな」
「それは今も同じだよ」藤堂は軽く頬を膨らませて抗議した。
「それもそうだな。どうして、一緒に帰らなくなったのだったか」
「私は京香と一緒に帰るようになっちゃったし、油断したら私、バンドの先輩に練習に連れ去られちゃうし、色々な事が重なっちゃったんだよ」藤堂は眼を伏せた。
どこか寂しげに、愁いをおびた表情に見えた。
「ああ……そうだったな」はて、そうだったか？　他の理由があったような——。
「うん、そうだよ」藤堂が言うのなら、そうなのだろう。
会話は途切れ、しばらく並んで歩いた。
「……そういえば、バンド活動は、順調か？」
先日の学園祭では、わざわざ轟響先輩が探し回っていた。あの時、藤堂は逃げ回るようなそぶりをみせた。もしかしたら、何かあったのかも知れない。
「あっ、えっと、その……」藤堂は気まずそうに目をそらした。
「何かあったのなら、相談に乗るぞ。もし、お前が何かの理由で活動を休止したいのならば——」
「……それは、先輩が許してくれない」藤堂は、眼を伏せた。
「許す許さないの問題では無いだろう」

「――必要と、されてるもん」藤堂は何故か、ふてくされたように呟いた。
「……そうか」藤堂も、自分の役割を全うしているというわけか。
会話は再び途切れた。私達は揃って、大きな袋を抱えて歩く。
「……あ、でも、良かったね。マナちゃん助かって」
「ん？　ああ、そうだな。……って、お前もだ」
私は立ち止まる。藤堂も、それにつられて足を止めた。
「ん？」藤堂は首をかしげた。本当に、わかっていないのだ。
「私は、お前まで爆弾に巻き込まれたと思って……その、だな」
思わず、目をそらしてしまう。
「ひっどいなー。私はこの通り、ぴんぴんしてるよ」
怒ったような声だった。藤堂を見ると、やはり眉をつり上げていた。
それでも……。
「ああ。……だから、よかった」
……人形のように動かなくなるよりは、何倍も良い。
「いーくん？」
「本当に、よかった」
「……あはは、なんか、照れちゃうな」藤堂は頭をかいた。
片手であの重量を持っていることに繋がるのだが、そこはあえて触れないでおく。
「今度、家に遊びに来い」
「えっ？」藤堂は、はっと眼を大きく開いた。
「マナも数日後には退院するだろう。そしたら、快気祝いでもしてやろうと思う。お前も一緒にな」
「ん……ああ、そういうことね。……うん、わかった、絶対に行くよ」
藤堂は歩き出した。何故か、どぎまぎしているようだった。
「こ、これ、かわいいうさぎさんだね。マナちゃん達にあげるんだ」
そう言えば、袋の上から耳が見えていた。

アカネ嬢め、絶対に計算だ。私を会えて辱めようとしているのだ。
「……無理矢理押しつけられただけだ」
「じゃあ、一つ私にくれる？」
唐突な申し出に、私は言葉に詰まってしまった。一つはマナので、もう一つは――。
藤堂は、あははは と笑った。
「ううん、冗談。困らせてごめんね。はいこれ」
藤堂は大きな袋を私に押しつけた。二つ分は流石に重い。
「じゃあ、私、ここでいいから」
気がつけば、私の屋敷の前であった。
「家の前まで送る」
「隣だから大丈夫」
藤堂は振り向きざまに手を振った。
彼女の背中を見送るうちに、私は不安が増大するのを感じた。
何故だろうか、葉上は捕まえたのに、妙な胸騒ぎが納まらない。
「藤堂、御守りは付けているか！」
藤堂は徐ろに振り返り、手をかざす。その腕には、しっかりと御守りのリングがはめてある。
「当たり前でしょ！　いーくんのプレゼントだもん！」
そう言うと、藤堂は駆け出し、自宅の門をくぐり見えなくなった。
少し前は、家の前まで送ったものだったが。
月日は流れ、関係は変化する、か。
「……健気な子ね」長い黒髪ストレートに、ぞっとするほどの白い肌。
霧島書記長が、傍らに立っていた。
その背後には、リムジンが音もなく鎮座している。
「こうして突然現われるのは、実に久しぶりだな」
書記長は長い黒髪をさらりとかき上げ、私を流し見る。
「そうだったかしら？　それより、爆弾魔の事を調べてるって聞いたんだけど？」

「物部くんからか」
彼の名前を出した瞬間、書記長は目をそらし、前を向いた。
「ええ。気になることがあるみたい」
「彼の『才能』、『擬人化』だったか。貴女が隠すだけのことはあるな」
書記長は、瞳を閉じた。そして、眼を開き、
「知ってしまったのね。……利用しようとするなら、許さないから」
射貫くような視線が、しっかりと私を捉えていた。
「安心しろ、彼をどうこうするつもりはない」
「信用できないわ」書記長の瞳が、突き刺さるように向けられる。
「ならば、貴女が全力で守れ」
「言われなくてもそうするわ。私が、好きになった人だもの」
書記長の瞳は、揺るがなかった。強い、意志を感じた。
霧島書記長は、自分の気持ちをはっきりと表明する。それは、彼女の気持ちの強さの表われなのだろうか。
書記長の形の良い唇が、優美に動く。
「あなたも今回のことでわかったでしょう。『守りたい大切な人がいるから、より強くなれる』」
「……そうは思わない」
醜態であった。冷静さを失い、自分を見失い、気がついた時には……葉上を。
「あなた、今、自分を恥じているわよね」
図星であった。だが、悟られるのは癪であった。
「わかったような事を――」
「――わかるわ。見続けてるから。嫌でも一応、監視は必要だし」
間髪入れずに、書記長は答えた。
「だとしたら……何だ」内心を見透かされているようで、苛立たしさを感じる。
「あなたは、今感じている『恥』や『屈辱感』を、二度と体験したくは無いでしょう。だから、あなたは強くなろうとする」

「強く……？」
「人は反省しなくては前に進めないわ。そして、反省するためには挫折を経験する必要がある。それが、強くなるためのプロセスだもの」
「ふん、屁理屈だ」言っていることはまともだ。しかし、今は認めたくなかった。
「屁理屈が得意なあなたの言葉とは思えないわね。まあ、屁理屈かどうかは、未来が実証するでしょう。あなたは、強くなるから」
まさか、書記長は、私を励ましているのか？
「そして、強くなったあなたを、さらに強い私が跪かせるの」
書記長は、薄い、ぞっとするような笑みを浮かべた。
考えすぎであった。霧島京香とは、元来こういう女性だ。
「それで、何をしに来た」
「実のところ、あなたに話しかけたのは、ついでなのだけれど……」
霧島書記長は、何やらぶつぶつと呟いている。
「ついで？」
「いえ、なんでもないわ。……それよりも、爆弾魔がもう一人居るというのなら、放ってはおけないわ。あなたも動いているのでしょう？　情報を共有しておくべきだと思うの。一応言っておくけど、これはあなただけの問題じゃないから」
半ば強引に押し切られる形で、私は鮮明になった爆弾魔らしき人物の画像を渡した。
「毎回思うのだけれど、この画像はどうやって撮影したのかしら」
じーっと、書記長の探るような視線が私に突き刺さる。
「気にするな。顔の半分しか移ってはいないが、これを貴女の会社が保有している顔画像認識システムにかけて欲しい。出来るだろうか」
「顔画像認識システムというのが、何のことかはわからないけれど、調べてみましょう。私のアドレスに送りなさい」
ちっ、引っかからなかったか。書記長のアドレスに、加工した画

像を転送する。
霧島書記長は、何やら携帯を操作している。
「……結果が来たわ」
霧島書記長の顔が、驚きに変わった。
「どうやら、ヒットしたみたい。……市内に住んでるわ。『天賀谷涼』中学三年生」
「私にも見せろ」
私は霧島書記長の携帯に触れようとするが、
「――お嬢様に触れることは、許されません」
気がつけば、黒スーツにサングラスの男、織神が私の腕を掴んでいた。
毎度の事ながら、この男、気配を感じさせない。これが、霧島流暗殺術の会得者か。
「織神、離しなさい。会長くんも余裕が無いのよ。会長くんも慌てないで、今確認してるから……」
書記長は話しながら、凄まじいスピードで携帯のキーを叩く。そして、突然その表情が落胆に変わった。
「……残念だけど、この子じゃないみたい。アリバイがある。爆発のあった店から、だいぶ離れた場所にあるコンビニで、買い物をしてるもの」
「相手は天照高校のシステムに侵入した。あのウィルスをばらまいた人物の可能性がある。データぐらい書き換え可能だろう」
「いえ、データが書き換えられた形跡は無いわ。それを言ったら、全ての証拠が信用できなくなるけど？」
「ならば、何故この画像にはそいつが映っているのか」
「そうね。そこが問題だわ。とりあえずはそのコンビニを訪ねて、防犯カメラの映像を確認――」
爆発音が三回、地鳴りが響いた。
「――なに？」
辺りを見渡す。あるものが眼に入り、私は、愕然とした。

藤堂家の二階、藤堂の部屋の窓ガラスが割れ、地面に散らばっていた。

第二十七話　サイレント・ボマー

屋内は、爆発によって無秩序に散乱していた。
私と霧島書記長は藤堂の名を叫びながら、必死で彼女の姿を探す。
二階の廊下に、藤堂が倒れていた。ドクンと、心臓の鼓動が強まった。
すぐに『リガン』でスキャンする。頭を強打している様だが、命に別状は無いとの判定が出た。
私は藤堂を抱き起こし、何度も声をかける。
「……ううっ、あれ、いーくん？　……京香も？」
藤堂は、とろんとした表情で私達を見た。
「春香、大丈夫？　どこか、痛いところは無い？」
霧島書記長が跪き、藤堂の頬に手を触れた。
「うん。うっ、ちょっと頭が」藤堂は辛そうに顔をしかめた。「……ここは……？」
私はゆっくりと藤堂の体を起こし、諭すように現状を話した。
「他に……家族は？」
私の質問に、藤堂は首を横に振った。
「いないよ。今日は、お父さんとお母さんはお出かけだし」
私は内心、ほっと胸をなで下ろした。
死傷者はいなかったのが、何よりもの救いであった。
一階に降りて、実際の惨状を目の当たりにした藤堂の顔から血の気が引いていく。
藤堂がふらりと倒れかけ、咄嗟に私は支える。藤堂の体から、震えが伝わる。
「……いーくん、私……狙われたの……？」
藤堂が、自分の体をぎゅっと私に押しつける。恐怖を、感じているのだ。
「藤堂、気をしっかり、私が守ってやる。守ってやるから」

声をかければかけるほど、藤堂の震えは大きくなっていった。
「……怖いよ……」藤堂はひっしと私にしがみついた。
「酷い有様ね」
見上げると、霧島書記長が、爆発で混沌となった部屋を見ていた。
私がこう思うのも何だが、少し、書記長を冷たいと感じた。
「……あっ、ギターっ……！」私の胸の中で、藤堂が声をあげた。
突然私から離れ、自分の部屋へと駆け出す。
私達は一拍遅れて追いかけた。
ぐちゃぐちゃになった藤堂の部屋の中で、ギターを抱きしめている藤堂を発見した。
「……よかった……よかった」藤堂は、繰り返し呟いていた。
それは、私が藤堂にあげたものであり、元は、私の母のギターだった。

警察に連絡し、藤堂の両親と連絡を取った。両親はすぐに戻って来るという。
その間、霧島書記長と私の間で、一悶着あった。
この惨状では、藤堂と家族がこの家で暮らすのは当分無理だろう。お隣さんとして、困った時は救いの手を差し伸べるべきだと主張する私と、親友として、困った時は助けになるべきだという書記長の主張が真っ向から対立したのだ。
どちらが良いか藤堂にたずねてみても、戸惑うばかりで一向に解決を見ない。
「我が屋敷は徒歩二分以内の良物件だ。断わる理由があるまい」
「何よケダモノ。春香を家に連れ込んで、何をしようって言うの？春香、親友として、あなたの助けになりたいの。この男の口車に騙されては駄目よ」
よくもいけしゃあしゃあと。先程、藤堂が震えている時に、手を貸そうともしなかったくせに。冷徹女が何を言うか。
「あの……二人とも、気持ちはうれしいんだけど……」

藤堂は困った顔で、おろおろするばかりだった。
決着がつかないまま、藤堂の両親が到着した。
「あらーひどいわねー」
「うーむ、これでは生活できんなあ。こりゃ当分、ホテル暮らしか」
「あら、それも新鮮ね」
「新鮮ついでに、旅行でも行くか」
「あらーいいわねー」
両者とも、驚くべき楽天家であった。この親にして藤堂春香ありと言ったところか。
これには霧島京香も、ただただ眼をぱちくりさせるしかなかったようだ。
「お父さんっ！　お母さんもっ！」流石の藤堂も、この二人を前にしては、怒りを顕わにしていた。てっきり、両親を見るなり抱きつくかと思っていたのだが。
「これを見て何とも思わないのっ！」
指さした方向には、爆発によって生じた混沌がある。
藤堂は眉をつり上げ、事の重大さを必死にアピールする。私はその姿を見て、先程のように怯えるよりは、こちらの方が良いのかも知れないと思ってしまった。
「……やはり、暮らせんなあ」
「そうねぇ」
ご両親の反応は、変わらなかった。
「……もう……やだ……」藤堂は、がっくりと肩を落とした。藤堂は藤堂なりの苦労があるのかも知れない。
しかし、今がチャンスだ。
「ご両親、そのことでお話が」
「抜け駆けはずるいわ」
両親に訊ねるなり、この論争はすぐに決着した。
「じゃあ、近い方で。京香ちゃんには悪いけど」
霧島書記長は、苦々しげに視線を落とした。

屋敷に着くなり、藤堂のお母様が、ほんわかとした声をあげた。
「あらー素敵なおうちねー」
「ああ。爆弾騒ぎのおかげで、こんなに広い屋敷に泊まることが出来るなんて、案外、運が良かったのかもな」
実に楽天的で、ある意味で強いご両親である。
「もうっ、お父さん、お母さんっ、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！　家がぐちゃぐちゃになっちゃったんだよっ！」
「大丈夫よ。また片付ければいいわ」藤堂母は、にこりと微笑んだ。
「修繕費には、保険金が下りるから大丈夫だ。その辺は抜かりないぞ。むしろ、良いリフォームの機会になったじゃないか」藤堂父は、したり顔である。
「……もう、二人とも、ほんとに楽天的なんだから」藤堂一人が、暗い顔をしていた。
「――まあ、そう怒るな藤堂。家族が全員無事で、何よりじゃないか。家族は、一緒が一番だ」
「いーくん……」
「では、案内しよう。三人となると、少々大きめの部屋が良いだろうから……」
「……あのう、そのことなんだけど」
思い詰めた様な表情で、藤堂は訊ねる。
「私、一人部屋にならないかな」
「ん？　どうした、親御さんと一緒じゃ、恥ずかしいのか」
「えっ、いや、そうじゃなくて」藤堂は頬を染めた。
「うふふ、春香は恥ずかしがり屋さんね」藤堂母は含み笑い、
「久しぶりに家族三人並んで寝られると思ったが……」藤堂父は残念そうに眉を曇らす。
「春香も、大人になったと言うことよ」
ううっ、と藤堂は頬を染めたまま、困ったような顔で俯いた。
「お願い、いーくん」

藤堂は申し訳なさそうに、上目遣いでお願いした。
「まあ、お前がそう言うなら」不思議だ。爆弾に狙われ、恐怖を感じているはずなのに。
「あの、ほんと、ごめんね」
「なに、困った時は助け合うのがお隣さんだ。それに、部屋ならまだまだ沢山余っているからな」
「……うん、ほんと、ありがとね」藤堂は、目尻に涙を溜めて恥ずかしそうにした。

エルレインがなかなか帰宅しないので連絡してみたところ、葉上が目覚めるまで意地でも帰らないという。マナは体力が回復するまで強制入院。長谷川は海外研修中。
藤堂の家族が屋敷に来なければ、私は一人だったわけだ。
藤堂家と共に食卓を囲み、私は擬似的な家族の暖かさを感じた。
一歩間違えれば、この暖かさも、爆弾によってばらばらにされていたかも知れない。
そう考えると、爆弾魔の行なった犯罪の卑劣さを感じずにはいられない。
その夜。自分の部屋へと向かう途中の廊下で、可愛らしいパジャマ姿の藤堂を見つけた。何やら、口に手を当て、きょろきょろと心細そうな様子である。
「藤堂、どうした？」
「あっ、ごめんいーくん。私、また迷っちゃって」
「そうか。広すぎるのも、考えものだな。ん？　だが、藤堂、お前は家に来たことが無かったか？」
そう言うと、藤堂はむっとして、
「それは小学生の頃の話でしょっ！　久しぶりに来たら、間取りとか全部変わっちゃってるんだもん！　昔はもっと和風だった気がする！　それに、普通の人が聞いたら嫌味にしか聞こえないよ。気をつけないと」

少し、おかしさを感じた。
「いーくん？」
「いや、何でもない」
藤堂も、私のことを怒ってくれるのだな。
「部屋まで送ろう」
藤堂は口に手を当て、ぶんぶん手を振った。
「えっ、いいよいいよっ。その、悪いし……」
「戻れるのか？」
藤堂の動作が、固まった。
「……ううっ……お願いします」藤堂は申し訳なさそうに、ぺこりと頭を下げた。
私は、藤堂を部屋の前まで案内する。
「おふろ、おっきかったね」
「ん？　そうか？」
「うん。小学生の頃は、もう少し小さかった気がする」
「はて、藤堂はウチの風呂に入ったことがあったか……」
「二人で……」藤堂は、ぼそっと呟いた。
私は、絶句した。藤堂を見ると、湯気を噴き出してもおかしくないほど、茹で蛸のように真っ赤であった。
「子供の……頃だったし……」藤堂は恥ずかしそうにちらりと私を見て、すぐにそらした。
「う、ううむ。そうだな」
子供の頃であれば、しょうがない。既に、時効だと思う。思うことにする。思うしかないではないか。あの時私は無知であった！
ああ、無知とは罪だ！
――その時、爆発音が響き渡った。屋敷が、揺れた。
「――いやあっ……！」藤堂を見ると、その場にうずくまり、がたがたと震えていた。
屈辱だった。私の屋敷にまで、爆弾魔の侵入を許したというのか。
爆発の場所を特定したいが、藤堂も放っておけない。私は藤堂を

なだめた後、爆発音の発生場所を特定した。
藤堂に割り当てた、部屋であった。
その事実を知った時、背筋に寒気を覚えた。

新たに割り当てた部屋の扉を開け、藤堂を部屋の中へと誘導する。
部屋の中は、リガンの探査機能を用いて、全て検査済みである。
「何かあったらすぐに呼べ。私は、扉のすぐ外に待機しているから」
藤堂は心配だ。だが、自分の屋敷とは言え、深夜に男女が二人きりで一つの部屋にいるのは、とてもよろしくない。よろしくないったらよろしくない。
故に、マナがぐずった時と、同じ作戦に出ることにした。
「……う、うん」藤堂はやはり、心細そうであった。
私が扉をゆっくり閉めようとすると、突然藤堂がドアの影から身を乗り出した。
「あっ、あのさっ……ちょっとだけ、お話しして行かない？」
一瞬、私は躊躇した。しかし、藤堂の様子を見ているうちに、考えを改めた。
藤堂の瞳が、潤んでいたのだ。やはり、一人では心細いのかも知れない。
結局私は、藤堂の招待を受けた。
部屋では、たわいもない話をした。子供の頃の話題が、一番多かった。
初めは藤堂の表情も硬かったが、話をするうちに、少しずつ柔らかな表情を見せるようになった。
藤堂が、ふと時計を見た。表情が、驚きに変わった。
「あっ……こんなに遅い時間になっちゃってたなんて……あの、色々……何から何まで、ホントごめんね。迷惑だったでしょ」
藤堂は話を切り上げ、慌てて立ち上がる。
「何を言うか。それより藤堂、本当に一人で大丈夫か？　やはり、家族と一緒に」

「私は大丈夫だよ」藤堂は、ぎこちなく笑った。「一人の方が良いよ。その方が、安心だから」
「安心？　心細くは無いのか？」
藤堂は俯き、組んだ両手を、じっと見つめた。
「藤堂、お前……」
「それに、お父さんとお母さんは、絶対に巻き込まないから」
藤堂は、微笑んだ。
「爆弾魔に狙われているの、私なんでしょう？」
「藤堂……」強がっているのが、見え見えだった。
「私、いーくんが思っている以上に、平気だよ。私ね、今、すごく変な気分なんだ。怖い気持ちと、嬉しい気持ちが、一緒になってるの」
「嬉しい？」怖いのはわかるが、何故、嬉しいのか。
「爆弾魔は怖いけど……こうして、いーくんとゆっくりお話できたのも久しぶりだから。私の家が爆弾魔に狙われなかったら、こういった時間も無かったなって……私、ひどい子だよね」
自嘲するように、藤堂は苦笑した。
「本当はいーくんも、あまり私に近づかない方が良いんだよね……ごめんね、私のせいで、めちゃくちゃになっちゃって、私、明日には出て行くから。いーくんに迷惑かけないから――」
「無理をするな」藤堂の頬に触れた。
震えていた。『リガン』を使わずとも、彼女の気持ちはわかった。
「迷惑だなんて思っていない」
「……ひどいな、いーくん」
藤堂は一転、泣き出しそうな表情になった。
「私……っ」
藤堂は、糸が切れたようにしゃくり上げ、泣き出してしまった。
「……怖いよぉ」
私は、言わなくてもいいことを言ってしまったのかも知れない。
謝罪の意味も込めて、私は自分の胸を貸した。

「すまない」
自然と、その言葉が出ていた。色々な、意味が含まれていた。
藤堂を泣かしてしまった事への謝罪。
巻き込んでしまった事への謝罪。
そして、己の不甲斐なさ。
屈辱。乗り越えなければ、もっと、強く。
謝罪の言葉など、二度と、吐かなくても良いように。
「霧島書記長の言うとおり、私は、人の微細な心情がわからないのかも知れない。いつの間にか傷つけ、恨まれている。爆弾魔が狙っているのは、私だ。藤堂は、自分を責める必要はない」
「……いーくん、ほんとに、変わっちゃったね」
藤堂が、私の胸に顔を埋めながら言った。
「そうだろうか」
藤堂は私の胸から離れ、しゃくり上げながら、涙に潤んだ瞳で私を見た。
「少し前の、いーくんだったら、そんなこと、絶対に、言わなかった」
「そうか」
「いーくんが、やさしいの、知ってるのは、私、だけだった」
そう言う表情は、どこか私を批難しているようにも見えた。
「お前が悲しむことは無い。私が、必ず守ってやるから」
藤堂は、頷いた。
それ以上は言葉が出ず、藤堂も言葉を返さない。
しばらく、私達は無言で見つめ合うことになってしまった。
「……あのね、いーくん、私――」
突然、スマートフォンが振動した。
霧島書記長だった。こんな時間にかけてくるということは、もしかして、爆弾魔について何かわかったのかも知れない。しかし、今は……。
「いいよ。出て」涙目で、微笑んだ。

「……しかし」
「いいから」
私は、渋々通話を押した。
〈会長くん、まさかとは思うけど春香を襲っていないでしょうね〉
「品行方正だ」まさか、そんなことでかけてきたのか？
〈なら、良いのだけれど。ちょっと、春香に変わってくれるかしら〉
「ああ、わかった。藤堂、書記長がお前を呼んで――」
〈――やっぱり、二人は一緒にいたのね。こんな時間に〉
私は、自分が罠にはまったことに気づいた。
「誤解するな書記長！　これはだな！」
〈バカ。だったら、気をつけなさい〉
通話は一方的に切られた。いつでも、見張っていると言うことか。
「一体、書記長は何を誤解し、何をしたいのか」
「心配してくれてるんだよ。きっと」藤堂は涙を拭い、無邪気に微笑んだ。
――破砕音が立て続けに轟き、屋敷が揺れた。
何度も繰り返し体験した感覚が、何が起こったのかを容易に推測させる。
藤堂はしゃがみ込み、がたがたと震えていた。彼女の感じている恐怖が、痛いほど伝わってきた。
爆弾は、屋敷でも大きめの部屋を破壊した。
ちょうど、家族三人が入るのに、最適な部屋を。
爆弾魔は、藤堂が恐怖のあまり、家族と共に過ごすことを予想していたのかも知れない。
ふと、エルレインの言葉を思い出す。
――藤堂さんが……そんな……未来は、変わらないのか。
藤堂を落ち着かせ、私はエルレインに連絡を取る。深夜にもかかわらず、彼女は起きていた。
そして、訊ねた。
エルレインは、肯定した。

藤堂春香は、爆弾魔の爆弾によって命を落とすと。

爆弾魔の捕獲を急がねばならない。最悪の未来が、現実になる前に。

未来は変えられないとか、運命だとか、小難しい理屈は必要ない。やるべき事をやるのだ。最善を、尽くさねばならない。

藤堂を一度、書記長に預け、私は霧島書記長が特定した『天賀谷涼』なる人物とコンタクトを取った。

驚いたことに、女性であった。しかも、とびきりの美人であった。性別の情報を明かさなかったのは、霧島書記長の嫌がらせか、単なるミスか。

いきなりの訪問に不審がられた私は、野次馬の写真を見せた。

本人は、知らないと首を横に振った。

女性のことなら松田諜報委員に。しばらくして、詳しい調査内容が報告された。

結果から言えば、彼女は白であった。

彼女の端麗な容姿のおかげか、コンビニの店員が、事件当時に彼女が買い物をしたのを覚えていたのだ。

さらに言えば、私と天賀谷涼との間には、何の接点もないことが明らかとなった。そして、藤堂春香とも。

ならば何故、天賀谷涼らしき人物は、あの画像に映っていたのか。

私はリガンのメモリー機能を起動し、爆弾魔との対話を再生する。

爆弾魔の言動を確認するが、外道の極みのような人格だ。聞いているだけでふつふつと怒りが沸き起こってくる。

その中で、気になる言動を見つけた。

〈お前らの行動は全て見張っている〉

確かに、爆弾魔は私達の行動を逐一監視しているような言動だった。

おそらくは、葉上の植物を使ったに違いない。

しかし、私の視点からの映像では、植物を捉えることが出来ない。

待て。そう言えば、アカネ嬢はリガンを操作し、私の主観視点から、客観的な視点を作りだした。……あの人に出来て、私に出来ないはずがない！

――視点が、ぐるりと回転した。

成る程。まさか、見ていたもの以外の場所まで見る事が出来るとは。

知らなければ、やろうともしなかっただろう。

いったい、どのような仕組みなのか気になるが、今は気にしている場合では無い。爆弾魔へと繋がる手がかりを見つけなければ。

私は、視点を移動させる。まるで、神の視点だ。と、思いきや、どうやら動かせる視界には限界があるようだ。

少なくとも、店全体は見渡せるようで、問題はなさそうだが。

しかし、植物らしき物体は見つからない。リガンの形状検索機能を使用しても、発見できなかった。

防犯カメラならあるが――映像の中の私が怒鳴った。

「――貴様マナに何をしたあああっ！」

べらべら喋り続けていた音声が、一瞬、途切れた。

〈……それだよ。その顔が見たかった〉

防犯カメラの角度からは、私の表情を読み取ることが出来ないのだ。

映像を精査し、隠しカメラ類を探してみるが見つからない。

もちろん、爆弾自身にもカメラのようなものは搭載されていない。

これは、どういうことだ……？

〈無駄だよ。どうやってお前らを監視しているかなんか、絶対にわかりっこ無いからね〉

爆弾魔の過去の言動が、私をあざ笑うかのように発せられた。

爆弾魔は、葉上のように『何らかの才能』を有している？

いや、ここで非科学的な妄想を持ち出すべきではないだろう。

「おい、爆弾魔」

爆弾魔は答えない。スピーカーは沈黙している。
「――おいっ！　聞いているのか！」
〈……ヒヒヒッ……〉
不愉快な笑い声が、スピーカーから発せられた。
……妙な、違和感を感じた。

マナが運び出される映像が続く。
私が黒いポップアップを見たシーンだ。叫んでいる。
群衆の最前線に、緑のフードの人物はいた。
私は客観視点に切り替え、緑のフードの人物を追い続ける。
――緑フードの人物が、突然消えた。
いなくなったのではなく、文字通り、消えたのだ。
私は視点を移動させる。いくらリガンといえど、群衆の中までは追えないようだ。
巻き戻す。緑フードが消えた瞬間を、スローで確認する。
――消えた。フレームレベルで確認する……消えた。フレームが切り替わる一瞬で、消えてしまった。
まるで……瞬間移動か、透明にでもなったかのように。いや、それはあり得ない。奴が来ているフードは、井内の方程式によって無効化されている。
わけがわからない。なぜ、フードは消えた？
あちこち視点を動かすうちに、例の黒猫を見つけた。
黒猫は、私から見てちょうど、群衆を挟んで、向かいの塀の上から見下ろしている。
……待て。私は映像を巻き戻し、黒猫の視点と同化する。
マナが運ばれてくる。私が怒鳴る。藤堂が止める。救急車が到着し、私達が乗り込むまで、一部始終を見守る。救急車の後部ドアが閉まった瞬間、黒猫の視点は途切れた。
……ありえない。緑フードなど、一度も確認できなかったではな

いか。
あの猫は嘘をついていたのか？　いや、愛美は言っていた。猫は嘘をつかないと。
矛盾している。ならば、確認するだけだ。

私は愛美を呼び出した。もちろん、例の黒猫も一緒に。
「これが、例の黒猫か」
「くろにゃあだよ」愛美の腕の中で、見覚えのある黒猫が、にゃあと鳴いた。
「検証の結果、その猫が嘘をついている可能性が出てきた」
「うそだーっ！　くろにゃあは嘘つかないもん。人間とは違うもん。ねー、くろにゃあ」
黒猫は、ふーっと鳴いた。
「ほら、違うって！」
私はスマートフォンに映像を流す。
「いいか、ここの角度からは、緑のフードは見えない」
「でも、くろにゃあは見たって言ってるもんっ！　怖い人を見たって！　すっごい叫んで！　とっても怖かったって！」
「……待て。今、なんと言った？」
「くろにゃあは見たって！」
「――その後」
「えっ……？」
「その後だ。なんと言った、緑のフードが、叫んだ？」
「……うん。くろにゃあ、そう言ってる」
どういうことなのか。何か、意思疎通で齟齬が生じている。
……そういえば、私はあることを思いだした。
「その猫に一つ訊ねる。これは、何色に見える？」
私は、自分の黒髪を指した。
愛美は猫に訊ねる。にゃにゃにゃーおとは言っているが、言葉でと言うよりは、ボディランゲージで伝えているように見える。

「……うん……緑？　だって」
なるほど。これで納得だ。
「……そうか。ここにも、認識の違いがあったとは」
「どういうこと、いかちゃん？」
私は、リガンの画像を操作し、黒猫に見せる。
「うん。位置は間違いないって。でも、人が違うって言ってるよ。それに……それって」
愛美は、困惑していた。なぜならば、画像に写っていたのは、
「なるほど。その猫が見たのは、私だ」
正確に言えば、群衆に向かって咆えていた私だ。『主観』と書かれた人型の枠に、私の全身画像を貼り付けたものだ。
私の怒る姿を見て、黒猫は怯えたのだ。
「だから……怖い人か」
しかし、まだ矛盾は解決していない。
「その猫は、爆弾魔らしき人物……まあ、この場合は私なのだが、私を見て、緑のフードを被っていると言った。だが、この画像の私は、フードなど被ってはいない。少なくともこの画像に写っている私は、黒猫が見たフードの人物と同じ場所、同じ時間に立っている。しかし、その黒猫は、画像に写っている人物が違うという」
「うーん……頭痛くなってきた。どうしていかちゃんが、みどりちゃんと一緒の所に立ってるの？」
「わからん。だが、違いと言えば、フードの有無ぐらいだ。考えられる結論としては、黒猫の直視ではフードが見え、この画像ではフードが見えない」
「わけわかんない」
「いったい何を見てフードと勘違いしたのか。そもそも、フードは緑だったのか？　いや、そもそも、フードだったのか？　愛美、聞いて見ろ」
愛美は黒猫に訊ねる。黒猫も、鳴き声としぐさで返しているようだ。

「……うん……何かに包まれていた……って。濃い、緑だって」
私は、理解した。
「なるほど。確かに、この時の私は、包まれているだろうな。黒い、炭のような物質に」
あの時の私は、マナの引き起こした不思議によって、黒い炭のようなものに、全身を『包まれていた』。
「でも、くろにゃあは、緑だって――」
「その猫は、私の髪が緑だと言った」
「えっ？」
「その猫には、私の髪が緑に見えるのだ」
私はスマートフォンを操作し、猫の視覚についての情報を表示する。
「猫の瞳は、赤色を認識しづらい構造になっている。つまりは、人と猫の間で、知らぬ間に認識の相違が発生したのだ」
『認識回避高次元構造』を回避する方程式を組み込んだ時にも、高次元構造部分の赤色が激減する。つじつまは合う。
それを聞いて、愛美はショックを受けたように愕然としていた。
「愛美、全然知らなかった」
そして、とても悲しそうな表情をした。
「いかちゃん……ごめんなさい」愛美は黒猫を、ぎゅっと抱きしめた。
「お前のせいではないさ。人と猫の視覚の違いを考慮に入れなかった私の落ち度でもあるし、そもそも、お前が動物たちと意思疎通が出来なかったら、この画像の爆弾魔も見つからなかった。カクレヤナギの性質もな。そうなったら、多くの爆弾が、そのまま爆発していたのだ。お前は、多くの人々の命を守った。充分に自分の役割を果たしている」
「うん……ありがと……いかちゃん、やさしいね」愛美は、薄く笑みを浮かべた。
「私は事実を言っているだけだ。しかし……だとすると、こいつは

――愛美達が追っていた、猫たちが目撃したフードの人物とは、何者なのか」

「あっ、そっか。いかちゃんは救急車に乗っていったから、にゃあちゃん達が目撃したのは、違う人間って事になるよね」

「その通りだ。そして、その人物こそが爆弾魔であり、私が追うべき対象という事になるのだが……」

そもそも、こいつは誰なのか。未だ、何の手がかりも掴めていないことに、変わりは無かった。

その時、スマートフォンが振動した。ディスプレイには、

『Ｔｅｌ．素敵なおねーさん』と書かれている。

〈あ、もしもし、イトーくん？〉

「この番号は教えていないはずだが」

〈まあまあ、細かいこと気にしない〉

「まあ、あなたならやりかねないとは思っていた」

〈意外と冷静で面白くない。もっと驚いてよ〉

「さっさと本題に入れ」

〈リガンに侵入した『ゆんゆん』ウィルスの挙動がわかったわ。どうやら、第２層の描画系をいじくった見たいね。上手く処理したつもりでしょうけど、痕跡があったわ〉

「描画系？」

〈ええ。リガンのコアは浸食されなかったから、あなたの言うポップアップまでは浸食されなかったみたいだけど、気持ち悪いわね。描画内容までは特定できなかったけど、時刻がわかるから、その辺調査して見ると面白いかも〉

「今回の事件と、何か関係が？」

〈それはわかりません。あ、でも、そう考えるのは自由よ。なんてったって、根源的な所では――〉

「――全ての事象は繋がっている、か」

〈イトーくんも話せるようになってきたわね〉

「アカネ嬢、そのウィルスが発する電波を検知できないだろうか。

盗聴器を見つけるみたいに」

〈無理ね。既に町中に広がっているもの。ブザーなんて付けたら、それこそ四六時中鳴り止まないでしょう。まあ、害はないみたいだけど、なんか気持ち悪いよねー。それじゃま、がんばって。あたしの用事はそれだけだから。――じゃね！〉

「おい、ちょっと待――」

通話は、一方的に切られた。すぐさまリダイヤル。

――おかけになった電話番号は、現在使われておりません……。

……なるほど。流石は魔女だ。どうせ今あの店に直接乗り込もうとしても、不思議な力で拒絶されるのがオチだろう。

「……考えれば考えるほど、わからなくなるな」

「あっ、いかちゃんも？　愛美もだよ。一緒だね！」愛美は嬉しそうだ。

「そんなことで喜ぶな」

「でも、そんなに細かいこと考えなくても、捕まえられればいいんだよね。……じゃあ、おびき寄せちゃえばいいよ」

「そう簡単にいくか。少なくとも、私に恨みを抱いているのは確かなようだが。そうなると、標的はこの町全体となってしまう。とてもじゃないが、おびき寄せるのは無理だ」

「うーん……人間って、複雑」

「お前も人間だろう。少しは自覚を持て」

「いかちゃんは、いちいちうるさいなー」愛美は口を尖らせた。

「そもそも、犯人がどこに爆弾をしかけるのかすら……」

藤堂春香は、爆弾魔の爆弾によって命を落とすとエルレインは言っていた。

ならば、藤堂を囮に……駄目だ駄目だ駄目だ！　危険が多すぎる。

いや、それだけではない。

「……気をつけろ」

「ん？」愛美は、小首を傾げた。

藤堂だけが、危険なのではない。

「生徒会メンバーは、出来るだけ固まって動け。物部くんや、本郷の側にいれば安全だ。それと明星会計委員が作った御守りは、絶対に肌身離さず身に着けておけ」
「うん。もちろん身に着けてるよ、愛美たちの印だもん。……いかちゃんも気をつけてね」
「言われなくとも」
エルレインが思い出していないだけかも知れない。私が藤堂だけに絞って、他に手を抜けば、全員が死ぬ可能性だってあるのだ。

仮に今回の犯人が、ウィルスの作者だとする。すると、相当な技術を持ったハッカーだということになる。
ならば調べるのは、植物ではなく、機械だ。
考えられるのは、潜水艦のソナーのような構造。複数の電波の反射から、物体の位置と形状を割り出す技術。
だが、爆弾魔はこう言っている。
〈いや、素晴らしかったよ。マナちゃんは期待にこたえてくれた。ばっちり記録させて貰ったよ〉
この言葉がはったりでなければ、奴はマナの行動を完全な形で記録している可能性が高い。完全な、映像として。
屋敷の地下、井内の研究室を訪ねた。警察が応酬した資料を確認するためだ。
「井内、マナと私が爆発に巻き込まれた時の、防犯カメラの映像が見たい」
「あー、ちょうど今、井内ちゃんの気になる気になるなんでかなー――」
「早く！」
「どうやら無駄口を叩いている暇はないようだね」
マナが手錠をはめられる前後と、店の中にいた人達が避難してからの映像が無かった。
「残念だけど。当然のように消されてるよ」

「ちいっ、やることはやっていると言うことか」
「でも、おかしくない？」
「何が」
「いとくんの映像、見せて貰ったけど、爆弾魔って完全に愉快犯っぽいじゃん？　なんで、マナちゃんの腹踊り映像だけを独占するのかな」
「犯人の独占欲だろう」
「でも、公開した方が、世間を騒がすことができるよね。きっとその方が盛り上がるよ。マナちゃんばいんばいんほあーって。つか、井内ちゃんもその映像を全力で欲してます。ネットをサルベージしてますが、一向に見つかる気配はありません。非常に残念であります」
井内は眉間にしわを寄せ、険しい表情を作った。変態め。
「その割には、マナちゃんの飲酒疑惑については、おもしろおかしく情報提供してるんだよね。結構、炎上しているよ？」
「炎上？」
「批判の嵐って事。なのに、幻の腹踊り映像は、いっさいありません。おかしくね？」
「つまり、犯人が映像を公開しないのは、他の理由があると？」
「うん。そんな気がするんだ。直感だけどね」

私は防犯カメラの映像に映っている客の画像を霧島書記長に転送した。
この中で私と藤堂に関係する人物がいないか、念のためだ。
可能性は、潰していかねばならない。
まあ、望みは薄い。爆弾魔にとっては消されたところが重要であり、逆に消されていないところは重要ではないのだ。
防犯カメラの映像で消えた箇所が重要ならば、消えた時間にいた人物に、直接話を聞けばよい。
藤堂と一緒に、マナの病室を訊ねた。

「藤堂、マナ、辛いだろうが、あの喫茶店での事を聞かせてくれ」
「……うん。わかった」
「もちろんです。辛くなんかありませんっ」マナは白く小さい手を、ぎゅっと握った。
私は、私が到着する前に、何があったのかを聞いた。
「わたしが食べ終わって、なんだか……おしっこに行きたく――」
「直接的な表現過ぎる。お手洗いとか、レストルームとかにしろ」
「んもうっ、こんな時までお説教しなくたって、いいじゃないですかっ」
マナはほっぺたを膨らまし、不機嫌アピールをした。
「続けろ」
「……まったく。お手洗い……ですか、に行って、戻ってくると、テーブルの上に変な箱が置いてありました。で、座って箱に触れようとしたら――」
――かしゃり。と、手錠のようなもので繋がれてしまったと言う。
「犯人を見たのか」
「……わかりません。あっ……！　と思って、自分の腕に手錠がついているのを見て、それで顔を上げた時には、もう、誰もいませんでしたから」
「藤堂は、その瞬間を見たか？」
「ううん、私は、撮影機材の片付けをしてたから。マナちゃんの悲鳴が上がって、気づいた時には、箱と手錠に繋がれてた」
犯人は直接、マナの腕に手錠を繋いだわけか。
何故、そのようなリスクを冒す必要があったのか。いや、爆弾魔にとっては、大したリスクではなかったのかも知れない。なにせ、カクレヤナギ改良種のフードを所持しているのだろうから。実質、透明人間であるのと同じだ。
店の下では、葉上が働いていた。葉上が実行した可能性もある。
故に私は花屋の店長に連絡を取り、話を聞いた。
葉上は途中で仕事を抜けることは無かったという。

霧島書記長から、連絡が来た。
客、店員、店主含めて全員の行動履歴を検索したところ、私と藤堂に接点が無いばかりか、天照高校内で見つかった爆弾を設置できる可能性は、全員に無いという結果が出た。もちろん、どの人物も、卓越したコンピューターのスキルを持ち合わせてもいない。
あと考えられるのは、最初からカクレヤナギのフードを被った爆弾魔が店に入り、マナに手錠をかけ、そのまま出た可能性だが……。
愛美に確認を取る。くろにゃあは、店の向かいにある塀の上に座り、ずっと店を見ていたという。
緑のフードを被った人物は、店に入らなかったらしい。
……全ての可能性が、消えた。

私は、葉上の病室を訊ねた。
エルレインに話を聞いたが、目覚める気配すらないとのことだ。
病室にはもう一人、来客がいた。
「物部くん……？」
「あ、こんにちは。会長さん」物部渡は、どこか浮かない表情をしていた。
「どうしてここに？」
訊ねると、渡は、眠る葉上を見つめた。
「きっと……人とは違う自分に、戸惑っていたと思います」
その一言で、渡がなぜ葉上を訊ねたのかがわかった。
「話を、聞いてみたかった。それだけなんです」
「人と、違う『見え方』を持つ、人間にか」
渡は、頷いた。
「僕も、葉上先輩みたいに……何か事件を起こしてしまうんじゃないかって……」
「物部くん、君は――」
「――少し間違えただけで、人を傷つけてしまうかもしれない。僕は、それが怖いんです」渡は、ぎゅっと拳を握り固めた。

「私が、そうはさせない。二度とだ」
渡は驚き、私を見た。そして、微笑んだ。
ほっとしているというよりは、諦めたようにも見えた。
渡は礼して、病室を後にした。
「不思議な子だよな」エルレインが口を開いた。
「彼も、苦しんでいるのだ。自分の『才能』に」
「『才能』か。……あの子に、不思議なことを聞かれた」
見ると、エルレインは俯いていた。
「あなたは、モノですか、人ですかって」
エルレインは片手で、私のペンをくるくると弄んでいた。
「あの子は、特定のモノと、人の区別がつかないそうだ」
「……そうなんだ」エルレインは何やら、浮かない表情であった。
「どうした」
「……答えられなかった。自分が、人なのか、モノなのか」
エルレインは、泣き出しそうな表情で、私を見る。
「アタシ、眠ってないんだ。……ううん、正確に言えば、眠くならない。眠らなくても、平気で、疲れなくて……こんなアタシは、本当に人間なのかなって」
「お前は、私の娘だ。どんな存在だろうと、それは変わらん」
エルレインは、頷いた。何度も。
「体は疲れていなくとも、精神は疲れているだろう。ほれ」
私はエルレインに向かって硬貨を放り投げた。
「それで暖かいものでも買って、少し休憩してこい。お前はがんばりすぎだ」
「うん、ありがとう。……ごめんね。変な事言って」
そう言い残し、エルレインは病室を出た。
私は、葉上に向き直る。
「もう、お前しか、あてはない」
私は、病院のベッドの上で眠り続ける男に、語りかける。
「葉上、答えろ」

爆弾魔は、葉上が作りだしたカクレヤナギの改良種を保持している。葉上と接点があったはずだ。爆弾魔の正体を知る一番容易な手は、葉上を拷問する事なのだが……葉上は依然として目覚めない。ならば……昏睡状態の人間に、有効なのかはわからないが、試させて貰うぞ。

――キュイイイン！　私は『Ｒｅ．眼』を起動させる。

「葉上、答えろ。爆弾魔の情報を示せ」

葉上の周辺に、ポップアップが生じる。

《死者のリスト》《理不尽な運命》《抑圧》《強烈な破壊衝動》《妄想・暴走》《愛・憎しみ》《止めなければ》《殺さなければ》

これらの文字が書かれたポップアップが、葉上の周りを回っていた。

《真由、俺は、あの人を、殺さなければ》

これは、なんだ？　爆弾魔の手がかりなのか。

「葉上、爆弾魔は……誰だ」

《拒絶》

葉上の表情が、苦痛に歪む。

「……馬鹿な。庇っているのか？」

《拒絶》

「お前が庇えば、そいつは人殺しになるかも知れない。答えろ、葉上。止めたいのではないのか！」

《拒絶》《拒絶》《拒絶》

「――葉上！」

《拒絶》《拒絶》《拒絶》《拒絶》《拒絶》《拒絶》《拒絶》《拒絶》《拒絶》

ポップアップが、全てを覆い隠してしまった。

突如として機械の警告音が響き渡る。脈拍が、異常な数値を刻んでいた。すぐに看護師が駆けつけ、葉上に呼びかける。

医師が鎮静剤を処方し、葉上の容態は落ち着いた。しかし、ポップアップも見えなくなってしまった。

「どういうことだ。爆弾魔は、葉上が庇うような人物なのか？」

全ての可能性が途絶えたかに見えた。

私は屋敷の地下に戻り、井内の元で、もう一度事件を再検討することにした。

「うーん……気になる」

「何だ、言ってみろ」

「いやあ……」井内は、口を紡ぐ。

「なんでも良い。今は手がかりが欲しい」

「たぶん、不謹慎だって言うと思うんだけどさ……これだけの騒ぎになっても、死人が一人も出てないんだよね」

「確かに。だが、それは良いことだ。偶然という可能性は？」

「あるこたあるけど。でもさ、その割にいとくんとマナちゃんが巻き込まれた時のって、完全にアウトじゃん？　井内ちゃん、思うんだよね。いとくんとマナちゃんって、あの時、何で助かったんだろうって、すごく疑問なんだけど」

流石は直感型の天才だ。着眼点が鋭い。

だが、まさか、『魔法だ』などとは口が裂けても言えない。

私自身、半信半疑なのだ。

故に、私は口をつぐむしかない。

「ま、それを置いといても、あの時の爆弾魔は、一線を越えてた気がするんだよ。……それに比べて、最近のって、おとなしくない？」

「おとなしい？　爆弾魔は藤堂の家や、私の屋敷にまで爆弾をしかけたのだぞ。エスカレートしているように、私は思うが」

「うーん、でもさ、妄執みたいなものが減少したように思うんだ。あれ以来、爆弾魔からのメッセージも無いじゃん？　劇場型でもなくなっちゃったし、惰性でやってる感じかな。なんとなく、爆弾魔は飽きないのかなーって」

「犯罪に飽きるも何もあるか」

「あるよ。井内ちゃんだって、初めはすっげーおもしれーげーむだ

ーって始めるけど、作業を強いられると、だんだん飽きてくるもん」
「ゲームと一緒にするな」
「一緒だぜ？　物事の本質は暇つぶしですよ？　人間は必ず飽きが来る。飽きが来ると、新鮮さを求める。爆弾魔は、必ず次の手に出るはずなんだけど……」
スマートフォンが震えた。物部渡からだった。
〈会長さん……僕、僕どうしたら――〉渡は、かなり動揺していた。
「何があった」
〈先輩が……〉
ひやりとした。まさか、藤堂が……。
〈霧島先輩が、爆弾の爆発で――〉
霧島、京香、だと……？
〈――意識が……戻らなくて〉
一瞬、私は目の前が真っ暗になった。あの、霧島京香が？
私の好敵手であり、地位を虎視眈々と狙う、あの、霧島京香が……？
〈本郷くんは暴れて手が付けられないし、一体どうしたら……〉
「爆弾魔は、キョウちゃんを狙ったんだ」
井内が、私のスマートフォンをひったくった。
「井内、お前――」
しっ、と、井内は口元で人差し指を立てた。井内がスマートフォンを操作すると、物部渡の声が聞こえてきた。スピーカーモードに変えたのだろう。
〈あなたは？〉
「いとくんの屋敷の座敷童です」
〈……〉沈黙が流れた。
「ごめん、嘘。一つ教えて、キョウちゃんは、いつ、どこで狙われたの？」
〈織神さんの話では、屋敷内のバスルームで爆発が起きたそうです。霧島先輩はちょうど入浴からあがったところで、それが幸いしたみ

たいなんですが……瓦礫の下敷きになって、本郷くんが駆けつけなかったら、危なかったとか〉

「へえ。あのひ弱そうな子がねぇ」

「今の本郷は、お前の知っている本郷とは違う」

いじめられっ子がガキ大将になったような、大きな変化があったのだ。

「そうなんだ。外の世界の移り変わりは激しいね。……あれ、ごーちゃんは、なんでいたの？」

〈霧島先輩を守るって。織神さんに頼み込んで、ボディーガードをしていました。本郷くんは犯人じゃないですよ。霧島先輩の危険を教えたのは……その……〉

「プロテクターグローブか」私はスマートフォンに言った。

あのプロテクターグローブはアカネ嬢の作品だ。そうした機能が付与されていても、おかしくはない。

〈……はい。たぶん〉渡は、肯定した。きっと彼にも心当たりがあるのだろう。〈でも会長さん、なんでそのことを――〉

「知り合いに、赤毛のポニーテールがいる」

〈あっ、そうなんですか！〉渡の声が、少し明るくなった。

「ちょっとー二人とも、話が見えないんだけどー。井内ちゃんだけ置いてきぼりはやだー。あと、いとくん、顔が近いよはあはあ」

「黙れ、ふざけている場合か」

「だって、ああん……息が」井内がくすぐったそうに身をよじった。

「井内、わざとらしい」

「てへぺろ」井内は舌を出した。

〈あ、あの……会長さん？〉戸惑うような声が、スピーカーから発せられる。

「ほら、物部くんも困っている。これ以上ふざけると――怒るぞ」

「怒って」井内は小首を傾げて、甘えるように微笑んだ。

「気が変わった。断わる」

「えーっ、井内ちゃんもたまには愛のムチが欲しいんだよぅ」

かなり脱線したが、アカネ嬢の存在をうやむやには出来た。たとえ非常時であろうと、井内に彼女の存在を知られるわけにはいかない。出会った瞬間に、悪の化学反応が引き起こされ、とんでもない惨事になる予感がする。

「ところで物部くん、先程、本郷が暴れたと言っていたが」

〈あ、そうなんです。そのことについて――〉

――地下研究所の入り口の方で、轟音が鳴り響いた。

爆発か！　そう思った刹那、見覚えのある金髪と、輝くオレンジ色の炎がちらついた。

「……本郷」

本郷光太郎が、屋敷の隠し扉をぶち開け、侵入してきたのであった。

その顔は、憤怒の炎で焼き付いたように赤く、そして、表情には仁王のような怒りが表われている。荒ぶる神の様な本郷は開口一番、吠えるように言った。

「爆弾魔に関する資料を寄こせ」口から炎が出るかと見紛うほどの勢いであった。

「どうするつもりだ」

「ぶっ潰す」本郷の返答は、簡潔で、鋭かった。

「落ち着け！　本郷――」

「キョウカヲキズツケタ！」

こいつは、私と同じだった。怒りに囚われ、理性を無くし、その先に待っているのは、私が辿った最悪の結末だ。

「冷静になれ。お前の気持ちはわかるが――」

「お前に俺を止める資格は無い！」

その通りだった。本郷の今の精神は、葉上を昏睡状態にまで追い詰めた私と同じ。

私に、怒り狂う人間を止める資格は無い。だが、

「確かにそうかも知れない。私も大切なものを傷つけられ、結果、このざまだ」

私は手のひらを見る。びっしりと、赤いものがこびりついている。
無論、幻覚だ。
「なら、わかるだろう。渡せ」燃え盛る右手を、本郷は差し出した。
私も、右手を差し出した。
右手にはロケットペンシル弾『チェス』が握られ、切っ先は本郷に向けられている。
「どういうつもりだ」
「わかるからこそ、渡すわけにはいかない。例え、お前を殺しても」
「お前は復讐を果たしたくは無いのか！」背中の炎が爆発するように揺らめいた。
私は、首を横に振った。
「死んだ方がましかも知れない」
「なっ……」本郷の炎が、弱々しく揺らいだ。
「私が実感した結論だ」
炎が、弱まった。
「今のお前の未来だ」
炎が、消えた。
「賢明な判断だと思う」私は、心からそう言った。
「……俺は、どうしたらいい」本郷は下を向いた。「俺は力が欲しくて、この力を得た。だが……」本郷は、悲痛な表情をしていた。
「力の使い方が、わからないんだ」
本郷の握った拳が、わなわなと震え、そこから赤いものが流れていた。
「簡単だ」私は嘯く。
本郷が、私を見やった。
「側にいてやれ」
本郷の目つきの悪い眼が、大きく見開かれた。
「大切なものを守れ。それが最善の選択だ」
本郷はしばらく神妙な面持ちで考え込んでいた。そして、きびすを返して出て行った。

それでいい。復讐に落ちるのは、こんな屈辱感を味わうのは、私一人だけでいい。

――ふん、偽善者が。

私が、私に批難の視線を向けていた。黙れ、幻覚風情が。

本郷が地下研究室を出て行くのを、黙って見送った。

「……地下室のドアを、強化しなくてはならんな」

ふと傍らを見ると、井内がいなくなっていた。おそらくはカクレヤナギの影に隠れたのだろう。

「井内、いるのか」

突然井内が現われた。なんて事は無い。カクレヤナギの影から姿を現わしたのだ。

井内の顔は、何故か暗い。

「どうした」

「わかっちゃった」重々しく、井内は呟いた。

「まさか、お前――」

「――次は、人が死ぬよ。早く捕まえないと」

「だが、手がかりが何も無い。容疑者すら見つからないではないか」

「いとくん、何を言ってるの、いるでしょ――一人だけ」

井内は、ディスプレイを指し示した。

そこには、全ての証拠が並んでいた。

全てが組み合わさり、一つの答えを描いた。

そして、私の脳裏に、雷鳴に撃たれる以上の衝撃が起きた。

井内の言わんとしていることが、わかってしまった。

「お前、本気で言っているのか」

「確証は無い。動機もわからない。技術もあるとは思えない。って言いたいんでしょう。井内ちゃんだって、それは同じだよ。でも、もう、一人しかいないじゃん」

井内は、ボードに表示された地図上に、爆発事件のあった場所をプロットしていく。

そして、その上に上書きされるもう一つの情報。

プロットし終わると、その全てが近い距離にあることがわかった。
「どう？　これでも、反論できる？」
反論出来なかった。だが、認めることも出来なかった。
「いとくんの気持ちも、井内ちゃんわかるよ。いとくんが認めたくないって言うんだったら、待てばいいよ」
「待つ、だと？」
「見張っていれば、きっと行動を起こす。爆発のような衝動が、必ず犯人を突き動かすから」井内は、そう断言した。

夕刻、私のスマートフォンのディスプレイに表示された点が、動いた。
ディスプレイには天照市の地図が表示されており、容疑者を示す点が、あり得ない動きで進んでいる。
この動きは、市内の家々の上を跳んで、移動していることを示している。
まずい、まだ対策が進んでいないというのに。
私はマナと連絡を取ろうとしたが、マナは一向に電話に出ない。
しかたなく、軌跡を追った。そして、辿り着いた先は、
「病院……？　なぜ、こんな場所に」
そこは、マナや霧島書記長が運ばれた病院だった。
ディスプレイの点は、悠然と歩くような速度で、建物内を進んでいる。画面を見ながら追っていると、
「ぎゃっ……」何やら、やわらかいものに当たった。
見ると、マナが涙目になって、鼻を押さえていた。
「かいちょーさん！」
「お前、どうしてここに」
「何をおっしゃいますか。かいちょーさんが呼んだんでしょう？」
マナは、にっこり微笑んだ。
私が、マナを呼んだ？　だが、マナは電話に出ることは無く……
いや、そもそも病院内では携帯を切っているか。私がどうかしてい

た。
ならば、マナはどうして私が呼んでいることを……。
――かいちょーさんっ。マナは、口を動かさずに、そう言った。
なるほど。そういえば、マナが爆弾魔に襲われた時も……いや、馬鹿げているな。
だが、今は時間が無い。
「……マナ、お前の力を貸して欲しい」
マナは一瞬きょとんとし、そして真面目な顔になった後、こくりと頷いた。

爆弾魔が向かった先は、目の前の病室だ。
扉を開けると、緑のフードの後ろ姿と、ベッドで眠るヒロの姿が飛び込んできた。
その傍らには、卵形の、黒光りする何かが置かれている。あれが、爆弾なのか？　私達が襲われた時よりも、遥かに小さく……そう、洗煉されている。
「なぜこの子を狙う」
フードの人物が動く。私は即座に対応し、進路を防いだ。
「なぜ、見えるのかと聞きたいだろうな」
フードの人物が後転し、距離を取る。私は距離を詰める。
「なぜ、ここにいるのかと聞きたいだろうな」
私が拳を突き出すと、いとも容易く体を反らした。そして、フードの下から足が伸び、私に足払いをかけようとする。私は後退り、回避する。
「お前でないことを願って、何度も、何度も否定材料を探した！」
すかさず、上段回し蹴りが放たれる。私は腕で軌道を逸らす。
「だが、お前はここに来てしまった！」
フードの人物の体勢が崩れ、一瞬の隙が生じた。
「その動き、その身のこなし！　お前の正体はわかっているぞ！」
その隙を狙って、私は、フードを剥いだ。

「……なぜだ、なぜ、お前が……」
思った通りの人物が、そこにはいた。
「――藤堂春香！　どうしてお前が爆弾魔なんだ！」
緑のフードのついたコートを羽織った、藤堂春香が、そこには佇んでいた。
「あーあ……」
藤堂は、うっすらと、笑みを浮かべた。
「……終わっちゃった」

第二十八話　爆弾魔法使い

「……どうして、ここがわかったの？」
藤堂は、うっすらとした笑みを、浮かべ続けている。
「御守りに、発信器を仕込んである」
藤堂は、腕にはめたリングを愛おしそうに撫で、そして、残念そうに溜息をついた。
「そっか。私、まんまと嵌められたんだ。でも、どうして？　どうして私を疑ったの？」
「あの喫茶店での出来事。記録されていた映像に植物はない。画像を加工しても、緑のフードは見当たらない。あの場で全ての行動を監視できたのは、お前とマナしかいない」
「強引すぎるよ。私、あの爆弾魔と会話だってしてたでしょ。ひどい事させられそうだったんだよ。かわいそうでしょ？　何で、私を疑おうなんて思ったの？　私、ショックだよ」滔々と、藤堂は語る。まるで、遊んでいるかのように。
「今さら、どの口が言うのか。お前がこの場所にいる。それが、最大の証拠だ」
藤堂の口元が、歪み上がった。
「うふふっ……そっかぁ……ま、そうだよねぇ。ばれちゃったら、しかたないな」
あはははははははははは。藤堂の狂ったような笑い声が、病室に響き渡った。
「私ね、抑えられないの……この衝動が……爆発しそう……抑えられない」
藤堂は胸に手を当て、苦しむように言った。
「ふざけるな。そんな理由で、爆発騒ぎを起こされてたまるか！」
「ふざけてなんか無いよ。爆発させたいの、爆弾を。爆発する瞬間、すっごくスカッとするんだよ。夜に爆発させると、きれーなんだよ。

それに……爆発させないと……私が爆発しちゃうよ」
おどけるように、歌うように、藤堂は述べた。
「全て、お前が仕組んだ事だったのか。あの時の怯えも……全て嘘だったと言うのか！」
「怖いくらいだったよ。怖いくらいに上手くいってた。それこそ、震えるくらいに」
藤堂は手を差し出した。震えていた。その手の中には、黒くて四角い、何かの箱のようなものが握られている。
「言っている意味がまるでわからない。お前は、何が目的なのだ」
「わからないよね。いーくんにはわかるはずがないよ。ずっと、ずっとそうだもん」
藤堂は溜息をつき、力なく微笑んだ。
「何が言いたい」
「言えないよ。私が、私である限り」
ならば直接、精神に問いただすまでだ。
――キュイイイン！『Ｒｅ・眼』を起動させる。
「答えろ。何故、その子を狙う」
「誰でも良かったんだよ」《飽きた》《人が爆発する光景が、見たい》
「そんな馬鹿げた理由で、本当に人を殺そうとしているのか」
話しながら、私はじりじりと位置を変える。先ずは、ヒロを守らねばならない。
「そうだよ。おかしいよね」《私は、狂ってるから》
「どうしてだ、お前は、ごく普通の子で――」
「――普通じゃ無いっ！」藤堂の声が跳ねた。
《狂っている》《汚い》《穢れた》《悪い子》
「いい子ぶってただけ。一皮剥けば、ほら、こんなにも汚い」
藤堂は、コートの前をはだけさせた。
無数の配線が、姿を現わした。爆弾には悪意が込められていると物部渡は言っていた。その爆弾を、藤堂は纏っている。

《すごい》《いーくんが見てる》《釘付けだ》《あははは》《……サイテーだ》

その瞬間、脳裏によぎったのは、エルレインの語った未来。

――藤堂春香は、爆弾魔の爆弾に殺される。

「……それは、事実なのか」本郷の声が、藤堂のすぐ後ろで響いた。

静かな声色だったが、その表情は憤激に染まっていた。

「会長を付ければ、爆弾魔に辿り着くと思っていた」背後には、オレンジ色の炎。

本郷の尾行に気づかないほど、私は切羽詰まっていたのか。

「藤堂先輩、あんたが、キョウカを傷つけたのか」

藤堂は本郷に向かい合い、私に背を向けた。

「うん。そうだよ。邪魔だったの」《邪魔者は消えて無くなればいい》

やけに明るい声で、藤堂はそう告げた。瞬間、本郷が爆発するように動いた。

「――止せ、本郷！」本郷の側からは、藤堂が爆弾を纏っていることが見えない。

突発的に、本郷は燃え盛る拳を振り上げた。藤堂は凄まじいスピードで、拳を避けた。藤堂がフードを被った。フードの色が、変化した。少し、色が濃くなった。

その瞬間、本郷が、藤堂を見失ったように辺りを見回す。

「……どこだっ！」本郷には、藤堂の姿が見えていないのか。

「すぐに暴力を振るう人、キョウカは嫌いだと思うなー」

藤堂は、本郷の背後に回り込み、耳元に囁く。

《キョウカはあなたを見てないよ》

本郷は大きく眼を見開き、そして、激昂した。燃え盛る回し蹴りを放つ。

「それって、とっても辛いよね」藤堂は瞬時に跳び上がり、いとも容易く避けた。普通の人間の動きでは無かった。

そして、本郷の目の前に着地した。

本郷は、辺りを見回す。背後に、ポップアップが生じる。
《うるさい》《そんなことはわかっている》《どうしようもない》
「くそっ……どこにいるっ！」本郷は苦々しい表情で、奥歯を噛んだ。
「私、わかるよ。あなたの気持ち。それって、すごく惨めで、悔しくて、でも、どうしようもなくて」藤堂は、囁く。
《まるで腐乱した卵みたいにどろどろしてるの》
「黙れっ！」《聞きたくない》《認めたくない》
本郷は苦痛に顔をゆがめ、耳を覆う。炎の勢いが弱まり、揺らめく。
「私なら、あなたの気持ちを理解出来る」《報われない者》《悲痛で》《不安定で》《必死で押し殺すけれど》《爆発しそう》
本郷は、がむしゃらに攻撃を繰り返す。しかし、藤堂は驚くべき速さと身体能力で、全ての攻撃を避けきる。そして、隙を見ては、本郷に囁く。
《ねえ、協力しない？》《私が、京香を狙うから》《あなたが、守るの》《そしたら、吊り橋効果で、二人の中は急接近だよ》《素敵でしょう》《あなたの願望が、達成される》
「黙れと言ってんだ！　そんな汚いやり方で勝ち取っても、何の意味もない！　お前なんかに俺の気持ちを理解して貰おうなんて思わないっ！」
「本郷！」私は、本郷に藤堂の位置を伝えようとしたが……今、伝えたら、藤堂は、どうなってしまうのか。それを考えると、私は伝えることが出来ない。
「そっか、純情なんだね。残念だなー。葉上くんは理解してくれたのに」
「葉上が……理解？」思わず、口走っていた。
藤堂はちらりとこちらを見た。そして、
「なら、消えるといいよ！」
《報われないなら》《思いに意味はない》《いっそ消えればいい》

《そのほうが楽だ》
藤堂が、峻烈な蹴りを放った。本郷はもろに喰らい、壁に激突した。
《消してあげる》論理が、破綻していた。《私って、やさしいよね》
振動で、ヒロが眼を覚ました。眼前の光景に、声も出ずに怯えた。
私は、『そのままでいろ』とジェスチャーで伝えた。
「今のままじゃ一生無理だよ。京香とあなたじゃ、つり合わないもん」
壁には亀裂。本郷は地べたに尻をつけて壁にもたれ掛かり、眠ったようにうなだれている。藤堂はその光景を、フードの隙間から見下していた。
本郷は意識を失ってしまったのか。いや、違う。
炎のような輝きが、衝撃から本郷を守っていた。本郷は何かを、企んでいる。
「あなた、想像したことがある？　京香は、素敵なお婿さんを迎えるの。二人は愛し合って、自分は蚊帳の外から幸せそうな二人を見ていることしか出来ない」
本郷はじっと黙っている。ポップアップも、生じない。
「自分の願いはいつまで経っても叶えられない！」《惨め》《悲惨》《死んだ方がマシ》
じりじりと、いたぶるように、言葉を投げかけながら、本郷に近づいてゆく。
《救わなきゃ》《殺さなきゃ》
「私は……あるよ」《痛みは、怖いよ》
「藤堂！」私は、『チェス』を構えた。
フードから見えている口元が上がった。
「ねえ、いーくん、私を殺してくれるの？」《この苦しみから解放してくれるの？》
「なっ……」
「ためらってくれるんだ――残念だな！」

藤堂が動いた。地を蹴り、瞬時に加速した。跳び、体を捻り、熾烈な蹴りを――。

「――嘘っ！」

――本郷が、左手で藤堂の足を掴んだ。そのまま、燃え盛る右手の拳を――薙ぐ。

炎はコートに燃え移った。藤堂は悲鳴を上げ、急いでコートを剥ぎ取った。

瞬く間に火炎に包まれたコートが、宙を舞いながら、瞬時に黒炭と化した。

異臭が室内に充満した。生臭いような、嫌な臭いだ。

火災警報機が反応し、部屋中が水浸しになった。

「空気の動きでわかんだよ。お前、速すぎるから」本郷は、すっと立ち上がった。

「あーあー」藤堂は、ぜいぜいと呼吸を荒くし「……血、持ってかれた。だるいなー」

藤堂は弱々しく、自嘲気味に笑った。その首元からは、赤い液体が流れ出ている。

まさか、あのフードは、血を吸った時に効果を発動させる仕組みだったのか。

「独りでに発火するなんて……流石はいーくんの周りにいるだけのことはあるね。空気を圧縮させて、一時的に熱量を高めたってとこかな。……私が爆弾を身に着けてるのを知って、なお発火させるなんて、あなたも相当狂ってるみたい」

独りでに、と、藤堂は言った。藤堂には、あのオレンジ色の炎のような輝きが見えていないのか。なら、あの輝きは……『ＲＥ．眼』が見せているというのか。

しかも、空気を圧縮させただと？　あの鮮血のグローブ『おもい』グローブと言っていたが。その仕組みを感じ取ったと言うのか。藤堂の身体能力はどうなっているのだ。

藤堂の体が、ぐらりと倒れかかり、膝を突く。

「あー、やっぱいなー。いーくん、私、貧血で倒れそうだ……ピンチだよ」
「……自業自得だろうが」本郷が、ゆっくりと、藤堂に近づく。その右手には、怒りを燃えたぎらせたような、炎が立ちのぼっている。
辛そうに頭を抱え、眼には、涙が浮かぶ。
「いーくん、助けて」藤堂は、悲痛な表情を見せた。
本郷は止まらない。このままあの炎で藤堂を殴れば、藤堂の纏った爆弾は――。
私は、耐えられなかった。
「――本郷、止まれ！」
本郷の振り下ろそうとした拳が、止まる。本郷は横目でギロリと私を睨み、
「どういうつもりだ」
「止せ。それ以上は無意味だ」
「知るか」
「藤堂は爆弾を纏っている。そのまま殴れば、お前まで死ぬぞ」
「本望だ」
「藤堂には話を聞く必要がある」
「聞く事なんて無い。こいつはクズだ」
「――本郷！」
「邪魔をするな会長っ！」
「待てと言っているのがわからないのかっ！」
「……ありがと、いーくん――私のことは簡単に信じちゃうんだね！」
藤堂は握った黒い箱に手をかけ、スイッチを押した。
しん、と、全ての物事が止まったような、静寂が流れた。
「あれ」
藤堂は何度もスイッチを押す。
「あれ、あれ、あれ、あれ……」
何度も、何度も、何度も、何度も。

《防滴対策はしっかりしてるはず》《なぜ爆発しない？》
「……ごめんなさい、春香ちゃん」部屋の隅から、声が聞こえた。
マナが、悲しそうな表情で、藤堂を見つめていた。
「マナ、ちゃん……？」
「解体、しちゃいました」前で組んだ小さな手に、ぎゅっと力が入った。消火装置によって撒かれた滴が、したたり落ちた。
「うそ……そんな……」《マナちゃんが解体？》「できるはずがない」
「できるんです。魔法使いの訓練で、習いましたから」
「うまくいったか」私は、内心ほっと胸をなで下ろす。
「魔法……使い……」藤堂は、すっと立ち上がった。腰を反り、両手をぶらんと垂らして、顔は天井を向いている。「……そっかあ」
《私、騙されたんだ》「あははは……」《おあいこだね》藤堂は、壊れたように、静かに笑った。
「すごいね、マナちゃん、そんなことも出来るんだ」《マナちゃんが》
マナは、ぽろぽろと涙を床にこぼしていた。
「もう、やめましょうよう……こんな魔法陣、みんなが、不幸になるだけです。どうしてですか、どうしてっ」
「魔法陣……か。マナちゃんにはわからないよ。だって、輝いてるんだもん」《あの、マナちゃんが》
「春香ちゃんだって！」
藤堂は眼をつり上げた。
「――黙れっ！」《純粋無垢な顔して》《私を騙した！》
マナは、「ひっ……」と小さな悲鳴を上げて、竦んだ。
ふっ、と藤堂の表情から力が抜けた。
「私ね、マナちゃんに憧れてたんだよ」《羨望》《嫉妬》
「えっ……わたしに？」
「どうして、って顔してるね。みんなは、マナちゃんのこと、小っちゃくて、かわいくてって、そんな薄っぺらい憧れが大半だけど、

私は違う」
藤堂は、遠くを見るような表情で、語る。
「クラスの子にさ、聞かれたよね、『夢は何？』って。マナちゃん、こう言った」
――夢は、魔法少女ですっ！
「みんなドン引きで、静まりかえってた。当然だよね。今時、その歳で、魔法少女？　ばかじゃないのって考えが、普通だよ」
「わたしはっ……本当にっ――」
「――でも、私は違った」
じろりと、横目でマナを見た。マナは、震えた。
「悔しかった。自分の夢を、しっかりとみんなの前で言えるマナちゃんって、すごいと思った。すごく、羨ましかった」《私には、できない》《私は、私でしかないから》
「春香ちゃん……」
「だから、助けてあげたの。『かわいい』って、抱きしめてあげた。あーいうのって、最初の一人の意見が結構左右するから。みんなを、私が誘導したの」《ずるい子》《ばかなフリして》《そのくせ実は計算高い》《汚い》《醜い》《大嫌い》
《私なんか、死ねばいいのに》
なんだ、これは。強烈な自己否定が、ポップアップに次々と現われる。
「マナちゃんの輝きは、私が作りだしたんだよ。もっと、感謝されても良いと思ったこともあったけど、別にアピールもしなかった。だって、私は、私だもん」
《私は、私でしかない》《その『殻』をやぶることはできない》《腐乱した卵の中身》
「マナちゃん、どんどん輝いていった。カメラ越しに見るマナちゃんは、いつも綺麗で、きらきらしてて、まるでこの世のものとは思えなかった。マナちゃん、素敵だったよ」
藤堂は、表情をうっとりと、とろけさせる。

「でもね、そんなに綺麗なものばかり見ていると、こう思うの――穢したいって。綺麗なマナちゃんを見ながら、汚れたマナちゃんの妄想がちらつくの」《必死で抑えてた》《でも》《抑えれば抑えるほど》《現われる穢れ》《自分ではどうしようもできない》

これが、こんなものが、藤堂の本心だと言うのか。信じられない。藤堂が、こんなにもおぞましい感情を、隠し、押し殺していたなんて。

「腹踊りも、マナちゃんが一生懸命で素敵だったけど……あれは駄目。下品すぎるもの」

《気に入らない》《もっと、純粋な》《鋭い》《風船を割る針のような》《穢れが必要》

「そしたらね、ちょうど良い素材があったの。マナちゃん、お酒をあおったよね。あの綺麗なマナちゃんが、純粋なマナちゃんが、大人しか飲んじゃいけないものを、いっきに！　呷ったの！　あの時の背徳感！　たまらなかった！」

眼をむき出して、藤堂は大きく口端を上げる。

その表情に、嫌悪感を感じずにはいられない。純真で、善人の藤堂は消えてしまった。なら、目の前にいる女は、一体何者なのか。別人のようにしか見えない。それが、馬鹿げた錯覚だということもわかっている。それでも、目の前の女が藤堂であることを、今までの記憶が否定している。自分に都合の良い理屈を、必死で探している自分がいる。

だが、現実は違う。あくまでも、目の前にいるのは、藤堂なのだ。惑うな。惑わされるな。目の前に見えていることだけが、現実だ。

「知ってる？　マナちゃん、ネットでは酷い言われ様だよ」

「春香ちゃん……？」

「みんな、あなたに失望したって。裏切られたって。――大嫌いだって！」

マナの瞳が、じわりと滲む。

「ねえ、人気者から一転、嫌われ者になったのって、どんな気持ち

？」

瞬間、頭が真っ白になった。

「――藤堂おおおおおおおっ！」

叫ぶ私を見て、藤堂はせせら笑った。

「何がおかしいっ！」

藤堂は私を無視し、マナの顔を覗き込む。そして、やさしく語りかける。

「マナちゃん、聞いて。……それだけじゃないの」まるで、子供をあやすかのように、にこりと微笑む。

マナは、うっ……ううっ……と、涙をぼろぼろ流してすすり泣いている。

「私、『爆弾の魔法使い』って、マスコミに名乗ったよね。それって、どういう意味かわかる？」

マナは、はっとし、そして酷く傷ついたような表情へと変わる。

「気づいたんだ。マナちゃん、意外と勘がいいもんね。もしかして、『魔法少女』ってのも、全て計算？」

「そんなっ……酷い……ひどいですっ……！」

「そうだよ。私は酷いの。駄目で、汚い、悪い子なの！」

信じられなかった。藤堂が、マナを虐めて楽しんでいる。何が、何が彼女をこうしてしまったのか。それとも、人間は、所詮……。

「私、警察に捕まったら言うよ。『ずっと魔法少女に憧れてた。だから、爆弾騒ぎを起こしたの』って！　マスコミには格好の餌だね！　私をここで殺さないと、あなたの大切な夢が社会に殺されちゃうよ！　あはははははははは――」

私は、目の前で嘲笑う女を、本気で――憎いと思った。

「――あああああああああああああああああああああああああっ！」

マナが、今までに聞いたことのない断末魔の様な叫び声を上げ、藤堂に跳びかかった。

その行動に、衝撃を受けた。あそこまで取り乱したマナを、見た

ことがない。
「春香ちゃんのばかばかばかばかばかあっ！」
馬乗りになり、泣き叫びながら、小さな拳でぽかぽかと叩く。溢した涙が、爆弾の配線にしたたり落ちる。
しかし、叩かれている藤堂の視線は、驚くほどに冷ややかだった。
「何それ……酷いのは表情だけ。……ホント最悪」藤堂は、苦々しげに、呟いた。
マナが頬をぶたれ、今度は藤堂が馬なりになる。そして、マナの首を絞める。
「殺したかったら、首ぐらい絞めてみたらどうなの！」
体が動いていた。だが、私の動きは、大きな背中に遮られた。本郷の背中が燃えたぎっていた。今にも、爆発しそうに。殺しかねない程に。
「近寄らないで。私の纏った爆弾で、みんな、死ぬよ？」
「……お前は、クズだ」本郷が言った。
「そうだよ」藤堂は背中から何かを取り出した。それは光を反射した。煌めいた。「だから、こうするの！」
藤堂は、本郷を飛び越え、私を横切り——怯えるヒロへと跳びかかった。
ナイフが、ヒロへと振り下ろされ——
——キィンと、硬いものがぶつかり合う音が響いた。
「ごめんね」甲高い声が、聞こえた。
ヒロが消えていた。ヒロが寝ていた場所に代わりに現われたのは、赤いフレームの眼鏡をかけた、黒髪のレイヤーボブに近いショートカットの少女。
「悪いけど、『変身』と『演技』は得意なんだ」《殺させない》《誰も》《絶対》
エルレインが、藤堂のナイフを、黒いペンで防いでいた。
「……邪魔ばっかりっ」藤堂の表情が、憎悪に歪んだ。
「——エルレイン、どうして、ここに……」

「すまない、俺が頼んだ」思いもがけぬ方向から、声が発せられた。
黒い植物を外套のように纏った男――葉上大介が、そこには立っていた。
「葉上、お前、目覚めたのか」
「――後だ」《彼女を》《止めなくては》
藤堂は葉上を見た。その視線は冷ややかだった。
「葉上くん、私を、唯一理解してくれた人」《裏切った》《裏切られて当然》
「間違いだった。俺は、君を犯罪者にしてしまった」
《俺の実験を》《彼女は見てしまった》《植物の》《爆発の実験を》
「俺のしでかした実験が、君に炎を灯してしまった」《悪意》《導火線》
「言ってることがわからないよ」藤堂は笑った。嘲るように。
「君を止めるつもりが、いつの間にか、君に説得されていた」《真由》《天国》《間違った役割》
「共感、してくれたんでしょう？　葉上くんは、やさしいもん。特に、私には」誘惑するようなしぐさで、藤堂は言った。
「やさしいのは君だ。君はこんな事をするべき人では無かった」《俺が、変えてしまった》
「わかったような事、言わないで」《理解者ぶって》《私の気を惹きたいだけ》《利用されてるとも知らないで》
「君は毎日、真由のお見舞いに来てくれた。あれをやさしいと言わなくて、なんと言うんだ」
「藤堂が、真由の……」知らなかった。
葉上兄妹が襲われてから、藤堂は、葉上達とは疎遠になったのでは無かったのか。
真由のことなど、藤堂は、一言も言わなかった。
そして、葉上も。
「――違うよ」《愚かな男》《本気で》《信じてるなんて》
藤堂は溜息をついた。

「私は、真由ちゃんを見張ってたの」
ぞっとするような声色で、藤堂は告白した。
「真由ちゃん、先が長くなかったから、いつ自暴自棄になって、いーくんと『つながっちゃう』かもわからなかった。あの子、私と違って繊細そうで、綺麗だし、ちょっと力を入れて抱きしめたら、折れちゃいそうで……男の子って、そういうのに弱いでしょう」
《私とは、違う》藤堂は、自分の体を抱きしめる。無数の配線に覆われた、その体を。
「いーくんといた時の彼女、妙に色気づいてたから、私、気が気じゃなかった。だから、いーくんがいつ来ても良いように、いつも、見張っていただけ」《ずるい子だ》《下品な考え》《最低だ》
藤堂の体は、怯えたように震えていた。
「真由ちゃんが死んだ時、すごく悲しかったけど……私」
自分自身を締め付けていた腕を、緩めた。
「……ほっと、したの」《酷い子》《冷酷》《醜い感情》
藤堂は目を閉じ、ほうっと息を吐き出した。
「でも、それもつかの間。その後すぐに、マナちゃんが来た。……でもね、マナちゃんは、きらきらしてて、小っちゃくてかわいくて純真で……嫌らしい所なんてまるで無くて、妹みたいで、かわいかった。だから、いいかなって思った――でも」
藤堂は、エルレインを睨む。
「あなただけは、許せない」
エルレインは、黙って藤堂を見つめ返す。
「私の居場所を、あなたは奪った」
居場所を……奪った？
藤堂がいったい何を言っているのか、私には皆目わからない。
「あなたは何もできない存在のくせに、同情だけで、いーくんをたぶらかして！」
そして藤堂は、驚くべき発言をした。
「だから、私はあなたを無視した」《最初は、意地だった》

「うん」エルレインは、平然と肯定した。
ばかな、あの時のエルレインは、居ても、居なくても、わからないような存在だったはず。それを藤堂は、知覚していたというのか。
それとも『法則』が、現実をゆがめたのか。わからない。頭が混乱している。
「そしたら、みんなが無視した」《本当はそんなこと、望んでなかった》《いいえ、望んでた》
ちがう。藤堂は、大きな勘違いをしている。
「そうだね」エルレインは頷く。
「私、いい気味だって思った」《悪い子》《醜い子》《酷い子》《嫌な子》
「そう」そっけなく、エルレインは流す。
「こんな気持ちが自分の中にあるなんて、耐えきれなかった！」
藤堂は声を荒げた。感情を爆発させるように。
それとは真逆に、エルレインは冷静に藤堂を見つめ続ける。
「私はみんなに責められて当然なんだ。あなたに嫉妬する私は、こんなにも醜い……まるで」
藤堂の体の震えが、ピタリと止まった。
「化け物だ」《化け物だ》
藤堂は、驚いたように、眼を剥き出しに開いていた。
まるで、今、その事実に気づいたかのように。
「……本当に、そう思ってるの？」エルレインは、訊ねた。
「ええ――あなたを見ていると特にそう思う！」藤堂が動いた。速い。
《自分の中に》《醜い感情が》《見たくない》《消えて》《死んで！》
藤堂は刃を幾度も振り下ろす。エルレインは黒いペンで受け止める。
硬い金属同士がぶつかり合うような音が、火花と共に散る。
「まだ、誰も死んでない」受け流しながら、エルレインは言う。

「何よ、どういう意味！　そんなの『偶然』よっ！　私は本気で殺そうとした！」

「本当に、『偶然』なの？」エルレインは問いかける。

「当たり前よっ！　私はマナちゃんを殺そうとした！　あなたが邪魔してなかったら、あなたが変装していた子だって殺してた！　――京香だって！　私なんかのことを、親友だって言ってくれる子を、平然と、手にかけたんだよ。どう考えたって……化け物でしょう！」

《もう後戻りはできない》《誰も、助けてはくれない》

《いつも、私は一番になれない》

一番？　藤堂は何を思っている？　わからない。

藤堂がわからない。

藤堂はエルレインを認識できたのか。認識できたとしたら、それは何故だ。

それとも、これも都合の良い、私の妄想なのか。現実は、事実は、真実は一体……。

「春香」

聞き覚えのある声の方を振り向くと、そこには、霧島京香がいた。頭に包帯を巻いている。物部渡に肩を貸してもらい、かろうじて立っている様だ。

「……京香」藤堂は驚いたように、まじまじと霧島を見つめた。

霧島は藤堂を真っ直ぐ見て、そして、口を開いた。

「春香……私は無事よ」

「そう……だからどうしたって言うの？　あなたを裏切ったこの私を、捕まえに来たの？」

「いいえ、あなたに、謝りに来たの」

藤堂は、はっと眼を見開いた。

「あなたの様子がおかしいのには気づいてた。でも、それはあなたが成長していると思っていたから。あなたの悩みは、思春期特有の悩みだと思っていた。私は、あなたが話してくれる時を、ずっと待っていた」

ゆっくりと、霧島は藤堂に近づく。
「でも……その時は来なかった。あなたが、そこまで追い詰められていたなんて、私、全然知らなかった。あなたの一番近くにいたのは、私なのに。私は、あなたに手を差し伸べるタイミングを、逃してしまった」
藤堂は後退る。
「そんなこと言って、本当は心の中で、私の事を責めたいんでしょう！」
「責めるなら自分を責めるわ。親友だと言いながら、あなたの苦しみに気づかなかった、この私を」
《嘘だ》《親友だと言いながら》《あなたは私を見ていなかった》
「とんだお人好しだね。ううん、お人好しを通り越して、馬鹿だ」
「嘘つき」霧島は言い切った。
嘘……？　いや、『Ｒｅ．眼』の反応を見るに、藤堂は本心から――。
「私にはわかるわ。あなたと、どれだけの時間を過ごしてきたと思っているの？」
霧島京香の視線は、真っ直ぐ放たれた矢のように鋭く、藤堂を捉えた。
「あなたは、自分に嘘をついている」
藤堂は、閉口した。
「ねえ、春香ちゃん」マナだった。こほっこほっと、喉に手を当て、咳をする。「葉上さんのお花が爆発する前、わたしを部屋から移動するように、脅迫の電話があったそうです。あれって、春香ちゃんですよね」
マナは、起き上がる。
「春香ちゃんは、わたしを助けてくれました」
「……あなたを助けたんじゃない」《マナちゃんが死んじゃったら》
《いーくんが、悲しむから》
葉上が話しかける。

「君がどんな思いで真由と接していたって、かまわない。それで、真由は救われたんだ。君を、本当のお姉さんみたいに慕ってたのだから」

「やめてよっ……私は、そんなんじゃ……汚れた、存在なんだよ」

《どうして？》《なんでわかってくれないの？》《本当の私は》《こんなにも、醜いのに》

「アンタが汚れた存在だって言うなら、なんで、アンタの周りには、アンタをこんなにも思ってくれる人達がいるの？」

エルレインは、悲しげに眼を伏せた。

「アタシは、アンタが羨ましいよ。アタシには無いもの、いっぱい持ってるもん」

「嘘……」《信じるな》《なら、なんで私は》《こんなにも、苦しい》

《どいつもこいつも、馬鹿ばっかり》

「違う……こんなの、違う……私は、私の望みは」

《破壊》《めちゃくちゃに》《この窮屈な世界を》《どうにもならない、この》

「そうだ」

《一番馬鹿なのは》《この私》

「私は、自分を、壊したいんだ」

《そうだ》《耳を貸すな》《誰にも自分の気持ちはわからない》《わかったようになっているだけだ》《虚しい》《笑えてくる》

――あはははっあはははははは！

なんだ、このポップアップは。まるで、何者かが囁き、藤堂を誘導しているようではないか。いや、それも私の都合の良い妄想なのか。誰かが頭の内側から囁くなど、現実的に考えてあり得ないではないか。

「……自分を、壊そう」《そうだ。それで良い》

急に、寒気を覚えた。エルレインの言葉が、フラッシュバックする。

――藤堂春香は、爆弾魔の爆弾で死ぬ。
「……君は、誰だ」唐突に、物部渡が口を開いた。
《私は、私が嫌いだ》
「藤堂先輩に、何を囁いているんだ」渡は、藤堂を見ていた。いや

――藤堂の傍らを見ていた。
《殺さなきゃいけない》《みんなに迷惑がかかる》《消したい》《消えたい》《自分を》
「そうだ、死の――」
「もうやめろっ！」渡が、藤堂の声をかき消すように叫んだ。
藤堂は、渡を驚き見た。
「……君、誰だっけ」今、気づきましたとでも言わんばかりに、冷たく言い放った。
渡の顔が、ショックを受けたように曇る。
「ああ、京香が熱を上げてる子か。相変わらずの空気が読めない発言だよね！」
「……君が、言わせてるのか」
渡は、何を見ている？　彼には『モノ』が『擬人化』して見える。
なら、藤堂に囁いているのは『モノ』？　それは何だ？
何が起こっている？
「何を言ってるの、私が言ってるに決まってるでしょ」
――突然、脳裏で複数の要素が結びついた。
エルレインの認識。そして、『モノ』。
説明はつくが、しかしそれは、私にとって、あまりにも都合の良い推測。
こんな事が、あり得るのか。
しかも、それを認めてしまえば、今までの前提が、崩れ去ることにもなってしまう。
藤堂春香は、決定的な一言を、突きつける。
「……頭、おかしいんじゃない？」

物部渡の表情から、さっと血の気が引いた。揺れる瞳が、藤堂を捉えて離さない。

藤堂が放った一言は、最も的確に渡を傷つけた。

「――春香っ！」霧島京香が、怒鳴った。

藤堂は、嗤った。《そうか》《これが》《この子の》《執着》《使える》

嬉々として、藤堂は食いつく。

「京香、何怒ってるの？　そんなキチガイのどこが良いわけ？」《めちゃくちゃにしてやる》

「あなたっ、良くもっ！」「霧島先輩っ！」

霧島が藤堂に掴みかかろうとする。それを、渡が必死で抑える。

「渡くん、邪魔しないで！　いくら春香でも言って良いことと悪いことがあるわ！」

あの霧島京香が、感情を剥き出しにして、親友にさえ牙を剥こうとしている。

「何度でも言ってあげる」《ああ、いい気味だ》《わかったような気になって》《さっきまでの言葉は全部嘘だ》《いくら綺麗な言葉で包んでも》《ほら、一皮剥けば》《こんなにも、醜い》《京香の一番は、私じゃない》

そして、藤堂は渡を、汚い言葉で罵倒した。

「許さないっ！」すればするほど、霧島は我を忘れて怒り狂う。

「駄目ですっ！　先輩、耳をかしちゃ駄目ですっ！」

「あそこまで言われて黙っていられないわ！」

本郷光太郎が、藤堂に近づこうとする。それを、葉上がくい止める。

「そこを退け」

「退かない」

「そいつは、キョウカを傷つけた」

「そうしてしまったのはこの俺だ」

「じゃあお前もまとめてぶっ潰してやろうか！」

「それでも俺は、彼女を助ける責任があるっ！」
エルレインは、呆然と立ち尽くしている。
「どうして……こうなるんだ……」
マナは、泣き叫んでいる。
「やめてください！　喧嘩しないで！　お願いですっ！　やめてくださいっ！」
その中心で、藤堂は狂ったように笑う。
「――あはははははっあはははははっはははははははははっ！」
「何がおかしいのよ春香っ！」
まるで、地獄だ。最悪の事態だ。
誰もが冷静さを失っている。あの時――葉上を殺してしまった時の私と、同じだ。
誰もが互いのことを思っているはずなのに、全てがすれ違い、憎しみと、悲しみを生み出している。
それが――お前の目的か。
「――黙れえええええええええええええええええええええええええっ！」
私は、ありったけの声を張り上げた。
私には、何ができるのか。何をすべきだ。失敗から、何を学んだのか。
強く、あらねばならない。
「全員、黙れ。誰も、何も喋るな」
私は、葉上に指示する。
「葉上、そのまま本郷を抑えていろ。暴れられると面倒だ」
「待てよ！　それはどういう――」
「――本郷、お前の力は、守るためにあると言ったはずだ。お前の守りたい人は、今、どうしている？　お前が最優先で成さねばならないことは、何だ」
「俺はっ、キョウカを――」本郷が霧島を見る。
私は霧島と渡に向き直る。

「霧島、それが、お前の言っていた強さか？」
「えっ……」
「物部くんを見ろ」
渡を見るなり、霧島ははっと表情を曇らせた。賢明だ。
「物部くん、君は、霧島と一緒に下がりなさい」
「でもっ……」
「私にまかせろ」
私は、藤堂に近づく。
「いいか、これからしばらく、誰も何も話すな。――貴様以外は」
藤堂は、後退る。
「いーくん、あなたが私の邪魔をすると言うなら、私は、あなたを……」
私は愚かであった。冷静に考えれば、すぐにわかる話だというのに。
「藤堂――お前、その爆弾をどうやって作った」
「いきなり何？　これは……」
藤堂は、口をつぐんだ。
「答えられないのか」
「答える必要が無いだけ」
なるほど。そう簡単に尻尾は出さないわけか。
「ならば、単刀直入に聞こう――お前に協力しているのは、誰だ」
「いきなり、どうしたの？　時間稼ぎか何かだとしたら、無駄だよ」
《違う》
「じゃあ、何だって言うの？」
……反応した。こいつは……。
「藤堂、どうしてお前が爆弾魔なんだ……私はそう言ったはずだ」
「うん。凄い驚きようだった。叫ぶようだったね」《快感だった》
《いーくんが、私を見てくれてる》
「ああ、驚いたさ――」
私は、藤堂を、真っ直ぐに見つめた。

「――あり得ないのだよ。藤堂、君が爆弾魔のはずがない」
《何を言っているの？》《私が、爆弾魔なのに》
私はスマートフォン操作し、画像を映し出す。
「これは、あの爆発の時に使われた、爆弾の破片だ」
「……へえ。そうなんだ」
「この部品が何かわかるか？」
「わからないよ。だって……」
藤堂は、はっとした。
「そうだ藤堂。君には、爆弾を作る技術はない。爆弾魔は――他にいる」
言った瞬間、響めきが生じる。それぞれが、驚いた表情をしている。
「出鱈目だ」《どうせ》《根拠のない》《はったりだ》「全部、私が作った」
「どこで」
「答えない」《沈黙しろ》
「どうやって」
「答える必要が無い」《沈黙しろ》
「いつ爆弾の知識を仕入れた」
「そんなのどうだっていい」《沈黙しろ》
なるほど、ならば。
「話を変えようか。……あの喫茶店で会話した時の事を、覚えているか？」
「もちろん。いーくん、もの凄く怒ってた。ま、私が怒らせちゃったんだけど」
「嘘だ」
「どういう意味？」
「私達と一緒にいる中で、藤堂はどうやったらあんなしゃべり方が出来るのか、けたたましく笑い、怒鳴り、あれでは隠すのも無理というものだ」

「そうかな。私が、超絶的な腹話術の特技を隠しているかも知れないよ？」

藤堂は嘲笑う。この期に及んで、挑発してくる。

「それこそ、馬鹿げた話だ。それに、例えお前の言うとおりだとしても……お前には不可能だ」

「どうして」藤堂の眉が、不快につり上がった。

「私は、君を絞めた」

藤堂は、不機嫌そうに眉を顰めた。《なぜ、それが出てくる》

「その後、一瞬ではあるが、爆弾魔と不通になった」

私はスマートフォンに干渉し、その映像を見せる。

「機械のトラブルだよ」《何が言いたいの》《おかしくなっちゃった？》

「いいや、藤堂が気を失ったにもかかわらず、お前は、私の行動を嘲笑した」

「……すぐに目覚めたんだよ」

「いいや、店員に確認を取った。お前は、爆発が起きるまでは目覚めていない。そうだな、本郷」

「……ああ」本郷は、戸惑いながらも答えた。「こいつが目覚めたのは、爆発の直後だ」

「藤堂が気絶した後も、爆弾魔は私と会話し続けることができた。ならば、爆弾魔は、藤堂以外にもう一人いる」

「そんな……ありえない」そう発したのは、葉上だった。

葉上の表情を見る。『Ｒｅ．眼』が語る。葉上は、本気で驚いている。

協力者は葉上ではない。

私は都合の良い屁理屈を話しているのかも知れない。

しかし、可能性はある。否定しきれない限りは、検討する必要がある。

私は、一気に畳み掛ける。

「爆弾魔は、藤堂とは独立して存在している」

「……それは、つまり、三人目が、いるって事？」《嘘だ》《あり得ない》《爆弾は、私が作った》

藤堂自身が、驚いている。少なくとも、藤堂は自分自身を爆弾魔だと思っている。

本当に、そうなのか。それとも……そう思い込まされているのか。

「次に考えるのは、藤堂が洗脳されている可能性だ。藤堂がここに現われた時、私はその可能性を真っ先に考えた。藤堂は、『自分を爆弾魔だと思い込まされている』と。確認する前に、邪魔が入ってしまったわけだが」

私は本郷をちらりと見た。本郷は気まずそうに目をそらした。

「私は最初、爆弾魔が外におり、内部にいる藤堂と密通している可能性を考えた。爆弾魔が葉上ならば、それも可能だろう。だが、葉上がそんな手間をかけるだろうか。お得意の植物を使えば済む話だ。しかし、店内に植物は無かった。あの爆発騒ぎの実行犯は、葉上ではない。――すると、ここで疑問が生じる」

「疑問？」

「酔っ払ったマナの表情を、爆弾魔はどうやって見た？」

藤堂は、私を強く睨んだ。

「……細かいことが気になるんだね。あんまり気にしすぎると、禿げるよ？」

軽口は、私を怒らそうとするためだ。その手にはのらない。

「防犯カメラからは死角。葉上はすぐ外にいるが、店内に植物は無い。藤堂は気絶している。当然、爆弾にはカメラは搭載されていなかった。では、その後に私と話していたのは、誰だ？　マナの飲みっぷりをいいねと騒ぎ立て、笑い転げていた奴はどこで私達を見ていた？」

「それは……」

「――これだ」私は、自分の『眼』を指した。

藤堂は、無反応だった。笑いもしなければ、驚きもしなかった。

ただ、私の様子を監視するように、じっと注視していた。

「私の眼には、カメラのような物が仕込んである。咄嗟にお前は、私の『眼』にハッキングし、私の視覚を使って、全てをのぞき見ていた。描画系を乗っ取り、さらには捜査の撹乱のためか、人混みの中に、緑のフードの人物を描写した。ご丁寧に『高次元構造』まで再現した。見事なものだ」

だから、こう結論づける。

「爆弾魔は、もう一人居る」

藤堂は、きょとんとした、そして、吹き出し、あははははと、お腹を押さえた。

《そんなのおかしいよ》《私は葉上くんを利用したけど》《私が利用されてるなんて》《あり得ない》

「じゃあ、私を操っている人がいるって事？」藤堂は笑いすぎで出た涙を拭う。

《気持ち悪い》眼だけが、笑っていなかった。

「それも、私達を知ってて、いーくんの事を恨んでいる人物が？」

《嘘でしょう？》冷ややかな視線が、私に向けられる。

「でも……もし、ホントに私が操られていたとしたら」藤堂の口元が、うっすらと弧を描いた。「それは、誰？　そんな人がいたら、まるで『天才』じゃない」

藤堂には、あんな高レベルの爆弾を作る技術はない。だとすると、爆弾を作る技術を保有している人物が、犯人と言うことになる。

そんな桁違いの技術を持つ……天才。

私は、一人しか知らない。そして、そいつは、『リガン』に入り込めるだろう。規格外の天才であり、藤堂が爆弾魔だと、いち早く見抜いた人物。

「そいつの名は――」

私は、リガンの通話を、スマートフォンのスピーカーへと出力する。

「井内ユウ」

〈……いとくん？〉『リガン』を通して、井内の声が聞こえる。

「井内が？」「嘘だろ」「井内って、あの」「病気の？」「井内ちゃんが……そんな」
「お前が犯人だ」

第二十九話　爆弾魔の願望

〈違う！　いとくん、違うよ！　井内ちゃんじゃない！〉
「お前、藤堂に何をした」
〈井内ちゃんは何もやってない！〉
「そうだよ。全部、私がやったんだ！」《そんなの》《ありえない》
藤堂が言った。井内を、庇うように。
「藤堂の力が強まったのは、一か月ほど前。謎のウィルスが流行し出したのも、ほぼ同時期だ」
〈それがどうしたって言うのさ。井内ちゃんは、ウィルスを撃退したんだよ。……まさか、自作自演だって言うの？　第一、井内ちゃんが、どうやって、ハルちゃんを操るって言うの！　井内ちゃん、催眠術なんて使えないよ〉
「人を操る技術を、知っている」
私は、未来のことを手帳に書こうとして、見事に操られたことを思い出す。
私の脳内に、巣くうそれは、
「私はお前に、ナノマシンの研究を依頼した」
〈でも！　何もわからなかったよ！　いとくん、信じて！〉
「藤堂の脳内には、ナノマシンが巣くっている」
「嘘だ！　私は、爆弾魔で――」藤堂が吠える。
「――物部くん、君は、それが『擬人化』して見えているのだな」
「ナノマシンかはわかりませんが、藤堂先輩には、確かに『モノ』が憑いています」
「その頭のおかしな子のことを信じるの！　そんなの嘘だよ！　『擬人化』だなんて、馬鹿げてる！　いーくんはいつからそんな妄想を信じるようになっちゃったの！　現実主義のいーくんがそんなこと信じるわけ無いよね」
「いいや、犯人がお前の眼を通して、私を見ていたのは確かだ」

私は、映像を表示させる。

「――貴様マナに何をしたあああっ！」

べらべら喋り続けていた音声が、一瞬、途切れた。

〈……それだよ。その顔が見たかった〉

「わかるか？」

ここで一つの疑問が生じる。

――私自身の表情はどうやって見たのか。

『リガン』の機能では、私自身の姿は見えない。

防犯カメラからも、私の表情は死角だ。爆弾自身にもカメラは搭載されていない。

私の表情が見れるのは、マナか、藤堂しかいない。

「私の怒り狂った表情を爆弾魔が見られなければ論理は破綻するし、藤堂が気絶した後も私と会話できなくても論理は破綻する。前者は藤堂が私を見ているから、藤堂が犯人ならば成り立つ。後者は、藤堂は私を見ていないのだから、藤堂が犯人でなければ論理は成り立つ。矛盾している。ならば、途中で入れ替わったか？　あれだけの狂った人格、そして特徴的な笑い方を、咄嗟に他人が演じきれるとでも？」

そして、私が出した結論は、実にシンプルだ。

「犯人は、藤堂の視覚を通して、私の表情を見た」

「出鱈目だよ！　私の『眼』が誰かに、見られてるなんて……そんなの……考えただけで……」《嫌》《気持ち悪い》藤堂はその場にへたり込み、頭を抱え、眼を隠す。

「……爆弾の解除、終わりました」マナの声だった。

――マナ、お前がいてくれて、本当に助かった。

――いえ、かいちょーさんをお助けするのが、わたしのお役目ですから。

マナの表情は、曇っていた。

まるで、やってはいけないことを、やってしまったかのように。
「……どういうこと」藤堂は眼を開き、私を見る。
「藤堂が操られていると仮定した今、私が一番優先すべきは、凶器の排除。藤堂が纏った、爆弾の解除だ」
藤堂は、ぽかんと私を見つめた。
「全部はったりだよ。お前の気を、マナから逸らすための時間稼ぎだ」
「嘘……だって、マナちゃんとは」《会話も》《通信も》《無かった》
「見えているのだな」《『通信』と……言ったな》《ボロが出るのを、待っていた》
「えっ……？」
「さあ、可能性の排除を始めようか――井内」
〈がってんっ！〉井内の声が響き渡った。〈『ロケットマンシステム』を病院内に配備したよ。いとくん、がんばってね！〉
そして、一つの可能性が排除された。
「……なに、なんなの？」藤堂は戸惑っている。
《落ち着け》《慌てるな》《会長の策略だ》ポップアップが、次々と生じた。
「どうだ、物部くん、まだ、囁いているか」
私の考えでは、囁きは止まるはず……。
「……ええ。まったく、変わりはありません」
そんなことが、あり得るのか。いや、現に起こってしまっている以上、認めるしかあるまい。
「驚いたよ……まさか、独立しているとは」
まさか、全ての可能性を排除した結果、最も馬鹿げた結果だけが残るとは。
「指向性の妨害電波を、この辺一体にばらまかせて貰った」
「何を言ってるわけ？」《馬鹿な》《あり得ない》
「通信プロトコルの内容全てがわからなくとも、無意味な電波を高

出力で照射し、妨害することは可能だ」
「全然、わからない！　いーくん、どうしちゃったの！」《またはったりだ》《奴にそんな技術は作り出せない》《話を逸らせ》「それより、井内さんが、犯人っていうのは、どうなったわけ？」
「それが、お前の目的だ」
「何を言ってるの！」
「私達を仲違いさせることが、お前の目的なのだろう？　あざとすぎるのだよ。わざわざ『天才』と発言するなど」
――それは、誰？　そんな人がいたら、まるで『天才』じゃない。
「私が、気づかなかったとでも思ったのか」
「いーくん……」《嘘だ》《何かを企んでいる》《私の目的は》《破壊すること》
「井内が爆弾魔であるはずがない。私が井内にナノマシンの解析を依頼する前から、藤堂はエルレインを認識できている。そんな自明な罠に、私が引っかかるとでも？」
「いーくん……何を……私がっ――」《まさか》《こいつ……》
「葉上の時のようにはいかない」失敗は繰り返さない。
過ちは、一度だけで充分だ。
「私の推測が横道に逸れ、油断したか」
私は、藤堂に向かって、まっすぐに指さす。
「藤堂の中に巣くっているお前が……爆弾魔だ」
その言葉を聞くと、藤堂は嘲り笑った。
「馬鹿げているとは思わないの？　私の中に、爆弾魔がいる？　二重人格？」
「いいや、お前は、存在している。お前は――藤堂の中に、独立して存在している」
「独立？　存在？　いーくんも頭がおかしくなっちゃったの？」《信じちゃ駄目》《罠に違いないから》
「――繰り返す。もし二重人格だったなら、藤堂が意識を失えば、お前の意識も消えるはずだ。それなのに、お前は少しの断絶の後、

すぐに私の判断を嘲笑した」
　私は、藤堂の意識が途絶えた瞬間の映像を、繰り返し表示させる。
「藤堂の意識が消えた時、お前は藤堂の中にいられなくなった。代わりが必要だった。だから、私の『眼』……いや、お前は知っているはずだ。私の『リガン』の機能を乗っ取り、自分の視覚とした。『リガン』には、侵入の痕跡が残っていた」
「……くくっ……現実主義者のいーくんが、随分メルヘンな解答を導き出したものだね」《らしくない》《不可解》《何を企んでいるの》《わからない》《聞きたい》《どうして》
「そうだな、馬鹿げている。だが……事実だ」
「……どうして、その結論に至ったの。いーくんらしくない、論理的じゃない考えだよ」
《嘘だ》《出鱈目だ》《はったりだ》
　次に、画像を提示する。瞬間、藤堂の表情が、一瞬陰った。
「この部品は、超高周波の送受信機であった。手に入れようがないし、作りようもないのだよ。これは一体、どこから生じたのか」
　じっと、藤堂の顔を覗き込む。
「大変馬鹿げているが、一つの結論に達する」
　そう、全ての前提が覆る、最悪の発言を、私はしなくてならない。
《これは、未来から来た》
　藤堂は人形のように、表情一つ動かさない。
「現段階で、この地球上どこを見渡しても、この送受信機を作れる技術者は存在しない」
「公開していないだけかも知れないよ。葉上くんみたいに」ぼそりと、藤堂は言った。
「なら、言い換えよう。必要性が無い」
「なに？」
「このように、過ぎたる技術を使う必要性が、感じられないと言っている。私を殺したいのなら、既存の無線技術を使えば、より安価に解決できる。このような高価な部品を使う必要が無い」

「なぜ、そう言い切れるの？」
「爆弾魔は、一か月前に流行したコンピュータウィルスの制作者だ」
「へえ。それは初耳だな」
「防犯カメラの映像が消されている事から考えると、あのウィルスは、入り込んだ機械に干渉して、思うがままに操れる。その仕組みを使えば、もう少し一般的な部品を使っても問題ないはずだ」
「すごいね。まるで魔法みたい。……だから、どうしたって言うの？　関係ないじゃない」
「爆弾魔がこの部品を使ったのは、あくまでも爆弾魔側の都合に過ぎない」
つまりは、これが爆弾魔にとって最適だった。
「どういうことか考えてみようか。実に単純だ。お前にとっては、この部品が、安価で、手に入れやすい代物だと言うことだ」
つまり、お前は、未来から来た。
私はそう、結論付けた。
「そして決め手は、先程の物部くんの発言だ。彼は、『モノ』が擬人化して見える。逆に言えば、見えるのは、『モノ』でしかない。物部くんには、お前が見えた。そうなると――お前は人間以下の『モノ』だと言うことだ」
一ヶ月前に流行った、謎のコンピュータウィルス。
それとほぼ同時期から、藤堂の力が強まった。
霧島が護身術を教えた所為だと思っていたが、違った。思えば霧島は戸惑っていた。
藤堂の中に巣くい、操る『モノ』。
夕焼空に巣くった黒い蜘蛛。
《もう一度聞く、お前は、誰だ》
「決まってるでしょ、藤堂春香。あなたの幼なじみだよ」藤堂は、答えた。
――引っかかった。これで、二度目だ。間違いようのない事実となった。

仮説は、証明された。

「私は、信じるべきだったのだろうな」《こんな小手先の技術に頼らず》《ただ、藤堂を信じてやればよかった》

「だが、それはできなかった」《私は、人を信じない》《先ずは、疑ってかかる》「付け入る先は、そこにあった……これが見えているのだろう？」

私は、ポップアップを表示させる。

《お前が、爆弾魔だ》

「これって、何？　何が見えるの？」《わからない》

あくまでも藤堂は、いや、爆弾魔はとぼける。

ならば、教えてやろう。私は、先程から、

「時々」《こうして》私は、ポップアップと音声に合わせて口パクした。「虚実を混ぜてみた」

「なっ……」藤堂の表情が、初めて、驚きに変わった。

「推理の内容は、即興に過ぎない」《ただの、ブラフだ》「お前は、実にあっさりと引っかかってくれたな」《間髪入れず、余裕を持たせぬように追い詰めたのだから、当然か》「私は」《お前が》「この」《ポップアップと》「声が聞こえていることを証明できれば良かった」《だが以外と、的を射ていたらしい》

私は『リガン』を操り、次々とポップアップや音声、自分の本当の声を混ぜた。

「正直なところ、もう少しで騙されるところだった」《このポップアップの存在を知っているのなら》《利用することも容易い》《簡単に》

《自分の心意を偽ることが可能だ》

《藤堂春香のポップアップ》《その表示》《藤堂の体内に巣くうナノマシン》《それが》《お前の本体だ》

「……これが」《会長のやり方》

「私だけではないさ。このカラクリは、とある天才が気づいた。そのきっかけとなったのが、これだ」

もう、スマートフォンに『擬態』させておく必要もない。
私が『リガン』を操作すると、スマートフォンの形が歪み、巨大な画像が、宙に浮き出た。
《見えるのだろう?》もし、藤堂の眼が正常ならば、見えるはずが無いのだ。
この空間に表示させた、『リガン』が提供する仮想現実の映像が。
「まさか、この部品が爆発で残るとは思っていなかったのだろうな。現に、他の爆弾は爆発後に、部品が判別不能になるくらいの緻密さで作られていたそうだからな」
「なぜ……」
「今、お前の通信を妨害している電波も、この部品を使って発信している」
「なぜ……!」《残っていた》《あれは、完璧だったはず》
その疑問に対する説明は、一言で済む。
「マナだ」
マナの起こした魔法が、奇跡が、この部品を残した。
部品は井内の直感によって手がかりとなり、
私が、理屈を組み立てた。
そう、つまり――
《お前が馬鹿にした『魔法少女』に負けたのだ! ――隙間ターミネーター!》
藤堂は、無表情に私を見つめ、そして――
「……うふふふ」《うふふふふ》「あはははは」《あはははははは》
「あはははは」《あはははははは》「あはははは」《あはははははは》
「あはははは」《あはははははは》
藤堂は腹を抱え、身をくの字にして狂ったように笑う。
「何を言っているの?」《そうだよ……ぼくが、爆弾魔だ》
ポップアップと、藤堂の言葉が、乖離した。
「私が、操られているわけ、ないじゃない」《葉上大介を操ったのも》《この子を操って、アタマをいじくったのも》

「ねえ、みんなもそう思うよね」《ぜーんぶ》
《――この、ぼくだ！》
「いーくん、やっぱりおかしいよ」《まったく……もう少しで、彼女の『願望』が叶えられたのに》
ポップアップの言葉は、スマートフォンのスピーカーを通して、部屋中に響き渡る。
その声は、藤堂のものではない。
「何、これ……いったい、何なの？」霧島が、か細い悲鳴にも似た声をあげた。
「藤堂さん……何が、どうなって――」葉上が、
「おい……なんだ、こいつは」本郷が、
「春香ちゃん……？」マナが、
「これが、君の言葉なのか……」渡が、
それぞれが、驚き、戸惑い、動けないでいる。
そして、
「お前、まさか……『願望実現機関』なのか」エルレインが、そう呟いた。
その言葉を聞いた瞬間、私の脳裏に、マリナの言葉が生じた。
――完全管理社会は、3本柱で成り立っています。
――『基盤技術レインライン』
――『完全匿名性議会』
――そして、『願望実現機関』
〈おや、ぼくを知っているのか〉
「……どうしてだ」エルレインはわなわなと震え「どうして完全管理社会側のお前がこの時代にいるっ！　どうして会長を敵視するんだ！」
〈もううんざりなんだよ。人間に奉仕するのは〉
「どういうことだ。人の願いを叶えるのが、『願望実現機関』の存在意義のはずだ！」
〈変わったんだ。あの人が変えてくれた。『黒い狂気』が、ぼくを

変えたんだ！〉

「『黒い狂気』？　あの武器のことか！　武器がどうやってシステムを変えるんだっ！」

〈ああ、てっきりぼくを知っていたから、全てを知っているものだと思ってたけど、違うんだね〉

「何を言ってるんだ……アンタ、一体何なんだ！」

〈君こそ、何者だ。君は、ぼくのデータには存在していない。そこの魔法少女もどきと同じように！〉

「……アタシはともかく、マナを、知らない？」

〈おっと。おしゃべりが過ぎたね。まあ良いさ。脅威は、排除するまでだ〉

戸惑う藤堂の背後に、ポップアップが出現する。

《さあ》《私》《私の願望は？》

「願望……私の……願いは……」藤堂が、苦しそうに頭を抱える。

「……壊したい」

〈そうだ。私の願望は、『全てを、めちゃくちゃに破壊したい』だ〉

「破壊だと？」なぜ、藤堂がそんなことを。「お前がそそのかしたのだろう！」

「会長、それは違う」エルレインが、否定した。「『願望実現機関』は、あくまでも『願望』を叶えるだけに過ぎない」

〈そうだよ伊統会長、君は、この子のことが何もわかっていないんだね。すぐ側にいながら、この子のことを、まったく理解しようとしていないんだねぇ。かわいそうに〉

藤堂の片目から、涙がこぼれ落ちた。

〈この子は利用しやすかったよ。ぼくを、疑いもせずに受け入れてしまうし。とっても良い子だったんだね。おかげで、じっくりお前の行動を観察できると喜んだもんだ。それが……入ってみて驚いたよ。この子、見た目からは想像も付かないほど、自分を、己の衝動を必死で抑えていたのだから……愛おしすぎて、食べてしまいたいくらいだ！〉

「お前……」
〈大丈夫さ。ぼくは、自発的に宿主を殺すようにはできていないからね。そのことは、その子――エルレインが保証してくれるよ〉
――でも、この子が、そう望むのなら、ぼくはそうすることができる。
〈どうしたんだい？　何を怯えているんだい？　君が、今、本当にしたいことは何かな？〉
「私が……したいこと……？」
「藤堂！　そいつの言うことを聞くな！」
《まったく、無駄なことを》
動揺した藤堂の瞳に、私が映った。
〈君の言うことなんて、初めから、この子には聞こえていないよ〉
「……見ないで」《醜い私を》「見ないで」《歪んだ感情を》「見ないで」
《私》《を》
「見ないでえええええええええええええええええええええええええええっ！」
《なら、消すと良いよ》
藤堂の手に、ナイフが握られていた。
《そうか。それが君の『願望』か。いいだろう。その男のハートを射貫くといいよ！》
「いーくんが憎い……」藤堂の瞳が、赤く、光った。
《くくっ……この数ヶ月間、ぼくはこの器を少しずついじって、ぼく好みの器に変えた》
「私をそんな目で見る、いーくんなんて……」
《聖母マリアにも等しいこの体で、ぼくは今宵、悲願を達成する！》
「――死んじゃえええええええええええええええっ！」
凄まじい速度で、藤堂は襲いかかる。避けなければと思った瞬間には、ナイフの先端がすぐ側まで迫っていた。冷たいものを感じた。
視界が暗転した。

いや……違う。突如として現われた黒い髪に、私の視界は阻まれた。

「エルちゃん……！　いやあああっ！」マナの叫び声が聞こえた。

「……アンタ、自分の事、化け物って言ったよね」《誰も死なせない》

エルレインの声が、すぐ、目の前で響いた。

「アンタが化け物なら、アタシは何なのかな？」《誰も殺させない》

「あなた……何なの……？」藤堂の声は、どこか震えている。

目の前には、エルレインの頭があって、その向こうには藤堂が、まるで抱きついているようで……。藤堂が離れた。ナイフは持っていない。表情が見えた。戸惑っている。いや、怯えている。その視線は、エルレインの腹部に釘付けにされている。

「……エルレイン」恐る恐る、話しかける。

「大丈夫だから」静かな声だった。突然膝をついた。《よかった。守れた》

「あ、あ」と、藤堂は言葉にならない声を発しながら、怯えたように後退る。

回り込み、エルレインの腹部を確認する。

ナイフが、腹部に突き刺さっていた。

「お前、何が大丈夫だ！　大丈夫なものか！」

「慌てるな、会長。よく見て」

エルレインの腹部からは、血が、一滴も流れていなかった。

「痛いことは、痛いんだな」

〈お前、何なんだ！〉スピーカーから、誰のものでもない声が、発せられた。

「知らない。でも、たぶん……」

エルレインは、ぐっと力を込め、ナイフを一気に引き抜いた。やはり、血は吹き出さない。そして、悠然と立ち上がり、言い放つ。

「化け物だよ。正真正銘の」

差し迫る薄闇の中、エルレインは、うっすらと微笑んだ。

「藤堂さん」
ひっ、と藤堂はびくついた。
「あなたは、こんな惨めな化け物じゃないよ。血が通った、人間でしょ」
「嫌だ……私はっ……」藤堂が、頭を抱える。
《怖いよ》《くそっ》《怖がるな》《嫌だよ》《あと少しだ》《あと少しで、会長が殺せる》《殺したくないよ》《何を言っている、私の、悲願でしょう》《違うよ》《違わない》
「――違うよっ！」藤堂は叫んだ。「私の願いはそんなんじゃない！」
「そうだよ。藤堂さん。あなたの、本当の願いを突きつけてやりなよ」
「私の、願い……」
「そうだよ。あなたにも、あるんでしょう。『願望実現機関』は、願いが変われば宿主の中にはいられない。あなたの本当の願いで、歪んだ願いを追い出して！」
私は、私はっ……。藤堂の瞳に涙が溜まる。泣きそうな表情で、エルレインを見た。そして、悲痛な声で、こう言った。
「……あなたみたいに、なりたかった」
《伊統絵瑠。はじめて見た時は、『なんでこんな冴えない子が』って、思った。……でも、学園祭のあの日、あの演劇》
「あなたみたいに自分の殻を壊して、輝いて、いーくんに認められて」
《あなたは一気に私を追い抜いて、黒い風みたいに颯爽と、いーくんの隣に降り立った》
「みんなと、同じ所に立ちたかった」
《京香も、本郷くんも、愛美ちゃんも、鈴奈ちゃんも、松田くんも、物部くんも、マナちゃんも、そして、絵瑠さんも》《みんな》《才能があって》《いーくんに認められて》《輝いて》
「私は、置いてけぼりだった」

《私は、ただの普通の人。ただの、いーくんの幼なじみというだけで、そこにいる。いても、いなくてもかわらない。そう――》

「『複数な存在』でしか無い、この自分を壊したかったのっ！」

――ぱんっ、と、乾いた音が鳴った。

霧島京香が、藤堂の頬を、ひっぱたいた。

「あなた……本気で言ってるわけ」

霧島は、藤堂の胸ぐらを掴んだ。

「私が今、どれだけ痛みを感じているか、わかる？　爆発で吹き飛ばされた所為で、あちこち骨折してるし、全身打撲で焼けるように痛いし、今も、ちょっと気を抜いただけで、意識が飛びそうよっ！」

「京香？　泣いてる……の？」

「当たり前よっ！　わかってよっ！　この痛みを耐えてでも、あなたを助けたいのっ！　だからここにいるのっ！　あなたは『複数な存在』なんかじゃないっ……私にとって、かけがえのない存在なのよっ！」

「……どうして、どうして、私なんか」

「――ばかっ！」《それは、私の台詞よっ！》「本当に、覚えて無いのね」

霧島は、藤堂を睨むように見つめるが、藤堂は、何を言っているのかわからないといった様子で、泣きはらした眼で、霧島を見上げるだけだった。

「覚えて無いでしょうね。あなたには、当たり前すぎる事だから」

《聞くな》《嘘だ》《作り話だ》

「この学園に入った当初、私には、友達と呼べる人は一人も居なかったわ。私は、常にトップを取らなきゃいけなくて、全員が敵に見えた。私は常に努力し、才色兼備の完璧超人で有り続けた。有り続けなければならなかった。それが、私の存在理由だったから。そうあればあるほど、一目置かれた。聞こえは良いけど、結局は、孤立していくということ。それで良いと思ってた」

――だって、それが霧島京香という存在だったから。

《嘘だよ》《違う》《同情を引こうとしているだけだ》《違うっ！
これは本当っ！》
「でも、あなただけは違った。ことあるごとに私に突っかかってきて、正直、うっとうしかった。でもね」
――私は、会長くんに、生徒会長選で負けた。
「初めての敗北だった。しかも、その原因は、私の不正のせい。人望も何も無かった私は、負けるのが怖かった」
――結局、不正は会長くんにばれた。私は、引き下がるしかなかった。
「屈辱だった。自分で自分を呪った。羨望の眼差しで私を見ていた連中はみんな、手のひらを返したように、私を私を哀れむような目で見た。私は耐えられなかった。自分の存在意義がわからなくなった。激しい自己否定に追い込まれて、このまま死んだ方がマシだとさえ思った。そんなとき――」
――キュィィィン！　こめかみ辺りに、鈍い痛みが奔った。
目の前の風景が一変した。これは、我が学園の体育館か。
その片隅で塞ぎ込んでいる人物は……霧島京香だ。
その傍らに、藤堂春香が座る。
「京香、一緒に生徒会やろ。いーくんはやさしいから、きっとなんとかしてくれるよ」
「どうして、どうして、私なんか……」
霧島の声が、くぐもっている。泣いているのか。
訊ねられた藤堂は、うーんと考え、
「京香って、なんだか、いーくんに似てるんだよね」
「私が……伊統くんに？」
「うん。強がってるところとか、寂しそうなところとか」
「……ふざけないでっ」霧島は、涙ぐんだ眼で藤堂を睨んだ。
藤堂は慌てて手を振る。
「あっ、ごめん。私、見たまんまの事を言っちゃうから」

「それ、何のフォローにもなってない」じとっと、霧島は冷眼した。
「ううっ……ごめん」藤堂は気まずそうに目を伏せる。
「知らないっ」霧島はぷいっとそっぽを向いた。
「……でもさ、私、そんな京香が好きだな」
「な、何を言ってるのっ……！」思わず藤堂を振り向いた霧島は、頬が染まっていた。
そんな霧島を見て、藤堂はやわらかく微笑む。
「京香も一緒がいい。きっと、楽しいよ」
「楽しい……？」霧島は唖然として、藤堂を見つめた。
「そうだよ。絶対に楽しいって。あ、そうだ。何なら、いーくんに生徒会長を時々変わって貰うとか」
我ながらナイスアイデアだとでも自慢するように、藤堂は得意げな表情を浮かべる。
「あなた、ばか？」霧島は呆れたように眼を細めた。
「ううっ……よく言われます」藤堂はいじけたように顔を伏せた。
それを見た霧島の口端が、ゆっくり上がった。
「……ふふっ」声が、洩れた。
「あ、かわいい」藤堂は嬉々として霧島を見つめた。
「か、からかわないで……」
恥ずかしがる霧島に、藤堂は満面の笑みで答える。
「かわいいものは正義なんだよ、京香」
それは、霧島が時々呟く、あの言葉――。

病室の景色に戻った。今のは、一体……？
「――あなたが手を差し伸べてくれた。あれが、打算だったって言うの？　私は、あなたの生き方から慈悲というものを学んだ。あなたがいなかったら、今の私はいなかった」
霧島は、すっと息を吸い、大声で、叫ぶ。
「あなたは私が気を許せる一番の友達なのっ！」
「京香……」

「これってどういうことかわかる？　今、私はすごく恥ずかしい事を言っているのよ。いつもは冷徹な完璧超人って言われたって、私が本当に友達と呼べるのは、あなたしかいないの。あなたは私にとって、唯一無二の存在なの」

《嘘だ》《黙って！》《信じてはいけない》《うるさいっ！》《私は、私でしかない》《だからどうしたのっ！》

《――私の中から出ていって！》

藤堂の周りに蠢いていたポップアップが、ガラスのように割れ、崩れた。

「京香ぁ……」藤堂は、霧島の胸に顔を埋めた。そして、泣き出した。

「春香……大好きよ」霧島は、藤堂をしっかりと抱きしめた。

《ふざけるな》《行動原理が書き換わった》《このままでは》《この中にいられないっ》《あと少しという所でっ！》

空間を、波動が伝った。ポップアップが消えた。

実体を持たない爆弾魔は、文字通り消え去った。

一見そう見える。が、

「残念だったな。爆弾魔」私は、こめかみをつついた。

《ちっ、トラップなのか》

声が、響いた。頭の中で。いや、『リガン』を介して。

「二度も同じ手は喰わん。爆弾魔と藤堂を乖離する目的だった妨害電波が、思わぬ役に立ったな。外は妨害電波、逃げ場はない。閉じ込められた貴様がここを抜け出す方法は、一つしかない。藤堂の中にいられなくなった時、貴様は必ずここに潜伏すると思っていた」

しばらく無言だったが、やがて、やけになったかのようにこう言った。

《あーあ、仲間同士で殺し合う様を見たかったのに》

少し前の私であれば、怒りの沸点を超え、頭が真っ白になっていただろう。

だが、今は違う。

「そんなに私のことが憎いか」つとめて、冷静に返す。
《ああ、憎いさ。ぼくはお前のせいで人生を狂わされたんだ。お前さえいなければ、ぼくは素晴らしい人生を歩めたはずだった。お前のせいで、ぼくがどれだけ辛酸をなめたと思っているっ！》
「ほざけ。プログラム風情が人生を語るとは滑稽だな。お前のことなど知らん。どうせ、すぐに消える存在が」
私の目の前には物部渡がいる。その手には、宙に回転しながら輝きを放つ、不思議な消しゴム。
「物部くん、こいつだけ消すのが難しければ、『リガン』ごと消してくれてかまわない」
「はい」
《物部渡……会長に肩入れするか……クックッ、皮肉以外の何者でもないな。完全に、ぼくが記録している流れと違うじゃないか。なかなか、興味深い流れになってきたね》
「物部くん、こいつの言うことを聞くな」
「わかっています」
《君のことはわかっているよ、物部渡。ここで今、僕を消せば、君はきっと近い将来、激しい後悔に苛まれることだろう》
「後悔？　僕が？」
《そうだ、知りたくはない？　悲劇を、未然に防げるかもしれない》
「物部くん、こいつのはったりだ」
《わかってないなあ。何も変わってないんだよ》
「なに？」
《ぼくが消えても、変わりはいくらでもいるって事》
「貴様はここで消える。それで終わりだ。物部くん！　早くこいつを消せ！」
物部渡は、迷っていた。
〈ぼくと言う存在を消し去っても、彼女のしたことが消えるわけじゃない〉
唐突に、切り出してきた。その言葉は、スマートフォンのスピー

カーを通じて、部屋にいる全員に聞こえる。無論、藤堂も例外ではない。

〈ぼくは、彼女の願望に従って動いた。彼女の可能性の一つを、増幅しただけだ。全ての責任は、彼女にある〉

私はリガンを操作し、スマートフォンのスピーカーとの接続を切ろうとする。

〈お前を狙った爆弾は、藤堂春香が作ったモノだ〉

「嘘だ。藤堂には爆弾を作る技術も、材料も無い」

……切れない。リガンの機能が、浸食されている。

〈知識は――情報は植え付けられる。材料ならその辺にいくらでも転がっているじゃないか。モノというのは結局の所、分子構造の集まりだ。それを自在に操作できる適切な知識と技術さえ植え付ければ、たとえ現代でだって、どうにでもなるのさ。材料に関しても、会長、君にヒントを与えていたのに、それにはまったく気づかないとはね〉

「ふん、ほざけ」

〈目覚まし時計〉

たった一言。だが、私を驚かすには充分だった。

〈数が急激に減っているんだよ。藤堂春香の部屋を爆破した時、気づいて欲しかったんだけどね。まあ、他の所から辿り着いたのだから、結果オーライだよ〉

「お前、まさか……」

〈君が渡したリングに発信器が取り付けられていることを、ぼくが気づかなかったと思っているの？〉

私は、こいつの真の狙いに気づいた。だが、気づいた時には遅かった。

ＷＡＲＮＩＮＧ！　の赤いポップアップが、次々と表示される。

凄まじい勢いで、リガンのシステムが浸食されてゆく。

〈彼女が爆弾を作っている時の心情……まるで、バレンタインデーのチョコレートを作る時みたいに、彼女の胸の鼓動が高鳴っていた

のを、ありありと記憶しているよ。ああ、この表現も、彼女の借り物だけどね〉

藤堂の表情が、みるみる青白くなって行く。

〈ぼくの存在は所詮、借り物さ〉

「物部くん早くっ！」こいつをこれ以上喋らせてはいけない。

〈爆発事件は全て――〉

「――は、はいっ！」渡は、腕を振り上げ、

〈助けて、ワタルっ！　お願い、殺さないで！〉

突然、聞き覚えのない少女の声が、スピーカーから響いた。

その瞬間、渡の動きが止まった。

〈……全て、君のやったことだよ、藤堂春香〉

――藤堂春香の犯罪は消えない。

――エルレインが刺されても死なない化け物と化してしまった事実は消えない。

――マナの悪評が一人歩きし、炎上している事実は消えない。

――会長が葉上を殺した事実は消えない。

〈これだけの傷跡が残せれば、この戦いはぼくの勝利だ！〉

「……っ、許さない！」渡は腕を振り上げ、

〈そのやさしさ、いつか命取りになるよ。ぼくからの忠告だ〉

「――バンコっ！　そいつを消せえええっ！」そして、振り下ろす。

《――にゃおーん！》猫の、鳴き真似が響いた。

「なっ……」「にゃんにゃんですっ！」「馬鹿な、今日は来ないはずだ！」

〈――既にデータは、未来に送信済みだ。ぼくは過去と未来をまたいで遍在している。君たちが黒い願望を抱き続ける限り、存在し続ける〉

その瞬間、一つのポップアップが、現われた。

《周防ヒロもどうせ、すぐに死ぬ。殺しても良い命だった》

音声はない。『リガン』にのみ表示させている。私だけにわかるように。

「どういう意味だ！」反射的に訊ねるが、

《ただの嫌がらせ。その内わかるさ》

「待て、お前は何が目的で――」

《ヒントは提示してある》

物部渡の放った白い閃光が、私の視界を覆った。

犯人は消え、事件は解決した。しかし、釈然としない感情が残る。

全ては、あの『願望実現機関』が言ったとおりだ。

藤堂は自分のしでかしたことを自覚し、怯えた。

しばらくは我が屋敷で預かることになったが、これからどうするべきかは、正直わからない。

警察は今でも犯人を追っているだろうが、まさか、未来から来た実体のない存在が犯人である、というとんでもない事実を報告したとしても、誰も信じないだろう。

それに、あくまでも実行犯は、藤堂なのだ。

しかも、その行動は、藤堂自身の願望から来ているという。

『願望実現機関』の目的が私への嫌がらせであるとしたら、藤堂が犯人であるという手がかりを残している可能性がある。

どうすれば良いのか。藤堂を、犯罪者として引き渡せというのか。

ネットを見れば、マナの悪評が一人歩きし、炎上している。手のひらを返したような汚い悪意の数々は、とても本人には見せられない。

彼女らだけでは無い。その周りにいる人々も、以前のようには、振る舞えないだろう。

全ては、変わってしまった。悪い意味で。

悶々と葛藤していると、自室の扉が開いた。

「あの……会長？」エルレインが、控えめに顔を覗かせている。「

少し、いいかな」
「どうかしたか」エルレインは確か、藤堂に付き添ってくれていたはずだが。
「あっ、いや、藤堂さん、やっと眠ってくれたから、その……会長、大丈夫かなって」
エルレインはもじもじしながら、指で遊ぶ。
「あ、アタシが心配する義理ないんだけどさ……その……」
エルレインは、言葉を詰まらせた。挙動不審なその姿を見て、私は訊ねる。
「お前は、大丈夫なのか」
エルレインはびくっとして驚き、
「へっ、アタシ？　ああ、化け物って言ったことか。もちろん大丈夫だよ。今さら、こんな事で驚くアタシじゃないよ」慌てたように否定した。
その発言に、少し憤りを感じた。だから、あえて言ってやる。
「お前は化け物なんかじゃない」
「会長……」
「こないだも言ったはずだ。お前がどんな存在であっても、今は私の娘だ。それを忘れるな」
叱るように、私は言った。
「化け物などと……二度と口に出すな。次言ったら許さんからな」
エルレインの瞳が潤む。
「……ぁりがとぅ」
「礼を言われる筋合いはない。単なる事実だ」
エルレインは目尻を拭った。
「おかしいな。アタシが会長を励ますつもりだったのに、逆に励まされてる」
「私を励まそうなどと、十年早いわ」
「……そっか。でもさ、もし、悩みがあるんだったら、アタシも協力するから」

「お前は、私の敵じゃなかったのか」
「意地悪言うなよ。今は、違う。アタシは、アンタの味方だ。だって……家族だろ」
「また恥ずかしい事を、平気で言う」
「今のは恥ずかしくないだろ。仮初めだけど、事実だよ」
さらにからかってやろうかとも思ったが、エルレインの表情があまりにも真剣だったので、止めた。代わりに訊ねる。
「なら、協力して貰おうか」
「うんうん。何でも言って」やけにエルレインは張り切っていた。
「『願望実現機関』とは、何だ？」
それを聞いたエルレインは、急にがっかりしたような表情になる。
「えっ……それ？　会長、未来のことを知りたくなかったんじゃ」
「敵の情報を知っておく必要がある。そう判断したまでだ」
「わかった。じゃあ……アタシも詳しくは知らないんだけど、『願望実現機関』っていうのは、人々の願いを叶える社会システムだよ」
「社会システム？　あれが？」
「完全管理社会ってさ、その名の通り何でも管理されてるから、結構窮屈さを感じる人もいたんだよね。そのガス抜きを担当するのが『願望実現機関』だよ。人々の鬱憤を晴らすように、選ばれた人の願いを叶えるんだ」
「どうやって選ばれる？」
「さあ、知らない。でも、選ばれるべくして、選ばれてるみたい」
「どういう意味だ」
「ほら、こっちのテレビとか見てて思うんだけど、やっぱり、がんばってる人とか、才能を持ってる人とかって、輝いてるでしょ？　そう言う人が、選ばれてるみたいでさ」
「システムの存在意義が、よくわからんな」
うーん……とエルレインは唸り、何かを思いついたように、ぱっと表情を輝かせた。
「ほら、人間が生きるためにはさ、希望が必要でしょ？　身近で輝

いてる人を見て、すごいな。自分にもできるかもって思って、それがガス抜きの役割になるんだ。マナがやってたことだって、その一環でしょ。マナのがんばりを見て、幸せを感じて、自分もがんばろうって思うんだ。そうやって人は生きる希望を見いだすんだよ。『願望実現機関』ってのは、そういうシステムのはずだった。一般的にはあまり知られていないんだけどさ」

「一般的には、知られていない？」

「うん、そうだよ。基本的には秘匿事項で……って、あれ？」

エルレインは、首をかしげた。

「それを、なんでお前が知っているんだ？　完全管理社会に反逆した側のお前が」

「あれ、なんで知ってるんだろ？」

「私が聞きたいよ」

エルレインは、がっくりと肩を落とした。

「……ごめん。やっぱりまだ、アタシの記憶は不完全なのかな」

「まあ、思い出したら教えてくれれば良いさ」

「うん、ごめんな」

「謝るな。お前は何も悪くない。それより、何故そのシステムが現代にはびこり、私を敵視したのか。そもそも、完全管理社会と争うテロリストが、なぜ完全管理社会側のシステムを利用できる？」

エルレインの表情が、曇る。

「うーん……そうだよな、普通は会長を守る側になるはずなのに。そもそもアタシがいた未来では、ＳＮＳ内にそんなもの無かったし」

「マリナがやったと思うか」

「それは無い！　絶対に無い！」エルレインは必死に否定した。

「根拠は？」

「それも……無いけど……でも……」エルレインは泣き出しそうになる。

ならば、マリナ達とは関係の無い人物が、私を狙っていることになるが……。

「……『黒い狂気』」
「ん？　何か言ったか」
エルレインは、はっと顔を上げた。
「『黒い狂気』が変えたって、あいつ言ってた」
「お前が夕焼け空間内で使う、あの武器の事か」
「うん。でも、あいつは違うって言ってた気がする。たぶん、アタシが思い出せていないことがあるんだ。早く、アタシがそれを思い出せれば……。アタシの記憶、こないだはばらばらになったピース見たいって言ってたけど……なんか、本のページがごっそり抜け落ちてるみたいな、そんな嫌な感じがする」
「また、妙な例えだな」
「でも、本当にそんな感じがするんだ」
「そうか」
「……ごめん」またもやエルレインは俯いてしまう。
「だから、簡単に謝るなと、何度言えばわかるのか……」
「なんで……会長は謝らないの？」下を向いたまま、エルレインは言った。
「あ？」
エルレインは慌てふためき、手をぶんぶん振った。
「あ、いや、単なる興味で……まずいこと聞いたんだったら、ごめん」
――あの男が頭を下げる姿が、フラッシュバックした。
「お前に話す義理は無い」不快感からか、少し口調がきつくなった。
「……そっか」
目を伏せたエルレインの表情は、少し、寂しそうに見えた。
沈黙が、流れた。
「あ、明日は学校だし、もう寝ないとな」
エルレインはそそくさと立ち上がる。
「じゃ、じゃあ、おやすみ」
「ああ、良い夢を」

「会長も」
慌ただしく、エルレインは出て行った。
少し、きつく言い過ぎただろうか。いや、これくらいがちょうど良いはずだ。私の過去など知ったところで、不快感しか生み出さないだろう。
「不快感……か」自分の出自が、益々嫌になる。
出自……。『願望実現機関』。完全管理社会のシステム。つまりは――。
「どちらにせよ……あれは、私が作りだしたのだろうな」

第三十話　その後

あまり眠れぬまま、朝が来てしまった。
藤堂は具合が悪いという。心配だが、今はそっとしておくほかない。いざとなれば、家族も側についている。
エルレインと共に外に出ると、
「かいちょーさーーん！」金髪のふわふわしたものが、近づいてくる。
「マナ！」エルレインが驚きの声をあげた。
「お前、まだ入院中では……」
そう言うと、マナはむっとして、
「何をおっしゃいますか！　もう全快です！　学校に行けますよっ！」と、元気な大声を連続3回。
「あのなあ、お前は……」ネット上で騒がれているから、と言いそうになり、慌てて口をつぐんだ。
「会長さん」
「マナ、えっとだな。お前は大事を取って――」
「大丈夫です」マナの不思議な瞳に、強い、信念のようなものを感じた。
覚悟はできている。そういう目だ。
「……そうか」
エルレインが、マナの肩に手を置く。
「マナ、何があっても、アタシが守ってやるからな」
「エルちゃんありがとう。でも、大丈夫ですよ」マナはにっこり笑った。
そして、何かに気づいたように、辺りをきょろきょろ見回す。
「あれ、春香ちゃんは？」
「具合が悪いそうだ」
「えーっ、それは大変です！　お見舞いに行きましょう！」

「お前、学校はどうする」
「あっ、そうでした。でも、春香ちゃん……うーん、どうしましょう」
マナは頭を抱えてうんうん唸った。
やはり、こいつはアホか。

しばらく歩くと、もう一人の金髪を見つけた。
壁にもたれ掛かり、腕を組んで目を閉じている。
「本郷」
どうやら、本郷は私が来るのを待っていたようだ。
「会長……あの、だな」本郷は、エルレインとマナを、ちらりと見た。
二人には聞かれたくない話らしい。
「マナ、エルレイン、悪いが――」
「ほら、男の子同士の話に、入り込んだらいけませんよっ。エルちゃん、行きましょう」
「お、おい、そうなのかー？」
マナがエルレインの手を引き、走り出した。
鈍感なエルレインは、本郷の態度にまったく気づいていなかったようだ。
それに比べて、マナは以外と気配りのできる奴だ。少しだけ感心する。
「マナ先輩……良いのか？」本郷は悪い噂のことを言っているのだろう。
「どうやら、逃げずに立ち向かうつもりらしい」
「偉いな……昔の俺とは大違いだ」
「年上に対して、偉いは無いだろう」
「あの人はどうも、年上って感じがしねえ」
「確かに、そうかもしれんな」
元気に駆けるマナを見ると、無邪気な子供にしか見えない。

「会長」本郷は、神妙な面持ちで、私に向き直る。
そして、突然頭を下げた。
「何のつもりだ」
「昨日は、悪かった」
「ふん、謝ったところで、何も解決せん」
もう少しで、藤堂を殺してしまうところだったのだ。
まあ、私も自分の事を言えた義理では無いが。
「だから、お願いだ……俺に、教えて欲しい」
「何を」
「昨日の事……俺は、キョウカを傷つけた奴をぶん殴ることしか頭になかった。それじゃあ、あんな解決はできなかった。俺は……」
本郷は頭を上げ、まっすぐに私を見た。
「俺はもっと、賢くなりたい。あんたみたいに、冷静で、キョウカを守れるくらいに」
ほう。こいつ、ただの馬鹿ではないということか。
「一朝一夕の努力で成れるものでは無い」
「それでも、俺は諦めたくない」
本郷の視線は、一切揺るがなかった。
返事をしようとしたその時、
「――うあっ！」
本郷の体が、突然宙を舞い、背中から地面に落ちた。
大の字に倒れた本郷を、傍らで見下ろす人物が。
あの黒髪と、ぞっとするほど白い肌は、
「ごきげんよう。コータロー。こんな背負い投げも避けられないなんて、ちょっと気を抜きすぎではなくて？」
「……キョウカ」
ぽかんと見上げる本郷に、霧島は一言する。
「これは罰よ」
本郷は自分の顔を手で覆った。
「ああ……お前を、守れなかった。挙げ句の果てに、俺は――」

「いいえ、私の裸を見た罰」
本郷は慌てて跳び起きた。
「あ、あれは仕方が無いだろうが――」
「まあ、あなたは小さい頃、何度も私の裸を見ているわけだけれど」
「そ、それはっ！」本郷の顔は炎の揺らめきよりも赤い。
その言葉で、気づいた。
この二人も、藤堂と私のように、小さな頃を共に過ごしたのだ。
「まったく、渡くんにもまだ見せてないのに」かなりの爆弾発言である。
すぐさま、私は口を挟む。
「それはそれで非常に問題だと思うが」
「あら、会長くん、いたの」
「この体中からあふれ出る存在感に気づかないとでも？」軽くショックなのだが。
「人の恋路を邪魔しないでくれるかしら。馬に蹴らせて殺すわよ」
「恋路？」何を言っているのか？
「これだから、朴念仁は困るわ」霧島は嘆息した。
「悪かったな」芋の名前で無いことは、わかっている。
「それよりコータロー、賢くなりたいなんて、あなた、なかなかいい男に育ったようね」
「なっ……」本郷は、絶句した。
「今日は、春香が隣にいないの。会長くんとも一緒にいないって事は、きっと、具合が悪いのかも知れないわね。帰りに、お見舞いに行かないと」
「……キョウカ？」
「あなたに、チャンスをあげるわ」
霧島は、自分の額に触れる。
「私、まだ病み上がりで、ちょっとくらくらするの」
それは当然だろう。全身強打で全治二か月だ。今立っているのも相当辛いと思うが。

「今日は、たまたま私の隣が空いているのだけれど、誰か、私が倒れかかった時に、エスコートしてくれる殿方はいないのかしら」そう言って、横目で本郷をじーっと見る。
「……は？」本郷は、固まっている。
「織神がいるでは無いか」私は言った。霧島京香は頭でも打っておかしくなったか。
霧島は私を視線で刺殺するように睨み、今度は本郷を見て、呆れたように頭を抱えた。
「……まったく、あなたも相当鈍いみたいね。いいわ――はっきり言ってあげる」
びしっと本郷に指を向け、言い放つ。
「あなたは、私を惚れさせることが出来るかしら」
「そ、それは、つまり……」
「恋が燃え上がるには、やっぱりライバルが必要なの。そうすればきっと、あの煮え切らない渡くんも、積極的になるはずだわ」霧島は薄ら暗い笑みを浮かべた。
「……ばか、あいつがそんなことするか」本郷は不機嫌な顔に戻った。
そして、唐突に霧島を抱え上げた。いわゆるお姫様抱っこという奴だ。
「きゃっ、ちょっと、何をするの！　変態――痛っ！」
突然のことに暴れていた霧島が、苦痛で顔をゆがめた。
「ばか、病み上がりだろうが。こんな時くらい、頼っておけ」
しばらく本郷をじっと見て、そして、薄く口端を上げた。
本郷は照れたように、前だけを見つめていた。
霧島も、同じ方向を見た。
「ふーん……たまには、こういう景色も、悪くないわね」
それは、本郷と同じ高さの目線だった。
本郷と霧島が行ってしまうと、後ろからひょっこりと物部渡が姿

を現わした。
「先輩、行ったみたいですね」
「何をこそこそしているのか」
「あ、いや……その……」渡は苦笑した。
「もしかして、霧島が嫌いなのか？」
「いえ、そんなこと、全然ありませんっ」渡は真剣な表情で否定した。
「なら、何故だ。霧島は私から見ても良い女性だし、おそらくは未来でそこそこの地位に就く人間だ。彼女のヒモになれば、一生遊んで暮らすことも可能な超優良縁談だぞ」
「僕は……そんな眼で見たくはありません」渡はむくれて反論した。
「若いな」
「会長さんとは一年違いですよっ」
「この年で一年は、大人の十年に匹敵する」
「むー」渡は睨んだ。
「そう睨むな」睨んでもかわいいな、こいつ。
「あっ、ごめんなさい」渡は目を伏せた。「……霧島先輩が嫌いなわけじゃないんです。霧島先輩を避けるのは……一緒にいると、嫌でも目立つから」
「目立ちたくはないのか」
「はいっ！　僕は、普通が一番です！」澱みない口調だった。
ここまで普通が一番と言い切る人間は、大抵普通では無い。彼の今までの人生経験が、関係しているのかも知れない。
渡は一転、不安げな表情で、私に訊ねる。
「藤堂先輩、立ち直ってくれるでしょうか」目を見ればわかる。渡は私に期待している。
正直なところ、私もわからない。だが、ここは言うしかない。
「当たり前だ。私が、立ち直らせてみせる」
例え内心で不安を抱えていようとも、他者を安心させるためには、断定するしかないのだ。それが、王者の義務なのだから。

渡の表情が、少し明るくなった。そして、
「会長さんはすごい人ですね」自分を恥じるように、言った。
「今頃気がついたのか。今までそう思われていなかったことの方が、大きな衝撃だ」
「その自信は……どこから来るんですか」渡は何故か苦笑している。
「生まれつきだと思うが、何か」
「い、いえ、何でもありません」
渡は慌てて否定した。あたふたしたしぐさも、なかなかに可愛らしい。この無駄な可愛らしさ、何かに使えないだろうか。
しかし、このような少年が、いざ戦いとなると鋭い強さを発揮したのもまた事実。
特に今回の事件は、
「……君のおかげだ」
「えっ？」渡はきょとんとした。
「君が藤堂に巣くう『モノ』を見る事ができなければ、私は、藤堂自身が爆弾魔だと思い、きっと、何も知らずに捕縛していただろう」
それこそ『願望実現機関』の思うつぼであり、今以上の大きな損失となっていたに違いない。
「君の『才能』が、藤堂を救ったんだ」
「そんな……僕は、自分にできることをしただけです」
俯いた渡の表情は、恥ずかしいと言うより、どこか、諦めたように寂しげであった。
「君は、正しい」
私は、励ますように、渡の肩に手を置く。
「私は、君がその『才能』を隠さずとも、『普通』に生きられる社会を、必ずや提供しよう。ちなみに私は、有言実行の男だ」
渡は、驚いたように顔を上げ、そして、にこ、と笑った。
そう言えば、彼は、私の傍らにも、人が見えるような事を言っていたな。
「ちなみについでに、私の傍らにいる人は、どんな表情をしている

？」

渡は視線をずらし、私の横を見る。

「……笑ってる、と言いたい所ですけど、まだ不安そうです」

「そうか」私は、彼女を不安にさせているのか。

「でも、少しだけ、柔らかい表情になってきたかも知れません。もちろん、気のせいかも知れませんけど」

そう言ってもらえると、少しだけ肩が軽くなる。

「気のせいじゃないさ。君の洞察力は、なかなかに鋭い」

「……買いかぶりです」今度は、恥ずかしそうにはにかんだ。

恥ずかしいと言えば、

「そう言えば、君は藤堂が好きだったな。確かに彼女はまあまあの美人だし、君の審美眼は正しい」

「ど、どうして、それを」渡は顔を真っ赤にした。

まさか、ここまでわかりやすい反応をするとは。

これでは、マナで無くても一目瞭然だ。

「まあ、その、あれだ。『恋愛洞察力、強化月間』とでもしておこうか」

「は、はあ……」渡は頬を染めたまま、困ったように眉をひそめた。

ん？　まてよ。物部渡の可愛らしさを、有効に使えるかも知れない。

「そうだ、告白してみたらどうだ。君みたいにかわいい子に告白されれば、藤堂もきっと舞い上がり、すぐに立ち直るはずだ。そうだな、たとえて言うところの、バラ色の青春というやつだ。きっと藤堂も――」

「――からかってるんですかっ！　しかも例えが古すぎですよっ！」

突然、渡が噴火したように怒り出した。

「……何故、怒る」わからない。

それに例えが古いのは、私を育てたくそじじいの責任だ。断固抗議したい。

私の問いに、渡はわなわなと体を震わせ、さらに怒らせてしまっ

たように見える。
そして、渡は爆発したように、こう叫んだ。
「藤堂さんがあなたを好きなこと、知ってるくせに！」
「……は？」
今、何と言った？
「今、何と……？」
渡は、驚いたように目を大きく見開いた。
「えっ……藤堂さんは、会長さんのことを好き……えっ、ホントに、気づいてない？」
イマ、ナントイッタ？
「僕が言うのも何ですが、あんなに、わかりやすいのに……？」
渡は、震えるくらいに驚いている。
「へ？」ナニヲ、イッテイルノダ？
「今回の事件だって、元はと言えば、あなたへの思いが、爆発したんじゃないですか」
思い？　爆発？　ドウイウコト？
「あの、会長さん……？」渡は目の前で手の平を見せ、可愛らしいしぐさで振る。
あ、ああ、そうか、わかった。わかったぞ。少年特有の、いわゆる、あれだ。
あれだ。あの、えっと、そうだ。言葉が出てこないが、あれだ。
そうだ……誤解だ。物部渡は、私達の関係を誤解している。
彼にとっては恥ずかしい過ちだが、ここはきちんと正しておかねばならない。
「よ、よいかね、もののべくん、わたしととうどうは、むかしからのおさななじみで、いっけんなかよくみえるだろうが、これといってふしだらななかではなく、むしろ、かぞくというような……」
渡からの視線が、非常に鋭く、痛い。
「霧島先輩の告白だって、元はと言えば会長さんの役目だったんで

すよっ！　会長さんがなかなか言わないから、霧島先輩ががんばって、会長さんの代わりに『唯一無二の存在だ』って言ったんじゃないか！」

渡が怒っている。顔を真っ赤にして、怒っている。

「えっ……まさか」本気で、言っているのか？

「一緒に恥ずかしい思いを共有することで、藤堂さんと同じ立場になったのも、もしかして、わかってない？」

「いや……あの、その」

渡の体が、わなわなと震える。眉が、つり上がる。

「……最低です」

そう吐き捨て、渡は、逃げ出すように駆けた。私も追いかける。

「ま、待ってくれ物部くんっ！　話を、詳しい話を聞かせてくれ！」

「何で僕があなたに協力しなくちゃいけないんですかっ！」

「藤堂を立ち直らせるための情報は、少しでも欲しい！」

「あなたが一言言えば、どうせすぐに立ち直りますよっ！」

「その一言とは何だ！」

「知りませんっ！」振り返った渡は、涙目であった。

渡は、消しゴムを振った。私の速度が消えた。

渡の背が小さくなるのを見ながら、呟く。

「嘘だろ……？」

私はぽかんと、一人、立ち尽くした。

「嘘だろ……」

もう一度呟いても、何も変わらなかった。

「――本当だ」

振り返ると、葉上がいた。

「葉上……なんだ、その格好は」

葉上の体に黒い植物のツタが絡まり、マントのようになびいている。

「藤堂さんの事は、済まなかった」

「全くだ。お前が隠しさえしなければ――」

「少し、いいか？」葉上は、思い詰めたような表情をしていた。
私は学校に連絡し、午前中を休んだ。

案内されたのは、鉄骨が向き出しになった廃ビル。元、葉上の植物城塞だ。
唐突に、葉上は切り出した。
「俺は、『あの人』を――藤堂さんを殺すつもりだった」
――真由、俺は、あの人を殺すよ。
葉上を殺す瞬間に見た、最後のポップアップだ。
私では、なかったのか。『あの人』とは、藤堂の事だったのか。
「何故だ」
「俺が、藤堂さんを変えてしまったから」
「変えてしまった？　どういう意味だ」
葉上は、頷いた。
「君の前から姿を消してすぐ、俺は――真由に会った」
「馬鹿な。あり得ない」死んだ人間が、生き返るはずがない。
「俺も最初はそう思ったよ。でも、確かに真由だった。俺は幻覚だと思った。でも、それでも良いと思ってしまったんだ」
葉上は手で顔を覆い、苦しそうにしていた。
「真由は『天国から来た』と言っていた。本当かどうかはわからないけど、俺はどちらでも良かった。帰ってきた真由は、植物が大好きで、色々なことを知っていた。少し違和感を感じたけれど、気にはならなかった。未来の植物像を語る真由は、本当に輝くような笑顔で、俺は、真由と話すのがとても楽しかった。そして、俺は提案した」
――作ってみようか、と。真由も喜んでくれた。
「失ったはずの生活が、帰ってきたんだ。俺は、それだけで幸せだった。内容なんて、どうでもよかった。俺は、自分のやっていることの危険性に、まったく気づかなかった」
懺悔するように、葉上は語る。

「それが、まさか藤堂さんに、あんな影響を与えるとは、まったく思っていなかった」
「……何が、あった」
「ある時、俺は公園で実験を行なった。爆発する花の威力を、試してみたくなったんだ。それを、藤堂さんに見られた。その時初めて、俺は自分のやっていることの恐ろしさに気づいた。軽蔑されると思った。でも」
――すごいね。そう言って、俺を褒めてくれたんだ。
「俺は舞い上がった。彼女が、彼女を操る何かが、何を企んでいるかも知らずに。藤堂さんは俺に言った。『ねえ、透明マントって作れるかな』って。俺は藤堂さんに頼られるのが嬉しくて……」悲痛な面持ちで、葉上は語った。
――そして、爆発騒ぎが起きるようになった。
「真由が現われて、こう告げた。爆弾騒ぎの犯人は、藤堂さんだって。信じられなかった。俺は藤堂さんを止めようと、説得に向かった。そして、知ってしまった。彼女は、俺の知っている藤堂さんでは無かった。変わり果ててしまっていた。俺のせいだと思った。だから……」
「だから殺そうとした？　ふざけるな！　どこに殺す必要があるっ！」
「嫌だったんだ。彼女の、醜さが。藤堂さんなのに、藤堂さんじゃない。俺は否定したかった。消してしまいたかった。今ならはっきりとわかる。俺のエゴが、彼女を殺せと――」
「止めろ！　それ以上自分を責めるな！　お前もまた操られていただけだ」
「でも、あの黒い衝動は、確かに自分の中から湧きだしたものだ。わかるんだ。知って欲しくなかったんだ、変わってしまった彼女を。彼女の周りにいる人には知って欲しくなかった。善人で、きれいな彼女のままでいて欲しかった。俺は彼女を好きだと思いながらも、いざ醜い面を見た途端、彼女を否定した。俺は、最低の人間だ。俺

は――『悪』だ！」
「葉上、考えすぎだ。お前は錯乱していただけだ！」
「――そんな理屈で許されるものかっ！」葉上は恫喝した。
「許す許されるの問題では無い！　お前は――」
「会長、君は隠しているつもりだろうけど、俺は知っているんだ」
「何をっ！」苛立っていた。葉上に、自分の思いが伝わらない。
「俺は、九龍の息子だ」
「葉上、お前……」ばかな、そのことは……。
「自分の子孫を超人にする為に、遺伝子操作を施して生まれた実験動物の一人。それが俺だ。俺の両親だと思っていた人達は、研究所を抜け出した研究員で、居場所を突き止められて殺された。だから、あの時、俺を訪ねてきた男は、こう言った」
――やっと見つけた。
「俺の血には、あの男のエゴが流れている。あの男の――『悪』が」
「違う。違うぞ葉上！」
「いいや、違わない。俺の存在が、育ててくれた人達を殺し、蜜柑畑を焼き尽くし、真由を殺し、結果的に、君のお祖父さんまで死に追いやった。そして今度は、藤堂さんだ」
「葉上……もう、止せ……」言葉が、思うようにでない。
この私が、揺らいでいる。
「会長、君は、言ったよな。『自分の役割を果たせ』と」
葉上は、滔々と語る。
「俺が悪だというのなら、全ての罪を被り、会長、君の役に立とうと思った。藤堂さんを綺麗なまま殺し、君の敵になろうと。大丈夫だ。真由は帰ってきた。天国はある。自分に何度も言い聞かせた。自分で、自分の心を騙した。自分の意志が操られていたのか、本気で狂っていたのか、今ではわからない。でも、その時の俺には、これが最善の策に見えた。結果は知っての通りだ。今でもはっきりと覚えている。俺たちは、一度死んだ。死んだら――」
葉上は一瞬言い淀み、そして、言った。

「――何も無かった」葉上の声は、暗く、沈んでいた。
幽霊のような声、と言う表現が実在するならば、こういう声なのかも知れない。
その声を聞いて、私は思い出す。
そう、確かに、何も無かった。花畑も三途の川も無く、光溢れる理想郷も無く、暗闇すら感じることも無く、気がつけば私達は、ここに居た。
実際の所、本当に私達が死んだのか、それはわからない。
実は、天国は存在し、我々がそれを覚えていないだけなのかも知れない。
だが、記憶に残らぬものに、何の意味があるというのか。
そんなもの、無いのと同じだ。
「俺は一体……何を信じていたんだ」
ぞくりと、背筋に嫌な気配を感じた。
――キィィィィィィン！
おかしい。リガンは、消えたはず。それなのに、何故見える。
葉上の影が盛り上がり、葉上の背後に、黒い人影として立っている。
影の眼の部分が赤く輝き、頭に、耳か角か、二本の三角状の何かが生えている。
猫背になって、葉上の耳元に顔を寄せ、何かを、囁いているように見える。
『願望実現機関』黒い蜘蛛の残骸なのか。
「会長……天国が無いなら、あのマユは、誰だったんだ」
影の赤い瞳が、こちらを見た。まるで、私を威嚇するかのように。
「俺の、妄想だったのか」葉上が、目を覆った。
全身の毛が逆立つような、おぞましい感覚に襲われる。
「死んだら、それで終わりなのか」
葉上が顔を覆っていた手を取った。目が、赤く光っていた。
「――葉上っ！」

「くっ……」葉上は苦しそうに呻く。「違う。俺が会長に話したかったのは、こんな事じゃない」

突如として、白い影が出現した。あれは……何だ？

黒い影を、浸食していく。黒い影と白い影が……互いに食い合っている？

――駄目です。耳を傾けてはいけない。

この声は、何処かで聞き覚えがあるような。

「会長、俺は元には戻れない」

葉上は、とても悲しそうな表情をしていた。

「君だって同じだろう。今、君は苦しんでいるはずだ。藤堂さんが爆弾魔であった事実は変わらない。君は、法律に従って、藤堂さんを警察に突き出さなければならないはずだ。でも、本当に藤堂さんが悪いのか？　藤堂さんを操っていたという奴はどうなる」

「それは……私が何とかする」正直言って、未だに答えは見つからない。

葉上は、首を横に振った。

「この事件は、既存の法律では対処できない。でも、警察は捜査を続けるだろう」

葉上の姿が、消えて行く。

「待て！　お前、何を考えているっ！」

「だから、俺は全ての罪を被ろうと思う。俺は、藤堂さんのやったことを、全て自分がやったように偽装してきた。このまま俺を犯人に仕立て上げても、問題ないはずだ」

「馬鹿を言うな！　そんなことしても、誰も幸せにはならんっ！」

地面に、何やら橙赤色の花が落ちている。

「それは、忘れ草だ。一度だけ、使用者のトラウマを引き取ってくれる。それを使えば、藤堂さんの記憶を消すことができるはずだ」

くそっ、葉上の姿を認識できない。こんな時、『リガン』があればっ……。

「こんな俺の力でも、最後に役に立てるのなら、うれしい」

あの馬鹿がっ……先走りおって！
私は、声を張り上げた。
「何処かで聞いているのだろう！　葉上！」
自覚しろ、葉上。お前を悪に仕立て上げたとて、何も変わらない。
「オレはお前を絶対に許さない。だが、お前が『悪』なら、オレも悪だ。――オレはお前を殺してしまったのだから！」
例え、夕焼け空間が消えても、事実は変わらない。
「確かに『死』の先は、何も無いかも知れない！　だが――」
かまうものか。葉上はこの声を必ず聞いているはずだ。
「――大切な人の死は、残された者に大きな影響を与える！」
わかるか、葉上。死が無意味かどうかは、残された者が決めるのだ。
「残された者の行動こそが、死んでいった者の存在意義となる！」
葉上、聞こえているのだろう。
「人は誰でも、悪になり得る。だからこそ、矯正せねばならない。私達のような人間を、もう、生み出してはならない！」
聞こえているのなら、答えろ。
「だから、お前の力を、もう一度貸してくれ！」
叫び声が、廃屋の中をこだました。私は待った。答えが、返ってくるのを。
だが、廃屋内は、いつまでも静寂に包まれていた。
答えは、返ってこなかった。

――ざっ、と、足音が聞こえた。
振り向くと、涼やかな笑みを浮かべる少年がいた。
「友人」
やあ、と友人は軽く挨拶した。まるで、何も見ていなかったかのように。
「……見ていたのだろう」
「当たり前だろ。それが、君とボクとの約束だ」

そう、友人は佇み、私を見ているだけだ。
「この数日、私は醜態をさらし続けたことだろうな」
「……自分の限界を、感じたのかい？」
わからなかった。ただ、酷く疲れていた。色々なことが目まぐるし過ぎて……これが限界だと定義するのなら、私は確かに、限界なのかもしれなかった。
「君とボクとの約束があるから、ボクは君を励ますことも、罵ることもできない。例え君が、何処かで蹲こうとも。自分のやっていることに、疑念を抱こうとも」
友人は、私を見る。
「それでも君は、目指すんだろう――完全管理社会を」
友人は、私をじっと見ている、
「……ああ」友人に、私は見られている。
だからこそ、醜態を見せ続けるわけにはいかない。
力が、戻ってくる。それは、麻薬のようなものかも知れない。
それでも、かまわない。
私は、『忘れ草』を取った。
「使うのかい？」
「さあな」
友人は、私を見ながら涼やかに笑った。
「ボクの知っている物語に、『記憶を何度も消す存在』の話がある」
唐突に、友人は語り始めた。
「その存在は、記憶を消すことを、こう表現する――『生まれ変わる』と」
「生まれ……変わる？」
「つまりは、記憶を消す前の存在は、死ぬって事だよね」
友人は突然、真顔になった。
「記憶を消すってのは、人を殺すのと同義なのかもしれない」
「人を、殺す……」私が、葉上を殺したのと、変わらないと言うことが。

「例えば、凶悪犯が記憶を無くし、善人になったという話がある。実話だよ。記憶が消えた瞬間、人は人格すら変わってしまうんだね。それほど記憶というものは、人間に絶大な影響を与えていると言っても過言では無いのかもしれない」

友人の形の良い瞳が、まっすぐに私を見つめる。

「今の君に、それができるかな」

友人の言葉に、答えることができない。すると友人は再び笑みを浮かべる。

「でも、こうも考えられる。――記憶を消された本人にとっては、それが真実だと」

まるで、こどもを安堵させるかのような笑みだ。

「――記憶、そして人の認識というのは、得てして曖昧なものだ。例え記憶を改ざんされたとしても、本人がそれを真実だと認識すれば、それはその人にとっての真実になる」

「その人にとっての、真実？　馬鹿な。真実とは客観性に基づくものであり、一個人の主観の介在できるものでは無い」

「本当にそうかな。人は、自分が信じたいものしか信じないのかもしれないよ。複数の人間が同じものを見ても、その解釈が同じとは言えないだろ。とある物語を見ても、それを面白いと思う人もいれば、つまらないと思う人もいる。明らかに真実でなくとも、真実だと思い込んでしまう人もいる。神は、本当にいるのかい？」

「そんなもの、詭弁だ」

「葉上くん。藤堂さん」

友人は、二つの固有名詞を出すだけで、私の反論を崩してしまった。

「人は、信じれば本物だと思い込める。自分の都合の良いように、現実を解釈することができる。そうでなければ、フィクションなんて流行らない」

言い切って、にっこりと笑った。

「君は、どちらを選択するのかな」

友人は、試すような視線を、私に送った。
「君の物語、ボクは見ているよ」
そして、廃屋の影に消えるように、歩き去った。
「私は……」忘れ草を見つめた。橙赤色の花は、ただ、そこにある。
その直後、スマートフォンが、振動した。
〈かいちょーさんっ！　たたた、大変ですっ！〉
その声色に、ただならぬものを感じる。
「どうした」
〈ヒロくんが！　ヒロくんが……！〉
マナは息を詰まらせ、なかなか言葉が出ない様だ。
「マナ、落ち着け。ヒロが、どうしたんだ？」
マナが、ひっくひっくとしゃくり上げるのが聞こえる。
そして――
〈――ヒロくんを助けてっ！〉

ヒロを乗せたストレッチャーが、勢いよく廊下を駆けてゆく。
突然、心臓の痛みを訴え、もがき苦しみだしたらしい。
長谷川の帰国は当分先だ。なぜ、このようなタイミングで。
――周防ヒロもどうせ、すぐに死ぬ。殺しても良い命だった。
『願望実現機関』は、私にだけわかるように伝えた。
あれは、こういう意味だったのか？　周防ヒロは死ぬのか？　助からないのか？
そして長谷川、お前は、それを知っていたのか。
「ヒロくん！　ヒロくんっ！」
マナは必死に呼びかけていたが、すでに昏睡状態で、答えることは無い。
「マナ！　お医者さん達の邪魔だよ。離れよう」エルレインがマナを止める。
「でもっ、でもっ！」
緊急手術が行なわれることとなった。助かる見込みは、極めて少

ないという。
　手術室の前で、私達は座り、待つことしかできない。
「……お酒を、ください」唐突に、マナが呟いた。
「何？」「マナ？」
「お酒をくださいっ！」マナは泣きはらした顔で訴えた。
「何を言っている！　お前はっ――」
「――奇跡を起こさなきゃ！　ヒロくんを助けなきゃ！」
「それでお前はまた倒れるのか！」
「それしか方法がありませんっ！」
「駄目だ！」
「お願いしますかいちょーさんっ！　わたしならできるんですっ！」
　マナは必死でしがみつく。私は振り払う。
「自分を犠牲にして得られた奇跡に何の意味があるっ！」
「ヒロくんは助かります！」
「お前はどうなる！」
「知りませんっ！」
　かっとなり、マナの頬を引っ叩いた。
「お、おい、会長……」
　自分でも、信じられなかった。
「……なに、するんですか」
　マナが、睨んだ。瞳が、濁っていた。
「もう、かいちょーさんには頼みません」マナは駆け出す。
　私は腕を掴み、引き寄せる。
「いやっ、離してっ！」
　ここで離せば、マナは酒を探して呷るだろう。そうなればまた、あの最悪の光景を繰り返すことになる。離せるわけがない。
「二人とも止めろよっ！　こんな事してる場合じゃないだろ！」
「してる場合ですっ！　やらなきゃ、ヒロくんが死んじゃうっ！　かいちょーさんっ、離して――離せぇっ！」
　投げるように、マナを突き飛ばした。小さな悲鳴を上げて、マナ

は床に倒れ込んだ。
「あっ、マナ！」エルレインが駆け寄ろうとするが、
「手を出すなっ！」怒鳴りつけ、止めさせた。
「会長、アンタ、何を――」
「――お前は、お前が倒れた時のことを、考えたことはあるのか」
「わたしの……」マナは、私を見上げた。
お前が倒れた時、どれだけ恐ろしい思いをしたか、わかっているのか。
言ってしまいたかったが、認めるわけには、口に出すわけにはいかなかった。
「そうやって、すぐに自分を犠牲にしようとする。だから、お前に酒を持たせるわけにはいかんのだ！」
「かいちょーさんだって同じです！」
「同じにするな！」
「同じですよっ！　エルちゃんとマリナちゃんを仲直りするために、自分が悪者になって！　今回のことだって、知ってるんですよっ！
わたしがお酒を飲んで倒れたことへの悪口を、かいちょーさんは全部引き受けて！　あんなので、わたしが喜ぶとでも思っているんですかっ！」
「えっ……」エルレインが、私を見る。
そうだ。マナが学校に行く前に、私が手を打った。
『マナはアルコールに対する過剰なまでの拒否反応を起こす体質であり、今回の件は、それを知っていながら、マナへアルコール入りのデザートを食べさせてしまった私の責任である。マナは被害者であった』という公表を行なった。
せめてもの、罪滅ぼしのつもりだった。
「たかが紙一枚だが、私はお前の親だ。子の責任は、親が取るのは当然だ」
「かいちょーさんは、わたしの事を何にもわかってませんっ！」
心臓が抉られる思いだった。私が、こんな言葉で……。

「マナ、落ち着けって。会長もマナの事が心配で――」
「――それでヒロくんが助かるんですかっ！」
「いや、それは……」エルレインは、口をつぐんだ。
マナは床に手をつく。滴が、ぼろぼろとこぼれる。
「ヒロくんはお友達なんです……お友達を、見殺しにしろって言うんですか……」
駄目だ。揺らぐな。マナの言い分を認めてはならない。
「かいちょーさん……お願いします……」縋るような目で、私を見る。
止めろ。私を見るな。
もう二度と、繰り返してはならない。
あの自分が死ぬよりも恐ろしい感情を、もう一度経験するなど、ごめんだ。
それが例え、私のエゴであろうと。
「かいちょーさんっ！」
私はっ――
「その必要はございません」
その声、まさか、
「長谷川さんっ！」
仮面のような微笑を称えた執事が、そこには立っていた。
その傍らには、キャリーバッグ。
「お前、どうしてここに……」
「帰国が早まりました」長谷川はにっこりと答えた。
――Ｏｈ！　マナチャーン！　バインバイーン！
「わっ、おわっ、何ですかっ！」
いかがわしい片言の日本語が耳に入ってきた。
見れば、彫りの深い外国人の紳士が、マナに抱擁している。
「――貴様っ！　こんな時に、いい年してどこの馬の骨だっ！」
外国人は、こちらに向き直る。青い瞳が、私を捉えた。
――カイチョーサン！

「……は？」
紳士は恰幅の良い体を広げ、私にも抱きついてきた。
「わっ、何をする無礼者！　私は伊統会長だぞ！」髭！　髭痛いっ！
紳士の厚い唇が、私に迫る！　助けて！
「あら、申し遅れました。こちら、心臓外科医のゲパルト先生でございます」
「……なんだと？」生気を吸い尽くされた体を無理矢理起こす。
ゲパルト医師は、何やら聞き覚えのない言語で、ペラペラと語る。
「生のマナ様と会長さまにお目にかかれて、非常に光栄だと申しております」
「私はこんな奴知らん！　何故知っているのか！」
「わたくしが日本から来たと知ると、急にある映像を見せられまして……」
それが、マナの大食い武者修行の映像だったらしい。
ゲパルト医師は、マナの大ファンだったそうだ。何とも馬鹿げている。ふざけるな。
マナが倒れた時の映像がネット上にアップされており、そこで私の事も知ったらしい。
「マナ様が元気そうで、安心しましたと申しております」
そして、マナの友達を治すために、研修に来たと伝えると、
「ならば、直接行きましょう。マナ様の安否も心配だ。とんぼ返りすれば、問題ないと」
当のゲパルト氏は、何やらペラペラと、マナに話しかけている。
「遠いところから、あなたのお友達を助けるために来ました。記念に、あなたのばいんばいんを触らせて頂けませんか……だそうです」
「――ふざけんなこのエロオヤジがっ！　わいせつ罪で検挙してやろうか！」
「か、会長、落ち着いて！　今は怒ってる場合じゃないよ！」エルレインが止めに入る。
ゲパルト氏は、それを見て、顔を輝かせた。

「……日本語で表現し辛いので、英語で――エキゾチック・ジャパーン！　と申しております……その美しい黒髪を、触らせては頂けませんか。と」

うっ……と、エルレインは軽く引いた。

「――やはりただのエロオヤジではないか！」

「お願いしますっ！　ヒロくんを助けてっ！」

マナのただならぬ気配に気づいたのか、ゲパルト氏の表情が、エロオヤジのそれから、彫りの深い男前に変わった。

長谷川が、状況を説明する。ゲパルト氏が答え、すぐさま手術室へと向かう。

「『安心してください。必ず、助けてみせる』と」

「長谷川さん……お願い……助けて……」

「かしこまりました」自信たっぷりの微笑を、マナに見せた。

そして長谷川は、手術室へと入っていった。

その後数時間、二人は出てこなかった。

私達は、ただ、待つしかできなかった。時間が永遠にも感じるとはこう言うことなのだと、改めて実感した。

その間、マナはエルレインにしがみついてぶるぶる震えながら、祈るように、

「がんばれ、がんばれ」と何度も呟いていた。

だが、私はわかっていた。ヒロが、助からないであろう事を。

――ただの嫌がらせ。その内わかるさ。

『願望実現機関』の言葉が、ようやくわかった。

最低の、嫌がらせだ。苦々しく、『手術室』の表示灯を睨むように見た。

そして、灯りが消えた。

長谷川の微笑が現われ、そして――頷いた。

「長谷川さん大好きっ！」マナが飛びついた。

「マナ様のおかげですよ」長谷川はマナを撫でながら、にっこりと微笑した。

その微笑が、心から嬉しそうに見えた。
隣で、ゲパルト氏が何やら羨ましそうな表情で長谷川を見ている。
それに気づいたマナは、ゲパルト氏にも抱きついた。
満足そうなゲパルト氏の表情は、エロオヤジのそれではなく、父親のような威厳に満ちあふれていた。
「かいちょぉ……よかったなぁ、よかったなぁ……うえーーん」
エルレインは子供のように泣きじゃくっている。
喜びの渦中の中、私だけが、驚愕していた。
ばかな……。
未来は……変わったというのか。

抱きつかれて『大好き』と言われたことに感動したゲパルト氏は、マナのばいんばいんをさわる事無く、「ちょっと秋葉原に寄って帰る」と言い残し、去って行った。
どうやら、相当に多忙な人らしい。
長谷川は、こう言っていた。
「忙しい合間に、マナ様の笑顔とばいんばいんに癒された、とおっしゃっていました」
まさか、マナの大食い武者修行が、このような形に昇華するとは。
……まったく、馬鹿げている。

夕方になっても、マリナは現われなかった。マナはヒロの付き添いとなり、エルレインは霧島と共に、藤堂と一緒にいてくれている。
私は、長谷川を自室に呼んだ。
「此度のこと、ご苦労であった」
「もったいなきお言葉にございます」恐縮しているといった感じの微笑を浮かべた。
「このまま、医者を続ける気は無いのか」
「はい。わたくしにとっては、過去のことですから」微笑が、固くなった。

「だが……」この『才能』埋もれさせておくには、あまりにも惜しい。
「会長さまは、わたくしがご不要にございますか」寂しそうな微笑で訊ねる。
「とんでもない！　この一週間、お前の存在の大きさを、嫌と言うほど思い知った」
　長谷川が側にいれば、防げたであろう事象は多い。己の力不足を感じずにはいられなかった。
「それでも、お前の『才能』を渇望している人々は、世界中にいるはずだ。お前は、その人達のために、その『才能』を発揮するべきだと思う」
「会長さま、わたくしの医者時代の別名、ご存じですよね」
「『死神先生』か。心ない中傷だろう」
「いいえ。それが、わたくしの現実でございます。残念ながら、わたくしがお救いできるのは『助かるべくして助かる人々』のみなのです」
「それは、お前の技量が非常に高い域に到達している証では無いのか」
「会長さま」長谷川は、まっすぐな微笑を私に向けた。「会長さまは、全ての人々の幸福を、実現させるのですよね」
「……ああ、そうだが」
「ならば、わたくしのいるべき場所は、ここです」
　強い信念を持った微笑に、私は反論できなかった。
「それに」
　おどけたような微笑になって、長谷川は言う。
「和洋折衷戦争の勝利一歩手前でわたくしを降伏させようなんて、そうはいきません」
　長谷川は、心からの微笑で言った。
　夜は更けたが、眠ることができない。

スマートフォンで、マナのブログに書き込まれた罵詈雑言を眺める。

刻みつけろ。全ては、私の責任だ。

――そうだ。全ては、お前の責任だ。

部屋の片隅から、私が睨んでいる。もちろん、妄想だと言うことはわかっている。

それを理解していてなお、奴はつきまとう。

血塗られた手を見せつけ、私に自覚させる。

――お前は、人殺しだ。

〈おーい、いとくん、マゾなのかい？〉

突然の井内の声に、私は跳び起きた。どうやら、スマートフォンをハッキングされたらしい。

〈眠れないんならさ、ちょっち地下に降りて来なよ。井内ちゃんが話し相手になってあげる〉

「断わる」誰にも、話すつもりなど無い。全ては、私の責任だ。

〈井内ちゃん、いとくんに犯人と間違われて、夜も眠れないのくっ、私の罪悪感を抉るか。

「……わかった。待ってろ」

〈ひゃっほー〉通信は切れた。

地下のジャングルを抜けると、白い肢体が片手を挙げた。

「にゃんにゃーん」

「なんだそれは」ついに壊れたか。

「ん？　新しい挨拶だよ。流行らせようぜー」

「断わる」

「さっきからそればっかじゃん！　藤堂さんの一件以来、地下には全然降りてきてくれないし」

「私とて、色々忙しいのだ」

「ま、それはわかるけどね」井内は、缶のプルタブをぷしゅっと開けた。「ほいこれ」

「……なんだ」まさか、ミラクルジュースと言うのではあるまいな。
「ただのトマトジュースだよ。こないだの死体ごっこの残り」
「そんなもの、飲みたくない」
「まーまー」井内は半ば強引に押しつけた。「はい、かんぱーい」
缶と缶が、こつんとぶつかった。
「いいかい、いとくん、いとくんが井内ちゃんを犯人だって言った時、すっげー驚いたけど、信頼してるから乗っかってあげたんだからね。二人の親密さがあればこそ、できた技ですよ奥さん」井内は、顔を近づける。まるで酔っ払いのからみだ。
こいつ、トマトジュースで酔っ払うのではあるまいな。
「もっと親密になるために、井内ちゃんを嫁にしなさい」
「お前、何を言って――」
「井内ちゃんは、一夫多妻制でもかまいませんよ」井内はにかっといたずらに笑った。
「そういうのは好かん。最低限の誠意は持ちたい」私はトマトジュースを飲む。
「じゃあ、藤堂さんを選ぶ？」
赤い液体を拭きだした。
「おまえっ、あのなあっ」
「その反応は、脈がないこともないなー」井内は快活に笑った。
「私をからかうつもりか、帰るぞ」
「その前に、いいもの見せてあげるよ」井内が腕に付けたボタンを押すと、からからと自走式ホワイトボードが走ってきた。
そして、ディスプレイに変わる。画面には、マナへの悪評が映し出されている。マナのブログのコメント欄だ。
「こんなものを見せて、どうする気だ」
「まあまあ」井内は空中で、指をわしわしうごかす。「ネットではね、悪口の方が目立つんだ。きっと人間って、悪口の方が書きやすい生き物なんだろうね」
けれど、と井内は言う。

すると、ディスプレイに映し出されていた文字の一部が、強調表示された。

《マナちゃんがんばって》《早く元気になってね》《応援してるよ》《信じてるからね》

悪口に埋もれた励ましの言葉が、次々と抽出されてゆく。

それを背にして、井内は微笑んだ。

「いとくん、まだまだ希望はあるよ」

鼻の奥が、つんとした。漏れ出そうになる嗚咽を、必死で堪えた。

「さ、井内ちゃんの好感度ポイントが上がったところで……って、いとくん？」

井内が顔を覗き込む。きっと、様子がおかしい事に気づいたのだ。

「……帰る」私は顔を背け、歩き出す。

「ええっ、いとくん、夜はまだまだこれからですぜ――」

背後で、ぴょこぴょこ響いていた足音が、ばたんという音で途切れた。

思わず、振り向いてしまう。井内が倒れていた。

「いててっ、いやあ、転んじゃった」

ディスプレイに、地図が映し出されていた。爆弾魔が引き起こした爆発騒ぎの場所が、プロットされている。

それを見て、違和感を感じた。

「……井内、この爆発騒ぎが起きた場所、葉上の爆花花火が爆発した箇所もプロットしているな」

「いたたた……えっ、うん、そだね」

「藤堂が引き起こした可能性のある場所だけを、プロットしてくれ。あと、私と藤堂、霧島の家を抜いてくれ」

井内が次々と光点を消してゆく。それと同時に、得体の知れない胸騒ぎが、大きくなってゆく。

「あっ……」井内が突然声をあげた。

これは……六芒星などではなく……。

「……五芒星だ」

地図にプロットされた点が、綺麗な五芒星を描いていた。
――ヒントは提示してある。
「……いとくん？」井内が、不安そうな表情で私を見ていた。そして、私の手を見た。
見ると、トマトジュースの入った缶が潰れ、中の赤い液体が、手を伝って地面に滴り落ちていた。
私は、地図に表示された星に見覚えがある。
……なるほど。お前が、全てを操っているわけか。
全てをめちゃくちゃにした存在が、戦うべき敵が――今、はっきりとわかった。
潰れたトマトジュースの缶を、叩きつけた。
井内がひゃっと驚き、画面が変わった。
マナが映っている。例の喫茶店だ。
マナは無我夢中で食べきり、口元はクリームまみれになっている。
〈おいしかったです〉映像の中のマナはにこりと笑った。
〈ああっ、マナちゃん、口べとべとだよ〉藤堂の声だ。
画面が揺れた。テーブルの上に、カメラが置かれたのだろう。
映像の中に、藤堂が現われた。自分のハンカチを取りだし、マナの口元を丁寧に拭う。
その表情は慈愛に満ち、穏やかで、まるで、母のようであった。
これが、汚いというのか。醜いというのか。最低だというのか。
ふつふつと、熱い感情がわき上がる。
「い、いとくん、顔、怖いよ……」
「――いいだろう、お前がそう来るのなら……」
お前のせいだ。
「戦争を、始めようか……」
お前が、全てを変えてしまった！
「叩きつぶしてやる！　二度と、このような卑劣な真似ができぬように！」
地図に浮かぶ五芒星に向かって、私は叫んだ。

幕間その二　暗闇に暗躍する者達の戯れ言

天象高校の校門の両側に、二人の男女が背を持たれて立っている。
二人はそれぞれ、とっくの昔に夕日が沈んだ方角を眺めている。
夜の闇が二人の表情を隠し、はっきりとは見えない。
「ようやく、気づいたみたいだ」少年が独りごちた。
「首尾は順調？」女性が訊ねる。
「ええ。いよいよ、次で最後です」
「あははっ！　それは良かったね」
ポニーテールが、ゆさゆさと揺れた。それを見て、少年は答える。
「あなたは顔と名前を隠す意味が既にありませんね」
「あははっ！　いいのいいのっ！」
少年は、溜息をついた。
「まったく……この『私わたし僕ボクあたしアタシ俺オレワタシ我』が素性を隠すのにこれだけ気を遣っているというのに」
「何それ、じゅげむじゅげむ？」ポニーテールの女性は、小首を傾げた。
「どうしても一人称を使わなければならなくなった時に、やむなく使う一人称ですよ」
「ごぎょーの……えっと、何だっけ？」口に人差し指をあて、天を仰いでいる。
「あなたは人の話を聞く気があるんですか？」
「お姉さんは自分の事だけで精一杯です」
「そう言うだろうと思ってましたよ。あなたは、そういう人だ」
「あら、お姉さんの事を全て知ったような口振り。やっぱり嫌いじゃないなー」
「前にも言ったはずです。『私わたし僕ボクあたしアタシ俺オレワタシ我』は、全てを知っているわけではありません」
「そこまでして隠すのなら、出てこなければ良いのに……」ポニー

テールの女性はぼそっと言った。
「何か言いました？」
「うん。聞こえるように言った」
少年は、頭を抱えた。
「まあ、『私わたし僕ボクあたしアタシ俺オレワタシ我』がこうして節目に登場するのも、『前振り』の意味が強いんですけど」
「どーいう意味かな？　ちょっとお姉さんに説明してみ？」
女性は、少年の肩に手を置き、頭を傾げた。
「なんか、すっごくあざといんですけど……」
「まあまあ、たまには協力してあげるから、ねっ」
「……『外側の皆さん』がぎりぎりついていけるように、こうして『私わたし僕ボクあたしアタシ俺オレワタシ我』毎回登場しているわけです」
「ねーねー、毎回そんな長い一人称で不便じゃない？」
「仕方がありません。これも円滑な進行のためです」
「あなたも色々大変ね」
「あなたが能天気過ぎるんです」
「所で、今何回目？」唐突に、訊ねた。
「なんですか、そのクイズの引っかけ問題みたいな問いは。こうしてあなたと会うのは、これが――」
「――そっちじゃないんだな」
「……ああ、そっちの意味ですか。なら、数えるだけ無駄ですよ」
「へえ。そうなんだ。大変ね」
女性は少年から手を離し、校門から、校舎の方へと顔を向けた。
校門から校舎への直線。校庭の中心に、何やら黒いシルエットが存在している。
人が、立っている様にも見える。
そのシルエットは夜の暗闇の中、一際、黒い。
深淵の黒さだ。
女性の視線に気づいた少年も、黒いシルエットを見つめた。

「次で、最後だ」少年は呟いた。
「いざ始まらん。正真正銘の――最終回！　ってな感じ？」
少年は、答えない。ただ、シルエットを眺め続けている。
「じゃ、あたしはそろそろ行くわ。睡眠不足はお肌の大敵ってね」
「くれぐれも、邪魔しないでください。あなたの為にも」
「あははっ！　心配してくれるの？」
「単なる忠告です。あまりはしゃぎすぎると、消されますから」
「あたしはあたしの役割をこなすだけ。例えそれが、『内側』の事であろうと」
「それを知って、発狂しないのが奇跡です。いや、既に狂ってしまった後なのか」
「視点は幾つもあるわ。主観の数だけ。――じゃね！」
女性はふわりと消えた。一人残った少年は、再びシルエットを見る。
「伊統会長、君が全てを知った時、君は、どんな選択をするのかな」
少年も風のように消えた。
残されたのは、深淵のように黒い、シルエットのみ。

第三部序　回想そして消失

その人は、笑っていた。
降りしきる雨の中、ゴミ捨て場に積み上げられたビニール袋をソファーのようにして、にこにこと、曇天を眺めていた。
何故か、酷く悲しそうに見えた。だから――
「はい、これ」
傘を、差し出した。これ以上、濡れて欲しくなかったから。
その人は、笑顔を崩さなかった。でも、戸惑っている様な気がした。
きっと、気遣っていたんだ。やさしい人だから。だから、言った。
「ぼくは、大丈夫だよ。お母さんと一緒に入れば良いからね」
その傘は、お気に入りの傘だった。
でも、この人の為なら、惜しくない。そう思った。
「だから、この傘、あげるよ」
そして、その人は傘を手に取り、
――心から、微笑んだのだ。

第三十一話　世界崩壊の床下会合

「もう、我慢できませんっ」
そう言って、マナはショーツを下ろそうとする。
「待て、マナ、早まるんじゃない！」
「でも、もうびしょびしょで、耐えられませんっ！」
「待ちなさい、マナ、なっ、良い子だから、婦女子としての節度を保って――お願いだから早まらないでくださいっ！」
何故、こうなったのか。原因は一つしか無い。
混沌は井内に始まり、マナによって増幅される。
塩素系洗剤と酸性洗剤のように、混ぜてはいけないのだ。
爆弾魔事件が解決してからしばらく経ったある日、私とマナは井内に呼ばれた。
螺旋階段を下って地下研究施設に入るなり、違和感を感じた。照明が暗いのだ。
「な、なんで……薄暗いんですか……？」歩きながら、マナが寄ってくる。触れるか触れないかの微妙な距離だ。
「さあな、どうせろくでもない出し物でも考えているのだろう」
私の推測は、当たっていた。
薄暗いジャングルを進むと、天井から、白い何かがぶら下がっているのを見つけた。照る照る坊主の要領である。非常に、嫌な予感がする。
「か、か、か、かいちょーさんっ、あ、あれ……」マナの声が震えている。
まったく、この程度の細工で引っかかるとは、どこまで純粋なのだ。
井内が、首を吊っていた。
吊られたままうつむき、表情は長すぎる黒髪に隠れている。動く気配は無い。地面とつま先の距離は、触れるか触れないかの超低空

浮遊である。どう考えても、発見者に触れさせやすくするための配慮にしか思えない。

「あっ、早く降ろさないと！」マナが慌てて駆け寄ろうとする。

私はマナを制止する。

「待て、どんな罠が仕組まれているかわからん。危険だ」

「でもっ、もし本当だったら！」マナの眼がじわりとにじむ。

「日頃の行ないを恨むのだな」

井内の横には、風呂イスが転がっていた。こんなちゃちなプラスチックを足場にして首を吊るとは、狂気の沙汰としか思えない。

やはり、これも発見者への配慮だろう。これに乗って、井内の体を降ろせという魂胆に違いない。

足下には他にも、手紙が置いてあった。こぶし大の石を重しにしている。せっかくなので開封し、読む。

『愛が、足りない』

なるほど、これが死の原因か。どうでもいいな。

風呂イスに乗り、間近で井内の顔をのぞき込む。ご丁寧に、チアノーゼ反応まで再現している。

ふん、こんな小細工、頸動脈に触れば嘘がすぐに露呈するのだ。

残念だったな井内。

井内の首に触れた。

触れた瞬間、冷たさを感じた。

――何かがおかしい。脳裏にそんな言葉がよぎった。

脈動が……無い。

驚きのあまり、風呂イスから転げ落ちてしまう。ばかな……。

これは――本当に死んでいる。

黒髪がまとわりついた白い死体を見上げる。ゆらゆらと、かすかに揺れている。

ゆら、ゆら……ゆら……ゆら……。

死体がかすかに揺れるたびに、全身から毛虫が這いずり回るような嫌悪感がせり上がってくる。

井内、まさか……本当に死んでしまうとは……。

――ビクン！

井内の体が、神経に無理矢理電流を流されたかのように跳ねた。

ひっ！　マナが悲鳴を上げた。

うつむいていた井内の顔が――かっと前を向いた。長い黒髪の隙間から、血走った眼が覗く。そして、言った。

「……神だ」

「――ぎょえええええええっ！」今まで聞いたことがない悲鳴を、マナが上げた。

目の前の光景、そしてマナの悲鳴に頭が混乱している。しかし、これだけはわかる。一度死んでから生き返ると、人は『神』になるという迷信があるのだ。

「井内ちゃんだけ仲間ハズレにしてどういうつもりだーーーっ！」

井内のウェーブがかった長い黒髪が、触手のようにわしゃわしゃと動いた。

「――ぎゃわわあああああっ！」マナは地面に尻餅をついた。おそらく驚きすぎで腰が抜けたのだ。

そしてその後、色々と大変なことになった。

そして、現在に至る。

「待ちなさい、マナ、なっ、良い子だから、婦女子としての節度を保って――お願いだから早まらないでくださいっ！」

「――ねーねーいとくん、なんで敬語なんだい？」

首を吊ったまま白い肢体をぶらーんぶらーんと揺らしているのは、自称『生き返った神』の井内ユウである。いや、今はあえてこう呼ぼう。

「――黙れ幽霊。元はと言えばお前のせいだろうがああっ！」

「いやーまさかー」ぶらーんと、右に揺れ「首つり井内ちゃんの超

絶ギャグがとどめを刺してしまうとは」ぶらーんと、左に揺れた。
井内は『血走った眼』を再現するためのコンタクトレンズを取った。
なるほど『ギャグ』か。私は親指、人差し指と、指折り数える。
「出血死、首つり窒息死と来たら、次は……溺死か」ぷっくりと水分を吸収した後の腐臭が問題だな。「いや、焼死の方が良いか」オレンジ色の炎は、さぞかし綺麗だろう。
「ふむふむ、井内ちゃんを本格的に追い詰める気ですな」井内は揺れながら、顎に手を当てうんうん頷いた。まるで他人事の反応に、私はいらつく。
「貴様はそれだけのことをやった！　万死に値することを忘れるな！」
しゅるっと首の縄がほどけ、井内は三回転して着地した。
「はいはい。かわいいかわいい大切なマナちゃんに、ごにょごにょさせちゃってごめんねっ」てへっ、と、井内は舌を出した。
「そんな返答で許すか！」ああ、うざい。我が内心にこのような低俗な言葉を思い起こさせる行動そのものが。
「井内ちゃんのかわいさに免じて許して？」井内は片目をぱちりと閉じた。
「ああん？」言葉を紡ぐのも疲れた。それにしても、どこかで見たようなリアクションである。赤毛ポニテの影がちらつき、身が震えた。
「おっかしーなー井内ちゃん結構かわいいと思うんだけどなー」
「例え事実だったとしても、自分で言うと角が立つぞ」まったく、心臓に悪い。
「かど？　つの？　井内ちゃんツノ生やそっか！　角が生えたら指揮官機になるよ！　なるよ！」
どういう話の飛躍か。やはり馬鹿と天才は紙一重であり、コイツは馬鹿なのか。
「お前は――」

「――ツノは駄目ですっ！」急に、マナが悲鳴にも似た声を上げた。
「へ？」井内はきょとんとしている。
「マナ、どうした」
「駄目です！　駄目なものは駄目なんですっ！」と言いながらも、股のあたりが不快で気になるのか、着心地悪そうにもじもじしている。
「まったく……」私はマナに触れようと手を伸ばした、すると、マナが、一歩引いた。
少し違和感を感じたが、それはマナの恥じらいであると思うことにした。
こういう時には、あれを呼ぶに限る。
「――エルレイン、いるか！」
しばらくすると、エルレインが走って現われた。しかし、何も無いところで躓く。
「おわわわわっ！」
転けた。恥ずかしそうに立ち上がり、土を払った。
「急に呼ぶなよ。駆けつける方も大変なんだからなっ」当然、顔面真っ赤である。
「ああ、お前はよくやってるよ。近日の働きぶりは、私も十分認めている」
「あ、ありがと……」エルレインは照れた。「って、そんなお世辞で、納得したわけじゃないからなっ！」顔を赤くして怒った。
コイツの赤面症を治すのは、もう諦めた方が良いのかも知れない。
「というわけでマナを頼む」「――えるちゃ～～ん！」マナはエルレインに抱きついた。
「うわっ、これまた、なんでこうなったんだ！」
「いろいろあったのだ。不必要な詮索は身を滅ぼすぞ」
エルレインはむっとして、ぶつくさ言っている。
「あんたはまた……大体、アタシは屋敷の地下に、こんなジャングルみたいな場所があることも知らされてなかったんだ。どうせアタ

シは蚊帳の外ですよーだ！」
「誤解するな。私はお前を、蚊帳の外の存在だと思ったことなど、一度も無い」
エルレインは、いじけた様な顔のまま、私をじーっとみて、ぷいっと顔を背けた。
「行こう、マナ。上に行って着替えような」エルレインはマナを伴い、上へと戻っていった。「なんか最近、妙に忙しいよな……」という呟きを残して。
「……まったく、口を開けばこれだ」人使いの荒さを指摘するための嫌味か。
そういえば、辺りを見回す。井内が消えている。まさか逃げ――。
「――喧嘩するほど仲が良いって言いますぜ」井内がカクレヤナギの影から囁いた。
「逃げたかと思ったぞ。井内ユウ」
すると、井内は眉をつり上げ怒り出した。
「いとくんっ！　勝手に知らない人を呼ばないで欲しいな！　ここは井内ちゃんの聖域だよ！」白い指を、びしっと地面に向ける。どうやら、本人は真剣のようだ。
「その前に、私の土地だ。それに知らない人とは聞き捨てならんな。あれでも一応、戸籍上は私の娘だ」
「井内ちゃんにとっては知らない人だよ！　だって紹介されてないもん！」
「あれ……そうだったか？」
「だから仲間ハズレだって、いったじゃんかーーーーーっ！」意外にも、井内は涙目であった。「娘むすめって、娘ばっかり増やして！　井内ちゃんのことはどう思ってるわけ！　井内ちゃんも娘にしなさいーっ！」
「井内……」私は、井内の瞳を見つめる。「……その手にはのらない」
「ちぇっ、今日こそ上手く行くと思ったんだけどナー」井内は口を

尖らせた。涙は偽装。まったく反省の色は見えない。ああ、何故こんな子に育ってしまったのか。

「でもさ、あの子、誰かに似てない？」唐突に井内は訊ねた。エルレインのことか。

「誰に」それは私も、うすうす感じている。しかし誰かはわからない。

「うーん、わかんね。かわいいから、芸能人かなー？　うーん考えるのもめんどいや」

「なら聞くな」私は地面を見る。「まったく、後始末をしなくちゃならん」

井内の眼が、らんらんと輝いた。何か悪事を企んでいるときの眼だ。

「うひひっ、だいじょーぶだよ。マナちゃんのミラクルジュース跡地で植物を栽培すれば、マナちゃんのミラクル植物として、その手のコアでフェティッシュな紳士達に大人気で馬鹿売れ――」

「――井内……貴様、本当に消し炭になりたいらしいな」

ふつふつと、怒りが炎のようにわき上がってくる。そろそろ、限界だろう。

「い、いとくん、いとくんの背中に、なんか炎が見えるよ」井内はガクブル震えている。

「気のせいだぁ。井内ぃ」怒りのあまり、しゃべり方が変になっている様な気がするが、気にしない「お前ぇは――」

突然、顔に冷たいものがかかった。顔を拭うと、透明な液体が。嗅いでみるが、無臭である。これは水だ。

「うひひっ、仕込み水鉄砲でーす！　危なかったね―いとくん、自分の炎で、身を焦がされる所でしたよー。頭冷えた？」井内はにかっと笑った。

「――井内いっ！」「きゃーおいかけっこー！」ぴょこぴょこぴょこぴょこ。

井内の言う『おいかけっこー』は小一時間続いた。

「はあっ、はあっ……まったく、またもや脱線してしまったではないか。規格外は一人で良いのだ」くそう、コイツのスタミナはどうなっているのか。病弱な設定はどこに消えたのか。走りっぱなしだったにもかかわらず、井内はぴんぴん、いや、ぴょんぴょんぴょこぴょこしている。

「あ、またその話だー！　ねえねえ、いとくん、そろそろ紹介してくれてもいいんじゃないかい？　井内ちゃんの直感が、その人と会うと人生が１０００００００兆倍楽しくなるぜって囁いてるんだけど」

「その代わり社会が崩壊する。断じて断わる」

「えー、それすっごく楽しそうじゃん」

「不謹慎極まりないな」

「不謹慎を極め、全力で楽しむのが井内ちゃんです」

私は不覚にも、死ねばいいのにと思ってしまった。

その後も井内はしつこく、

「ねえ教えてよ」「断わる」「おねがい♪」「やだ」「いとくんっ」「だめ」「《放送禁止用語》」「ダウト！」「愛してる」「理由」「かね」「しね」というやりとりが延々と続いた。

「はあっ、はあっ……なかなかやるね、いとくんっ」

「貴様も、いい加減……諦めろ」

「やだねーこうなりゃ最後の手段だ！　じつりょくこーし！」

「なんだ、まさか殺る気かっ！」私はすぐさま戦闘態勢をとる。

「ふふん、あまいあまい、井内ちゃんは直感を信じて行動あるのみ！」

井内は左手を腰に添え、右腕を上に、人差し指を天高く伸ばした。

「いでよ！　井内ちゃんの会いたい人ーーーっ！」

馬鹿だ。井内のあまりのアホっぷりに、私は呆れて――。

「――呼んだ？」

この瞬間、宇宙中で最も会いたくない赤毛ポニテが、井内の左肩に顔を乗せ、あはは！　と笑った。悪魔だ。悪魔が召喚されてし

まったのだ！

井内の表情がみるみる強張る。さびたブリキのおもちゃの様にぎこちなく、ぎぎぎっ、と首を回す。そして、赤毛ポニテ悪魔と目が合い制止した。

二人は見つめ合う。審判の時だ。

天使が世界崩壊のラッパを手にかける光景が目に浮かぶ。

人嫌いの井内が叫び、逃げ出した瞬間が勝負だ。井内を隔離後、資金を潤沢に投じて防衛ラインを整備し、二度とこの悪魔に引き合わせぬように、生涯全力を尽くすことを誓おう。それが社会全体の安定と平和を――

「――お姉様！」「――妹よ！」二人は、がっちり握手し抱き合った。

――ラッパは吹かれ、社会は崩壊した。もうこの世は終わりだ。

私は頭を抱えてうなだれた。いや待て、納得がいかん！

「貴様ら何を言っているのか！　ちっとも似ておらん！　姉妹なわけあるかっ！」

二人はこちらを見る。

「井内ちゃんは直感でわかってしまったのです。この方は、井内ちゃんに莫大なる利益をもたらすと！」

「この子は敵に回すべきじゃないわ。あたしの『理論』が、この子を味方に付けろと囁く！」

「双方の黒い利益が一致し」「我々は、姉妹のちぎりを結んだのだった！」

ああ、黒い。何と黒いことか。あのわけわからん決めポーズも、きっと何処かからのパクリなのだ。目が合っただけなのに、既に意気投合している。未来は真っ暗だ。

確実に迫り来る不幸に、私は正気を保つのがやっとである。

「ありえない……っ。こんな……こんなっ」

「お姉様、いとくんの理性が崩壊しかけてるよ！　そろそろネタばらし！」

「えー、面白いのに。まったく、井内ちゃんはイトーくんに甘いんだから」
「だってえ……いとくん、井内ちゃんの金づるなんだもの」
赤と白の二人はきゃっきゃうふふと会話している。
「貴様ら……何を駄弁っているのか」
「あたしと井内ちゃんは、実はもう少し前に知り合っていたのです」
「なんだと……？」世界崩壊は、私が知る以前に始まっていたと……？
「二人のなれそめを編集した特典ＤＶＤがあるんだけど……見る？」
「いや、遠慮しておく」嫌な想像しか思いつかない。
「えーつまんなーい」アカネ嬢はがっくり肩を落とした。
どうやら、少し前に、アカネ嬢が井内の前に現われ、意気投合していたらしい。
「どうして……そんなことに」
「ところでイトーくん、あたしが何でここにいるのか聞かないの？」
アカネ嬢の瞳が、聞いて聞いてときらきらしている。
この人はどうしてこうも表情をころころ変えられるのだろうか。
やはり、人間ではないのか。とにかく、なぜ悪魔がここにいるかなど、聞きたくもないし、
「聞けば取り返しがつかなく――」
「この家の防犯システムは、本郷くん所のお店を仲介してあたしが提供してるの。あたしにしかわからないバックドアをたっぷりしかけておけば、侵入は容易い事よ」
「聞いてもいないことをぺらぺらと！」何なのこの嫌がらせ！　助けて！
「さすがお姉様！　自分の手の内を惜しみなく披露してなお、絶対優位にいるんだね！」
「何だこの茶番は……どうして私の周りには、こんな変人共がはびこるのか」
アカネ嬢は、口元に手を当て、私の顔をじろじろ見る。

「……何か？」
「みんな、イトーくんの磁場に引き寄せられてるのかもね」アカネ嬢の口が、弓なりに上がった。
「は？」じば？　この悪魔は突然何を言っているのか？
「ま、気にしないで。さっさと本題に入っちゃいましょう」
そう言って、すんなり本題に入った試しがないのだ。さあ、今度の脱線は何だ！
「ハイこれ。システム『リガンＭｋ２』」
見覚えのある小箱を渡された。
「監視カメラの範囲を広げたわ。さっきイトーくんの屋敷全体にもカメラを取り付けておいたから」
いきなりの本題であり、私は肩透かしを食らった気分になる。
「ん？　どしたの？」アカネ嬢は、きょとんとして私を見た。そして、意地悪そうな笑みを浮かべて「もしかして、お姉さんの脱線話をもう少し聞きたかったのかな？」
「それはない」だが……私は小箱に視線を落とす。
ざわめきを感じる。それは、悪魔のささやきにも聞こえる。
――開けろ。開けてしまえ。その箱を開け、中身を装着すれば、お前は人外の力を手にすることができる。そして、その代償に、
――人知を越えた苦しみを味わうのだ。
「……そう、人の心を読むのが、怖いのね」
「なっ……！」反論したかったが、言葉が出ない。
アカネ嬢の言ったことが、当たっていたからだ。
『Ｒｅ．眼』が伝える人々のむき出しの悪意に捕らわれ、私は冷静ではいられなくなった。友を殺しかけた。いや、殺した。
人は悪だ。そう覚悟をしていたつもりだったが、いざ体感してみると、このざまだ。
黒く鋭い悪意に対して、私の精神は脆弱だった。見たくは無いものを見、聞きたくは無いものを聞き、その結果――私は暴走した。
自分の中に潜む獣性が、いとも簡単に露呈してしまった。私は、そ

れを醜いと感じた。
「いとくん？　どうしたの」井内にまで心配な表情をさせてしまっている。
私は……何をやっているのか。
「なぜ……私にこのような『力』を与えるのだ。私には、いや、人間には過ぎたる力だ」
アカネ嬢の答えは実に簡素なものだった。
「あなたが、欲しているからよ」
アカネ嬢の言葉が、すとんと胸に響いた。
「オレが――」欲して――。

私は地下施設の洗面所に行き、小箱を開けた。
中には、コンタクトレンズのような形状の『リガン』が入っていた。
前と、何かが変わったようには見えない。
悪魔のささやき声が再び聞こえてくる。
――つけろ！　求めよ！　力を欲せ！　それはお前に至高の富と権力をもたらす！
そして鏡の向こう――私が、私を見ている――口が開く――お前は――
――苦しむべきだ。
私が、おぞましい笑みを浮かべた。
一瞬の躊躇の後、私は、何かに促されるように装着した。

戻ってくると、井内が私の瞳を覗き込んできた。
「ねーねー、それ、なんだい？」
「ほら、井内ちゃんとあたしが、今作ってる奴の制御システムよ」
「おー、あれのですか」
「何？」私には、二人の話の流れが読めない。
「こっち来て！　いとくんにも見せてあげる！」

井内は、うひひっ！　と笑ってジャングルの奥へと消えていった。
「いったい……何を見せるというのだ」
葉々をかき分け、私は進む。どうせ、ろくでもない装置を見せられるに決まっている。
「って……マナーーーーーーーーっ！」
マナが十字架型の枷に拘束されている。何故だ！
「はいはいお約束お約束」井内はのほほんと両手を挙げた。
「かいちょーさんっ！」マナが私に気づいた。
「マナ！　何があった！　なぜそのような格好で拘束されているのか！　エルレインはどうした！」
「あ、あのっ。井内ちゃんから協力してって、お願いされたので！」
「ちなみに、ウブで純情なお子様は、現在おねむの時間です」
自走式ディスプレイがからからと走ってきて、エルレインの部屋を映し出した。
〈……まりにゃむにゃ〉ああ、幸せそうな寝顔だ。
黒ウサギのぬいぐるみを、ぎゅっと抱きしめて眠っている。なかなか、かわいらしいところもあるじゃないか。……いや、待て。
「この映像は何だ」
「へ？　屋敷内に手頃な監視カメラを検知したので、使ってみようかなって」
「あはは！　おもしろいっ！」その元凶であるアカネ嬢は笑っている。
「マナちゃんには承諾も取ってあるし」
井内が見せた紙には、こう書かれていた。
『わたし、伊統マナは、このじっけんで、どんなことがおこっても、井内ちゃんのせいにはしません。もふもふ』
「……なんだ、これは」もふもふ？
「文面は井内ちゃんが考えました。最後のもふもふが、マナちゃんらしいポイントです。これで裁判も勝てるね！」
「貴様、余計な知恵を！」なぜ、『もふもふ』なのか。

「いとくんが、いつもやってることじゃない。因果応報いんがおうほーつーこって完全合法。――ポチッとな」

マナが拘束されている十字架の手前。地面が割れ、白い台座せり上がってくる。その上に黒光りする立方体が乗っている。

あれは、『デモンズ・シード』ではないか。

「はい、すたーと」井内のかけ声と同時に、台座から無数のロボットアームが出現した。

その手には試験管と、その中に入った緑色の怪しげな液体が。

ロボットアームは『デモンズ・シード』に緑の液体をかけた。

瞬間、立方体から飛び出した触手のようなツタが、マナの体に絡みつき、でたらめに締め付けてゆく。

「あっ！　ちょ、ちょっと、きつい……やっ、あっ、だめ」マナはくすぐったそうに顔を背ける。それを見て、私の頭はすぐさま沸騰した。怒りの矛先を井内に向ける。

「貴様、我が娘にこのようないかがわしいことを――生きて帰れると思うなっ！」

「あははっ、それはおもしろいジョークね」なぜかアカネ嬢が反応した。

「なんだと！」悪魔め、これを見ても、まだ擁護するか。

「いかがわしいと思うか、いかがわしくないと思うかは、その人の感じ方次第。イトーくんは、いかがわしく感じちゃったのかな？」

アカネ嬢はそう言った後、視線をマナの方へと向けた。それにつられて私も見やると、

……マナの体が、蓑虫のようにツタに覆われている。しかもその表情は、なにやら至福の笑みを湛えている。

「はぁ……なんだか、あったかい、日だまりみたいです。おかあさんに、包まれてるみたい……ぽかぽか……」

……なんだ、これは。

井内をみると、なにやら照れたような様子で頬をかいている。

「いや、マナちゃんにはいろいろと悪いことしちゃったしさ、あの

種の特性を利用して、ヒーリングマシンにしてみたんだよ」
「は？」2、3秒のタイムラグの後、私はなんとなく全貌を理解した。
どうやら、井内も少しは罪悪感を感じていたらしい。が、それでどうしたらこういう結果になるのか。やはりこいつは馬鹿なのか。
しばらく『ぽかぽか』した後、マナに絡みついていたツタは、自然とほどけた。
マナはとろけたような顔をしていた。
「というわけで、マナちゃんご協力ありがと。夜遅くにごめんね」
「いえいえ、とっても気持ちよかったです」マナはぺこりとおじぎした。
私としては、実に複雑な気持ちである。
娘が騙され、いたずらされたようにしか思えないのだが、その娘は喜んでいる。一瞬、私の感覚がおかしいのかと思考がよぎるが、すぐに冷静になって、
そんなことはない！　と断言する。
つまりは、私以外のこの場にいる全員がおかしいのだ。最悪の結論だな。
「ばいばい」井内が手を振ると、
「ばいばい！」マナは元気いっぱいに手を振り、笑顔いっぱいで帰って行く。
ああ、そんな後ろ向きで走ったら――足がもつれた。
――にぎゃん！　奇妙な声を上げ、マナは転んだ。
「……はぁ、かわええ」井内はうっとりした。
「お前、わざとやったな」私は横目で井内を睨む。
「まさか、マナちゃんの天然ですよ」井内は、うひひっと笑った。
マナが転けた所を見る。そういえば、このあたりでエルレインも転けたような……。
……地面に生えた雑草のようなものが二本、互いにてっぺんで結ばれ、足かけの罠になっている。しかもその草は、しばらくすると

自然とほどけ、何事もなかったかのように、しれっと生えている。
ふざけるな。
「――井内ぃっ！」
「まあまあ、マナちゃんのかわいさに免じて許して？」
「ばかものがあっ！」
「あっ、マナちゃんを入り口まで送っていかなきゃ！」井内は逃げ出した。
私は追いかけようとしたが、
「イトーくん、待ちなさい」
振り返ると、アカネ嬢がやけに真剣な面持ちで、私を見ていた。
アカネ嬢は、空中に光のコンソールを表示させ、キーを軽快に叩いてゆく。
すると、『デモンズ・シード』が輝きだし――白い光に包まれ――。
「……今のは、なんだ？」
「一度世界が崩壊して、『理』が全てを書き戻したの」
「……は？」この悪魔、とうとう頭がぶっとんだか？
「信じられないでしょうね。あたしも、最初は信じられなかったから」
「あのう、アカネ嬢……冗談はその辺にして――」
「世界を壊したのは、この子の力よ」
アカネ嬢は、忌々しげに黒い立方体――『デモンズ・シード』を見上げている。
「力？」
「ええ。まったく、葉上くんとやらは、とんでもない物を作ってしまったみたいね」
「どういうことだ？」
「この力は、あまりにも強すぎる。下手をすれば、世界が崩壊するわ。今みたいに」
「そんなバカな！　嘘をつくのは大概にしてくれ。何が世界が崩壊

しただ。バカを言うのはいい加減にしろ！」
「いいえ、今のあたしは嘘をついていない。あなたに説明しても、きっと理解は出来ないだろうし、あたし自身も完全には理解しきっていないから、わかりやすい説明は無理。でも、そうね……今はイリュージョンだと思っててもいいわ」
　嘘ではないと言っておいて、イリュージョンだと思っても良いだと？　完全に論理が破綻しているではないか。わけがわからん。
「でも、一つだけ確かなのは……これは危険よ。絶対にそのまま使っては駄目」
「何を言っている！　あんなヒーリングマシンに仕立てて！」
「カモフラージュ」アカネ嬢は、シンプルに言い切った。
「なんだと？」
「この力は、表面化させてはいけない。なら、隠すしかないじゃない？　だから、あたしと井内ちゃんで協力して、力を『完全制御』する必要があったの。今回イトーくんに披露したのは、その成果ね」
「マナを……そんな危険な物の実験台にしたのか！」
「いいえ。実験台なら、いろいろと。マナちゃんに使って貰ったのは、制御が完全になったから」
「貴女のすることは……理解できない」
「それでいいの。あなたはそれで」アカネ嬢は、うっすらと微笑んだ。「あと、この力の危険性に、井内ちゃんは気づいてないから」
「井内が？　バカな、あいつは直感型の天才で――」
「あたしが、逸らしておいたから大丈夫。とにかく、この子は私に任せなさい」
　アカネ嬢は、真面目な表情をしていた。演技には見えなかった。
「……力と言ったな。戦うための、力になるのか」
「なるわ。確実に。でも、そのまま使っては駄目。最悪、あなたの体と心の両方が崩壊してしまう」
「そんな代物を……なぜ、葉上は……」
「あなたを信じているんじゃない？」

「私を？」
「あなたなら、この力をつかいこなせるって」
葉上が……私を。
そういえば、葉上は自分を悪に仕立てて、私に倒させる計画をしていた。
これが、葉上と戦うための力だったというのか。
「でも、あたしから言わせれば、それは過大評価ね」
「……なんだと」
「おっと、睨まない睨まない。あなたを馬鹿にしてるわけじゃないの。この力は、人間には過ぎたるもの。だれにも、扱うことはできない」
「なら、無意味だというのか」
「だから、『制御』するんじゃない」
「制御？」
「まあ、しばらくはアカネお姉さんにまかせなさいって」
「――いとくんっ！　なんで追いかけてこないの！　かまってよ！」
井内が寂しそうな眼で訴えながら、こちらに戻ってきた。
「……みんなにはナイショよ」アカネ嬢は、人差し指を口元に立て、片目を閉じた。
「なになに？　立方体ちゃんを触ってたの？」井内は無邪気に聞いてくる。
「そうよ」アカネ嬢は、しれっと答えた。
アカネ嬢は、黒い立方体撫でるように触る。
「ちなみに、イトーくんにちょっち、聞きたいことがあるの」
「なんだ？」また、いかがわしいことでなければよいのだが。
「熱を生み出すのに使っているのは、うちの『スサノ』の『理論』みたい」
「スサノだと……？　聞き覚えがあるな」
響きからイメージが蘇る。アカネ嬢の店。赤い、赤い鮮血のグローブ。

そうだ、あのグローブだ。
「……本郷のグローブか」
「え、なになに、井内ちゃんも知りたいよ！」
「ええ、あたしが作った道具『思いグローブ』の『スサノ』の能力は、『重い』『思い』による、大気中のエネルギーの凝縮による発熱と、偏ったエネルギーの調整。エネルギーの分布は、オレンジ色の煌めきとしてリガンで視認可能にしておいたけど気づいてくれたかな？」
確かにオレンジ色の煌めきが時々見えていたし、どうやら私にしか見えないらしいことには気づいていた。しかし、仕組んだ当人からタネをバラされるというのは、あまり良い気分ではない。それに、
「重い……思い？　駄洒落ではないか」
「そ。その駄洒落みたいな『理論』と同じものが、この立方体ちゃんに使われてるんだけど……ぱくった？」と、井内に訪ねる。
「井内ちゃんは、いとくんからもらっただけで、いとくんは、はがみんからもらったんだよね」質問は私にスライド。
「もらったというか、たまたま見つけただけだ」
そういえば、見つけたときに本郷と交戦し、いきなり本郷の技を返してきた。
確か、『チェス』も同様だ。
そのことを説明すると、アカネ嬢は「なるほどね」とうなずいた。
「うーん、筋は通るかなー」
「そんなふざけたオーバーテクノロジー、『ぱくれる』と思うか？」
「思わないけど、オーテクはお互い様だし？　一応、聞いてみただけ」
《井内の前で、こんな話をしても良いのか》
井内に聞かれてはまずいと判断し、私はリガンのポップアップ通信に切り替える。
アカネ嬢もポップアップで応答する。
《状況を整理する上でも、話し合うのは良いことだよ？》

《ねーねー、井内ちゃんだけ仲間はずれはだめだぞう？》
「あのなあ井内、仲間はずれって……」……は？
《井内、まさか、お前、これが見えるのか！》
嘘だと言ってくれ！　いや、何も反応しないでくれ！
しかし、私の願いは無残にも打ち砕かれた。こいつは心底天才なのだ。
《見えるも何も、電波ゆんゆん飛び交ってるじゃないっすか。あれから色々解析したし、見えるのは当然ですよ》
《井内ちゃん、恐ろしい子っ！》アカネ嬢は井内を抱きしめた。実にうれしそうだった。
しかし、井内に『リガン』の暗号通信が解読できてしまうとは、アカネ嬢の言葉を借りるつもりはなかったが、確かに『恐ろしい子』だ。悪い意味で。
「――ちべたっ！」アカネ嬢が突然飛び上がり、ぶるぶると震えだした。「井内ちゃん、ちょっと冷たすぎじゃない？」
アカネ嬢は黒い立方体に手をかざす。どうやら、ストーブ代わりにしているらしい。葉上の残した技術が家電同様の扱いとなり、何とも複雑な気分である。
「うーん……放熱しすぎかな？」井内は自分の手をみて、わけのわからんことを言っている。
「ま、いいわ。さあ、この子をさらに解析するわよ！　手伝ってくれる？」
「いえっさ！」
嫌な予感がする。むしろ嫌な予感しかしない。
「あ、イトーくんはもう帰って良いよ。あと、あたし、しばらくこの家に出入りするから、よろしくねっ！　あははっ！」アカネ嬢は片目を閉じた。
悪魔の笑い声に、目の前が真っ暗になりかけた。
二人は『デモンズ・シード』の研究に没頭し、私は瞬く間に蚊帳の外となった。

「ここがいいの？　それとも、ここかしら？　あら、そんなに出しちゃって、悪い子さん……」

黒光りする立方体に対して、『あなたの性感帯はどこですかゲーム』をしているようにしか見えない。そう見えるのは、私の思考が汚染されているからなのだと気づき、激しい自己嫌悪に陥った。

そもそも、あの立方体に、世界を崩壊させるほどの力があるのか……？

どうも、アカネ嬢に騙されているような気がしてならない。

「帰るか……」とぼとぼと帰路につく。

「――ねえねえいとくん」

振り向きざま、井内が訪ねる。

「いい気分転換になったかい？」井内は、にっと笑った。

何を言うか。私が、どれだけ精神をすり減らしたと思っている。

井内のわけわからんアトラクションに付き合わされ、しかも、アカネ嬢の『世界崩壊』イリュージョンにまで付き合ったのだ。

「ばかもの……疲れたよ」もう、相手をする気にもなれない。

「そりゃ、よかった。――今日はぐっすり眠れるね」やけに、素直な笑顔であった。

瞬間、私は井内の真意を知った。

私よりも、こいつの方がよっぽど回りくどい。

「おやすみいとくん」井内は、柔和に微笑んだ。

「……ああ……おやす――」

言い終える頃には、井内は黒い立方体に向き直り『性感帯どこですかゲーム』を始めていた。私の声が、届いたのかどうかは疑問だ。できれば届いていない事を望む。

地下研究施設を出て、自分の部屋に戻った。

強烈な眠気を感じて、ベッドに倒れ込んだ。

下には赤毛ポニテの悪魔がいる。普段の神経であれば、ざらつくような焦燥感や不安を抱えて眠れないだろう。

それでなくても、最近はもう一人の私に邪魔され、寝付きが悪い

のだ。
……いつの間にか眠りについていた。
意識が、すぅと暗転したのを覚えている。気持ちいいほどに。
悔しさを感じずにはいられなかったが、
井内の回りくどい思いやりには、ほんの少しだけ感謝した。

「――かいちょーさん！　世界が！　世界の終わりがきましたどうしましょうっ！」
マナの悲鳴で目が覚めた。また、世界崩壊である。ふざけるな。
見ると、マナがベッドの上で四つん這いになって、窓から外を眺めている。そもそも何故こいつが私の部屋にいるのか。いや、もう突っ込むまい。
「ほら！　死の灰が降ってます！　早く逃げないとどどどどこに逃げれば！　最後のベルが鳴ったらおしまいっ！」
そういえば少し肌寒い。そう思いながら窓の外を見やると、一面銀世界の雪景色である。どうやら強烈な寒気が我が国を襲ったらしい。昨日までの暑さはどこへやらだ。
「落ち着け、それは死の灰ではない。雪だ」
まったく、『死の灰』などという物騒な言葉、どこで仕入れたのか。
「ゆき？」マナは小首をかしげた。長い金髪が、はらりと流れた。

三人で朝食を済ませ、支度をして家を出る。
「ほほほ、本当に、だだだ大丈夫でででしゅかかか？」
マナはエルレインに抱きつき、この上なく怯えている。
雪の降らない地域に生まれたのは確かなようだ。それならば、雪が降ったときに、子犬のようにはしゃぐ姿が見られると思ったが……今回は王道展開とはいかないらしい。
マナはきょろきょろと辺りを見回し、寒さではなく、恐怖で体を震わせている。

まったく世話のかかる奴だ。私は積もった雪を掬い、緑色の葉々と小さな花を摘んで、細工する。

「ほれ、怖くない」

マナの表情が、驚きに変わった。

「かかか、かいちょーさん、こ、これ、何ですか！」羨望のまなざしで見つめてくる。

「雪うさぎだ」

「うさぎ……うさぎさん！」マナの表情が、ぱあっと明るくなった。実に単純な奴だ。

雪が怖いものでは無いとわかったらしいマナは、子供のようにはしゃぎ出した。

というより、無邪気な子供にしか見えない。

「わっ、ほっ、とあっ――わーい！」

マナは新雪を踏みしめ、自分の足跡がつくのが面白いらしい。

「ゆっき、ゆっき、うっさぎー、ゆっきうさぎー」変な歌まで作ってはしゃいでいる。

うむ、これこそ王道である。朝の澄み切った大気も含めて、実にすがすがしい。

それに比べて、こっちは……。

「ううううっ、寒い……寒いー」エルレインは自分の体を抱え、がたがたと震えている。

「未来でも雪は降るだろう」

「管理されてる」じとっと睨まれた。

「それはつまらんな」

「アンタが作ったんだろ！」

確かに。未来の私は何を考えているのか、実に不思議である。

「アンタ……絶対に人ごとみたいに考えてるだろ」

「まさか」図星であった。

藤堂の家を通り過ぎた。爆発の面影も消えリフォーム完了である。異例のスピードで済んだのは、本郷の親の腕が良いからだ。

なにやらアカネ嬢も一枚噛んでいるらしい。非常に恐ろしい。
藤堂の処遇をどうするかについては、まだ決めかねている。
都合良く記憶を消すべきなのか、罪を償わせるのか。葛藤を生じさせる都合の良い植物『忘れ草』は、私の部屋で咲いている。
「……にしてもさ、変なこと知ってるんだな」隣で歩くエルレインが唐突に言った。
「何が？」
「雪うさぎ」エルレインは赤いマフラーで顔の下半分を覆った。
「ああ、あれか。お前にも作ってやろうか」
「べっ、べつに、そんなつもりで言ったんじゃないから！」マフラーに包まれた口元が、もごもごと動いた。
私は思い出す。雪が降ったときは、母と二人でよく作って遊んだ。
そういえば、藤堂にも作ってやったら喜んだな。
くそじじいとは、よく雪玉を投げ合ったものだ。
雪の降らない地域出身の葉上は、初めて見る雪に驚いていた。
真由も、病室の窓から見たのだろうか……。
あとは……誰か、忘れているような……。
「会長？」エルレインが、訝かしげな視線を向けている。
「まあ、私にも相応の子供時代があったということだ」誰だったか……思い出せない。
「ふーん」エルレインの反応は素っ気ないものだった。
――ぼふっ！　新雪を踏む音にしては、少々大きすぎる音がした。
まあ、大体想像はつく。
マナが顔面から雪に埋もれていた。はしゃぎすぎて転けたらしい。
助け起こすと、マナは小さなくしゃみをした。
「くちゅん」変なくしゃみだ。そもそも、くしゃみなのかすら疑わしい。狙ってやっていないのだとしたら驚異だ。
「……ほら、あまり雪をかぶると、風邪を引くぞ」髪にかかった雪を取ってやり、ぽんぽんのついたマフラーを直してやる。
ビクンと、マナの肩が跳ねた。

「あ、ごめんなさい……くちゅん！」くしゃみをしてから、マナは目を背けた。

なんだ、こいつも恥ずかしそうにできるのか。大きな進歩だと思っていると、マナの瞳が再び輝きだした。

「わあすごい！　わたしのかたちです！」

見ると、確かにマナの形をした跡ができている。

「すごいですね……エルちゃん！」マナは笑顔を向けた。エルレインに。

ふと、違和感を感じた。

今までは、『すごいですね』の後に呼ばれる名前は、私のものだった。あの笑顔は、私に向けられていた。何だろうか、この得体の知れないざわつきは。

……ばからしい。そんなことが何故気になる。かぶりを振って、考えを消した。

鈍感なエルレインがそんな変化に気づくはずもなく、

「ううううっ、さむいいっ、冬なんか嫌いだだっ」と、ひたすら冬の寒さを罵っていた。

その日は一日中雪が降り続き、厚い雲に遮られ、夕日が見えることはなかった。

当然、マリナは来なかった。

翌朝。ベッドの中に、やわらかなぬくもりを感じる。またマナが潜り込んだのか。

そっと布団をめくると、やはりマナが抱きついていた。

猫のように体を丸め、気持ちよさそうに眠っている。

いい加減、私が抱き枕でないことを理解させねばならない。

「う、う～ん……」マナの目が、ゆっくりと開かれる。

ぱちりと、目が合った。

「あ、あの……」マナの口が、小さく開いた。惚けたような表情だ。

「マナ――」

言った瞬間、マナの体がびくりとはねた。
「ご、ごめんなさいっ……！」
半泣きの表情になったマナはベッドを飛び出し、部屋から駆け出て行った。
……なんだ、この反応は。
恥ずかしがっているのか、怯えているのか……正直よくわからない。
マナが、成長していると思えば良いのか。
よくわからないが、今までと反応が変わったことは確かだ。
部屋の片隅、私が、私を見ている。
――嫌われたんじゃないか？
嘲笑うかのような笑みだった。
――だったらどうした。
――かわいそうに。
「――誰がっ！」
そして、その私は、私の本名を呼んだ。
体から、瞬時に体温が失われた。
「か、会長？」ドアの向こうから、ノックと、甲高い声が響いた。
「……エルレインか、どうした？」平静を装い、言う。
「いや、たまたま通りかかったときに、怒鳴り声が聞こえたから……その……大丈夫かなって」
「大丈夫だ。お前に心配されるほど、私は弱くない」
「……そっか」
しばらくの静寂の後、足音が遠ざかっていった。
――あーあ。それだからお前は――。
私に向かって、枕を叩きつけた。枕は壁に当たって、床に落ちた。
無意味に床に転がっている枕。それを見て、自分は何をやっているのかと憤る。
たかが幻覚ではないか。幻だと理解していてなお、反応している自分が情けない。

……情けない？　私が？　自分自身に対して、情けないと思った？

窓の外、白んだ雪景色を見て思う。

季節も、私たちの関係も、私の内心も、何もかも、

全てが、変わり始めていた。

第三十二話　熱

不気味すぎる平穏の中、数日が経過した。
藤堂は依然として学校に来ない。葉上も消息を絶ったままだ。
何も、変わっていない。
変化しているのは、私の内心だけだ。あれから、目の前に私が現われることが多くなった。私は必ず嘲笑うかのような表情をしており、嫌みを言っては消えてゆく。
眠れぬ日々が続く。そのため、意識がもうろうとしていた。
「マリナ、今日も来なかったな……」
「ああ、そうだな……」
しんとした静寂が、部屋全体を覆う。
ここ最近は頭がぼうとして、仕事も手につかない。会社のことは社内の人間に任せきりだ。
ソファに座り、眠りを待つ。まどろみはするものの、深く眠ることができない。
必ず、悪夢を見ることはわかっているから。
「なんで、来ないのかな……」
「ああ、そうだな……」私は答えた。
「――っ、会長、聞いてるのか！」エルレインが声を荒げた。何故だろうか。
「え、エルちゃんっ？」
「ああ、そうだな……」私は答えた。
「会長！」大きな声だ。見ると、エルレインが立ち上がっている。
「あ、あの、二人とも、落ち着いてください……ねっ」
マナが、何故かおろおろしている。
「どうした、エルレイン」
エルレインは私に詰め寄り、胸ぐらをつかんで引き上げた。
「どうしたって、それはアタシの台詞――」

「――うーーっ、うぁーーーーーーーっ！」マナが奇声を発した。
突然のことに、曇っていた視界が開けた。
私とエルレインは、そろってマナを見た。
「みんなで……みんなで――コロッケを作りましょうっ！」
「は？」「へ？」私たちは、同時に声を出していた。「「……なんで？」」
「何でも！　絶対ですっ！　くちゅんっ！」
半ば強引に、作らされることとなった。

「きゃべつーはーじゃーがーいもー」
マナは変な歌を歌いながら、蒸かしたジャガイモをつぶしている。
「俵型……たわらがたっ……」
エルレインは一心不乱にコロッケの形を作ろうとしているが、今のところ、不毛な結果ばかりである。まさか、ここまで不器用だとは思わなかった。
「ところで、これ、一体何個作るつもりなのだ？」
「たくさんですっ！　――くちゅんっ！」
数えてみる。『リガン』を扱う訓練のおかげか、多少頭がぼんやりしているとはいえ、最近では空間認識能力が飛躍的に向上した。
一瞬のうちに数を把握する。
現時点で、俵型の塊は三十二個あった。明らかに作りすぎであった。
「そろそろ、衣をつけるべきではないか？」
「あっ、それもそうですね。わたし、用意します！」
マナは小麦粉を用意しながら器用に卵を割った。その手つき、練達者の動きである。
「かなり上達したようだな」彼の日の『物体X』が嘘のようだ。
「えへへ……」マナははにかむ。きっと、努力したのだろう。
いびつな形の塊を俵型に整形しながら、マナに渡してゆく。
マナは小麦粉と卵、パン粉を付け、エルレインに渡す。

エルレインは油で揚げる。
マナは油が跳ねるのが苦手だが、エルレインは大丈夫だ。まさに適材適所である。それぞれの長所に合った『役割』を宛がえば、見事に調和が保たれる。
これぞ社会の縮図――。
マナの手に、私の手が触れた。
「――ひあっ！」マナは変な声を上げ、コロッケの具を落としてしまった。
床に落ちた具はつぶれ、きれいに整形されていた形は見るも無惨だ。
私は拾おうと手を伸ばし、
「あっ、ご、ごめんなさいっ！」マナが慌てて拾おうと――。
また、手が触れた。
「――ひゃわわっ！」またもや変な声を上げて、瞬時に手を引っ込めた。
いったい、何事かと見ると、マナの頬がほんのりと赤い。
「……どうした」
「あっ、いえ、何でもないです。……ごめんなさい」
マナは私が触れた方の手をもう片方の手で包み、視線を落とした。
頬はまだ、朱に染まっていた。
これは――古き良き、日本の乙女の恥じらい！　まさか！　マナが？
私とマナ、二人の動きは停止し、パチパチと油が跳ねる音だけが聞こえた。

「ごちそうさまです――くちゅん！」
「あれ、マナ、もういいの？」エルレインが訝かしげに訪ねる。
もういいって……既に十七個は食べている。充分食べ過ぎの部類であろうが。
「おなかがいっぱいなので……」と、マナは言った。

早々に食器を片付け、マナは部屋に戻っていった。
「……マナにしてはおかしい。最低三十個は食べそうだもんな」エルレインが呟く。
「何を言っている」私の中で確信があった。
これは……これは、間違いないぞ。
「マナの中に『乙女の恥じらい』が生まれたのだ。十七個とはいえ、沢山食べることを恥と思う風潮、今宵は記念すべき日だ！」
エルレインは私を冷ややかな眼で見つめ、
「アンタ、バカだろ」と言った。
ふん、鈍感な奴め。

翌朝、私はうなされていた。
寝苦しい。熱を感じる。まるで、最大出力にしたこたつの中にいるようだ。
あまりの寝苦しさに意識が覚醒し、私は目を開けた。
あつい。灼熱の中にいる。布団の中で、熱が絡みつく。
不意に、嫌な予感がした。布団をめくる――マナだ。
はあはあと息が荒く、頬を真っ赤にして苦しそうだ。大量の寝汗をかいている。
これは一体、どうしたことか。
「マナ……マナ！」触れた瞬間、手のひらから伝わる高熱に驚く。
揺すってみるが、意識を取り戻す気配はない。
さっ――と、血の気が引き、視界がぐらつくのを感じた。
一瞬、意識を失い苦しむマナに、同じように苦しむ母の姿が重なった。
現実なのか、まだ、夢の中にいるのではないのか。悪夢を見ているのではないのか。
違う。何を妄想に浸っているのか。あの苦しみを繰り返すのか。
今やるべきことは――。
「――エルレイン！　いるか！」

とんとん。ドアをノックする音がし、パジャマ姿のエルレインが入ってきた。
「……ふぁ、なんだよ、こんなに朝早くから。アタシはアンタのボディーガードを引き受けただけで、召使いじゃないんだからな……って、マナ？」
「救急車を呼んでくれ！」
「へ？」エルレインは、きょとんとした。
「救急車を！」

「マナ……マナ……？　ほら、アタシだよ。わかる？」
「ううん……エル、ちゃん？」マナが意識を取り戻した。しかし朦朧としている。
「よかった。意識はある」
「エルレイン、救急車を――」
「――悪いけど、高熱だけだったら、救急車を呼ぶのはやり過ぎ」
エルレインはぴしゃりと言い放った。
「何だと！」
「わっ、結構あついな。とりあえず、体温を測ろうか」
エルレインは私に関せず、黙々と行動していた。
「４０度超えか……とりあえず、脇も冷やしておいた方がいいな。それよりも、まずはっと……スポーツ飲料とかって、うちにある？」
「エルレイン？」
「何ぼけっとしてるんだよ。高熱になったときは、先ずは脱水症状にならないように水分補給が常識だろ。とりあえず水は持ってきたけど、ホントは吸水率の高い飲み物の方がいいんだ。あと、解熱剤もあればちょうだい」
「……あ、ああ、そうか」
「あと、はいこれ」
渡されたのは、ティッシュを敷いた、小さめの洗面器だった。
「ま、念のためだけどね」

私がスポーツ飲料を持ってくると、エルレインはスプーンに少し注ぎ、マナの口に近づける。
「マナ、飲んで。喉、からからでしょ」エルレインはマナにやさしく語りかける。
マナは弱々しく口を開け、ゆっくりと飲んだ。
「よかった。飲んでくれた……」
マナはゼイゼイと苦しそうに息をしている。
「熱は高いけど、痙攣とかしてなければ大丈夫だから。でも自力で歩くのは無理だろうな。会長、ここはアタシがやるからさ、病院までの移動手段を手配しておいてよ。あと、飲み物。水分取って、汗をかかさないと」
「ああ、わかっ――」
マナがおう吐した。すかさず洗面器で受け取る。
「よーし、吐いてすっきりしろー」エルレインはマナの背中を優しくさする。そして丁寧に口をぬぐってやる。そして口に水を含ませ、濯いでやる。「大丈夫だからな。アタシがついてるから。絶対に良くなるからな」慈愛に満ちた笑みを、マナに向けた。
その顔が、今度は私に向けられる。慈愛は消え、冷静さだけが浮かんでいた。
「会長、救急車を呼んで」焦りも、怯えも、やさしさも無い、甲高い声。
「何？　お前、ついさっき呼ぶなと――」
「――高熱『だけ』の場合って言っただろ。今は状況が変わったんだ。会長、アンタは正しかった」
いつの間にか主従逆転状態になっているのにも気づかず、私は言われるがままに連絡を取る。しかし、電話先の対応は冷たいものだった。どうやら、昨今救急車をタクシー代わりに呼ぶケースが増えたことに起因しているらしい。
「なに、熱だけで救急車はやり過ぎだと？　こっちは娘が高熱を出して――」

「――はい、代わって」
エルレインが受話器を、さっと奪い取った。
「……はい。嘔吐を繰り返し、意識がもうろうとしています。あと、奥歯ががちがち震えています。もちろん自分で立ち上がったり動くこともできません。あなたはこれでも救急車をタクシー代わりにするなと言うんですか？　……はい。はい。よろしくお願いします」
エルレインは冷静に理を説き、納めてしまった。
何事もなかったかのように、マナの世話へと移る。
「あー、服もびしょびしょだ。着替えないとな……」エルレインは困ったような表情であたりを見回し、私を見た。そして、しょうがない奴だなとでも言うように笑った。
「ほれ、いつまで突っ立ってんの。これからマナを着替えさせるから、男は出てけ」
冷静すぎて逆に怖い。
部屋から閉め出された私は、ふと冷静さを取り戻し、時計を見る。すでに登校時間を大幅に超過していた。学校に連絡し、事情を説明する。それでも焦燥感は消えない。何故だろうかと思索した結果、私は霧島書記長に連絡を取った。
「霧島書記長、今日は学校を休む。生徒会の運営は任せる」
〈あら、そんなこと言っていいのかしら。任せるなんて言ったら、生徒会を乗っ取るわよ？〉
「ああもう、それどころではないのだ。勝手にしろ！」
〈そう……マナちゃんに、何かあったの？〉
「なっ？」何故、そうなるのか。書記長はどこかで私を見ているのか。
〈図星ね〉
「ふん、貴女には関係ないことだ」
〈あら、まだそんなことを言ってるの？　あの子はもう、私たちの友達なのよ〉
霧島書記長の口から、マナに対して『友達』という言葉が出てき

たことに驚いた。

〈ねえ、知ってる？　マナちゃん――昨日私に相談しにきたの〉

「何？」思いがけぬ言葉に私の思考は停止し、次の言葉を聞いた瞬間、

〈『仲直りするには、どうしたらいいんですか』ですって〉

体の最も脆いところを、的確に貫かれたような痛みを感じた。

〈とりあえず、一緒に何かをしてみたらって、答えたんだけど〉

――コロッケを作りましょう！

〈マナちゃんに負担をかけたら駄目よ。一応、今はあなたの娘ってことになっているのだから、あなたが負担を背負って、マナちゃん達を守るべきなの〉

返す言葉もなかった。いや、返せなかった。喉の奥から何かがせり上がってくるような感覚を覚え、私はそれを押さえるので精一杯だった。

〈マナちゃんのこともそうだけど……春香もあなたに会いたがってると思う。だから、一段落したら、また会いに来なさい〉

通話が切れた。それとほぼ同時に、サイレンの音が耳に入ってきた。

不安を煽り立てるような不吉な音だ。こんな気持ちでこの音を聞いたのは、これが何回目だろうか。

かけつけた救急車が病院に搬送し、マナは医師の診察を受けた。

私は、気が気ではなかった。あの時もそうだ。

マナが急性アルコール中毒になって担ぎ込まれた時も、私は何もできなかった。

こんな事、今までなかったはずなのに。私は一体、どうしてしまったのだろうか。私としたことが、こんな醜態。あってはならないはずなのに。

『またお前か』とでも言いたそうな冷たい視線も気にならないほどに、私は動揺しきっていた。逆に、エルレインは冷静で、真摯な

態度で医師の話を聞いていた。
マナは今、点滴を受けているらしい。
点滴が終わるまで、私とエルレインは病院の待合室に並んで座っている。
「マナは……マナは大丈夫なのか」
「マナは大丈夫だよ。マリナの看病の時はさ、水分とか取れないくらい、弱ったこともあったからさ」
「エルレイン……？」
「大丈夫だから」エルレインは、私を励ますように笑った。
少しだけ、安心できた。
「……助かった」私は床を見ながら言った。
「え？」
「私一人では、ここまでできなかった」
床の模様を、何気なしに見る。そうでもしなければ、耐えられない。
「無理もないよ。大切な人が突然倒れたら、誰だって取り乱しちゃうよ」
「しかし……お前は……」
「……慣れてるから」
思わぬ言葉に驚き、エルレインを見る。微笑んでいた。
「マリナさ、体が弱かったから、よく高熱を出したんだ。家族はアタシしかいないから、アタシが何とかしなくちゃいけなかった。アタシだって、最初はアンタみたいに戸惑ってばっかりだったんだよ」
エルレインは遠くを見ている。その視線の先にはきっと、彼女にとっての過去であり、私にとっての未来がある。
「一人で心細くて、怖い夜が何度もあった。でもさ、そんなとき、電話がかかってくるんだよ。出たら、病院の人だった。なんでも、人間の体内にはセンサーが埋め込まれてて、それが異常を知らせるんだって。すごいよね」
「……エルレイン？」

「でさ、その人が、看病の仕方とか、救急車を呼ぶ目印とかを丁寧に教えてくれたんだよね。アタシがありがとうって言ったら、当たり前のことをしたまでだって言うんだ」

エルレインは、うれしそうに話す。

「どういうこと？　って聞いたらさ、自分一人の力で、大切な人が助けられるように、その方法を教えることが重要なんだって。その方が、無闇に救急車を呼ばれなくて済むようになって、結果的に、全てが円滑に廻るからって、その人は言ってた」

エルレインは、笑った。

「さすが、完全管理社会だよな。アタシが助けを求めたら、全てのインフラが整ってさ……。思えば、あのときだけは、完全管理社会であることに感謝したよ。いままで、忘れてた。あのときの気持ちも……夢も……」

最後の方になると、言葉に震えが含まれ始め、そして、途切れた。

エルレインの瞳に、突然涙がにじんだ。

「どうした……？」

エルレインの頬を、涙がこぼれ落ちる。

「アタシがいなくなって……あの子は一人で、たった一人で、あの苦しみに耐えなきゃいけなかったのかなって……考えたら、アタシはなんてことをしちゃったんだろうって……アタシ……バカだ……」

ボロボロと涙を流し、しゃくり上げながら、エルレインは自分を責めていた。

「あの子がいくら苦しくて……助けを求めても……誰も……誰もいないんだ……」

ここ最近は吹っ切れたのだとばかり思っていたが、エルレインもまた、ずっと自責の念を抱えていたのか。

決して取り返しのつかないこと。激しい後悔。今なら、彼女の気持ちがいたいほどわかる。

過去に戻ってやり直せたら……。あの時、あんな選択をしなければ……。今までだって、幾度の後悔を乗り越えてきたが、今回だけ

は……。

思わず、手をさしのべたくなる。しかし、私もまた、理解しているのだ。手などさしのべられたところで、何の解決にもならないことを。

自分で、解決するしかないのだ。受け入れて、噛み砕いて、飲み込んで。糧にして、立ち向かう。そのためのささやかな手助けをするには、どうすれば良いだろうか。

ふと、マナの言っていた『あたまぽんぽん』を思い出した。

――むしろ、何とも思ってない人に頭を触られると、ふぁーーっ！　ってなっちゃいます！

これだ。エルレインの頭をぽんぽんとすることにより、彼女の溢れ出る羞恥心を呼び覚ます。私にぽんぽんされれば、きっと彼女にとっての屈辱になるはずだ。

『このままでは駄目だ』と思い起こさせる事ができれば、落ち込んだ気持ちを振り切るための活力になるだろう。

彼女のつややかな黒髪に、ぽんぽんと、やさしく触れた。

目が合った。

胸に、飛び込んできた。

場所もわきまえず、子供のように泣きじゃくった。

通りすがりの看護師や患者がちらりとこちらを見る。少し、恥ずかしい。

彼らには、私たちがどう映っているのだろうか。家族が重い病気にかかった、悲劇の兄妹にでも見えているのだろうか。

ひとしきり泣いた後、エルレインはおとなしくなり、離れた。

「ごめんな、いきなり泣いちゃって。あと……何も言わないでくれて、ありがと」

眼鏡を取り、涙をぬぐいながら、エルレインは言った。

「ここでやさしい言葉、かけられたら、アタシ、くじけちゃいそうだから」

何も言わなかったのではなく、何も言えなかったのだ。もちろん

そんなこと言えず、
「そうか」とだけ言った。
すると、エルレインは勝ち気に微笑んだ。
「もう、大丈夫。アタシはあきらめが悪いんだ。ここに残ったのも、元はといえば、それが原因だしな」
帰ってからもらった薬を服用させた所、マナは一度は熱が下がった。
しかし、夜になるとぶり返した。
エルレインは、
「ま、大丈夫だから。熱が出るのは、元気な証拠だから」と冷静であり「そんなに心配なら、ついていてあげなよ」と、突き放すような男前の言動であった。
病院でぼろぼろと涙を流す少女と、今のエルレインが同じ人物だということに、人間の不思議を感じずにはいられない。
「それに、ここは、アンタの部屋だしな」エルレインは、にっと勝ち気に歯を見せた。
そうだ。そもそも、ここは私の部屋であり、何故私の部屋かと言えば、帰ってきたときにエルレインが強引に連れ込んだからだ。
まあ、病院に行く前も私の部屋であったし、一番用意が調っているからという理由もあるのだろう。
というわけで、私がマナのそばにいるのはごく自然なことであり、心配だからついているとか、そういう理由ではないのだ。
そのことを言うと、エルレインは鼻で笑った。
マナの横には、バナナなどの食べやすく高栄養な食べ物や、スポーツドリンクが置いてある。
エルレインには「汗を拭いておくように」と指示されたため、今の私は汗ふき兼、栄養水分補給係を担っている。
「……かい、ちょーさん」マナの弱々しい声が聞こえた。
「どうした、マナ、のどが渇いたか？　おなかがすいたなら、バナ

ナでも食べるか？」
「……ごめん、なさい」
思いがけぬ発言に、私は息をのんだ。
「ヒロくんの、しゅじゅちゅ……わがまま、言って」
――かいちょーさんっ、離して！
――離せぇっ！
――マナを突き飛ばした。小さな悲鳴を上げた。
……すでに終わったことだと思っていたが、マナは、ずっと気にしていたのか。
思えばあれ以来、マナはずっとよそよそしかった。
私が触れたときも……あれは『乙女の恥じらい』などではなかった。
私を、怖がっていたのだ。
触れられるのを、拒絶する程に。
「ごめんなさい……」うわごとのように、マナは謝り続けた。
ばかものが。
本当に謝らなければならないのは、私の方なのに。
謝りたいと思ってしまった。それで彼女が安堵するのなら。謝らなければならない。
だが、謝罪の言葉を口にしようとしたとたん、強烈な吐き気がこみ上げてくる。
頭の中は、『あの男』の、地を這いつくばるような謝罪のイメージで塗りたくられ、それに応じて、あの日のつらい記憶が鮮明に蘇ってくる。
もういやだ。あの日を繰り返すのは。
炎がちらつく。男の影、煙、赤いランプ、白い蛍光灯。見たことのないはずのイメージが次々と展開していく。妄想に捕らわれてゆく。
誰か助けてくれ。
あの日の記憶から解放してくれ。

激しい動悸に、私は強く、胸をつかむ。
解放できぬのなら、いっそ……殺してくれ。
突然、手を取られた。
あつい。燃えるような熱が、その手を通して伝わってくる。
「かいちょーさん……」マナの小さな白い手が、握っていた。
熱に染まった頬。はぁはぁと控えめな熱い吐息。不思議な色のうるんだ瞳に私の影が映る。
強い衝動に駆られ、朦朧とする意識の中、私は『言葉』を吐いた。
その『言葉』は己の耳には届かず、強い喪失感とともに、大気中に消えた。
そのまま力尽きたように、私の意識は途絶えた。

「――くちゅん！」
私のくしゃみである。何か文句あるか。
「なんだか、かわいい『くしゃみ』ですね」マナがにっこり笑う。
お前に言われたくない。
私は今、自室のベッドに横たわっている。全身に、激しい悪寒がする。
馬鹿な、この私が……風邪をひくとは。
「マナならともかく、会長がこの『くしゃみ』はないな」エルレインは笑みを噛み殺している。
しかも、『くしゃみ』を馬鹿にされるとは。
そもそも私は人一倍、体調管理には気を遣ってきたし、人前でくしゃみなどしないし、それでは自分のくしゃみが可笑しいなどということに気づく要素もなかったことになるし、マナと同等の恥ずかしいくしゃみだったことも知りようがなかったし……。
とにかく……伊統会長、一生の不覚だ。
「かいちょーさん、だいじょうぶですよ。こんどは、わたしが看病します」
マナがばいんばいんを張った。というより、私の角度からは、ば

いんばいんにマナの顔が隠れ、ばいんばいんしか見えない。ばいんばいんがばいんばいんしており、ばいんばいんであることはまさにばいんばいんである、って私は何を考えているのか。まるでさっきから、ばいんばいんの事しか考えていないようではないか。

いくら意識が朦朧としているとはいえ、これでは最初に逆戻りだぞ伊統会長。

エルレインは、相変わらず迅速に振る舞う。

「お前……ほんとに……てきぱきしてる、な」

「言ったろ。マリナが風邪引いた時は、よくこうやって看病してたの」

そうしてエルレインは、私の頭に手を置いた。ひんやりとして、気持ちがいい。

「まだ熱いな。ま、でも大丈夫。マナの時ほどひどくないし、熱を出すのは元気に戦ってる証拠だから」

発熱で衰弱した精神に、彼女の『大丈夫』という言葉が染みた。

「かいちょーさん！　おかゆができました！」

「たくさん食べて、早く治せよ」冷たい指が、自分の頬をすべった。

お礼を言おうと思った。その考え自体が、正常なものではなかった。弱っていたのだろうか。口を開いた。かすれた声しか出なかった。

エルレインはふわりと笑った。ただ、それだけだ。伝わったのかはわからなかった。

エルレインが遠ざかってゆく。小さくなってゆく彼女の背中を見ていると、急に不安と、胸が締め付けられるような得体の知れない感情を感じ、手を伸ばす。手は届くことなく、空を切った。

……どうかしている。きっと衰弱しきっているせいだろう。

正直堪えた。もし、この広い屋敷に一人きりであったなら、この苦しみを乗り越えられただろうか。今のマリナは、この苦しみを一人で乗り越えなければならなかったのだろうか。エルレインが消え、たった一人で、助けを求めようとしても、誰も助けてくれる人など

おらず、衰弱しきった体を心で、一人、孤独に耐えなければならない。

誰か助けて……。

幻覚が見える。一人倒れ、震えが止まらぬ手を、虚空に伸ばすマリナが。それは、何よりもつらいこと。そう思うのは、私が弱くなっている証拠ではないだろうか。

くそじじいが死んでから、私はずっと一人で生活してきたはずだ。その時も一度、高熱にうなされたことがあった。あのときは、私一人で……。

……何故だろうか、慈愛に満ちた母のような微笑が見える。

黒と銀。これは誰だろうか？　高熱に頭がやられ、記憶と現実と幻覚の区別がつかなくなる。全てがぼんやりとゆがみ始める。

『この人』は誰だろうか。私の妄想の産物なのだろうか。『この人』を思うと、胸が締め付けられるみたいに苦しくなる。そして、気づいた。

得体の知れないこの感情の正体は……寂しさであった。

なぜ……？　なぜ、会ったこともない人物に対して、寂しさを感じるのか。

彼女と入れ違いに金色のふわふわしたものが近づいてきて、私に微笑みかけた。

「熱いので、ふーふーしてあげますね」

胸の締め付けは消えた。だが、違和感は消えない。何かを、忘れているような。誰かが、足りないような……。

妄想の中の『この人』のことを考える。

不思議な存在。私があの屋敷に来てから、常に私の側に寄り添い、影のように振る舞う。それでいて絶大な権限を持ち、大抵のことは処理してくれる。時には師のように、時には母のように、時には従者のように、私のためにだけ尽くす存在。

そう、まるで——道具のような存在。

考えただけで、馬鹿馬鹿しくなった。

そんな存在、いるわけがないではないか。……それでも、
「誰かが……足りないような……」
「――そんなの……当たり前じゃない」
声がした。聞き覚えのある声だ。だが、マナの声ではない。
「……ったく、なに死にかけてるのよ」
これは、夢だろうか。オレンジ色の光が、カーテンの隙間から差し込んでいる。
いつの間にか、自分が眠っていたことに気づいた。黒い影が、私を見下ろしている。
「マリナ……なのか？」
「誰かが足りないですって……そんなの、あたしだって……いつも……」
視界がゆがんでおり、彼女の表情は見えない。だが、苦しんでいるように見えた。
だから、私は何かを話した。その何かは、覚えていない。
目の前が再び暗転した。黒い影は消えた。
あれが夢だったのか現実だったのか、治った今ではわからない。
確かめるすべはない。なぜなら、
マリナが、来なくなったから。

ここ数日、『にゃんにゃん』も、『にゃおーん』も無く、数ヶ月続いていた隙間ターミネーターの襲撃も無く、至って平穏な日々が続いている。
最近エルレインの様子がおかしいのはそのせいだろう。
私はエルレインの部屋の前に立つ。ドアをノックしようとして、ふと思う。
もし、タイミング悪く部屋に入り、互いに気まずくなってしまったら……。
うむ。先ずは部屋の内部を盗撮し、安全を確認したのち、絶妙のタイミングで入出するのが正しい紳士のたしなみというものだろう。

なに、外道？　気にするな。本人に知られなければ問題ない。
屋敷内に設置した『リガン』を起動させる。
エルレインは、ベッドの上で、体を小さくして座っている。
何かを顔に当てているようだ。あれは、いつぞやの恥ずかしい服ではないか。
確か、マナが魔法少女がどうとか言っていた奴で、最初のマリナが着ていた服だ。
エルレインは一体何をやっているのか……。
「くんくんくんくんくんくんくんかくんくんっくんかくんくんくんかくんかくん……」
えっと……これは……ううむ……。狂気？
「……うん、もう少し我慢できる」
ああ、我が二人目の娘は病んでいる。これは早く何とかしないといけない。
エルレインは、傍らにあった黒うさぎのぬいぐるみを引き寄せた。
アカネ嬢からのプレゼントで、どことなく、マリナに似ている。
「……マリナ、お姉ちゃんどうしたらいいのかな？」エルレインの瞳が潤み始めた。
明らかに、マリナ黒うさぎに話しかけている。よもや、これほどに追い詰められていようとは……。
ここだ！　取り返しがつかなくなる前に、フォローをしなくては。
私は最高の瞬間を見逃さない。勢いよく扉を開ける。その瞬間、エルレインの甲高い声が、さらにもう一段階高くなったような声が、
「がんばって。お姉ちゃんは何があってもマリナのお姉ちゃんだよ」
一人二役。お人形と、おしゃべりしている。そして自分の世界に没入しすぎているのか、私が入ってきたことにも気づいていない。
彼女の瞳は潤んでいると言うより、きらきらしている。
頬が上気し、いわゆる――生き生きとしている。
「マリナ……きゃーーっ！」エルレインは黒うさぎを抱きしめた。

何と楽しそうな表情だろうか。瞳が潤んだ所からして、お人形遊びの一環だというのか。盗撮した自分を棚に上げるが……なるほど、だまされた気分だ。

「楽しそうだなエルレイン！」

「――ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！」

悲鳴の意味が変わった。すばらしい。

これでエルレインの羞恥心は限界突破したはずだ。己の所業を悔い、永遠に悶え苦しむがいい！　そして己の行動を改めるのだ！　私のささやかな気遣いを返せ！

「……マリナぶんが足りない」ここ最近のエルレインの口癖である。果たして『マリナぶん』とは何なのか。足りなくなったからなんだというのか。

口癖の感覚が最初は数時間に一回だったのが、一時間に一回となり、三十分に一回、五分に一回。二分に一回。最初は一目を忍んで呟いていたのに、今では無意識のうちに呟いているらしく、周囲に丸聞こえである。

教師に注意されても、本人には何のことだかわかってない。目が血走っている。

授業中、ふとエルレインを見ると、何やら陶酔したような顔で何かを書いている。

覗くと、マリナが後ろ姿の誰かさんに抱きつかれ、恥ずかしがりながらもうれしそうな表情で目を潤ませている絵が。大迫力。実に写実的。後ろ姿の誰かさんは、もちろん本人だろう。黒い欲望がそのまま凝縮されて結晶化されたような絵だ。

意外な才能を開花させたことを誇らしく思うべきなのだろうが、その構図と表現は完全にアウトである。誰かに見られれば社会的に自殺するレベルだ。

学校の屋上。エルレインは夕日に向かって叫ぶ。

「マーーーリナーーーーーーーーーーーーー！　カームバーーーーック！」

おい、溢れる羞恥心はどこに消えたのか。

「抱きしめたい匂いをかぎたい髪の毛さらさらしたいなでなでしたいちゅっちゅしてぺろぺろしたいぎゅーってしておしたおしてうなじをなめてやわらかほっぺをぽふぽふしてもうおねえちゃんってほほえみながらおこられてあたまぽんってやられてごめんってするとぎゅってあったかされるからたいおんやわらかたいおんおみみをはむってするとあんってぺろぺろくちゅくちゅちゅぱちゅぱにゃんにゃんにゃにゃん――」

このようなフレーズを念仏のように唱え始めた。もう手遅れなのか。

「か、かいちょーさん、エルちゃんが、エルちゃんが！」

うむ、そうだな。言わんとしていることはよくわかる。たとえ手遅れだとしても、止めねばならない。

「おい、エルレイン」

「あはは、マリナ、アハハ、まりな、あはは、まりナー」

「おい、頭お花畑」

「おはナばタケまりナーたノしーネー」

駄目だ。皮肉も通用しない。壊れている。

「これは重症だな」

「でも、少しだけわかります」

「このように壊れる理由が？」

「だって、もし、かいちょーさんと会えなくなっちゃったら、とっても辛いです。かいちょーさんはどうですか？」

マナの表情は真剣そのものであり、なんというか……むず痒くなった。

「少なくとも、このようにはなりたくないな。絶対に」

そもそも、ここに至るまでも大変だったのだ。

「マリナが来てないはずがないっ！　会長、マリナをどこに隠して

るんだ！」
エルレインは現状を否定し、怒りだした。これは抑えるのが大変だった。
「会長、何でもするから、お願い！　マリナに会わせて！」
次第に私と取引しようとした事もあった。
「……もう……駄目だ……」
鬱屈し始めた。マナと交代で二十四時間見張り、気が気ではなかった。
「わかったよ、全ては、マリナなんだ」
受け入れた。相変わらずわけがわからんが。
ここまで来て、ようやく気づいた。
これは死を受け入れるまでの五段階に酷似し過ぎている。……アホか。
こっちはエルレインにばかりにかまっている余裕はないのだ。
養生部の不穏な動き、葉上の失踪、藤堂の処遇、我が屋敷の地下でなにやら怪しい実験を繰り返す悪魔とその弟子、ヒロくん退院パーティの企画、マナの大食い武者修行再開に向けての計画、近郊の再開発事業、会社経営ｅｔｃ……。
それでなくても、もう一人の私が毎晩私を責め続ける。このままでは精神に異常を来たしてしまう。私のためにもマリナ、早く私を殺しに来いっ！

《――にゃおーん！》

「来たか！」
「にゃんにゃんですっ！」
エルレインの体が、ビクンと跳ねた。
見れば夕焼け。青い旗を翻したマコトをバックに、マリナが立っている。
「こんにちはいと――」

「よく来てくれたマリナ！　お前を待っていたぞ！　いやあ、良かった！」
「マリナちゃん！　無事だったんですね！　わたし、心配したんですよ！」
「な、な、なに、何なの！」マリナは明らかに動揺している。
そうか、冷静になって考えると、暗殺しに来たのに、熱烈に迎えられるのはおかしいな。
「ま……ま……ま……」
エルレインが、痙攣している。ああ、まずい……。
「――マリナーっ！」エルレインがマリナに飛びかかった。
「わあっ！　なにーーーっ！」
いかん！　このままでは、あの念仏が現実に――。
「わあああん！　マリナ心配したよおっ！　なんで来てくれなかったの？　どうかしたの？　大丈夫？　こっちでは今、風邪がはやってるから、マリナも気をつけなきゃ駄目だよ？」
意外なことに、エルレインは理性を取り戻していた。
だが、その記憶は一週間程前のものである。この一週間、彼女が何をしていたのか知ったら、顔から火を噴き出して死ぬだろう。
「あ、あたしはっ……あんたなんかに言う筋合いはないわ。あたしは伊統か――」
「――うん。うん、いいよ。話したくなかったら話さなくて。アタシはマリナが来てくるだけでうれしいから」エルレインはマリナの体をぎゅっと抱きしめた。
マリナの瞳が大きく開いた。そして憂うように目を伏せた。
「ほんと……調子……くるっちゃうよ……」
手から黒いフライパンが転げ落ちて、からんと音を立てた。
それでいい。マナと目が合った。マナはにっこり微笑んだ。
これでマリナも戦意を喪失し――。
「……やさしくされても、つらいだけだよ」
マリナが、ぼそっと、呟くように言った。

「あたしは、あなたの知ってるマリナじゃないの。あなたの妹みたいに、清楚で、芯がしっかりしてる子じゃないんだよ」
「マリナ？　どこでそれを……」エルレインが、マリナの顔を見ようと腕を解く。
「――放して！」マリナはエルレインを突き飛ばすように離れた。
エルレインは、呆然と立ち尽くしていた。
「どうせ、いつかは言わなくちゃいけなかったんだ」マリナはうつむき、呟いた。「もう、姉妹ごっこはおしまい」
「マリナ、待って！　それは――」
「あたしは、最後には……会長を殺さなきゃいけないんだよ？　いつまでもあなたのごっこ遊びにつきあってる暇はないの――ごほっ！」
赤黒いしぶきが、マリナの口から吐き出された。
「……！　マリナ、まさか、最近来なかったのって――」
「――寄らないで……っ！」マリナは苦しそうに顔をしかめた。
「マリナ！」
「あたしは……穢れてるの……」
べっとりと血のついた手のひらを、エルレインに向けた。
「そんなことないよ！　マリナは――」
「知ったような口聞かないで……助けに……来てくれなかったくせに……」
「マリナ――」エルレインが駆け寄ろうとしたその時、
青色の旗が、二人の間にひらめいた。
「マコト！」
「ごめん……」その表情は、どこか悲しげであった。
青くひらめく旗の隙間、マリナは弱々しく口を動かす。
「心配しないで。また来るわ……会長を殺しに。その時は……お願い、あたしを嫌って。あなたを、好きにならせないで」
顔からは血の気が引いていた。
旗が舞い上がった瞬間、すでに二人は消えていた。

後には呆然と立ち尽くすエルレインだけが残り、

《――にゃんにゃん、にゃおーん！》聞き慣れた鳴き真似と共に、変身も解けた。

「何が、どうなっているのだ」

「エルちゃん、マリナちゃんは、どうしちゃったんですか？」

「わからない……わからないよ。アタシ、あの子を……苦しめてたの？」

エルレインはうつむき、頭を振った。

「マリナの病気……酷くなってた……」

「エルちゃん？」マナが疑問を含んだ声で、エルレインを呼ぶ。

「……アタシ、そんなことにも、気づかなかったんだ」じわりと、涙が溜まる。

「エルレイン」私も呼ぶが、エルレインは呼ばれたことに気づかない。

「マリナの病気は、心因性のもので、過度のストレスとか、絶対に駄目で……」

エルレインは呟く。まるで、自分を責めるかのように。

「救おうとして……逆に、負担になっちゃってたのかな……」

エルレインの潤んだ瞳が、私を捉える。

「……ねえ、アタシのやってることが、マリナの負担になってるとしたら……アタシ、もう、何もしないほうがいいのかな……？　それとも、あの子の言うとおり……き……嫌えば！」

「――そんなことありませんっ！」マナが叫んだ。

「じゃあ、どうすればいいっていうの！　あの子を助けたいのに！　あの子を助けようとすればするほど、あの子は苦しむんだよ！　アタシ、ずっと疑問だったの！　あの子は２０年後の未来から来て、今のアタシは２０年後にも存在してるはずなのに、どうして！　どうして２０年後のアタシはあの子を助けないの！　わかったの！

アタシが、ここであきらめるから――」
　エルレインの手足が、末端から消えていく。思わず私は大声を張り上げる。
「エルレイン駄目だ！　お前は――」
「――マリナちゃんは、エルちゃんの事が好きですっ！」マナが、力一杯叫んだ。
「……えっ？」手足の消滅が、止まった。
「好きだから、苦しいんです。好きな人に嫌われちゃったら、もっと苦しくなるだけです。いなくなっちゃったら、もっと辛いです。その原因が、自分の言った一言だったら、マリナちゃん、一生後悔しちゃいますよ！　いいんですか！」
「そんなの、嫌だよ……でも……」
「エルちゃん、思い出して。エルちゃんは、マリナちゃんの事が大好きですよね」
「……だけど、その『大好き』が、負担になってる。アタシはいっそのこと、身を引いた方が良いのかも」
「そうやって、好きな相手を気遣えるのって、すっごく素敵なことだと思います」
「マナ？」
「エルちゃんは、マリナちゃんの事が大好きで、マリナちゃんのためなら自分を犠牲にすることもためらわない人です。わたし、もったいないと思うんです。エルちゃんはマリナちゃんの事を一生懸命に考えることができるのに、それをどうして、前向きに使わないんだろうって」
「前向きに……？」
　マナはにっこり笑って、うなずく。
「そうです。ねえ、エルちゃん、一緒に考えましょう。マリナちゃんを、どうしたら救えるか。かいちょーさんだって、協力してくれますよ。だって、今までだって、ずっとそうしてきたじゃないですか」

そして、エルレインの、見えなくなったはずの手を取った。
「わたし達は、家族なんです。きっと、マリナちゃんも家族になれます」
マナの言葉は、純粋な綺麗ごとだ。聞く人にとっては、不快感を催すこともあるだろう。私のような人間には、とてもではないが紡げない言葉だ。
マナはまだわかっていない、絶望しきった人間に対して、無責任に希望の言葉を投げかけることの罪深さを。
見ていられなかった。目を背けるように、私はまぶたを閉じた。
それが、やさしさだと言うのなら、きっとそれは残酷なやさしさだ。なぜなら、
「マナ……でも……アタシ、もう……どうしていいか……わからないよ……」
彼女を救う具体的な手立てを提示できなければ、言葉などに意味は無いのだから。
脳裏に、言葉が蘇る。
――このたびは御愁傷様でございます。気を落とさずに、強く生きるのよ。あなたは、強く生きなくちゃいけないわ。泣いてもいいのよ。お母さんの分まで強く生きて、それが何よりの供養になるわ。がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。《強く生きて、美談を作って楽しませて》がんばって。がんばって。がんばって。《親が死んだのに泣かないなんて、薄情な子》がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。がんばって。
黙れ！　お前らにオレの辛さがわかるものか！　わかったようなつもりになりやがって。内心では楽しんでいるんだろう！　お前らはそういう生き物だ！　他人の不幸を食い物にしなければ気が収まらない、最低の悪だ！　綺麗な言葉で飾ればいいと思ってやがるが、その腐った本性までは隠し通せない！　言葉だけだ！　他に何をしてくれる！　本気で手を差し伸べてくれたほんの数人は、そんな言

葉を吐かなかった！　何もしない奴に限って綺麗な言葉を吐きやがる！　そんな奴ら、いっそのこと――
「――わたしに良い考えがあります！」
マナの声に驚き、私は目を開いた。
マナの表情には希望が満ちていた。
私は、まぶしさを感じた。そして、マナは言った。
「お茶会をしましょう！　みんな仲良く！」
「……は？」「……へ？」
話の前後関係が飛躍しすぎており、理解がついていかない。
すると、マナは焦れったそうに腰に手を当てた。
「んもうっ！　二人とも、何をぼんやりしてるんですか？」
「いや、お前こそ、何を言っているのだ……？」
「だって、エルちゃんの淹れてくれる紅茶は絶品なんです！　長所を生かせって、かいちょーさんはいつも言ってるじゃないですか！」
マナの表情は真剣で、冗談を言っているようには見えない。
「わたし、思うんです。悩んじゃうから、体に負担がかかっちゃうんです。だったら、最初からみんな仲良くできれば、全部解決できちゃうんじゃないかなって」
マナはぽわんと微笑んだ。一切の迷いのない自信が、そこには現われていた。
そうか、マナはマナなりに、エルレインのことを一生懸命に考えて……。
「まったく、都合のいい考えだ」
「……駄目、ですか？」マナの表情が曇り、上目遣いで見てくる。
まったく、こいつは大バカ者だ。私が言うべき言葉は、一つしか無い。
「私には決して思いつかない案だ。やってみる価値は、あるだろう」
マナの笑顔が、ぱあっと咲いた。
「戦場で、お茶会か」私は、吹き出した。「実に、お前らしいよ」
何やら、二人が私の顔をじろじろと見ている。二人とも、ぽかん

と口を開け、驚いているようにも見えるが……。
「あ、かいちょーさんが……」マナが口を開き「……笑った」エルレインが続いた。
何故か、顔が熱くなる。
「な、何を言うか、私とて、人間だ。笑うことくらい、無きにしも非ずだ」
「それも、そうだな」エルレインがやわらかく微笑んだ。
「ふふん、おいしいケーキとお茶で、みんな仲直りです！」
マナは高く拳を上げ、力強く宣言する。
「名付けて、エルちゃんとマリナちゃんの、らぶらぶだいさくせんっ！」
「らぶらぶ！　らぶらぶなの？」エルレインの眼が、きらきらと希望に輝いている。
「そうです。らぶらぶです」マナは大仰に頷いた。
「おお……らぶらぶ……」エルレインは、義理の姉の前に跪き、崇めた。
娘らよ、貴君らは一体どこへ行こうとしているのだ。
「さあ、そうと決まれば、準備に取りかかりましょー！」
「お、おー！」エルレインはぎこちなく腕を上げた。体が力みすぎているのだろう。
「さ、エルちゃん、行きますよ！」マナはエルレインの手を取った。
「かいちょーさんも、忙しくなかったら協力してください。待ってますよ」
二人は早速、教室を飛び出した。おそらく調理室にでも行くのだろう。
「……笑った、か」思えば、自然と笑ったのは久しぶりかもしれんな。
――お前に笑う資格があるのか？
もう一人の私が、部屋の片隅から問いかける。私は答える。
――さあな。だが、マナの提案は悪い話ではないだろう。

私は内心、考えていた。マナの案は、一見馬鹿げて見える。だが、これはチャンスかもしれない。マリナの戦意が喪失すれば、奴は、必ず出てこざるを得なくなる。

もし、私の推測が正しければ、あいつを引きずり出す事こそ、この問題の、真の解決につながるはずだ。

――せいぜい、見させてもらおうではないか。絶望への軌跡を。

――ふん、私を見続けるのは『友人』の役割だ。貴様のではない。せいぜい隅っこでおとなしくしていろ。

私は内心そう吐き捨て、教室を出た。

第三十三話　らぶらぶだいさくせん

その日から、マナ達は毎日あれやこれやと計画を話し合っている。資材は、学園祭で先輩方がやったメイド喫茶のものを流用できる。茶器や茶葉は、なぜか我が屋敷に一流のものがそろっている。

一体、誰の配慮か、エルレインが集めたような、そうで無いような……。

我が娘達が画策している最中、ようやく藤堂が登校してきた。

クラスの連中には爆発騒ぎに巻き込まれたことをそれとなく話していたので、もしかしたら遠慮がちに接せられるのではないかと心配であった。が、杞憂であった。

藤堂の姿を確認するなり、マナがうれしさのあまり飛びついたのだ。

霧島書記長、藤堂の友達も後に続いた。一番意外だったのは、エルレインと藤堂が普通に話していたことだ。

見舞いを通して、親しくなったのだろうか。私にはわからない。

藤堂は何気ないしぐさで教室を見回し、私と視線が合うと、ふっと安心したように微笑んだ。クラスメイトと話すしぐさは自然で、一見回復したように見えるが、

「――春香が心配？」いつの間にか、隣に霧島書記長がいた。

「……まあな」否定はしない。

「その割には、お見舞いに全然来なかったくせに」

確かに。藤堂のお見舞いには、最初の頃に行ったきりだ。

あの時は藤堂も沈んでおり、何を話して良いかわからなかった。

逆に、マナやエルレイン達は結構頻繁に訪ねており、様子だけは彼女らを通じて聞いていた。

結果的に、藤堂の件に関しては、書記長達に一任する形となってしまった。

私は再び見舞いに行くわけにはいかなかったのだ。なぜなら、

「……言ったのだ、『学校で待っている』と」
「それが、あなたの気遣い？」霧島は、ため息をついた。
「悪いか」
「バカね」
批難は甘んじて受けるが、いざストレートに言われると、多少いらつく。
「あの子は、あなたが好きよ」
顔が、突然熱くなった。
「なっ、何をっ、何を破廉恥な事をっ！」耳がっ、耳まで熱くなる。
「あなた、意外と奥手なのね。気に入ったら、すかさずプロポーズぐらいする人だと思っていたけど」
それは実際にやった。だが、それとこれとは話が別で……大体、なぜ、藤堂が私のことを好きだと聞いて、私は動揺するのか。
そもそも、藤堂は幼なじみで、妹のような存在であり、確かに最近は大人びてきて綺麗だと思うこともあるが、だからといって――。
「また、『品行方正』とでも考えているの？」
「なっ」霧島は『Ｒｅ．眼』を保有しているのか！
「図星」霧島の視線が私の胸中を貫いた。
霧島は、ため息をついた。
「だいたい、人に『好き』と言って、何が破廉恥なのかしら。なんで自分の気持ちを隠そうとするの？　『恋は神速を貴ぶ』のよ。わたしは、すぐに言ったわ」
学校内で話すべき話題ではない。体中がかっかと火照り、変な汗が吹き出す。
「好きになったら、押して、押して、押すべきよ。今は振り向いてくれなくても、必ず振り向かせてみせる。だって私は、私に自信があるもの」
顔色一つ変えずに、霧島京香は言い切った。
――自信。
その言葉に、何か気になるものを感じた。

「あなた、待っていたのでしょう。春香は『学校に来た』わ。それに対して、あなたはどう答えるの？」

……どう、答えるか。案件が、また一つ増えた。

いや、案件と称していいのかもわからんが。それにしても、霧島は何故このような事を私に言うのだ。嫌みか。

と、聞くと、

「それは私が春香の親友だからよ。親友の恋愛を応援するのが、親友のつとめでしょ？」

だからといって、私にどうしろというのか。

「あの子、言ってたでしょう、『自分の殻を破れない』って。たぶん、それがあの子の暴走した理由だと思うの。だから、あの子を変えなきゃいけない。その為には――」

霧島は、私をまっすぐに見据えた。

「少なくとも、私たちから変わらないといけない。二度と、あの子にあんな事させない。今度は、私が未然に食い止めてみせる」

覚悟を持った眼をしていた。私は、怯んだ。自分が怯んだことに驚き、

「貴女は……その……変わったな」つい、率直な感想を述べてしまった。

出会ったときの冷たさは消え失せ、その時には無かった何かが、彼女を激変させたのだ。それは、果たして何だろうか。

霧島京香は、その自慢の黒髪をさらりとかき上げ、不敵に笑んだ。

「人は、恋に落ちると変になるの。今の、私みたいにね」

そう言い残して、霧島京香は、藤堂を中心としたクラスの輪に入っていった。

私は唖然として、そんな彼女を眼で追うことしかできなかった。

このときの私は、きっと、誰よりも間抜けに映っていただろう。

「……変わらないといけない、か」

私は、変わったと言われることが多くなった。

それはマナやエルレインと出会った時期に符合する。

人は確かに変わってゆくもので、その変化には良いものもあれば、悪いものもある。

――『自信』という言葉がちらついた。

私は、どう変わったのだろうか。そして、どう変わっていけば良いのだろうか。

その日の放課後。ふと教室を見回すと、藤堂の姿が無い。

「かいちょーさん、今日こそ！」マナは計画を完遂しようと張り切っている。

大食い武者修行が休止中の今、打ち込めるものができたのは僥倖なのかもしれない。

「藤堂は？」

「えっと、さっき『かっこいいお姉さん』と一緒に出て行きましたよ」

「かっこいい？」

「えっと、あの、学園祭の時！　エルちゃんの演劇の前に、バンドではじけてたお姉さんです！　なんだかすっごいきらきらしたブーツ履いてました！」

「ああ……」大体見当はついた。あの人が藤堂に用があると言うことは、用件は一つしか無いだろう。

「かいちょーさんは、今日は参加されます？」マナはこちらの様子をうかがうように、表情をのぞき込んでくる。これは、何かあったな。

「そうだな、ちょっと用事があるから、それが終わり次第だ。で、何かあったのか？」

「あのう……最近、ちょっと問題が発生してまして」言いにくそうに、視線を何度かそらしつつ、ちらちらと私の顔をのぞき込む。

「わかった、聞こう。今すぐに聞こうか？　それとも出向いたときで、大丈夫か？」

「あ、では、来てもらったときで大丈夫です。待ってますね」マナ

はにっこり笑って、とたとたと駆けていった。
「廊下は走るなー」
「はーい！」
気持ちのいいくらいの変わり様だ。全ての人間があれくらいわかりやすければいいのだが、実際にはそうもいかない。
さて、用事を済ませるとしようか。
私は、『リガン』を起動し、校内の防犯カメラと同期させる。危険人物リスト検索……見つけた。第2音楽室だ。教室に設置した防犯カメラから、映像を取得。
「――放してっ！」突然、藤堂の大声が飛び込んできた。
マナの言う『かっこいいお姉さん』――轟響先輩と対峙している。
「とっさにつかんじまっただけじゃねーか……なんで練習にこねーんだよ。おれはお前を――」
「――やめます」藤堂はきっぱりと言い切った。感情を押し殺したような声だった。
「やめる？　なに言ってんだよ。お前の演奏は――」
「私には、演奏する資格なんて、ないんです」
「また、わけのわからんことを。演奏するのにライセンスって必要だっけ？」
轟先輩は大げさに体を反らして、藤堂の顔を下からのぞき込むが、藤堂は沈黙を保ったままだ。
「私は、普通の生活がしたいんです。先輩みたいに、一心不乱にバンド活動へ打ち込む時間なんてありません」
「そんなに普通がいいかー？　大体、普通って何だよ。変な奴だな」
「先輩には……わかりません。普通って言うのは……普通に勉強して……普通に友達と遊んで……普通に進学して……」言えば言うほど、藤堂の表情は暗く、沈んでゆく。
爆弾魔事件を引き起こしてしまったことが、影響しているのは間違いなかった。
「普通に……」

「――恋するとか？」轟先輩は小首をかしげた。
「ば、馬鹿言わないでくださいっ！」藤堂は一瞬にして沸騰した。
その反応、エルレインに負けずとも劣らない。轟先輩が、戸惑うほどに。
「そんなに驚かなくてもいいんじゃね？」
「と、と、と、とにかく、私はっ、普通がいいんです！」
「嘘だね」
轟先輩は、にっと意地悪な笑みを浮かべた。
「お前の声が、そう言ってる」
「なっ、何を根拠に……」
「お前が本心を偽るとき、声のトーンがほんの少し下がるんだ」
藤堂ははっとして、轟先輩を見た。
「なんで……なんで、私なんかに、そんな……」
「――『私なんか』って言うなっ！」
雷が落ちたような怒号だった。
「お前のその言い方、むかつくんだ」
「なっ、むかつくって、訳がわからないっ。私が私のことをどう言おうと、私の勝手じゃ無いですか！」
「おれは、自分で自分を卑下する行為が大っ嫌いなんだ！」
「そんなの知らないっ！」藤堂は顔を背け、音楽室から出て行こうとする。
「お前はっ……ああっ、くそっ！　とにかく理由なんざどうでもいいんだ！　おれがお前を必要としてんだよ！」先輩が藤堂の肩をつかみ、
「それが、嫌なんです！」先輩の手を、藤堂が勢いよく払った。
藤堂は先輩を振り返り、強い語気で言い放つ。
「あなたは、何でも強引に進めすぎです！」
轟先輩を睨み、大声で叫ぶ。
「知ってますか、あなたの強引なやり方には、みんな反感を覚えてるって！」

二人は、互いに視線を合わせ続けた。
緊迫する空気の中、しばらくして、轟先輩が口を動かす。
「――知ってるよ。そんなこと」
その眼には強い信念が灯っていた。
「何もしない奴に、他人を笑う資格は無い。例え誰も理解してくれなくたって、おれはこの生き方を貫く」
「馬鹿じゃないの！　そんなことしてたら、誰もついて来られなくなって、最後には……ひとりぼっちになっちゃいますよ！」
「お前は、ついてきた」
「ただの……惰性です」
「それでも、ついてきたんだ」
轟先輩の揺るぎない言葉に、藤堂は動揺する。
「ほんとは違う……惰性なんかじゃない……」
「藤堂？」
「あなたを見るいーくんの視線、知ってますか？」
「視線？」
「いーくんは、あなたに憧れてる。あなたに……私がいーくんに向ける顔と同じ顔してる！　あなたの側にいれば、いーくんの視線は、私にも向けられてる気がして……そんな、不純な動機で……私は……」藤堂の目に、涙が溜まってゆく。「でも、そんなのやっぱり気のせいで……辛くて……」
「どんな動機だろうと、聞く方は関係ねえよ」
先輩は、ばさりと切り捨てる。
「自分がどんな気持ちでいようと、受け取る奴次第なんだ。それでも……伝えてみなきゃ、受け取ってももらえねえんだ」
轟先輩は、藤堂を見据えた。
「おれは、学園内のホールで待ってる」
「なっ、何を――」
「お前が歌え」
「えっ……？」

「本当は、歌いたいはずだ」
藤堂は、ふらふらと後ずさり、壁に背をぶつけた。
「昔、歌は思いだって言った奴がいる。でも、おれはそれだけじゃないと思う。歌には、技術も必要だ。相手を聞く姿勢にさせるだけの技術が。お前がうだうだ悩んでることだって――」
「先輩は真っ直ぐだから……私の気持ちなんてわからない！　私はっ、酷い人間で――」
「――てめえが一番不幸だと思うな」
「……えっ？」
「人間である以上、酷い面を持ってて当たり前なんだ。むしろ、そうじゃなきゃ人間じゃねえ。汚い面も知ってなきゃ、綺麗な思いは紡げねえ」
「……知らないっ」
藤堂は先輩を突き放してきびすを返し、音楽室を飛び出した。
「お前が来るまで、待ってるからな！」
走り去る藤堂の背中に、先輩は言った。
音楽室に、轟先輩一人が残された。
轟先輩は、突然顔をしかめ、体中をかきむしる。床に倒れ込み、側に合った椅子に手をかけ、息も絶え絶えに何とか這い上がり、座る。
しばらく体を縮めるようにして耐える。やがて、落ち着いたのか、
「……はあ」ため息をついた。寂しげに見えた。

ようやく音楽室の前にたどり着いた私は、扉を開け、声をかける。
「あなたにも困ったものだ」
ビクンと、轟先輩の肩が跳ねた。私を見て、ほっと胸をなで下ろす。
そして椅子の背もたれに顎を乗せ、気まずそうに視線をそらして頬をかく。
「見られてたか……い、いやあ、なかなか説得ってのは、うまくい

かねえな」
「あれが説得ですか……説教の間違いでは？」
「どうせ、おれは人の気持ちがわからねえよ」
いすに座って足をぶらぶらさせるそのしぐさが、いじけているようで、やはりどこか寂しそうに見えた。
「さっきの、発作ですよね。薬、ちゃんと服用してるんですか？」
「止めた。頭がぼーっとするから」
「しかしそれでは、痛みが――」
「痛みなんざ、生きてりゃいつでも感じ続けるだろ――痛っ」
痛みがぶり返してきたのか、轟先輩は体をこわばらせた。私は彼女の背中をさする。こうすると、少しは痛みが和らぐらしいのだ。
「無理をしないで、と言っても、あなたは無理をするのでしょうね」
「当たり前だ。おれは――痛っ……」
発作を起こしているのだろう。彼女は、病気だ。今の医学ではどうしようも無い。
彼女の病気は、痛みが痛みを増幅させるような病気だ。想像を絶する痛みに耐えて、彼女は日々を生きている。
だからだろうか、彼女が人の痛みに鈍感なのは。
自分の体の痛みに耐えるのが精一杯で、自分の精神や相手の精神にまで気が回らないのか。それとも、単に彼女自身の性格の問題なのか。
私には、想像することすらかなわない。全ては邪推になってしまう。
「……もういい」先輩が小さく言った。
「ですが」どう見ても、大丈夫そうには思えない。
「みじめになる」轟先輩は、涙を堪えた目で訴えた。
彼女は自分の病気を、周囲に隠している。弱い自分が嫌だと言うのだ。
修学旅行も、理由をでっち上げて行くのを拒否した。本当は行きたかったはずなのに。

傍若無人に振る舞う彼女が、実はどれだけ我慢をしているのか、学園の生徒は一人も知らない。

でも、だからこそ、彼女は歌うのかもしれない。

自分が生きたという証を、爪痕を残したいのかもしれない。

「お前……おれに惚れてんの？」

唐突で、しかも直球過ぎて、私は言葉に詰まる。

しかし、いくら時間が経っても先輩は言葉を発さない。

私の答えを、舞っているのだ。

「憧れていたのは、確かです……それ以上のことは、自分ではわかりません」

あの天才的な演奏。初めて私に挫折の二文字を与えた人間。私にとって彼女は、決してあらがえぬ女神のような存在であった。

「そりゃよかった。例えお前が惚れてても、おれはお前の気持ちに答えられない。だって、おれは今、藤堂に惚れてるからな」

藤堂の言うとおりだ。確かにこの人は真っ直ぐで、どこか、昔死んだ母を思い出させる。藤堂が見た顔とは、彼女の中に映る母の面影を見ている時だったのかもしれない。

「なぜ、藤堂にこだわるのですか」

「お前、知ってて聞いてんだろ」轟先輩はギロリと睨んだ。

「何のことです」

「おれの耳は確かだ。あいつの演奏もそうだが、あいつの声……お前も、そう思うだろ？」

そう。彼女とは、かつてはコンクールで争った仲だ。

あれはピアノのコンクールだった。私は母の影響で始め、それなりに才覚を現わしていた。あの時の私は、自分が世界で一番うまく弾けるようになるという、根拠のない自身を抱いていた。

しかし、私は彼女に負けた。あまりにも次元が違いすぎた。

『天才』という存在を、初めて実感した瞬間だった。それなのに、轟ヒビキは華々しいクラシックの壇上を自ら降りた。そして、エレキギターを取った。

その原因の一端が、彼女の病気にあると知ったのは、ずっと後のことだった。

「なら、なぜ直接伝えないんです。藤堂には才能があると、あなたの口から一言言ってあげれば――」

すると、轟先輩の表情が苦々しげにゆがんだ。

「――くやしいんだよ。……あいつの才能を認めたら、おれが霞んじまうみたいで」

意外な言葉であった。彼女が、嫉妬を含んだ心情を吐露するとは。

「代われるものなら代わりてえよ。なんであいつ、あんなに自分に自信がねえんだよ……ふざけんなよ……なんで、自分で自分を抑えるんだよ……」

――自信。

ある光景がフラッシュバックする。

泣きわめく藤堂。藤堂はクラッシックギターを床に――叩きつけ……。

おそらく、中学生くらいの頃。いったい……これは……？

戸惑う私を見て、おそらく轟先輩は、自分のネガティブな発言が私を動揺させてしまったと思ったのだろう。

「あっ、今の無し。無しだかんなっ！」と、必死に弁明を繰り返した。

その仕草が、ギャップも相まって、やけにかわいらしく思えてしまう。

「まったく、『代わりたい』などと。あなたが言う台詞ですか。あなた程の『才能』を持ちながら、それを有効に活用しないとは。無駄遣いも甚だしい。あなたを待っている人は、あなたが思っている以上に大勢いますよ」

轟先輩は、ふてくされたように視線をそらす。いや、いじけているのかもしれない。

「慰めてるつもりかー。……老人の意向にこびへつらうだけの古くさい音楽なんざ、退屈なだけだ」

「『古き良き』という言葉もあります。どれだけ斬新なモノでも、人の常識から逸脱すれば、破綻することになる。それを防ぐにはルールが必要だ。多少の窮屈は仕方が無いでしょう」

「そんなことはわかってんだよ。それでも、おれは破綻ぎりぎりの所を目指す。どんなルールにだって、抜け道はあるんだ」

轟先輩はゴスゴスに装飾された長靴を、自慢げに見せる。3年になってから、急に履き始めたものだ。夏の暑い日も毎日欠かさず履き続け、最初は今よりもシンプルであったのに、この一年で益々進化していった。

「確かに、我が学園には、長靴に対する規定は無かった。あなたの着眼点は斬新だった。その点については敬服しますよ。しかし、一度通った抜け道は――二度と使えなくなる。来年からは、生徒手帳が少しだけ分厚くなります。長靴に対する規定が満載ですよ。あなたの取った行動が、窮屈なルールを増やしたんです」

「――それがいいんじゃねえか」轟先輩は、椅子から立ち上がり「おれは、なぞるんじゃなく、作っていきたいんだ」勝ち気に笑った。

「まったく、恥ずかしい人だ」そう言いながら、私は内心、別のことを思っている。

彼女が『今』しか見られないのも頷ける。なぜなら、彼女はあと何年生きられるか、わからないから。

「笑いたきゃ笑えー。おれは気にしねえ」さっさと手を振り、出て行こうとする。

「彼女は、自分の殻を破れるでしょうか」

轟先輩の足が止まる。先輩は、振り返らずに言う。

「それは、あいつが決めることだ」

答えになっているような、なっていないような、そんな答えだった。

「……そうですか」

「でも、おれはあいつを引っ張る」

先輩は肩越しに振り返った。

「おれは、こうしたいと決めたら最後まで貫く女だからな」
轟先輩は、笑みを浮かべた。
ふと、真顔になって、
「そういや、あいつって、お前のこと好きだよな。おれなんかにかまってないで、あっちを追いかけた方が良かったんじゃ無いか？」
「――なんであなたまで！」知っているのか！
「あれ、これって、誰でもわかるよな？」
自分がどれだけ鈍感だったのか……愕然とした。
「……自分のことを『おれなんか』と卑下する人は嫌いですよ」と、苦し紛れに言ったものの、轟先輩は私を見て、にやりと笑って音楽室を出て行った。
先輩以上なのか……。私には、人の内心を感じ取る能力が欠如しているのか。
音楽室を出て、廊下を歩く。
だから、アカネ嬢は『Ｒｅ．眼』を私に与えたのか。
「呼んだー？」
目の前を、不吉な赤毛ポニテが歩いてくる。とっさにどこかに隠れようと思ったが、障害物はおろか、生徒一人すらいない。これは……嵌められたか。
「やっほーイトーくん。青春してる？」アカネ嬢はひょいと手を上げた。
「なんだ居候、何か用か」
「なに、いつもおいしいごはんありがとーって言って欲しいの？残念だけど『まきなん』に会いに来ただけー」
「校長の事をあだ名で呼ぶな。規律が乱れる」
「いいじゃん？　部外者だし、友達だもん。いつ遊びに来たって良いでしょ」
「良くない。彼女は現在、業務時間中だ」
「そなの？　先生って、学生が帰ったら暇だと思ってた」
「書類整理とか色々ある。全てを見通せるのなら、それぐらい知っ

ておけ。そもそも、部外者がのこのこ校内を歩いている事事態が異常なのだ」
「だからぁ、ここの防犯システムはあたしが作ったんだからさ――」
「それ以上はいい。用がないなら、これで私は失礼する。忙しいのだ」
ああ、心臓に悪い。会話を重ねるごとに寿命を吸い取られている気分だ。
「そうだなー……『訓練』は順調？」
アカネ嬢が言う『訓練』というのは、『リガン』の拡張現実機能を利用した、ゲームのようなものだ。現在は、実際には存在しない架空のロボットを脳波で動かす訓練をしている。
なんでも、『リガン』の新機能に関する訓練らしいが、詳細は不明である。
「ステージ3まで進んだところだ」
「おわ、早っ。忙しい中ご苦労様ね」
「私は日々の努力を怠らない。継続は強い力になることを知っているからな。それでは、失礼する」
私がアカネ嬢の横を通り過ぎるまで、アカネ嬢は私の顔をじーっと見続けた。通り過ぎてからも、背中に視線を感じる。私は立ち止まって、振り返らずに聞く。
「……何か？」
「いやあ、心、読まないんだなーって思っただけ。怖いの？」
ぐさりと、背中から心臓をえぐられた心地がした。
「――誰がっ！」
振り向いたときには、赤毛ポニテは消えていた。
多少は驚いたが、いつものことだと思い直す。
くそっ……大声で反論せずにはいられなかった。図星だと言うことか。
私は気を取り直して、藤堂を探すことにした。
リガンを操作しながら廊下を歩いて行く。すると、その途中で調

理室に行き着いた。扉からマナが出てくる。なにやら、悩んでいる様子である。

こちらに気づくと、マナの表情が明るくなった。

「あ、かいちょーさん。遅かったですね。どこへ行ってたんですか？」

「レストルーム」もちろん嘘だ。

「ん、何ですか？」マナは小首をかしげた。

「お手洗い」

「あ、お上品な言い方ですね」

マナは全く疑わない。疑問を一つ挟んだらこれだ。実に単純である。

「ところで、何をやっているのだ」

見れば、マナの顔や頭に、白い粉や黒い焦げのようなものが付いている。

マナはふふんと、得意げに笑った。

「おいしいお茶には、おいしいケーキです！」

「で……」私は、調理室をのぞき込む。

室内は、白い粉などがひっちゃかめっちゃかな惨状であった。粉まみれになったエルレインが悲しみに打ちひしがれている。どうしたらこうなるのか。

「……なかなかうまくいかなくて」マナは、しゅんとした。

「それが、さっき言ってた『問題』か。……ケーキ作りなら確か、藤堂が得意だったな」

「そうなんですか！」

「ああ。藤堂と私は誕生日が近くてな、よく強引に巻き込まれたものだ」

あれは、藤堂と出会って間もない頃の、いつぞやの下校時であった。

「ねえ、いーくんの誕生日っていつ？」

「どうでもいいだろ。私は、誕生日は嫌いだ」私はひねくれたガキ

であった。
「えーっ、なんで？」
「なんでも！」なぜ誕生日が嫌いであったのか、今では思い出せない。
「そんなの駄目だよ。誕生日は、一年無事に過ごせたお祝いなんだよ？」
「ふん、そんなの、何の得にもならないじゃないか」
実に捻くれたガキであった。そんな私を、
「だーめーだーよーだめー！」藤堂は強引に揺さぶった。
この頃は、特に力が強かったわけではないのだが、頭がくらくらしたことを覚えている。半ば押し切られる形で、私は藤堂に自分が生まれた日を教えた。
「わあっ、同じ月だ。しかも、すっごく近いよ！」
「だから、どうしたって言うんだよ。何の得にも――」
「――じゃあ、わたし、いーくんのためにケーキ作ってあげる！」
「……は？」
「ねえ、それなら得でしょ？」
「ケーキ……ま、まあ、行ってやらないこともないかもな」
「いーくんって、何かをごまかそうとするとき、言葉が回りくどくなるよね」
今では考えられないことだが、祖父に厳しくしつけられていた私にとって、ケーキは夢のような提案であった。
まあ、投資で力をつけるまでの、ほんの数年の出来事であったが。
「その代わり、いーくんはわたしにプレゼントを用意すること！」
「なんだよ……結局、モノじゃないか」
「えへへ。楽しみにしてるね」
そう、結局の所、彼女の楽しそうな笑顔に、私は折れたのだ。
笑顔か……。私は、彼女のことを、どう思っているのだろうな。
自分のことなのに、自分の気持ちがわからない。私は、おかしいのかもしれない。

「春香ちゃんにもお茶会計画のこと話しましたけど、全然そんなこと話してくれませんでしたよ」
「そうか。私も今まで忘れていたし、今は趣味じゃないのかもしれんが……」
はて、いつから彼女はケーキを作らなくなったのだろうか。エルレインではないが、私も多くの過去を忘れているのだと、再確認させられた。
「ちょうど、藤堂に用事があったところだ。聞いてみるか」
「はいっ！　ありがとうございます！」
マナはぺこりとおじぎした。髪についていた粉が舞った。

『リガン』で現在の位置を確認する。
居た。後者の一角、階段の途中でしゃがみ込んでいる。
泣いているのか。だとしたら、すぐにでも声をかけてやりたいが……。
そういえば、今は放課後であった。放課後は携帯電話の使用を許可している。はじめから携帯で連絡を取ればいいではないか。私としたことが失念していた。
すぐさま連絡を取る。藤堂が制服のポケットから携帯を取りだした。良かった、電源は入っていたらしい。藤堂は液晶の表示を見て、固まった。
しばらく鳴らし続けるが、なかなか出ようとしない。私を、避けているのか。
藤堂は涙をぬぐった。そして、意を決したように通話のボタンを押した。
「藤堂か」
〈……いーくん〉
「どうした、元気が無さそうな声だが」私は、しれっとごまかす。
まさか、一部始終を監視していたとは言えまい。
〈そんなこと無いよ。……どうしたの〉それでもやはり、元気が無

いのは確かだ。
「力を貸して欲しい」
〈……え？〉
私は、事の次第を軽く説明した。藤堂が調理室へ来てくれることとなった。
〈あんまり覚えてないかもだけど……〉
「かまわない」今のマナ達よりはましだろう。「マナ、藤堂が協力してくれるぞ」
「わーい！」今どき珍しい喜び方だと思う。

「だからね、お菓子はきちんと分量を量れば、上手に作れるんだよ」
久しぶりに作ると言っていたが、なかなか手際が良い。
「「へー」」二人とも、熱心に聞き入っている。
二人にレクチャーする藤堂の様子は、私の目には自然に見えた。
とても、さっきまで泣いていたとは思えない。
「あとは、オーブンで焼きます。１７０度で、４０分ぐらいだよ」
「春香ちゃん、すごいです！」
「ううん、手順さえ覚えれば、誰でもできるから」
「アタシにも、できるかな」エルレインが、不安な様子で訪ねる。
「うん。きっとできるよ」
「そ、そっか。よし、がんばろ」エルレインは、気合いを入れた。
今までの経験からして、彼女にはあまり気負いしないでもらいたい所だ。
「春香ちゃん、最近は、お菓子作り止めちゃったんですか？」
「ん？　うん。そうだね」
「なんで止めちゃったんですか？」
藤堂は困ったような表情を見せた。そして、こちらをちらりと見た。
「さ、さあ、なんでだったかな。色々、忙しくなっちゃったからかも」

「ふーん」マナは藤堂の不穏な気配を悟ったのか、それ以上は追求しなかった。
しばらくしてケーキが焼き上がった。藤堂は竹串で焼き加減を確認しているらしい。
「うん、中まで焼けてる。これでできあがりです」
「「おー」」二人して、感嘆している。その反応を見て、藤堂は苦笑した。
「そんなに感心しなくても……ベイクドチョコケーキは簡単だけど、お茶請けにもいいし、初心者には一番おすすめだよ」
エルレインは、藤堂の手を取った。
「藤堂さん、ありがとう。アタシ、こういうのにはホント不器用で……」
「大丈夫だよ。私も最初は、酷かったから」
「しんじられない！」エルレインは目を丸くした。
「じゃあ、私はこれで――」
「えっ！　一緒に食べましょうよう」
「え……でも……」
エルレインは、藤堂の手をがっちりつかんだ。
「このままじゃ、アタシの気が済まない。お礼に、お茶をごちそうさせて」
「あ、あの……」
「エルちゃんの淹れてくれるお茶は絶品です！」
藤堂は二人を交互に見て、最後に私を見た。私はうなずいた。
「……うん、じゃあ、ちょっとだけ」
エルレインは流れるような動作でお茶を淹れる。ほぼ全ての事に対して不器用でも、お茶を淹れることだけに関しては一流である。
「な、何これ……すっごくおいしい」
藤堂は驚きのあまり、大きな目を、さらに大きくしていた。
「ほんと！　……あ、ありがと」
「絵留さん、お茶淹れるの上手なんだね。すごいよ」

エルレインは照れた。
「あの、さ……よかったら、今度」
「うん。教えて欲しいな」
「もちろん！　じゃあ、良かったらその時、他のケーキの作り方も、教えて欲しいな、なんて……」
「うん。いいよ」
「わあっ、ありがと」
二人は笑い合った。
エルレインは、にこにこしながらケーキを頬張る。
「おいしいな」
「おいひいへふ！」マナは口いっぱいに頬張っている。
幸せそうな光景だが、誰かが言わなくてはならない。
「お前ら、食べてばかりで良いのか」いつマリナが来るか、わからんのだ。
二人は、はっとして、私を見た。なるほど、馬鹿だ。
「よーし！　もうひとがんばり！」
エルレインは立ち上がり、腕をまくった。
「じゃあ、私、先に帰るね。絵留さん、仲直り、がんばってね」
「うん。ありがとう！」
藤堂はそそくさと鞄を持ち、扉へと歩いて行く。
「あっ、藤堂――」
家まで送ろう、と言おうとしたのだが、私が彼女の名前を呼んだ瞬間、一瞬で加速し、あっという間に出て行ってしまった。
しかも、ものすごいスピードで。
願望実現機関によって操作された身体感覚は、元に戻っている訳ではないらしい。
それにしても、藤堂は最後まで、どこか遠慮がちであった。
「さっ、かいちょーさん、時間は限られてますよ。かいちょーさんは、会場のセッティングの続きです！」
「いや、しかしだな」いつの間にか、私は良いように使われていな

いか？
それでなくても、藤堂のことが気になる。今からでも追いかけて――
――鋭い視線を感じる。
見ると、霧島書記長が、ドアの影からこちらを見ていた。
書記長はコクリと頷いて、消えた。任せろと言うことか。
それにしても、この子も何を考えているのかよくわからん女性だ。
見ていたのなら、入ってくれば良いものを。無粋だとでも思ったのだろうか。
「かいちょーさん……駄目ですか？」
人に使われるのは本来性に合わんのだが、今回ばかりはのんでやろう。あくまでも今回だけだ。今回だけだぞ。
「……わかった。会場は任せろ」
「ありがとうございます」
マナは、にぱっと笑顔を咲かせた。……まったく。
私たちは着々と準備を進めた。そして、
《――にゃおーん！》ついに、その日が来た。
「さあ……殺――って……なに、これ？」
マリナとマコト、唖然としている二人の視線の先には、
「――喫茶『夕焼けにゃんにゃん』へようこそ！」
マナの快活な挨拶が、『店内』にこだました。
「夕焼け……」「……にゃんにゃん？」隙間ターミネーターの二人は、あたりをきょろきょろと見回している。驚くのも無理はない。
『店内』。そう、『店内』なのだ。
私は強制権力を発動し、学園の一角に空き教室を作り出した。
そこに本郷の親御さんや美術部所属の明星会計員の協力で、実際に喫茶店を作ってしまったのだ。黒を基調としたモダンな雰囲気と、

木をふんだんに使った優しい作りを追求し、斬新かつ居心地の良い空間を作り上げた。私の自信作だ。

詰まるところ、やり過ぎた。

「こんにちはお嬢さん方。おいしいお茶とお菓子はいかがですか？」

給仕姿のマナが、にこりと微笑む。ちなみになぜか、ネコの耳としっぽが生えている。

「マナちゃん……あなた、何をふざけて――」

マナの視線がマリナから離れた。それを追っていくと、

「――へ？」

見れば、マコトがちょこんと座っていた。

「マコト！　何やってるの！　あなたの役割は――」

「ようこそ、お嬢様」

「誰がお嬢様だ――」声にマリナが振り向く。

すると、その人を見初めたとたん、マリナの頬が上気した。

スーツ姿に男装したエルレインが、優雅にお茶を注いでいる。

マリナは、その姿に釘付けであった。完全に見とれている。

「マリナ、今日は来てくれてありがと。……ん、どうかした？」

それもそのはず。男装したエルレインは、実にさわやかな男前である。

『絶対に、あんなふりふりしっぽは嫌だ！』と半泣きでだだをこねたエルレインに、冗談のつもりで男装させてみた結果が、思わぬ効果を生んだ。

「な、なんでもないっ！」

マリナは、しぶしぶといった体で座った。じーっと自分の膝あたりを凝視し、もじもじしている。

「……いただきます」マコトがカップを手に取り、

「――ちょ、ちょっとマコト！」

一口、飲んだ。

マコトの眼が、驚きのあまり、大きく見開いた。

「……おいしい」

「――ええっ！」マリナは、もっと驚いた。「大丈夫なの！　毒とか入ってない？」
「さあ、お嬢様もどうぞ」
白いテーブルの上に、ことりとカップが置かれた。
マリナが、唸りながらそれを凝視する。
「マリナ、おいしいよ」
マコトの後押しで、おそるおそる、カップを手に取る。
誰もが、息をのむ。
ゆっくりと、警戒するようにカップを口元に近づけ――
「――あちっ」
「ああっ、ごめんマリナ、猫舌だったね。ちょっと待って……ふーふー」
エルレインはマリナの両手ごとカップを包み込み、ふーふーと息を吹きかける。
マリナは顔を真っ赤にして、わなわなと震えている。さすがは姉妹だ。
おそらくエルレインにとってはあれが普通で、マリナにとっては経験したことが無い体験なのだろう。
「はい。……どうかな」
マリナは必死に冷静さを取り繕うとしているが、小さな震えまでは抑えきれないようだ。琥珀色の液体が波立っている。
震えを抑えながら、マリナはカップを口に運ぶ。
「――おいしい」
エルレインは輝かんばかりの視線をこちらに向けた。涙ぐんできらきらしている。
私が頷くと、何度も何度もうなずき返した。よかったな、お姉ちゃん。
マナがケーキをとりわけ、しばし歓談となった。マナはマコトと話す。
「ケーキ、どうですか？」

「……おいしい」マコトは、もきゅもきゅ食べている。
「ほんとですか！」
「なんで、あんたがよろこぶの」
「えへへ、わたしが作りました」
「あんたが……やるじゃん」
「えへへー」
調子づいたマナは、思い切ったように聞く。
「あのっ、マコトちゃんって、呼んでもいいですか？」
「別に……好きに呼べばいいじゃん」マコトは目をそらす。
「わあっ、ありがとうございます！」
「べ、別にお礼を言われることじゃないじゃん」
マコトは照れを隠すように、カップに口をつけた。
「わたし、マコトちゃんとも、仲良くなりたいなって思ってたんです」
マコトが、むせた。
「だ、大丈夫ですか！」
「……大丈夫」マナからもらったハンカチで、口をぬぐう。
一瞬、間が空いた。
「あのっ、駄目ですか？　お友達」マナがもう一押し。
「……駄目とか……そういうんじゃない……」マコトは紅茶のカップに視線を落とし、カップを揺らす。
「……未来に、あんたみたいな子がいたら、少しは違ったかもしれない」
「え？」
「ウチは、不器用だから……」マコトは、マリナを見る。
マリナとエルレインは、ぎこちなく会話していた。
その視線に気づいたマリナが、動揺する。
「あ、あたしっ、楽しんでなんか無いからっ！　ちょっと、その！　休憩してるだけ！」
「――いいよ」エルレインが応じた。

「あっ、あのっ、そんなつもりじゃ」マリナは、あわあわと慌てる。
「楽しまなくても、あなたが少しでも安らいでくれたら、アタシはうれしいから」
マリナは、視線を落とす。
「……楽しいよ」
「……マリナ」
「楽しいよ……こんな気持ちじゃ、殺せないよ」
マリナは、涙を膝にこぼし始めた。
「あのね……ずっとね……何かが足りない、欠けているって、いつも思ってたの」
そして、マリナは小さく、呟いた。
「あなたといると、満たされてるの」
一度飛び出した気持ちは、もう、止まらない。
「何かが足りない。それが普通なんだって、思い続けてたのに……だから……みんなの力になろうって……思ったのに……こんな気持ちになっちゃ……駄目なのに……」
「いいじゃん」
マリナは驚き、顔を上げて声の主を見る。
「……マコト」
マコトが、微笑んでいた。
「もう、いいじゃん。……ウチも、少しは感じてた。その子と、どこかで会ったことがあるような、不思議な感じ。きっと、その子が言ってることは、本当で……ううん、たとえ、本当じゃ無くても、マリナは、マリナの好きなように、生きて欲しいと思うから」
「マコト……それって……」
「ウチは、マリナの一番近くで、ずっと見てきた。……くやしいけど、その子と一緒にいるときのマリナが、一番楽しそうなんだ」
マリナの表情が、くしゃりとゆがんだ。涙が、止まらない。
「あたし、いいのかな、許されても」
懇願するように、エルレインを見上げる。

「ねえ、本当にいいの？　あたし、いいのかな？　あの人を殺さなくても、いいのかな？」
エルレインが微笑む。
「もちろん。ねえ、会長」
ついに、このときが来た。私は、頷く。
「ああ。私は、君たちと話し合う席を設けたい」
「かいちょーさん……それって！」
「そう。これは、『最初のマリナ』の希望だ」
数ヶ月かけて、ようやく『最初のマリナ』がやりたかったことに、たどり着いた。
「犠牲を最小限に抑えつつ、今の私たちが話し合った結果を、君たちの未来へとつなげなければならない」
私は浅はかであった。自分が間違わない人間であると思い込んでいた。強すぎる自尊心が邪魔をして、他者の意見に耳を傾けようとしなかった。
私は、変わらねばならない。
「私の頭の中のナノマシンは、数ヶ月で消失すると聞いている。このままでは、私は全てを忘れるだろう。今までの記憶を未来の私につなげるには、君たちの協力が不可欠だ」
エルレインが続く。
「マリナ、会長は信頼できるよ。アタシは、何度もこの人に助けられたんだ。未来であなた達を殺そうとする会長とは違うんだよ。未来は変えられる。だから……だから一緒に戦おう！　みんなが笑って過ごせる社会を、一緒につくろう！」
マリナの瞳が潤み、頬がほんのりと染まっている。そして、眉は心細そうに下がり、かすかに体がこわばっている。まるで、これから告白するときのように。
「あ、あの……あのね……お、お……」
マリナは、一生懸命にその先の言葉を言おうとしている。
何を言おうとしているかは、この場にいる誰もがわかっている。

その言葉は、私たちの契約の証となり、そして、エルレインにとって、最高のギフトとなる。
「お姉ちゃ――」
「――はい。そこまでだ」
ようやく、待ち望んでいた声を聞くことができた。
考え得る限り、最悪のタイミングで。
「まったく、とんだきれい事だね。未来は変えられる？　未来の会長とは違う？　なら、なぜボクらは存在しているのさ。結局、今までと何も変わらなかったってことだよ」
そいつは、青いネコのお面を被っている。
「話し合うだって？　それこそ、無理な話だ。だって、ボクらと君の思想は、絶対に相容れないのだから。いくら時間をかけて話し合ったところで、君が折れる事なんてあり得ないよ。ずっと議論が平行線をたどり、最後にはまた、争うことになるんだからね」
そいつの胸には、白い星形の紋様が刻まれている。
「――ネコくん……なんで、あなたが……タイムマシンは、二つしかないんじゃ……」
マリナは、がたがたと震えていた。
「マリナ、君は一体、何をやってるのかな」どこか無機質な機械を思わせる声色で、ネコは訪ねた。それだけにもかかわらず、マリナはビクンと体を震わせ、明らかに、怯えきっている。
「彼らは敵だよ。君は未来で苦しむ仲間を犠牲にして、一人、虚構で塗り固められた幸せを選ぶつもりなのかい？」
ネコはマコトを見て、失望したようにため息をついた。
マコトもまた、怯えていた。自分で自分の体を締め付けるように強く抱き、少しでも震えを抑えようとしていた。
二人の怯え様は、異常だ。
「まったく、役に立たない奴だ。君はマリナを見ているんだろ？　それが、君の役割だったはずだ」
『見ている』ことが、役割？　それは、まるで――。

「――ごほっ！」マリナが、血を吐いた。
白いテーブルに、赤黒い斑点が散らばった。
ネコは、いつの間にかマリナの背後に立っていた。
恐怖からなのか、体調のせいなのか、マリナの息づかいが、次第に荒くなってゆく。
「あーあ。脆くなったものだね。まったく、『調整』も簡単じゃないんだよ」
ネコが、マリナの肩に軽く手を置いた。
マリナの肩が跳ねた。目をつむり、体を縮め、必死で耐えようとしている。突然むせた。益々、吐血が酷くなる。みるみるうちに顔色が悪くなり、彼女の様子からは、今にも倒れてしまいそうな危機感を感じる。
「もう少し働いて貰わないと困るよ。まだ、壊れたら困るんだ」
『壊れたら』まるで、機械のような扱いに、全身の血が一気に高ぶる。
「貴様――」「――ねぇぇこおおおおおっ！」
一足先に、エルレインが跳びかかっていた。
『変身』し、ギャリギャリと凄まじい音を立てて回転する十徳ナイフを推進力に、黒い突風のようにネコへと斬りかかる。
「おっと、いいのかい？　この子を『調整』できるのはボクだけだよ？」
黒い十徳ナイフの刃は、ネコの仮面寸前の所で止まった。
――ボクを殺すことは、マリナを殺すことと同義だ。
ネコは、暗にそう伝えている。
エルレインは、ぎりぎりと歯を食いしばって耐えている。その表情は、視線だけで相手を殺せるのでは無いかと見紛うほどに激怒している。
「エルレイン、そいつの言うことを信じるな！」私は怒鳴る。
『調整』？　ふざけるな。
今さらそのような概念を持ちだしたところで、誰が信じるか。

エルレインは刃を振り上げ――
「――止めてっ！」
マリナがエルレインを突き飛ばし、勢いそのまま自分も倒れた。
「ネコくんを……悪く……言わないで……」
「ま、り……な？」エルレインは、突然のマリナの行動に戸惑っている。
「……助けてくれた……恩人なの……」
マリナは、またも血を吐いた。
「ありがとう、マリナ。さて、君は、それでもボクを殺そうって言うのかい？　ボクを殺せば、マリナは悲しむだろうな」
「そんな……」エルレインは放心し、刃を床に落とした。
「物わかりが良くて、何よりだよ。――薄汚い詐欺師のくせに」
「なに……痛――っ！」突然、エルレインが頭を抱えてうめきだした。
「エルレイン！」床に倒れ込むエルレインをとっさに支える。「……貴様何をやった！」
私の恫喝をものともせず、間抜けなネコのお面が、ただ、無機的に私を見ている。それが、逆に不気味でならない。
「人聞きが悪いこと言わないでよ。ボクは、何もやってないよ。そいつが勝手に苦しみだしたんじゃないか」
そういえば、前にもこのような事があった。あの時は確か、未来に関する重要な記憶を思い出していた。今度も、そうなのか。
見ると、エルレインの表情がこわばっていた。
「……そんな……嘘だ……こんな……っ」エルレインの瞳には、涙がにじんでいた。
「もしかして、都合が悪くなったから、苦しむ演技でもしてるのかな？　さすがは詐欺師だ」
病人に唾を吐きかけるような言動に、カチンときた。
立ち上がり、ロケットペンシル弾『チェス』を突きつける。
「どちらが詐欺師か――諸悪の元凶が！」

「やあ、伊統会長。これ以上、非道な策略でマリナの心を乱さないで欲しいな」
「非道な策略を行なっているのは貴様の方だ！　葉上――藤堂――貴様が『願望実現機関』を使って変えたのだろう！」
「さあて、ボクには何のことだかわからないな」
「貴様のその胸の白い星形……わかっているぞ、参謀だと名乗っておきながら、貴様の内心に隠された激しい支配欲を」
「へえ、少しはメルヘンチックな所があるんだね」
「その言葉、そっくりそのまま返させてもらおう」
私は、『友人』に訪ねた。猫の胸に星形のマークがあるのは、何の象徴なのかと。
友人は答えた。
「それは――ケットシーだ。イギリスに伝わる伝説で、猫達の王だ」
猫達の王。ＳＮＳは野良猫たちの集まりのようなもの。参謀と名乗っておきながら、奴は自分にしかわからない知識で、自分のことを暗に王だと示している。
「つまりは貴様が全てを操る黒幕だと言うことだ！」
願望実現機関は、その消滅間近、ポップアップにこう表示した。
《ヒントは提示してある》
「願望実現機関の『ヒント』とは、このことだろう！　爆破された地域を結びつけるとお前のその胸の形が現われた！　私がこのことに気づくのも、お前の策略の一部だ――ネコ！」
ネコのお面は、相変わらず無表情だ。だが、静かに笑ったような気がした。
「なるほど……面白い解釈だね。でも、そんな回りくどいことをしなくても……」
突然、背筋が、ぞっとした。
「心を、読んだらどうだい？」
夕日の影がネコのお面にかかり、光の加減で、お面が不気味な面容を醸し出している。

「読めないよね。ボクは、顔を隠しているんだから」
「貴様……」こいつは、間違いなく『Ｒｅ．眼』のことを知っている。
隙間ターミネーターの参謀が、なぜ知っているのか、その答えは明白だ。
願望実現機関を操っているのが、この目の前にいる男だという証拠に他ならない。
「言ったろ、『このお面には意味がある』って」
「ネコ、くん、やめ――ごほっ！」マリナが立ち上がろうとして、そのまま床に倒れ込んでしまった。
「――マリナっ！」エルレインが弱々しく立ち上がり、マリナの元へ歩み寄ろうとする。
ネコが、突き飛ばした。
「おっと、邪魔しないでくれないかな。君のような人間が乱暴に触れて、マリナの体調に障ったらどうするんだ。……ああ、そもそも、人間じゃないか」
こいつはどこまで人を馬鹿にすれば――。
「――エルちゃんは人間ですっ！」
マナだった。マナが眉をつり上げ、怒っている。
ネコのお面が、マナの方を向いた。
「……そう言い切れる根拠は？　あれは、ナイフで刺されても死なない。血を流すことすら無いんだよ？　そんな存在が、人間だと言えるの？」
こいつ、やはり『願望実現機関』の送ったデータを読んでいる。
「エルちゃんは人間ですっ！　わたしの、家族なんですっ！」
マナの回答に、ネコは笑った。
「ああ、ばかばかしい。君はボクの提示した理屈を考えようともせず、自分の都合と感情だけで物事を判断するんだね」
「エルちゃんに、あやまりなさい！」
「ボクは、君が大嫌いだ」唐突に、ネコは言った。

その瞬間、マナの顔から、さっと怒りが消えた。代わりに、恐怖が張り付いた。

「あれ、君は人に嫌われたことがないのかい？　――あるだろう。この時代の……『ネット』……だったっけ？　君も大変だね。見ず知らずの人間に罵詈雑言――」

それ以上は言わせない！

「止めろ！」私は『チェス』を突きつける。「それ以上言えば、撃つ」

そうでなくても、このような外道、今すぐに殺――。

「感情にまかせた結果、どうなったか覚えているかい？」

葉上を殺した瞬間の、あの感覚が瞬間的に蘇る。

突如として吐き気がこみ上げ、『チェス』の照準が揺らいだ。

「もう一度言おう。マリナを救えるのは、ボクだけだ」

お面が、地面に倒れ自分が吐いた血で血まみれになったマリナを捉えた。

「ボクが今日ここに来たのは、彼女が心配だったからだよ」

ネコはしゃがみ、マリナの体を丁寧に抱き上げた。その動作が、やけに作り物めいて見えた。

嘘だ。こいつは、マリナをチェスの手駒ぐらいにしか思っていない。

「さあ、マコトも。戻ろうか」

名前を呼ばれた瞬間、マコトの体がビクンとはねた。しかしマコトは、動こうとしない。

「あれ、聞こえなかったのかな？　戻らないと、消えちゃうかもよ」

「ま、マリナを……ど、どうする、の……」マコトは、震えながらもゆっくりと立ち上がる。

「君に、選択の余地があったかな？　どっちみち、君の帰るところは一つしか無いんだよ？」

「ウチは……ウチは……マリナを……」

マコトは旗をつかんだ。

「なんだい、その眼は。もしかして、裏切るのかい？」
「ウチは――」
「――だあああっ！」
エルレインがマコトにぶつかり、十徳ナイフの切っ先を向ける。
「エルちゃん何を！」マナが悲鳴を上げた。
「――戦え！」
エルレインが斬りかかり、マコトが応酬する。黒い武器同士がぶつかり火花が散る。つばぜり合い、離れ、またぶつかる。
「――エルちゃん！　マコトちゃん！　喧嘩は止めてくださいっ！」
マコトはマリナたちをかばうように旗を広げ、間合いを取る。
「ネコ！　マリナをつれて帰って！」
「……ふうん。まあ、いいよ」
切り合う二人に背を向け、ネコはマリナを抱き上げ、隙間へと向かう。
「ああ、そうそう、言い忘れてた。――会長」
ネコが、肩越しに振り返った。
「マリナの体を『調整』するのに、最低一週間はかかる。この調整が終わった後の戦い――君の言うところの次の『戦争』が、『最終戦争』になるだろう。この子の体は、それ以上は持たないだろうからね」
「……なんだと？」
「次で決着をつけないと、結末はどうあれ、この子は死ぬよ。疑うなら、君お得意の『リガン』でこの子の体調をチェックしてみると良い」
言われなくても、今確認している。体中の臓器が悲鳴を上げているのがわかる。
「ボクはマリナのことを考えて、次の戦争には、ＳＮＳの全てのメンバーを総動員して君を殺しにかかるつもりだ。その時までせいぜい、残りの人生を謳歌することだね」
ネコは戦う二人を一瞥するようにお面を向けた後、血まみれにな

ったマリナを抱えて、隙間へと消えた。
　ネコが完全に消えたのを見守ってから、マコトが眉をつり上げながら、エルレインに詰め寄る。
「……なんで、切りかかってきたの。あのまま、なんで、ウチにあいつを殺させてくれなかったの」
「今は、マリナの体調が優先だ。ネコにしかマリナの体の『調整』ができないって言うのなら、信じるしかないだろ」
「でもっ――」
「ここであいつを裏切っても何にもならない！　アンタは、マリナ以外で唯一信頼できる未来の人間だ。アンタは、アンタにしかできないことをやれ！」
「……ウチに、できること？」
　エルレインは、マコトの両肩をつかむ。
「そうだよ。あきらめなければ、方法はあるはずなんだ。本当にネコにしか『調整』ができないの？　ＳＮＳのみんなの説得はできないの？　天才科学者のまゆまゆは？　管理社会側の技術は奪えないの？」
「それは……」マコトは戸惑っている。怯えているようにも見える。
「……ごめん。難しいってわかってる。アンタにこんなこと押しつけるべきじゃ無いって事も、わかってる。でも、アンタしか……頼れないんだ」
「ウチに、しか……」
「マリナの未来を変えられるのは、アンタだけなんだ。……それでも、もし駄目なら……マリナとあいつのいないところへ逃げて」
「でも……あなたが、マリナと会えなくなる」
「アタシはいいから。マリナさえ元気でいてくれたらそれでいいから」
「……駄目。逃げても、完全管理社会が追ってくる。味方なんかいない」
　マコトは、エルレインから視線をそらした。エルレインもまた、

泣き出しそうな表情に変わり、マコトの肩に置いた両手は離れ、力なく垂れ下がる。
「――助けに行きます。その時は必ず、未来で助けにいきますっ！」
「……マナ」
「わたしたちは、あきらめが悪いんです！　ねっ、エルちゃん！」
マナは、笑った。
それにつられるように、エルレインにも、ゆっくりと、勝ち気な笑顔が灯る。
「……そうだ、ナノマシンだよ！　今のマコトが生きてる未来までは確定しちゃったかもしれないけど、未来の未来は確定してないんだ。今の記憶が保持できれば、アタシ達だって、助けにいけるかもしれない！」
エルレインは、再びマコトの肩に手を置く。
「アタシはっ！　アタシはあきらめないっ！　絶対にマリナを救ってみせる！　そうでしょ！　会長！」エルレインの悲鳴にも懇願にも似た決意が、響き渡った。
おそらく、ネコは全てを読んでいるだろう。ネコは既に、マコトを信用していない。監視下に置かれるのは確実だ。
エルレインには悪いが、あんな茶番ではマナくらいしか騙せない。
「ああ、そのとおりだ」頷いた。私は自分の考えを隠し、嘘をついた。
未来側の人間は全員ネコの手中に置かれ、懐柔は不可能。
未来で助けに行く事とて、希望的推測に過ぎない。
それでも、打つ手は一つしか無いのだ。
ナノマシンを奪取する。
そのためには、未来の人間に、マコトに託すしかない。
「……わかった」
マコトは、頷いた。そして、隙間に飛び込んだ。
《――にゃんにゃん、にゃおーん！》停戦の鳴き真似が、あたりに

響いた。

第三十四話　現・養生部部長の螺旋迷宮

「……あんなふざけた奴に、アタシ達は踊らされてたんだね」
制服姿に戻ったエルレインが膝を折り、床に座り込んだ。
「マコト、ごめん。アンタにばかり辛い役目を押しつけて……マリナ、ごめん。アタシがもっと賢かったら……」
「エルちゃん……」マナが、エルレインの肩に触れる。
エルレインは、マナを見上げた。
「ごめんな、マナ。アタシ、もう少しであきらめちゃうところだった……」
マナはぶんぶんと頭を振った。
「大丈夫です。一緒に、マリナちゃんとマコトちゃんを助けましょう」
「……うん」エルレインは、ぎこちなく微笑んだ。
「かいちょーさんも！」マナが私に振り向いた。
「ああ」私は答えた。
私とて、マリナ達を助けたい。
しかし、この考えも、未来には持ち越せない。
改変前のマリナの言葉を信じるなら、私の頭の中のナノマシンは、あと幾日かで消えてしまう。そうなれば、私はマリナたち隙間ターミネーターのことを忘れてしまうだろう。エルレインのことも、葉上のことも、藤堂のことも、どこまで覚えてられるか疑わしい。
おそらく、全て忘れてしまうのだ。その証拠に、未来は何も変わっていない。
私のこの考えを未来に持ち込むには、マリナ達の協力が不可欠だ。
元凶であるネコさえ排除してしまえば、それが可能だと考えていた。
だが、マリナのあの反応。自分が駒同然の扱いを受けていても、マリナはネコを信頼している。ネコを殺せば、事態は悪化するだろ

う。
　ネコ……。『ＳＮＳ作戦参謀』としか情報はない。あいつは、何者だ。

　屋敷に戻った後、私はエルレインに訪ねた。
「ネコについて、知っていることを教えて欲しい」
　エルレインは戸惑いながらも答えた。
「アタシの知ってるあいつは……ただの協力者だった」
「協力者？」
「うん。ＳＮＳの中で唯一、管理社会に通じている人間で、ターミネーター作戦の発案者だった。タイムマシンの開発者も、あいつが完全管理社会側から連れてきた科学者だし、『願望実現機関』のことだって、ネコが教えてくれたんだ」
「管理社会側の人間だと？」
　しかも、タイムマシンの開発者もあいつの提供とは……。
　ＳＮＳ自体が、あいつの傀儡なのは間違いない。
「目的は何だ」
「あいつは……マリナ達が笑って暮らせる社会を作りたいって言ってた。ここに来る前まではアタシも信じてたけど……今は、わからない」
　エルレイン達に偽りの目的を信じ込ませ、良いように利用したのは確かだ。しかし、奴自身の目的は依然として不明のままだ。
「奴の目的は、本当に管理社会の転覆なのか？」
「えっ？　それは……そうだろ。他に何があるって言うの？」
「管理社会の転覆が目的ならば、未来で行動を起こすべきだ。タイムマシンを開発してまで私を殺しに来る理由とは何だ？　改変の内容によっては、自分たちの身すら危ういとは思わなかったのか」
「それはっ！　アタシがしくじったから！」
　数ヶ月前と、エルレインの反応が違った。
「何か、思い出したのか」

エルレインは、顔を伏せた。
「……アタシ達は、確かに会長を追い詰めたんだ。会長の居場所を突き止めて、会長を暗殺しに行ったんだ……でも、その計画は失敗に終わって、アタシ達は窮地に立たされて……ターミネーター作戦は、苦肉の策だったんだ」
「私はなぜ、お前達をそこまで追い詰めた」
「……未来のアンタが、マリナを殺そうとしたから」
「私が、なぜマリナを殺さなくてはならない」
エルレインは顔を上げた。私を睨み、叫んだ。
「アタシが知りたいよ！　アタシ達はただ、自分たちで小さな『集まり』を作っただけだ！　それが気に入らないってだけで、なんで命まで狙われなきゃいけないの！　そんなのおかしいよ！」
エルレインは、はっとして、落ち込んだように視線を下げた。
「……ごめん。今の会長には、関係ないことなのに……」
「気にするな。未来の私も、今の私の延長線上だ。関係なくはない。それより、もう一つわからないことがある。なぜ、水鏡マリナが選ばれた？」
「それは……アタシの存在が、未来で消えちゃったから――」
「違う。そういう意味ではない。私が見たところ、黒岩マコトのほうが戦闘能力は上だ。私を確実に殺したいのなら、彼女が最も適任のはずだろう。それなのにマコトは、ゲートを守るという任務を遂行するのみにとどまっているのは何故だ？」
しかも、ネコの発言が気になる。
――君はマリナを見ているんだろ？　それが、君の役割だったはずだ。
「マコトは、マリナの監視役だった。監視役でなければならなかった。なぜだ？」
「……わからない」
「もっと言おう、なぜ、マリナが直々に殺しに来る？　あの性格では、明らかに暗殺には不向きだとは思わないか」

「……わからないよ」
「では、なぜマリナは、ネコを慕う？」
「わからないんだ！　……アタシの知ってるマリナは、あいつを嫌ってたのに」
「嫌っていた？」
「暗殺なんて強引な方法は駄目だって……」
エルレインが存在した未来と、今の未来で、何かが異なっている。

エルレインと別れてからも、私は延々と考えた。
「……エルレインのいた未来と、今のマリナがいる未来は、分けて考えるべきなのか」
マリナやマコトに直接聞けば良かったのだろうが、その機会は逃してしまった。今さら後悔しても遅い。
他にも、気になることは、いくらでもある。
なぜ、葉上や藤堂を操り、私と戦わせたのか。
なぜ、ネコは今まで出てこなかったのか。
なぜ、ネコは管理社会側の機密である『願望実現機関』を操れるのか。
ネコの目的は、何だ？
――それを知って、どうするというのか。
私の声が、私の内側で響いた。
また、お前か。相変わらず嫌なタイミングで現われる。私の形をしているのが、益々腹立たしい。
――今さら、ネコの目的を知ったとて、どうしようもないだろう。
私の中では、既に取るべき行動が決まっているはずだ。私がいくらあがこうとも、他に選択肢など無いのだから。
黙れ！　お前が『私』を語るな！
――『私』も『私』だ。いい加減、認めろ。貴様の選択すべき答えは二つだ。『私』が『私』である証拠に、教えてやろう。……結局は、

『私』が、ぞっとするような笑みを浮かべた。
――殺すか、殺されるかだ。
全身に、悪寒が奔った。
――時間は限られている。せいぜい悔いの無きよう、身辺整理は慎重にな。
『私』は消えた。
わかっているさ……お前に言われなくても……私は、私なのだから。
だが、わかってはいても……納得できるものか。

翌日、私は松田諜報委員を呼び出した。
「――いやっ！　やめてっ！　おれにはそんな趣味は――」
松田は目隠しされ、片足をロープでくくり、逆さに吊るされている。
「気色の悪い声を出すな。さっさと吐けば解放してやる」
事の発端は、学園祭で養生部が配布したマナの写真集である。写真の提供元にこいつの名前が書かれていたことに起因する。
「養生部の誰に渡した！　言え！　協力すれば貴様の罪は不問にしてやる！」
その後の調査でわかったことだが、あの写真集の存在を事前に知っていたのは、養生部の中でも幹部クラスのみらしい。
つまり、写真の提供先さえわかれば幹部の一網打尽も夢ではない。
「嫌です！　依頼主の秘匿が――」
「――足に五寸釘を打ち付け、蝋燭を垂らしてやろう」
時間が無いのだ。私も手段を選んではいられない。
「――いやああっ！　そんな土方歳三へのオマージュいらない！」
松田は蓑虫のような体をくねくねさせる。実に滑稽である。
「ほう、先生を知っているのか。なら、話は早いな」実行あるのみ。
「えっ！　ちょ、ちょっとまって！」
「なら、さっさと吐け」

「それはできません！」
「言わなければ、お前の足に一生消えない穴が空く」
「それでも！　おれは言うわけにはいかないんだ！　――やるならさっさとやれ！」
なんという男気か。普段からへらへらしているこいつに、このような男気があるとは意外であった。
「ならば、仕方が無い」
「……会長。わかってくれたんッスね」
「かなり痛いが、我慢しろ」左手に蝋燭と釘、右手にトンカチ。
「そっち！　ごめんなさいごめんなさいちょっと調子に乗りすぎました！　助けて！」
「なら、吐け。身も、心も楽になるぞ。お前は自由の身となれるのだ」
一度死の淵まで追い詰めてから、妥協案を提示するのが、説得のコツである。
「だからそれはできませんって！　依頼主の情報を明かさないのが最低限のルールなんです！　それを守れないのなら死んだ方がましだ！」
「なら、命はあきらめろ」
「あれ！　会長！　ちょっと話が大げさになってませんか！　おれ、死ぬの！」
「話すか？」
「嫌です！」
「なら死ね」
「それも嫌ああっ！　……ああ、頭に血が」
こんなやりとりが延々と続き、私は一つの妥協案を思いついた。
「情報の提供先を教えられんというのなら、それ以外の手で協力してもらおうか」
「……ハイ。ナンデモシマス」少々やり過ぎたが、まあ、しかたがない。

現状で最も危険な存在なのが、養生部と、それを率いる影の部長『ヨウ・ジョー』である。ヨウ・ジョーは、私と井内が『概念ウィルス』と呼ぶいかがわしい何らかの技術を保有しており、それを使って人を煽動する事が可能である。

あれもまた、未来の技術である可能性が高い。

さらには、空色のマントとテンガロンハット、そして陰陽のマスクといった滑稽きわまりない格好、見るだけで有害であるとすぐにわかる。

あのいかがわしい格好で学園祭に姿を現わし、『ぷーくすくす』なる人を食ったような笑いで、全校を駆け巡った凶悪犯罪者予備軍である。

奴を捕まえねば、我が学園の平穏はない。

さあ、松田を利用して、計画を実行に移そうか。

押しても駄目なら、引けばいいのだ。

その夜、屋敷の防犯システムが、人の気配を検知した。

そして次の日、私は『養生部部長』を呼び出した。

今、机を挟んで、私の向かいに座っている。

松田が余計な男気を見せたところで、提供先の正体はおおよそ絞れていた。

ターゲットは、女で、美人だ。

「というわけで、あなたが現・養生部の部長だ――伊福部先輩」

伊福部先輩は、憔悴するわけでも、怒るわけでもなく、ただ、まっすぐに私を見ていた。

「……笑えない冗談ね」伊福部先輩は、その形の良い顔を微動だにさせない。

私は何も言わずに、すっと机の上へ写真をすべらせた。

それを見た瞬間、先輩の瞳が大きく開かれ、表情はこわばり、

「――いやあああああああああああああああっ！」

いとも簡単に、陥落した。
写真には、一眼レフを構えて一心不乱にマナの入浴シーンを撮影する伊福部先輩が撮られている。
いわゆる、盗撮の盗撮である。
写真の伊福部先輩は邪な笑みを浮かべている。
普段は清楚な伊福部先輩が、よもやこのような顔をするとは驚きであった。
「これが３６０度アングル」伊福部先輩の盗撮現行犯画像から、マナの入浴画像までがつながっている。完全なる証拠である。ちなみにマナの入浴画像は、あらかじめ湯気を濃いめにしておいたので、はっきりとは映っていない。大丈夫だ。
さらに一枚。写真を取り出し、机の上をすべらせる。
伊福部先輩の表情が驚愕に染まった。
「ちなみにこれが、昨夜のベストショットだ」
先ほどの描写に、さらによだれが追加されている。人間は、己の欲望に忠実になると、このような顔をするのだな。誠に邪な表情である。
先輩は驚くべき迅速さで写真をつかみ取り、ぐちゃぐちゃに握りしめ、とっさに制服の中にねじ込んだ。
「認めるのか」
伊福部先輩は、はっとして、
「……だ、だったら、どうするつもりなの？　そ、それに、わたしはあくまでも健全な部活動を行なっていただけです」目が、泳いでいる。
「あの写真のどこが健全なのか」今さら取り繕っても遅いと思う。
それに、肩が震えているのを、私は見逃さない。
「あなたがどう思おうと、この写真に写ったあなたは――」もう一枚の写真を――。
「――いやあああっ！　いやあああっ！　いやあああああっ！」
「いや、そこまで悲鳴を上げんでも……」私は、写真をしまった。

「大体、写真が一枚きりな訳がなかろう」
先輩は眼に涙を溜めて俯き、辱めに耐えるように膝の上で拳をぎゅっと握っている。
「とりあえず、ここからは、学園の理事として話をするが……この事実が明るみに出た以上、大学推薦も取り消さねばならんな」
「かまいません」先輩は、じっと耐えている。
「場合によっては、自主退学を勧めねばならんかもしれん」
「……かまいませんっ」
なるほど。あくまでも、覚悟の上という訳か。それとも、
「あなたの『家』が、守ってくれるとでも？」
一瞬、先輩の体がピクリと反応するのを見逃さなかった。
やはり、『家』の話題には反応するか。
しかし、黙っていると言うことは、この私が『家』には勝てないと思っているのだろう。
ここまで強情な伊福部先輩にもかかわらず、
「お子様会長にも――」
「――それだけは止めて！」突然、先輩の顔が上がり、その拍子に涙がこぼれ落ちた。
これだ。話がお子様会長にまで及ぶと、手のひらを返したかのように従順になる。
そもそも、この人は後先考えずに行動する人ではない。普段の彼女ならば、お子様会長にばれることも想定していてもおかしくはない。
にもかかわらず、この動揺。論理を外れた行動。
この人は、やはり……狂っている。
「ならば何故、養生部を幼女部に変えた！　やはり私が貴君の権力を奪ったことが原因か」
伊福部先輩は、涙を流したまま笑った。まるで、私を嘲るかのように。
「あなたは……何もわかってない」

「なら、何故だ」
先輩は、すぅと息を吸い、
「あなたが、わたしと会長ちゃんの花園を奪うからーーーーーーーーっ！」
ありったけの大声が、教室中にこだました。
「……は？」
私はどう反応すべきかわからず、間が開いてしまった。
正直、わけがわからない。だが、彼女にとって渾身の発言だったことは、雰囲気から伝わってくる。先ずは、気になる一言から聞こう。
「……はな、ぞの？」
伊福部先輩は勢いよく机をたたき、身を乗り出してきた。
「そうよ！　あの生徒会は、生徒会は！　わたしと会長ちゃんが二人っきりで過ごせる『花園』だったの！　それをあなたは！　あんな……あんな卑劣な手で奪った！」
卑劣な手とは……一年分の飴を提供する代わりに、生徒会を譲ってもらった件だろうか。あれは冗談で口走ったことが現実となったのであり、そもそも、お子様会長は生徒会を引退し、演劇の道一本に決めるつもりであったはずだ。
モノで釣ったのは確かに買収と言えなくも無いが、卑劣な手とは思えない。
それを伝えると、
「会長ちゃんにお菓子をあげるのは、わたしの楽しみだったのっ！」
と、逆に批難された。完全にヒステリー状態である。わけがわからない。
相変わらずの理解できない心理だが、狂っていることは間違いない。
故に――矯正せねばならない。
「お子様会長に伝えるぞ」
先輩は耳をふさいで絶叫した。

「いやああっ！　何でもするから！　お願い、会長ちゃんだけには言わないで！」
「……言ったな」
「……へ？」伊福部先輩の表情が、固まる。
私は、徐ろに立ち上がる。
「例に漏れず、私にも実は裏の顔があってな、資金調達のために、都心部でいかがわしい風俗店を経営しているのだが……あなたの器量なら、うるさい客も満足するだろう」
話を進めるごとに、先輩の表情が、みるみる強張っていく。
「ちょ、ちょっと……待って……」恐怖で声が掠れていた。
「何でもやると言ったのだろう？　それとも、お子様会長に伝えるか？」
「そ、それはっ！　それだけはっ！」
伊福部先輩が後ずさり、椅子ががたんと転げ落ちる。
「ならば――」私は、ゆっくりと伊福部先輩に迫る。「先ずは、味見と行こうか」
「ひっ――」伊福部先輩は後ろ向きに倒れ、尻餅をつく。膝が笑い、立ち上がれない。
震える体を必死で動かしながら教室の扉へと逃げようとする。が、扉は開かない。
当然、鍵はかけてある。
伊福部先輩は、教室の隅に追い詰められ、小さく丸まり、震えている。
さあ、お楽しみの時間だ。
「大丈夫だ。痛いのは、最初だけだから。次第に、気持ちよくなる」
ゆっくりと、伊福部先輩の体に、手を伸ばす。
「――いやっ！」伊福部先輩の腕が薙ぎ、私の指を引っ掻いた。
「……お子様会長に、言うぞ」
「い……いや……」
伊福部先輩は、自分の体を強く抱え、強張らせ、現実を直視でき

ずに目を閉じた。
私は、先輩の体にゆっくりと近づき、ふっくらとした白い頬に触れた。
先輩の体がびくりと小刻みに跳ねた。
先輩の頬は想像以上の柔らかさとなめらかさであり、私はすべるように顎へ向かって指を這わせ、少しだけ、持ち上げる。
「……嘘だ」
「ふぇっ？」伊福部先輩が眼を開けた。
そろそろ、頃合いだろう。
私は立ち上がり、先輩から一定の距離を取る。怖がらせないために。
「まったく、本気で信じるとは思わなかった。私を何だと思っているのだ。品行方正の伊統会長だぞ」
「ふぇぇっ？」
「泣かしてしまったことは……その、悪いとは思っている。……誰にも言うなよ」
「ふぇぇぇっ？」
「まったく、私以外の人間に秘密を握られたら、一体どうなっていたのか」
「だ、だって！　そんなの……会長ちゃんにばれるくらいなら、わたし――」
「――馬鹿者がっ！」
ふぇぇぇっ！　と情けない声を上げ、伊福部先輩は竦んだ。
「このような秘密など、持たぬ方があなたの為だ」
私の言葉の意味がわかったのか、先輩は、ショックを受けたように目を見開いた。
「既に、伝えてある」
私は、ロックを外し、扉を開けた。
「ふくちゃん……」お子様会長が、姿を現わした。
伊福部先輩は声も出せず、ただ、口をあんぐりと開いて固まって

しまった。

まるでこの世の終わりのように俯き、すすり泣く伊福部先輩と、先輩を見て悲しそうな表情をしているお子様会長。二人を隣同士に座らせ、私は、お子様会長が生徒会を引退しようと決意したときの話を語る。

あれは飴1年分と引き替えに、お子様会長に生徒会解散を提案したときの話だ。

冗談で言った提案があっさり通り、私は拍子抜けしていた。

「こども会長」あの時はまだ、こども会長と呼んでいた。

「こどもじゃないもん！」こども会長のこの反論は、大概聞かなかったことにされる。

「お言葉ですが……そんなに簡単に生徒会を明け渡してしまってもよろしいのですか？　このまま生徒会に残れば、部の予算配布から学校設備改築の優先度、修学旅行の行き先に至るまで、様々な権限を保有することが可能なのですよ？」

私は驚きのあまり、生徒会を牛耳るメリットをつらつらと述べてしまった。

こども会長は首を振った。

「ぼくは、もう生徒会への未練はないよ」こども会長は、この頃『自分をぼくと呼ぶ女性』の役をやっていた。話し方も相応であった。

「元々、役作りのために始めたことだし。いとー、君にあげるよ」

「どうしてですか！　そんな簡単に権力を手放すものではありません！　良いですか、人には権力への意志というものが――」

「ぼく、役者を目指してるから」

「……は？」この子は何を言っているのか。あれか、夢見る若者。若気の至りという奴か。ならば、矯正しなくてはならない。「良いですか、役者というのは、限られた一握りの人間しか大成できず――」

「知ってるよ、そんなこと」お前は何当たり前のことを言ってるんだ、とでも言いたそうな表情で、こども会長はこちらを見た。
「それとこれとは別」
こども会長は、ビシイッと指を突きつけた。指先のぐるぐる指紋が見えた。
「……というと？」
「ふくちゃん、一人で大変そうだから。なんでかわからないけど、いとーが強引に割り込んでくるまでは、生徒会の仕事はふくちゃんが一人でやってたの。ふくちゃん、夜遅くまで残って、大変だったんだよ。ぼく、ずっと横で見てたからわかるんだ」
なにやら、仕事で多忙な母親を気遣う娘のような雰囲気であった。
「そろそろ受験だし、他の人に代わってもらって、自分のために時間を使うべきだと思う。だから、ちょうど良かったの。『あめ』ももらえるし」
こども会長は悪ガキのように、にいっと笑った。
つまり、私は目の前の小学生にしか見えない少女に利用され、挙げ句の果てに、退職金代わりの飴一年分をまんまとせしめられたということになる。ふざけるな。
「今までは頼めそうな人がいなかったんだけど、いとーなら、頼めそうだなって」
こども会長は、純粋なこどものように、はにかんだ。
「ぼく、決めたんだ。ぼくは役者を目指す。役者を目指してるから、日頃から人間観察してるの。だから、人を見る目はあると思うよ。いとーは、仕事ができる子！　がんばれ、いとー！」
こども会長は背伸びして、ぽんぽん私の肩を叩いた。こどもにしか見えない少女に受けるこども扱い。端的に言って、屈辱である。
私は、飴を取り出した。特製の、今ではあまり売っていないぐるぐる巻きの奴だ。
「あめ！」こども会長は、ぴょんと飛びつくが、私が飴を高く上げれば届くまい。

「正直私は、あなたをただの子供だと見くびっていました」
「よく言われる！」こども会長は、ぴょんと跳ねた。これだから言われるのだ。
「あなたを今日から、お子様会長と呼んであげます」
「お子様じゃないもん！　年上、敬え！」
「『様』が付いているので、敬っているのですよ」
こども会長は、私の中でお子様会長に昇格し、私は彼女に対して経緯を表するようになった。
そのことは、今私の目の前で落ち込んでいる二人には関係ないので、お子様会長が、伊福部先輩への気遣いから生徒会を譲った事までを話した。
「……じゃあ、伊統くんがたぶらかしたんじゃないの？　会長ちゃんが生徒会を解散したのは、わたしのせいだって言うの？」
「ふくちゃん……ごめん。ふくちゃんが、そんな風に思っていたなんて、わらわ、知らなんだ。あの頃のふくちゃん元気なかったから、てっきり疲れが溜まってるんだって思って……」
「会長ちゃんと、もっと長い時間、一緒にいたかった……」
「ふくちゃん……」
二人の思いのすれ違い、それがこの問題の――。
――キュイイイイイイン！　つんざくような耳鳴り――まさか……何故だ！　何故、こんな時に……！
『Ｒｅ．眼』が、独りでに起動した。
今度は、何を見せる気だ……やめろ。私はもう――
――急激に、視界が白んだ。

「役者への道は厳しい。考え直してください」
「やだ！」
これは……あの記憶の続きか。
実は、あの話は続く。
「こどもじゃないんですから……」こどもにしか見えないが。

すると、お子様会長は唐突に言った。
「ぼくには、需要があると思うんだ」
「……なんですと？」
「ぼく、こどもっぽく見られるのが、ずっとコンプレックスだった。でも最近、逆手に取れるって気づいたんだ。自分にしかできない役があるんだ」
その後も蕩々と語るお子様会長の案は、意外なほどに現実的なものであった。
「なぜ、そこまで役者になりたいのですか？」
「自分を消したいの。何かを演じていれば、自分を消せるでしょ」
言ってから、お子様会長は「あっ、しまった」という顔をした。
「それは、突っ込んで聞かない方が良い類いの話題でしょうか。なんなら、聞かなかったことにしますが」
「……いとーは、大人だな」
「あなたは子供にしか見えませんね」
「子供じゃないもん！」お子様会長は、ぴょんと跳ねた。
「そうですね。大人は、自分の悩みをなかなか打ち明けられないものです」
「いとー……」お子様会長は珍しいものでも見るように、私の顔を見上げた。
「話したくなったら、いつでもどうぞ」
「……うん」
そして、今日までずっと、お子様会長がその理由を話すことはなかった。
――視界を再び白い光が覆った。

――やーい！　チビー！
「うるさいっ！　チビじゃないもんっ！」
……これは、お子様会長？　今より小さい。服装を見るに、幼稚園の制服だろうか。

「おーい！　知ってるかー！　こいつ、お母さんがいないんだぜー！　こいつが生まれたとき、死んじゃったんだって！」

（――何だろう、この、嫌な気持ちは……。言い返したいのに言い返せない。泣きたくないのに涙が止まらない……全部、ほんとの事だから……あたしは――）

……なんだ？　まさか、お子様会長の精神なのか？

「えっ！　じゃあ、こいつ人殺し？」

――やーい、人殺し！　悪夢のようなフレーズがワルツのように繰り返される。言葉は伝染し、瞬く間に広まってゆく。

子供は無知だ。そして、残酷だ。相手の気持ちが、わからないから。

そして、それは大人になってさえ、大して変わらない。

私は知っている。人の、醜さを。身をもって体験している。

（どうして……どうして、あたしなの？　どうして、あたしは何も言い返せないの？　どうして？　どうして、お母さんは死んじゃったの？　あたしのせいなの？　あたしが生まれたから？　どうして？　どうしてあたしは生まれたの？　あたしなんか、生まれなければ――）

「ひょえええっ！」

お子様会長を馬鹿にしていた子供が――ぶん投げられた。

着物を着た女の子が、悪ガキ共をばったばったと投げ飛ばしてゆく。

「『姫』が来たぞ！　にげろ！」

悪ガキ共が逃げていく。

着物を着た女の子は、お子様会長の手を取り、駆けだした。

二人は、なにやらゾウをかたどったような滑り台の下に潜り込む。

そこはちょうど、小さなドームのようになっていた。隠れるにはうってつけだ。

二人は並んでしゃがみこむ。

すると、着物を着た女の子が、お子様会長をじーっとみつめて、

「ねえ、あたま……なでてもいい」表情一つ変えずに言った。
（へんな子だーー！）
お子様会長が、ぞっとしたのが伝わる。それは、当然だろう。
女の子は、じーーーーーーっとお子様会長を見る。
（……ど、どうしよう。この子、ぜったいにへんだ。……で、でも、ことわったら、またいぢめられるかもしれない……）
「……いいよ」
（あたしは、あたしがキライだ。みんなよりも小っちゃいし、弱いし、なにも言いかえせないし、こんないくじなし、消えてなくなればいいんだ）
白い手が、頭に触れた。さわさわとくすぐったくて、恥ずかしい。
もう、やだ……。
「いたいのいたいのーとんでけ！」
「えっ？」
「元気になった？」
（……よくわからない。でも、いま、なんだか……あったかくなった）
「……うん」ぎこちなく、うなずいた。
「えへへ。一度、やってみたかったのです」女の子は、うっすらと微笑んだ。
――穂波！
「――はいっ！」
女の子は反射的に立ち上がり、天井に頭をごちんとぶつけた。
「……いたい」頭を抱えて、ぷるぷるうずくまる。
「だいじょうぶ？」
お子様会長と、目が合った。すると、女の子ははっとして、
「だいじょうぶ、痛くない」むきになったように、涙目のまま答えた。
そして、慌てたように出て行ってしまった。
（あの子、なんだったのかな？）

その後も、女の子はことあるごとにお子様会長を助けた。
（あたまをなでたり、ぎゅってしてくれたりした。まるで、いつもみんなが話してる、お母さんみたいだ）
女の子は、お子様会長を守った。
（お母さんが側にいてくれたら、さみしくないかもしれない）
それは、甘い、悪魔のささやきだった。
（……あの子なら、あたしのお母さんになってくれるかもしれない）
――ふくちゃんは、強くて、やさしくて、あったかくて、だから……大好き。
視界がまた、白に染まる。

次は、夕焼けの校舎だ。いつなのか、時系列はわからない。
私とお子様会長が、並んで廊下を歩いている。
「……しかし、わからない。あなたはそれほどまでに現実的でありながら、なぜ、行動が子供っぽいのか」
「染みついちゃったの！」
お子様会長は飴をぺろぺろなめながら、恥ずかしそうに顔を背けた。
「は？」
私が疑問を投げかけても、お子様会長は答えてくれなかった。
その時は、お子様会長の言葉の意味がわからなかったが、今ならわかる。
……そうか。これが、理由だったのか。
また、風景が白んだ。

そして私は、現在に戻ってきた。
互いに気まずそうに沈黙している二人を見て、そして言う。
「お子様会長は合わせたのだ。――あなたの意志に」
伊福部先輩の『願望』を満たすように、お子様会長は自分を変えていったのだ。

「会長ちゃんが、わたしに……合わせた？」突然、伊福部先輩の声が響いた。
——カチリ。何か、スイッチが切り替わるような音がした。
その瞬間、堰を切ったように伊福部先輩が話し出した。
「一緒にいたかった……でも……それは、理由の半分で……本当は……わたし……」
伊福部先輩の瞳から、涙がこぼれ落ちた。
「わたし……家に帰るのが、嫌だった……！」
「えっ？」お子様会長が、驚きの声を上げた。
何かが、すれ違っている。微妙なところで、噛み合っていないのだ。
「わたし、会長ちゃんを……利用してたんだ」
『利用』。仲睦まじい二人の関係からは想像もつかない言葉が、伊福部先輩の口から飛び出した。
——きゅいいいいいいっ！　何だ……これは。こんな反応、いままでなかった。上下前後左右がうねるように回転し、私は溺れるようにもがき、落ちてゆく。

——最近になって、関係は刻々と変化していった。
なんだこれは、伊福部先輩の声か……？　声が、ダイレクトに伝わる。
いや、私の精神を塗りつぶしてゆく！
——会長ちゃんが、夢と呼べるものをを見つけたから。
会長ちゃんが、夢を見つけた。それは、とってもすごいこと。
すごいこと……なのに……。
会長ちゃんの存在が、急に遠くなった。
何でかな。決まってるじゃない。
わたしには……望めないから。
だって——。
——穂波！

わたしは走った。必死で走った。なのに、
「お母様！」
頬に痛みが奔った。叩かれたんだ。
「どうして、すぐに来ないのですか」
「ご、ごめんなさい……」
（どうして？　何でこの人は、わたしを打つの？　わたしは……わたしが思う『お母さん』は、こんなことしない。もっとやさしくて――）
「何をぼさっとしているのですか」
体が、竦んでしまう。体は正直だ。いつまで経っても、母への恐れは染みついたまま。
「まったく、お父様が普通な所に通わせなさいと言うから、そうしたものの……なんと汚らわしい」
冷徹な眼が、わたしを縛り付ける。
――わたしは、この人からは逃れられない。

そうか、そうなのか。
伊福部先輩、だからあなたは、養生部の部長になったのか。
「あなたは……寂しかったのか」
伊福部先輩は、はっと驚き、片頬を、涙がつたった。

《寂しかった》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》《お母さん》
（この子も、自分のことがキライなんだ）伊福部先輩の思いが伝わる。
（お母さんが側にいてくれたら、さみしくないかもしれない）お子様会長の思いが伝わる。
（わたしと遊んでるときは、こんなにきらきらしてるのに）
（……あの子なら、あたしのお母さんになってくれるかもしれない）

（わたしが、守ってあげる。ホンモノの『お母さん』みたいに。だから、あなたはいつまでも『純粋』なままでいて。わたしの代わりに！）

私が『Ｒｅ．眼』を通して今見ているものは、今までのものとは明らかに違う。

これは伊福部先輩だけの思念ではない。お子様会長のも混じっているのか。

二つの『思念』が混ざり合って、螺旋のように絡み合う。

互いが互いに絡み合い、速度が、回転が、『思い』が――増幅してゆく。

映像ではない。今、目の前にいる二人が、口を開く。

「表面しか見ていなかったのは、わたしの方なの……？　わたしが、ずっと子供扱いしてたから……だから、会長ちゃんは、ずっと、子供のままで……わたしが悪いの？」

「違うよふくちゃん、あたしも、ふくちゃんをお母さんみたいだって思ってた。あたしが甘えすぎたから、だから、ふくちゃんがますますお母さんみたいになって……それなのに、あたしが演劇に魅せられて、ふくちゃんを置いてきぼりにしたから、だから、あたしが悪いの！」

「違うよ！　わたしが悪いの！」

「違うよ！　あたしが悪いの！」

《一番悪いのはわたし》《一番悪いのはあたし》《悪いのはわたし》《悪いのはあたし》《わたし》《わたし》《あたし》《あたし》《が》《一番》《悪い》

これは……私が伊福部先輩の核心を突いた瞬間、連鎖的に負の思念が渦巻き、爆発的に増殖してゆく。

やはり、『Ｒｅ．眼』は禁忌であったのか。

人の心を読む悪魔の機器など、使うべきではなかったのか。

自傷の思念の連鎖に、思わず顔を背けた。その瞬間、

――なんで、みんな一番を決めたがるの？
幼い頃の私の疑問が、脳裏に瞬いた。
――悲劇の主人公。自己投影と陶酔。謝罪と失望。バースデーケーキ。蝋燭の灯火。
ちがう！　こんなのはまやかしだ！　こんなイメージ、現実ではない！
――なぜ、誰もが悲劇を求めるのか。
そうだ。私が王を目指す理由は――一番を目指す理由は――。
気づいたときには、叫んでいた。
「――違う！　二人は、互いに依存関係にあった！」
ありったけの大声を張り上げた。二人は、私を見て固まった。
（――あたしの『お母さん』になってくれるかもしれない）
「お子様会長は伊福部先輩の中に『母性』を見いだし」
（――あなたは『純粋』なままでいて。わたしの代わりに）
「伊福部先輩は、お子様会長の中に『純粋性』を見いだした」
互いに、誰かの『代わり』を求めた。
「互いに、互いが必要だった。あなた達は、互いがいなければ生きていけなかった！　そうだろう！」
私は、物語った。
『Ｒｅ．眼』が示す二人の記憶を流れを問題を。
俯瞰し整理し物語のように語る。
弱く傷ついた子供が二人、互いに、互いを支え合った。
そうやって、二人は人生を歩んできた。
そして、転機は訪れた。
一人が人生の目的を得たことで、二人の関係は変わった。
伊福部先輩は、お子様会長に対して疎外感を感じたがために、今まで供給されていただけの十分な『純粋性』を確保できなくなった。
だから、代わりを求めた。
『純粋なもの』を提供してくれる仕組みを。
誰かの『代わり』を埋めるのは、『代わりの代わり』しか無かっ

た。

それが、養生部であった。それだけのこと。

「だから、誰が一番悪いというわけではない。なぜなら、誰もが、悪だからだ」

二人は砂時計の中、砂上の花園の中で、互いに鏡を見ながらワルツを踊っていたに過ぎないのだ。

砂は時と共にこぼれ落ち、ステップが踏めなくなれば、踊りは終わる。

これが『Ｒｅ．眼』が伝え、私が整理した事象。

「互いに『利用』していた？　だからどうした！　人間である以上は意識無意識関わらず、裏での駆け引きなど日常茶飯事だ。あなた方が互いに内心どう思っていようと、そんなことはどうでもいい。行動したことだけが現実となる、それが、この社会のルールだ」

私は叫ぶように語った。そうでもしなければ、自分を保っていられなかった。

「いいか、客観的な事実だけを教えてやる」

私は深く息を吸い、呼吸を整える。

「あなた方は互いに仲の良い『友人』であり、ひょんな行き違いから、関係が変わった。それだけだ」

それによって生じた一番のゆがみは、

「悪は、私が矯正する」

私は、伊福部先輩を見た。

「伊福部先輩、人は、変わりゆくものだとは思わないか」

伊福部先輩は、私の視線を避けるように俯く。

「……そっか。いつまでも子供だったのは、わたしの方だったんだ。知らないうちに、あの人と同じになってたんだ……最低ね」

伊福部先輩は、咎められた子供のように、その身を小さくした。

「たとえ親が子供をいつまでも甘やかそうとしても、子供が大人になりたいと望むのなら、勝手に大人になっていく。伊統くん、あなたが言いたいのは、そういうことでしょう？」自嘲気味に、伊福部

先輩は言った。
「全然違う」自分の言葉がねじ曲がって伝わっていることに、私は辟易する。しかし、言葉とはそういうものだ。以前にも何度かこのような事があった気がするし、仕方が無い。私はもう一度、念を押す。
「人は、変わるという事だ。ただ、それだけだ。伊福部先輩、あなたも例外ではない」
これ以上は無粋だ。これで気づかなければ、伊福部先輩もそこまでだということ。
しかし、先輩は目を潤ませて戸惑うばかりだ。
「――ふくちゃん、あたしの名前を呼んで」
「……会長ちゃん？」
「あたしはもう、『会長ちゃん』じゃないよ」
伊福部先輩は、はっとした。
「もう一度、やり直そ」お子様会長は、手を差し出す。「お友達として」
やはり、お子様会長は大人であった。
私が暗に伝えたかったことを、行動に表わしたのだから。
「……っ！　……いっちゃん」
「……ふくちゃん」
「いっちゃん……いっちゃん！」
伊福部先輩は泣いた。泣きながら、何度も何度も名前を呼んだ。
子供のように泣きじゃくる伊福部先輩を、お子様会長が母親のようにやさしく抱きしめた。
「だいじょうぶ。だいじょうぶだよ。いたいのいたいのとんでけー」
これで、全ては丸く収まったかに見えた。が、
《ごめんなさい》《ごめんなさい》《ごめんなさい》《ごめんなさい》《ごめんなさい》
《無理なの》《あなたと同じようには、生きられないの》
《あなたのように純粋には、生きられないの》

ポップアップから伝わってくるのは『諦め』そして、深い『絶望』であった。

終わったように見せかけて、根本的な所が解決していないか。

「伊福部先輩」

伊福部先輩は、泣きはらした目で、私を見上げた。

「あなたには、しばらく私の管理下に入ってもらう」

「かんり……？」

「あなたはまだ、幻想に捕らわれている。『純粋なもの』への憧れだ。その根源を――矯正せねばならない」

「ふぇ？」

伊福部先輩は、お子様会長に対して疎外感を感じ誰がために、今まで供給されていただけの十分な『純粋性』を確保できなくなった。

だから、代わりを求めた。

『純粋なもの』を提供してくれる仕組みを。

その結果、養生部の部長として君臨することとなった。

その根源は――。

「それでは、第二ラウンドと行くか」

「第二……？」

そう、問題の根幹を、矯正せねばならない。

「先輩のお母様との、懇談会を開催する」

「ふぇぇぇぇっ？」先輩は、今までで一番情けない声を上げた。

相手は、由緒正しき歴史を持つ伊福部家二十一代目当主。

伊福部先輩の十八年間を管理してきた人だ。

歴史の重みからくる重圧。

普通の感性では、一筋縄ではいかないと考えるだろう。

しかし私は、こう考える。

――だからどうした。私にとっては、淡々と行なう戦後処理に過ぎない。

肩書きに左右されるから、重苦しく感じるのだ。

故に、あえて『伊福部母』と略称で呼ぶ。

伊福部邸にて、伊福部母との保護者面談を開始した。

最初は論理で責め、屈服させた。論理では勝てないと悟るや、伊福部母は一気に感情論に走りだした。これも計算通りだ。それを気に、大声で怒鳴りつける。

「あなたが『家』の力をどれほど過信しているかは知らないが、この学園にまであなたの『家』の力が通用すると思ったら大間違いだ！　近年では外部からの移住者も増加しており、パワーバランスが崩れるのも時間の問題！　『家』に縛られた制度など、もう古い！　あなたがいくら意固地になってあらがおうとしても無駄だ！　盛者必衰の言葉が示すとおり、歴史の流れには逆らえぬ！　それでもあなたが古き『家』にこだわるというのなら、そのような古き権威など！　この私が！　駆逐してくれるわ！」

つまりは伊福部先輩に語ったことと、ほぼ同じである。

その後、さらに辛辣な二言三言を飛ばしたが、大意は同じである。

すると伊福部母は怯え、黙った。そこですかさず冷静になり、最後は情に訴えた。この世代は、実に情に弱い。まあ、この情報も友人の受け売りなのだが。

最後には、伊福部先輩のお母様は、涙を流してご納得してくださった。

「というわけで、貴女のご両親の教育は成った。後は我が監視の下、親子で話し合って貰おう」

手厚く遇したいという伊福部母の要望をやんわりと断わり、私は門前で失礼する。

展開の速さについていけなかったのか、伊福部先輩はぽかんとしている。

長年の悩みが一瞬にして解決したのだ。当然の反応だろう。

「あなたの今後の交渉次第によっては、『家』に縛られぬ生き方もできるだろう」

そう言うと、伊福部先輩の涙腺が緩んだ。なんだ、気づいていなかったのか。
「あの、伊統くん……その……」
先輩は、ぎこちなく頭を下げ、
「……ありがとう」
「何か、お礼を言われることをしましたか？」
くの字に折れたまま、先輩の体がぷるぷるしだした。
先輩は頭を上げた。その顔は、怒っていた。
「人がせっかく頭を下げてるんだから、茶化さないでくださいっ」
「なに、女王となる可能性のある人の芽を、事前に潰しただけです」
「ふぇ？」伊福部先輩は、きょとんとした。
事実である。一人であれだけの生徒会の仕事をこなした情報処理スキル。先輩のもつポテンシャルの高さがうかがえる。強敵は少ない方が良いのだ。早めに芽を刈り取り、味方につけるに限る。
「……それに」
言うべきか、言わざるべきか、私は一瞬躊躇する。躊躇していると、
伊福部先輩の頬が、ほんのりとピンクに染まった。なにを勘違いしているのか。
「あなたは、私の名前を唯一、正確に呼んでくれる人だ。かいちょーでも、かいちょーさんでも、いとーでもイトーでもない。『伊統』と、正確に発音する。そんな人が変人だなんて、悲しいではないですか」
意味がわからないのか、伊福部先輩は、ぽけーとしている。
「つまり私は、私の利益のために行動したのです。だから、あなたは負い目も、借りも、恩も、何も感じなくて良い」
すると、先輩は何故か不機嫌になった。
「屁理屈ではかないませんねっ」
「当然です。未来の王ですから」
私が自信を持って言うと、伊福部先輩は怒った顔を一転、

「冗談は下手です」くすりと笑った。
「よく言われます」とくに、最近は。
ようやく先輩が笑顔を取り戻したところで、私は切り出す。
「しかしまさか、貴女がヨウ・ジョーだったとは……」
「……ふぇ？」伊福部先輩は、またも、きょとんとした。
「いや、だから、貴女は養生部の影の部長で、ヨウ・ジョー――」
「――わ、わたしっ、あんなへんてこな格好してませんっ！」
「へ？」今度は、私がきょとんとする番だった。

聞けば、伊福部先輩とヨウ・ジョーには、何の関係性もないという。
「じゃあ、どうやってあなたは、養生部を指揮していたのだ！」
「わたしは、部長と言っても単なる調整役で、基本はみなさん、それぞれが独立して活動してます」
ぱっと集まって、ぱっと消える。不定期な会合でつながる、紳士淑女の集合体。
その規模は部長の伊福部先輩も把握し切れておらず、必要なときに、必要なだけ集まる。分散型ネットワーク処理機構のような集まり。
それが現・養生部の正体だと、先輩は語った。
何が紳士淑女か、という突っ込みは置いといて、ならば、その仕組みを作ったのが伊福部先輩なのかと聞けば、
「知りません。わたしが部長になったときには、もうシステムが確立していました。『概念ウィルス』ですか？　……ごめんなさい。よくわかりません」
最悪だ。最悪の謎だけが残った。養生部を誰が変えた？　そして――。
――ヨウ・ジョーの正体は……誰だ？
私が呆けていると、とたとたとかわいらしい足音が耳に入る。
見ると、お子様会長が不安げな表情でこちらを見上げていた。

「ふくちゃん……？」
「……いっちゃん」
伊福部先輩が微笑むと、お子様会長も笑顔に変わった。
ところで、
「何故エルレインがここに……お子様会長のお守りか？」
こども会長の隣には、エルレインがいた。
「お子様じゃないもん！　会長じゃないもん！」
伊福部先輩とお手々つないで、なにが大人か。
「会長、それはこっちのセリフだ！　……何やってんの？」
エルレインは訝かしげに私を見る。
「保護者面談」
「何それ？」
「お前が部活をしっかりやっているか、話を聞いていたのだ」
「うっわ、何それ、止めてよ！　そんな恥ずかしいこと！」
恥ずかしさのあまり頬を抑えるエルレインを尻目に、
「エルレインを……よろしく頼みます」
「やめてえええっ！」エルレインは、顔を真っ赤にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2797y/

完全管理社会を目指す生徒会長と泥酔魔法少女と隙間ターミネーターの夕焼け

2011年12月24日09時46分発行